

大阪大学大学院文学研究科

年報 2020

教育・研究 (2018-2019 年度)

大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

表紙解説

中井竹山筆「懷徳堂定書」

大阪大学懷徳堂文庫蔵

三〇・七×六六・四センチ

享保九年（一七二四）、大坂の有力町人によって創設された学問所懷徳堂は、江戸時代の後半、約百四十年間にわたって、日本近世の学術史と商道德の形成に大きな影響を与えた。大阪大学は、この懷徳堂を精神的源流と位置づけ、現在、文学研究科が（財）懷徳堂記念会と協力して、資料調査や公開講座の開催など、各種の社会教育活動を推進している。

本資料は、その懷徳堂の貴重資料の一つである。懷徳堂内に寄宿していた書生の生活態度について、第四代学主の中井竹山が安永七年（一七七八）に定めた規定である。毎月、五と十の付く休日に、寄宿生を講堂に集め、読み聴かせるのがきまりであったという。「箕踞偃臥」「無益の雑談」「昼寝宵寝」などを禁ずる一方、「手跡・算術・詩作・訳文」「和訳の軍書」「近代の記録物」など広範な学芸領域に関心を持つよう勸奨している。

同じく中井竹山が宝暦八年（一七五八）に掲げた「書生の交わりは貴賤・貧富を論ぜず同輩たるべき事」という開明的な懷徳堂の基本精神を受け継ぎ、総じて、学生相互の自律・自助を勧める内容となっている。

〔釈文〕

定

- 一 書生の面々互に申合せ行儀正敷相守り仮初にも箕踞偃臥等致す間布き事
 - 一 学談雅談の外、無益の雑談相い慎み、場所柄不相応の俗談、堅く停止と為すべき事
 - 一 当病持病等の子細も之が分無く昼寝宵寝は堅く無用と為すべき事
 - 一 本業出精の暇には、手跡・算術・詩作・訳文等、銘々の分相応に心懸け候て、間断之れ有る間布き事
 - 一 休日其の外閑暇の節に、和訳の軍書并に近代の記録物等心懸け読み申すべき事
 - 一 碁象棋謡等は世の交り并に学業退屈の氣を転じ候為に兼ねて差免じ之有り候へども休日の外は昼迄の内右様の雑芸に懸り候儀、無用と為すべき事
 - 一 銘々行届き申さざる事は、同輩の内より互に心を添へ切磋有るべきの事
 - 一 人の切磋を受け、却って立腹など致し候はば、傍人より早々その段、申し出るべき事
- 以上
- 安永七年戊ノ六月

年報2020

目次

大阪大学大学院文学研究科『年報2020』の刊行に寄せて	三谷研爾	1
大阪大学大学院文学研究科『年報2020』発刊の趣旨	評価・広報室	2

第1部 大阪大学大学院文学研究科および文学部における教育・研究活動の概要

1-1	学部・大学院の教育活動	4
1-2	教育・研究の支援体制	8
	研究推進室	8
	評価・広報室	11
	教育支援室	16
	国際連携室	20
	国際交流センター	25
1-3	国際交流活動	26
1-4	外部資金の導入	30
1-5	エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）	32
1-6	記憶の劇場—大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座 「記憶の劇場Ⅲ」	33
1-7	グローバル・ジャパン・スタディーズ	36
1-8	国際的連携型人文学研究教育クラスター	39
	グローバル日本研究クラスター	39
	グローバルヒストリー研究	41
	比較デザイン学クラスター	43
	アーツ&リサーチ	44
	役割語・キャラクター言語から見た翻訳研究	46
1-9	古墳の価値を未来に — 野中古墳出土品の3D計測プロジェクト —	49
1-10	「徴の上を鳥が飛ぶ」文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム	50
1-11	国際共同研究力向上推進プログラム	54
1-12	教育ゆめ基金調査研究助成制度	56
1-13	懐徳堂研究センターの活動	57
1-14	埋蔵文化財調査室の活動	59
1-15	ハラスメント問題委員会の活動	62

第2部 各専門分野・コースにおける教育・研究活動の概要

2-1	哲学哲学史	67
2-2	現代思想文化学	80

2-3	臨床哲学	91
2-4	中国哲学	102
2-5	インド学・仏教学	113
2-6	日本学	122
2-7	日本史学	138
2-8	東洋史学	161
2-9	西洋史学	178
2-10	考古学	197
2-11	人文地理学	212
2-12	日本文学	222
2-13	比較文学	240
2-14	中国文学	250
2-15	国語学	256
2-16	英米文学	271
2-17	ドイツ文学	284
2-18	フランス文学	293
2-19	英語学	306
2-20	日本語学	317
2-21	美学・文芸学	331
2-22	音楽学・演劇学	344
2-23	美術史学	371
2-24	共生文明論	391
2-25	アート・メディア論	403
2-26	文学環境論	416
2-27	言語生態論	427
2-28	留学生専門教育	436
2-29	国際交流センター	438
	編集後記	446

大阪大学大学院文学研究科 『年報2020』の刊行に寄せて

2020年春、世界は新型コロナウイルス感染症の大波に呑み込まれました。それから1年あまりたった現在、各国の懸命の防疫対策にもかかわらず、いまだパンデミックの収束が見とおせる段階にはありません。状況は、ワクチンや治療薬の開発によって徐々に改善するものと期待されますが、すでに多く語られているように、社会のあり方がまったく元通りに戻ることはないと思われます。この間、健康と経済をいかに両立させるかをはじめ、さまざまな問題が論じられてきました。そのなかで浮上してきたのは、ひとが集まり語らうことにはそもそもどのような意味があるか、自由に移動できるとはどういうことか、人間の社会・文化にとって真に不可欠のものは何かといった根本的な問いかけです。これらはすぐれて人文学的な問いであり、それに応えることこそ人文学の社会的使命にほかなりません。大阪大学大学院文学研究科は、その使命を十分に果たしてきたか、また今後さらによく果たしうるか——わたしたちは過去2年間の活動をふりかえって達成できたところを確かめ、同時に不十分な点を洗い出し、その認識にもとづいて将来を展望すべくこの『年報』を刊行するしだいです。

研究科としてのこうした自己確認の作業は1994年に始まりました。2002年度以降は2年おきに『年報』を発刊し、さらにはインターネット上でも情報を公開することで、より多くの方々にご覧いただけるよう努めてきています。わたしたちが日々に取り組んでいる人文学という学問領域は、ともすれば実世界との接点がすくない、古めかしい文献学のように思われるかもしれません。しかしこの『年報』のページを繰っていただければ、わたしたちの研究と教育が、日本社会が抱えるさまざまな問題にたいする直接ないし間接の応答であること、また世界各地の人文学の営みとしっかり手を携えていることをご理解いただけるでしょう。

そうした取り組みは、なにより各専門分野・コースでの不断の活動に立脚しています。それぞれの研究室を単位にした研究・教育こそ人文学の骨格そのものであり、これをたく育てていくことなくして研究科は存立しません。そのうえに立ってわたしたちはこの2年間、個々の分野を超えて社会課題に対峙し、あるいは国際的な連携を図ることにも多大のエネルギーを注いできました。それが、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラムや文化芸術ファシリテーター育成講座「記憶の劇場Ⅲ」やアート・プラクシス人材育成プログラム「微の上を鳥が飛ぶ」であり、国際的社会連携型人文学研究教育クラスターの各種プロジェクトです。クラウドファンディングによって野中古墳出土品の3D計測をおこなったプロジェクトも、そうした取り組みの一環と自負しています。

いったい人文学もまた、いわば現実社会という大海に浮かぶ一艘の船です。つまり、よく水に浮かんでこそより遠くを目指すことができるというものです。ただし、風向きや潮の流れに任せてばかりではいけませんし、まして波間に没することがあってはなりません。そのためには、くりかえし海図を広げて現在地を確かめ、向かうべき方向をしっかりと見定める作業が不可欠です。コロナ禍の荒天が鎮まらない現在、その作業の材料としてこの『年報』をご覧いただき、積極的に活用いただければさいわいです。

2021年3月

文学研究科長・文学部長 三谷 研爾

大阪大学大学院文学研究科 『年報2020』 発刊の趣旨

大阪大学大学院文学研究科 評価・広報室

本書『年報2020』は、2018年度・2019年度の2年間における大阪大学大学院文学研究科および文学部の教育・研究活動について、客観的なデータを集積し、その点検や評価、また今後の改革に当たっての基礎資料とすべくまとめられたものである。『年報』としては10冊目の節目となり、継続的なデータ蓄積の期間としては22～23年目に当たる。

本書の構成は、これまで通り二部構成である。第1部「大阪大学大学院文学研究科および文学部における教育・研究活動の概要」は、文学研究科・文学部の教育および研究活動の全般に関わる事項を報告する。

第2部「専門分野・コースにおける教育・研究活動の概要」は、各専門分野・コースの教育・研究活動について、その特色、所定の項目ごとのデータ、および各専門分野・コースによる自己評価を提示する。

こうした資料の性質上、データを比較する上での連続性が重要であるので、上記の構成はもとより、データ収集の範囲や方法等に関しても、基本的には前号以前のもの踏襲している。

なお、この年報は、『年報2016』以来、基本的には冊子体による発行を取りやめ、電子ファイルでの公開のみとしている。『年報』のようなデータ集では、閲覧や過去のデータとの比較対照などの面で電子データ化の利点も大きく、ここ数年の活用に当たっても冊子体よりも利用の便が良いという印象を得ている。この『年報』の内容は、冊子体で発行していたものも含めて全号についてpdfファイル化したものを文学研究科のウェブサイト(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/>)を通して公開しているので、過去データなどもあわせてご参照願いたい。

2016年度より第3期中期目標期間中であるが、昨年度より本年度にかけて目標の達成状況を評価するために現況調査表の基礎データを作成しており、本年報の内容も要所で活用した。今回の『年報』においては従前と編集方針・内容構成についても大きな変更は加えていないが、現況調査表をはじめとする種々の調査がなされていく中で、時代の要請によって新たに盛り込むべき内容も生じつつある。本書の内容も、データ項目の継続とともに、部分的に改定・追加をしていくことが今後の課題であろう。

文学研究科では、多くの課題を乗り越えるために、さまざまな改革に向けて動き出しはじめているところである。本書の中ではそれらが十分に示されていないものの、本書が本研究科の教育・研究活動等に関する現状の一端を知っていたく機会になるものと願っている。本研究科の今後の糧とするためにも、本書を通して忌憚のないご意見を頂戴できれば、この上ない喜びである。

文学研究科 評価・広報室長
高橋 照彦

第 1 部

大阪大学大学院文学研究科および文学部 における教育・研究活動の概要

* コメントは、原則として2018年度および2019年度のデータに関するものであるが、『年報2018』に掲載されたそれ以前のデータも、参考のため提示しておいた。なお数値は原則として各年度5月1日のものである。

教育活動の基礎的データ

1. 大学院の教育活動

1-1. 大学院博士前期・修士課程入学者

博士前期課程（定員75名）・修士課程（定員19名）の入学者数は、2013年度には両課程ともに定員を満したものの、2014年度には再び定員割れとなった。2015年度は、前期課程は定員を満したが、修士課程は2014年度に続き、大きく定員を割った。2016年度・2017年度は、再び前期課程、修士課程ともに定員割れとなった。2018年の博士前期課程の入学者数は大きく落ち込んだが、2019年度には持ち直している。近年での入試ではあきらかに社会人および外国人の志願者に依存する傾向が強まっている。内部進学をうながすとともに、意欲のある留学生および社会人にとっても魅力のあるサポート体制の充実をはかる。

表 1-1-1 大学院(博士前期・修士課程)入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2012	50・13	5・2	11・3	66・18
2013	59・14	6・3	13・3	78・20
2014	47・8	3・3	12・1	62・12
2015	58・9	5・1	14・1	77・11
2016	43・9	2・1	23・1	68・11
2017	51・8	2・1	11・6	64・15
2018	37・12	1・1	19・2	57・15
2019	60・6	7・2	21・3	88・11

1-2. 大学院博士前期・修士課程学生

学生総数は、文化動態論専攻設置2年目の2009年度以降、200名を切ることはなかったが、2015年度は198名となった。2016年度は200名以上へと戻したものの、2017年度は再び200名を切った。休学者数と留年者数の合計の学生総数に対する割合は、2016年度は博士前期課程22%、修士課程28%、2017年度は同29%、44%、2018年度は博士前期課程21%、修士課程29%、2019年度は同20%、35%となっている。

表 1-1-2 大学院(博士前期・修士課程)の学生数、休学者数、留年者数、修了者数

年度	学生数	休学者数	留年者数	修了者数
2012	161・55	13・6	27・14	60・22
2013	173・50	21・8	29・12	68・19
2014	164・42	23・7	28・13	72・17
2015	164・34	13・8	26・10	61・13
2016	170・32	18・4	20・5	71・10
2017	158・36	20・6	26・10	70・12

2018	142・37	9・4	22・7	64・15
2019	164・31	12・6	21・5	56・10

1-3. 大学院博士後期課程入学者

2012年度・2013年度の入学者はそれぞれ35名・32名で、定員(41名)を大きく割り込んだが、2014年度・2015年度はほぼ定員と同数となった。2016年度・2017年度は再び定員を割り込んだ。社会人の入学状況については、ここ10年ほどは3名前後で安定している。外国人入学者数は、2014年度・2015年度は2012年度・2013年度に比べ、ほぼ倍増したが、2016年度・2017年度は再び以前の水準に戻つつある。2018年度は大きく数字を落としたが2019年度には持ち直している。大学教員ポストが減少している昨今、博士後期課程を取り巻く状況は厳しく、絶えず定員割れの危険性がつきまとっている。本研究科だけの努力では如何ともしがたい部分があるが、これまで以上の努力が必要である。

表 1-1-3 大学院(後期課程)の入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2012	27	4	4	35
2013	24	3	5	32
2014	31	1	10	42
2015	28	4	9	41
2016	29	1	5	35
2017	24	4	8	36
2018	17	6	11	34
2019	24	3	9	36

1-4. 大学院博士後期課程学生

2017年度の学生数は186名で、減少傾向が認められる。休学者数、退学者数についてはやや減少傾向が認められるものの、休学者数は、学生数に対して2016年度28%、2017年度26%と依然高めの水準で推移している。退学者数は、学生数に対して2016年度13%、2017年度12%となっている。2018年度から2019年度にかけても、学生数の減少にともない、学位論文の提出数もまた低調である。人文科学という研究分野の性格を考慮しながら、学生自身の研究能力の向上や教員の指導、研究環境の整備などの要因を探るとともに、課程修了後の身分・行き先の確保という深刻な問題をどのようにするのか、継続的に検討する必要がある。

表 1-1-4 大学院(後期課程)の学生数、休学者数、学位論文提出者数、退学者数

年度	学生数	休学者数	学位論文提出者数*	退学者数
2012	215	69	22(9)	31
2013	195	54	24(18)	26
2014	202	66	27(14)	29
2015	198	57	29(17)	25
2016	198	56	29(10)	25
2017	186	49	34(14)	23
2018	176	33	23(8)	25
2019	178	42	24(6)	22

(注)退学者には単位修得退学者をふくむ。*()内は単位修得退学者の論文提出数で内数。

1-5. 大学院研究生

研究生数は2007年度まで20名以上であったが、2008年度以降、10名台、年によっては10名を割るまでになった。かつては研究生のうちの大半が日本人であったが（2004年度では日本人20名、留学生2名、2005年度では同じく21名、2名）、日本人研究生の減少とともに留学生の比率が急上昇し、年によっては日本人研究生を上回るようになり、この傾向は2016年度・2017年度も続いている。2019年度には研究生の数が減少しているが、留学生の数が減ったことに起因する。研究生は院生予備軍としての性格が強いが、今後、文学研究科として研究生をどのように教育していくべきか検討する必要がある。

表 1-1-5 大学院研究生数

年度	日本人	留学生	計
2012	5	8	13
2013	4	4	8
2014	8	5	13
2015	3	8	11
2016	3	7	10
2017	3	7	10
2018	6	6	12
2019	2	2	4

2. 学部の教育活動

2-1. 学部入学者

一般入試による入学者の数は、2013年度までは例年定員(前期日程125名、後期日程40名、計165名)を5～10名程度上回る数で推移していたが、2014年度・2015年度は170名を切り、2016年度も同様であった。2017年度は世界適塾AO入試が導入されるとともに後期日程が廃止され、一般入試の定員が135名となった。一般入試の入学者数151名は定員を16名上回っているが、これはAO入試の入学者数が定員30名に対して21名にとどまり、その不足分を補うためである。AO入試の定員を充足することが喫緊の課題であることは明らかである。外国人入学者は、2004・2005の両年度は0名であったが、2006年度以降は毎年入学者があり、2016年度の9名にみられるように、近年はその数を増しつつある。なお、一般入試の志願者数は2015年度までは減少傾向にあったが、2016年度以降は増加傾向に転じている。2017年度のAO入試の志願者数は定員を1名上回る31名であった。入試倍率(定員/志願者)でみると2018年度は3.2倍、2019年度は2.8倍、2020年度は2.9倍と、近年は安定して3倍前後となっている。近年また私費留学生志願者が増えており、2016年以降、私費留学期の枠での入学者は10名程度で安定している。

表 1-2-1 学部入学者数

年度	一般	AO	外国人	計
2012	171		2	173
2013	172		4	176
2014	165		7	172
2015	169		4	173
2016	165		9	174
2017	151	21	8	180
2018	134	30	11	175
2019	138	30	10	178

2-2. 学部学生

学生数・卒業生数は2014年度・2015年度にやや減少したが、2016年度・2017年度はそれ以前の水準に戻した。留年者数は減少しつつあるものの、休学者数については依然30名台が続いている。2019年に卒業生数が減っているのは休学者の多さに起因するとみられる。定員管理にもかかわる問題なので、学部生の学習生活面でのサポート体制の強化が必要となっている。

表 1-2-2 学部の学生数、休学者数、留年者数、卒業生数

年度	学生数	休学者数	留年者数	卒業生数
2012	780	25	82	170
2013	776	34	79	193
2014	756	36	63	166
2015	768	36	70	165
2016	776	33	69	181
2017	778	30	61	171
2018	772	24	62	171
2019	788	33	74	159

2-3. 学部研究生

研究生の総数は、20名台で推移していたものの、2016年度には20名を割り、再び減少傾向が見られる。留学生は、2012年度を除き、その水準をほぼ維持している。日本人と留学生の比率については2012年度以降、留学生数は日本人の2.5倍以上、2016年度・2017年度については10倍弱となっており、留学生の割合が非常に高い。学部研究生の数は安定しているが、2016年以降、2019年にいたるまで日本人研究生の数は少なく、外国人がほとんどである。これは、研究生であることが、留学生の大学院入試の条件となっているためである。今後は、外国人研究生が、日本語講習などあらゆる機会を利用して、大学院入試までに実力を高めて合格できるよう、細やかな情報提供をおこなうことが望ましい。

表 1-2-3 学部研究生数

年度	日本人	留学生	計
2012	6	15	21
2013	5	18	23
2014	5	18	23
2015	5	21	26
2016	2	17	19
2017	2	18	20
2018	1	16	17
2019	3	16	19

(高安 啓介、データ提供：教務係)

研究推進室

組織・体制

研究推進室は、文学研究科の学生・教員の研究活動を推進するために、さまざまな形で研究環境の整備や研究遂行の支援を行う組織である。室員は文学研究科の教職員からなり、室長、副室長は、総務委員会の議を経て、研究科長が委嘱する。室には部門を置き、室長が委嘱した部門チーフを中心に、それぞれ管掌する業務を実務的に進めた。

2014年度までは科研・共同研究部門、図書管理部門、紀要・論叢部門、懷徳堂部門の4部門が室業務を分掌したが、2015年度、若手研究者支援を強化すべく、あらたに若手支援部門を単独で立ち上げるとともに、図書管理部門、紀要・論叢部門の業務を統合継承する形で図書部門を設けた。この結果、研究推進室の業務は、科研・共同研究部門、若手支援部門、図書部門、懷徳堂部門の4部門が担う体制となった。2018年度、2019年度の室業務も、この体制を受け継ぐ形で行われた。

室の活動は、構成員全員が参加する室会議（原則として教授会開催日の午後）において、必要事項を協議するとともに、各部門が担当する業務について状況を報告し、室員間の情報共有をはかりながら行った。室会議前には正副室長、教務職員、事務補佐員からなる実務会議を開催して、室会議の議題整理と室業務執行状況の確認を行った。このほか、大阪大学教員出版支援制度の推薦論文選考など特命的な事項については、その都度委員会やワーキンググループを設置して対応した。

活動状況

近年、若手研究者支援、競争的資金獲得および研究公正化等にかかわる業務が急増しており、本室としてもさまざまな新規案件への迅速な対応を迫られている。2018～2019年度に各部門が担当した主要な業務及び活動状況は以下の通りである。

<2018・2019年度>

1. 科研・共同研究部門

1) 「公開研究会等への補助」の募集・選定、運営に関すること

・文学研究科教員が中心となって開催する各種の公開研究会等の経費補助として、2018年度は3件、2019年度は2件を選定し、補助を行った。

2) 科研費その他の研究助成金等に関する公募情報の収集・提供および応募の支援に関すること

・情報収集を定期的に行い、教員メーリングリスト等を通じて提供するとともに、各種研究助成プログラムが一覧できるリストを作成して本室のHPに掲載した。

・科研費の応募に関するセミナーを開催するとともに、申請書類のチェックを実施し、採択率の向上を図った。採択状況は次表の通り。

年度	新規課題			新規課題＋継続課題	
	申請件数	採択件数	採択率(%)	交付件数	交付総額(円)
2018	56	17	30	79	162,146,120
2019	57	34	60	82	172,378,155

3) 教員・研究員の公募情報の収集・提供に関すること

・情報収集を定期的に行い、教員メーリングリスト等を通じて提供した。

4) その他

・第二期「文学研究科国際的・社会連携型人文学研究教育クラスター（人文学クラスター）」の最終年度(2018年度)に、各クラスターより提出のあった最終年度研究経過報告書にもとづき、「人文学クラスター」全体の活動状況を概括し今後のあり方について考察を加えた報告書を作成した。

- ・国際性の醸成と研究力の強化に特化した形で「人文学クラスター」を継承する「国際共同研究力向上推進プログラム」の募集要項を作成した。女性研究者及び若手研究者が国際的に研究活動できる場を確保するべく、これらの研究者の参画を申請の要件とした。2019年度の採択は1件（2019年度～2020年度）。
- ・研究科内に設置した「研究科共同研究室」（「人文学クラスター室」を改称）の利用規約を策定し、管理運営を行った。

2. 若手支援部門

- 1) 独立行政法人日本学術振興会特別研究員の申請書作成等の補助に関すること
 - ・日本学術振興会特別研究員の応募にあたって、「若手研究者向けセミナー」を2回開催するとともに、申請書類のチェック、面接候補者への模擬面接を実施した。2019年度採用分は申請者37名、採用者6名、採用率は16.2%、2020年度採用分は申請者50名、採用者16名、採用率は32%であった。なお、2020年度採用分の採用率は、過去8年で最高の水準となった。
- 2) 若手研究者等の招へい研究員資格審査に関すること
 - ・若手研究者の科研費応募の機会を確保するため、「若手研究者等への招へい研究員資格付与の審査」を行った。
- 3) 大学院学生の調査研究、成果発表等の支援に関すること
 - ・若手研究者による研究成果の世界的な発信を奨励・支援するために、2018年度は選定した9件、2019年度は5件に対して、「外国語論文発表補助」（外国語による論文や口頭発表原稿のネイティブチェック費用の補助）を行った。
 - ・大学院学生を対象として研究科で創設した「教育ゆめ基金調査研究補助」の助成者の選考を行い、2018年度は国内1件、海外5件、2019年度は国内4件、海外9件の補助を実施した。
- 4) その他
 - ・日本学術振興会賞、日本学術振興会育志賞、石橋湛山新人賞の候補者の選考・推薦を行った。

3. 図書部門

- 1) 文学研究科共同施設「学生自習室」の管理・運営および同室設置図書・機器の充実に関すること
 - ・学生自習室において発生したカビ・害虫被害に対処し、開室を一時中止するとともに、図書の燻蒸とクリーニングを行った。その後、書庫と自習室の間に扉を設置し、除湿器3台を24時間稼働させ、適切な運営につとめた。
- 2) 文学研究科の図書利用についての附属図書館との連絡・調整に関すること
 - ・附属図書館から依頼のあった各種調書の各専門分野・コース等への連絡・調整を行うとともに、研究科内図書業務を遂行し、雑誌・図書の利用を支援した。
- 3) 文学研究科「貴重資料室」の管理・運営に関すること
 - ・収蔵資料の閲覧、特別利用などへの対応を含めて、同室の日常的な管理・運営に務めた。
- 4) 『大阪大学大学院文学研究科紀要』『待兼山論叢』の編集・発行に関すること
 - ・2018年度は『大阪大学大学院文学研究科紀要』第59巻及び『待兼山論叢』第52号、2019年度は『大阪大学大学院文学研究科紀要』第60巻及び『待兼山論叢』第53号を刊行した。
- 5) 文学研究科の刊行物に関連する諸問題の処理に関すること
 - ・定期的に著作権関連の研究会に参加して情報収集を行い、研究科刊行物の編集・発行に際し、助言・アドバイスをを行った。
 - ・文学研究科刊行物へのISBNコード付与の手続きを行った。2018年度・2019年度ともにISBNコード付与件数は1件。

4. 懐徳堂部門

- 1) 文学研究科の附属施設である懐徳堂研究センターの業務に関すること
 - ・2018年度は『懐徳堂研究』第10号、2019年度は同11号を刊行し、研究成果と活動内容をひろく公表した。
 - ・2018年度、加地伸行名誉教授より寄贈された第一次加地文庫（書籍類）のうち、特に貴重な『孝経啓蒙』を、いち

よう祭期間中図書館において一般展示した。

- ・2018年度、懷徳堂文庫資料の文化財指定に関して、大阪府教育委員会と協議を行った。
 - ・2019年度、懷徳堂学生子孫である宮武氏より懷徳堂関係資料（答宮武生書・萬年先生遺筆）の寄贈を受けた。
 - ・2019年度、加地伸行名誉教授より、第二次加地文庫（器物類）の寄贈を受けた。
 - ・2019年度、阪倉篤秀関西学院大学名誉教授より、重建懷徳堂の瓦の寄贈を受けた。
 - ・両年度を通じて、センターHPを随時更新するとともに、懷徳堂資料のデジタルコンテンツの作成を進めた。
 - ・両年度を通じて、学内外からの資料見学、調査依頼等に対応した。
- 2) 懷徳堂記念会業務の内、主として文学研究科に関わる業務に関すること
- ・両年度を通じて、古典講座、春期講座、秋期講座、見学会等の企画・運営に協力した。
 - ・2018年度は『懷徳』87号、2019年度は同88号の編集・刊行に協力した。また、両年度を通じて、『記念会だより』の編集・刊行に協力した。

5. その他

- ・部局運営方針実現取組推進経費を活用して、「女性研究者の集い」「若手研究者フォーラム」「若手研究者学会発表補助」「大阪大学・ハーバード大学大学院生交流会—日本文化をめぐる対話—」を企画した。「女性研究者の集い」については、年度内に2度、開催を予定したが、COVID-19感染拡大防止等のため、2度とも中止を余儀なくされた。「若手研究者フォーラム」は、主として博士前期課程・修士課程の学生等に発表の機会を設けることを主眼として開催。第1回目は、17名が発表を行い、3名に優秀若手研究者奨励賞が授与された。第2回目は、COVID-19感染拡大防止のため延期された。「若手研究者学会発表補助」は、10件を採択し、「若手研究者学会発表要旨・報告集」を刊行した。
- 「大阪大学・ハーバード大学大学院生交流会—日本文化をめぐる対話—」は研究科内に公募し採択されたプログラムであるが、2月26日（水）-3月4日（水）に、引率教員1名、大学院生5名（うち1名は「若手研究者学会発表補助」採択者）によって行われ、交流会の成果を含む「大阪大学・ハーバード大学院生交流会報告書」が刊行された。
- ・豊中地区研究交流会開催に際して、発表者募集等により協力した（両年度とも、8件の参加）。
- ・大阪大学教員出版支援制度（大阪大学出版会）推薦論文選考委員会を組織して選考にあたった。
- ・『文学研究科紀要』『待兼山論叢』を中心に、文学研究科刊行物の大阪大学機関リポジトリ（OUKA）での公表を進めた。
- ・教育支援室と協力して、名誉教授・現任教員の教育研究交流を目的とする「教育研究フォーラム」を企画した。

（舟場 保之）

評価・広報室

組織・体制

評価・広報室は、文学研究科・文学部の自己評価・外部評価と広報活動を担っており、研究評価、教育評価、広報、ネットワークの4部門から構成され、室長・副室長を除く室員全員が、そのいずれかに所属している。研究評価部門は教員・大学院生の研究業績をはじめとする各種データの収集や『年報』の刊行など、教育評価部門は、教育関係のアンケートやファカルティ・ディベロップメント(FD)の実施など、広報部門は各種メディアへの広告掲載依頼、オープンキャンパスの開催、高校生の大学見学や出張講義への対応、『文学研究科リーフレット』『文学部紹介』の刊行、文学研究科・文学部ホームページの運営など、またネットワーク部門は、部内サーバやネットワークの整備・運営などを担当している。

室長は副室長とともに、室全体の活動を統括するとともに、全学基礎データの収集、外部評価、メディアラボの運営などの他、いずれの部門にも属さない仕事を担当している。各部門には、それぞれ部門チーフが置かれ、部門の活動を統括している。また、事務補佐員2名が配意され、室の事務全般を担当している。

活動状況

1. 評価・広報室全般

1-1. データ収集（年度計画・達成状況と全学基礎データ）

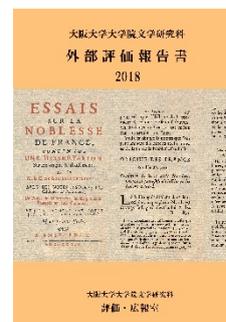
全学規模の取り組みである「全学基礎データ」と「教員基礎データ」の収集については、評価・広報室長の下、事務補佐員が担当し、その収集、データの整理などを行い「リサーチマップ」に研究業績データを提供した。

また、全学規模の取り組みである「部局別年度計画達成状況」に関するデータを教員と研究室から収集・整理し、報告した。内容からみて他の室の管掌である項目も含まれるが、データを提供する側と収集する側の双方の効率を鑑み、評価・広報室でまとめて収集整理した後、当該部署へデータを提供した。

このほか、文学研究科独自のものとして、2018年度および2019年度においても引き続き、専門分野・コース別年度目標・達成状況シートを配布し、自己評価およびデータ収集を行った。

1-2. 外部評価報告書 2018

『外部評価報告書 2018』は、文学研究科の社会連携・社会貢献活動をテーマに実施した。評価対象の事業は、研究科全体に関わる懐徳堂記念会との連携活動と、各ブロックの代表的取り組み事例8件とした。外部委員には、国末憲人（朝日新聞『Globe』編集長 [当時]）、關雄二（国立民族学博物館教授・副館長）、武内紀子（株式会社コングレ・代表取締役社長）の3氏を迎え、対面での評価委員会を実施の上、それぞれ評価書を作成いただいた。本研究科の社会連携・社会貢献分野における活動について詳細なご助言をいただくとともに、全体として高いご評価が得られた。



1-3. 現況調査表

大阪大学に対する法人評価のための基礎資料となる部局単位の現況調査表を、研究科三役並びに各室室長、各事務部門の協力体制のもと、評価・広報室長、副室長、研究評価部門チーフ、教育評価部門チーフ以下室員・事務補佐員全員の分担体制のもとで作成した。今回の現況調査表は、「文学部・教育」「文学研究科・教育」「研究」の3章からなり、第3期中期目標・中期計画期間のうち、現時点までの過去4年間における研究科の活動の内容と成果を取りまとめた。中期目標・中期計画期間の残る2年間については、今後重要事項の追加報告が予定されている。

今回の現況調査表は、文章記述の分量が少なく制限される一方、エビデンスとなる事実や数値の直接的な説明や報告の比重が増した。普段からの系統的なデータの蓄積や、中期目標・中期計画期間冒頭から先を見越した戦略的な取り組みがますます重要になると思われる。

(岡田 裕成)

2. 研究評価部門

2-1. 年報

2018年度に、過去2年間（2016～2017年度）における教育・研究活動の情報を収集・整理した『大阪大学大学院文学研究科年報2018』（A4判頁。以下、『年報2018』と略称）をPDFファイル形式で刊行し、各教員および各専門分野、各室、事務部と教育・研究活動に関する情報を共有した（ただし、教員および事務部の責任者には、特別に冊子体にして配布）。基本的な体裁は過去の年報類に従った。第1部には研究科全体としての教育・研究活動に関する記事を、第2部には各専門分野・コース単位の活動をまとめた記事を、それぞれ掲載した。第1部では、継続プログラムに加えて、「記憶の劇場」や「グローバル・ジャパン・スタディーズ」などあらたに始まった複数の共同研究が報告され、専門分野の枠を超えた研究が順調に進展していることがわかる。第2部の各専門分野・コースの記事では、組織・目標・活動の概要のほか、前号に引き続き、過去2年間の「自己点検・自己評価」を掲載することにより、これを作成する作業自体が自己点検の機会となるように考慮した。



2-2. 専門分野・コース別年度目標

前記の『年報2018』を2018年度に刊行したことを受けて、各専門分野においてその後の改善状況の検証を行った。具体的には次期に刊行予定の『年報2020』に関して、早くも2018～2019年度の評価用データを収集し、その収集を通じて、さらなる自己点検・評価を行うとともに、改善状況も検討した。また、専門分野・コースごとに、それぞれ年度当初に設定した年度目標に基づき、自己評価を実施した。具体的には、前記の『年報2020』に関するデータ収集プロセスの中で、各部署・専門分野における教育・研究・社会連携などの項目にわたる目標を示したうえで、それに関する活動の概要を報告し、あわせてさらなる自己評価・自己点検を実施した。このようにして、点検・評価・改善が連続して実行されていく動きが本格化し、実質性を持った自己点検・自己評価が実現することとなった。

(佐藤 廉也)

3. 教育評価部門

2018～2019年度に教育評価部門が実施したKOAN授業アンケートおよび卒業時・修了時アンケート、また教育支援室と隔年で担当して実施しているFD研修会について報告する。

3-1. KOAN 授業アンケート

評価・広報室の教育評価部門では、2014年度より、学部生を対象とした授業アンケートを新たに実施している。アンケートは7項目からなり、2018年度から学部・大学院の全授業科目を対象に行うこととした。2018年度は、第一回目を7月2日から8月31日にかけて実施し、回答率は学部16.8%、大学院33.9%であった。第二回目を1月8日から2月14日にかけて実施、回答率は学部11.0%、大学院25.5%であった。2019年度からは新たに自由記述欄を設け、第一回目を7月1日から8月30日にかけて実施し、回答率は学部19.5%、大学院36.8%であった。次いで第二回目を1月7日から2月10日に行い、回答率は学部10.5%、大学院18.5%であった。KOANによるアンケートの回答率は、この間夏に実施している第一回目は伸びている一方で、冬に行っている第二回目はやや低下しており、実施時期など改善を図る必要がある。いずれのアンケートについても、教授会室報告において報告を行った。

3-2. 卒業時・修了時アンケート

評価・広報室の教育評価部門では、2014年度より、卒業・修了生を対象として学習・研究環境全般に関するアンケートを実施している。部門では自由記述を含む7項目の質問からなる用紙を作成し、2018・2019年度においても、それぞれ卒修論の提出期間、論文提出場所に回収箱を設置するかたちでアンケートを実施した。2018年度は、卒業時アンケート153枚（86.4%）、修了時アンケート76枚（90.0%）を回収した。2019年度は、卒業時アンケート137枚（78.7%）、修了時アンケートは58枚（86.6%）を回収した。

アンケートの結果については教授会懇談会において報告し、討論をおこなった。卒業生・修了生に対しては研究科ホームページにおいて集計結果を報告するとともに、学部・研究科への要望に回答した。

3-3. ファカルティ・ディベロップメント (FD)

課題となっている情報セキュリティ対策をはじめとする「情報管理の現状と課題」をテーマとして、大阪大学情報推進本部 森原 一郎副本部長による FD 講演会・研修会を 2018 年 10 月 11 日 (木) に実施した。

- 講演題目：①情報管理についての基礎的知識
②情報管理をめぐる環境の変化と課題
③情報管理に関する問題事例
④暗号化ソフトウェアとは何か

(飯塚 一幸)

4. 広報部門

少子化、大学の差異化、情報流通の拡大の進む現在、大学からの情報発信は重要な課題である。広報部門では、冊子メディア、電子メディア、文学部オープンキャンパス、文学部見学会などを通じて、受験生や社会に向けた情報発信に取り組んでいる。

4-1. 冊子メディア

大阪大学文学部に関心を持つ高校生、受験生を対象とした冊子『大阪大学文学部紹介』を毎年発行している。カラー刷り約 80 ページ、発行部数は 5,000 部程度である。全国各地の高校に送付するとともに、オープンキャンパス、文学部見学会などで配布している。

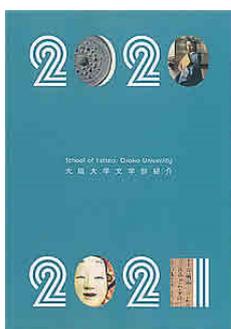
『大阪大学文学部紹介』は、大阪大学文学部の概要および各専修の教育・研究内容の紹介を中核としつつ、卒業後の進路に関する情報、在学生や卒業生の声、文学部全教員のメッセージなども加え、必要な情報を伝えるとともに文学部を身近に感じてもらえる内容にしている。

今期、新たに発行したものではないが、文学研究科を目指す大学生、社会人に対する広報を目的とした『文学研究科リーフレット』を今期も活用し、大学院説明会などで配布した。また、これも今期の発行ではないが、外国での広報や外国からの訪問者などに対する広報のために、文学研究科、文学部の概要を英文で紹介した『英文リーフレット』を今期も活用した。

なお、冊子体ではないものの、印刷物として、メディアラボのデザインによる大学院入試の広報のためのポスターの作成を行うこととし、2018 年度、2019 年度においては大学院説明会のポスターを作成した。



文学部紹介 2019-2020



文学部紹介 2020-2021



2018 年度文学研究科
入試説明会ポスター



2019 年度文学研究科
入試説明会ポスター



文化動態論専攻説明会
ポスター

4-2. 電子メディア

文学研究科・文学部の公式ホームページ、社会人学生募集のためのページについては各種情報の追加、更新を行った。

4-3. 外部メディア

文学研究科の広報の一環として、大学院受験情報サイトに文学研究科の情報を掲載するとともに、一般紙に社会人学生募集の広告を掲載した。

4-4. オープンキャンパス・各種見学会

大阪大学の実施するオープンキャンパスの一環として、「文学部オープンキャンパス」を毎年夏に開催している。2018年度は8月8日、2019年度は8月8日に開催した。参加者数は各年とも千人程度であった。

「文学部オープンキャンパス」では、大阪大学会館での概要説明会と模擬授業の実施のほか、全専修の研究室を解放し、参加者が教員や学生と交流できるようにしている。また、事務職員や学生による進学、留学、学生生活などに関する各種の相談会も開いている。

オープンキャンパス以外の時期においても、随時高校生の団体による見学希望を受け付け、「文学部見学会」を実施している。「文学部見学会」では、文学部の概要説明のほか、希望に応じて模擬授業も提供している。2018年度には、大阪府立高津高等学校、島根県立出雲高等学校、島根県立松江南高等学校、島根県立隠岐高等学校、清風南海高等学校、大阪府立大手前高等学校、2019年度には、三国丘高等学校、大阪府立高津高等学校、島根県立出雲高等学校、立命館守山高等学校、島根県立隠岐高等学校、清風南海高等学校の生徒を対象として見学会を実施した。また、兵庫県立尼崎稲園高等学校、福岡県立門司学園高等学校・中学校を始めとする高等学校8校に教員が出向いて講義等を行った。

(三宅 知宏)

5. ネットワーク部門

5-1. 文学研究科ウェブサイト

基本的に、必要十分なかたちで滞りなく運営できている。特記事項としては、2019年度に英語版コンテンツの拡充に着手した。文学研究科のアドミッションポリシーをはじめとする情報については、すでに全世界に向けて発信していたが、今回は、各専修の紹介ページの英語版を作成し公開することで、本研究科の研究教育体制を、世界の研究者コミュニティの中で本研究科の活動に興味を持つ広範な層に潜在的にアピールしうるものとなった。また文学部紹介をはじめとする情報誌やオープンキャンパスについての情報も積極的に公開し、研究者を志す日本高校生・大学生にも、積極的に本研究科の研究・教育活動をアピールしうるものとなった。

5-2. 文学研究科サーバ管理

本研究科が運営する Web サーバには、文学研究科・文学部のホームページだけでなく、各講座・研究室・各教員のホームページ、教育支援室、研究推進室、国際連携室のホームページ、国際的・社会的連携型人文学研究教育クラスター、人材育成プログラム等のホームページなど、文学研究科・文学部の教育研究活動に関わる多くの情報が収められている。

学内のみならず、社会における IT への依存度が増せば増すほど、各種サーバの安定運用が求められている。ネットワーク部門では、Web サーバやメールサーバが停止することのないように、機器やソフトウェアのメンテナンスを担当している。また外部からのクラッキング、ウィルスメール、無線 LAN の傍受など、インターネットに対する脅威が高まる状況のなかで、定期的に外部機関のチェックも受けながら、セキュリティーを維持する作業をおこなっている。ネットワーク部門では、Web サーバ、メールサーバ、ネームサーバソフトウェアのアップデート作業やセキュリティーホールを埋めるパッチ作業もまた日常の業務として担当している。全学で実施されるセキュリティーチェックを活用して、本研究科のサーバが安全かつ安定して稼働するよう保守している。

5-3. メールアカウント

文学研究科では who@let.osaka-u.ac.jp のアカウントを発行している(サーバ管理自体はサイバーメディアセンターに委託し、メールアドレスの発行削除をはじめとする諸管理は、引き続いてネットワーク部門が行っている)。教員は全員、また文学研究科雇用の職員等もほぼ全員、この文学研究科のメールサーバを利用している。なお、大学院生・研究生に対

しては、教育システムによるメールが使えることから、研究科でのアカウントは発行していない。その結果、メールサーバのリソースを研究科スタッフに割り当てることで、メールサーバの安定した運営をおこなうことができるようになった。一方、メーリングリスト開設の希望は増加している。室・委員会等の運営だけでなく、教育と学生の連絡手段、さらには学生主体の研究会運営においても、メーリングリストはもはや不可欠な連絡ツールとなっている。現行のサーバでは、いままですら以上に簡便なインターフェイスをつかったメーリングリストの管理が可能となっている。

メールの利用が必要不可欠のものとなった以上、安全かつ安定した運用が求められている。ウィルスメールやスパムメール等を一括で排除するようなセキュリティーサービスの拡充、ならびにサーバのダウンを回避するバックアップ経路をそなえた運用をおこなっている。

サーバの維持およびバックアップ経路の確保については、前節に述べたとおりで、本部の情報推進部と連携することで実現している。またウィルスメール対策についても、ODINS が提供するウィルス監視システムを活用することによって、一定の安全性を維持できている。しかし特定の利用者に向けられたフィッシングメールなどを完全に防ぐことはできないため、引き続き、ユーザ端末におけるウィルスチェック、不審なメールが届いた際の安全な対応などの啓発活動を継続的におこなうことになる。

5-4. ネットワークの維持

本研究科では、すべての講義室・演習室に無線LANアクセスポイントを整備しており、本研究科の学生がどこにいても必要に応じてネットワークに接続ができるような環境を提供している。その一方で、ネットワークの不具合や不調はなくなることはない。端末がネットワークに繋がらない、あるいは極端に繋がりにくいなどのトラブルの原因としては、端末の不具合、設定の誤り、通信機器やケーブルの不具合、ウィルスの感染等などがあり、その特定は容易ではない。ネットワークトラブルが発生した際には、ネットワーク部門の教員が出向いて、原因の特定および問題解決にあたってきた。専門家ではない教員が、本来の教育・研究のための時間を割いて作業にあたることは、大変非効率的であった。こうした事態を改善するために、保守業者と契約し、ネットワーク部門では対応することができないネットワークのトラブルに対応を依頼する体制を整えている。

近年はネットワークの機械的なトラブルに加えて、不正アクセスやハッキング行為の踏み台として文学研究科の情報コンセント等が悪用されることも問題となっている。ハッキング行為が発生した際、問題となっているサーバやネットワーク機器を迅速に特定することが求められる。ネットワーク部門では、ネットワーク台帳を作成することで、効率的かつ迅速なトラブル対応に備えている。

(吉田耕太郎)

教育支援室

組織・体制

教育支援室は、2018年度・2019年度も引き続き、(1)教務・学位関連部門・(2)入試関連部門・(3)学習・生活支援部門・(4)キャリア支援部門・(5)共通教育部門の5つの部門（部門チーフおよび室員）に分かれて業務をおこない、室長（1名）および副室長（2名）で全体を統轄した。

教務・学位関連部門ならびに入試関連部門は、教務係と連絡をとりながら、所轄の学事業務を実施した。学習・生活支援部門、キャリア支援部門は、室窓口に配置された事務補佐員2名とともに各種の学習支援サービス業務をおこなった。共通教育部門は、全学教育推進機構との連絡を担当した。

各部門は、教授会開催日に定例会議を開催するほか、教務係、庶務係、会計係とも連携し機動的に日常業務を遂行した。また原則的に月1回、室長、副室長、各部門チーフで構成するチーフ会議を開催し、室全体の円滑な運営に努めた。

室内の学生用スペースでは、事務補佐員2名が窓口を担当し、常時学生からのリクエストや相談を受け付けた。開室時間は、月曜日・金曜日は9時30分～17時、火曜日・水曜日・木曜日は9時30分～19時とした（17時～19時は学生の事務補佐員を配置）。同スペースにはコンピュータ端末8台を設置するほか、キャリア形成関連の新聞・書籍・雑誌などを常備し、求人情報を掲示するなどして、学生のキャリア支援をおこなった。

さらに、事務補佐員により、ミーティングルームの管理、授業用AV機器やノートブック作業に必要なパソコンの貸し出しなどをおこなった。



教育支援室

活動状況

1. 教育支援室全般

教育支援室の活動はルーティン的な学事業務にかかわるものを中心となるが、2018年度・2019年度において、それ以外に教務・学位関連部門でおこなった特筆すべき取り組みは、以下のとおりである。

- ・2017年度に続いて、室長が座長を務めるAO入試ワーキングを組織し、入試関連部門・教務係と連携しながら、AO入試の設計・準備・広報・実施に取り組んだ。なお、文学部のAO入試志願者は最近3年連続で60名を越えており、これまでは順調に進展していると言える。
- ・2019年度からの新カリキュラム導入に対応するため、専門のワーキンググループを創設し、30回以上の会合を重ねた。文学部・文学研究科の開講科目全体の体系を整備し、卒業・修了要件を大幅に改革した。また、各種ポリシーやカリキュラムマップの草案も作成した。
- ・新カリキュラム適用学生向けに、高度教養教育科目として「人文学概説」の開設準備を進め、2020年度から開設することとした。
- ・1年生の必修科目「文学部共通概説」では、2018年度より、前年度の「学部学生による自主研究奨励事業」の発表会において好成績であった3～4グループに、1回分の授業を用いて研究発表を披露してもらうこととした。また、同じく2018年度より、前年度の優秀レポート数篇に採点教員のコメントを付して授業中に配布することとした。
- ・大学院志願者減少への対処策として、2017年度に続いて、文学研究科全体の大学院入試説明会を年に2回開催した（2018年度は豊中キャンパスと箕面キャンパスで各1回ずつ。2019年度は豊中キャンパスで2回）。
- ・2019年度新入生入学式の日、文学部にて「新入生保護者の集い」を開催した。約60名の参加者があった。
- ・2019年度文学研究科FD研修会を、下記の通り開催した。

日時：2020年1月9日（木）17:30～18:30

会場：文学部本館2階大会議室

テーマ：「発達・精神障がい学生の修学支援について」

担当講師：キャンパスライフ健康支援センター相談支援部門 樋口隆太郎 特任研究員

・大学院入試改革について検討を重ねた。改革案は教授会で承認され、2021年度秋入試から実施することとした。

(山上 浩嗣)

2. 教務・学位関連部門

2018年度・2019年度において、教務・学位関連部門では、議題を事前に周知し、議事録案を会議中に作成することで、事前の打ち合わせおよび会議の効率化を徹底した。2019年度導入の新カリキュラムに対応し、円滑に運営できるよう、副研究科長2名、教育支援室長、共通教育部門チーフ、教務関連部門チーフ、および教務係長・教務係計7名による新カリキュラム等検討ワーキンググループを別途に結成した。2018年度から2019年度前半にかけて、約3週間おきにワーキンググループで事案を検討し、学部および大学院におけるカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、アドミッション・ポリシーの改訂、カリキュラムマップの作成、専門教育科目・高度教養教育科目・国際性涵養教育科目の選定と開設、卒業・修了要件単位の検討、また学部においては文学部共通概説に加えて新カリキュラムに対応した人文学概説の開設などの原案を作成した。それらの原案を教務・学位関連部門で検討し、担当教員に周知と理解を徹底することで、支障のない移行と運営が可能となった。

(橋本 順光)

3. 入試関連部門

入試関連部門は、教務係と緊密に連携して、大学院入試の実施にあたっての、計画・実施・改善にたずさわった。学部入試の実施においても、本部門で積極的に対応した。なかでも、2019年度AO入試では、志願者が67名、2020年度AO入試では、志願者が61名、両年ともに、60名もの面接試験をおこなうため、多くの教員の協力をえて試験を実施した。加えて、入試結果の分析をおこなったり、広報活動に協力したりした。

① 秋期大学院試験の改革

秋期一般選抜において専門試験が2つ実施されてきたが、教員だけでなく受験生の負担をなくすために、専門試験をひとつにまとめ、翌日に行われていた面接試験を同日におこなうことを提案して、教授会において承認されて、令和3年度の入試から適用された。同じ理由から、春期の外国人留学生特別選抜の日本語試験の廃止について提案をおこない、承認された。

② 入試ミスへの対応

大学院入試問題の作成において、表記の不統一を改めるとともに、起こりやすいミスを未然に防ぐために、チェックリストおよびチェックの方法をなんども検討した。一連の試行錯誤のいかいもあって、試験開始後にミスが発見されることがなくなった。公開用の問題についてもミスがないか厳密なチェックをおこなった。油断はできないが、一定の成果をあげたものとみられる。

(高安 啓介)

4. 学習・生活支援部門

学習・生活支援部門は、下記の事項を主な業務とし、随時部門会議を開催するとともに、教務係・庶務係・会計係と連携して業務にあたった。以下、それぞれの業務について報告する。

① 学習・生活相談

学習・生活相談デスクに寄せられた相談は、2016/17年度の件数とほぼ同じく、2018年度17件、2019年度18件であった。相談件数が最近数年で大きく増加しており、対応体制（2018年度は1名、2019年度は2名の教員が担当した）の充実が求められる。

② TF/TA

教務係・庶務係・ハラスメント問題委員会と連携し、年2回（4月・10月初め）「研修会」を開催し、任用学生全員



学習・生活相談ポスター

の参加を得た。TF/TA 任用のための経費が年々削られる一方で、教員側からの TA/TF の要望は必ずある。2019 年度までは教務係による細やかな調整によって任用を実現できたが、今後、あらたな任用制限や時間数の削減など、何らかの対策が必要となる。

③ 奨学金

毎年 10 月末か 11 月初旬に「奨学金返還免除申請のためのガイダンス」を行っており、2018/19 年度もこの時期に開催した。返還免除の推薦に関しては、2018 年度より従来の返還免除推薦に加えて「内定候補者」推薦（成績・業績が優れている者を推薦し、内定候補者には必ず全額または半額免除が保証される）制度が導入され、博士前期・後期課程の学生を「内定候補者」として推薦した。

④ 他大学から来た大学院新入生・社会人院生のためのガイダンス

例年 4 月初めに開催されており、2018/2019 年度も開催した。在学大学院生の協力を得て、小冊子の作成やガイダンス当日でのキャンパスツアー（図書館・生協・サイバーメディアセンター等の施設紹介）やその後の懇談会など、好評を得ている。ただ、2020 年度（開催準備は 2019 年度部門委員が担当）は新型コロナの影響で、残念ながら中止せざるを得なかった。

⑤ インターンシップ報告書

文学部・文学研究科で開講している「インターンシップを含む科目」の実施状況を、次年度 7 月頃に報告書として編集し、冊子体・WEB 版で公開、関係機関等に配布した。報告書には、担当教員による実施概要の他、インターンシップに参加した学部生・大学院生による感想等も収められており、大阪大学文学部・文学研究科での他機関連携をアピールする媒体となっている。

⑥ 障がいのある学生への支援

文学部・文学研究科に在籍または入学予定の学生で、障がい等により授業に対する配慮申請があった場合、キャンパスライフ健康支援センター・担当（指導）教員・教務係・学習生活支援部門チーフで構成する「合理的配慮検討委員会」が開催される（その結果を、授業担当教員に「障がいのある学生の授業履修に伴う配慮のお願い」として送付する）。2019 年度春夏学期に 1 名の学生から申請があり、合理的配慮検討委員会を開催した。2018/19 年度ではこの 1 件だけであったが、配慮申請の可能性がある案件は（主にキャンパスライフ健康支援センターから）毎学期 2～3 件寄せられている。今後「合理的配慮検討委員会」の開催は増えてくるものと予想される。

（堀江 剛）

5. キャリア支援部門

キャリア支援部門では、年に 4 回実施する「就活サポート講座」を中心として、業界セミナーや社会人学生へのサポートを行っている。

① 就活サポート講座

2018 年度・2019 年度ともに年 4 回の「就活サポート講座」を行った。講座の内容は、(i) スタートアップ、インターンシップ対策、(ii) エントリーシート対策、(iii) グループディスカッション対策、(iv) 模擬面接、(v) OB・OG 講演会、および (vi) 教員志望者向け対策講座である。近年では、学部 3 年生・博士前期課程 1 年生などを対象とした、インターンシップを重視する傾向にあり、またグループディスカッションに対する学生からの要望があったことを受けて、その対策講座を取り入れた。また、2018 年度から、教員志望者に対する講座を独立させ、現役教員、面接担当経験者、内定者を招いてそれぞれの立場から教員になるための対策や心構えなどを具体的にお話いただくとともに、参加学生との交流の場を設けた。なお、教員志望者向け講座においては、人間科学部の教職担当教授による講師の紹介、イベントの宣伝など、多大なご協力をいただいた。

② 社会人学生へのサポート

2016～2017 年度に引き続き、社会人学生教育支援基盤経費より資金を得て、文学研究科所属の現役の社会人学生と現役の学部学生・院生との交流を目的とした場を設けた。2018 年度は、近年の人文知への世間からの風当たりを意識し、「社会人から見た文学部の知」について、2019 年度は、生涯教育をテーマとして、「働きながら研究をすること」について議

論した。社会人学生からこれらのテーマについて具体的なエピソードを話してもらい、問題提起を行ったあと、学部学生・院生含めて議論し、交流する場とした。2016年度から始まった、他大学から来た大学院新生・社会人学生のためのガイダンス（4月）も引き続き実施した（学習・生活支援部門との共催）。現役の大学院生による説明、社会人学生による体験談、大学施設の案内をおこなったのち、昼食会を催して社会人学生の交流をはかった。

③ 業界セミナー

2015年度より文学部単体主催での合同企業説明会の開催を見合わせているが、文学部と関係の深い、あるいは学生の関心の高い業種については、単独で業界説明会を複数回開催した。

なお、2017年度までキャリア支援部門として行っていた大学院進学ガイダンスは、2018年度より文学研究科として開催することとなり、教育支援室での開催となった。



社会人学生との交流会



就活サポート講座ポスター
（教員志望者向け）



就活サポート講座

（田中 英理）

6. 共通教育部門

本部門は、文学研究科の全学教育推進機構兼任教員4名で構成されている。うち1名が全学教育企画開発部に、2名が共通教育実施推進部教養教育部門に、1名が共通教育実施推進部専門基礎教育部門に属し、大学全体の教育の質的向上を図っている。教育支援室における本部門の役割は、文学部に関わる共通教育関係の問題について検討するとともに、教育活動が円滑におこなわれるように尽力することにある。

2016～17年度に、2019（平成31）年度から新カリキュラムを実施することが決まった。これは、大阪大学の教育体系が「教養教育系科目」、「国際性涵養教育系科目」、「専門教育系科目」の三つを柱とすることになったためである。2018年度は、従来の共通教育で開講されていた授業科目を三つの柱に置き換える作業に当たられた。全学で開講する「学問への扉（通称マチカネゼミ）」（春学期2単位）の新設にともない、文学部が担当する「学問への扉」の授業数を決定すること、文学部が担当してきた従来の授業数を削減すること等が具体的な作業内容である。特に、文学部の担当授業数の削減により、専修やブロックの請負制になっている科目負担システムによる問題を多少解消することができた。またこの問題は全学的な教員定員削減などと連動しており、全学共通教育機構でも認識検討された。2019年度は、三つの柱による新しい教育体系が開始しされ、教育体系が適切に実施・運用されているのかの点検に当たられた。

（渡辺 浩司）

7. 博物館実習委員会

博物館実習委員会では、毎年、博物館学として館園実習と学内実習を実施しており、その他にも、学芸員資格取得に必要な科目を開講するために非常勤講師等の任用にかかわる交渉を行っている。館園実習は、2度の事前指導をした後、2018・2019年度は大阪歴史博物館、大阪府立弥生文化博物館、大阪府立近つ飛鳥博物館、大阪市立自然史博物館、茨木市立文化財資料館、兵庫県立美術館などを受入機関として実施した。実習生の数は、2018年度が23名、2019年度が36名であった。学内実習は、大阪大学総合学術博物館の協力を得て実施した。実習生の数は、2018年度が43名、2019年度が41名であった。

（市 大樹）

国際連携室

組織・体制

室長 1 名、副室長 1 名、「連携推進部門」、「留学生受入部門」、「留学助成部門」、「エラスムス・ムンドゥス部門」の 4 部門の室員（各部門にチーフ 1 名を配置）、国際交流センター助教 1 名、同事務職員 1 名、および教務係の留学担当職員 1 名で室を構成し、活動を行っている点は、前回の年報報告時と変わらない。室員に関しては、2018 年 4 月に 19 人で出発し、若干の増減はあったが、期間内を通じてほぼこの人数であった。

「連携推進部門」は部局間協定の締結・更新・終結のほか、外国の大学への教員の派遣、外国人招へい研究員の受入れ等を行い、海外の研究教育機関との交流をはかることを目的としている。ヘキサゴン（日独 6 大学学長会議）に関する連絡窓口および ISAP プログラムによる教員・学生の交換等についても業務の一部としている。「留学生受入部門」は留学生の受入れと学習・生活支援、タンデム学習プロジェクトの運営等を担当している。「留学助成部門」は、学生の海外派遣に関する業務を行っている。これには、1 年次学生への留学説明会の実施、派遣学生の選考、奨学金受給者の選考、夏期短期英語研修プログラムの運営に関する業務などが含まれる。「エラスムス・ムンドゥス部門」は、文学研究科が欧州域外フルパートナーとして参加している、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム「ユーロカルチャー」のコンソーシアムに基づく学生・教員の受入れと派遣、英語コースの運営、事務局との折衝などを担当している。

国際連携室の日常業務としては、学生の海外派遣と留学生の受入れに関わる相談業務、および情報提供、海外からの研究者の受け入れ、海外への研究者の派遣に関する相談業務および情報提供、タンデム学習プロジェクトやエラスムス・ムンドゥス・プログラムの運営補助、協定校との連絡・調整など、高度な実務を担当している。

国際連携室のもとに国際交流センター（室長および副室長がセンター長および副センター長を兼務）が設置されており、ここに国際連携室で国際連携業務を担当する助教と、大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の英語科目を担当する助教が配置されている。前者の助教が 2018 年度末に任期満了を迎えたため、国際公募により 2019 年度から後任の助教を任用したが、その際に国際連携室で勤務する国際連携担当の助教の URA としての位置づけを明確にした。また、後者の助教が 2018 年度末をもって転出したため、国際公募により 2019 年度から後任の助教を任用した。

活動状況

1. 国際連携室全般

各部門の活動については 2～5 参照。

国際連携室の日常業務については 6 参照。

なお、海外在住私費外国人留学生特別入試に関しては、引き続き留学生受入部門を中心に国際連携室が主体となって実施している。

2. 連携推進部門

1. 2018 年度には、パラツキー大学文学部（チェコ）、ウプサラ大学神学部（スウェーデン）、マンチェスター大学人文学部（イギリス）との部局間協定を更新した。また 2019 年度には、上海戯劇学院（中国）、チュラロンコン大学文学部（タイ）、國立台灣師範大學国際与社会科学学院（台湾、旧：国際与僑教学院）、韓国芸術綜合学校演劇院（韓国）との部局間協定を新規に締結した。

2. 外国人招へい研究員として、2018 年度 10 名、2019 年度 13 名の外国人研究者を海外から受け入れた。

3. ハイデルベルク大学日本学研究所が DAAD の資金によって実施している ISAP プログラムに協力して、2018 年度は教員を 2 名派遣し 2 名受け入れ、2019 年度は教員を 2 名派遣し 2 名受け入れた。派遣教員の確保と日程調整、受け入れた教員による講演会等の企画・運営を行った。また、2018 年度、学生 5 名（各 1 セメスター）を受け入れ、5 名（各 1 セメスター）を派遣した。2019 年度は学生 6 名（各 1 セメスター）を受け入れ、4 名（各セメスター）を派遣した。派遣学生の決

定に関して面接を行った。

4. 日独6大学学長会議（HekksaGOn）の部局担当窓口として、2018年4月に大阪大学で開催されたコンソーシアム会議を準備し、人文社会科学部会シンポジウムの発表者の選定、学生ワークショップの発表者の公募・選考等を行った。

3. 留学生受入部門

1. 従来どおり、正規外国人学部および大学院留学生（国費・私費）、外国人研究生、部局間協定と大学間協定による iExpo、OUSSEP、Maple 各プログラムへの特別聴講学生および特別研究学生の受け入れ関連業務を行った。2018年度は29の国・地域からの153名、2019年度は30の国・地域からの181名の留学生が在籍した。

2. 在学中の留学生を対象とした業務として、短期留学生の受け入れ教員の選定、各種奨学金推薦者および学会発表旅費・日本語添削費用補助の選考、入学後1年以内の留学生を対象としたチューター制度の運用を行った。

3. オリエンテーションの際に事故や病気、生活上のトラブルが発生した場合に24時間体制で相談に応じてくれる「インバウンド緊急対応支援サービス」を周知し利用を呼びかけている。また不慮の事故に備えて学生教育研究災害傷害保険に全員加入を義務付け、留学生保険への加入も促している。

4. 異なる言語を母語とする2人がパートナーとなり、互いの得意な言語を学び合うタンデム学習プログラムを引き続き運営した。この制度の運用のため、リサーチ・アシスタント（RA）とアルバイトを雇用し、スチューデント・スタッフとして活用した点もこれまでどおりである。2018年度は、延べ15組、2019年度は延べ32組のペアリングを行った。学期末に行っているアンケート調査では、回答者の満足度は高いと判断できる。

4. 留学助成部門

1. 引き続き、協定校への派遣学生の募集・選考に関わる業務を行った。2018年は13人、2019年度は12人が協定校に滞在した。

2. 留学プログラム一覧を掲載したパンフレット Let's Study Abroad を、2019年度からサイズを大きくし留学体験記も入れて作成し配布した。また、新入大学院生を対象としたガイダンスと学部1年生を対象とした共通概説の授業において、留学に関する情報を提供するとともに、部局間協定派遣の説明会も別途、開催した。

3. 引き続き、リスク・マネジメントの一環として、海外に派遣した学生の緊急時に対応する緊急連絡網を維持・更新した。また上述の通り、派遣留学生危機管理サービス（略称 OSSMA）の加入、海外留学保険について情報提供を行った。

4. 2018年度（2019年派遣分）のJASSOの海外留学支援制度（協定派遣）に、「人文学をグローバルに学ぶ」というプログラムで応募し、採択された。選考の結果、部局間協定校に派遣する学生（4名）に奨学金を給付した。

5. 文学部・文学研究科に在籍している正規課程の学生を対象として「グローバル人文学教育促進プログラム」を開設した。

6. 研究科独自の基金「教育ゆめ基金」によって運営する、協定校への派遣学生に給付する奨学金の受給者（2018年度は4人、2019年度は3人）の選考を行った。

7. アカデミック・ライティング力向上のために、グローバル人文学の英語集中講座（2020年2月17～21日）を開催した。

8. 部局間協定校への派遣学生の、COVID-19蔓延に伴う帰国に関して、国際連携室助教および事務スタッフおよび同室長と連携して対応にあたった。

5. エラスムス・ムンドゥス部門

1. コンソーシアムから学生を2018年度は5名、2019年度は5名、受け入れた。

2. 5科目から成る英語授業 Contemporary Japan in a Global Context（3ヶ月）を計画・実施した。2018年度と2019年度は、新たに採用された国際交流センター助教（2018年度は周雨霏特任助教、2019年度はニコラス・ランブレクト助教）と非常勤講師（2019年度は雨霏周氏（宇野田教授と共同担当）とソアレス・モッタ・フェリッペ・アウグスト氏（ランブレクト助教と共同担当））も加わって内容を更新している。また、円滑な指導が行えるように希望者（2018年度は2名、

2019年度は2名)の授業にSTAを配置した。

3. カリキュラム外の活動として、日本語教育の大学生・大学院生の協力を得て、日本語学習の機会を提供した。

4. 生活・学習両方が問題なく進められるよう、ビザ申請等の各種手続き、宿舍の手配等、生活面に关わるサポートをおこなうとともに、来日直後にガイダンスを行った。また、国際交流を深めるために、ウエルカムパーティー、プログラム終了後フェアウエルパーティーを行った。

5. 大阪大学の学生のユーロカルチャー・マスター・プログラムへの派遣(推薦)について、学内で説明会を実施し、応募者の選考を行った。2018年度に派遣奨学生候補者を2名推薦したが、2名とも不採択となった。2019年度に派遣奨学生候補者を1名推薦した。

6. 2018年度は1名の教員(ウディネ大学 Claudio Cressati 氏)、2019年度は1名の教員(ゲッティンゲン大学 Lars Klein 氏)が来学し、特別講演会を開催した。また、大阪大学からコンソーシアム内の大学への教員派遣については、2018年度は1名(小林=ハッサル助教)、2019年度は1名(周雨霏特任助教)が採択された。

7. コンソーシアム校の担当者が集まって行われるマネージメント・ミーティングに2018年度(クラコフ)2名(バーデルスキー教授、丁愛美助教)、2019年度(オロモウツ)2名(バーデルスキー教授、モインウッディン助教)の教員を派遣し、運営上の問題や今後の方針に関する協議に参加した。

8. 2018年にユーロカルチャーと本研究科との連携が10周年となり、記念シンポジウムを開催した。コンソーシアムから教員4名、大阪大学から教員3名が発表を行った。

6. 国際連携室の日常業務

国際連携室は、オリエンテーション、親睦パーティーといった各種行事の実施、エラスムス・ムンドゥス・プログラムやISAPプログラムの運営補助、教務係や庶務係と連携して留学生および招へい研究員の受入れサポートなど、国際交流に関する様々な業務を担当している。また、留学生からの学習・研究、生活などについての様々な質問や相談の窓口となるほか、協定校をはじめとする海外の大学への留学についての情報を提供している。留学生専門教育講師は、論文作成法と実践専門日本語の授業を開講するほか、必要に応じて個人指導も行っている。

(1)留学生相談・留学相談

国際連携室は、①留学生の学習・研究や生活についての質問・相談、②留学に関する質問・相談などに対応している。相談・質問等での訪問回数は、2018年度約580、2019年度約480。

①留学生の学習・研究に関する相談・質問は留学生の種別によって異なる。交換留学生においては、授業登録や単位の取得、成績についての質問が多く、研究生や正規生では、大学院入試、奨学金の応募情報、授業料免除、チューター活動、学内外の経済的支援などについての一般的なことから、研究の方法や学位論文について、研究室の同輩・先輩に尋ねるべき専門分野・コースに関するものまでより幅広い質問・相談が寄せられる。長期にわたって在籍する正規生に特徴的な、休学・退学・転学といった修学制度については、教務係と連携のうえ対応している。また、例年特定の時期に寄せられる生活上の問い合わせとしては、在留資格の延長・変更手続きといった手続き、あるいは、生活用品の入手・処分方法や引越しに関する問い合わせがある。ときおり寄せられるのが医療機関の受診についての問い合わせである。質問・相談内容によって即答・即決がむずかしい場合は、1. 必要な情報の収集と提供を行う、2. 状況に応じて指導教員や学内外の専門の相談窓口との連携を図りながら対処する、3. 「大阪大学留学生支援フロントスタッフネットワーク」(留学交流に携わる学内の教職員で組織、年4回定例ミーティングを開催)を活用して適切な対処の方法を探る、といった仕方で対応している。

②2018年度から2019年度にかけては部局間協定校の新規締結・更新が8件あった。協定校への留学に関する質問・相談も増加傾向にある。教務係を通じて本部事務局から提供される留学関係情報の周知を図り、それぞれの相談・質問内容に応じて本部事務局や協定校などと連絡を取りつつ対応している。質問・相談内容は、留学先の選び方、申請時期等のスケジュール、交換留学等で利用・申請可能な奨学金、留学先の大学に提出すべき書類(申請書や推薦書)、ビザ申請・取得手続などについてである。

(2)その他の支援活動

①新規入学の留学生には在籍する研究室の学生がチューターとして配置されている。留学生が日本での、とりわけ、文学部・文学研究科での学生生活になじむためのサポートができるよう、チューターの新規採用者を対象に説明会を実施している。また、学位論文執筆者は、日本語の添削を目的とする「論文添削アルバイト」の制度を利用することが出来る。

②国際教育交流センターや本部事務局で企画・実施される日本語や英語でのプログラム、ホストファミリープログラム、地域の学校の国際理解プログラム、留学生を対象とした学内外のイベントや課外活動、奨学金、寮に関する情報を提供し、必要に応じて申込み手続等を補助した。

③EU(欧州連合)が運営するエラスムス・ムンドゥス・プログラム、ハイデルベルク大学 ISAP (Internationalen Studien- und Ausbildungspartnerschaft) プログラムといった研究科で運営するプログラムについて、関係部門や事務局と連携しつつ、プログラムの運営をサポートした。

④学生派遣については、交換留学や短期語学研修、学内で実施されているプログラムをはじめ、海外の研究・教育機関への留学を希望する学生に関連情報を提供した。海外留学オリエンテーションや各種プログラムへの参加者を募るとともに、必要に応じて応募書類の作成補助などを支援した。また、交換留学に参加する学部学生が対象の留学支援「ゆめ基金」において、学生への募集案内から留学助成金の支給までをサポートをした。

⑤海外の教育研究機関関係者の訪問に当たり、本学教職員との交流などを行った。

⑥British Council からネイティブ講師を招いて、留学を目指している本学の学部生および院生のために英語集中講座(2019年2月17~21日)を実施した。

(3)年間行事

留学受入れに関連しては以下の行事を実施した。

- ・新入留学生向けのオリエンテーション(各年4月・10月)
- ・Erasmus Mundus Euroculture 新入留学生向けのオリエンテーション・ウェルカムパーティー(各年10月)
- ・タンデム学習(各年前期・後期)
- ・チューター説明会(各年4月・10月)
- ・浴衣教室(各年7月)・着物体験教室(各年12月)
- ・大学院留学生による学会発表について補助するために、「学会発表補助(①旅費・②添削)」募集案内(各年7月・12月)
- ・留学生が卒論、修論、予備論、博論を作成する折に、添削補助を年一回行っている。



着物体験教室 2019年12月

留学派遣に関連しては以下の行事を実施した。

- ・留学支援として留学説明会(各年5月)
- ・Erasmus Mundus Euroculture 奨学候補生説明会(各年10月)
- ・留学助成金「ゆめ基金」募集案内(各年5月・1月)
- ・2019年度に留学を目指している本学学生のために英語集中講座を実施した。



留学説明会 2019年5月



英語集中講座 2020年2月

留学生だけでなく、文学部・文学研究科の学生、教職員との交流の機会として以下の企画を実施した。

- ・ランチタイム交流会（各年4月・10月）



ランチタイム交流会 2019年10月

(4)広報活動

文学部・文学研究科で実施する国際交流活動の記録・広報を目的に、『国際交流ニューズレター』を年1回刊行した（9号、10号）。また、文学部・文学研究科の学生が申請・利用できる留学・研修についての情報をまとめた冊子「Let's study abroad」を作成した。

（宇野田 尚哉）

国際交流センター

組織・体制

国際連携室のもとに国際交流センターを設置している。

国際交流センターは、センター長1名（国際連携室長兼任）、副センター長1名（同副室長兼任）、助教2名で構成される。助教2名のうち、1名は、URAとして、国際連携室で国際連携業務に従事している（2018年度丁愛美助教，2019年モムハンマド・モインウッディン助教）。もう1名は、大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の英語科目を中心とする教育・研究に従事している（2018年度ヤスコ・ハッサル・コバヤシ助教，2019年度ニコラス・ランブレクト助教）。

また、国際交流センターでは、「国際日本研究」コンソーシアムと連携しつつ、「グローバル・ジャパン・スタディーズ」プログラムを基盤とした教育・研究活動を展開している。

活動状況

1. 大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の運営

大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の詳細については別項参照。

2018年度にはヤスコ・ハッサル・コバヤシ助教が、2019年度にはニコラス・ランブレクト助教が、同プログラムの Academic Skills for Humanities 1・2（春夏学期・秋冬学期に1・2を1科目ずつ、合計年間4科目）、Issues in Contemporary Japanese Studies 1・2（春夏学期・秋冬学期に1・2を1科目ずつ、合計年間4科目）を担当した。

また、博士前期課程のプログラムである「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の波及効果を学部および博士後期課程にも及ぼすために、両年度とも、学部では Basic Academic Skills for Humanities 1・2（春夏学期に1，秋冬学期に2，合計年間2科目）、Introduction to Contemporary Japanese Studies 1・2（春夏学期に1，秋冬学期に2，各1科目，合計年間2科目）を、博士後期課程では Advanced Academic Skills for Humanities 1・2（春夏学期に1，秋冬学期に2，合計年間2科目）を開講した。授業担当者はいずれも前記の助教である。

2. 国際シンポジウムおよび Graduate Conference in Japanese Studies の運営

国際交流センターでは、大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」を基盤として、また「国際日本研究」コンソーシアムと連携しつつ、国際シンポジウムを企画し、Graduate Conference in Japanese Studies を開催している。

2018年度は、「国際日本研究」コンソーシアムとの共催で、12月2日に国際シンポジウム「Reimagining Japanese Studies from Asia-Pacific Perspectives（日本研究再考：アジア・太平洋の視点から）」を開催し、12月3日に Graduate Conference in Japanese Studies 2018 を開催した。

2019年度は、12月20日に、Graduate Conference in Japanese Studies 2019 を開催した。

以上の詳細については「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の項目参照。

（宇野田 尚哉）

客員研究員の受入れと本研究科教員の海外における研究活動

1. 外国人招へい研究員

出身国	2018年度		2019年度	
	人数	受け入れ講座	人数	受け入れ講座
中国	5	中国文学3、演劇学2	10	東洋史学2、中国文学6、日本学、比較文学
韓国	2	日本学2	4	日本学、哲学・思想文化学2、東洋美術史、比較文学
台湾	2	中国文学、日本語学	2	日本語学、
イギリス				日本学
アメリカ			1	東洋美術史
ロシア	1	日本語学	1	日本語学
タイ	2	哲学・思想文化学2	1	哲学・思想文化学
トルコ	1	東洋史学	1	東洋史学
ブラジル			1	日本学
イスラエル			1	音楽学・演劇学
合計	13		22	

2. 教員の海外研究活動

	外国出張		海外研修	
	2018年度	2019年度	2018年度	2019年度
	34ヶ国・地域 延べ126名 (136件)	26ヶ国・地域 延べ78名 (97件)	6ヶ国・地域 延べ7名(8件)	6ヶ国・地域 延べ6名(7件)
中国・香港	24・3	16・1	3	
韓国	11	8		
台湾	9	4		
タイ	8	9	1	1
シンガポール	1	4		
ベトナム	2	2		1
カンボジア	6	5	1	1
インドネシア	3	1		1
インド	1	1		
アメリカ	16	9	1	2
カナダ	1			
オーストラリア	6	6		
ニュージーランド	1	1		
イギリス	7	1		
フランス	1	2	1	
ドイツ	8	12	1	1
チェコ		3		
オランダ	1	1		
スイス	1			
イタリア	3	2		
スペイン	3			
ギリシャ	1			
クロアチア		1		
ポーランド	3			
ロシア	3	3		

スウェーデン	3			
ベルギー	1			
トルコ	1			
イスラエル	1			
ブラジル	1			
ペルー		1		
キューバ	1			
ミャンマー	1	1		
セルビア	2			
エストニア	1	1		
バングラディシュ	1			
ラオス	1			
マレーシア	1			

留学状況および留学生の受入れ状況

1. 留学状況

学生派遣

2018年度 留学等による派遣は36名。(2019年2月1日付け、休学事由「留学」を含む)

2019年度 留学等による派遣は26名。(2020年2月1日付け、休学事由「留学」を含む)

研究科							
課程	博士後期課程			博士前期課程		修士課程	
学年	3年	2年	1年	2年	1年	2年	1年
2018年	11	2	1	4	0	1	0
2019年	5	1	0	2	0	1	0
学部							
学年	4年	3年	2年				
2018年	9	8	0				
2019年	11	5	1				

渡航先	件数	
	2018年	2019年
ドイツ	9	5
中国	3	1
フランス	6	5
アメリカ	2	0
イギリス	4	3
カナダ	1	1
チェコ	4	2
インドネシア	0	1
スリランカ	0	0
アイルランド	0	0
ハンガリー	0	0
スウェーデン	0	0
フィンランド	1	0
スペイン	2	1
イタリア	0	0
オランダ	2	1
オーストリア	2	1
オーストラリア	0	0
ポーランド		1
モンゴル		2
ニュージーランド		1
シンガポール		1
合計	36	26

大学で実施されている語学研修等参加者

	モナシユ		グローニンゲン		オタゴ		Campus France		その他		合計	
	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部
2018年	0	3	0	1	0	1	1	3	0	1	1	9
2019年	0	3	1	0	0	3	2	0	0	1	3	7

2. 留学生の受入れ状況

留学生受入れ

研究科							
課程	博士後期課程			博士前期課程		修士課程	
学年	3年	2年	1年	2年	1年	2年	1年
2018年	13	7	11	13	18	6	2
2019年	16	11	9	20	21	2	3

学部				
学年	4年	3年	2年	1年
2018年	6	7	7	11
2019年	8	6	8	10

		研究科			学部	
		研究生	特別研究学生	特別聴講学生	研究生	特別聴講学生
2018年	合計	5	5	10	32	11
	部局間			6		1
	大学間		2	4		10
	協定外		3			
2019年	合計	5	8	9	34	9
	部局間		1	9		
	大学間		4			9
	協定外		3			

OUSSEP, Maple 学生の受入れ

	プログラム	OUSSEP		Maple	
		研究科	学部	研究科	学部
2018年	合計	2	10+4	3	9
	部局間			1	3
	大学間	2	10+4	2	6
2019年	合計	1	14		3
	部局間				1
	大学間	1	14		2

留学生の出身国・地域（OUSSEP, Maple を除く）

	2018年度	2019年度
	出身国・地域 28	出身国・地域 30
中国	77	93
香港	1	1
韓国	35	45
台湾	9	10
タイ	1	
フィンランド		1
インド		1
アメリカ	4	7
カナダ		1
メキシコ	1	2
アルゼンチン	1	1
イギリス		1
フランス	1	1
ドイツ	2	6
イタリア	1	1
スペイン		1
スイス	1	1
インドネシア		1
オランダ	1	1
ポーランド	1	1
スウェーデン	1	1
ノルウェー	1	
ベラルーシ	1	1
リトアニア	1	1
ボスニア・ヘルツェゴビナ	1	
イラン	1	1
ロシア	3	2
シンガポール	1	1
オーストラリア	1	
エジプト	1	1
モンゴル		1
カザフスタン	1	1
ギリシャ	1	1
南アフリカ	1	
ブラジル	2	2
合計	153	189

留学生の博士学位取得

留学生（元留学生）の博士号取得

専門分野	2018年度	2019年度
日本文学	1	
比較文学	2	1
国語学		1
日本語学	1	2
日本史学		1
音楽学・演劇学	1	
合計	5	5

(Mohammad Moinuddin)

ここ数年大幅に運営費交付金が減らされているため教育・研究活動における外部資金の役割はますます大きくなっている。外部資金は種々のかたち、様々な機関のものが導入されており、その全容の把握は難しい。研究代表者となっている場合だけでなく、研究分担者となっている場合でもかなりの件数と金額が導入されていると考えられる。逆に研究代表者となっている場合でも、金額のすべてが文学研究科で支出されているわけではなく、他大学・他機関の研究分担者への配分金の存在もある。したがって、ここでは件数や金額が把握しやすい、文学研究科の構成員が代表者となって取得している外部資金についての概要を紹介しておきたい。なお、文学研究科の教員だけでなく、大学院生が獲得している外部資金も考慮に入れることとする。

1. 科学研究費助成事業

科学研究費助成事業（以下「科研費」という。）の取得について件数、金額（直接経費のみ）の増減をまずみておくことにしたい。ここでは、日本学術振興会の特別研究員奨励費も含まれる。

表 1-4-1 取得された科研費の件数と金額変化およびその科研費予算総額との比較

年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度
件数	128	127	122	114	124	121	115
増減	1.06	0.99	0.96	0.93	1.09	0.98	0.95
金額(千円)	202,700	199,850	193,400	169,255	166,304	151,021	148,041
増減	1.08	0.99	0.97	0.88	0.98	0.91	0.98
科研費予算総額 (億円)	2,381	2,276	2,273	2,273	2,284	2,336	2,372
増減	0.93	0.96	1.00	1.00	1.00	1.02	1.02

本表には表示されていないが、科研費の取得件数は、2006 年度から上昇しているが 2013 年度をピークに減少傾向にある。また、2011 年度に科研費の一部が基金化されたため一時的に全体の予算総額が大幅に拡大するも翌年から微減し、近年はほぼ横ばいである。

表 1-4-2 取得された科研費の内訳

年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度
基盤研究(A)	8	10	8	7	7	7	5
同金額(千円)	62,700	69,700	64,400	42,900	41,100	38,395	33,800
基盤研究(B)	15	13	13	10	12	12	10
同金額(千円)	42,700	37,650	37,100	30,000	34,500	33,400	32,700
基盤研究(C)	43	44	40	31	37	37	37
同金額(千円)	44,800	42,900	39,900	30,093	34,300	32,968	31,635

基盤研究(A) は、2010 年度までの取得数は 4、5 件ほどであったが、2011 年度から 8 件に倍増し高い水準を維持していたが、2019 年度は減少した。また、基盤研究(B)は、2009 年度から件数・金額とも減少に転じ、2012 年度には一旦上昇したものの 2013 年度から減少傾向にある。このほか、基盤研究 (C)については、2009 年度以降 2011 年度までは横ばいであったが 2012 年度から 2014 年度まで上昇、近年は再びやや減少している。

2. その他の外部資金

科研費以外の外部資金も極めて重要である。2013 年度から文化庁の文化芸術振興費補助金（大学を活用した文化芸術推進事業）を取得し、劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業を3年間行った。その後、2019 年度から再び同事業を実施している。また、2015 年度以降、国立大学改革強化推進補助金（優れた若手研究者採用拡大支援）を受け、優れた若手研究者を4名採用することができた。また、同年始めて民間等との共同研究が始まった。なお、大学院生が獲得した助成金については、会計担当部署が資金獲得者の自己申告により把握している数値に過ぎず、すべてを把握できているわけではない。

種類	件数と金額	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度
国立大学改革強化推進補助金（優れた若手研究者採用拡大支援）	件数	—	—	3	3	2	2	—
	金額 (千円)	—	—	34,171	18,440	14,194	12,356	—
文化芸術振興費補助金（大学を活用した文化芸術推進事業）	件数	1	1	1	—	—	—	1
	金額 (千円)	10,000	15,000	21,792	—	—	—	18,000
各種財団などからの研究助成金	件数	4	5	8	8	5	5	9
	金額 (千円)	3,164	2,828	7,651	12,091	3,386	2,544	4,768
大学院生の獲得している研究助成金	件数	43	50	42	47	46	35	58
	金額 (千円)	13,512	30,211	26,522 (283,220) ハンガリー フォリント	24,324	24,126	23,833	23,430
預かり個人交付補助金（国文学研究資料館共同研究）	件数	—	1	1	1	1	—	—
	金額 (千円)	—	1,400	1,800	450	150	—	—
受託研究	件数	2	1	2	1	1	1	1
	金額 (千円)	4,794	4,398	3,154	1,430	10,348	6,240	5,382
共同研究	件数	—	—	1	1	1	1	1
	金額 (千円)	—	—	1,000	1,000	300	300	200

エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム 「ユーロカルチャー」

2008年4月よりエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム「ユーロカルチャー」の圏外協定校としての活動を始めたが、2011年10月からはヨーロッパ圏外のフル・パートナーとして、他の3つの圏外協定校（メキシコ国立自治大学、インド・プーネ大学、米国・インディアナ＝パーデュ大学インディアナポリス）とともにプログラムの運営により深く関わることとなった。同プログラムは、欧州における高等教育機関同士の連携を強めるとともに相互間の流動性を高め、大学教育を国際化することを目的としており、英語を共通使用言語としている。ヨーロッパの大学のみならず、ヨーロッパ圏外の大学もパートナー校として参加しており、世界的な規模で展開されている最先端の教育プログラムであるといえる。本研究科は人文学分野における日本初めての同プログラム協定校となった。

国際連携室は、同室に設置されたエラスムス・ムンドゥス部門（EM部門）、RAとともに、同プログラム運営を担当している（受け入れる学生および教員の宿舎の手配、ビザ申請、各種書類作成、シラバス作成、リーディング・テキストの選定・購入、本学からの派遣留学生の募集説明会開催と面接選考実施、本学からの教員派遣等）。例年10月～12月の3ヶ月間、同コンソーシアムの学生最大5名を「特別聴講学生」として受け入れ、「世界の中の現代日本」をテーマとした英語による授業5科目を10回にわたって開講し、25ECTS（10単位相当）を認定している。授業にはコンソーシアム所属学生以外の留学生や日本人学生も参加している。授業を行う際には双方向性を重視しており、各授業内においてフィールドトリップも実施している。また、毎年ユーロカルチャー・コンソーシアム大学の教員1～2名を受け入れ、適宜助言を得て、改善に努めている。さらには日本語教育の専門家および大学院生の協力を得て、日本語学習の機会を提供することにより、短期間にもかかわらず高い教育効果をあげている。本研究科は、同プログラムの4校の圏外協定校の中でも常に高い評価を得ており、これまでのところ、欧州側での派遣留学先として希望する学生が最多である。

2018年度は、コンソーシアム大学から5名の学生を受け入れた。また、コンソーシアム大学から1名の教員（ウディネ大学 Claudio Cressati 氏）を受け入れるとともに、本研究科から1名の教員（小林＝ハッサル助教）を派遣した。6月には、ポーランドのクラコフで開催されたコンソーシアム全体会議に本研究科教員2名（バーデルスキー教授、丁愛美助教）が参加し、プログラム運営の改善策について集中的に審議した。

2019年度には、コンソーシアム大学から5名の学生を受け入れ、本学から1名を推薦した。また、コンソーシアム大学から1名の教員（ゲッティンゲン大学 Lars Klein 氏）を受け入れるとともに、本研究科から1名の教員（周雨霏特任助教）の派遣が決定した（COVID-19のため派遣延期）。また6月にはチェコのオロモウツで開催されたユーロカルチャー・コンソーシアム全体会議に本研究科教員2名（バーデルスキー教授、モインウッディン助教）が参加し、同プログラム実施の課題について意見交換を行った。

また、2018年にユーロカルチャーと本研究科との連携が10周年となり、記念シンポジウムを開催した。コンソーシアムから教員4名、大阪大学から教員3名が発表を行った。

（宇野田尚哉）

目的と概要

本プログラムは、大阪大学総合学術博物館を主な舞台として、近隣の劇場・音楽堂・美術館等とも共同し、主として社会人のための文化芸術ファシリテーター養成講座を推進することを目的として開催した。また、これまで博物館が収集、維持保存し、またその研究に努めてきた、過去の様々な遺品、記念品、芸術作品、文献資料、民族資料などの「ミュージアム・ピース」を「生きたアート」として現代市民社会に開いていくことも志向した。同時に、大学博物館としての強みを生かし、文理融合的あるいは基礎研究的な潜在力と連動させた「リサーチ型ミュージアム」のあり方を探求していくこともねらいとした。このような大学博物館や大学の潜在力を活用しながら、「ミュージアム・ピース」と「生きたアート」を統合する文理融合能力のある総合的な文化芸術ファシリテーターを実践的に育成することをねらいとして、平成 28（2016）年度および平成 29（2017）年度に続き、平成 30（2018）年度にも文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」に申請し、採択された。ここでは、平成 30 年度の 1 年間にわたって実施した事業について簡単に報告する。なお、本プログラムは、3 年計画のもので、平成 30 年度は最終年度となった。また、平成 31（2019）年度には、主催を大阪大学大学院文学研究科に移した新たなプログラム、アート・プラクシス人材育成プログラム「徴しの上を鳥が飛ぶ」の採択が決まっている。

この事業は、大阪大学総合学術博物館が主催し、大阪大学大学院文学研究科と共催して推進するプログラムである。総合学術博物館と文学研究科芸術系ブロックの教員が中心になり、浄るりシアター、吹田メイシアター、尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）、ザ・フェニックスホール、大阪中之島美術館準備室、益富地学会館といった芸術諸機関と連携して実施した。また、それらの芸術諸機関からアドバイザーを迎え、事業担当者とともに「大学博物館を活用する芸術文化ファシリテーター育成連絡協議会」を組織し、プログラム全体を監督し、評価に努めた。「大学博物館を活用する芸術文化ファシリテーター育成連絡協議会」は、年 2 回の会議にて、アドバイザーから具体的で専門的な助言をうけた。

1 年間のプログラムを集中して学習できるように、1 年を 3 期に分けた。それぞれ、第 1 期を全体的な理念、学知を学ぶ座学中心の学習期間（活動①）、第 2 期を各事業担当者の推進する事業への配属をして具体的な研修を行う期間（活動①～⑦）、第 3 期を 1 年間の研修成果を大学博物館において展示・上演する期間（活動①）とした。なお、3 年分の活動①～⑦の成果を外部へ還元すべく「記憶の劇場 芸術祭」を設定し、トークイベントや演劇公演、展覧会等を開催した。

研修の受講者は、芸術系諸機関で働く人々や働くことを希望する社会人などを中心にして広く公募し、36 名を受講生として受け入れた。受講生は、各種セミナーやワークショップを受講し、各事業担当者の実施する活動（②～⑦）に専属することで、専門的な知識を得るとともに、各種イベントに実践的にかかわり、共同作業をすることで、様々なプログラムを受講した。また、1 年の最後には成果発表の場として、またアーティストをファシリテートする場として、展覧会を開催した。展覧会には美術家の前田剛志を迎え、その企画運営には受講生が携わった。

受講生が受講した研修科目は、以下の通り。

活動①「「記憶の劇場Ⅲ」オープニング講座」、活動①「セミナー「関西のアートシーンと将来」」

各活動を統括するものとして、オープニング講座を開催した。この講座では、本事業全体のオリエンテーション、各事業担当者によるガイダンス、総合学術博物館見学から構成された。この講座によって、本事業の理念（「ミュージアム・ピース」と「生きたアート」を統合する文化芸術ファシリテーター育成」と「社会と大学との協奏を生かしたリサーチ型ミュージアムの探求」）を共有した。また、活動②～⑦の各活動の趣旨やねらいの下で各活動に受講生と事業担当者がどう関わるかを確認し、年度末の展覧会に向けて総合学術博物館を見学した。また、「セミ

ナー「関西のアートシーンと将来」・博物館オリエンテーション」を実施した。このセミナーは、アドバイザーの芸術諸機関の協力のもと開催され、文化芸術拠点としての関西の将来、関西のアートシーンの未来を考察した。また、大学博物館での博物館オリエンテーションも開催した。受講生は、座学にて展覧会実施における実践的な経験やスケジュール管理などについて学習し、博物館実習にて博物館展示に必要な実践的な技術を経験した。

活動②「地域文化の発信・顕彰とメディアリテラシー」

大阪の都市文化・芸術に関するセミナーと、徒歩や乗船による現地でのフィールドワークを行い、受講生自らが大阪という地域の文化を、固定化されたイメージにとらわれず発信するワークショップを行った。2年間で取りあげた「道頓堀と中之島」「大阪の橋」の二つのテーマの実績を踏まえ、新たに水辺での都市文化のありかた一行楽や観光と芸術活動をテーマとして、最終的には受講生の手による小冊子を作成した。

活動③「自然科学に親しむ・触る・アートする～研究からアートそして発信～」

理系研究者の視点、特に自然科学の中でも鉱物のアートとしての魅力を紹介すると同時に、その科学的視点からも考察した。講義だけでなく、陶芸の実習や鉱物顔料についての実習を実施した。平成31年1月15日～27日には、3か年の総集編的な展覧会『石を感じる～memory×sense～』を京都造形芸術大学にて実施した。

活動④「モノログ・オペラ『新しい時代』上映会の制作」

2017年に17年ぶりに再演された三輪眞弘と前田真二郎によるモノログ・オペラ『新しい時代』の記録映像を、大阪、京都、神戸の3会場で上映し、作品を広めるとともに、それがもつ現代的意義について考えた。受講生はチラシ作成やプレトーク企画などに主体的に参加し、それぞれの能力を活かして貢献した。本プロジェクトに派生する成果として、ブルガリア・ソフィア大学での上映があり、これは同オペラの海外での初の紹介となった。

活動⑤「パフォーミング・ミュージアム Vol.3」

大阪の劇作家森本薫のご子息である森本年氏によって寄贈され、大阪大学総合学術博物館に寄託されている「森本薫関係資料」を調査、研究して、それに基づいて、展示と上演を行った。平成30年12月4日から16日まで、ピッコロシアター展示室において、「森本薫と『女の一生』」と題した展覧会を開催した。平成31年2月1日～3日には、演劇公演『まだまだ生きてゐる』の上演が行われ、3日間の公演で計229名の観客が来場した。

活動⑥「TELESOPHIA と芸術・文化・生活」

時間的または空間的に遠い(=TELE)知識やわざ(=SOPHIA)が現代の私たちにどのように伝えられているのかを、様々な題材を扱い、調査・考察した。題材には、震災や、旅(移動)を伴う芸、ジャズなど選択した。座学やワークショップ、実演を通して内容を深め、最終的には受講生が主体となって企画を立案、運営し、「小澤俊夫講演会「昔ばなしの時間と距離 ～口承文芸学者 小澤俊夫さんに聞く～」」を実現した。

活動⑦「ドキュメンテーション／アーカイヴ」

過去2年の取り組みの中から、維新派の記録(映像作品と台本)をアートエリアB1で再公開した(「旅する展覧会「3つの『Re』をめぐって-維新派という地図をゆく-」)。展覧会の準備のため、維新派のアーカイブスの試み、アート・プロジェクトの記録に関する昨今の流れ、記録の収集と公開に関わる法権利に関する専門家による講座を設けた。過去の受講生2名を共同企画者に迎え、講師・受講生と協力して展覧会の設営・撤収を行った。

活動⑧「クロージング・エキジビション 展覧会「記憶の劇場Ⅲ「前田剛志展-明日の記憶」」

具体的で実践的な講座を展開した、活動②～⑦の成果をもとに、年度の最後には、大阪大学待兼山修学館において展覧会を開催した(2019年2月26日～3月9日)。この展覧会は主に受講生によって企画運営され、1年間の活動内容を表すとともに受講生の講習成果を発表する機会となった。また、美術家の前田剛志を迎え、その作品をどのように展示すべきかを受講生が調査・研究し、作家本人とも議論し、展覧会へと帰結させた。展覧会には、506

名の来場者があり、好評であった。また、展覧会最終日には、クロージング・シンポジウムを開催し、受講生が1年間の活動内容や学びなどについて口頭発表を行い、事業担当者、受講生とともに質疑応答、意見交換を行った。

成果と将来

受講生は、全体を統括するセミナーと、各事業担当者が推進する実践的な活動に専属して参加するとともに、具体的な成果（冊子作成、写真・映像撮影、公演の制作、イベントの企画運営など）をあげながら、プログラム履修を進め、年度末にレポートを提出した。活動への貢献度、出席率、レポートを総合的に判断し27名の受講生に修了証を授与し、アートマネジメント人材を育成した。

アートマネジメント人材育成の目標として、「ミュージアム・ピース」を「生きたアート」として現代市民社会に開いていくことや大学の研究力を活用する「リサーチ型ミュージアム」を設定した。また、特定の分野のみではなく、多様な芸術ジャンルにも対応できる人材育成を行うこととした。本プログラムでは、7割強の受講生に修了証を授与することができた。この3年間の事業は、初年度は準備期間、2年目を発展期間と位置付けた。最終年である3年目にあたる2018年度には、3年間の成果を外部に還元すべく「記憶の劇場 芸術祭」を開催し、それぞれの活動の成果を、トークイベントや演劇公演、上映会、展覧会等様々な企画により公開した。育成事業としても、それぞれの活動において受講生による企画が生まれており、実現し運営まで担っており、実りの多いものとなった。また、3年間の「記憶の劇場」の成果を書く担当者が報告、考察した書籍『記憶の劇場-大阪大学総合学術博物館の試み』も2020年3月に刊行した。

3年間の事業終了後は、これまでの経験を土台として、文化芸術ファシリテーター育成の教育的経験をさらに大学の研究教育に活かしていくために、文学研究科や総合学術博物館の芸術政策論関連の授業や公開講座に組み込んでいけるよう計画している。2019年度からは、文学研究科が主催し、総合学術博物館と共催して、文化庁「大学における文化芸術推進事業」に申請した新しいプログラムを実施する。また、社会人と学生とが共に学ぶ新しい形式を探索すべく、大阪大学の芸術・アートを活用した社学連携の拠点とする計画である「中之島アゴラ案」において、芸術の教育プログラムの中での展開を計画している。これらの事業により、社学連携的な芸術文化事業を展開していく。

(永田 靖・山崎 達哉)



グローバル・ジャパン・スタディーズ

文学研究科は、2017年度から、全学に対し、大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」を提供している。2018年度・2019年度の提案書は次の通りである。

平成30年度 大阪大学大学院等高度副プログラム提案書(継続)

平成29年11月24日

プログラム名	和文	グローバル・ジャパン・スタディーズ	
	英文	Global Japanese Studies	
提案(幹事) 部局	部局名	文学研究科	
	実施責任者 (所属・職名・氏名)	文学研究科・研究科長 金水敏	
連携部局			
履修対象者 ※該当以外を削除	修士・博士		
修了要件	10単位以上	下記①のうち1科目2単位を選択必修とします。 下記②のうち1科目2単位を選択必修とします。 下記③のうち3科目3科目1科目2単位ずつ履修するものとして、日本についての多面的・総合的理解を促します。	
趣旨・概要	研究/教育のグローバル化にもなっており、日本には海外からますます強い関心が寄せられています。そのような関心に有効に応えるためには、学際分野ごとに深められてきた日本研究の成果を総合し、全体像を把握しやすいたちで提示する必要があります。また、日本研究の成果を英語で発信する能力を高めることも不可欠です。本プログラムは、そのようなグローバル化時代の要請に応える新たな日本研究プログラムとして設置されました。		
到達目標(修了時に身に付く能力)	本プログラムでの学習を通して、以下の能力を備えた方に修了認定証を授与します。 (1)複数の分野の日本研究の最新の成果を理解している。 (2)海外の日本研究の最新の動向を踏まえて議論することができる。 (3)日本研究の成果を英語で発信するための基礎的なスキルを身につけている。		
カリキュラムの構成	上記(1)~(3)の到達目標を達成するため、3つの科目群(下記①~③)を設け、さらにそのうちの1つは5つに下位区分して、系統的かつ効果的な学習を促します。 (1)下記①のうち、異なる分野(1~5)の授業を3科目6単位履修するものとして、日本についての多面的・総合的理解を促します。 (2)下記②の授業を選択必修とし、海外の日本研究の動向を踏まえて議論する能力を高めます。 (3)下記③の授業を選択必修とし、日本研究の成果を英語で発信するための基礎的なスキルを身につけます。		
履修資格・条件	グローバルな観点から日本を研究し、その成果を積極的に発信したいという意欲を持つ学生を歓迎します。		
前提知識の目安	日本研究のいずれかの分野で学部レベルの知識を身につけていることが望ましい。		
特記事項	本プログラムは、2年間のプログラムとします。		

時間割コード	授業科目名	単位数			開講学期(4学期制)	開講部局(課程)	備考
		必修	選択	選修			
204750	Academic Skills for Humanities 1		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
未定	Academic Skills for Humanities 1		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
未定	Academic Skills for Humanities 2		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
204751	Academic Skills for Humanities 2		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
204752	Issues in Contemporary Japanese Studies 1		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	②英語による講義
未定	Issues in Contemporary Japanese Studies 1		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	②英語による講義
未定	Issues in Contemporary Japanese Studies 2		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	②英語による講義
204753	Issues in Contemporary Japanese Studies 2		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	②英語による講義
204754	世界のなかの日本史 1		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	③-1歴史
204755	世界のなかの日本史 2		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	③-1歴史
204756	世界文学のなかの日本文学 1		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	③-2文学
204757	世界文学のなかの日本文学 2		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	③-2文学
204758	日本語の歴史		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	③-3言語
204759	現代日本語の諸相		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	③-3言語
未定	現代日本語の諸相		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	③-3言語
204760	世界のなかの日本美術		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	③-4芸術
204761	世界のなかの日本演劇		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	③-4芸術
204762	現代日本のポピュラー音楽		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	③-4芸術
204763	日本の民俗と宗教		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	③-5文化・社会
204764	日本の社会と思想		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	③-5文化・社会
204765	異文化交流のなかの日本		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	③-5文化・社会

※学修は、上記課程の科目を履修できません(例えば、博士前期課程の学生による博士後期課程科目履修等)ので、履修対象者が複数の課程にわたる場合は、科目構成等に留意ください。
※学生向け案内冊子の履修作成にあたり、同一の項目については本提案書の記載事項をそのまま活用しますのでご留意ください。

平成31年度 大阪大学大学院等高度副プログラム提案書(継続)

平成31年1月29日

プログラム名	和文	グローバル・ジャパン・スタディーズ	
	英文	Global Japanese Studies	
提案(幹事) 部局	部局名	文学研究科	
	実施責任者 (所属・職名・氏名)	文学研究科・研究科長 福永 伸哉	
連携部局	言語文化研究科、国際公共政策研究科		
履修対象者 ※該当以外を削除	修士・博士		
修了要件	単位以上	下記①のうち1科目2単位を選択必修とします。 下記②のうち1科目2単位を選択必修とします。 下記③のうち3科目3科目1科目2単位ずつ履修するものとして、日本についての多面的・総合的理解を促します。 以上の条件を満たして10単位以上履修していることを修了要件とします。	
趣旨・概要	研究/教育のグローバル化にもなっており、日本には海外からますます強い関心が寄せられています。そのような関心に有効に応えるためには、学際分野ごとに深められてきた日本研究の成果を総合し、全体像を把握しやすいたちで提示する必要があります。また、日本研究の成果を英語で発信する能力を高めることも不可欠です。本プログラムは、そのようなグローバル化時代の要請に応える新たな日本研究プログラムとして設置されました。		
到達目標(修了時に身に付く能力)	本プログラムでの学習を通して、以下の能力を備えた方に修了認定証を授与します。 (1)複数の分野の日本研究の最新の成果を理解している。 (2)海外の日本研究の最新の動向を踏まえて議論することができる。 (3)日本研究の成果を英語で発信するための基礎的なスキルを身につけている。		
カリキュラムの構成	上記(1)~(3)の到達目標を達成するため、3つの科目群(下記①~③)を設け、さらにそのうちの1つは5つに下位区分して、系統的かつ効果的な学習を促します。 (1)下記①のうち、異なる分野(1~5)の授業を3科目6単位履修するものとして、日本についての多面的・総合的理解を促します。 (2)下記②の授業を選択必修とし、海外の日本研究の動向を踏まえて議論する能力を高めます。 (3)下記③の授業を選択必修とし、日本研究の成果を英語で発信するための基礎的なスキルを身につけます。		
履修資格・条件	グローバルな観点から日本を研究し、その成果を積極的に発信したいという意欲を持つ学生を歓迎します。		
前提知識の目安	日本研究のいずれかの分野で学部レベルの知識を身につけていることが望ましい。		
特記事項	本プログラムは、2年間のプログラムとします。		

時間割コード	授業科目名	単位数			開講学期(4学期制)	開講部局(課程)	備考
		必修	選択	選修			
204750	Academic Skills for Humanities 1		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
204767	Academic Skills for Humanities 1		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
204768	Academic Skills for Humanities 2		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
204751	Academic Skills for Humanities 2		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
204752	Issues in Contemporary Japanese Studies 1		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	②英語による講義
204769	Issues in Contemporary Japanese Studies 1		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	②英語による講義
204770	Issues in Contemporary Japanese Studies 2		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	②英語による講義
204753	Issues in Contemporary Japanese Studies 2		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	②英語による講義
204754	世界のなかの日本史 1		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	③-1歴史
204755	世界のなかの日本史 2		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	③-1歴史
204756	世界文学のなかの日本文学 1		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	③-2文学
204757	世界文学のなかの日本文学 2		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	③-2文学
305900	日本語学研究総論		2		春~夏学期	言語文化研究科(博士前期)	③-3言語
306100	日本語教育研究総論		2		春~夏学期	言語文化研究科(博士前期)	③-3言語
204758	日本語の歴史		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	③-3言語
204759	現代日本語の諸相		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	③-3言語
204766	現代日本語の諸相		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	③-3言語
204760	世界のなかの日本美術		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	③-4芸術
204761	世界のなかの日本演劇		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	③-4芸術
204762	現代日本のポピュラー音楽		2		秋~冬学期	文学研究科(博士前期)	③-4芸術
306200	日本文化研究総論		2		秋~冬学期	言語文化研究科(博士前期)	③-5文化・社会
204763	日本の民俗と宗教		2		夏学期(集中)	文学研究科(博士前期)	③-5文化・社会
204764	日本の社会と思想		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	③-5文化・社会
204765	異文化交流のなかの日本		2		春~夏学期	文学研究科(博士前期)	③-5文化・社会
311484	特別講義「日本とアジアの国際関係」		2		春~夏学期	国際公共政策研究科(博士前期)	③-5文化・社会

※学修は、上記課程の科目を履修できません(例えば、博士前期課程の学生による博士後期課程科目履修等)ので、履修対象者が複数の課程にわたる場合は、科目構成等に留意ください。
※学生向け案内冊子の履修作成にあたり、同一の項目については本提案書の記載事項をそのまま活用しますのでご留意ください。

2019年度から、言語文化研究科・国際公共政策研究科が連携部局に加わった。

また、国際交流センターを主体として、「グローバル・ジャパン・スタディーズ」プログラムを基盤としつつ、また、「国際日本研究」コンソーシアムと連携しつつ、国際シンポジウムと Graduate Conference in Japanese Studies を開催した。

2018年12月2日に「国際日本研究」コンソーシアムとの共催で開催したキックオフ国際シンポの詳細は次の通り。

大阪大学高度副プログラム Global Japanese Studies キックオフ・イベント
大阪大学大学院文学研究科・国際日本研究コンソーシアム 共催
国際シンポジウム

Reimagining Japanese Studies from Asia-Pacific Perspectives
日本研究再考…
アジア・太平洋の視点から

第1部 基調講演
The Shifting Frontiers of Japanese Studies
テッサ・モーリス-スズキ (オーストラリア国立大学名誉教授)
ディスカッサント: 坪井秀人 (国際日本文化研究センター教授)

第2部 パネル・セッション
**How to Practice “Global Japanese Studies”
 (「国際日本研究」をどう実践するか?)**

発言①
「日本の日本研究は誰と対話することを望むのか？」
宇野田尚哉 (大阪大学大学院文学研究科教授)

発言②
「モビリティから読む日本文学」
申寅燮 (韓国 建国大学校教授)

発言③
Re-defining Japanese Studies in Southeast Asia
カール・チュア (フィリピン アテネオ・デ・マニラ大学助教授)
ディスカッサント: 河野至恩 (上智大学国際教養学部准教授)

総合討論

12月2日(日) 13:00~18:00 * 12:30 開場
大阪大学中之島センター507講義室 * 要事前申込

<http://www.onc.osaka-u.ac.jp/others/map/index.php>
最寄駅: JR 環状線福島駅 / JR 東西線新福島駅 / 京阪中之島線中之島駅 / 地下鉄四つ橋線肥後橋駅

★準備の都合上、事前の参加申込をお願いいたします。gjs@let.osaka-u.ac.jp まで「お名前」と「ご所属」をお知らせください。
★お問い合わせ: 大阪大学大学院文学研究科 GJS プログラム担当教員宇野田尚哉 (unoda@let.osaka-u.ac.jp)、周雨霏 (zhouyufei@let.osaka-u.ac.jp)

2018年12月3日に「国際日本研究」コンソーシアムとの共催で開催した Graduate Conference in Japanese Studies 2018 と、5日に研究科独自で開催した若手研究者ワークショップの詳細は下記の通りである。

Graduate Conference in Japanese Studies 2018	
3 December 2018 (MONDAY)	
会場：大阪大学中之島センター 607 多目的室	
10:30 - 11:00	趣旨説明と自己紹介 / Welcome Remarks 宇野田尚哉/Shoya Unoda (大阪大学)
11:00 - 12:30 発表 / PRESENTATION	
11:00	Lerner Beliefs of Participations in a Bi-national Tandem Program Benjamin Phillip Larson (東京外国語大学大学院国際日本専攻)
11:30	Political Polarization on Japanese Twitter: Estimating Ideology with Bayesian Ideal Points Estimation 呂澤宇/Lye Zeyu (東北大学大学院大学院文学研究科人間科学専攻)
12:00	Japanese literature as World Literature: Tracing Hōjoki's global reception in Meiji era Gouranga Charan Pradhan (総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻) Session Chair: 小林ハッサル柔子/Yasuko Hassall Kobayashi (大阪大学)
12:30 - 14:00 昼食 / LUNCH	
14:00 - 15:30 発表 / PRESENTATION	
14:00	Tabunka Kyosei and Religious Minority: Muslim Prayer Space Installation in Sendai City Andi Holik Ramdani (東北大学大学院人間科学専攻文学研究科宗教学研究室)
14:30	The Possibility and Impossibility of Narrating about Marginalized Masculinities : Futoshi Miyagi's Project 田村美由紀/Tamura Miki (総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻)
15:00	Kyoto School vs. British Commonwealth: Historian Shigetaka Suzuki and "Philosophy of World History" 吉川弘晃/Yoshikawa Hiroaki (総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻) Session Chair: 周雨霏/Zhou Yufei (大阪大学)
15:30 - 16:00	テッサ・モーリス・スズキ先生による講評
16:00 - 16:10	閉会の辞 / Closing Remarks

大阪大学高学際プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」キックオフイベント

第1部 13:00~14:30
若手研究者ワークショップ

第01
Women's Lives as Thought and Practice of Democracy
Chiara Comastri (オックスフォード大学大学院生)

第02
A Japanese Proletarian Mystery in New York
Richard William Leckie (大阪大学大学院文学研究科大学院生)

第03
The Changing Faces of Dazai Osamu's Ai to Bi ni tuite
Jake Odagiri (大阪大学大学院文学研究科大学院生)

コメント Tessa Morris-Suzuki (オーストラリア国立大学名誉教授)

第2部 15:00~17:00
テッサ・モーリス・スズキ先生との対話
In Conversation with Tessa

司会 Yasuko Hassall Kobayashi (大阪大学大学院文学研究科助教)

高学際プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の本誌出版を記念して開催する一連のイベントの一環として、英語圏の日本研究を代表する研究者のひとりであるテッサ・モーリス・スズキ先生を招き、若手研究者による研究発表の場を設けるとともに、先生との対話の機会を設けました。第1部では、発表の場にてご参加いただきまして本誌出版を記念する対話を進めていただく機会を設けたいと考えています。皆さまのご参加をお待ちしております。

2018年12月5日(水) 13:00~17:00
大阪大学豊中キャンパス 待兼山会館会議室
<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/access/toyonaka/toyonaka.html>
原宿駅 阪急宝塚線石橋駅 / 大阪モノレール船場駅

★泉南校舎 (豊中キャンパス)
★泉南校舎2 (大阪大学大学院文学研究科 GJプログラム担当教員事務室 (unoda@net.osaka-u.ac.jp)、事務局 (choyoshi@net.osaka-u.ac.jp))

2019年12月20日に「国際日本研究」コンソーシアムとの共催で開催した Graduate Conference in Japanese Studies 2019の詳細は下記の通りである。

GRADUATE CONFERENCE IN JAPANESE STUDIES 2019 Osaka University · Consortium for Global Japanese Studies	
December 20, 2019 Osaka University Nakanoshima Center, Multipurpose Room 607	
Time	Speaker
10:30-10:45	Introductions and Opening Remarks (UNODA Shoya, Osaka University)
10:45-12:30 PANEL #1	
10:45	Crossing Closed Borders In Early Modern Japan: Ishida Balgan and the History of Practical Thought (FUNATO Masaya, Tokyo University of Foreign Studies)
11:20	Kabuki Translated: How English Translations Influenced the Theatre Experience of Foreign Audiences In Modern Japan (KAWAUCHI Yuko, Ritsumeikan University)
11:55	"Grasping the Actual State": Problems In Quantifying Taibatsu at Japanese Schools (Dominik GORKA, Heidelberg University/Osaka University)
12:30-1:30 LUNCH BREAK	
1:30-3:15 PANEL #2	
1:30	The Relationship Between School Bullying and Socioeconomic Status In Japan (SANADA Teruki, Tohoku University)
2:05	Identity and Decolonization: Minority Education at Korean Schools In Japan (CHO Sejin, Osaka University)
2:40	The Role of Fortune Tellers In Contemporary Japanese Society (Alexandra HUMES-YONEYAMA, Sophia University)
3:15-4:00	General Discussion (Ann SHERIF, Oberlin College and INAGA Shigemi, International Research Center for Japanese Studies)

(宇野田 尚哉)

大阪大学文学研究科では、世界に開かれた人文学研究を推進するために、従来の専門分野の枠にとらわれない研究組織として、2014年度より「国際的社會連携型人文学研究教育クラスター（略称：人文学クラスター）」Global Linkage Clusters for Humanities (GLinCH)を創設しました。主要な目的は以下の通りです。(1) 国内外の大学、研究教育機関、学術芸術機関、自治体等と共同して、分野横断的な新しい人文学研究の拠点形成を行うこと。(2) 個別に行われてきた国際的な研究交流を文学研究科が支援するとともに、研究科内に組織化することによって可視化し、個の力を組織の力に高めること。(3) 大学内外の競争的資金を獲得するため、研究実績を積むことによって常に準備体制を整えておくこと。以上の目的のもとに、文学研究科内で募集し選考を経て採択し、2014年度から国内外の大学・研究機関等とのより積極的な共同研究等の研究教育活動を推進しています。

グローバル日本研究クラスター

概要

本クラスターは、大阪大学大学院文学研究科内に2014年度に設けられた「国際的社會連携型人文学研究教育クラスター（Global Linkage Clusters for Humanities）」（略称「人文学クラスター（GLinCH）」）の1つとして、同年度に設けられた。

この「人文学クラスター」は、従来の専門分野の枠にとらわれない研究組織として、(1)国内外の大学、研究教育機関、学術芸術機関、自治体等と共同して、分野横断的な新しい人文学研究の拠点形成を行うこと、(2)個別に行われてきた国際的な研究交流を文学研究科が支援するとともに、研究科内に組織化することによって可視化し、個の力を組織の力に高めること、などを目的としている（http://www.let.osaka-u.ac.jp/ja/research/activities/projects/cluster_h26）。

この「人文学クラスター」の1つとして設けられた本クラスターは、既存の枠組を横断するプロジェクト型の研究組織として、海外の日本研究者と緊密なネットワークを構築しつつ研究教育にあたることで、①本研究科の日本研究のグローバル化と、②本研究科の日本研究領域の大学院教育のグローバル化を図るとともに、③本研究科が日本研究領域の世界的拠点として認知されることを目指して、活動している。

組織・体制

第1期（2014～2016年度）の構成員は、入江幸男、浜渦辰二、舟場保之、三谷研爾、合山林太郎、宇野田尚哉、第2期（2017～2018年度）の構成員は、入江・浜渦・三谷・宇野田のほか、浅見洋二、輪島裕介、山本嘉孝、ヤスコ・ハッサル・コバヤシ、モハンマド・モインウッディンで、代表は、2014年度は入江、2015年度以降は宇野田がつとめている。構成員にドイツ研究者が多いのは、ハイデルベルク大学の日本学研究所との交流を担っていた教員がその実績を踏まえて本クラスターを立ち上げたという経緯があるからであり、そこに中堅・若手の日本研究者が加わることで現在の人員構成となった。グローバル日本研究クラスターは、講座などの既存の枠組を横断するかたちで教員を組織して日本研究に取り組むことにより、国際連携を拡大・深化するとともに国際発信力を強化することを目指している。もともとハイデルベルク大学東アジア研究センター日本学研究所との研究交流を深めていた教員グループの活動が前提となっているため、本クラスターは本研究科のドイツ研究者と日本研究者からなり、同研究所は主要な連携先の1つとなっている。

本クラスターの活動を展開するうえでは、本学の国際共同研究促進プログラムの支援を受けてきた。2018年度には、クリスティーナ・イさんに、このプログラムによる人件費の支援により、特任教員として1ヶ月ほど本学にご滞在いただき、研究・教育に従事していただいた。同プログラムによる人件費支援に、この場を借りてお礼申し上げたい。

活動状況

*所属・職位はイベント開催時のもの

- 2018年5月8日, 若手研究者ワークショップ開催, Ruby de Vos (グローニンゲン大学大学院) 報告, 報告タイトル
“The Power that Remains a Half-Century Later”: Radiotoxic Temporalities and Non-Human Attachments in
From Trinity to Trinity, 高橋進之介 (神戸大学国際人間科学部助教) コメント
- 2018年5月30日, Takuma Melber (ハイデルベルク大学講師) 講演会, 演題 Remembrance of the Japanese
Occupation Period in Singapore
- 2018年6月22日, 高麗大学 BK21 プラス中日言語・文化教育・研究事業団と本クラスターの主催で, 高麗大学青山 MK
文化館において, 講演会を開催。講演者・演題は, Christina Yi (ブリティッシュ・コロンビア大学助教授/大阪大
学大学院文学研究科特任講師) Colonizing Language: Cultural Production and Language Politics in Modern Japan
and Korea, 宇野田尚哉 (本研究科教授) 「言語/文学を脱植民地化する: 解放後在日朝鮮人文学というプロジェクト
1945-1970」
- 2018年6月26日, 国際ワークショップ「[在日文学] 研究の現在 2: 北米の動向と連動して」, Christina Yi (ブリテ
ィッシュ・コロンビア大学助教授/大阪大学大学院文学研究科特任講師) Passing in “Postwar” Japan: On Yi
Yangji’s “I Am a Korean”, 宇野田尚哉 (本研究科教授) 「一斉糾弾闘争」とは何だったのか?: 50年後から考える」,
方政雄 (元兵庫県立湊川高等学校教員) コメント
- 2018年8月3日, 大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスター・「国際日本研究」コンソーシアム共催
国際ワークショップ「海外における日本研究の動向と展望」を待兼山会館会議室にて開催, オーガナイザーは宇野田
尚哉 (本研究科教授)・安井眞奈美 (国際日本文化研究センター教授)。第1部「日本研究の新展開」, 基調講演は金
容儀 (韓国全南大学校教授)「韓国における日本研究の現状と展望—柳田国男・沖繩・日本研究所」, 個別発表は, 金
日林 (国際日本文化研究センター外国人研究員)「「マンガ・アニメ共栄圏」を問い直す」, 第1部コメントは, 北村毅
(本研究科准教授)。第2部は, 「日本研究の最前線」, 個別報告は, ガリア・トドロヴァ・ペトコヴァ・ガブロフ
カ (国際日本文化研究センター外国人研究員) Gender in Traditional Japanese Theatre, セシル・ラリ (国際日本
文化研究センター外国人研究員) From Amusement to Fire Prevention: The Kite Market of Ōji Inari shrine, コ
メントは丸山泰明 (天理大学文学部准教授)。
- 2018年8月22日, 和寧文化社/喫茶美術館 (東大阪市) にて, 若手研究者ワークショップ開催, 李栄鎬 (高麗大学大
学院) 報告, 報告タイトル「1970年代の新しい潮流と在日朝鮮人: 朝鮮文学の会, 李恢成, 『季刊まだん』を手がかり
として」, ジュリア・クラーク (カリフォルニア大学ロサンゼルス校大学院) 報告, 報告タイトル「「人間になるこ
と」: シルヴィア・ウィンター, 宗秋月と「猪飼野文学」の可能性」, 丁章 (詩人) コメント。あわせて鶴橋・猪飼野
フィールドワークを開催
- 2018年10月4日, トークセッション「文学研究における内と外: 日本とドイツの視点から」, ユーディット・アロー
カイ (ハイデルベルク大学教授)・三谷研爾 (本研究科教授) 発題, 伊東信宏 (本研究科教授) コメント
- 2018年12月2日, 大阪大学大学院文学研究科・「国際日本研究」コンソーシアム共催国際シンポジウム Reimagining
Japanese Studies from Asia-Pacific Perspectives 開催, 「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の項参照
- 2018年12月3日, 大阪大学大学院文学研究科・「国際日本研究」コンソーシアム共催 Graduate Conference in
Japanese Studies 2018 開催, 「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の項参照
- 2018年12月5日, 大阪大学大学院高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」主催若手研究者ワー
クショップ開催, 「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の項参照
- 2018年12月17日, 国際ワークショップ「日本研究再考: 東アジアの視点から」開催, 劉岳兵 (中国・南開大学日
本研究院院長)「中国の日本研究再考: 南開大学日本研究の回顧と展望を中心に」, 鄭炳浩 (韓国・高麗大学校日語
日文学科教授)「韓国における日本文学研究の国際化と東アジア」, 宇野田尚哉 (本研究科教授) コメント
(宇野田 尚哉)

グローバルヒストリー研究

概要

世界中の学界で注目されているグローバルヒストリー研究の国際的ネットワークを、世界主要地域の拠点大学と協力して構築し、大阪大学文学研究科をその中心に位置づけることで、日本からの研究面での情報発信と、若手研究者（院生・ポストドクを含む）の活躍の場を創出する。大阪大学における世界史研究に関係した研究者が部局横断的に結集し、研究セミナー・ワークショップや、外国人研究者を招聘した国際会議等を通じて、アジア太平洋地域における研究・教育のハブとして活動することを目標としている。

組織・体制

研究科内に2014年10月に設置された「グローバルヒストリー研究クラスター」（文化形態論5名、文化動態論1名、外国人研究協力者3名）を中心に、同じく2014年に開設された全学的研究組織・先導的学際研究機構（The Institute for Open and Transdisciplinary Research Initiatives: OTRI）「グローバルヒストリー研究部門」（17名で構成する各研究科横断の研究機構）のメンバーと協力して活動している。

文学研究科世界史講座では、従来から、グローバルヒストリーに関して具体的な研究課題を設定し、世界的に注目される業績を蓄積してきた。すなわち、①中央ユーラシア史研究：古代・中世のユーラシア遊牧民・商人の活動を、モンゴル帝国に代表されるアジアの諸帝国の興亡と関連付けて考察する、②海域アジア史研究：中近世から近代初頭の、日本を含む国家間の交渉・相互認識と、商人・通商ネットワークの関係を考察する、③アジア国際経済秩序研究：近代以降のアジア独自の国際経済秩序の形成・発展を、世界システム論の見直しを通じて考察する、以上の三点である。大阪大学は、古代から現代まで一貫して、通時的な世界史研究を行っており、近世世界や近現代史の研究に特化した欧米の他の研究拠点とは異なる長期の時間軸を持ち、日本を含むアジアの観点から、第一次史料に基づいて実証的な研究を展開してきた点で、独自性を有している。我々は、この三群の研究成果をさらに緊密に結びつけて、アジアから見たトータルな独自の世界史像を構築することを目指しており、その際に、旧大阪外大が蓄積してきたアジア地域研究の成果も取りこんでいる。

同時に、「社会学連携」による研究成果の広範な情報発信を通じて、大阪大学における文系部局の研究成果を広めることも重視している。具体的には、毎月一回開催している「大阪大学歴史教育研究会」を舞台に、全国の中等教育の歴史教員、マスコミや教科書会社の関係者等との討議・情報交換・共同企画を通じて、歴史認識・歴史教育に関する問題提起を行っている。

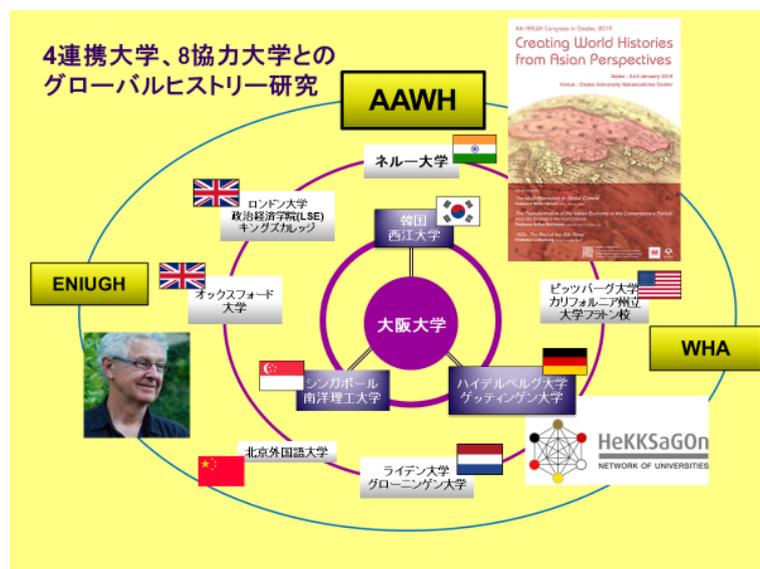
こうしたグローバルヒストリー研究は、歴史学だけでなく、「日本学」(Global Japanese Studies)を含めたアジア地域研究、国際関係論、比較文明論、世界システム論、現代経済論など、多岐にわたる隣接諸領域の研究ともリンクしてくる。このような分野横断的で学際的な性格と、高度な国際的コミュニケーション能力が求められることから、既存の分野や領域を超えて国際的に活躍できる若手研究者の育成も可能になる。

活動状況

具体的には、アジア太平洋地域におけるグローバルヒストリー研究のハブ・ゲートウェイとして、2008年に結成されたアジア世界史学会（The Asian Association of World Historians: AAWH、本部事務局は現在、大阪大学文学研究科）と緊密に連携し、3年に一度の国際会議（2009年：大阪大学、2012年：韓国・梨花女子大学、2015年：シンガポール・南洋理工大学、2018年：当初、中国・東北師範大学で開催予定）を結節点として、アジアで世界史・グローバルヒストリーを研究する学者との連携・交流を強化するなかで、我々が目指す「アジア発の世界史研究」の充実を目指している。

本来なら2018年7月に中国・東北師範大学で開催予定であったAAWH第四回国際会議が、開催校の都合により急遽中止されたため、緊急措置として、2019年1月初頭に大阪大学中之島センターで、代替の第四回国際会議を開催することができた。幸い、20カ国を超える国々から二日間で150名弱の参加者があった。会議の主題は、「Creating World Histories from Asian perspectives」で、古代から現代までを網羅し、「アジアから世界史をどう考えるか」という多様な23のパネルを設定することができた。大会のハイライトである基調講演は、中国経済史の第一人者である北京大学のLi

Bozhong 氏、インド経済史の専門家でありインド歴史学会会長を務めたジャワハルラール・ネルー大学の Aditya Mukherjee 氏、日本からは東大名誉教授で日本の近世・近代史を専門とする三谷博氏の三名をお願いした。会議の詳細は、以下で公開している https://00b483fc-85ef-46ef-82338d864f9ef5e0.filesusr.com/ugd/0b4e0c_97f26b435e614f558d45051c713dd53f.pdf。



定期的に、グローバルヒストリー・セミナー（研究会）を開催している。講師としては、世界の主要大学でグローバルヒストリー研究を展開する研究者を招聘して、英語・日本語で討議を行い、重要な成果については、Working & Discussion Papers として印刷・刊行している（現在、第 21 号まで刊行、同時に website にも掲載して公開）。2018 年度は 10 回、19 年度は 9 回のセミナーを開催した。詳細については、<http://www.globalhistoryonline.com/>（日英二か国語で掲載）を参照していただきたい。

セミナーに加えて、集中的な討議を行うために国際ワークショップも開催している。2018 年 4 月には、大阪大学で開催された第 6 回日独六大学学長会議(HeKKSaGon 2018)と連携し

て、ワークショップ“Global Perspectives on the History of Europe and Asia”を開催した。そこでは、近世帝国を中心とした国際秩序を再考し、ヨーロッパの複合王政論の相対化をめざした‘The Early Modern World from Global Perspectives’と、第二次世界大戦をはさんで戦間期から戦後のアジア国際秩序の再考を目指した‘The Twentieth-Century Transformation of the International Order of Asia in the 1930s^1950s’の二つのパネルを設定し、ハイデルベルク大学、ゲッティンゲン大学、京都大学、東北大学の研究者と共に、17 世紀および 20 世紀の世界史解釈の見直しを行った。さらに、次回の HeKKSaGon 会議に向けて、ドイツ側の二大学との共同研究に着手することで合意を得た。

本クラスターが力を入れているもう一つの柱である「歴史教育のグローバル化」に関しては、2019 年 8 月に、日本学術振興会グローバル展開プログラム「国民国家型の大学歴史教育をグローバル時代に適応させる方法に関する国際比較」（堤一昭代表）と提携して、国際会議“Globalizing University History Education : Diversity, Trans-borders and Intersectionality”を開催した。特にこの会議では、(1)日本・韓国・中国・ベトナムの東アジア諸国に共通して見られる大学教育の特徴と、その探求型学習への転換の試み、(2)拠点指定大学（大阪）、地方国立大学（静岡）、有力私立大学（立命館）、および韓国・東北アジア歴史財団における、類型のそれぞれ異なった世界史教育の相互比較と協力の可能性、(3)デジタル・ヒストリ、パブリック・ヒストリーと歴史教育の関係性、の三項目を重点的に議論することができた。

また本クラスターでは、OTRI グローバルヒストリー研究部門と協力して、OTRI 等の予算で大阪大学に招聘された外国人特任教授とも連携して、研究教育活動を展開した。2018 年度は、アメリカ・カリフォルニア州立大学フラトン校・歴史学部教授の Sun Laichen 氏、2019 年は、アメリカ・テキサス大学サン・アントニオ校特任教授の George Bryan Souza 氏の 2-3 か月にわたる滞在をフルに利用して、近世以降の海域アジア史を中心とする共同研究を継続した。Laichen 氏からは、AAWH 第四回会議を急遽大阪で開催するに際して、中国側関係者との緊急連絡や、台湾を含めた中国語圏からの新たな参加者の勧誘に関して多大な協力を得た。また、Souza 氏には、若手の現役院生を対象とする個人的チュートリアル（個人指導）に加えて、懸案であった海域史の比較研究の英語論文集刊行に向けて、投稿されてきた 9 本の論考に対する Peer review と助言をお願いし、最終的に Palgrave 社との交渉に持ち込む準備作業を終えることができた。

文学研究科を中心とするグローバルヒストリー研究クラスターは、今後とも、アジア太平洋地域における新たな世界史、グローバルヒストリー研究のハブとしての役割を果たしていきたい。

（秋田 茂）

比較デザイン学クラスター

概要

比較デザイン学クラスターは、広い意味のデザインとして、工芸・衣服・家具・展示・建築・景観・広告・印刷・映像など、人間の創造活動全般にかかわる比較研究を進めてきた。本研究プロジェクトのねらいは、以下の点から、人文学の新たな展開のしかたを模索することにある。① デザイン研究をとおした諸学の総合：デザインとは〈学問〉の知見をもちいて〈芸術〉の創意によって課題にあたらうとする総合的な創造活動である。デザインの実践は、人文科学・社会科学・自然科学のどれにも通じており、当然と思われていたことに反省をうながしたり、思ってもみない解決を導こうとする点において、現代アートの力を必要とする。文系学者によって展開されるデザイン研究は、デザインの歴史を明らかにするだけでなく、社会のかかえる諸問題にたいして、文化的な観点から様々な可能性を示唆できる。デザイン研究をとおして、文理融合の領域が切り開かれるとともに、学問がさまざまな技芸（アート）が結びつくことで新たな次元が見い出される。② 変化する美術館との連携：現代の美術館は、絵画彫刻のみならず、建築文化を紹介したり、ポスターから工業製品まで身近なものに新たな見方を加えたり、アニメーションの特集を組んだり、ヴァーチャルリアリティの空間をつくったりと多元化している。世界各地においてデザインミュージアムが新設されている。美術館のほう学問に先んじて現代の傾向をとらえている場合が多いなかで、人文系のデザイン研究もまた新たな話題を提供できる。③ 産業との連携：デザイン研究は、美術館で展示される芸術作品だけでなく、量産されて一般に流通している工業製品や、各種メディアの広告などもあつかう。デザイン研究は、産業にイノベーションのヒントをあたえることができる。

比較デザイン学クラスターは、アジアデザイン史学国際会議の実施にかかわってきた。2015年の大阪大学での会議に始まり、2017年に津田塾大学で開催され、2019年に九州産業大学で開催された。回を重ねるごとに、日本の研究者が参加しやすい国際学会として定着しつつある。2018年度において、比較デザイン学クラスターは次の活動をおこなった。① 中之島エリアの美術館との連携：東洋陶磁美術館において授業を行い（2018年7月11日・11月14日）、同美術館と上記のシンポジウム企画した。2021年に開館予定の中之島美術館はこれまで家電製品にまつわる情報や、近代日本の広告資料などの保存整理をおこなっており、将来デザインミュージアムの機能をなうことが期待されている。そこで、2018年4月13日・10月16日に大阪中之島美術館準備室のデザイン担当者に聞き取り調査および企画相談をおこない、2018年12月12日に同準備室の平井直子氏を招いて公開研究会をおこなった。② 地域デザイン研究への協力：大阪では、1960年代頃まではデザイン活動が活発で、今日の標準（スタンダード）となるような多くの製品が生み出されていた。そこで、2018年3月20日に藤本英子教授（京都市立芸術大学）と「大阪発デザイン研究会」を開始するとともに、ヤンマー（2018年12月17日）クボタ（2019年2月3日）モリサワ（2018年12月20日）の関係者に聞き取りを行ない、芸術工学会の特別冊子にて成果を公表した。③ 雑誌特集の企画：学術雑誌『a+a 美学研究』13号を2019年3月に刊行した。本号では特集「デザイン新潮流」を組んで、現代のデザイン状況にかかわる諸論考を公表した。

組織・体制

高安啓介 | 大阪大学大学院文学研究科 | 美学・デザイン思想史

田中均 | 大阪大学大学院文学研究科 | 美学

橋本順光 | 大阪大学大学院文学研究科 | 比較文学

土田耕督 | 大阪大学大学院文学研究科 | 美学

協力・連携

東洋陶磁美術館 大阪中之島美術館準備室

活動内容

2018年3月20日：大阪デザインセンター SEMBAにおいて「大阪発デザイン研究会：生活のスタンダードをつくった大阪人」を開催した。大阪で活躍したプロダクトデザイナーである吉川博教氏が「世界仕様の Cutter ナイフ 誕生秘話」について報告を行い、学者・デザイナー・行政担当者を含む参加者9名が、戦後の大阪のデザイン史について意見交換を行い、今後の研究の方向について話し合った。

2018年12月9日：第2回比較デザイン学研究会（シンポジウム）「現代アートと古陶磁との出会い」を東洋陶磁美術館と共同で企画した。同美術館において「オブジェクト・ポートレート：エリック・ゼッタクイスト展」が開催されるにあたり、作者ゼッタクイスト氏とともに一般参加者をまじえながら陶芸の東西交流などについて意見を交わした。

2018年12月12日：第3回比較デザイン学研究会「大阪中之島美術館 と デザイナーアーカイブ」を豊中キャンパスでおこなった。大阪中之島美術館準備室の平井直子氏をまねいて、デザイン資料をもちいてどんな研究ができるのか、調査研究をどのように展示へと展開していけるのか、参加者と意見交換をおこなった。

2019年3月31日：雑誌『a+a 美学研究』特殊号「デザイン新潮流」の発行。北村仁美（東京国立近代美術館）「3Dプリンタ時代の工芸家像」、田中均（大阪大学文学研究科）「デザイン哲学の陥穽：スローターダイクにおける〈島化〉と〈泡塊〉」など。

（高安 啓介）

アーツ&リサーチ

概要

クラスター「アーツ&リサーチ」は、設立初年度から文化庁による「大学を活用した文化芸術推進事業」と不可分な関係にあり、その事業を補完する形で活動してきた。すでに2013年度からこの文化庁の助成金による事業はスタートしていた（「〈声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声〉芸術祭」のプログラムが3年間続いた）が、2016年度には「記憶の劇場」（大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成事業）として大阪大学学術博物館の主催、文学研究科共催として活動するようになった。これらについては、この年報の中でも、クラスター報告の中で、その都度報告してきたが、ここでは上記プロジェクトの活動全体の成果のうち、本報告書の対象であり、しかも文学研究科のクラスター事業「アーツ&リサーチ」として活動した2018年度（「記憶の劇場 III」）について記す。

なお、2019年度については文化庁助成による事業は、クラスター事業とは切り離されたが、「〈微しの上を鳥が飛ぶ〉文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム」として新たな展開を見せ、現在に至っている。タイトルからも明らかなように、この事業については文学研究科が主催となっていることを付記しておく。

組織・体制

上記事業は、主として社会人から成る受講生を中心として進められる。クラスターとしての活動には文学研究科から次の構成員が関わった。

クラスター構成員名	所属・専門領域
文学研究科	
永田靖	演劇学
伊東信宏	音楽学
渡辺浩司	文芸学
古後奈緒子	アートメディア

また、事業全体については、下記の事業担当者、および各連携機関からのアドバイザーに参画していただいた。

	所属・専門領域
博物館	
橋爪節也	大阪大学総合学術博物館／日本美術史
上田 貴洋	大阪大学総合学術博物館／化学
伊藤 謙	大阪大学総合学術博物館／生薬学
横田 洋	大阪大学総合学術博物館／演劇学
山崎達哉	大阪大学総合学術博物館／芸術祭事務局
連携機関アドバイザー	
石橋 隆	公益財団法人益富地学会館
松田正弘	能勢町立浄るりシアター
尾西教彰	兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）
古矢直樹	吹田市文化振興事業団（吹田メイシアター）
菅谷富夫	大阪新美術館建設準備室
宮地泰史	あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
本山昇平	豊中市都市活力部文化芸術課

活動内容

活動は、2016、17年度に引き続き、社会人や学生などから受講生を募り、その受講生が主体となって、各事業を展開し、各年度末には博物館で行われる展覧会「記憶の劇場」の企画運営を行い、そのような経験を通じて人材育成をはかる、というものである。年度の終わりには、所定の条件を満たした受講者に修了証が手渡される。2018年度には36名を受講生として迎え入れ、27名を修了生として認定した。2018年度については、下記のような活動が展開された。

2018年度

第1期「記憶の劇場 III」オープニング講座

第2期 活動

- 1) セミナー「関西のアートシーンと将来」・博物館オリエンテーション
- 2) 地域文化の研究による発信・顕彰とメディアリテラシー
- 3) 自然科学に親しむ・触る・アートする - 身のまわりの鉱物 -
- 4) モノログ・オペラ『新しい時代』上映会の制作
- 5) パフォーミング・ミュージアム Vol.3「関西新劇」の展示と上演
- 6) TELESOPHIA と芸術・文化・生活
- 7) ドキュメンテーション／アーカイヴ

第3期 展覧会「記憶の劇場 III」

2018年度では、プログラムは上記の通り、第1期、第2期、第3期の三つに区分された。第1期はオープニング講座として全体の概観と内外の芸術系公共施設やミュージアムの問題についてセミナーを行った。第2期はそれぞれの活動ごとに演劇公演、オペラの上映会、展覧会、ワークショップ、冊子の作成、記録作成、など多種多様な事業を展開するものであった。下にそのうちの一部を挙げる。

- 森本薫と『女の一生』展、ピッコロシアター、2018年12月4日～15日。
- 『まだまだ生きてみる』上演、メイシアター、2019年1月31日、2月1、2、3日。
- 大阪の水の回廊体験 I、株式会社140B 会議室、船上見学（大阪港～大正区）、2018年9月1日。

- 『廻り神楽』『海の産屋 雄勝法印神楽』上映会、神戸映画資料館、2018年10月7日、8日。
- 浄瑠璃の里、能勢浄瑠璃公演、能勢浄るりシアター、2018年10月20日。
- プレトークとモノログ・オペラ『新しい時代』上映会。2018年11月15日豊中市立文化芸術センター、11月24日ゲーテ・インスティテュートヴィラ鴨川、12月22日神戸アートビレッジセンター。
- 展覧会『石を感じる～ memory × sense ～』、京都造形芸術大学春秋座前展示スペース、2019年1月15日～27日。

そして第3期にはクロージング・エキジビションとして「展覧会-記憶の劇場 III『前田剛志展 - 明日の記憶』」が、大阪大学総合学術博物館において開催された（2019年2月26日～3月9日）。これは2016-17年度とは異なり、美術家・前田剛志を招き、展覧会そのものを受講生と作家と一緒に作り上げる、というものだった。前田は上記のような「記憶の劇場 III」の諸活動にできるだけ参加し、自らの創作に反響させ、受講生はそれを受け止めて展覧会の企画を考え、結果的には記憶の劇場 III の諸活動を紹介するブロックの他に、前田の4つの作品が展示されるという構成となった。

なお、2016～18年度の3年間の「記憶の劇場」プロジェクトについては、大阪大学社学共創叢書3『記憶の劇場：大阪大学総合学術博物館の試み』（永田靖・山崎達哉編、大阪大学出版会、2020年）として詳細な報告が刊行されている。

クラスター「アーツ&リサーチ」は、上記事業全体の実現にとって不可欠なものとして機能した。

(伊東 信宏)



役割語・キャラクター言語から見た翻訳研究

概要

役割語・キャラクター言語研究は、主としてフィクションの会話に現れる、話し方の様式と話し手の人物像のステレオタイプな、あるいは個別作品的な結びつきを研究するものである。この計画では特に、日本語と他言語との間の翻訳に焦点をあて、役割語・キャラクター言語研究がいかに翻訳の質的向上に寄与するかという点を明らかにしていく。具体的には、「村上春樹翻訳調査プロジェクト」を推進していくものである。文学研究科の外国文学の教員も糾合しつつ、高度な日本研究の一端を担っていく。

組織・体制

金水敏（国語学）をチーフとし、学内の教員として岡島昭浩（国語学）、斎藤理生（日本文学）、新井由美（日本文学、2017年度まで）、橋本順光（比較文学）、小橋玲治（比較文学、H29年度まで）、浅見洋二（中国文学）、山上浩嗣（フランス文学）、三谷研爾（ドイツ文学）、服部典之（イギリス文学）、中尾薫（演劇学）、石割隆喜（アメリカ文学）、麻子軒（招へい研究員、2018年度より）がメンバーに加わった。

また、学外の協力者として、山木戸浩子（藤女子大学）、河崎みゆき（國學院大學）、曾秋桂（台湾・淡江大学村上春樹研究センター長）、岡本能里子（東京国際大学）に参加いただいている。

活動状況

2018年度は、下記のような活動を行った。

1 役割語研究会

下記の日程で実施した。

2018年5月29日、6月6日、7月28日、10月31日、2019年3月17日

2 学会・研究会等での講演・研究発表

- 金水 敏 (2018/4/21)「関西人のコミュニケーションのイメージと実態」プロジェクトマネジメント学会(PM学会)関西支部 平成30年度春季シンポジウム、マイドームおおさか 8階 第1・2会議室
- 金水 敏 (2018/4/27)「～フィクションのことばいろいろ～役割語を中心に」豊中市中央公民館
- 金水 敏 (2018/5/26)「基調講演2『騎士団長殺し』騎士団長の「あらない」再考」2018年第7回村上春樹国際シンポジウム、村上春樹研究センター(主催)、淡江大学守権国際会議センター
- 金水 敏 (2018/5/29)「『騎士団長殺し』騎士団長の話し方について」役割語研究会、大阪大学豊中キャンパス文法経研究講義棟 文11教室
- 金水 敏 (2018/8/3)「「役割語」って何だ?」すぎなみ大人塾総合コース「コトバ・ラボ」、東京都杉並区育委員会事務局社会教育センター、セシオン杉並2階 視聴覚室
- 金水 敏 (2018/8/18)「発話によってキャラクターを表現する-役割語・キャラクター言語の漢日対照研究と翻訳-」第10回中日対照言語学シンポジウム、中日対照言語学研究(協力)会(主催)、蘇州大学敬賢堂
- 金水 敏 (2018/9/21)“Role Language, Character Language and Structure of Fiction,” Festival: Japanska språket i popkultur (Popular Culture Festival), Göteborgs Universitet (ヨーテボリ大学)
- 金水 敏 (2018/9/29)「講演「日本の大衆文化・大衆芸能の発達と役割語について」兵庫教育大学言語表現学会・平成30年度第2回研究発表会、兵庫教育大学 共通講義棟
- 金水 敏 (2018/10/31)「日本の大衆文化・大衆芸能の発達と役割語について」役割語研究会、大阪大学豊中キャンパス文法経済学教育研究棟・文11教室
- 金水 敏 (2018/11/30)「日本語の役割語・キャラクター言語研究と翻訳」inalco(フランス東洋言語文化大学)
- 金水 敏 (2019/2/9)「都市の美を考える会：座学「言葉から見た街。」都市の美を考える会、DAS(一般社団法人総合デザイナー協会)(主催)、長堀安田ビル(6階会議室)
- 金水 敏・高島幸次(2019/3/30)「SPレコード音源に聞く明治・大正の上方落語」Handa-Asahi 中之島塾、大学21世紀懐徳堂・朝日カルチャーセンター(主催)、大阪大学中之島センター
- 3 書籍・論文等
- 金水 敏 (2018)「魅惑するナカタさんワールド」沼野充義(監修)・曾秋桂(編集)『村上春樹における魅惑』pp.43-60、淡江大学出版中心
- 金水 敏 (2018)「キャラクターとフィクション-宮崎駿監督のアニメ作品、村上春樹の小説をケーススタディとして」定延利之(編)『「キャラ」概念の広がりと深まりに向けて』pp.64-83、三省堂
- 金水 敏 (2018)「小説における仮名の-用法と翻訳-村上春樹作品を例に-」『ことばと文字』10:83-89、発行所：公益財団法人日本のローマ字社、発売所：くろしお出版
- 金水 敏・田中ゆかり・児玉竜一(共編)、協力・執筆：吉川邦夫・大森洋平、編集協力：林直樹(2018)「時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる!：世界観を形作る「ヴァーチャル時代語」」笠間書院
- 金水 敏(編著)(2019)『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(2)』大阪大学大学院文学研究科(人文学クラスター「役割語・キャラクター言語から見た翻訳研究」大阪大学リポジトリ
- 5 WEBマガジン等
- 仲野徹・金水 敏・くまざわあかね(2018/4/27)「特別企画 対談：金水 敏×仲野 徹(構成：くまざわあかね)「祝!五代目吉田玉助襲名」(2018年4月15日第1部『本朝廿四孝』「襲名披露口上」『義経千本桜』観劇)、国立文楽劇場・かんげき日誌、<https://www.ntj.jac.go.jp/bunraku/diary/30/1697.html>
- 金水 敏(2018/5/22)「〈役割語〉トークライブ! 第1回「役割語って何? 私たちはどうやって役割語の知識を得るの?」」研究社WEBマガジン Lingua(リング)、<http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/lingua/prt/18/yakuwari1805.html>
- 金水 敏(2018/6/20)「〈役割語〉トークライブ! 第2回「役割語とキャラクターの悩ましい関係(1)」」研究社WEBマガジン Lingua(リング)、<http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/lingua/prt/18/yakuwari1806.html>
- 金水 敏 2018年7月23日 〈役割語〉トークライブ! 第3回「役割語とキャラクターの悩ましい関係(2)」

研究社 WEB マガジン Lingua (リング)、

<http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/lingua/prt/18/yakuwari1807.html>

金水 敏・田中ゆかり (2018/12/27) 「読み解き方言キャラ ヴァーチャル日本語 平成最後の！ 金水×田中の年忘れ&新春対談 (年忘れ編)」研究社 WEB マガジン Lingua (リング)、

<http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/lingua/prt/18/hougen1812.html>

金水 敏・田中ゆかり (2019/1/21) 「〈役割語〉トークライブ！ ヴァーチャル日本語 平成最後の！ 金水×田中の年忘れ&新春対談 (新春編)」研究社 WEB マガジン Lingua (リング)、

<http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/lingua/prt/18/yakuwari1901.html>

金水 敏・田中ゆかり (2019/1/21) 「読み解き方言キャラ ヴァーチャル日本語 平成最後の！ 金水×田中の年忘れ&新春対談 (番外編)」研究社 WEB マガジン Lingua (リング)、

<http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/lingua/prt/18/hougen1901.html>

金水 敏 (2019/2/22) 「〈役割語〉トークライブ！ 第10回「キャラクターを役割語で読み解くフィクション」(1)」、研究社 WEB マガジン Lingua (リング)、

<http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/lingua/prt/18/yakuwari1902.html>

金水 敏 (2019/3/23) 「〈役割語〉トークライブ！ 第11回「キャラクターお役割語で読み解くフィクション」(2)」、研究社 WEB マガジン Lingua (リング)、

<http://www.kenkyusha.co.jp/uploads/lingua/prt/18/yakuwari1903.html>

(金水 敏)

2018年度 クラウドファンディング 古墳の価値を未来に

— 野中古墳出土品の3D計測プロジェクト —

目的と概要

2018年度のクラウドファンディングによる「古墳の価値を未来に一野中古墳出土品の3D計測プロジェクト」は、大阪大学社会学部によるプログラムの一環として、文学研究科の考古学研究室が応募する形で取り組んだ事業である。形態としてはクラウドファンディングサイト Readyfor にて、事業に要する資金を寄付の形で集める試みであり、大阪大学全体としての取り組みとしては当該年度が初めてのものではあった。初回の事業として立ち上げられたのは、本事業も含めて3件であった。このプロジェクトの代表者は考古学の高橋照彦が務め、上田直弥助教の全面的なバックアップのもとで、研究室の全面的な協力を得てクラウドファンディングの呼びかけに当たった。もともとの事業名称は『「百舌鳥・古市古墳群」出土品の3D計測とその成果の国際発信』というもので、より親しみやすい呼びかけを目指して、クラウドファンディングのプロジェクト名としては先のを掲げた。

事業の経緯を簡単に説明すると、「百舌鳥・古市（もず・ふるいち）古墳群」は2019年にユネスコの世界文化遺産に登録されたが、本プロジェクトはその登録直前の時期に企画したものである。百舌鳥・古市古墳群を構成する古墳などを調査してきた大阪大学の考古学研究室では、所蔵資料をもとに様々な取り組みを行ってきたが、この事業ではサビの進行など資料保存の上での危険を伴う鉄製の出土品を主な対象として、最新の3D（3次元）計測を試みることで、現状を正確に記録するとともに、そのデータを見やすい形で映像化してホームページで公開することを目指した。

このような3Dデータの蓄積は、手に取って観察することが難しい出土品に対しても、必要に応じて、あらゆる方向から部分拡大もしながら精密に観察ができるという点で、研究資料データとして大きく資するものである。それとともに、多くの方々に映像化した成果をHPなどでご覧いただくことで、歴史的な資料を実感してもらうためにも有益なものと考えた。具体的な3Dの対象は、さしあたり「百舌鳥・古市古墳群」内で大阪大学が発掘調査した重要文化財の野中古墳出土品のうち、まずは甲冑（よろい・かぶと）を選択した。

なお、事業の詳細やクラウドファンディングに当たっての補足説明などは、以下で閲覧できるため参照願いたい。

<https://readyfor.jp/projects/handainonaka>

成果と将来

このクラウドファンディングは、目標金額に達成した場合のみ寄付を受けることのできる仕組みであったが、多くの方々からのご支援のおかげで、目標金額をかなり超える額の申し出があり、無事にこのプロジェクトが成立し、その事業も具体的な実施に移行できた。この場を借りて、ご協力をいただいた皆様に改めて深甚の謝意を申し上げたい。

目標額に達した後の具体的な事業は、奈良国立博物館の鳥越俊行氏、中川あや氏、吉澤悟氏、鹿児島大学総合研究博物館の橋本達也氏など多くの方々のご協力を得て、現在もさまざまな活動を推進しているところである。2020年度初めの段階では、野中古墳出土の甲冑のうち破片類を除くほぼすべての資料について、CTスキャンにより金属部分の断面も含めた詳細な3Dデータを取得することが完了した。現在、そのデータの整理と加工の作業に移っており、その成果の公開にはいましばらくの時間を要するが、今後はHPでの公開を目指している。

考古学研究室では、以前より研究室予算や様々な補助金により所蔵資料の保存修復活動を続け、またそれらの展示による公開や図録の刊行、シンポジウムの開催などの活動を行ってきた。そのような所蔵文化財をさらに活用するために、今後のさらなる願いは大学博物館などにおいて常設展示することである。大学全般が厳しい財政状況にあるなかで、一朝一夕にはかなわない現況ながらも、今後も資料活用に向けて様々な方策を模索していきたい。

(高橋照彦)

「徴しの上を鳥が飛ぶ」 文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム

目的と概要

本プログラムは、大阪大学大学院文学研究科を主な舞台として、大阪大学社会学共創本部、大阪大学総合学術博物館と共同し、近隣地域の劇場・音楽堂・美術館等と連携して、主として社会人のためのアートマネジメント人材育成プログラムを推進することを目的として、開催している。

今日のアートに求められているものは、共同体や社会の中で自己実現を果たすための媒介としての役割、人々の繋がりを強固にする紐帯、忘れられがちな記憶を鮮明にし価値を変換する装置としての役割など多岐に渡る。それらを実現し推進していくアートマネジメント人材には、アートを展開する場や共同体の特性に応じて、臨機応変に対応していく実践的な能力（「アート・プラクシス」の力）が求められる。さらに、アートには、近隣の地域社会からグローバルな社会、アーティストと一般市民が集い多様な生を実現していく、といった現代的な課題解決方法も求められている。そのためアートやアートマネージャーには、アート・プラクシス能力（アートを展開する場の特性に応じて、臨機応変に対応していく能力）を発揮できる人材が必要とされている。本プログラムでは、人文学的な知見を活用しつつ、アート・プラクシス能力を発揮できる人材を育成することをねらいとして、2019年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」に申請し、採択された。本プログラムは、3年計画のもので、2019年度は準備期間と位置づけ開催した。なお、令和2（2020）年度も、「徴しの上を鳥が飛ぶ」の採択が決まっており、プログラムを開催予定である。

この事業は、大阪大学大学院文学研究科が主催し、大阪大学社会学共創本部、大阪大学総合学術博物館と共催して推進するプログラムである。文学研究科芸術系ブロックと総合学術博物館の教員が中心になり、兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）、大阪中之島美術館準備室、あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール、公益財団法人吹田市文化振興事業団（メイシアター）、浄るりシアター、豊中市都市活力部文化芸術課といった芸術諸機関と連携して実施した。また、それらの芸術諸機関からアドバイザーを迎え、事業担当者とともに「文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム協議会」を組織し、プログラム全体を監督し、評価に努めた。「文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム協議会」は、会議にて、アドバイザーから具体的で専門的な助言をうけた。

本プログラムでは、アート・プラクシス人材育成のために、基礎的セミナーやインターウィークの学習、滞在制作（アーティスト・イン・レジデンス）の実践などを通して学習機会を設けた。

基礎的セミナーやインターウィークの学習、滞在制作（アーティスト・イン・レジデンス）の実践などを通して学習機会を設けた。プログラムを基礎から応用まで階層的に学べるよう1年を3期にわけ、[第1期]基礎レクチャー、[第2期]アートの事前・事後双方の扱いを学ぶ「インターウィーク」、[第3期]外国人アーティストの招へいと滞在制作（アーティスト・イン・レジデンス）、とした。第1期では、基礎的なアートマネジメントや文化政策についてのレクチャーを提供した。第2期では、1)対立と調停、2)アイデンティティの揺れ、3)物語の領分、の3つのテーマについて、ダンス・演劇、音楽、美術といった様々なジャンルのアート作品を通し学習した。学習の過程においては、アーティスト自身との対話の時間を設け、アート作品やアーティストへの理解を深めた。滞在制作では、第1期・第2期のプログラムで学んだことを具体化しつつ作品公開を進めた。本プログラムでは、アート実践を地域社会に深く根付かせていくために、事後の「ポスト・プロダクション」を学んだ。このように、「アート・プラクシス」の力を養った、今日的で未来的なアートマネジメント人材を、文学研究科における研究基盤との接合により、新しく生み出していくことを目標とした。研修の受講



者は、芸術系諸機関で働く人々や働くことを希望する社会人などを中心に広く公募し、29名を受講生として受け入れた。受講生が受講した研修科目は、以下の通り。

活動①「〈徴しの上を鳥が飛ぶ〉オープニング・セミナー」

7月20日に大阪大学にて、オープニング・セミナーを開催した。このセミナーは、本事業全体のオリエンテーション、各事業担当者による講義から構成された。このセミナーによって、アートを展開する場や共同体の特性に応じて臨機応変に対応する実践的な「アート・プラクシス」能力について学ぶとともに、アートを活用した課題解決方法、作品観賞後に行うアーティスト・トークや、ディスカッション、シンポジウム、アフタートーク等の「ポスト・プロダクション」の運営について知った。また、オープニング・セミナーの一環として、大阪大学と包括協定を結んでいる大阪府豊能郡能勢町にある伝統芸能である能勢人形浄瑠璃についてレクチャーを行い、実際の上演（「能勢人形浄瑠璃鹿角座公演」）を観賞した。

活動②「〈徴しの上を鳥が飛ぶ〉連続レクチャー」

「文化政策の未来と問題点」、「アートマネジメントの理論と実践」、「アーティスト・イン・レジデンス等のアートの実際」の3つのカテゴリーからなる全9回のレクチャーを開催した。これらのレクチャーで、文化行政、マネジメント理論、マネジメントの実際、アートの現場、アーティスト・イン・レジデンスの実際などについて学んだ。行政、財団、研究者、アートマネージャーなど、様々な分野においてアートに関わる実践者を招き、アートの現場の実際の声を聞いた。様々な分野からの現場の声を集めることで、アートにおける最先端の情報を得ることができた。

活動③-1「対立と調停（演劇・ダンス）「メディアとしての身体」

アートに携わる仕事の一つの側面に、価値の変動に関与するということがある。この講座では、その積極的で倫理的なあり方を考えるため、京都国際舞台芸術祭（KYOTO EXPERIMENT）に学んだ。そのプログラムのひとつ、チョイ・カフアイ『存在の耐えられない暗黒』を鑑賞し、終演後にはアーティスト本人とトークセッションを設けた。トークセッションでは、作品や作家自身についての説明や質疑応答を通して、作品理解を深めることができた。

活動③-2「対立と調停（音楽）「ちんどん音楽と広告宣伝」

かつて「歩く広告塔」として活躍したちんどん屋は現在ではほとんど見かけなくなったが、まだまだ需要はあり、活躍しているちんどん屋も存在している。本講座では、芸人として差別をうけながらも観客を楽しませてきたちんどん屋の歴史や実態などをちんどん通信社による実演やレクチャーを通して学習した。また、講座の後には、大学から近隣の石橋商店街へパレードを行い、受講生はパレードに参加し、実体験をもってちんどん屋の芸を経験した。

活動③-3「対立と調停（美術）「アートの力が戦争と平和の問題を掘り起こすー四國五郎の世界ー」

大阪大学総合学術博物館の第13回特別展、画家・挿絵画家・絵本作家・詩人として活躍した四國五郎の展覧会を鑑賞した。四國五郎は、絵画と詩を描きながら、広島を拠点にして戦後の平和運動を推進した作家である。本講座では、展覧会やレクチャーで、四國五郎の活動を知るとともに、作品や作風を通して、四國五郎の思想などを考察した。また、四國五郎のご子息・四國光氏の公演と展示解説を受けることができ、一層作品への理解を深めることができた。

活動④-1「アイデンティティの揺れ（演劇・ダンス）「潮州歌劇を考える」

シンガポールの中国語の方言のひとつである潮州語を使う陶融儒楽社は、1931年に始まったグループである。第2次大戦中に一度活動停止を余儀なくされるが、戦後すぐに復活し、ふたたび流行して今日に至っている。本活動では、上演と、Chua Soo Pongによるレクチャーを行った。中国の古い伝統的な価値観、インド文化との共存というシンガポールの文化的状況など、単一ではない文化的アイデンティティを、陶融儒楽社を通して学習した。

活動④-2「アイデンティティの揺れ（音楽）「バックステージセミナー1」

音楽公演の制作の前提となる、創作者、演奏者の考え方や、生理を知ることが目的として、音楽公演の内面や裏側を

幅広く体験することを目指した。ヘーデンボルク・トリオによる演奏会『ウィーンの情熱プレコンサート』を焦点とし、演奏会の鑑賞だけでなく、事前レクチャーとリハーサル見学、演奏者へのインタビューも行った。世界的レベルの演奏家たちと日本語で直接コミュニケーションができるという稀有な機会により、考え方を深く知ることができた。

活動④-3 「アイデンティティの揺れ（美術）「モダニストMの新しいプロジェクトー森村泰昌との対話ー」

大阪・北加賀屋に美術家・森村泰昌の美術館（M@M（モリムラ@ミュージアム））を訪問した。アートやアート作品における自律性やアイデンティティについて、森村泰昌本人による展示解説やレクチャーを受けた。展示解説やレクチャーの後に実際の展覧会を鑑賞することで、アート作品におけるアイデンティティの揺れの表象について学習した。

活動⑤-1 「物語の領分（演劇・ダンス）「現代の身体と伝統の物語」

2019年10月12日に、伊丹市立演劇ホールアイホールで上演された劇団エイチエムピー・シアターカンパニーの作品『忠臣蔵・破 エートス/死』（くるみざわしん作、笠井友仁演出）を鑑賞し、上演後のレクチャー（アフター・トーク）を受けて、演出家の考え方や作品の意義について学んだ。受講生は、現代においていかにアートを活用して、古典作品を再生させ、現代社会と向き合うのかを学び、また、演劇が抱える課題解決の方法論を知ることができた。

活動⑤-2 「物語の領分（音楽）「バックステージセミナー2」

2019年10月26日（土）の郷古廉、加藤洋之による演奏会「土と挑発」を対象にし、事前レクチャーとパフォーマーとの対話を行った。事前レクチャーでは、2人の演奏家のこれまでの背景や今回の演奏会の意味、さらに演奏予定の各曲の背景などを説明した。実際に演奏を聴いた後に、特別に時間を設けて受講生に演奏家二人とのインタビューを行なった。なお、この演奏は高く評価され、令和元年度（第74回）文化庁芸術祭大賞（音楽部門）を受賞した。

活動⑤-3 「物語の領分（美術）「なにわ舟遊 ODYSSEYー大大阪の幻影をエコ・ミュージアムに探るアートの旅ー」

社会に開いた新しいミュゼオロジー（museology）の探究として、「地域全体をミュージアム」と見なす「エコミュージアム（Ecomuseum）」を、水都大阪をモチーフに模索した。受講生は乗船ツアーによる研修によって、大阪という都市が水と密接に関わっており、さらに様々な側面を持つということを学んだ。

活動⑥ 「滞在制作（アーティスト・イン・レジデンス）」

プログラム全体として総括的な滞在制作（アーティスト・イン・レジデンス）を行った。韓国より、劇作家・演出家であるソン・ギウンを招へいし、大阪に滞在しつつ、演劇作品を制作し、公開した。受講生は、この演劇作品『外地の三人姉妹』に出演、あるいは制作などで参与した。数回のレクチャーと、稽古や学習の機会に参画することで、受講生はアーティストと交渉をし、一般社会へ作品を発信する方法を学んだ。また、上演終了後には、受講生有志による「記録冊子作成班」が組織され、冊子を作成した。上演に向けた作品制作により「アート・プラクシスの力」を養い、作家との交流による「インターヴィュー」、冊子作成による「ポスト・プロダクション」などを行うことで、本事業の理念・コンセプトを受講生自らが経験、実現することができたといえる。

活動⑦ 「ポスト・プロダクションツアー」

徳島県の神山町では、長きにわたりアーティスト・イン・レジデンスを行ってきており、世界中から注目されている。この、神山町におけるアーティスト・イン・レジデンスの運営を視察し、作品の鑑賞と解説を通じて、アーティスト・イン・レジデンスの現状を学んだ。また、神山アーティスト・イン・レジデンス実行委員会との対話では、展示終了後の作品保管やアーカイヴの発信方法などについても議論がなされ、有意義なツアーとなった。

活動⑧ 「〈傲しの上を鳥が飛ぶ〉クロージング・シンポジウム」

全体の締めくくりとして、シンポジウム「受講生の成果発表」を行う予定としていた。シンポジウムは司会、パネラーを受講生の有志から募り、本年度の事業の企画運営の成果や問題点を明らかにし、ディスカッションで本事業の目的と結果を検証することで次年度の本事業の内容を豊かにすることを目的としていた。シンポジウム開催に向けて、

様々な準備をしていたが、新型コロナウイルスの流行とその影響により止むを得ず中止した。

成果と将来

受講生は、全体を統括するセミナーや、各事業担当者が推進する実践的な活動に参加するとともに、プログラム履修を進め、年度末にレポートを提出した。活動への貢献度、出席率、レポートを総合的に判断し27名の受講生に修了証を授与し、アートマネジメント人材を育成した。

アートマネジメント人材育成の目標として、「アート・プラクシスの力」を養い、作品やアーティストへの理解を深めるインタビュー、人文学的な知を活用したアートによる課題解決などを設定した。本プログラムでは、7割強の受講生に修了証を授与することができた。この事業は、初年度は準備期間、2年目を発展期間、3年目を実践期間と位置付ける3年計画のものである。準備期間とした今年度では、受講生はレクチャーやアーティストとの対話を通して十分学ぶことができた。また、「滞在制作」においては、アーティストとの交流や、上演そのものに携わっての実践的なアートの活用、上演後の冊子作成というポスト・プロダクション等、準備期間を超える有意義な成果を発揮した。育成事業として、様々な方面からの実践が実現し、実りの多いものとなった。

3年間の事業終了後は、これまでの経験を土台として、アート・プラクシス人材育成の教育的経験をさらに大学の研究教育に活かしていくために、文学研究科や総合学術博物館の芸術政策論関連の授業や公開講座に組み込んでいけるよう計画している。2021年度からも、引き続き文学研究科が主催し、総合学術博物館と共催して、文化庁「大学における文化芸術推進事業」に申請した「徴しの上を鳥が飛ぶ」を実施する。また、社会人と学生とが共に学ぶ新しい形式を探求すべく、大阪大学の芸術・アートを活用した社学連携の拠点とする計画である「中之島アゴラ案」において、芸術の教育プログラムの中での展開を計画している。これらの事業により、社学連携的な芸術文化事業を展開していく。

(永田 靖・山崎 達哉)

本プログラムの趣旨は、次の通りである。募集要項の「趣旨」の項目から引用する。「2014年度より5年にわたり実施中であった「国際的社会連携型人文学研究教育クラスター(略称:人文学クラスター)」Global Linkage Clusters for Humanities (GLinCH)を、国際性の醸成と研究力の強化に特化した形で継承し、国際共同研究力向上推進プログラムを実施する。プログラムの目的は、すでに実績のある国際共同研究を基盤として、独創的かつ先駆的であり文学研究科を代表する研究活動を格段に発展させ、実り豊かな研究成果をグローバルに発信し可視化することにある。また、女性研究者及び若手研究者が国際的に研究活動できる場を確保するべく、これらの研究者の参画を申請の要件とする」。要するに、2018年度までの人文学クラスターに代わるものとして準備されたのが、このプログラムである。

このプログラムでは、国際共同研究グループにつき、次のような要件が設けられていた。募集要項から引用する。「国際共同研究グループは、文学研究科専任教員を研究代表者とし、海外の研究機関等に所属する外国人研究者、研究代表者とは所属専門分野もしくはコースを異にする文学研究科教員、文学研究科に所属する女性研究者及び若手研究者を、それぞれ少なくとも1名ずつ含むこととする」。

人文学クラスターのうち、2018年度まで「グローバル日本研究クラスター」として活動してきたグループが、上記の条件を満たすかたちで国際共同研究グループ「越境文化研究イニシアティブ」を組織し、研究活動を継続した。研究代表者は宇野田尚哉文学研究科教授である。

この国際共同研究の軸になっているのは、北米の日本研究者（とりわけ、被爆体験の表象、戦後のサークル文化運動、在日文学などに関心を持っている研究者）との連携、および、ハイデルベルク大学日本研究所との連携であり、2019年度中には、下記のような活動を行った。複数の問題関心、複数のネットワークが併存しているため、どの要素をどのように発展させるか検討中である。

越境文化研究イニシアティブ活動記録（2019年度）

*所属・職位はイベント開催時のもの

2019年5月19日、国際シンポジウム「詩人四國五郎の歩んだ道—シベリアからヒロシマへ—」開催（於大阪大学会館アセンブリーホール）。

趣旨説明・司会 宇野田尚哉（大阪大学教授）

研究発表

川口隆行（広島大学准教授）

青春の協同創作—シベリア収容所から朝鮮戦争下の広島へ—

岡村幸宣（原爆の図丸木美術館学芸員）

占領下／朝鮮戦争下の原爆表現—四國五郎と丸木位里、赤松俊子の絵画—

アン・シェリフ（オーバリン大学教授）

ベトナム戦争における芸術—四國五郎の母子像—

小沢節子（近現代史研究者）

四國五郎の1970年代

—「ヒロシマの画家」となるまで、あるいは「当事者性」の獲得をめぐる—

2019年6月16日、国際シンポジウム「越境する言葉—詩人金時鐘さんの生誕90年と渡日70年を記念して—」開催（後援：大阪文学学校、藤原書店、朝日新聞社。於大阪大学中之島センター佐治敬三メモリアルホール）

主催者挨拶 宇野田尚哉（越境文化研究イニシアティブ代表）

来賓挨拶 呉泰奎（駐大阪大韓民国総領事館総領事）

スライド上映（浅見洋子作成・上映）

基調講演「金時鐘さんがみつめてきたもの」 鶴飼哲（一橋大学特任教授）

パネルセッション「越境する言葉—金時鐘を読む—」（司会宇野田尚哉・細見和之）

「在日朝鮮人語としての日本語，その原点とゆくえ」 丁章（詩人）

「歴史を越境する詩」 宮沢剛（二松学舎大学非常勤講師）

「北米における金時鐘」 CATHERINE RYU（ミシガン州立大学准教授）

浄瑠璃による『猪飼野詩集』：「うた またひとつ」 渡部八太夫（人形浄瑠璃猿八座太夫）

金時鐘さんによる朗読とスピーチ

閉会のあいさつ 葉山郁生（大阪文学学校代表理事）

2019年6月19日，国際ワークショップ「猪飼野女性文学ワークショップ」開催（於喫茶美術館）

My Encounters with Chong Ch'u-Wöl and Her Poetry: Three Impressions

CATHERINE RYU (Michigan State University)

ディスカッサント：丁章（詩人）

2019年10月3日，トークセッション「能の魅力—日本とヨーロッパ，過去と現在—」（於芸3教室）

発題：ユーディット・アーロカイ（ハイデルベルク大学教授）・中尾薫（文学研究科准教授）

コメンテーター：古後奈緒子（文学研究科准教授）

司会：三谷研爾（文学研究科教授）

2019年10月23日，講演会「日系関連の最近のアーカイブスの動向」（於待兼山会館会議室）

講師 上田薫（スタンフォード大学フーヴァー研究所ジャパニーズ・ディアスポラ・コレクション キュレーター）

2019年12月23日，Global Japanese Studies Research Workshop: The View from Japan: Discourses on Korea and Migration in Japanese Literature 開催（於中庭会議室）

Colonial Paranoia, Parody, and “The Korea Problem”: The Migrating Terms, Texts, and Terrors of Koreaphobia in Imperial Japanese Literature and Culture

ANDRE HAAG (Assistant Professor of Japanese Literature, Department of East Asian Languages and Literatures, University of Hawai'i)

No Place for Returns: Ri Kaisei's Past and Present Sakhalins

NICHOLAS LAMBRECHT (Assistant Professor of Global Japanese Studies, Graduate School of Letters, Osaka University)

Discussion: Hashimoto Yorimitsu (Professor of Comparative Literature, Graduate School of Letters, Osaka University)

2020年1月14日，Global Japanese Studies Research Workshop 開催（於中庭会議室）

Rethinking Japan's Earliest Written Narratives

JOHN BUNDSCHUH (Visiting Fulbright-Hays Fellow, The Ohio State University)

(宇野田尚哉)

「教育ゆめ基金」は、文学部創立 60 周年の 2008 年（平成 20 年）に文学部・文学研究科の教育活動の支援を目的として創設された。卒業生・修了生をはじめ、文学研究科・文学部を応援して下さる方々からのご寄付を原資として運用されており、文学研究科・文学部における教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、大学院生の調査補助、障がいを持つ学生の支援など、学生たちの修学支援に幅広く活用され、教育の活性化に大いに寄与している。

当初は文学部・文学研究科同窓会の協力を得て、同窓会ニューズレター送付の際に「教育ゆめ基金」の案内を同封していたが、2013 年（平成 25 年）からは全学の「未来基金」（2009 年創設）と窓口が統合されたのを機に、全学的な「未来基金」の案内に同梱して低コストで文学研究科・文学部の卒業生・修了生のほぼ全員に「教育ゆめ基金」の案内が送付できるようになり、寄付件数も飛躍的に増えた。しかし、2018 年（平成 30 年）度からこの方式が不可能になったことから、ふたたび同窓会ニューズレター送付の際に案内を同封する方式に戻すこととした。ニューズレターの送付先は卒業生・修了生のうち同窓会員に限られるため、周知の範囲が狭まり、結果として 2019 年（令和元年）度の寄付件数が大幅に減少したと思われる。いただく御芳志以上のコストを案内の送付に費やすわけにはいかないため、今後はいかにして文学研究科・文学部ファミリーの方々に広くご協力をお願いするか、その方法に工夫が求められる。

年度	収入額	支出額	残額	備考
2008 年度	2,187,900（66 件）	0	2,187,900	本部管理等経費 1%（平成 24 年度まで同じ）
2009 年度	297,000（9 件）	288,000	2,196,900	支出：留学生奨学金 288,000
2010 年度	1,004,850（46 件）	300,264	2,901,486	支出：留学生奨学金 144,000 留学生宿舍費補助 90,000 留学生用インターネット補助 66,264
2011 年度	514,800（24 件）	351,180	3,065,106	支出：留学生奨学金 288,000 留学生用インターネット補助 63,180
2012 年度	834,570（35 件）	64,842	3,834,834	支出：留学生用インターネット補助 64,842
2013 年度	1,829,700（53 件）	480,000	4,281,084	本年度より大阪大学未来基金と窓口統合（本部管理等経費 5%、以下同じ） 支出：文学部海外留学支援制度奨学金 480,000
2014 年度	1,377,975（84 件）	560,000	6,002,509	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 360,000 調査研究助成 200,000
2015 年度	2,644,800（111 件）	782,565	7,864,744	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 480,000 大学院生海外調査等助成 278,565 障がいのある学生のための支援補助 24,000
2016 年度	1,890,500（57 件）	836,960	8,918,284	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 250,000 大学院生海外調査等助成 298,960 エラスムス・ムンドゥス留学生奨学金 288,000
2017 年度	3,243,007（142 件）	1,028,000	11,133,291	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 360,000 大学院生海外調査等助成 380,000 エラスムス・ムンドゥス留学生奨学金 288,000
2018 年度	1,589,645（100 件）	288,000	12,434,936	支出：エラスムス・ムンドゥス留学生奨学金 288,000
2019 年度	394,250（37 件）	1,302,174	11,527,012	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 540,000 大学院生海外調査等助成 762,174

（福永伸哉）

1. 懐徳堂研究センターの目的と意義

2009年5月、旧「懐徳堂センター」が改組され、新たに「懐徳堂研究センター」が発足した。

その目的を、センター規定はこう明記する。「懐徳堂研究センターは、文学研究科の教育研究理念に沿って、懐徳堂に関わる調査・研究・広報の拠点としての役割を果たし、これを通じて本研究科の発展に寄与することを目的とする」と。その目的を達成するために、以下のような業務を行うこととした。

- (1) 懐徳堂に関わる調査・研究、資料の収集・作成（デジタルコンテンツを含む）
- (2) 『懐徳堂研究』（年一回定期）、パンフレット、ニューズレター（不定期）等の広報媒体の編集・刊行
- (3) 懐徳堂研究の総合サイト「WEB 懐徳堂 (<http://kaitokudo.jp/>)」の管理運営
- (4) 学内外における懐徳堂資料の展示、講演会などの開催
- (5) 懐徳堂記念会の事業に関わる資料調査等の協力
- (6) 本学附属図書館および総合学術博物館の業務に関わる懐徳堂関係資料の調査等の協力

2. 諸活動

(1) 刊行物の発刊

2018年度は『懐徳堂研究』第10号、2019年度は同第11号を刊行した。

なお、『懐徳堂研究』とニューズレターのバックナンバー（刊行後1年を経過したものは、懐徳堂研究センターHPからPDFファイルとしてダウンロードできるように設定している。

(2) ホームページの更新……両年度を通じて、センターHPを随時更新するとともに、懐徳堂資料のデジタルコンテンツの作成を進めた。センターの諸活動を分かりやすく紹介するほか、懐徳堂研究関係資料を公開し、またセンター刊行物のバックナンバーをPDFファイルで提供するなどしている (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitoku-c/>)。

(3) 大阪大学中之島センターにおけるレプリカ展示……懐徳堂文庫の貴重資料である入徳門聯、天図などのレプリカを、中之島センター1階ロビーにて常設展示している。

(4) 展覧会の開催

2018年度、加地伸行名誉教授より寄贈された第一次加地文庫（書籍類）のうち、特に貴重な『孝経啓蒙』を、いちよう祭期間中図書館において一般展示した。

(5) 寄贈品の受け入れ

2019年度：懐徳堂学生子孫である宮武氏より懐徳堂関係資料（答宮武生書・萬年先生遺筆）の寄贈を受けた。

：加地伸行名誉教授より、第二次加地文庫（器物類）の寄贈を受けた。

：阪倉篤秀関西学院大学名誉教授より、重建懐徳堂の瓦の寄贈を受けた。

(6) その他

来訪者の見学、各種資料調査に随時対応した。

3. 運営上の課題

2009年5月に懐徳堂研究センターが発足して以来、センター実務はセンター長・研究員・職員が担当してきたが、研究員を兼務していた文学研究科教員の転出を受け、2019年度より、センター長と職員による体制となった。文学研究科

予算の減少に対応し、『懐徳堂研究』のWEB化を果たしたが、なお真に重要な業務に各種リソースを集中すべく、業務の見直しを続けてゆく必要がある。

(舟場 保之)

活動の概要とその特色

2018年度・2019年度の専任スタッフは上田直弥助教の1名である。2018、2019年度は福永伸哉文学研究科長が室長となり、兼任として文学研究科の高橋照彦教授が業務を担った。

大阪大学構内には多くの遺跡が存在しており、特に豊中キャンパスはその全域が待兼山遺跡として国の遺跡台帳に登録されている。また2009年度には吹田キャンパスにおいて遺物の出土があり、あらたに山田丘遺跡として遺跡台帳に登録されることとなった。また、大阪大学中之島センターでは、江戸時代の久留米藩蔵屋敷の発掘調査を実施した。こうした遺跡や遺跡から出土した遺物は、1950年に施行された文化財保護法の規定により国民共有の財産・文化財として保護・活用をはかる対象とされている。大阪大学では、文化財保護法の規定に基づき、キャンパス内の遺跡の保全と建物計画などの調整を行うために、全学委員会として埋蔵文化財調査委員会を設置しており、その委員会の指導の下、埋蔵文化財調査室が構内遺跡の調査にあっている。

2018年度・2019年度は、吹田・豊中キャンパスを中心に建物の改修および耐震補強・新設工事等が引き続き多く実施された。その対応として、発掘調査、工事着手前の試掘および立会調査は以下に報告した件数を実施している。また、調査で発見された出土品については、洗浄、接合、実測等の整理作業をすすめ、2019年度には成果報告として『埋蔵文化財調査室年報5』を刊行した。さらに大阪大学総合学術博物館修学館3階にて公開している出土品の解説、大阪大学21世紀懐徳堂が主催するアウトリーチ活動にも力を注ぐなど、精力的な活動を実施している。

現在の組織

教授 2(兼任2) 助教 1

教授：福永 伸哉(兼任)、高橋 照彦(兼任)

助教：上田 直弥

組織の活動

1. 発掘調査

2018・2019年度は、以下の埋蔵文化財調査を実施した。

【2018年度】

・吹田地区

- | | |
|--------|-----------------------------|
| 8月4日 | 本部トイレ改修工事に伴う調査 |
| 10月10日 | 医学部附属病院井水処理施設設備更新工事に伴う調査 |
| 11月5日 | 実験研究棟（微研）新棟新営工事に伴う調査 |
| 12月22日 | 歯学部附属病院駐車場看板設置工事に伴う調査 |
| 1月11日 | 核物理研究センター周辺ライフライン再生工事に伴う調査① |
| 1月15日 | 核物理研究センター周辺ライフライン再生工事に伴う調査② |
| 3月18日 | モノレール駅前空地平面駐車場整備に伴う調査 |

・豊中地区

- | | |
|-------|------------------|
| 7月17日 | 待兼山町宅地開発計画に伴う調査① |
| 7月31日 | 待兼山町宅地開発計画に伴う調査② |
| 8月9日 | 待兼山町宅地開発計画に伴う調査③ |

- 10月2日 待兼山町宅地開発計画に伴う調査④
- 10月26日 全学教育実験棟給水管改修緊急工事に伴う調査
- 2月14日 豊中グラウンド電気ケーブル敷設工事に伴う調査

・箕面地区その他

- 9月6～15日 箕面新キャンパス建築に伴う調査

【2019年度】

・吹田地区

- 8月29日 工学P2棟改修工事に伴う調査

・豊中地区

- 4月24日 豊中他基幹・環境整備（ブロック塀対策）プール横地点工事に伴う調査
- 7月16日 宮山外国人宿舎ブロック塀改修に伴う調査
- 8月22日 豊中グラウンド横給水管漏水緊急補修工事に伴う調査①
- 9月7日 豊中グラウンド横給水管漏水緊急補修工事に伴う調査②
- 10月7日 言語文化B棟改修機械設備工事・外構工事に伴う調査③
- 10月14日 言語文化B棟改修機械設備工事・外構工事に伴う調査④
- 10月19日 言語文化B棟改修機械設備工事・外構工事に伴う調査⑤
- 2月5日 理学部H棟排水管漏水緊急補修工事に伴う調査
- 2月27日 修学館脇高圧ケーブル更新工事に伴う調査
- 3月3日 全教裏電線ポール補修（再建）工事に伴う調査

2. 広報・埋蔵文化財の公開

【2018年度】

- 大阪大学構内出土資料のいちよう祭における展示・解説
- 万籟山古墳発掘調査成果報告講演会 2018 講師（上田）
- 東近江市・古墳時代前期の至宝 雪野山古墳-古代ロマンへの誘い- 講師（上田）
- 大阪大学 21世紀懐徳堂 i-spot 講座 講師（上田）

【2019年度】

- 大阪大学構内出土資料のいちよう祭における展示・解説
- 大阪府茨木高校学外授業への協力
- 豊中歴史同好会 7月度例会 講師
- 大阪大学共創機構社学共創本部・はんだいラボ@EXPOCITY Labo 講師
- 大阪府立北野高等学校出張授業 講師
- 株式会社新興出版社啓林館・大阪大学社学共創本部／総合学術博物館・繋げる・拓げる～わくわく学習教室 講師
- 東近江市・「雪野山古墳」古代ロマンへの誘い！ 講師
- 大阪府教育委員会 『WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業高度な学びを提供するシステムの構築』 講師
- 『埋蔵文化財調査室ニュースレター 第11号』の発行
- 『大阪大学埋蔵文化財調査室年報5』の刊行

今後の課題

大阪大学構内における開発と埋蔵文化財の保護の両立をめざし、施設部をはじめとする関係部局と密接に連絡をとり、円滑な運営を目指す。しかしながら、開発件数の増加により 2018 年度・2019 年度におこなわれた埋蔵文化財調査は 25 件を数えるなど依然として多く、そのすべての調査や事前の調整業務、調査後の遺物整理や報告書刊行を専任教員 1 名で対応することには困難が生じつつある。調査量の増大に効率良く対応できる体制をつくることが急務である。

待兼山遺跡は近年の調査成果により、これまで知られていた弥生時代から古墳時代のみならず、古代、中世、近世各時代の遺構・遺物の様相が判明しつつある。また定期的に行っているキャンパス内の表面調査では、極限科学研究棟（豊中キャンパス）付近における埴輪片など埋蔵文化財の散布が確認されており、引き続き工事に際しては細心の注意が必要である。発見された膨大な出土品の歴史的意義についてはいまだ不明な点が多く、今後の調査や整理作業では、こうした資料の意義を学術的に解明することを通じて、地域の歴史復元への貢献を果たして行きたい。

吹田キャンパスに所在する山田丘遺跡に関しては、継続的な調査の実施により、キャンパス造成以前の旧地形および地層の堆積状況を把握しつつある。今後も調査を継続することにより、キャンパス内における埋蔵文化財包蔵の状況を正確に把握し、文化財保護法と施設マネジメントの円滑な調整が図れるよう努めたい。

近年、大阪府百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録などの影響もあり、大阪大学埋蔵文化財調査室への市民講座、出張授業などの依頼が増加している。キャンパスに眠る文化財の価値を地域に発信するためにも、大阪大学 21 世紀懐徳堂や総合学術博物館をはじめ、近畿地域を中心とした文化財関係機関と密接に連携し、学校教育、市民講座の場を活用してアウトリーチ活動をさらに進めていく予定である。

（上田 直弥）

組織・体制

前身の性差別問題委員会を改組・改称し、2010年11月に設置。2011年4月より、本格的に活動を開始。性差別問題委員会同様、研究科長直属の委員会として組織されている。委員は、委員長1名（主として、セクシュアル・ハラスメントを担当）、副委員長1名（主として、アカデミック・ハラスメントおよびパワー・ハラスメントを担当）を含む全員が相談員を兼ね、学生・教職員からのセクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメント問題にかかわる相談、ならびに解決に当たる。

2018年度：委員会メンバー14名(女性7名、男性7名)。

2019年度：委員会メンバー14名(女性7名、男性7名)。

活動状況**2018年度実績**

1. 文学部新入生オリエンテーションで、委員長から委員会の活動について説明（題目：「ハラスメントに出会ったら」）。パンフレット「やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。(4月)
2. 文学研究科新入生オリエンテーションで、パンフレット「やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。また、ハラスメント防止対策講演会を開催。講師：濱田綾さん（大阪大学ハラスメント相談室助教・専門相談員）。
3. 各専修・専門分野・コースでのガイダンス時に、ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットを学生に配布。(4月)
4. TA研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(4月)
5. キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク第24回全国集会（福岡県春日市で開催）に、委員1名が参加。(9月)
6. TA研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(10月)
7. 文学研究科・文学部ハラスメント防止に関する教職員研修会を下記の通り開催。(1月10日)
講演：「無意識のバイアスを知っていますか？ーハラスメントとのかかわりー」、講師：大坪久子氏（日本大学薬学部薬学研究所上席研究員）
8. パンフレット「やめよう・とめようハラスメント」を作成。(3月)
9. 年間相談・対処件数は3件（1件は昨年度から継続、1件は室員が単独で対処して解決）。

(山上 浩嗣)

2019年度実績

1. 文学部新入生オリエンテーションで、委員長から委員会の活動について説明（題目：「ハラスメントに出会ったら」）。パンフレット「やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。(4月)
2. 文学研究科新入生オリエンテーションで、パンフレット「やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。また、ハラスメント防止対策講演会を開催。講師：濱田綾さん（大阪大学ハラスメント相談室助教・専門相談員）。
3. 各専修・専門分野・コースでのガイダンス時に、ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットを学生に配布。(4月)
4. TA研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(4月)
5. 委員のメンバー全員に対して、全学相談員対応マニュアルと部局相談員相談ガイドブック等をデータ配布(6月)
6. TA研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(10月)

7. 文学研究科・文学部ハラスメント防止に関する教職員研修会をワークショップの形式で開催。(11月14日)
講演：「大学でのハラスメントを考えるー現状と対策ー」、講師：濱田綾氏（大阪大学ハラスメント相談室・助教）
8. パンフレット「やめよう・とめようハラスメント」を見直し改定した。(3月)
9. ハラスメント研修のための資料を購入し、リスト化した(3月、教育支援室に設置・公開)。
10. 年間相談・対処件数は4件(1件は次年度に継続)。

(北原 恵)

第 2 部

各専門分野・コースにおける

教育・研究活動の概要

【凡 例】

- I. 現在の組織については、教員は2020年4月1日、在學生は2020年5月1日を基準とし、この時点での教員および在學生の現員を示す。また修了生・卒業生については、2018年度(2019年3月修了・卒業)および2019年度(2020年3月修了・卒業)について記す。

- II. 大学院生の研究業績、受賞等は、2018年度～2019年度に在籍した者が、その在籍期間中に発表あるいは授与されたものについて記す。また2018年度～2019年度におこなわれた学位授与について、課程博士と論文博士にわけて記載する。

- III. 教員の研究活動については、原則として2018年度～2019年度に各専門分野・コースに在職した者のデータを示す。研究業績については2018年度～2019年度の在籍期間中に発表されたものを記載する。2018年度～2019年度中に、本研究科大学院生であったものが本研究科教員になった場合には、その大学院生時代に発表した研究業績をあわせて記入する(この場合には大学院生の研究業績の欄にも同じ業績が示される)。なお受賞については2018年度～2019年度にかぎらず記載する。

2-1 哲学 哲学史

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：舟場 保之

准教授：嘉目 道人

助教：西條 玲奈

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
23	8	6	0	0	2	1	0

*うち留学生3名、社会人学生1名

**哲学・思想文化学専修として

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	5	1	2	2
2019	9	1	3	0
計	14	2	5	2

*哲学・思想文化学専修として

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

学部と大学院でそれぞれ以下の具体的な目標を掲げた。【学部】哲学の基本文献読解のための演習を学部生向けに開講し、基礎学力を養成する。卒業論文を提出する予定の学生に対しては、研究発表を行わせ、論文を仕上げられるように指導する。【大学院】修士・博士論文作成のための十分な個別指導を行う。研究テーマに関連した論文紹介などを含む研究発表を行わせ、その記録をHPにアップする。博士後期課程の学生には、『メタフィシカ』及びその他の学術誌への投稿に向けた指導を行う。学生の外国語力向上のために、英語による授業を複数開講する。また、院生及び学生の哲学に対する関心をいっそう深化させるためのワークショップを開催する。

2. 研究

現代思想文化学専門分野との共同で、欧文学術誌として *Philosophia OSAKA* 第 14 号、第 15 号を刊行し、Web 上に公開する。/現代思想文化学専門分野及び臨床哲学専門分野との共同で、論文集『メタフシカ』第 49 号、第 50 号を刊行し、Web 上に公開する。/現代思想文化学専門分野との共催で、研究会 *handai metaphysica* の研究例会もしくは特別講演会を年度内に 2 回程度行う。/スタッフが海外で研究発表を行う。

3. 社会連携

現代思想文化学専門分野との共同で、開局された HP 上の<ビデオ・メタフシカ>から、さまざまな情報を発信する。/現代思想文化学専門分野との共同で、世界哲学の日に記念イベントを実施する。/海外で国際連携に努める。

Ⅲ. 活動の概要(2018 年度～2019 年度)

1. 教育

各種論文作成のためのさまざまな個別指導を行ったが、個人情報等に配慮して、卒業論文及び修士論文の題目のみ公開し、大学院生の研究発表の記録を HP 上に公開することは避けた。/学部生と大学院生が学問的な交流をもてるように、共通の演習及び講義を行うとともに、大学院生の論文作成演習への学部生の参加を促した。/英語による授業を複数開講し、学生たちの英語によるディスカッション能力の向上を図った。/哲学ワークショップを開催し、院生及び学生の哲学に対する関心を深化させた。目標は達成されたと考える。

2. 研究

現代思想文化学専門分野との共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第 14 号、第 15 号を刊行し、海外主要大学及び国内主要大学に送付した。また、現代思想文化学専門分野及び臨床哲学専門分野との共同で論文集『メタフシカ』第 49 号、第 50 号を発刊し、国内主要大学に送付した。これらはどちらも、Web 上での公開も行っている。海外の研究者を招いた大阪哲学ゼミナールを I 回、*handai metaphysica* 研究例会を 1 回開催した。また、2019 年度については、COVID-19 感染拡大防止のため、大阪哲学ゼミナール及び *handai metaphysica* 研究例会をそれぞれ 1 回ずつ、中止せざるを得なかった。スタッフが海外（デュースブルク - エッセン大学、ドイツ連邦共和国）でゼミナールを開催するとともに、国際共同研究会で発表し、欧文論文を発表した。目標は達成されたと考える。

3. 社会連携

HP 上に開局された<ビデオ・メタフシカ>から、スタッフの最終講義等を発信した。現代思想文化学専門分野との共同で、世界哲学の日記念企画を実施した。各種プログラムによって研究交流及び教育活動を行い、国際連携を図った。目標は達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018 年度～2019 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、博士論文・修士論文・卒業論文いずれでも、比較的水準の高い成果がでた。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。在学中の学生に関しても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

外国及び国内での学会発表、及び欧文誌と和文誌による研究成果の国内外への発信という目標はほぼ達成された。また研究会の積極的な開催に関しても、目標はほぼ達成された。

3. 社会連携

前記の活動を踏まえて自己評価すれば、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士及び論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	2	0	2
2019	0	0	0
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

朱 喜哲	「文化政治」とプラグマティズム リチャード・ローティの哲学的評価をめぐって」	2019/3
	主査：入江幸男 副査：須藤訓任、舟場保之	
早瀬勝明	「司法の言語行為」	2019/3
	主査：入江幸男 副査：須藤訓任、舟場保之	

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	2(2)	1(0)	2(0)	0(0)	2(0)	7(2)
2019	2(2)	3(3)	2(2)	0(0)	0(0)	7(7)
計	4(4)	4(3)	4(2)	0(0)	2(0)	14(9)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	1	5	4	0	2	12
2019	0	3	7	0	0	10
計	1	8	11	0	2	22

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

阿部倫子「ライプニッツにおける共可能性と不共可能性」『メタフィシカ』第49号, pp.113-126, 査読有, 2018/12/21

立花達也「一元論における優先性と部分性 — 現代形而上学とスピノザのあいだで」『スピノザーナ』第16号, pp.173-191, 査読有, 2018/9/20

立花達也「ベルナルド・ポートル「スピノザ『エチカ』における性・愛・幾何学」『スピノザーナ』第16号, pp.79-101, 査読有, 2018/9/20

朱喜哲「ヘイト・スピーチ 信頼の壊しかた」『信頼を考える：リヴァイアサンから人工知能まで』, 勁草書房, 2018/7/31

仲宗根勝仁「ヘイト・スピーチ 信頼の壊しかた」『信頼を考える：リヴァイアサンから人工知能まで』, 勁草書房, 2018/7/31

米田恵「カントの「道徳性」概念に基づいた法の妥当性の意義」『待兼山論叢』第52号, pp.37-52, 査読有, 2018/12/25

【2019年度】

〔博士前期〕

岩本智孝「カッシーラーの記号論——パースとの比較から——」『第1回 若手研究者 フォーラム要旨集』第1号, pp.6-10, 査読有, 2019/9/27

溝越大秦「学問が正しいと言われる基盤としての生活形式」『第1回 若手研究者 フォーラム要旨集』第1号, pp.11-13, 査読有, 2019/9/27

〔博士後期〕

小竹陽介「スピノザ『無限についての書簡』と世界永遠説」『メタフィシカ』第50号, pp.75-88, 査読有, 2019/12/23

末田圭果「世界への能動性の始原について：意志と表象の消失点としての意欲」『メタフィシカ』第50号, pp.103-115, 査読有, 2019/12/23

末田圭果「終末期患者に対する安楽死・尊厳死拒否と、ケアのプログラム規定—ショーペンハウアー「意志の否定」から見た終末期—」『第2回 若手研究者 フォーラム要旨集』pp.6-9, 査読有, 2020/3/23

立花達也「スピノザにおける感情と生理学」『アルケー』第27号, pp.110-122, 査読有, 2019/9/6

立花達也「「自然の一部」であることを自然の中から信じること—書簡32におけるスピノザの部分全体論を読むために—」『待兼山論叢』第53号, pp.25-42, 査読有, 2019/12/25

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

崎山英俊「ハーバーマスのポストナショナル・デモクラシー理論—カントから／への二度の「逸脱」と「回帰」, 第17回哲学ワークショップ, 大阪大学, 2019/3/30

〔博士後期〕

Tomoko Abe「Compossibility of a World and Contingency of the Best Possible World in Leibniz」, 24th World Congress of Philosophy Student Session, China National Conference Center, 2018/8/16

阿部倫子「ライプニッツにおける共可能性と不共可能性」, 第21回 handai metaphysica 研究例会, 大阪大学, 2019/3/25

立花達也「悲しみの政治学とその他者：バトラーにおける「コナトゥスの問い」をめぐって」, 第4回メルロ=ポンティ哲学研究会, 日本大学, 2018/11/24

立花達也「スピノザの心身論における身体拡張の可能性」, 顔・身体学第3回領域会議, 立教大学, 2018/12/26

立花達也「精神にとって身体論はいかなる意義をもちうるか——デカルトとスピノザにおける人間身体の通時的同一性について」, 日仏哲学会, 2019/3/23

朱喜哲「論理学の哲学と推論主義」, 応用哲学会第10回年次研究大会ワークショップ, 名古屋大学, 2018/4/7

朱喜哲「ウィルフリッド・セラーズの規範性概念とその受容」, アメリカ哲学フォーラム第5回大会, 神戸大学, 2018/6/23

朱喜哲「ブランダム単称名辞論とその射程」, 2018年度哲学若手研究者フォーラム, 国立オリンピックセンター, 2018/7/22

朱喜哲「大学から地続きの場所としての企業——人文系人材の産業界における在り方」, 南山大学人類文化学科FD講演会, 南山大学, 2018/9/28

朱喜哲「哲学の手法でビジネスをする、ビジネスの手法で哲学をする」, 名古屋哲学フォーラム2018, 名古屋大学, 2018/12/23

朱喜哲「来るべき社会思想としての推論主義・プラグマティズム——行動データの時代に「正当化」を再考する」, 東洋大学哲学科社会思想史講義, 東洋大学, 2019/1/17

【2019年度】

〔博士前期〕

岩本智孝「主観／客観の相互浸透としての言語芸術——カッシーラーとブリューソフ——」(※口頭により改題。改題前は、「仮象／現実の相互浸透としての言語芸術——カッシーラーとブリューソフ——」), 2019年度哲学若手研究者フォーラム, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2019/7/14

岩本智孝「カッシーラーの記号論——パースとの比較から——」, 第1回若手研究者フォーラム, 大阪大学豊中キャンパス, 2019/9/27

岩本智孝「カッシーラーと科学的記号」, 第4回大阪大学豊中地区研究交流会, 大阪大学豊中キャンパス, 2019/12/17

溝越大秦、岩本智孝「記号の獲得、あるいは創出——ウィトゲンシュタインとカッシーラーの比較——」, 第18回哲学ワークショップ, 大阪大学豊中キャンパス, 2020/2/11

岩本智孝「『シンボル形式の哲学』における直観・言語・科学——二つの境界を越える連続性を問う——」, 第7回大阪哲学ゼミナール, 大阪大学豊中キャンパス, 2020/3/6 (コロナの影響により中止)

崎山英俊「ハーバーマスの世界共和国否定論とその問題」, 2019年度哲学若手研究者フォーラム, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2019/7/13

崎山英俊「世界市民権としての人権のポテンシャルティと基礎づけ」, 第一回若手思想文化研究会, 神戸大学六甲台キャンパス, 2019/8/29

崎山英俊「人民主権をめぐるカント的共和主義と手続き主義」, 第7回大阪哲学ゼミナール, 大阪大学豊中キャンパス, 2020/3/6 (コロナの影響により中止)

溝越 大秦「学問が正しいと言われる基盤としての生活形式」, 第1回若手研究者フォーラム, 大阪大学, 2019/9/27

溝越大秦、岩本智孝「記号の獲得、あるいは創出——ウィトゲンシュタインとカッシーラーの比較——」, 第18回哲学ワークショップ, 大阪大学豊中キャンパス, 2020/2/11

溝越大秦「『哲学探究』における「内的」と「私的」の違い」, 第7回大阪哲学ゼミナール, 大阪大学豊中キャンパス, 2020/3/7 (コロナの影響により中止)

〔博士後期〕

佐々木 尽「カント倫理学の対話的拡張」, 第7回大阪哲学ゼミナール, 大阪大学豊中キャンパス, 2020/3/7 (コロナの影響により中止)

末田 圭果「終末期患者に対する安楽死・尊厳死拒否と、ケアのプログラム規定——ショーペンハウアー「意志の否定」から見た終末期——」, 第2回若手研究者フォーラム, 大阪大学, 2020/3/23 (コロナの影響により中止)

立花達也「スピノザ『エチカ』における「関係」としての個体 ゲルーによる「周囲の圧力」解釈をめぐって」, 第 78 回日本哲学会大会, 首都大学東京 (南大沢キャンパス), 2019/5/13

立花達也「『スピノザ』へのコメント1」, 第 69 回研究会「秋保亘『スピノザ: 力の存在論と生の哲学』合評会」, 東京大学 (本郷キャンパス), 2019/9/8

(3)その他(書評・翻訳など)

【2018 年度】

〔博士前期〕

末田圭果「《文献紹介》マティアス・コスラー著「性格の経験としてのショーペンハウアー哲学」マルティン・モルゲンシュテルン著「ショーペンハウアーにおける道徳の形而上学的根源」『メタフュシカ』第 49 号, pp.153-159, 査読有, 2018/12/21

〔博士後期〕

なし

【2019 年度】

〔博士前期〕

崎山英俊「《文献紹介》インゲボルク・マウス著「憲法か条約か——グローバルな政治の法制化のために」、ユルゲン・ハーバーマス著「コミュニケーション的合理性と国境を越えた政治——返答」『メタフュシカ』第 50 号, pp.131-137, 査読有, 2019/12/23

溝越大秦「《文献紹介》オスカリ・クーセラ著『哲学的方法としての論理学についてのウィトゲンシュタイン 的見解: 分析哲学のルーツと発展の再考察』より 2 章」『メタフュシカ』第 50 号, pp.139-144, 査読有, 2019/12/23

〔博士後期〕

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018 年度 PD: 0 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 0 名)

2019 年度 PD: 0 名 DC2: 1 名 DC1: 0 名 (計 1 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018 年度 学部: 0 名 大学院: 3 名 (計 3 名)

2019 年度 学部: 1 名 大学院: 0 名 (計 1 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018 年度～2019 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018 年度～2019 年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者及び学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 8 名

2018年度：2名　2019年度：6名

<内訳>　技術職　0名　ジャーナリスト　1名　アーティスト　0名　中・高等学校の教員　0名
その他　7名

*学部卒業者については現代思想文化学との合計で記載。

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計　1名

2018年度：1名　2019年度：0名

9. 刊行物

2018年度　『メタフュシカ』第49号、*Philosophia OSAKA*, No. 14

2019年度　『メタフュシカ』第50号、*Philosophia OSAKA*, No. 15

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第6回大阪哲学ゼミナール（大阪大学文法経済学部本館4F演習室467（豊中キャンパス）2018年9月17日～19日）

テーマ：「Liberalism and Republicanism」

場所：大阪大学文法経済学部本館4F講義室460（豊中キャンパス）

日程：2018年9月17日-20日

9月17日（月）14:00-17:00 「Liberalism and Republicanism(1)」

18日（火）9:30-12:00 「Liberalism and Republicanism(2)」

14:00-17:00 「カント実践哲学のポテンシャルティ　倫理学の見地から」

問題提起：田原彰太郎（茨城大学准教授）

19日（水）9:30-12:00 「Liberalism and Republicanism(3)」

14:00-17:00 「カント実践哲学のポテンシャルティ　政治哲学の見地から」

問題提起：金慧（千葉大学准教授）

参加者のべ45名。

2018「世界哲学の日」記念講演会（2018年11月24日14時-16時、文経中庭会議室）

タイトル：「ゲームにおける真理と他者——プロ将棋の場合——」

講演者：嘉目道人（文学研究科特任講師）

参加者8名。

入江幸男教授最終講義（2019年3月8日、文法経講義棟文41）

入江幸男（哲学哲学史教授）「問答の哲学をめざして」

参加者52名。

第21回 *handai metaphysica* 研究例会（2019年3月25日、待兼山会館会議室）

末田圭果（哲学哲学史博士前期課程）

マティアス・コスラー著「性格の経験としてのショーペンハウアー哲学」

マルティン・モルゲンシュテルン著「ショーペンハウアーにおける道徳の形而上学的根源」

(『コンテキストにおけるショーペンハウアー』より)

阿部倫子 (哲学哲学史博士後期課程)

ライブニッツにおける共可能性と不共可能性

西村知紘 (現代思想文化学博士後期課程)

ハイデガーにおける解釈と言明の主題化

原田淳平 (産学共創本部)

「真である」という性質が「実質的ではない」とはどういうことか

参加者 12 名。

第 17 回哲学ワークショップ (2019 年 3 月 30 日 (土) 12:30~17:00、大阪大学豊中キャンパス 文法経本館 2F 大会議室)

個人研究発表

12:30 - 13:30 世界 3 の過密性と客観的知識の成長 について

発表者: 池田健人 (人間科学研究科・博士前期課程 1 年)

13:40 - 14:40 ハーバーマスのポストナショナル・デモクラシー理論

——カントから/への二度の「逸脱」と「回帰」

発表者: 崎山英俊 (文学研究科・哲学哲学史博士前期課程 1 年)

14:50 - 15:50 「人格」の実体化に関する言語哲学的 試論

発表者: 岩本智孝 (文学部・哲学・思想文化学 4 年)

16:00 - 17:00 人工的道的行為者について機械倫理 が解決すべき三つの問題

発表者: 姜雪菲 (人間科学研究科・博士前期課程 1 年)

参加者 11 名。

・ 2019 「世界哲学の日」記念講演会 (2019 年 11 月 16 日 14 時 - 16 時、文法経済学部本館 2F 大会議室)

講演タイトル: 「真理について——問答の観点から」

講演者: 入江幸男大阪大学名誉教授

参加者 10 名。

・ 第 18 回哲学ワークショップ (2020 年 2 月 11 日 (火) 13:00~17:00、大阪大学豊中キャンパス 文法経本館 2F 大会議室)

13:00 開会

13:10~14:10 個人研究発表

Naruhiko Mikado

“Non-relationality Unbound: A Critical Investigation into the Concept of “the Non-interpretive” and its Applicability in Literary Studies”

14:20~15:30 パネルディスカッション 1

右田晃一、池田健人

「意識と言語」

15:40~16:50 パネルディスカッション 2

溝越大秦、岩本智孝

「記号の獲得、あるいは創出——ウィトゲンシュタインとカッシーラーの比較——」

17:00 閉会

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 入江 幸男 教授

1953年生。1983年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士（大阪大学）。大阪大学助手、大阪樟蔭女子大学講師、同助教授、大阪大学助教授を経て、2003年10月から大学院文学研究科教授（2019年3月定年退職）、2019年4月から大阪大学名誉教授。専攻：哲学哲学史

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Irie, Yukio, "Question-Answer Inference", XXIV World Congress of Philosophy (Beijing), Beijing University, 2018/8

Irie, Yukio, (招待講演) "Meaning as Role in Question-Answer-Inferences: Beyond Robert Brandom's inferential semantics", Sogang University(Korea), 2018/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

入江幸男 第1回フイヒテ協会賞(研究奨励賞), フイヒテ協会, 1995/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2016年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:入江幸男

課題番号: 16K02123

研究題目:心の哲学に対するドイツ観念論からの貢献

研究経費:2018年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2019年度 直接経費 1,802,660円 間接経費 0円

研究の目的:

「心の哲学に対するドイツ観念論からの貢献」の研究目的:脳研究や人工知能研究の発展に刺激されて盛んになっている、脳のプロセスと心の関係をどうとらえるかを論じる「心の哲学」は非常に重要である。なぜなら、その答えは道徳や法制度をどのように理解するかに関わるからである。その意味で心の哲学は、現代社会にとって重要な喫緊の課題である。ところで、この心の哲学の問題は近代哲学において唯物論と観念論の論争として議論されてきた伝統的な問題でもある。なかでもドイツ観念論にとっては、これは最も基本的な課題であり、彼らは(現代風に言えば)心の哲学に関する一定の立場に基づいて、その上に道徳論や法論を体系的に構築した重要な前例である。心の哲学の探究とそれに基づく実践哲学の構築という現代の課題に対して、ドイツ観念論からの貢献の可能性を探究することが、本研究の目的である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西哲学会・委員, 2004年11月～2019年10月

日本フヒテ協会・常任委員, 1999年11月～2019年3月

日本フヒテ協会・委員, 1999年11月～現在に至る

2. 舟場 保之 教授

1962年生。1992年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士（大阪大学）。立命館大学嘱託講師、大阪大学准教授を経て、2017年4月から現職。専攻：ドイツの近代・現代哲学

2-1. 論文

Funaba, Yasuyuki, “Über den Pluralismus der konkurrierenden Interessen und den Prozeduralismus” *Philosophia OSAKA*, 15, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 29–37, 2020/3

舟場保之 「「外」の世界とアート 「表現の不自由展・その後」の中止について」『後進曲』(後進局), 01, pp. 31–33, 2019/12

Funaba, Yasuyuki, “Lässt sich nicht statt des negativen Surrogats die politische Idee der Weltrepublik wählen?” *Philosophia OSAKA*, 14, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 53–62, 2019/3

舟場保之 「フヒテにおけるナショナリズムと世界市民法の可能性」『フヒテ研究』(日本フヒテ協会), 26, 晃洋書房, pp. 79–92, 2018/11

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

舟場保之 「規範の問い方 アーレントとバトラー」第7回大阪哲学ゼミナール, 大阪哲学ゼミナール, 大阪大学, 2020/3/8 (COVID-19の影響により中止)

舟場保之 「2つの諸国家連合と世界市民主義」日本カント協会第44回学会, 日本カント協会, 拓殖大学, 2019/11(『日本カント協会第44回学会』pp. 11–11, 2019/11)

Funaba, Yasuyuki, “Über den Pluralismus der konkurrierenden Interessen und den Prozeduralismus”, 13. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium, Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium, Johann Wolfgang Goethe Universität, 2019/9

舟場保之 「Jürgen Habermas, Der demokratische Rechtsstaat – eine paradoxe Verbindung」第36回批判的社会理論研究会, 批判的社会理論研究会, 大阪大学, 2019/9

Funaba, Yasuyuki, “Die Eigentümlichkeit der Normen und der performative Widerspruch”, Internationale Konferenz: Möglichkeit der Transzendentalpragmatik, 琉球大学, 2019/3

舟場保之 「コミュニケーション論の現代的意義——カントとハーバーマス——」最新カント研究合評会, 早稲田大学, 2018/12

舟場保之 「「グローバル化の時代における規範に関する三極対立構造」(ポスター発表)」日本カント協会第43回学会, 日本カント協会, 香川大学, 2018/11(『日本カント協会第43回学会』pp. 8–9, 2018/11)

Funaba, Yasuyuki, “Lässt sich nicht statt des negativen Surrogats die politische Idee der Weltrepublik wählen?”, 12. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium, Johann Wolfgang Goethe Universität, 2018/9(12. *Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium*, pp. 5–5, 2018/9)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

舟場保之 大阪大学共通教育賞(2005 年度前期), 大阪大学共通教育推進機構, 2005/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2017 年度～2020 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:舟場保之

課題番号:17K02168

研究題目:カントの平和論を現代の議論に接続し新たな提言を行うための理論的研究

研究経費:2018 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

2019 年度 直接経費 1,400,000 円 間接経費 420,000 円

研究の目的:

カントは永遠平和を実現する体制として「諸国家連合」を提唱したが、これが後の国際連盟および国際連合の定礎となったことは非常によく知られている。本研究は、カントが『理論と実践』においては「国際国家」ないし「世界共和国」を積極的に評価していたにもかかわらず、『永遠平和のために』において「諸国家連合」を選択せざるを得なかった理論的前提を明確にし、この理論的前提をハーバーマスやルツ＝パッハマンらの現代の平和論に接続することを通じて、カントの議論にはいままなお有効な側面があることを明らかにする。それと同時に、現代的な視点を踏まえて、この理論的前提に必要な修正を加え、逆に現代の平和論によってまだ答えられていない問題に対して解決案を提示する。それは、「諸国家連合」か「国際国家」ないし「世界共和国」か、という二者択一を超えて第三の選択肢を示し、かつこの選択肢の現代における有効性を明らかにすることでもある。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フイヒテ協会・委員, 2013 年 3 月～現在に至る

日本カント協会・常任委員, 2012 年 4 月～現在に至る

日本カント協会・委員, 2007 年 4 月～現在に至る

3. 嘉目 道人 准教授

1979 年生。2015 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員、近畿大学非常勤講師、2017 年 11 月より大阪大学文学研究科 特任講師(常勤)を経て、2019 年 4 月より現職。専攻:超越論哲学、コミュニケーションの哲学・倫理学

3-1. 論文

Yoshime, Michihito, “Die Reziprozität der Perspektiven als ein Unterschied zwischen innerem und öffentlichem Diskurs” *Philosophia*

Osaka, 15, Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 39–53, 2020/3

嘉目道人「妥当要求の普遍性と発語内的否定 — 究極的根拠付けの新解釈を求めて —」『メタフュニカ』50, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 23–35, 2019/12

Yoshime, Michihito, “Fichteian Selfhood and Contemporary philosophy of Language: The Case of Transcendental Pragmatics” Steven Hoeltzel *The Palgrave Fichte Handbook*, Palgrave Macmillan, pp. 507–529, 2019/12

Yoshime, Michihito, “The Problem of “können” in Kant’s B-Deduction and Its Significance for Fichte” *Revista de Estud(i)os sobre Fichte (Online)*, 2–17, Latin American Studies Association Fichte, pp. 1–8, 2018/12

嘉目道人「討議倫理学におけるフイヒテのアプローチ —「当事者性」と「普遍」を手掛かりとして—」『日本カント研究』19, 日本カント協会, pp. 104–120, 2018/7

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

Yoshime, Michihito, “Die Reziprozität der Perspektiven als ein Unterschied zwischen inneren- und öffentlichen Diskursen”, 討議倫理学研究会, 討議倫理学研究会, 琉球大学, 2019/3

嘉目道人 「文献報告: Karl-Otto Apel, “Pragmatismus als sinnkritischer Realismus auf der Basis regulativer Ideen. In Verteidigung einer Peirceschen Theorie der Realität und der Wahrheit”, in: M.-L. Ratters u. M. Willaschek (Hrsg.), Hilary Putnam und die Tradition des Pragmatismus, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2002, S. 117-147」批判的社会理論研究会第34回研究例会, 批判的社会理論研究会, 明治大学, 2018/9

Yoshime, Michihito, “How should Fichte’s Philosophy be Rehabilitated in Contemporary Philosophy?”, 24th World Congress of Philosophy, World Congress of Philosophy, China National Convention Center, 2018/8

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2019年度～2021年度、若手研究、代表者: 嘉目道人

課題番号: 19K12923

研究題目: アーペルの討議理論における虚構的言説の位置価とその射程

研究経費: 2019年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

本研究は、ドイツにおける哲学の言語論的転回および語用論的転回を主導した、カール-オットー・アーペルの討議理論を再検討することを目的とする。従来、アーペルの討議理論は論証的討議を重視する半面、虚構的(フィクション的)言説を等閑視する傾向があった。しかし、現代社会において、言語芸術に限らず「フェイク」も含めた虚構的言説の影響力は増す一方であるように思われる。それゆえ、本研究は、アーペルの討議理論の修正・拡張を通じて、より適切な形で虚構的言説を扱うことを目指す。同時に、文学および美学・文芸学における関連する議論にも目を配り、芸術と社会の関係を問い直すことも目指す。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フイヒテ協会・委員, 2019年4月～現在に至る

4. 三木 那由他 講師

1985年生まれ。京都大学大学院博士課程修了。博士(文学)。2010年度より日本学術振興会特別研究員(DC1)、2013年度より同特別研究員(PD)を務める。2018～2019年度に本学で助教を務めたのち、2020年10月より現職。

4-1. 論文

三木那由他 「意図の無限後退問題とは何だったのか」『科学哲学』(日本科学哲学会), 52-1, pp. 47-65, 2019/12

三木那由他 「ビデオゲームの統語論と意味論に向けて: 松永伸司『ビデオゲームの美学』書評」『フィルカル』4-1, フィルカル編

集部, pp. 274-310, 2019/3

三木那由他 「話し手の意味は話し手の心理といかに関係しているのか？」『待兼山論叢(哲学篇)』52, 大阪大学文学会, pp. 19-35, 2018/12

4-2. 著書

三木那由他 『話し手の意味の心理性と公共性』勁草書房, 304p., 2019/12

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

久木田水生, Miki, Nayuta, 山口尚, “What we talk about when we talk about meaning in life”, 2nd International Conference on Philosophy and Meaning of Life, 早稲田大学, 2019/10

三木那由他 「ビデオゲームの統語論と意味論」ビデオゲームの世界はどのように作られているのか?, 大阪成蹊大学, 2019/8

三木那由他 「意図の無限後退問題とは何だったのか」日本科学哲学会第 51 回大会, 日本科学哲学会, 立命館大学衣笠キャンパス, 2018/10

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2018 年度～2022 年度、若手研究、代表者:三木那由他

課題番号:18K12182

研究題目:話し手の意味の共同的プラグマティズム

研究経費:2018 年度 直接経費 400,000 円 間接経費 120,000 円

2019 年度 直接経費 200,000 円 間接経費 60,000 円

研究の目的:

本研究は、話し手の意味に関する共同主義的プラグマティズムというアプローチの構築を目指す。これは話し手の意味についての標準的見解となっている意図基盤意味論に代わる枠組みであり、話し手が何かを意味し、聞き手がそれを理解したときに成立する事態を話し手と聞き手の共同志向性から特徴づけ、さらにそうした事態と話し手の発話行為とを話し手の行為に暗黙の裡に含まれるコミットメントという概念から結びつける立場である。共同主義的プラグマティズムの観点から話し手の意味の必要十分条件を提案し、今後のさらなる理論的洗練のための出発点を与えるのが、本研究の目標である。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-2 現代思想文化学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 2 准教授 1 (兼任) 講師 0 助教 0

教授：須藤 訓任、望月 太郎

准教授：中村 征樹 (全学教育推進機構所属・兼任)

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
23	4	5	0	0	0	0	0

*うち留学生1名、社会人学生1名

**哲学・思想文化学専修として

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	5	1	1	1
2019	9	2	1	1
計	14	3	2	2

*哲学・思想文化学専修として

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

学部と大学院でそれぞれ以下の具体的な目標を掲げた。【学部】哲学の基本文献読解のための演習を学部生向けに開講し、基礎学力を養成する。/卒業論文を提出する予定の学生に対しては、研究発表を行わせ、論文を仕上げられるように指導する。【大学院】修士・博士論文作成のための十分な個別指導を行う。/研究テーマに関連した論文紹介などを含む研究発表を行わせ、その記録をHPにアップする。/博士後期課程の学生には、『メタフィシカ』およびその他の学術誌への投稿に向けた指導を行う。/学生の外国語力向上のために、英語による授業を複数開講する。また、院生および学生の哲学に対する関心をいっそう深化させるためのワークショップを開催する。

2. 研究

哲学哲学史専門分野との共同で、欧文学術誌として *Philosophia OSAKA* 第 14 号、第 15 号を刊行し、Web 上に公開する。/哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野との共同で、論文集『メタフシカ』第 49 号、第 50 号を刊行し、Web 上に公開する。/哲学哲学史専門分野との共催で、研究会 *handai metaphysica* の研究例会および特別講演会を年度内に 2 回程度行う。/スタッフが海外で研究発表を行う。

3. 社会連携

哲学哲学史専門分野との共同で、開局された HP 上の〈ビデオ・メタフシカ〉から、さまざまな情報を発信する。/哲学哲学史専門分野との共同で、世界哲学の日に記念イベントを実施する。/海外で国際連携に努める。

Ⅲ. 活動の概要(2018 年度～2019 年度)

1. 教育

各種論文作成のためのさまざまな個別指導を行なったが、個人情報等に配慮して、卒業論文および修士論文の題目のみを公開し、大学院生の研究発表の記録を HP 上に公開することは避けた。/学部生と大学院生が学問的な交流をもてるように、共通の演習および講義を行うとともに、大学院生の論文作成演習への学部生の参加を促した。/英語による授業を開講し、学生たちの英語によるディスカッション能力と作文能力の向上を図った。/哲学ワークショップを開催し、院生および学生の哲学に対する関心を深化させた。目標は達成されたと考える。

2. 研究

哲学哲学史専門分野との共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第 14 号、第 15 号を刊行し、海外主要大学および国内主要大学に送付した。また、哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野との共同で論文集『メタフシカ』第 49 号、第 50 号を発刊し、国内主要大学に送付した。これらはどちらも、Web 上での公開も行っている。英語による授業を開講して、学生たちの英語によるディスカッション能力の向上を図った。2019 年度については、COVID-19 感染拡大防止のため *handai metaphysica* 研究例会および *handai metaphysica* 特別講演会を中止せざるを得なかった。また、大阪大学国際共同研究促進プログラム（タイプ B）に採択されていた研究が昨年度に引き続き遂行され、「日本-ASEAN グローバル哲学研究交流ラボラトリー」の設置に向けて共同研究が行われた。ラボの相手方であるチュラロンコン大学文学部哲学科から教員を招き、学内外の研究者を交えて公開研究会「ヘイトスピーチ：アジア地域における／のための国際研究交流」（2018 年 12 月 15 日、待兼山会館）に続き、公開講演会「Deflective democracy」（2019 年 8 月 1 日、文学研究科中庭会議室）を開催した。一部特殊事情もあって、変更を余儀なくされたところもあったが、大方目標は達成されたと考える。

3. 社会連携

哲学哲学史と共同で HP 上に開局された〈ビデオ・メタフシカ〉から、哲学哲学史スタッフの最終講義等を発信した。哲学哲学史専門分野との共同で、世界哲学の日記念企画を実施した。各種プログラムによって研究交流及び教育活動を行い、国際ジョイントラボの設置により国際連携を勧めている。以上の催しには学外から市民も参加した。目標は達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018 年度～2019 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、修士論文・卒業論文いずれでも、比較的水準の高い成果がでた。これらの点から、所期の目標はほぼ達成できたと考えている。在学中の学生に関しても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

国内での学会発表や国外の国際コロキウムへの参加があり、また欧文誌と和文誌発行による研究成果の国内外への発信という点で目標はおおむね達成された。また研究会の積極的な開催に関しても、目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	1	0	1
2019	1	0	1
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

戸谷洋志 「ハンス・ヨナスにおける倫理思想の体系について 形而上学の概念を手がかりに

主査:須藤訓任 副査:望月太郎、舟場保之、嘉目道人 2019/3

井西弘樹 「認識と同情—ニーチェ中期思想の変容過程—」

主査:須藤訓任 副査:望月太郎、舟場保之 2020/3

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	3(3)	1(0)	1(0)	0(0)	0(0)	5(3)
2019	1(1)	2(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(1)
計	4(4)	3(0)	1(0)	0(0)	0(0)	8(4)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	2	3	2	0	0	7
2019	0	2	2	0	0	4
計	2	5	4	0	0	11

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

- ・谷山弘太、「「疚しい良心」のアンビバレンス—ニーチェ『道徳の系譜』第二論文の再構成」、『独文学報』、大阪大学ドイツ文学会、第34号、7-27頁、2018年
- ・谷山弘太、「「約束することが許される」ということ—ニーチェ『道徳の系譜』第二論文における「主権的個人」についての考察」、『倫理学年報』、日本倫理学会、第68号、127-140頁、2019年
- ・西村知絢「ハイデガーにおける語りと言明」『現象学年報』34号、日本現象学会、pp.153-160、2018年11月20日、査読あり
- ・入江祐加「ディルタイの美学・文芸論における人間本性の心理学的分析」『メタフェシカ』第49号、pp.141-152、2018/12/21
- ・中村文彦「大阪北部地震における大阪大学学生のSNS利用状況」『大阪大学高等教育研究』第7号、2019/3

【2019年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

- ・井西弘樹「未来への同情—ニーチェによる同情の肯定—」『ショーペンハウアー研究』第24号・別巻4号、pp.97-112、査読有、2019/11/30
- ・大久保歩「大いなる政治とは何か—後期ニーチェの政治構想の背景—」、『待兼山論叢』第53号、pp.43-59、2019/12/25
- ・中村文彦、中村柁樹「研究公正の現状をどう把握するか—質問紙を活用した研究公正調査の動向—」『RI: Research Integrity Reports』第4号、pp.49-77、2020/3

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

- ・谷山弘太、「「約束することが許される」ということ—ニーチェ『道徳の系譜』第二論文における「主権的個人」についての考察」、日本ショーペンハウアー協会第29回ニーチェ・セミナー、2018年5月4日、於:大学セミナーハウス
- ・Kota Taniyama, „Versprechen können“ oder „versprechen dürfen“?: Anmerkungen über die ersten drei Abschnitte in der zweiten Abhandlung von Nietzsches Zur Genealogie der Moral“ (《„Ohne Zukunft, ohne Erinnerungen, so sitze ich hier“: Friedrich Nietzsche zwischen Geschichte und Gedächtnis》, Friedrich-Nietzsche-Stiftung Nietzsche-Gesellschaft e. V., 27. Internationaler Nietzsche-Kongress in Naumburg (Saale)), 2018年10月12日、於:Nietzsche-Dokumentationszentrum in Naumburg (ドイツ)
- ・井西弘樹「ニーチェの同情批判について」、第15回ニーチェ研究者の集い、大阪大学、2018/9/8

- ・井西弘樹「気質から情熱へ—中期ニーチェ哲学の転換点—」, 第 30 回ニーチェ・セミナー, 帝京大学, 2018/12/16
- ・大久保歩「ニーチェにおける〈政治的なもの〉の変遷—ニヒリズムの視座から—」, 第 29 回ニーチェ・セミナー(日本ショーペンハウアー協会)、2018 年 5 月 5 日、大学セミナーハウス。
- ・Ayumu Okubo “The Periodical Transition of Nietzsche’s ‘the Political’ in the Light of Nihilism,” The 24th Annual Conference of the Friedrich Nietzsche Society, 20th September, 2018, Newcastle University.
- ・大久保歩「フリードリヒ・ニーチェの政治思想—デモクラシーのジレンマ—」, 上廣倫理財団助成研究発表会、2018 年 12 月 15 日、公益財団法人上廣倫理財団UFホール

【2019 年度】

〔博士前期〕

- ・岸川丈流「天神丸周辺地域の風力発電施設立地をめぐる反対運動」, 第18回年次研究大会, 金沢工業大学 扇が丘キャンパス 5 号館, 2019/11/9
- ・岸川丈流「風力発電施設建設をめぐる反対運動～天神丸周辺地域を事例に～」, 第 2 回政策のための科学オープンフォーラム～科学による政策課題解決への挑戦:たゆまぬ共創・共同～, 政策研究大学院大学想海楼ホールほか, 2020/1/15

〔博士後期〕

- ・井西弘樹「物語と自己形成—ニーチェ『ツァラトゥストラはこう言った』の「救済について」に関する考察—」, 関西教育学会第 71 回大会, 関西学院大学, 2019/11/16
- ・西村知紘『『存在と時間』の学問性について』, 日本現象学会第 41 回研究大会, 岡山大学, 2019/11/24

(3)その他(書評・翻訳など)

【2018 年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

- ・大久保歩「新刊紹介」、REPRE(表象文化論学会会報) 34、2018 年。松本卓也／山本圭編『〈つながり〉の現代思想—社会的紐帯をめぐる哲学・政治・精神分析』、明石書店、2018 年 3 月。 <https://www.repre.org/repre/vol34/books/editing-multiple/kakinami/>

【2019 年度】

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2019 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2019 年度 学部 : 1 名 大学院 : 0 名 (計 1 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018 年度～2019 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 8名

2018年度：2名 2019年度：6名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 7名

*学部卒業者は哲学哲学史との合計で記載。

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度：0名 2019年度：0名

9. 刊行物

2018年度 『メタフュシカ』第49号、*Philosophia OSAKA*, No. 14

2019年度 『メタフュシカ』第50号、*Philosophia OSAKA*, No. 15

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

第15回ニーチェ研究者の集い

2018年9月8日

於：大阪大学豊中キャンパス待兼山会館会議室

第16回ニーチェ研究者の集い

2019年9月21日

於：大阪大学豊中キャンパス待兼山会館会議室

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

2018「世界哲学の日」記念講演会(2018年11月24日14時-16時、文経中庭会議室)

タイトル:「ゲームにおける真理と他者——プロ将棋の場合——」

講演者:嘉目道人(文学研究科特任講師)

参加者8名。

入江幸男教授最終講義(2019年3月8日、文法経講義棟文41)

入江幸男(哲学哲学史教授)「問答の哲学をめざして」

参加者52名。

第21回 *handai metaphysica* 研究例会(2019年3月25日、待兼山会館会議室)

末田圭果(哲学哲学史博士前期課程)

マティアス・コスラー著「性格の経験としてのショーペンハウアー哲学」

マルティン・モルゲンシュテルン著「ショーペンハウアーにおける道徳の形而上学的根源」

(『コンテクストにおけるショーペンハウアー』より)

阿部倫子(哲学哲学史博士後期課程)

ライプニッツにおける共可能性と不共可能性

西村知紘(現代思想文化学博士後期課程)

ハイデガーにおける解釈と言明の主題化

原田淳平(産学共創本部)

「真である」という性質が「実質的ではない」とはどういうことか

参加者 12 名。

第 17 回哲学ワークショップ(2019 年 3 月 30 日(土) 12:30~17:00、大阪大学豊中キャンパス 文法経本館2F 大会議室)

個人研究発表

12:30 - 13:30 世界3の過密性と客観的知識の成長 について

発表者:池田健人(人間科学研究科・博士前期課程 1 年)

13:40 - 14:40 ハーバーマスのポストナショナル・デモクラシー理論

——カントから/への二度の「逸脱」と「回帰」

発表者:崎山英俊(文学研究科・哲学哲学史博士前期課程 1 年)

14:50 - 15:50 「人格」の実体化に関する言語哲学的 試論

発表者:岩本智孝(文学部・哲学・思想文化学 4 年)

16:00 - 17:00 人工的・道徳的行為者について機械倫理 が解決すべき三つの問題

発表者:姜雪菲(人間科学研究科・博士前期課程 1 年)

参加者 11 名。

・2019「世界哲学の日」記念講演会(2019 年 11 月 16 日 14 時-16 時、文法経済学部本館 2F 大会議室)

講演タイトル:「真理について——問答の観点から」

講演者:入江幸男大阪大学名誉教授

参加者 10 名。

12. 教員の研究活動(2018 年度~2019 年度の過去 2 年間)

1. 須藤 訓任 教授

1955 年生。1983 年京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。文学博士(京都大学)。大谷大学助教授、同教授を経て、2004 年 10 月より現職。専攻:西洋近現代哲学

1-1. 論文

須藤訓任 「「二」の夢想——ハイデガー のトラークル論を脱構築するデリダと、デリダを再構築するクレルの余白に」『メタフュシカ』50, 文学研究科哲学講座, pp. 1-21, 2019/12

Suto, Norihide, "Existenz und Wissenschaft in Heideggers Sein und Zeit" *Philosophia OSAKA*, 14, 文学研究科哲学講座, pp. 27-51, 2019/3

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高田珠樹, 須藤訓任, 新宮一成, 道籟泰三(共編)『フロイト全集』別巻, 岩波書店, 451p., 2020/2

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西哲学会・委員, 2007年11月～現在に至る

2. 望月 太郎 教授

1962年生。1991年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程哲学哲学史専攻中退。博士(文学)(大阪大学1997年)。徳島大学、東海大学を経て、1998年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2004年4月、大阪大学大学教育実践センター助教授、2006年11月同教授、2012年4月より大阪大学大学院文学研究科教授。2014年4月～2017年4月、大阪大学海外拠点本部教授・ASEANセンター(バンコクオフィス)センター長(学内派遣)。専攻：フランス哲学、現代思想、社会思想、高等教育論。

2-1. 論文

望月太郎「発展途上国における教育開発のための哲学プラクティス～国際協力と哲学へのニーズ:カンボジアでの実践から」『思考と対話』(日本哲学プラクティス学会), Vol.1-創刊号, 日本哲学プラクティス学会, pp. 57-61, 2019/6

Mochizuki, Taro, Peter Harteloh(共著), "Reading the Correspondence between Descartes and Princess Elisabeth from the Viewpoint of Philosophical Counselling: Introduction and Research Questions" Young E. Rhee (Kangwon National University, Korea), *Journal of Humanities Therapy*, 10-1, Humanities Institute, Kangwon National University, Korea, pp. 155-172, 2019/6

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

望月太郎(書評)「デカルトの憂鬱(津崎良典著 2018、扶桑社)」『フランス哲学研究』(日仏哲学会), 24, pp. 277-280, 2019/9

2-4. 口頭発表

望月太郎「カンボジアにおける教育開発のための哲学プラクティス」大学評価学会第17回全国大会, 大学評価学会, 桜美林大学新宿キャンパス, 2020/3(COVID-19のため中止)

Mochizuki, Taro, (基調講演) "The Role of Philosophy with Regards to Other Disciplines", Postgraduate Study Program of Philosophy, Faculty of Humanities, Universitas Indonesia, Jakarta, Indonesia, 2018/12

Mochizuki, Taro, "Philosophy of Corruption", The 4th Conference on Contemporary Philosophy in East Asia, CCPEA 2018, CCPEA, National Chengchi University, Taipei, Taiwan, 2018/8(*The 4th Conference on Contemporary Philosophy in East Asia, CCPEA 2018, Book of Abstracts*, pp. 135-135, 2018/8)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2018年度～2020年度、基盤研究(C)(一般)、代表者:望月太郎

課題番号:18K00041

研究題目:発展途上国における教育開発のための哲学プラクティス

研究経費:2018年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 270,000円

2019年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

カンボジア及びミャンマーにおける哲学プラクティス(哲学カフェ、哲学カウンセリング、哲学ウォーク、子どもの哲学等の哲学対話)の普及を進め、さらに世界哲学の一部として東南アジア哲学を構想する。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2019年度、2: その他共同研究、助成金獲得者:望月太郎

助成金名:(株)academist 学術系クラウドファンディング

研究題目:発展途上国の文化や言語に合わせて、哲学する技法を「現地化」する

助成団体名:(株)academist

助成金額:2019年度 達成金額 1,028,101円(達成率 205%), 2019年12月27日

研究の目的:

カンボジアにおける哲学プラクティスの現地化のために、1)カンボジア人ファシリテーターの養成、2)クメール語(カンボジア語)による哲学対話の推進、3)クメール哲学(カンボジア哲学)の探求、4)コラプション(汚職・腐敗)の問題へ哲学・倫理的なアプローチを試みる。

2-8. 外部役員等の引き受け状況

Journal of Humanities Therapy, Humanities Institute, Kangwon National University, Korea・編集委員, 2014年4月～現在に至る

3. 中村 征樹 准教授

1974年生。2005年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(博士(学術))。東京大学大学院工学系研究科助手、文部科学省科学技術政策研究所研究官、大阪大学大学教育実践センター准教授を経て、2012年4月より大阪大学全学教育推進機構准教授。2007年11月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:科学技術史、科学技術社会論、研究公正、科学技術コミュニケーション。

3-1. 論文

市田秀樹, 中村征樹「二重投稿をめぐる動向—国際学会プロシーディング論文の扱いを中心に—」『RI: Research Integrity Reports』4, pp. 31-48, 2020/3

中村文彦, 中村征樹「研究公正の現状をどう把握するか—質問紙を活用した研究公正調査の動向—」『RI: Research Integrity Reports』4, pp. 49-77, 2020/3

中山一世, 中村文彦, 中村征樹「大阪北部地震における大阪大学学生のSNS利用状況」『大阪大学高等教育研究』7, pp. 1-14, 2019/3

3-2. 著書

中村征樹, 大阪大学シオセキカプロジェクト編『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』日本経済新聞出版社, pp. 3-10, 384-390, 2019/9

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中村征樹「研究不正をどう防止するか—STAP 問題から考える」榎木英介編著『研究不正と歪んだ科学—STAP 細胞事件を超えて』日本評論社, pp. 43-64, 2019/11

中村征樹「シチズンサイエンスのこれから」『理科教育ニュース』1079, pp. 2-3, 2019/7

中村征樹「シチズンサイエンスは学術をどう変えるか」『学術の動向』23-11, pp. 30-39, 2018/11

中村征樹「サイエンスカフェ」児玉善仁ほか編『大学事典』平凡社, p. 451, 2018/6

中村征樹「先端科学・技術」児玉善仁ほか編『大学事典』平凡社, pp. 554-555, 2018/6

中村征樹「知識基盤社会/教養と知識基盤社会」児玉善仁ほか編『大学事典』平凡社, p. 637, 2018/6

3-4. 口頭発表

中村征樹「研究不正をどう防止するか—STAP 騒動を超えて」国際競争時代の研究公正:『研究不正と歪んだ科学: STAP 細胞事件を超えて』出版記念シンポジウム, 一般社団法人 科学・政策と社会研究室, 大阪大学中之島センター, 2019/1/12

中村征樹「対話の両義性: 転機にあるリスクコミュニケーション」2019 年度日本リスク研究学会第 32 回年次大会企画セッション「リスク学事典第 4 章を輪読する」, 東京工業大学, 2019/11/24

中村征樹「シチズンサイエンスの可能性と課題」サイエンスアゴラ 2019 セッション『シチズンサイエンスが拓く新しいサイエンスの未来』, テレコムセンタービル, 2019/11/16

中村征樹「シチズンサイエンスの多様性と倫理」日本心理学会第 83 回大会公開シンポジウム「Society 5.0 を推進するシチズン・サイエンス—シチズン・サイコロジストによる社会課題解決を目指して—」, 立命館大学, 2019/9/13

中村征樹「研究倫理教育を効果的に実施するために—研究倫理教材の有効活用」第 3 回研究公正シンポジウム「研究不正—起こさせないために、起こってしまったら」, 日本学術振興会, ホテルグランドアーク半蔵門, 2019/9/9

中村征樹「研究公正をめぐる国内外の動向～具体的事例を基に～」公開セミナー「研究不正の防止と研究公正の推進」, 大阪大学経営企画オフィス, 大阪大学, 2018/11/16

中村征樹「シチズンサイエンスは学術研究をどう変えるか」日本学術会議公開シンポジウム「若手アカデミーが考えるシチズンサイエンスに基づいた学術横断的社会連携」, 日本学術会議, 2018/7/28

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

中村征樹 大阪大学総長奨励賞(研究部門), 大阪大学, 2015/7

中村征樹 大阪大学総長顕彰(教育部門), 大阪大学, 2014/7

中村征樹 大阪大学総長奨励賞(教育部門), 大阪大学, 2012/8

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2019 年度～2021 年度, 日本医療研究開発機構平成 31 年度研究公正高度化モデル開発支援事業, 代表者: 中村征樹

研究題目: 研究公正の推進に資する質問紙調査の活用に関する研究

研究経費: 2019 年度 直接経費 7,692,308 円 間接経費 2,307,692 円

研究の目的:

研究公正を推進するにあたって、オンライン教材を用いた研究倫理教育の実施や研究データの管理の関するルール策定等にとどまらず、研究機関や研究コミュニティが実効性のある取組を能動的に実施していくことが重要である。研究機関等が「研究活動の公正性のモニタリング」と「研究環境の公正性のモニタリング」を実施するのに有効な質問紙調査を開発、実施するとともに、本調

査で作成した質問紙および調査によってえられたデータについて、研究機関や研究倫理教育等で活用するための方策についても検討する。

3-7-2. 2019 年度～2020 年度、サントリー文化財団研究助成「学問の未来を拓く」、代表者:中村征樹

研究題目:シチズンサイエンスの普及にむけた概念整理とプラットフォーム構築の提案

研究経費:2019 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

本研究は、日本におけるシチズンサイエンスの今後の普及を見据え、シチズンサイエンスのもつ可能性を最大限発揮しうるための基盤づくりとして、シチズンサイエンスの健全な普及・発展にむけて留意すべき論点と課題を整理し、科学的意義と社会的意義の観点からあるべきシチズンサイエンスの姿を明確にする。さらに、シチズンサイエンスに関わる情報集約・共有やノウハウの提供、シチズンサイエンスの実施にかかわる課題や倫理的問題について議論する場をつくるなど、シチズンサイエンス推進の基盤となるプラットフォームのあり方について提案することを目指す。

3-8. 外部役員等の引き受け状況

PwC コンサルティング合同会社「研究公正の指導的専門職の育成方法に関する調査」に係る調査委員会委員, 2019 年 8 月～2020 年 3 月

日本学術振興会・研究公正アドバイザー, 2018 年 7 月～現在に至る

PwC コンサルティング合同会社「諸外国の研究公正推進に関する調査・分析業務事業委員会」委員, 2018 年 7 月～2019 年 3 月

新興出版社啓林館・平成 33 年度用中学理科教科書編集委員, 2018 年 2 月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2017 年 10 月～現在に至る

日本医療研究開発機構・課題評価委員, 2017 年 4 月～2019 年 3 月

京都府立医科大学 評価会議外部委員 (AMED 研究公正高度化モデル開発事業), 2017 年 4 月～2019 年 3 月

大阪成蹊大学・大阪成蹊短期大学・運営諮問委員, 2016 年 8 月～現在に至る

大阪大学生生活協同組合・理事, 2016 年 6 月～現在に至る

一般財団法人公正研究推進協会・理事, 2016 年 4 月～現在に至る

IDE 大学協会近畿支部・事業実施委員会委員, 2016 年 4 月～現在に至る

大阪府立大学 21 世紀科学研究機構研究公正インスティテュート・客員研究員, 2016 年 4 月～現在に至る

文部科学省 公正な研究活動の推進に関する有識者会議・委員, 2015 年 4 月～現在に至る

特定非営利活動法人 ratik・理事, 2013 年 1 月～2020 年 6 月

2-3 臨床哲学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 1 准教授 1 (兼任) 講師 1 助教 0

教授：堀江 剛

准教授：ほんまなほ (兼任)

講師：小西真理子

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
25	3	6	0	0	1	1	0

*うち留学生3名、社会人学生2名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	7	2	1	3
2019	7	2	0	1
計	14	4	1	4

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

当分野は、現代社会における様々な問題（例えば、科学技術、医療、看護、介護、福祉、教育、アート、ジェンダー／セクシュアリティなど）について考えるために、(1)西洋の倫理思想・道徳理論や現代の社会哲学・文化理論を学びながら、問題の定式化・分析を行うための方法論の探究、(2)当事者・関係者とともに、それぞれのおかれた具体的な文脈に即して問題を掘り起こし、考察するための哲学的対話法やコミュニケーション方法の調査・開発、また、(3)学内外のさまざまな研究者・実践家と連携しつつ、社会で現実機能し得る研究活動プランの作成と遂行、および共同研究プロジェクトの推進、この3点を基本姿勢としている。

上記の基本姿勢に基づき、次の目標を設定した。学部2-3年生には「倫理学演習：倫理学概論」「倫理学演習：p meets P」等の授業により倫理学の基礎知識と考え方を吸収させるよう努める。学部3-4年生には、研究発表を中心とした「倫

理学演習」等の授業により、自主的な研究課題の設定とより良い卒業論文に向けた準備を促す。大学院生には「臨床哲学論文作成演習」を軸に、「臨床哲学講義／演習」「社会哲学講義／演習」等の授業により、臨床哲学の考え方や実践方法を身につけさせる。学部生・大学院生に共通する目標としては、分科会・グループワークの形式をとる「臨床哲学演習：ひろば臨床哲学」の授業を設定し、対話に基づく学生の自主的な思考力促進に努めること、外国語（主に英語）の発信能力を組織的に養成すること、生命・医療の倫理学について先端的テーマに関する教育を提供すること、などがある。

また、社会人院生が多いため、社会人学生教育支援基盤経費を活用して、社会人学生と研究室での教育をつなぐ支援コーディネータ（ゲストスピーカー）を招聘し、社会人学生のモチベーションを高めるとともにネットワークを作ることを目標とした。

2. 研究

研究については、教育と同様の基本姿勢に基づきつつ、文献研究および哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行うことを目標とした。そこには、任意団体 Café Philo や「患者のウェルリビングを考える会」（神戸）などと連携して定期的に哲学対話を開催すること、CO デザインセンターと連携して哲学的対話の文化を社会に浸透させること、などが含まれる。そのような研究活動に学生も積極的に参加させることでインターンシップにもつながる経験が積めることも目標とした。

3. 社会連携

社会連携については、当分野の活動全般が現代社会での事象を対象とすることを基本姿勢としていることから、教育・研究両分野において社会との連携を充実させることを目標とした。大学外の様々な職業や立場の市民との協力によって研究活動を実施すると同時に、そういった研究活動に学生を従事させ、かつ部分的にはあるがイニシアティブをとって学生に研究を遂行させる。その教育的な意義も視野に入れた形で、社会連携につながる活動を行う。また、そうした研究活動の成果を報告書や研究室紀要、HP（ブログ）など様々な媒体を用いて発信することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

上記目標に掲げた全ての授業を実施するとともに、次のような改良を加えた。「倫理学講義：倫理学概論」では、2017年度までの「倫理学思想史」中心の授業に代えて「倫理学のテーマから学ぶ」と「現代社会の倫理問題」という2部構成の授業を行い、学生がより「倫理学」を自分たちの社会の問題として意識できるようにした。研究発表を中心とした「倫理学演習」では、「論文・研究調査の考え方」に関するレクチャーを設けるとともに、グループワークによる各自の研究課題の掘り起こしを行い、適切な論文作成と研究課題への接続を促進するようにした。「臨床哲学論文作成演習」では各自の研究発表に加えて「共同プロジェクト：ヘルス／ケアを問い直す」を企画し、臨床哲学の共同研究に向けたプラットフォームを設定した。

2. 研究

雑誌『臨床哲学』第20号（特集：東アジア哲学会議）を、2019年5月にWEB上で刊行した他、教員が以下の論文・研究発表等を行なった。

2018年度：「『医療の組織倫理』という視点」（第10回応用哲学会、名古屋大学、堀江と共同研究者によるワークショップ、2018/4/8）、「哲学する装置：ソクラテック・ダイアログ」（第1回日本哲学プラクティス学会、明治大学、堀江単独発表、2018/8/26）、「The Psychologically Dependent Person in an Ethic of Care: Considering the Pathological Situation」（24th World Congress of Philosophy、北京、小西単独発表、2018/8/14）、「『ケアする責任』と『ケアしない責任』：現代家族の『依存』に着目して」（第40回日本現象学会・男女共同・若手研究者支援ワークショップ「家族におけるケアと依存」、東京大学、小西単独講演、2018/11/18）、「Response to Eva Kittay」（Intersections: Feminist Care

Ethics & Disability Studies・Philosophies of Difference & Phi Research Group、Deakin University、小西単独発表、2018/12/6,)、「共依存と社会問題：「離れたくない」という声にいかに向き合うか」(南山大学社会倫理研究所：2018年度第3回しゃりんけんトークセミナー、南山大学、小西単独講演、2018/12/14)、「中絶における女性の倫理的葛藤と責任：ギリガンによるケアの倫理の視点から」(『待兼山論叢(哲学編)』第52号、小西単著論文、2018/12)、「異なる語り方」に向けて：著書『共依存の倫理』書評への応答(『立命館生存学研究』第2号、2019/3)。また、堀江が代表を務める科研「組織における価値の働きに関する臨床哲学的研究」の一環で、哲学対話 Socratic Dialogue を2018年5月と10月に実施した。

2019年度：「組織として倫理を考える：病院内倫理委員会の参与観察から」、第2回東アジア臨床哲学会議、台湾国立政治大学、堀江単独発表、2019/10/20)、親をかばう子どもたち：虐待経験者の語りを聴く(『現代思想』2019年9月号、小西寄稿、2019/8)。科研「組織における価値の働きに関する臨床哲学的研究」の一環で、哲学対話 Socratic Dialogue を2019年4月と12月に実施した。

3. 社会連携

任意団体 Café Philo や「患者のウェルリビングを考える会」(神戸)などと連携し、様々な地域で定期的に哲学カフェを開催、哲学的対話の文化を社会に浸透させるよう努めた。また中之島センターでは、ケアの臨床哲学研究会の主催による「ケアの倫理」講演会・ワークショップを4回開催(2018/9/9、2019/3/16、2019/6/30、2019/9/29)、各分野の専門家と市民との意見交換の場を作った。この中には、大阪大学国際共同促進プログラム(短期人件費支援、2019/4-8)として北京城市学院公共管理学部より招いた徐静文講師による講演「中国における在宅ケアの現状と問題点」が含まれる。

また、認定 NPO 法人ワンダーポートと共催で「ギャンブル等依存問題セミナー in 大阪『パチンコ・パチスロに依存する人の多様な背景と支援について』(後援：認定 NPO 法人 リカバリーサポート・ネットワーク/依存の問題の支援に携わる人たちの勉強会、協力：アイエス・フィールド、特別協力：全日本社会貢献団体機構、大阪大学、2019/6/30)を開催、小西が講演「共依存の考え方」を行なった。また小西が代表を務める科研「嗜癖的関係性と家族の「病理」をめぐる臨床哲学的研究」の一環として、京都・岡山を中心に活動する「〈ケア〉を考える会」において小西が2回講師を務めた(2018/10/14、2019/1/27)。

国際交流活動として、韓国慶北大学哲学科と共同で「2019 臨床哲学・哲学プラクティス国際セミナー&ワークショップ」を開催(大阪大学、2019/7/30-8/1)。哲学対話演習/堀江、臨床哲学講義(「臨床哲学からフィロソフィへ」/ほんま、「はじまりの場所」/小西)の他、慶北大学教員・院生、臨床哲学院生による研究発表が行われた。この他、研究室主催の活動として、講演会「依存症への臨床社会学からのアプローチ」、「哲学プラクティスについての講演会・ワークショップ：ベルギー・スイスでの活動から」を開催した。また堀江が、大正中学(奈良県御所市)において中学校教員を対象とした Socratic Dialogue 研修会を実施した(2020/1-3/4)。

IV. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

学部においては「倫理学」に関連する授業の改良、大学院では「臨床哲学」の理解と同時とその明確化の過程に積極的に関与することを教育目標としたが、目標は達成されたと考えている。

2. 研究

学内外と連携した諸々の研究、研究成果の社会への発信という点で目標は達成されたものと考えている。しかし、組織上の見直しや人員不足のため、雑誌『臨床哲学』が2018年度をもって休刊、毎年2~3回開催していた「臨床哲学研究会」も休会にした。これらの点については、今後(2020年度以降)新たな名称(『臨床哲学ニューズレター』および「臨床哲学フォーラム」として活動を再開する予定である。

3. 社会連携

上記の教育・研究に関する記述と同じく、社会との連携に関する目標も十分に達成されたものとする。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	3	0	3
2019	1	0	1
計	4	0	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

中西チヨキ「創造としての語ることと聴くこと：病いの子どもとともに生きる母の体験をとおして」2018/8

主査：堀江剛 副査：入江幸男、浜渦辰二、西村ユミ

高山佳子「ケアの倫理と生活世界：ケアの倫理の現象学的探求のための序説」2019/2

主査：堀江剛 副査：須藤訓任、小西真理子、浜渦辰二

高原耕平「声と時：阪神淡路大震災期復興住宅の記憶と主体」2019/2

主査：ほんまなほ 副査：堀江剛、望月太郎、小西真理子

小泉朝未「ともにあることを実現する身体の実現：アートプロジェクトの記述を通じた考察から」2020/2

主査：ほんまなほ 副査：北原恵、堀江剛、小西真理子

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	1(0)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	2(1)
2019	2(1)	1(1)	0(0)	0(0)	1(0)	4(2)
計	3(1)	1(1)	1(1)	0(0)	1(0)	6(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	2	4	1	1	0	8
2019	1	2	3	0	0	6
計	3	6	4	1	0	14

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

高原耕平「研究倫理としてのアドボカシー・リサーチ：R.J.リフトンとラップ・グループ」『待兼山論叢（哲学篇）』第52号, pp.73-91, 2018/12/25

小泉朝未「アートプロジェクトが捉えなおす支援と関係性：ダンスの感性が取り上げる身体の考察か」『アートミーツケア 学会オンラインジャーナル』第10号, 2019/3

【2019年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

小泉朝未 “Othering or Inclusion: Focusing on a Contemporary Dance Project with an Ethnic Minority in Japan” 『Journal of Urban Cultural Research』第18号, pp.60-73, 査読無, 2019/7/1

小泉朝未「関係性が引き出す即興舞踊：対話を通じた多文化共生プロジェクトの考察から」『舞踊学』第42号, pp.33-44, 査読有, 2019/12/31

小泉朝未「ともにいることと生まれる声：ハワイ詩の創作パフォーマンス活動の記述による考察」『メタフェシカ』第50号, pp.117-130, 査読有, 2019/12/31

小川長「経営における両義性に関する考察：良いことについて」『経営哲学論集』第35号, pp.58-61, 査読無, 2020/3/31

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

高原耕平「証言構造としての〈傷〉：阪神淡路大震災期復興住宅における外傷的体験の対話と分析」, 「傷つきやすさと有限性の現象学」第7回研究会, 國學院大學, 2018/5/3

高原耕平「アウグスティヌスと PTSD：記憶を語りなおすということ」, 第38回第38回大阪大学医療人文学研究会, 大阪大学, 2018/8/22

桂ノ口結衣「哲学対話において「発言はしなくても OK」か?: オスカル・ブルニフィエの哲学プラクティスから」, 日本哲学プラクティス学会第1回大会, 明治大学, 2018/8/26

小川長「経営における「ケアの倫理」の可能性」, 経営哲学学会第35回全国大会, 慶應義塾大学, 2018/8/31

小川長「デジタル時代の経営、生き方、そして生きる意味」, 第43回北星学園大学公開講座, 北星学園大学, 2018/9/28

小泉朝未「ダンスを用いた多文化共生プロジェクト：他者化の契機とその変容についての考察」, 第70回舞踊学会大会,

お茶ノ水女子大学, 2018/12/9

小泉朝未「Educational program for cultivating citizenship through expressive dialogue」, リーディングフォーラム
2018, 一橋大学, 2018/12/4

小泉朝未「Othering or Including ‘the Culture’: Contemporary dance art project with ethnic minorities」, The 17th
Urban Research Plaza’s Forum: “Safeguarding Cultural Heritage in an Urbanizing World”, 大阪大学, 2019/3/12
【2019年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

金和永「「ゼロ・トレランス型」教育についてのノート」, 2019 臨床哲学・哲学プラクティス国際セミナー&ワークショップ, 大阪大学豊中キャンパス, 2019/8/1

小泉朝未「ともにいること(インクルージョン)の成立とそれに伴うアートプロジェクトの記述に基づく考察から」, 2019
臨床哲学・哲学プラクティス国際セミナー&ワークショップ, 大阪大学豊中キャンパス, 2019/8/1

桂ノ口結衣「「哲学対話」に参加することと「居場所」であること」, 第 11 回応用哲学会ワークショップ, 京都大学,
2019/4/21

桂ノ口結衣「亡命王女エリザベトの哲学的悩みとデカルトの応答しそこない: 哲学的探求におけるジェンダーの不可視
化」, インターカレッジサマーセミナー・ワークショップ Global Network for Gender Studies in Asia, チュラロンコ
ーン大学, 2019/9/7

小泉朝未「アートプロジェクトを捉えるインクルージョンの動的構造について」, 第 1 回 URP 先端都市特別研究員(若
手)合評会, 大阪市立大学, 2019/9/18

小川長「経営における両義性に関する考察」, 経営哲学学会第 36 回全国大会, 立命館大学, 2019/8/31

(3) その他(書評・翻訳など)

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

高原耕平「災害で死ぬということ: 北大阪地震の内側から」, 『WEBRONZA』, 2018/6/22 (小論)

【2019年度】

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

〔博士後期〕

桂ノ口結衣: 第 13 回スミセイ女性研究者奨励賞 (2019 年度)

(テーマ: 子どもの哲学 (P4C) における哲学的事例検討の手法と有効性: 実施例の質的調査を通じて)

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018 年度 PD: 0 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 0 名)

2019 年度 PD: 0 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018 年度 学部: 0 名 大学院: 0 名 (計 0 名)

2019 年度 学部: 0 名 大学院: 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018 年度～2019 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

2019 年度

前原なおみ、博士後期課程修了、京都看護大学看護学部、講師（常勤）、2019/4

川崎唯史、博士後期課程修了、熊本大学大学院生命科学研究部生命倫理学講座、助教（常勤）、2019/6

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018 年度～2019 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 7 名

2018 年度：4 名 2019 年度：3 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 1 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名
その他 5 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

2018 年度：0 名 2019 年度：1 名

9. 刊行物

2019 年度 『臨床哲学 vol.20 特集：東アジア哲学会議』 2019/5/20

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

講演会「依存症への臨床社会学からのアプローチ」	2019 年 1 月 16 日
哲学プラクティスについての講演会&ワークショップ	2019 年 3 月 19 日
臨床哲学・哲学プラクティス国際セミナー&ワークショップ	2019 年 7 月 30 日～8 月 1 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

ケアの臨床哲学研究会「ケアの倫理：いま在宅・施設で考えること」	2018 年 9 月 9 日
ケアの臨床哲学研究会「ケアの倫理：「かんたき」の可能性」	2019 年 3 月 16 日
ケアの臨床哲学研究会「中国における在宅ケアの現状と問題点」	2019 年 6 月 30 日
ケアの臨床哲学研究会「立ち止まり物語る臨床倫理のススメ」	2019 年 9 月 29 日

12. 教員の研究活動(2018 年度～2019 年度の過去 2 年間)

1. 堀江 剛 教授

1961 年生。2001 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（臨床哲学専攻）単位取得退学。博士（文学）（大阪大学、2003 年）。2004 年、広島大学総合科学部助教授。2007 年、同准教授。2011 年、同教授。2016 年 4 月より現職。専攻：哲学／倫理学／臨床哲学

1-1. 論文

堀江剛「病院における臨床倫理の取り組みを問い直す視点：ある市民病院の委員会活動から」『九州医学哲学・倫理学会』（九州医学哲学・倫理学会），9，pp. 13-24, 2019/9

堀江剛「哲学する装置:ソクラテック・ダイアログ」『環境会議』(なし), 秋, 事業構想大学院大学出版部, pp. 178-183, 2018/9

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

堀江剛「組織として倫理を考える:病院内倫理委員会の参与観察から」東アジア臨床哲学会議, 台湾国立政治大学, 台湾国立政治大学, 2019/10

堀江剛「哲学する装置:ソクラテック・ダイアログ」第1回日本哲学プラクティス学会, 日本哲学プラクティス学会, 明治大学, 2018/8

服部俊子, 堀江剛, 大北全俊他「医療の組織倫理」という視点」第10回応用哲学会, 応用哲学会, 名古屋大学, 2018/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2017年度~2019年度、挑戦的萌芽研究、代表者:堀江剛

課題番号:17K18462

研究題目:組織における価値の働きに関する臨床哲学的研究

研究経費:2018年度 直接経費 944,623円 間接経費 270,000円

2019年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

本研究の目的は、組織、特にヒューマンサービス組織において「価値がどのように働いているか」を、理論・方法に関する新たな試みによって解明することである。すなわち、理論的には哲学・倫理学と組織論における分野横断的な交流を通して、方法的には哲学対話を用いた独自の研究調査方法によって解明することである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. ほんま なほ 教授

1970年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科哲学講座助手、同講師を経て、2005年4月に大阪大学コミュニケーションデザイン・センター講師に着任し、現在まで文学研究科を兼任。2006年4月同センター准教授、2020年8月よりCOデザインセンター教授。専攻:哲学/倫理学/臨床哲学

2-1. 論文

ほんまなほ「臨床哲学とフェミニズム:〈聴く〉から〈ともに語る〉へ」『臨床哲学』(臨床哲学研究室), 20, 臨床哲学研究室, pp. 83-

103, 2019/5

ほんまなほ 「性と性別の多様性とデザインの課題」『福祉のまちづくり研究』(日本福祉のまちづくり学会), 21-1, 日本福祉のまちづくり学会, pp. 49-53, 2019/3

ほんまなほ, 浜渦辰二(共著)「思想的運動としての臨床哲学という社会学共創」永田靖・佐伯康考(共著)『街に拓く大学』大阪大学出版会, pp. 86-100, 2019/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

ほんまなほ 「語りあいの場をつくること、こえをあげることのむずかしさ」セミナー&ワークショップ「インクルージョンと'Belonging」, セミナー&ワークショップ「インクルージョンと'Belonging」, 大阪大学, 2019/11

Homma, Naho, "Feminist Clinical Philosophy and Creative Writing", International Conference on Clinical Philosophy, International Conference on Clinical Philosophy, 国立政治大学, 2019/10

ほんまなほ 「姿を見せることは、弱みをさらすことだが、わたしたちの最大の力の源にもなる」第 22 回日本福祉のまちづくり学会全国大会シンポジウム, 日本福祉のまちづくり学会, 日本大学, 2019/8

ほんまなほ 「臨床哲学からフィロソフィへ」臨床哲学・哲学プラクティス国際セミナー, 大阪大学文学研究科臨床哲学研究室・国立慶北大学哲学科, 大阪大学, 2019/7

ほんまなほ 「〈こえ〉と輪唱」シンポジウム: ヴァルネラビリティと対話, 哲学的当事者研究の展開, 神戸大学, 2019/2

ほんまなほ 「こえ ことば 詩 うた」セミナー: 教育とコミュニティ活動における対話と即興音楽, OCU テニューアトラック研究集会, 大阪市立大学, 2019/1

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本哲学プラクティス学会・運営委員, 2018年8月～現在に至る

アートミーツケア学会・理事, 2006年10月～現在に至る

3. 小西 真理子 講師

1984年生。2014年、立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程修了。博士(学術)(立命館大学、2014年)。日本学術振興会特別研究員PD、RPDを経て、2018年4月より現職。専攻: 倫理学/臨床哲学

3-1. 論文

- 小西真理子 「攻撃性をともなう依存者へのケア:自閉症児の母親ルーディ事例の検討」『立命館文学』(立命館大学人文学会), 665, pp. 239-252, 2020/3
- 小西真理子 「「規範の外の生」と倫理」——安井絢子さんによる『共依存の倫理』の書評への応答——」『倫理学論究』(関西大学倫理学研究会), 6-1, pp. 19-32, 2020/3
- 小西真理子 「共依存の考え方」『パチンコ・パチスロに依存する人の多様な背景と支援について～正しい向き合い方について考える～報告書』NPO 法人ワンデーポート, pp. 3-9, 2020/3
- 小西真理子 「「ケアする責任」と「ケアしない責任」:現代家族の「依存」に着目して(男女共同参画 若手研究者支援ワークショップ 報告「家族におけるケアと依存」)」『現象学年報』(日本現象学会), 35, pp. 23-25, 2019/11
- 小西真理子 「親をかばう子どもたち:虐待経験者の語りを聴く」『現代思想』47-12, 青土社, pp. 183-189, 2019/8
- 小西真理子 「「異なる語り方」に向けて(著書『共依存の倫理』書評へのリプライ)」『立命館生存学研究』2, 立命館生存学研究センター, pp. 27-34, 2019/3
- 小西真理子 「中絶における女性の倫理的葛藤と責任 ——ギリガンによるケアの倫理の視点から——」『待兼山論叢(哲学編)』52, 大阪大学文学会, pp. 1-18, 2018/12

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

- 小西真理子 「『共依存の倫理』第6章「共依存と回復論」第2節「回復論の倫理観」」ケアを考える会(第128回), ケアを考える会(京都), 山科、山添宅, 2020/3
- 小西真理子 「ケア・BDSM・親密性:BDSMにおける規範をめぐって」2019年度 SOGI 研究会 公開研究会(立命館大学先端総合学術研究科院生プロジェクト), 立命館大学先端総合学術研究科, 立命館大学, 2020/2
- 小西真理子 「『共依存の倫理』第6章「共依存と回復論」第1節「回復者の統治」」ケアを考える会(第127回), ケアを考える会(京都), 山科、山添宅, 2020/1
- 小西真理子 「ケア関係のなかの暴力性」The Korean Philosophical Society's Fall Conference 2019: Korean Society - What is the Problem now?, The Korean Philosophical Society, 慶北大学, 2019/11
- 小西真理子 「世代間連鎖をめぐる言説と語り」第2回東アジア臨床哲学会議:現象学・人文臨床学・倫理学, Research Center for Chinese Cultural Subjectivity in Taiwan, 政治大学, 2019/10
- 小西真理子 「共依存者に「寄り添う」ことはできるのか?:当事者の多様性・分離を望まない当事者について考える」ビューフォーラム VI: 共依存関係における意思決定支援の在り方, NPO 法人岡山意思決定支援センタービューユー, きらめきプラザ, 2019/10
- 小西真理子 「『共依存の倫理』第4章「共依存とフェミニズム」」ケアを考える会(第125回), ケアを考える会(京都), 山科、山添宅, 2019/9
- 小西真理子 「【基調講演】共依存の考え方」パチンコ・パチスロに依存する人の多様な背景と支援について, NPO 法人ワンデーポート, 大阪大学, 2019/6
- 小西真理子 (招待講演)「『共依存の倫理』と対話する」ケアを考える会(第122回):ケアを考える会(第122回), ケアを考える会, 山科, 2019/1
- 小西真理子 (招待講演)「共依存と社会問題:「離れたくない」という声にいかに向き合うか」2018年度第3回しやりんけんトークセミナー:「君がいなくてダメなんだ」と言われたい?, 南山大学社会倫理研究所, 南山大学, 2018/12
- 小西真理子 (招待講演)「Response to Eva Kittay」Intersections: Feminist Care Ethics & Disability Studies:Intersections:

Feminist Care Ethics & Disability Studies, Philosophies of Difference & Phi Research Group, Deakin University, 2018/12

小西真理子 (パネリスト)「ケアする責任」と「ケアしない責任」:現代家族の「依存」に着目して」第 39 回日本現象学会男女共同参画 WS:家族におけるケアと依存, 日本現象学会, 東京大学, 2018/11

小西真理子 (招待講演)「「ケア」から／を問い直す:エヴァ・キテイ『愛の労働』を起点として」ケアを考える会(第 120 回):ケアを考える会(第 120 回), ケアを考える会, 山科, 2018/10

Konishi, Mariko, (招待講演)“Encountering the Race Issue as Japanese”, 人種差別の現象学研究会:ヘレン・ンゴ『人種差別の習慣』合評会:人種差別の現象学研究会:ヘレン・ンゴ『人種差別の習慣』合評会, 人種差別の現象学研究会, 立教大学, 2018/8

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

小西真理子 大阪大学賞(若手教員部門), 大阪大学, 2019/11

小西真理子 第四回生存学奨励賞, 立命館大学生存学研究センター, 2018/12

小西真理子 第十回社会倫理研究奨励賞, 南山大学社会倫理研究所, 2017/3

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2019 年度、若手研究、代表者:小西真理子

課題番号:19K12922

研究題目:嗜癖の関係性と家族の「病理」をめぐる臨床哲学的研究

研究経費:2019 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的:

本研究は、現代家族における「病理」概念について批判的に検討することで、嗜癖の関係性にある者が分離を望まないような場合においても、その生を肯定するためには何が求められているのかを明らかにすることを目的とする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

関西倫理学会・委員, 2019 年 11 月～現在に至る

関西倫理学会・編集委員, 2019 年 11 月～現在に至る

2-4 中国哲学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 1 准教授 0 講師 1 助教 0

教授：湯浅 邦弘
講師：辛 賢

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
5	0	3	0	0	0	0	0

*うち留学生0名、社会人学生0名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	1	0	0	1
2019	0	3	0	1
計	1	3	0	2

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

学部生については、①中国哲学の基礎知識と思想史全般の流れを理解するよう指導する。②文献資料を読むために必要な技術など、基礎的な調査能力について指導する。大学院生については、①各研究主題に関する専門知識及び資料分析の方法を習得できるよう指導する。②国内外の学会での積極的な研究発表（口頭発表・論文の投稿）を奨励する。学部生・大学院生共通の教育目標としては、①論文作成に備え、随時個別指導を行う。②修了（卒業）後の進路について随時相談を行い、それぞれの希望に応じた柔軟な対策・指導を行う。③研究室HPの更新に努めるなど、学生に対する教育・研究情報の公開を進める。

2. 研究

本研究室は、全国でも数少ない中国哲学研究の拠点として定評を得ている。特に、新出土文献の研究と懐徳堂の研究は、本研究室の研究活動の両輪となっている。そこで、①中国出土文献研究会の事務局として、新出土文献の研究を推進し、

海外学術調査を進めるとともに、その成果を国内外の学会で発表する。②大阪大学中国学会の事務局として、『中国研究集刊』を刊行する。③懐徳堂研究会の事務局として、懐徳堂文庫資料の調査研究を進め、その成果を報告書にまとめて刊行する、などを目標として掲げた。

3. 社会連携

社会連携の一環として、国際学術交流を推進し、また、一般財団法人懐徳堂記念会の事業に協力することを目標として掲げた。具体的には、①中国や台湾の大学と共催して国際学会・シンポジウム、または講演会を開催する。②懐徳堂の復興に尽力した西村天囚について、その故郷である種子島在住の子孫が保管してきた貴重資料の整理・研究を進め、その成果を公開する。③懐徳堂記念会の各種講座について、企画・運営に協力する、などである。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

大学院・学部ともにそれぞれの必要な知識や研究方法について習得するよう、指導を行った。大学院生に関しては、国内外の研究交流会および学会において、口頭発表や論文の投稿を行えるよう指導した。一方、学部指導においては、資料の解説に必要な基本知識・調査技術などについて指導を行った。進路についても、随時相談に乗り、その結果、それぞれの希望する道に進むことができた。なお、中国出土文献や懐徳堂事業に関する研究情報をHPに公開し、随時更新を行った。

2. 研究

【2018年度】

新出土文献研究については、研究室に事務局を置く中国出土文献研究会が、海外研究者による講演会の主催や中国の国際学会における研究成果の発表を行った。懐徳堂関連の調査研究については、種子島での西村天囚関係資料調査およびシンポジウム「天声人語の名づけ親—西村天囚が見た近代日本—」を開催した。研究室編集の学術誌『中国研究集刊』は期間中に第64号を刊行した。教員は、科研費補助による研究成果として口頭発表または学術論文として研究報告を行った。大学院生も、懐徳堂文庫資料の調査研究を精力的に進めた。

【2019年度】

中国出土文献研究会が、中国吉林省の吉林大学に赴いた。ここは、中国古文字学の研究拠点であり、同大学において講演会、学術交流会を実施した。またこの渡航には、研究室院生3名も帯同し、貴重な研究発表の機会を得た。懐徳堂関係については、引き続き、西村天囚の郷里種子島での資料調査を継続し、その成果の一端を学術論文として発表した。

3. 社会連携

【2018年度】

西村天囚旧蔵資料調査のため、種子島（鹿児島県西之表市）を訪問し、資料調査を行った。また、一般財団法人懐徳堂記念会・朝日新聞と連携して、シンポジウム「天声人語の名づけ親—西村天囚が見た近代日本—阪大の源流・懐徳堂が残したもの—」を開催した。

【2019年度】

引き続き、西村天囚の郷里種子島で資料調査を行い、島民の方々と交流を深めた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

目標に沿って着実な教育がなされていると自己評価できる。具体的には、(1)竹簡・帛書など新出土資料を精力的に取

り上げたこと、(2)中国古代思想を中心に、近世および日本漢学に至る幅広い時代を対象としたこと、(3)「懷徳堂文庫」や西村天囚旧蔵資料の整理・調査を行ったこと、などである。

2. 研究

設定した研究目標に従い、研究が円滑かつきわめて生産的に実施されていると自己評価できる。特に、新出土文献の研究と懷徳堂の調査・研究は、全国的に見ても本研究室の特色として認知されるに至っている。

3. 社会連携

国際学術交流は、海外研究者による講演会の開催と国際学会での研究発表という形で十分に達成できたと自己評価できる。また、当研究室の伝統として、懷徳堂事業への積極的な関わりがあるが、この点も、教授・学生とも全面的な協力に努めており、研究室の組織的な社会貢献が充分になされていると自己評価できる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	1	0	1
2019	0	1	1
計	1	1	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

佐藤由隆、懷徳堂学派の学問観、湯浅邦弘（主査）、浅見洋二（副査）、宇野田尚哉（副査）

【論文博士】

藤居岳人、懷徳堂儒学の研究、湯浅邦弘（主査）、浅見洋二（副査）、宇野田尚哉（副査）

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	1(0)	1(1)	0(0)	1(0)	0(0)	3(1)
2019	3(2)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	4(3)
計	4(2)	1(1)	0(0)	1(0)	1(1)	7(4)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	2	1	0	0	0	3
2019	0	1	3	0	0	4
計	2	2	3	0	0	7

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

渡辺葉月 『晏子春秋』の「葬骨説話」について『東京女子大学日本文学』第115号, pp.117-132, 2019/3/15

〔博士後期〕

佐藤由隆 「五井蘭洲と中井履軒の格物致知論」『懐徳堂研究 第二集』, pp.71-91, 2018/11/21

鳥羽加寿也 「上古音における喉音の再分類について」『待兼山論叢（哲学篇）』第52号, pp.93-107, 2018/12/25

【2019年度】

〔博士前期〕

六車楓 「敦煌医書『明堂五藏論』の基本的性質」『待兼山論叢』哲学篇』第53号, pp.17-33, 査読無, 2019/12/25

菊池孝太郎・六車楓 「中井竹山の歴史観と元号観と—『草茅危言』巻之一「年号ノ事」を手掛かりに—」『懐徳』第88号, pp.33-56, 査読有, 2020/1/31

六車楓 「敦煌医書『明堂五藏論』とアーユルヴェーダの関わり」『第2回若手研究者フォーラム要旨集』pp.14-17, 査読有, 2020/3/23

〔博士後期〕

鳥羽加寿也 「上古漢語の声調における地域時代差——特に去声と入声の分類について」『中国研究集刊』第65号, pp.25-38, 査読有, 2019/6/30

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

佐藤由隆 「日本懐徳堂学派的知行論」, 第二屆国際青年儒学論壇, 山東省鄒城市擇隣山莊, 2018/9/16

佐藤由隆 「知行並進論的系譜——対日本儒学的影響」, 儒学: 思想与典籍工作坊, 北京大学, 2018/12/20

鳥羽加寿也 「上古音における匣母の分類と音価について」, 日本中国語学会第68回全国大会, 神戸市外国語大学, 2018/11/4

【2019年度】

〔博士前期〕

菊池孝太郎 「先秦期における鬼神への懐疑—戦国楚簡を手がかりとして—」, 中国出土文献研究会第71回研究会, 大阪大学, 2019/7/27

六車楓 「敦煌医書『明堂五藏論』の基本的性質」, 中国出土文献研究会第71回研究会, 大阪大学, 2019/7/28

六車楓 「敦煌医書『明堂五藏論』とアーユルヴェーダの関わり」, 第2回若手研究者フォーラム, 大阪大学, 2020/3/23
(新型コロナウイルスの影響で延期)

〔博士後期〕

鳥羽加寿也「楚簡資料による上古韻部の検討」, 中国出土資料学会 2019 年度第 1 回大会, 成城大学, 2019/7/6

(3)その他(書評・翻訳など)

【2018 年度】

〔博士前期〕

黄徳寛著, 草野友子監訳, 鳥羽加寿也・原毎輝・六車楓訳「安徽大学蔵戦国竹簡概述」『中国研究集刊』第 64 号, pp.24-37, 2018/6/30

鳥羽加寿也・渡辺葉月・六車楓・菊池孝太郎「懐徳堂関係文献提要 (三十四)」『懐徳』第 87 号, pp.60-69, 2019/1/31

〔博士後期〕

黄徳寛著, 草野友子監訳, 鳥羽加寿也・原毎輝・六車楓訳「安徽大学蔵戦国竹簡概述」『中国研究集刊』第 64 号, pp.24-37, 2018/6/30

鳥羽加寿也・渡辺葉月・六車楓・菊池孝太郎「懐徳堂関係文献提要 (三十四)」『懐徳』第 87 号, pp.60-69, 2019/1/31

【2019 年度】

〔博士前期〕

菊池孝太郎「凝り固まった朱子学からの脱却——吾妻重二著『朱子学の新研究』」『中国研究集刊』第 65 号, pp.82-93, 2019/6/30

六車楓「ベトナムの「孝」の歴史とこれから——佐藤トウイウエン著『ベトナムにおける「二十四孝」の研究』」『中国研究集刊』第 65 号, pp.94-105, 2019/6/30

渡辺葉月「子産研究ノート」『中国研究集刊』第 65 号, pp.106-114, 2019/6/30

鳥羽加寿也・六車楓・菊池孝太郎「懐徳堂関係文献提要 (三十五)」『懐徳』第 88 号, pp.57-64, 2020/1/31

湯浅邦弘主編・佐野大介・鳥羽加寿也・菊池孝太郎・六車楓ほか共著『中国思想基本用語集』, ミネルヴァ書房, 第 1 章・第 2 章・第 3 章 (pp2-127) 共同執筆, 2020 年 3 月

〔博士後期〕

鳥羽加寿也「古漢語における造語法の解明——孫玉文著『漢語変調構詞研究』」『中国研究集刊』第 65 号, pp.69-81, 2019/6/30

鳥羽加寿也・六車楓・菊池孝太郎「懐徳堂関係文献提要 (三十五)」『懐徳』第 88 号, pp.57-64, 2020/1/31

湯浅邦弘主編・佐野大介・鳥羽加寿也・菊池孝太郎・六車楓ほか共著『中国思想基本用語集』, ミネルヴァ書房, 第 1 章・第 2 章・第 3 章 (pp2-127) 共同執筆, 2020 年 3 月

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

六車楓「大阪大学大学院文学研究科賞」, 2020 年 3 月

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 1 名 (計 1 名)

2019 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018 年度 学部 : 0 名 大学院 : 1 名 (計 1 名)

2019 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018 年度～2019 年度に大学・短大・高専の常

勤職員として就職が決まった者について)

池田光子, 博士後期課程修了, 松江工業高等専門学校, 助教(常勤), 2018/4

佐野大介, 博士後期課程修了, 名古屋大学大学院人文学研究科, 准教授, 2019/10

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2018年度：1名 2019年度：0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度：0名 2019年度：0名

9. 刊行物

2018年度 『中国研究集刊』第64号 刊行

2019年度 『中国研究集刊』第65号 刊行

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

懐徳堂研究会(研究会、研究会開催・事務局引受) 2000年～現在に至る

中国出土文献研究会(2010年10月、戦国楚簡研究会を改称。研究会、研究会開催・事務局引受) 1998年～現在に至る

大阪大学中国学会(学会、事務局引受) 1984年～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第28回懐徳堂研究会(於大阪大学文学部中庭会議室) 2018年12月9日

第69回中国出土文献研究会(於大阪大学文学部ミーティングルーム) 2018年4月28日

第70回中国出土文献研究会(於大阪大学文学部中国哲学研究室資料室) 2019年3月23日・24日

第71回中国出土文献研究会(於大阪大学文学部中国哲学研究室資料室) 2019年7月27・28日

第72回中国出土文献研究会(於大阪大学文学部ミーティングルーム) 2019年2月29日・3月1日

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 湯浅 邦弘 教授

1957年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士(文学、大阪大学、1997年)。北海道教育大学講師、島根大学助教授、大阪大学助教授を経て、2000年4月現職。2011年7月、大阪大学功績賞(社会・国際貢献部門)受賞。2013年7月、中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会「優秀学術論文賞」受賞。専攻：中国哲学／中国思想史／懐徳堂研究

1-1. 論文

湯浅邦弘「西洋近代文明と向き合った漢学者—西村天因の「世界一周会」参加—」『大阪大学文学研究科紀要』(大阪大学大学

院文学研究科), 60, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-37, 2020/3

湯浅邦弘 「孔子と読書—「韋編三絶」の真相—」『史跡足利学校研究紀要 学校』(足利市教育委員会), 18, 史跡足利学校事務所, pp. 37-69, 2020/3

湯浅邦弘 「鉄砲伝来紀功碑文の成立」『国語教育論叢』(島根大学教育学部国文学会), 27, 島根大学教育学部国文学会, pp. 139-156, 2020/2

湯浅邦弘 「石濱純太郎・石濱恒夫と懐徳堂」『東西学術研究と文化交渉—石濱純太郎没後 50 年記念国際シンポジウム論文集—』(関西大学東西学術研究所), 関西大学出版部, pp. 285-296, 2019/11

湯浅邦弘 「日本の中国学と《四庫全書》」『首都師範大学中国四庫学研究中心『四庫学』』(首都師範大学中国四庫学研究中心), 5, 首都師範大学, pp. 48-54, 2019/5

湯浅邦弘 「日本の中国学研究と四庫全書」『懐徳堂研究』(大阪大学文学研究科懐徳堂研究センター), 10, pp. 3-10, 2019/2

湯浅邦弘 「懐徳堂と近現代日本の社会」『文化装置としての日本漢文学』勉誠出版, pp. 171-180, 2019/1

湯浅邦弘 「平成三十年度(二〇一八)種子島西村天囚関係資料調査について」『懐徳』(懐徳堂記念会), 87, pp. 6-10, 2019/1

湯浅邦弘 「西村天囚の知のネットワーク—種子島西村家所蔵資料を中心として—」『懐徳』(懐徳堂記念会), 87, pp. 11-24, 2019/1

湯浅邦弘 「時令説的展開—北大漢簡《陰陽家言》與銀雀山漢簡“陰陽時令、占候之類”—」『簡帛』(武漢大学), 17, pp. 195-214, 2018/11

湯浅邦弘 「懐徳堂文庫所蔵「版木」のデジタルアーカイブ」『懐徳堂研究第二集』(汲古書院), pp. 439-448, 2018/11

湯浅邦弘 「時令説の展開—北京大学竹簡『陰陽家言』、銀雀山漢墓竹簡「陰陽時令・占候之類」を中心として—」『漢字学研究』(立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所), 6, pp. 1-20, 2018/10

1-2. 著書

湯浅邦弘 佐野大介・佐藤由隆・鳥羽加寿也・菊池孝太郎・六車楓・渡辺葉月・藤居岳人・南昌宏・野口眞戒・久米裕子・鶴成久章・早坂俊廣・川尻文彦・林文孝・水上雅晴・池田光子・椛島雅弘・草野友子, 『中国思想基本用語集』ミネルヴァ書房, 364p., 2020/3

湯浅邦弘 『荀子(角川ソフィア文庫ビギナーズ・クラシックス中国の古典)』KADOKAWA, 203p., 2020/1

湯浅邦弘 『中国の世界遺産を旅する—響き合う歴史と文化—』中央公論新社, 242p., 2018/5

湯浅邦弘(編著), 矢羽野隆男, 中村未来他 15 名, 『教養としての中国古典』ミネルヴァ書房, 342p., 2018/4/30

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

湯浅邦弘 「清華簡《邦家之政》と儒墨的思想」吉林大学古籍研究所学術交流座談会, 吉林大学古籍研究所, 吉林大学, 2019/9

湯浅邦弘 「儒教空間—懐徳堂—」台湾中央研究院講演会, 台湾中央研究院, 中央研究院 R204 会議室, 2019/6

湯浅邦弘 「明治時代日本人所看到的「世界」—漢學家西村天囚世界環遊旅行—」多元文明與跨域對話國際研討會, 國立臺灣師範大學國際與社會科學學院, 國立臺灣師範大學, 2019/6

湯浅邦弘 「銀雀山漢墓竹簡「論政論兵之類」考釈」2018 暨南大学国際シンポジウム「中日古代兵学: 思想・歴史・文学の総合的アプローチ」, 暨南大学, 暨南大学, 2018/12

湯浅邦弘 「新出土竹簡から見る『論語』」日本論語教育学会講演会, 日本論語教育学会, 大阪大学中之島センター, 2018/11

湯浅邦弘 「日本の中国学研究と四庫全書」四庫学論壇, 首都師範大学・甘肅省図書館, 中国人民銀行營業管理部昌平培訓中心, 2018/10

湯浅邦弘 「石濱純太郎・石濱恒夫と懐徳堂」東西学術研究と文化交渉—石濱純太郎没後 50 年記念国際シンポジウム—, 関西

大学, 関西大学, 2018/10

湯浅邦弘 「清華簡《管仲》的政治思想」楚文化与長江中游早期開發国際学術研討会, 武漢大学, 武漢大学, 2018/9

湯浅邦弘 「古代中国の占術」日本易学連合会主催シンポジウム, 日本易学連合会, 大阪大学, 2018/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

湯浅邦弘 大阪大学総長表彰, 大阪大学, 2013/10

湯浅邦弘 2013 年中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会「優秀学術論文賞」, 中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会, 2013/7

湯浅邦弘 大阪大学功績賞(社会・国際貢献部門), 大阪大学, 2011/7

湯浅邦弘 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学共通機構, 2003/12

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2014 年度～2018 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:湯浅邦弘

課題番号:26284009

研究題目:中国新出土文献の思想史的研究—戦国簡・秦簡・漢簡—

研究経費:2018 年度 直接経費 3,300,000 円 間接経費 990,000 円

研究の目的:

現在、中国思想史研究の分野で世界的に注目を集めている新出土文献の解読を進め、中国古代思想史、特に先秦から漢代思想の形成と展開を明らかにすることを目的とする。具体的には、現在順次刊行が進められている『上海博物館蔵戦国楚竹書』『清華大学蔵戦国竹簡』『岳麓書院蔵秦簡』『北京大学蔵西漢竹書』等に基づいて、それぞれの新出土文献を、思想史・文字学の専門家からなる共同研究によって解読し、最終的には、これらの新出土文献の研究を通じて得られた新知見をもとに、新たな中国古代思想史の記述を目指す。

1-6-2. 2019 年度～2023 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:湯浅邦弘

課題番号:19H01193

研究題目:戦国秦漢簡牘の総合的研究—安大簡・清華簡・上博簡・北大簡を中心として—

研究経費:2019 年度 直接経費 2,500,000 円 間接経費 750,000 円

研究の目的:

本研究は、現在、中国学の研究分野で世界的に注目を集めている新出土文献(新出簡牘)の解読を進め、中国古代思想史、特に戦国期から漢代に至る思想の形成と展開、および中国古文字の変遷過程を明らかにすることを目的とする。具体的には、本年末から刊行が開始される安徽大学竹簡(安大簡)、ならびに現在順次刊行が進められている『上海博物館蔵戦国楚竹書』(上博簡)、『清華大学蔵戦国竹簡』(清華簡)、『北京大学蔵西漢竹書』(北大簡)等に基づいて、それぞれの新出土文献を、思想史・文字学の専門家からなる共同研究によって解読し、また、中国・台湾などで活発な活動を続けている出土文献関係の学会・研究会と学術交流を進め、さらには、上海博物館・清華大学・北京大学・安徽大学などにおいて出土文献の実見調査を行って、上記の解読作業を補完する。最終的には、これらの新出土文献の研究を通じて得られた新知見をもとに、新たな中国古代思想史・古文字学史の記述を目指したい。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2019 年度～2020 年度、6 : 研究助成、助成金獲得者:湯浅邦弘

助成金名:三菱財団研究助成

研究題目:「天声人語」の名づけ親西村天因の見た近代日本

助成団体名:公益財団法人三菱財団

助成金額:2019 年度 直接経費 720,000 円

研究の目的:

西村天囚は、明治・大正期の漢学者で朝日新聞の記者を務め、「天声人語」の名付け親として知られる。その旧蔵書三千点は現在大阪大学懐徳堂文庫の一部となっているが、最近、郷里の種子島・西村家に関係資料約二千点が残されていることが明らかになった。そこで本研究では、これらの資料を現地調査することによって、明治維新时期に一時衰退したとされる漢学が明治・大正時代に復興して近代漢学へと展開した軌跡の一端を明らかにする。また、日本の近代漢学・東洋学の形成過程とジャーナリズムの関係や日清・日露戦争期における、民間外交員としての天囚の役割などについて解明する。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本論語教育学会・副理事長, 2018年4月～現在に至る

日本儒教学会・評議員, 2016年4月～現在に至る

島根県立出雲高等学校SGH運営指導委員会・運営指導委員, 2015年7月～2019年3月

日本中国学会・評議員, 2013年4月～現在に至る

中国出土文献研究会・会長, 2012年4月～現在に至る

東方学会・学術委員(東方学査読委員), 2011年7月～現在に至る

全国漢文教育学会・理事, 2005年4月～現在に至る

日本道教学会・理事, 2004年4月～現在に至る

懐徳堂研究会・代表, 2000年4月～現在に至る

中国出土資料学会・理事, 1989年4月～現在に至る

2. 辛賢講師

1967年、韓国ソウル生。2002年、筑波大学大学院哲学・思想研究科博士課程修了。博士(文学)。日本学術振興会外国人特別研究員(筑波大学)を経て、2004年4月現職。専攻：中国哲学、漢代易学

2-1. 論文

辛賢「蔡沈『洪範皇極内篇』の八十一章一太玄との関わりから一」『狩野直禎先生追悼『三国志論集』』三国志学会, pp. 231-248, 2019/11

2-2. 著書

辛賢(編), 今井宇三郎(著)『新書漢文大系 40 易経』(「解説」及び六十四卦ごとの「背景」)明治書院, pp. 1-184, 2019/10

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

辛賢 日本中国学会賞, 日本中国学会, 2001/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本道教学会・理事, 2012年1月～現在に至る

日本中国学会・広報委員会委員, 2007年4月～2019年12月

三国志学会・評議員, 2006年7月～現在に至る

3. 草野友子 助教

1981年生。2009年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(中国哲学専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、2009年)。

2011年、日本学術振興会特別研究員PD。2014年、京都産業大学文化学部特約講師。2018年、大阪大学大学院文学研究科助教(2020年3月退職)。専攻:中国哲学

3-1. 論文

草野友子「清華簡『封許之命』の基礎的検討」『待兼山論叢(哲学篇)』53, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-15, 2019/12

草野友子「北大漢簡『周馴』所引『詩』的思想史研究」『簡帛』18, 武漢大学簡帛研究中心, pp. 189-198, 2019/5

草野友子, 中村未来, 海老根量介(共著)「2016-2017 日本學界中國出土簡帛研究概述」『簡帛』17, 武漢大学簡帛研究中心, pp. 307-323, 2018/11

草野友子「北大漢簡『周馴』の思想史的研究—『詩』の引用を中心に—」『漢字学研究』6, 立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所, pp. 33-46, 2018/10

3-2. 著書

湯浅邦弘, 佐野大介, 草野友子他(共著)『中国思想基本用語集』ミネルヴァ書房, pp. 289-327, 2020/3

草野友子『墨子』(株)KADOKAWA(角川ソフィア文庫, ビギナーズ・クラシックス中国の古典), 177p., 2018/9

湯浅邦弘, 矢羽野隆男, 草野友子他(共著)『教養としての中国古典』ミネルヴァ書房, pp. 175-189, pp. 207-220, 2018/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

草野友子「(書評)谷中信一編『中国出土資料の多角的研究』」『日本秦漢史研究』20, 日本秦漢史学会, pp. 154-170, 2019/11

黄德寬著, 草野友子(監訳), 鳥羽加寿也・原每輝・六車楓訳(共訳)(翻訳)「安徽大学蔵戦国竹簡概述」『中国研究集刊』64, 大阪大学中国学会, pp. 24-37, 2018/6

3-4. 口頭発表

草野友子「清華簡『封許之命』研究」世界漢字学会第七周年会, (社団法人)世界漢字学会, (華東師範大学)中国文字研究与应用中心, (慶星大学)韓国漢字研究所漢字文明研究事業団, 立命館大学, 2019/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2016年度～2020年度、若手研究(B)、代表者:草野友子

課題番号:16K16701

研究題目:中国新出土文献から見る「故事」の変遷と展開

研究経費:2018年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2019年度 直接経費 200,000円 間接経費 60,000円

研究の目的:

本研究は、新出土文献を用いて中国における「故事」の変遷と展開を考察し、中国古代思想史を再構築するものである。主な研究対象は、上海博物館所蔵の戦国竹簡、清華大学所蔵の戦国竹簡、北京大学所蔵の秦簡・漢簡の「故事」類文献であり、以下の三つの観点から研究を進める。

- (1) 各篇の竹簡排列や文字認定の問題を解決し、テキストを確定する。
- (2) 各篇の内容を検討し、その思想的特質や著作意図などを明らかにする。
- (3) 伝世文献と比較して、共通点や相違点を明らかにし、その文献的性格を探る。

そして、戦国竹簡・秦簡・漢簡の「故事」類文献と伝世文献とを総合的に検討し、戦国時代から漢代にかけての「故事」の変遷過程を解明する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

中国出土資料学会・理事・機関誌委員, 2016年7月～現在に至る

2-5 インド学・仏教学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 1 准教授 0 講師 1 助教 0

教授：堂山英次郎

講師：名和 隆乾

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
5	3	2	0	0	2	0	0

*うち留学生0名、社会人学生1名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	0	1	0	0
2019	0	1	0	0
計	0	2	0	0

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

学部生と大学院生の学問的な相互交流を促進できるような授業形態をとること、またインド学・仏教学関係の学会・研究会等の情報を収集して学生に周知し、研究意欲の高揚をはかることに力を置き、以下の更なる目標を設定した：学部では2年次生向けの専門語学と講義の授業を開講し、基礎的な知識や学力の充実を、また3年次以上の学生に向けては原典輪読の授業を開講し、研究資料の読解やその利用法のスキルアップを目標とした。4年次生には、卒業論文作成のための論文作成指導の授業を設定した。大学院では、修士論文及び博士論文の作成演習の授業を開講し、資料の解読と論文作成の指導に重点を置くとともに、学会での口頭発表や学術誌への投稿論文作成の奨励と指導を目標とした。また、各種研究助成に関する情報の入手につとめ、研究の経済的基盤を支援することも目標として掲げた。

2. 研究

教員・大学院生ともに、学内・学外の研究会には積極的に参加すること、また国内外の研究機関及び研究者との交流・協力を教員が主導して促進することを目標とした。

3. 社会連携

教員は積極的に一般向けの講演や著作を行うこと、及び学会等において役員等の責務を果たすことを目標として掲げた。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

設定した目標に向けて講義・演習を行ない、学部生の二次文献も含めた読解力の向上のため、授業・授業外での指導に多くの時間をかけた。また学問的な相互交流を促進するために、論文作成演習の授業を有効に使い、教員、大学院生、学部生の垣根を超えた全員参加型の議論・情報交換の場を、より一層充実させた。2019年度には、教員1名が外国語学部の兼任教員として授業(2学期1コマ)を担当し、その授業のTAを本研究室の大学院生が務めたことで、その大学院生の指導にも役立った。またこの授業にはインド学にも深く関係することから、本研究室の学生も参加し、学生の専門的学識の深化にもつながった。

2. 研究

学内外の研究会・学会へは、教員及び学生の多くが積極的に参加し、また国内外の研究者・学術機関との交流も活発に行なった。教員は、積極的に学会発表及び学術雑誌への投稿を行った。学生については、論文作成演習の授業(上記1.教育)の中で予備発表・予備議論を行なうことで、論文の質を大きく高めることに成功した。その他特記すべき活動として以下のものがある。教員1名は2018年度に、東北大学で開催された国際神話学会において研究発表を行った。また別の教員1名は、2019年度より、インド初期仏教における十二支縁起説成立史の解明を目指す科学研究費補助金基盤研究(若手研究)の研究代表者を務めている。

3. 社会連携

教員1名は「日本印度学仏教学会」評議員、「日本歴史言語学会」理事・事務局長等、複数の役員職を遂行している。同教員はまた、2019年度に一般向けの公開講座と文学研究科同窓会向けの公開講座とを、それぞれ1回ずつ行った。また別の教員1名は、寺院、病院などに直接出向き、本専門分野の知識を提供・共有したり、地域の公的機関の開催する講演会等でも積極的な情報発信を行なっている。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

前記の活動の結果、学部生の原典及び二次文献の読解力に向上が見られ、多彩かつ風通しのよい演習授業を行なった結果、幅広い視点や掘り下げた議論が活発に行われた。また、学部以来在籍している学生1名が質の高い修士論文を完成させ、若手研究者フォーラムや第71回日本印度学仏教学会学術大会に積極的に応募したことは、当研究室が設定した教育目標が継続的に機能し実を結んだひとつの証拠であって、客観的に見て評価できることであろう。当該年度における大学院生の学会発表等の数は当研究室に在籍する学生の数に起因するところが大きく、直ちに教育効果の問題に帰せられるわけではない。今後、新たに進学してくる学生たちが同様の教育を受けることで、これまで在籍した学生以上の成果を彼らが発信していくことが大いに期待できよう。当分野における教育の中心はサンスクリットなどで書かれた各種古典文献群の読解が中心となるため、長期にわたる粘り強い訓練を必要とすると同時に、学生個々人のレベルアップやその速度にも当然ながら個人差がある。しかし、学生1人1人に合った指導が行き届くように目配りをした結果が、如上の結果につながったと考えられる。目標の達成とともに、上記の方針を継続すべきものとして確認できたことも評価できよう。

2. 研究

各教員がそれぞれ、国内外の学会への出席、研究者・学術機関との交流に努め、また学会発表や学術誌への投稿も積極的に行っており、全体として目標を達成したと考えられる。また外部資金（科学研究費補助金）は、教員2名のうち1名が研究代表者として獲得している。国際学会への参加は近年特に活発になされており、今後そうした活動の教育・研究への還元・効果が更に期待できる。一方、外国語による論文の執筆や海外ジャーナルへの投稿については、教員は一定の成果を出してはいるが、今後はより積極的に行ない、特に大学院生にも促していくことが必要であると考えられる。

3. 社会連携

一般向けの著作や、学会等における役員の責務遂行において、目標は達成されたと言える。ただし、複数の役員等を兼務しているような場合、それらの仕事の本務の教育・研究に影響しないよう気をつける必要がある。一方、一般向けの講演会などへの参加という点では、一定の実績は見られるものの、当該研究室が主催をする場合も含め、研究成果の社会への還元や情報発信により積極的な役割を担う余地を残している。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	0	0	0
2019	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

なし

【論文博士】

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2019	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	1(1)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	1(1)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	0	0	0	0	0	0
2019	0	0	1	0	0	1
計	0	0	1	0	0	1

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2018年度】

なし

【2019年度】

〔博士前期〕

坪田さより「古代インドの祭式 — 『ヴァードゥーラ・シュラウターストラ』におけるヴァーージャペーヤ祭の研究 —」
『第2回若手研究者フォーラム要旨集』pp.10-13, 査読有, 2020/3/23

〔博士後期〕

なし

(2)口頭発表

【2018年度】

なし

【2019年度】

〔博士前期〕

坪田さより「古代インドの祭式 — 『ヴァードゥーラ・シュラウターストラ』におけるヴァーージャペーヤ祭の研究 —」,
第2回若手研究者フォーラム, 大阪大学, 2020/3/23 (新型コロナの影響で延期)

〔博士後期〕

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2019年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2019年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018 年度～2019 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018 年度～2019 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2018 年度：0 名 2019 年度：0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2018 年度：0 名 2019 年度：0 名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2018 年度～2019 年度の過去 2 年間)

1. 榎本 文雄 教授

1954 年生。京都大学文学部卒、京都大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学。文学修士（京都大学）、博士（文学、京都大学）。京都大学助手、華頂短期大学専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999 年 8 月より大学院文学研究科教授（2019 年 3 月定年退職）。2014 年度パーリ学仏教文化学会賞。専攻：インド仏教学

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

榎本文雄 2014 年度パーリ学仏教文化学会賞, パーリ学仏教文化学会, 2014/5

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・学術委員, 2011 年 9 月～現在に至る
日本西蔵学会・委員, 2005 年 10 月～現在に至る
仏教史学会・評議員, 2003 年 11 月～現在に至る
インド思想史学会・理事, 2003 年 4 月～2019 年 3 月
パーリ学仏教文化学会・理事, 1999 年 4 月～現在に至る
日本仏教学会・理事, 1996 年 4 月～2019 年 3 月
日本印度学仏教学会・理事, 1996 年 4 月～現在に至る

2. 堂山 英次郎 教授

1972 年生。大阪外国語大学外国語学部卒、東北大学大学院文学研究科博士後期 3 年の課程単位取得退学。文学修士（東北大学）、博士（文学、東北大学）。京都大学人文科学研究所助手を経て、2004 年 4 月大阪大学大学院文学研究科講師、2014 年 9 月同研究科准教授、2019 年 4 月より現職。2007 年日本南アジア学会第 1 回学会賞受賞、2008 年第 50 回日本印度学仏教学会賞受賞。

2-1. 論文

Dōyama, Eijirō, “A syntactic and semantic study of Indo-Iranian *mans dā”, In: P. Vinod Bhattathiripad and Shrikant Bahulkar (eds.) *Living Traditions of Vedas* (= Proceedings of the International Vedic Workshop (IVW) 2014), pp. 39-69, 2019/8: New Bharatiya Book Corporation
川村悠人・堂山英次郎・高橋健二「神の名の意味を知ること ——神名アグニの分析に見るヤースカの語源学と神学——」『南アジア古典学』(九州大学インド哲学史研究室) 14, pp. 177-201, 2019/7

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

堂山英次郎「イラン文化の背景をさぐる ——伝統と革新と——」21 世紀懐徳堂・大阪市都市計画局主催公開講座(i-spot 講座), 於 アイスポット(淀屋橋 odona2 階), 2019/9
Dōyama, Eijirō, “*yād, yadā, yādi*, and the ‘Subordinate Clause’ in Vedic”, The 7th International Vedic Workshop, International Vedic Workshop 2019, read at the Inter-University Centre, Dubrovnik, Croatia, 2019/8.
堂山英次郎「閻魔大王の原像を求めて ——インド・イラン的視点から——」大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座「阪大東

洋学の最前線」, 於 大阪大学豊中キャンパス, 2019/5

堂山英次郎 「Pan. III 4,7-8 が規定するヴェーダ語接続法の機能について」インド思想史学会第 25 回学術大会, 於 京都大学, 楽友会館), 2018/12

堂山英次郎 「神の名の意味を知ること—神名アグニ(agni)の分析に見るヤースカの語源学と神学」京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドウイズム」第5回シンポジウム「古典インドの哲学と学問 —始まりと展開—」, 於 京都大学, 芝蘭会館), 2018/10

堂山英次郎 「サンスクリット語の「名詞」を再考する ——Nominalization の視点から——」『体言化理論と言語分析』(鄭聖汝・柴谷方良編)第 2 回論文合評会, 於 大阪大学, 豊中キャンパス), 2018/9

堂山英次郎 「ジャムシード王の悲劇 ——インド・イラン的視点から——」第 52 回関西イラン研究会, 於 大阪大学, 箕面キャンパス), 2018/7

Dōyama, Eijirō, “How to be a hero in ancient India —Unusual birth and abandonment of children—”, read at the 12th Annual International Conference on Comparative Mythology, Tohoku University, Katahira Campus, 2018/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堂山英次郎 平成 20 年度国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 大阪大学, 2009/2

堂山英次郎 第 50 回日本印度学仏教学会賞, 日本印度学仏教学会, 2008/9

堂山英次郎 日本南アジア学会第 1 回学会賞, 日本南アジア学会, 2007/10

堂山英次郎 印度学宗教学会第 3 回学会賞, 印度学宗教学会, 2006/6

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2015 年度～2019 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 堂山英次郎

課題番号: 15K02042

研究題目: 接続法を中心とするヴェーダ語叙法の研究——文法研究と思想研究の融合を目指して——

研究経費: 2018 年度 直接経費 640,047 円 間接経費 210,000 円

2019 年度 直接経費 627,003 円 間接経費 0 円

研究の目的:

ヴェーダ語動詞の文法範疇「叙法」は、動詞の内容に対する話し手の態度を表示する。その正しい理解は、話し手の価値観や聞き手との関係性を知る有力な手がかりとなる。本研究は、叙法が最も豊富に用いられる『リグヴェーダ』を中心に、姉妹言語アヴェスタ語の資料をも参照しつつ、(1)積極的な態度表明を担う狭義の叙法(接続法・希求法・命令法)のうち接続法の機能を、他の二者との相関関係の中で明らかにし、(2)祭式・神話での祭官や神々の発言・会話に見る叙法の機能から、彼らの関係性や、その社会的・宗教的背景の解明を目指す。本来表裏一体の文法研究と思想研究とが、相互補完的にヴェーダ文化の理解に繋がる範例としたい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本歴史言語学会・事務局長, 2020 年 1 月～現在に至る

インド思想史学会・評議員・理事, 2019 年 4 月～現在に至る

日本佛教学会・理事, 2019 年 4 月～現在に至る

日本歴史言語学会・大会委員長, 2018 年 1 月～2019 年 12 月

日本歴史言語学会・理事, 2016 年 1 月～現在に至る

インド思想史学会・評議員・監事, 2013 年 12 月～2018 年 12 月

日本印度学仏教学会・評議員, 2004年7月～現在に至る

印度学宗教学会・評議員, 2004年6月～現在に至る

3. 名和 隆乾 講師

1984年生。大阪大学文学部卒、文学修士（大阪大学）。博士（文学，大阪大学）。2013年度日本学術振興会特別研究員、2016年4月大阪大学文学研究科助教、2018年10月同特任講師（常勤）をへて2020年4月より現職。専攻：インド初期仏教文献学

3-1. 論文

名和隆乾 「パーリ註釈文献における「子肉の喩」に関する一考察」『印度學佛教學研究』68-2, 日本印度学仏教学会, pp. 1058-1053, 2020/3

3-2. 著書

加治洋一(編), 漢訳仏典研究会(編), 名和隆乾,他(共著) 『『義足経』研究の視点 附・『義足経』訓読』自照社出版, pp. 3-22, 2019/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

Nawa, Ryūken, "Attitudes towards Suicide in the Pāli Canon", 11th INDAS International Symposium, INDAS, Ryukoku University, 2019/12

Nawa, Ryūken, "Some Remarks on maraṇa- ("death") in the Pāli Canon", Preparatory Session for 11th INDAS International Symposium, INDAS, Kyoto University, 2019/10

名和隆乾 「パーリ註釈文献における「子肉の喩」に関する一考察」日本印度学仏教学会第70回学術大会, 日本印度学仏教学会, 佛教大学, 2019/9

名和隆乾 「パーリ三蔵における固有名と「肩書き」の語順に関する研究」部派仏教研究会第9回会合, 部派仏教研究会, 龍谷大学, 2019/6

名和隆乾 「パーリ聖典における縁起説の文献学的研究」身延山大学国際日蓮学研究所例会, 身延山大学国際日蓮学研究所, 身延山大学, 2018/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2018年度～2021年度、若手研究、代表者:名和隆乾

課題番号:18K12198

研究題目:初期仏教における十二支縁起説成立史研究の再構築

研究経費:2018年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2019年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円

研究の目的:

仏陀や仏弟子の言行を伝えるインド初期仏典中(4～5 B. C.), 12因(支)に基づき苦の生成を説く十二支縁起説は中核的位置を占める。本研究課題では、多数の研究が存在しつつも未だ定説の無い十二支縁起説成立史の一端を、これと関連して古くから

難解とされてきた問題と共に、インド初期仏典中、唯一フルセットで現存するパーリ聖典を主資料とし、情報処理技術と印欧語比較言語学の知見を導入した文献学的手法を用い、従来に無かった視点の導入により、解明する。具体的には、後の縁起説解釈の中心典拠「分別経」(『サンユッタニカーヤ』第12章第2経)中の十二支縁起説が、五支縁起説を部分的に改変して取り込んでいる事を明らかにする。またその改変理由が、「分別経」の十二支縁起説が、単に一生涯でなく生死を繰り返す輪廻の苦を説明する為であった事も明らかにする。そして上記結果を出した上で、成立史研究の従来の手法が崩れて研究が停滞する中、新たな研究方法を提案する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-6 日本学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 3 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：平田 由美、北原 恵、宇野田尚哉

准教授：北村 毅、安岡 健一

助教：西井麻里奈

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
46	12	8	0	0	1	3	0

*うち留学生7名、社会人学生3名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	0	2	1	0
2019	16	1	3	0
計	16	3	4	0

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

教育について掲げた目標は、以下の6点である。①卒業論文・修士論文・博士論文作成について、日本学教員全員によって指導に取り組み、無理なく論文を完成させることができるようにシステムを充実させる(論文完成までのシステム充実)。②個別学術論文の作成について、テーマに応じて他大学の研究者も含めて議論する場を更に組織する(他大学との連携)。③大学関係者以外の場における議論の場を設け、異領域とのコミュニケーション能力の向上を図る(大学外との連携)。④海外の大学や機関と連携して発表・交流の機会を創出し研究室として支援する(海外の大学・機関との連携)。⑤学部生・院生による自発的な研究会活動を進めるための指導をおこなう(自主的活動の推進)。⑥自発的なパンフレットや情報発信を促進するための指導を更に強化する(メディアの創造)。総じて他機関との交流やコミュニケーションにかかわる環境の整備、ならびに能力の開発が目標となった。

2. 研究

研究について掲げた目標は、以下の3点である。①大小さまざまなシンポジウムや公開の研究会を組織し、その成果を『日本学報』において発信する(『日本学報』の活用とその内容の充実)。②個々の論文作成に当たり、日本学の中で議論を共有すべく討議の機会を設ける(研究に関わる討議空間の創出)。③他大学、大学以外の研究機関、個人などとの研究上の連携を更に強化する(研究ネットワークの強化)。総じて、個々の研究テーマに即した形で柔軟に研究環境が構築できる体制を目指し、課題牽引型の研究形態とそのための環境整備を重点的に行った。

3. 社会連携

社会連携について掲げた目標は、以下の2点である。①研究会を非専門家や市民とともにおこなう。その際、共通の課題を設定する。②学生・大学院生の活動の評価において、社会における活動を重視する。社会連携については、恒常的な研究会、あるいはシンポジウム等のイベントの計画過程に市民の参加を求めた点にある。またその際、公立ミュージアムや、NPO、NGOをはじめとする学外組織や、在野の研究グループとの密接な連携がポイントになった。またこうした連携は上記の研究形態とも密接に関わる。これらを達成するため、研究室のホームページをリニューアルした。今後、さらに充実化を図っていく予定である。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

卒業論文・修士論文・博士論文の作成についての指導において、より充実した開かれた環境の構築が進んだ。具体的には、複数の演習を通じて論文作成をバックアップする体制が一層強化された。さらに、領域横断的なカリキュラムである「日本学方法論の会」の開催や非常勤講師の招へいによって、学外者とのコミュニケーションも深まった。特筆すべきは、講演会・シンポジウム・ワークショップなどの「学生企画」や大学院生の学会旅費に対する経済的な支援であるが、それによって日本学所属学生の研究活動が確実に活性化されたことである。また、研究室内では、院生や学部生が主催する研究会活動が活発にみられ、院生と学部生間の研究交流も盛んであり、自発的な議論の場が着実に形成されつつある。以上を鑑み、目標はおおむね達成されたと考えるが、今後もさらなる教育体制の充実をはかるため、継続的なカリキュラムの改革に取り組む。

2. 研究

「日本学方法論の会」を開催し、国内外の研究者との学術交流を行った。国際日本文化研究センター、京都大学、神戸大学、同志社大学、天理大学などの関西圏の研究機関との連携も一層深まりつつある。また、京都国際マンガミュージアム、兵庫県立歴史博物館、北九州市漫画ミュージアム、南山宗教文化研究所などに就職している修了生たちとの情報交換も拡大し、見学会なども随時おこなっている。演習以外の研究会も多く開催され、他大学、他研究機関のハブとして日本学の場が機能しつつある。以上を鑑み、おおむね目標は達成されたと考える。

3. 社会連携

研究会やシンポジウムには、他大学の研究者以外にも市民が多く参加している。また大阪で活動するNPOやNGOのグループとの連携も深まり、恒常的な人的交流が行なわれている。さらに恒例となりつつある原田神社秋季例大祭への参加は、地域貢献として、地元でも評価されつつある。以上を鑑み、目標はおおむね達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

教育に関わる上記の活動により、卒業論文・修士論文・博士論文において、高い水準の維持と創造的なテーマ設定の深

化がすすんだ。また、海外との学术交流も活発に行い、国際日本学研究会の開催や、学生主催の研究会の実施は、特筆される教育活動の成果だと言える。また、学部生も含めて、複数の自主的な研究会組織が生まれ、文字通り議論の場としての日本学が構築されてきている。個々の研究もこうした複数の研究組織により生み出され維持されている。こうしたなかで育まれた議論のスキルや問題設定能力は、研究関係職のみならず出版やマスコミをはじめ多様な職種においても評価されている。以上から、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

研究に関わる上記の活動により、博士論文の執筆ならびにその出版物としての刊行がすすんだ。また他の個人研究においても多くの研究成果が公表され高い評価を受けている。研究環境については、議論のハブとしての役割は定着し、学外、非専門家との恒常的なネットワークも拡大した。2017年9月には、国際日本文化研究センターを拠点として阪大文学研究科も加盟する「国際日本研究コンソーシアム」が発足したが、その後の展開においても日本学研究室所属教員が大きく貢献し、国際的日本研究の連携体制の基盤づくりが進みつつある。以上より、おおむね研究についても目標は達成されたと自己評価できる。

3. 社会連携

社会連携に関わる上記の活動により、市民の研究会やシンポジウムへの参加はもとより、大阪で活動するNPOやNGOならびに在野の研究グループとの恒常的な連携がすすんだ。またこうした社会連携が、上記の教育活動や研究活動とも有機的に関連しはじめている。以上より、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	0	0	0
2019	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	2(2)	3(3)	0(0)	0(0)	0(0)	5(5)
2019	2(1)	4(4)	0(0)	1(0)	3(1)	10(6)
計	4(3)	7(7)	0(0)	1(0)	3(1)	15(11)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	5	4	7	0	1	17
2019	1	3	1	1	2	8
計	6	7	8	1	3	25

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

〔学部〕

坂口恵利佳「化粧行為からみるコミュニティ参与—対話的手法を用いて—」『日本学報』第38号, pp.70-99, 2019/3/31

坂本夏海「日本人女性がイスラーム教徒として生きるということ—ムスリマのヒジャーブをめぐる—」『日本学報』第38号, pp.100-139, 2019/3/31

西村まりな、松永健聖、前川拓人「アメリカ兵がいた時代 1945-1958—大阪国際空港周辺地域を中心に—」『日本学報』第38号, pp.38-52, 2019/3/31

〔博士前期〕

飯守桂一「「アート」「障害」「施設」を巡るまなざし—大阪阿倍野「アトリエコーナス」の活動を事例に—」『待兼山論叢』第52号, pp.97-116, 2018/12/25

〔博士後期〕

アレクサンダー・ギンナン「批判的地域主義と地域学の可能性—兵庫県北部における交流と交渉の地域調査」『待兼山論叢』第52号, pp.55-72, 2018/12/25

【2019年度】

〔学部〕

西村まりな「生き残った元特攻隊員たち：「特攻くずれ」の言説を中心に」『日本学報』第39号, pp.52-75, 2020/3/31

栖原志歩「和歌山県の盆行事：日高郡由良町興国寺燈籠焼きを中心に」『日本学報』第39号, pp.76-95, 2020/3/31

〔博士前期〕

登尾紗帆「大阪市大正区における沖縄シャーマニズムの変容：“カミゴト”と呼ばれる宗教実践の事例から」『待兼山論叢 日本学篇』第53号, pp.99-117, 2019/12/25

座間味希呼「沖縄製糖業史における USCAR」『よみがえる沖縄 米国施政権下のテレビ映像——琉球列島米国民政府 (USCAR) の時代 Enlightening through TV:USCAR Public Diplomacy,1950-1972』 pp.180-181, 査読無, 2020/2/10

登尾紗帆「「ユタ」をめぐる自己認識：大阪市大正区における沖縄シャーマニズム的实践の事例から」『日本学報』第39号, pp.33-51, 2020/3/31

〔博士後期〕

中西美穂「大阪アーツカウンシルの現場から：包括的な文化振興の基盤構築にむけて」『市政研究』第205巻, 2019秋号, pp.24-34, 査読無, 2019/9/1

Alexander Ginnan "The Ebbs and Flows of Uranihon:Engaging the Region(s) in Rock, Paper, Scissors" 『Cindy Mochizuki.Rock, Paper, Scissors: K is for Kayashima』 pp.7-11, 査読無, 2019/9/7

山本潤子「中国人強制連行の「戦後」における厚生省の「責任」—「中国人死没者名簿」作成過程の検討を中心に」『歴史評論』第836号, pp.70-86, 査読有, 2019/12/1

Facundo Garasino “Navigating Between the West and the Rest: East Asia’s modern Experience in the Works of

Enrique Gomez Carrillo (1904-1907)",『稲賀繁美編『異文化へのあこがれ—国際海洋都市 平戸とマカオを舞台に 在外資料が変える日本研究』国際日本文化研究センター』 pp.115-121, 2020/3/1

松本章伸「第 10 章 米国 VICE Media の表現形式にみる共生」『笠井賢紀、工藤保則編『共生の思想と作法』』 pp.200-212, 査読有, 2020/3/10

(2)口頭発表

【2018 年度】

〔学部〕

西村まりな、前川拓人、松永健聖「交流と断絶の占領期：大阪大学周辺地域を中心に」、度 学部学生による自主研究奨励事業 全学選抜自主研究成果発表会, 大阪大学、大阪大学会館, 2018/5/1

西村まりな、前川拓人、松永健聖「交流と断絶の占領期：大阪大学周辺地域を中心に」、文学部共通概説, 大阪大学文学部、豊中総合学館 402 講義室, 2018/7/24

松永健聖「平和資料館における性暴力の表象について」、度 学部学生による自主研究奨励事業 研究発表会, 大阪大学文学部、大会議室, 2019/2/12

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

仲村紗希"Inter-Asia Transboundary Migrant Workers History: The Case of the Okinawan Woman", HeKKSaGOn 2018 Young Scholar Symposium at Osaka University, 大阪大学吹田キャンパス, 2018/4/11

仲村紗希"Debunking Myths of Women's Images: The Case of the Female Migrant Workers from Okinawa", The Biennial Conference of the Asian Studies Association of Australia 2018, シドニー大学, 2018/7/5

猪岡叶英「天理市・柳本飛行場の建設にみる地域社会の戦争協力の記憶と語り」、国際日本学研究会第 12 回学術大会, 天理大学 (杣之内キャンパス), 2018/10/06

松本章伸「【研究大会賞受賞】テレビ番組アーカイブスを用いた研究の現状と可能性—日本テレビの女性ドキュメンタリー—制作者の作品を事例として— (研究大会賞選考報告)」, 第 14 回研究大会「語りと政策情報」, 龍谷大学大宮学舎, 2018/12/2

松本章伸「あなたの知らないドキュメンタリーの世界—現場とアカデミズムをつなぐ映像制作実践を事例として—」, 20 周年記念事業, JR ホテルクレメント徳島, 2019/2/24

松本章伸「リタの恋は国境を越えて—東ドイツ映画が描く人の移動と共生社会の変容」パネリスト」, 龍谷大学社会科学研究所 2018 年度第 1 回月例会, 龍谷大学深草学舎, 2018/5/18

Alexander Ginnan"The Ebbs and Flows of Uranihon: Beyond the Dichotomies of the Nation", 22nd Biennial Conference of the Asian Studies Association of Australia, University of Sydney, 2018/7/4

Facundo GARASINO「ブラジル・アマゾンにおける日本の開拓移民と settler colonialism:アマゾン産業界研究所を中心に」, 第 39 回日本ラテンアメリカ学会定期大会, 愛知県立大学長久手キャンパス, 2018/6/2

Facundo GARASINO「アルゼンチンで帝国日本を語る：ひとりの移民知識人による言論活動を中心に (1931-1942)」, カルチュラル・タイフーン 2018, 龍谷大学大宮キャンパス, 2018/6/24

Facundo GARASINO"Transcending Areas: Migratory and Intellectual Connections between Japan and Latin America", 22nd Biennial Conference of the Asian Studies Association of Australia, The University of Sydney, 2018/7/4

Facundo GARASINO"Japan's Last Colonial Frontier: Settler Migration, Development and Expansionism in the Brazilian Amazon", 4th Asian Association of World Historians Congress,, 大阪大学中之島センター, 2019/1/5

Facundo GARASINO"近代日本の歴史を再考する：ラテンアメリカにおける日本移民と「膨張主義」の関係から", 次世代に向けた日本研究の可能性：その 2・中南米, 東京外国語大学, 2019/2/22

Facundo GARASINO 「アルゼンチンの日本研究・日本教育事情：その歴史、現状と課題」、国際シンポジウム『次世代に向けた日本研究の可能性—その 2・中南米—』、東京都府中市 東京外国語大学府中キャンパス、東京外国語大学国際日本研究センター、2019/2/23

山本潤子「中国人強制連行の「戦後」における厚生省の「責任」、2019 京都・ソウル 東アジア次世代フォーラム、立命館大学衣笠キャンパス、2019/2/12

【2019 年度】

〔学部〕

松永健聖「ひめゆり学徒と向き合う」、豊中市立野田小学校、2019/11/5

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

Facundo Garasino "Cultural Propaganda by Japanese Migrants in Buenos Aires: Experiencing Locally the Transnational Expansion of the Japanese Empire". , Japanese Diaspora to the Americas: Literature, History, and Identity, Yale University, Yale McMillan Center, 2019/5/4

中西美穂「貸し画廊とアーティスト-田村慶子の陶作品《よりしろ》における楓ギャラリーの役割」、第 3 回科研研究会「東アジアの女性アーティストに見る地域と歴史の境界をめぐる研究」「女性アーティストを取り巻く諸相：多様性/生計/ギャラリスト」、大阪大学、2019/7/27

山本潤子「「認罪」実践としての中国人遺骨送還運動—福島県「中国人殉難烈士慰霊碑」と「満洲国軍」日系軍官大槻市郎の経験を中心に—」、東京歴史科学研究会 2019 年度 9 月例会、明治大学駿河台キャンパス、2019/9/21

牧野良成「“女性ユニオン”の先駆的組織の運動史的文脈を問う：1987 年・大阪の“女たちだけの労働組合”」、第 92 回日本社会学会大会、東京女子大学、2019/10/5

松本章伸「大阪市交通局の PR 動画にみる表現形式の特徴」、大阪の都市交通インフラ整備とメディア、大阪歴史博物館、2019/10/26

Sejin Cho “Identity and decolonization”, Graduate Conference in Japanese Studies, 大阪大学、2019/12/20

松本章伸「“新しい”テレビ・ドキュメンタリーが描くもの～『ドキュメント 72 時間』と日本の”群像”～」,NHK 文研フォーラム、東京千代田会館、2020/3/5（新型コロナウイルスで延期）

(3)その他(書評・翻訳など)

【2018 年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

書評 猪岡叶英「越智郁乃『動く墓 沖縄の都市移住者と祖先祭祀』』『日本学報』第 38 号, pp.158-163, 2019/3/31

【2019 年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

書評 趙世珍「下地ローレンス吉孝『「混血」と「日本人」ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』』『日本学報』第 39 号, pp.96-104, 2020/3/31

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

【2018 年度】

西村まりな、前川拓人、松永健聖

「大阪大学 学部学生による自主研究奨励事業 全額選抜自主研究成果発表会」優秀賞

【2019年度】

松永健聖

大阪大学文学部 文学部賞

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)

2019年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部:1名 大学院:0名 (計1名)

2019年度 学部:3名 大学院:0名 (計3名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

湯 天軼、博士後期課程修了、南通大学(中国)、2018/4

富永 悠介、博士後期課程修了、チェンマイ大学(タイ)、2018/10

永岡 崇、博士後期課程修了、駒澤大学、2018/

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 5名

2018年度:1名

2019年度:4名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 3名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2018年度:1名 2019年度:0名

9. 刊行物

2018年度 『日本学報』38、『Cultures/Critiques』9、『同時代史研究』

2019年度 『日本学報』39、『Cultures/Critiques』春季臨時増刊号、『同時代史研究』2

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際日本学研究会・事務局

日本思想史学会・事務局

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

【2018年度】

1、日本学方法論の会（担当 北原恵）

日付・場所 2018年4月26日 アッセンブリーホール（大阪大学・豊中キャンパス）

テーマ 絵本は戦争と暴力をいかに伝えるか？

発表者：クォン・ユンドク（絵本作家）、申明浩（武蔵野美術大学非常勤講師）、渡辺美奈（アクティブ・ミュージアム「わたちの戦争と平和資料館（wam）」館長）

2、国際日本学研究会第12回学術大会（担当 北村毅）

日付・場所 2018年10月6日 天理大学（杣之内キャンパス）

発表者：竹内 理恵（同志社大学大学院）、鹿野由行（大阪府立大学）、岡本直美（同志社大学大学院）、猪岡叶英（大阪大学大学院）、黛友明（神奈川大学）

【2019年度】

1、日本学方法論の会（担当 安岡健一）

日付・場所 2019年10月4日 美学棟1階日本B教室（大阪大学・豊中キャンパス）

発表者 謝花直美「占領下那覇の空間開放——公衆衛生、オフリミッツ」

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 平田 由美 教授

1956年生。大阪外国語大学外国語学研究科修士課程日本語学専攻修了。博士（文学）（京都大学）。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：日本文学・文化研究／ジェンダー研究

1-1. 論文

Hirata, Yumi, “Transitional identities and heteroglossia in Zainichi Korean Literature”『待兼山論叢 文化動態論編』(阪大文学会), 52, pp. 1-20, 2018/12

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

平田由美 「Recalling Refugees: Narrative of Mobility in Yoshida Tomoko」“Crossroads of cultures”: Sakhalin Island from the perspective of history and literature, Sakhalin State University, Sakhalin State University, 2019/9

Hirata, Yumi, (パネリスト) “Reshaping the Narrative of Mobility”, History Course Workshop: The Memories of Conflicts and Reconciliation: The Memories of Conflicts and Reconciliation, The College of Asia and the Pacific, Australian National University, 2019/3

平田由美（招待講演）「移動の経験を歴史化／現代化する」北京第二外国語学院国際学術研究集会歴史中的移動：歴史の中の移動，北京第二外国語学院，北京第二外国語学院，2018/9

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 第15回女性史青山なを賞，2000年

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 北原 恵 教授

1956年生。大阪大学経済学部卒業。同志社大学大学院文学研究科(美学及び芸術学)修了、東京大学大学院総合文化研究科博士課程(表象文化論)満期退学、学術博士(東京大学)。2001年甲南大学文学部助教授、2004年同教授、2008年大阪大学大学院文学研究科准教授、2012年より現職。専攻：表象文化論／ジェンダー研究

2-1. 論文

北原恵 「「国境を越える一女とアジア:第 11 回 丸木俊」(連載 Gender×アート)』『We Learn』vol.794, 日本女性学習財団, pp. 17-17, 2020/3

北原恵 「「国境を越える一女とアジア:第 10 回 イトー・タマリ」(連載 Gender×アート)』『We Learn』vol.793, 日本女性学習財団, pp. 17-17, 2020/2

北原恵 「「百島アートプロジェクト「百代の过客」——報告記」(AA91)』『ピープルズ・プラン』87, ピープルズ・プラン研究所, pp. 136-140, 2020/2

北原恵 「「国境を越える一女とアジア:第 9 回 」(連載 Gender×アート)』『We Learn』vol.792, 日本女性学習財団, pp. 17-17, 2020/1

北原恵 「「討論のまとめ」(「キューバの画家とは誰を指すのか:「統制」と「自由」のはざままで——キューバと DPRK)』『関西ジェンダー史カフェ:カフェ通信』6, 関西ジェンダー史カフェ, pp. 7-8, 2020/1

※<https://www.facebook.com/GenderHistoryCafeKANSAI/photos/pcb.1056336941390469/1056336488057181/?type=3&theater>

北原恵 「「国境を越える一女とアジア:第8回 あいちトリエンナーレ」(連載 Gender×アート)』『We Learn』vol.791, 日本女性学習財団, pp. 17-17, 2019/12

北原恵 「「国境を越える一女とアジア:第 7 回 沈遠」(連載 Gender×アート)』『We Learn』vol.790, 日本女性学習財団, pp. 17-17, 2019/10

北原恵 「「国境を越える一女とアジア:第 6 回 侯淑姿」(連載 Gender×アート)』『We Learn』vol.789, 日本女性学習財団, pp. 17-17, 2019/9

北原恵 「「小林喜巳子の版画 : 「彫刻刀で刻む社会と暮らし」展から」(Culture Review アート・アクティビズム(連載 90))』『ピープルズ・プラン』85, ピープルズ・プラン研究所, pp. 164-167, 2019/8

北原恵 「「国境を越える一女とアジア:第 5 回 琴仙姫」(連載 Gender×アート)』『We Learn』vol.788, 日本女性学習財団, pp. 17-17, 2019/8

Kitahara, Megumi, “Megumi Kitahara, “Between Tradition and Modernity: Tracing the Artistic Career of Taniguchi Fumie” *Registe*, vol.VIII-No.5, Spencer Museum of Art , The University of Kansas, pp. 40-57, 2019/7

※<https://indd.adobe.com/view/a0a8cd94-97ab-4831-8764-d8f0b210eaf0> (一般公開)

北原恵 「「国境を越える一女とアジア:第 4 回 金仁淑」(連載 Gender×アート)』『We Learn』vol.787, 日本女性学習財団, pp. 17-17, 2019/7

北原恵 「「国境を越える一女とアジア:第3回 新井光子」(連載 Gender×アート)』『We Learn』vol.786, 日本女性学習財団, pp. 17-17, 2019/6

北原恵 「「国境を越える一女とアジア:第2回 谷口富美枝」(連載 Gender×アート)』『We Learn』vol.785, 日本女性学習財団, pp.

17-17, 2019/5

北原恵 「「国境を越える一女とアジア:第1回 ゲリラ・ガールズ」(連載 Gender×アート)『We Learn』vol.784, 日本女性学習財団, pp. 17-17, 2019/4

北原恵 「2018 年度「方法論の会」の開催にあたって:絵本は戦争と暴力をいかに伝えるか?」『日本学報』38, 大阪大学文学研究科・日本学講座, pp. 1-6, 2019/3

北原恵 「기타하라 메구미「전쟁 체험 을 그리다 -오키나와・히로시마・공습의 기억」(「戦争「体験」を描く絵画——沖縄・広島・空襲の「記憶」)」, 済州大学平和研究所, 『平和研究』 第 29 卷第 1 号 <企画特集>, pp.105-143, 2019/2

北原恵 「市民の描いた戦争体験画——済州島、「沖縄戦の記憶と絵」『季刊ピープルズ・プラン』83, ピープルズ・プラン研究所, pp. 168-172, 2019/1

北原恵 「学問領域とジェンダー:天皇制研究」『ジェンダー史学』14, ジェンダー史学会, pp. 131-135, 2018/12

北原恵 「沖縄のディアスポラ・フェミニストが創る世界:ローラ・キナ」『季刊ピープルズ・プラン』81, ピープルズ・プラン研究所, pp. 167-171, 2018/8

北原恵 「ウーマン・ハウス展を見て:全米女性美術館」『季刊ピープルズ・プラン』80, ピープルズ・プラン研究所, pp. 164-169, 2018/5

2-2. 著書

Kitahara, Megumi 他, *전쟁과 미술 - 비주일 속의 아시아태평양전쟁*『현실문화연구, 現実文化研究, 286p. , pp. 31-61, 2019/2

北原恵他 『東アジアの中の戦後日本』臨川書店, 276p. , pp. 3-37, 2018/7

北原恵他(共著) 『皇后四代の歴史:昭憲皇太后から美智子皇后まで』吉川弘文館, 222p. , pp. 101-105, 2018/6

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

北原恵 「研究発表「イルクーツク&サハリン調査その後:美術」「難民」の時代とその表現」研究会, 「難民」の時代とその表現: 1930-50 年代北東アジアにおける移動と文化活動」(基盤研究 B:坪井秀人代表), 国際日本文化研究センター, 2020/2

北原恵 (招待講演)「「あいちトリエンナーレ 2019 を振り返って——出品作品から考える現代社会」」日本地方自治研究学会(関西西部会、第 116 回), 日本地方自治研究学会, 大阪学院大学, 2019/12

北原恵 (招待講演)「対話「表現の不自由を越えて」」「百代の过客」, ART BASE 百島, ART BASE 百島:百島旧庁舎, 2019/11

北原恵 「《ディナー・パーティ》からゲリラ・ガールズまで」SEA (Socially Engaged Art) レクチャー+ディスカッション・シリーズ:SEA (Socially Engaged Art) レクチャー+ディスカッション・シリーズ, SEA 研究所, 3331 アーツ千代田(東京), 2019/3

北原恵 「荒木光子の戦後史:『マッカーサー元帥レポート』を中心に」松本清張記念館 第 39 回研究発表会:松本清張記念館 第 39 回研究発表会, 松本清張記念館, 東京学芸大学, 2018/12

北原恵 「谷口富美枝(1910-2001)にとっての“Trans.”:日本/USA に生きた女性日本画家」国際シンポジウム「環太平洋の日系ディアスポラ・アート:環太平洋の日系ディアスポラ・アート, 京都大学人文科学研究所 科研費基盤(S)「人種かのプロセスとメカニズムに関する複合的研究」, 京都アカデミアフォーラム in 丸の内(東京), 2018/12

北原恵 「戦争「体験」を描く絵画——沖縄・広島・空襲の「記憶」」済州 4.3 70 周年特別企画「沖縄戦の記憶と絵」国際シンポジウム:済州 4.3 70 周年特別企画「沖縄戦の記憶と絵」国際シンポジウム, 済州 4.3 平和財団&済州大・平和研究所, 済州 4.3 平和記念館, 2018/11

北原恵 (招待講演)「「戦後」イメージ再:『マッカーサー元帥レポート』の戦争画」戦後史再考プロジェクト・研究会:戦後史再考プロジェクト・研究会, 広島市立大学平和研究所, 広島市立大学, 2018/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2017年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:北原恵

課題番号:17K02359

研究題目:「戦争画」概念を問い直すーアジア太平洋地域の比較調査から

研究経費:2018年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2019年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本プロジェクトの目的は、アジア太平洋地域の戦争画研究とそれに関する作品を調査することによって、軍事主義やポストコロナルの視点から日本の「戦争画」研究そのものを捉え直すことにある。具体的には、①アジア太平洋地域における戦争画研究と作品調査、②戦争を経験し複数の土地に移動した日系美術家の調査、③「戦争」をテーマにした現代作品の調査・聞き取り、④戦後の「戦争画」言説と分析概念の検証(「戦争画」「前線/銃後」等)。以上を踏まえて⑤「戦争画」研究の問題点を明らかにし、理論的組替えを試みる。戦争画研究はこの20年間で急速に発展・多様化し、実証的研究と図像分析は精緻化しているが、対象へのアプローチなど視点が固定化し語りの定型化が見られる。過渡期にあると言える現在、具体的作品の分析を通して理論化をはかる。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

韓国、高麗大学グローバル日本研究院、学術誌『日本研究』・海外編集委員、2016年1月～現在に至る

イメージ&ジェンダー研究会・事務局、2008年4月～現在に至る

3. 宇野田 尚哉 教授

1967年生。1993年大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了、1996年同後期課程単位修得退学。博士(文学)。2000年神戸大学国際文化学部講師、2001年同助教授、2007年同大学大学院国際文化学研究科准教授。2010年より大阪大学大学院文学研究科准教授、2017年より同教授。専攻:日本思想史

3-1. 論文

宇野田尚哉 「グローバル日本研究クラスター 2018年度活動記録」『グローバル日本研究クラスター報告書』2, 大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスター, pp. 1-4, 2019/3

宇野田尚哉 「特集 1 本特集について」『グローバル日本研究クラスター報告書』2, 大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスター, pp. 5-6, 2019/3

宇野田尚哉 「特集 2 本特集について」『グローバル日本研究クラスター報告書』2, 大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスター, pp. 37-40, 2019/3

宇野田尚哉 「『原爆に生きて』から『この世界の片隅で』へ:山代巴を中心に」『原爆文学研究会報』57, 原爆文学研究会, pp. 3-5, 2019/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

宇野田尚哉 「戦後大阪の華僑系新聞と在日朝鮮人」東アジア冷戦下の日本における社会運動と文化生産, 日文研共同研究会, 日文研共同研究会, 2019/7

Unoda, Shoya, "Roundtable Discussion: Situating Zainichi Cultural Production in the (Post)Empire", Passing, Posing, Persuasion: Cultural Production and Coloniality in Modern Japan, Conference Organizing Committee, University of British Columbia, 2019/3

宇野田尚哉 「『原爆に生きて』から『この世界の片隅で』へ: 山代巴を中心に」第57回例会, 原爆文学研究会, 九州大学, 2018/12

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2016年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:宇野田尚哉

課題番号:16K02402

研究題目:1950年代文化運動における農村女性文学の研究:山代巴と無名の書き手たち

研究経費:2018年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究の目的は、「山代巴資料」(広島県三次市山代巴記念室所蔵)をはじめとする諸資料により、山代を取り巻く無名の人々が〈語る〉あるいは〈書く〉という行為を通じて主体化を遂げていくさまを具体的に明らかにするとともに、そのような無名の人々に支えられた山代の作品世界の特徴を明らかにして、戦後日本文学の裾野を照射することである。

3-6-2. 2019年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:宇野田尚哉

課題番号:19K00295

研究題目:戦後大阪の夕刊紙・華僑メディアと文学サークル・在日文学

研究経費:2019年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

敗戦後の日本においては、都市部では朝刊紙とは別に夕刊紙が叢生し、多様な文化的営みの発火点となった。本研究では、この時期に大阪で創刊された夕刊紙のなかでもとりわけ特色のある『夕刊新大阪』と『国際新聞』に着目し、それらに触発されるかたちで展開された無名の書き手たちによる文学的営みの射程を明らかにする。前者は戦後大阪のサークル詩運動の起源の1つとなり、華僑メディアとしての後者は華僑の文化的営みの基盤となるだけでなく、在日コリアンの文学が展開されるメディアともなった。本研究では、在日華僑・在日コリアンを含むそのような文化的営みの総体を明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本思想史学会・総務委員, 2017年10月～現在に至る

松江市史専門部会近世史部会・専門委員, 2010年6月～2019年3月

4. 北村 毅 准教授

1973年生。2006年早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学)。2007年早稲田大学高等研究

所助教、2009 年同准教授。2010 年早稲田大学琉球・沖縄研究所客員准教授。2015 年より現職。専攻：文化人類学・民俗学、オーラルヒストリー

4-1. 論文

北村毅 「家族内暴力の歴史的・ジェンダー的文脈を読む——戦争体験世代の娘である虐待当事者のライフストーリーを事例として」『社会臨床雑誌』27-3, 日本社会臨床学会, pp. 6-16, 2020/3

北村毅 「戦争による人口構造の変化と人的被害の諸相——沖縄と「本土」を比較して」『待兼山論叢』53, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-17, 2019/12

北村毅 「「兄弟都市」豊中市との交流史——「霊石」が結んだ半世紀」『沖縄市史』5, 沖縄市役所, pp. 302-309, 2019/9

北村毅他(共著) 「戦死者の魂が語り出すとき」谷川健一・大和岩雄(共著)『民衆史の遺産 第十四巻 沖縄』大和書房, pp. 335-390, 2019/2

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

北村毅 「戦死者の「憑依」を解きほぐす——「シャーマニズム」と「心霊」という二つの文脈から」大会シンポジウム:〈見えないもの〉のオーラル・ヒストリー, 日本オーラル・ヒストリー学会 第17回大会, 日本オーラル・ヒストリー学会 第17回大会, 2019/9

北村毅 「「戦争」は家族に何をもたらすのか?——ある家族の戦後から考える」おしゃべりカフェ, PTSDの復員日本兵と暮らした家族が語り合う会, 武蔵村山市中藤地区会館, 2019/8

北村毅 「『戦争とトラウマ:不可視化された日本兵の戦争神経症』合評」PRIME 共催合評会, 歴史学研究会現代史部会, 明治学院大学, 2019/1

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

北村毅 第38回澁澤賞, 澁澤民俗学振興基金, 2011/12

北村毅 第33回沖縄文化協会賞(比嘉春潮賞), 沖縄文化協会, 2011/11

北村毅 第30回沖縄タイムス出版文化賞正賞, 沖縄タイムス社, 2009/12

北村毅 第5回櫻井徳太郎賞大賞, 東京都板橋区, 2007/1

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2019年度~2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:北村毅

課題番号:19K01224

研究題目:軍事環境下の子どもの医療人類学的研究—沖縄戦から連なる暴力的状況に着目して

研究経費:2019年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

第一に、沖縄戦で子どもが置かれた状況に注目しながら、「子ども」という視点から戦争の証言を整理し、子どもの戦争体験の特質について検討する。第二に、沖縄戦中から米軍が沖縄各地に設置した孤児院ならびに米軍野戦病院の精神科に関する公文書などの分析に加え、戦争孤児への聞き取りによって、精神保健・福祉の観点から子どもやコミュニティに対する戦争の影響を検証する。第三に、沖縄において虐待の問題に直面した個人の生活史と家族史を詳細に聞き取り、数世代にわたる家族の歴史を丹念に読み解いていくことで、沖縄戦から連なる暴力的体験や軍事環境が人びとの心身に与えてきた影響について考察する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本オーラル・ヒストリー学会・編集委員, 2017年9月～2019年9月

上方文化芸能協会・運営委員, 2016年6月～現在に至る

国際日本学研究会・編集委員長, 2016年4月～現在に至る

5. 安岡 健一 准教授

1979年生。2009年京都大学大学院農学研究科博士課程卒業、2011年農学博士（京都大学）取得。日本学術振興会特別研究員、飯田市歴史研究所研究員を経て、2015年に大阪大学へ。2017年4月から現職。専攻：日本近現代史

5-1. 論文

安岡健一 「ある自分史にみる満洲の記憶と地域史研究の可能性」佐藤量・菅野智博・湯川真樹江(編)『戦後日本の満洲記憶』東方書店, pp. 305-317, 2020/3

安岡健一 「書評 細谷亨『日本帝国の膨張・崩壊と満蒙開拓団』」『歴史学研究』(歴史学研究会), 993, pp. 35-38, 2020/2

安岡健一 「オーラルヒストリーを受け継ぐために」『日本オーラルヒストリー研究』(日本オーラルヒストリー学会), 15, pp. 61-69, 2019/9

安岡健一 「書評 吉田伸之編『山里清内路の社会構造—近世から現代へ』第Ⅱ部 清内路の近現代」を中心に」『飯田市歴史研究所年報』(飯田市歴史研究所), 17, pp. 96-101, 2019/9

安岡健一 「「個」の歴史から地域を見る」『飯田市歴史研究所年報』16, 飯田市歴史研究所, pp. 28-39, 2019/2

安岡健一 「「他者」たちの農業史から見る「こころの協同」」『農業協同組合経営実務』73-10, 全国共同出版株式会社, pp. 27-38, 2018/9

安岡健一 「書評 浅野慎一・トウ岩『中国残留日本人孤児の研究』」『村落社会研究ジャーナル』24-2, 日本村落研究会, pp. 42-43, 2018/4

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

安岡健一 「書評 近代の記憶」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, pp. 9-9, 2019/3

安岡健一 「書評 障害者の傷、介助者の痛み」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, pp. 11-11, 2019/2

安岡健一 「新年の一冊 近代天皇制から象徴天皇制へ」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, pp. 8-8, 2019/1

安岡健一 「書評 田中角栄」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, pp. 9-9, 2019/1

安岡健一 「書評 「混血」と「日本人」」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, pp. 9-9, 2018/12

安岡健一 「書評 胃袋の近代」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, pp. 9-9, 2018/9

安岡健一 「書評 日本人と海外移住」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, pp. 9-9, 2018/8

安岡健一 「夏休みの一冊 マッドジャーマンズ」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, pp. 6-6, 2018/7

安岡健一 「書評 復興に抗する」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, pp. 9-9, 2018/6

安岡健一 「書評 貧困の戦後史」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, pp. 8-8, 2018/5

5-4. 口頭発表

Yasuoka, Kenichi, "Facing Aging: Elderly Group Formation and Development in 1950s-1960s Rural Japan", AAS 2020 Annual

Conference, Association for Asian Studies, Sheraton Boston Hotel, 2020/3

安岡健一 「〈在日〉にむきあった公立学校教員の実践」大阪多文化研究会, JSPS 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業「実践と政策のダイナミクスによる多文化共生」, 大阪大学待兼山会館, 2020/2

安岡健一 「〈在日〉にむきあった公立学校教員の実践」青丘文庫研究会, 在日朝鮮人運動史研究会関西支部, 神戸市立中央図書館, 2020/1

安岡健一 「共同体と他者」(大阪大学)文学研究科教育研究フォーラム, 大阪大学文学研究科, 大阪大学文学研究科, 2019/11

安岡健一 「社会運動史にとつての「地域」社会運動史研究の現状と課題を考える」大阪歴史科学協議会, クレオ大阪西, 2019/11

安岡健一 「書評 細谷亨『日本帝国の膨張・崩壊と満蒙開拓団』」戦時期日本研究の新地平, 歴史学研究会 近代史・現代史部会, 早稲田大学早稲田キャンパス, 2019/7

安岡健一 「コメント 東栄一郎報告に対して」比較を超えて: 間帝國的視座からの日本植民地研究, 科研「間帝國的関係性からみた植民地支配と抵抗」, 同志社大学, 2019/3

安岡健一 「コメント」ビジュアル・オーラル・ヒストリーの可能性, 日本オーラルヒストリー学会, 大阪経済法科大学東京麻布台セミナーハウス, 2019/3

安岡健一 「コメント」公開国際ワークショップ「比較を超えて: 間-帝國的 (trans-imperial) 視座からの日本植民地研究, 科研「間帝國的関係性からみた植民地支配と抵抗—比較・協力・並存・移動の史的構造」(基盤研究 B), 同志社大学, 2019/3

安岡健一 「書評報告 『山里清内路の社会構造』」合評会, 清内路・歴史と文化研究会、近世史の会, 東京大学大学院経済学研究所, 2019/2

安岡健一 「戦時中の青年団運動」飯田市歴史研究所 地域史講座, 飯田市歴史研究所, 川路公民館, 2019/2

安岡健一 「『山里清内路の社会構造—近世から現代へ』を読む」書評ワークショップ, 「清内路—歴史と文化」研究会、近世史の会, 東京大学, 2019/2

安岡健一 「声」を継ぐ」マイノリティ・アーカイブズの構築・研究・発信, 立命館大学生存学研究センター, 立命館大学, 2018/12

安岡健一 「地域史研究と個の歴史」関西近現代史研究会研究会, 関西近現代史研究会, 関西大学梅田キャンパス, 2018/12

安岡健一 「語りを共有するために」座光寺歴史に学び地域をたずねる会, 座光寺歴史に学び地域をたずねる会, 座光寺公民館, 2018/11

安岡健一 「地域に向き合う研究の社会的役割」唯物論研究協会研究大会, 唯物論研究協会, 駒澤大学, 2018/10

安岡健一 「地域史研究と個の歴史の交差」島根史学会大会, 島根史学会, 島根労働会館, 2018/9

安岡健一 「コメント」『運動史研究』創刊号座談会, 運動史研究編集委員会, 京都大学, 2018/8

Yasuoka, Kenichi, “Ownership and “Foreigner” in Occupied Japan”, Asian Studies Association of Australia, 22nd biennial conference, Asian Studies Association of Australia, Sydney University, 2018/7

安岡健一 「アジア・太平洋戦争と人の移動—京都を事例に—」京都自由大学 移動する人びとの経験③, 京都自由大学, 京都社会文化センター, 2018/7

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

安岡健一 大阪大学賞(若手教員部門), 大阪大学, 2018/10

安岡健一 日本村落研究学会研究奨励賞, 日本村落研究学会, 2015/11

安岡健一 日本農業史学会賞(学会賞), 日本農業史学会, 2015/3

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本オーラルヒストリー学会・研究活動担当事務, 2019年9月～現在に至る

信濃毎日新聞・書評委員, 2017年4月～2019年3月

飯田市歴史研究所・調査研究員, 2015年10月～現在に至る

2-7 日本史学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：飯塚 一幸、川合 康、市 大樹

准教授：野村 玄

助教：北泊謙太郎

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
56	17	23	0	0	6	1	1

*うち留学生4名、社会人学生5名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	17	10	0	0
2019	14	2	1	1
計	31	12	1	1

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

大学院においては、①授業としての修士・博士論文作成演習に加え、学会報告や投稿論文作成のための個別指導をすること、②講義・演習によって史料の分析能力を養うとともに、史料調査等を積極的に実施することによって、史料の調査・収集・整理・分析能力を育成すること、③フィールドワーク・研究室旅行の実施、自治体史編纂事業への協力を通じて、実践的な史料調査能力の養成を期すこと、④個別指導をおこなって留学生の研究能力の養成につとめること、などを目標とした。学部においては、①講義・演習を通して、論文・史料の読解能力の養成をはかるとともに、課題追究能力を涵養すること、②卒業論文では、史料および先行研究等の情報収集とその整理、的確な課題設定と論理の展開能力を実践的に鍛えること、③フィールドワーク・研究室旅行の実施、自治体史編纂事業への協力を通じて、実践的な史料調査能力の養成を期すこと、などを目標とした。

2. 研究

①上記の教育活動と連動させながら、個々人の研究能力を高めることに加えて、②学会活動にも積極的に参加すること、③国内外の共同研究を推進すること、などを目標とした。

3. 社会連携

①歴史学が抱える諸問題、歴史学に期待される諸課題（文化遺産保存問題、教科書・教育問題など）に的確に応じる努力をすること、②自治体史や教科書の編纂等に協力すること、などを目標に掲げた。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

- (1) 各時代（古代・中世・近世・近代）で開講されている講義によって、日本史研究の基礎的知識の伝授に努めた。また卒論演習・大学院演習・修士論文作成演習・博士論文作成演習などの場におけるきめ細かな指導により、論文作成能力の向上を図った。7月に院生報告会、10月に卒論・修論中間発表会を開催し、4年生・院生が日本史研究室構成員全員の前で研究発表をする機会を設けた。また、歴史学方法論講義において、日本史・西洋史・東洋史などの枠を超えて最新の歴史学の方法論に触れる機会を設け、歴史教育論演習では高校の現職教員とともに歴史教育のあり方を探求した。さらに、近藤成一氏から自らの研究の経緯と成果を学生・院生に講演していただく場を設けた。
- (2) 各時代で開講されている史料講読演習によって、史料解釈能力や古文書解読能力の育成に努めた。また多数開講した演習を通じて、先行研究への批判的態度や史資料を徹底して収集する姿勢を培うとともに、プレゼンテーション能力を養った。
- (3) 春の新入生歓迎小旅行、秋の研究室旅行、近世古文書演習における古文書調査合宿を通じて、フィールドワークの方法や、実践的な古文書の整理作業能力を修得させた。また自治体史編纂事業への協力を通じて、現地調査・史料整理の実践的能力を養成した。
- (4) 増加しつつある留学生の研究能力のレベルアップに努めた。

2. 研究

- (1) 日本史学専門分野の構成員は、それぞれの分野で各自の研究を進めるかわら、『緒方洪庵全集』といった史料集の編纂など、学界の共有財産の蓄積や基礎的研究の充実のための諸活動に、積極的に参画した。また、多くが高校日本史の教科書を執筆し、歴史教育にも寄与した。さらに、本専門分野が所蔵または借用している旧撰津国住吉郡平野郷町含翠堂（土橋家）文書、旧撰津国住吉郡猿山新田奥田家文書、旧河内国古市郡駒ヶ谷村西應寺文書の整理・研究をおこなった。具体的には、古文書演習や講義と有機的に関連させつつ、これら古文書の目録作成や内容分析を進めたが、その成果の一端を大学行事である「いちよう祭」において披露する予定であったところ、感染症の拡大により「いちよう祭」が中止となり、成果の披露はかなわなかった。
- (2) 学会活動については、日本史研究会、大阪歴史学会、歴史科学協議会、大阪歴史科学協議会、史学研究会、史学会、続日本紀研究会、条里制・古代都市研究会などの学会・研究会の委員等を担うなど、学会運営に積極的に関わり、日本史学界の研究の推進に大きく寄与している。また、上記のうち、大阪歴史科学協議会の事務局を本専門分野で引き受けている。
- (3) つぎに国内での学際的な共同研究は、以下のとおりである。村田路人教授は、「幕末期における大坂・大坂城の軍事的役割と畿内・近国藩」（科研、京都大学、代表岩城卓二）、「播磨国小藩領における地域社会構造の歴史的研究」（科研、神戸女子大学、代表今井修平）、「西播磨小藩・旗本領における領主支配と地域社会構造の歴史的研究」（科研、神戸女子大学、代表今井修平）、「小西家資料の総合的研究」（科研、大阪大学、代表飯塚一幸）、「戦前期大阪花街の社会的機能に関する基礎的研究：芸能と社会との関係を中心に」（科研、金沢大学、代表笠井純一）に参加した。また、医学や薬学を専攻する教員と共同し、『新版 緒方洪庵と適塾』の編集・執筆を行った。その他、大阪

大学適塾記念センターとともに緒方洪庵書状の調査を進めている。飯塚一幸教授は、大阪大学歴史教育研究会（代表桃木至朗）、「国民国家型の大学歴史教育をグローバル化時代に適応させる方法に関する国際比較」（日本学術振興会研究助成事業、大阪大学、代表桃木至朗）、「戦前期大阪花街の社会的機能に関する基礎的研究：芸能と社会との関係を中心に」（科研、金沢大学、代表笠井純一）、吉田清成関係文書研究会（代表山本四郎）、「小西家資料の総合的研究」（科研、大阪大学、代表飯塚一幸）、「巨大塩田地主野崎家史料の総合的研究」（科研、大阪大学、代表飯塚一幸）に参加した。川合康教授は、「戦国軍記・合戦図屏風と古文書・古記録をめぐる学際的研究」（科研、国立女子大学、代表堀新）に参加し、東京大学史料編纂所国際研究集会「合戦のイメージ形成から実像を考える」（東京大学）で報告を行った。市大樹准教授は、「文字文化からみた東アジア社会の比較研究」（科研、奈良大学、代表角谷常子）、「日本墨書土器データベースの全国的達成」（科研、明治大学、代表吉村武彦）、「唐帝国の駆伝体制の特質とその時代的変遷」（科研、大阪大学、代表荒川正晴）に参加した。野村玄准教授は、国際日本文化研究センター基幹共同研究「比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想－王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼－」（伊東貴之研究代表）にゲストスピーカーとして招へいされ、講演を行った。

3. 社会連携

- (1) 文化遺産保存問題や博物館問題など、歴史学が直面する諸問題に、誠実に取り組んだ。また、講演活動やテレビ東京系列「新 美の巨人たち」への出演などを通じて、研究成果を社会に還元する活動に精力的に取り組んだ。このほか、町おこしグループと連携して、堺市中区兒山家文書などの歴史資料を調査・整理し、河内長野市に所在する天野山金剛寺の中世文書群を調査・撮影して、河内長野市立図書館で公開する事業を進め、河内長野市の「日本遺産」関連事業にも協力した。『続日本紀』を読む会のボランティア講師、史跡古市古墳群整備検討委員会委員、二子塚古墳保存整備検討委員会委員などを務めた。
- (2) 『摂津市史』『茨木市史』『枚方市史』『八尾市史』『福岡市史』などの自治体史編纂事業に協力し、地域社会に新しい歴史像を提示しつつある。
- (3) 日本史研究室では、2015年度に数年間にわたる旧摂津国住吉郡北田辺村三杵家文書の整理を終え、目録を完成させたが、この事業の成果をうけ、北田辺地域において「古文書を読む会」を毎月開くなど、その成果を地域住民と共有する取り組みを行っている。また、旧摂津国住吉郡猿山新田奥田家文書、旧河内国古市郡駒ヶ谷村西應寺文書の整理・研究を行った。その他、大阪大学大学院文学研究科日本史研究室と大阪府交野市教育委員会との間で協定を結び、両者が共同して交野市域に残された古文書（旧河内国交野郡私部村原田家文書、同村無量光寺文書）の調査・整理を行った。

IV. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

日本史学専門分野のスタッフは、古代から近代まで日本史の全時代をカバーしており、学生・院生に対して、行き届いた教育をおこなうことができた。非常勤講師による講義も、これまでの2つ体制を維持した。また西洋史・東洋史の教員や高等学校の現職教員と連携して、幅広く歴史教育のあり方を考える機会を設けた。こうした正規の授業以外にも、院生報告会、卒論・修論発表会を実施したほか、第一線の研究者をお招きして最新の研究成果に触れる機会を設けた。これらの教育活動に力を入れた結果、卒業論文・修士論文いずれにおいても、個人差はあるものの比較的高い成果をあげることができ、また課程博士取得者を送り出すことができた。このほか、現地調査や古文書の整理・調査などにも力を入れ、実践的な能力を育成することができた。本研究室の卒業生・修了生は、博物館・資料館の学芸員、自治体史の調査員などの仕事に従事する者が少なくなく、即戦力として通用する能力は各方面から高く評価されている。以上の点を総合的に判断して、所期の目標は達成できたと考える。

2. 研究

科学研究費などの外部資金を獲得して個人研究を進めるかわら、学会共有財産の蓄積に関わる仕事や、学際的な共同研究に積極的に参画することによって、それぞれの分野で着実な成果をあげることができた。また上記の教育活動と連動させながら、日本史学専門分野が保管している古文書の研究を進め、基礎的な研究成果をあげることができた。さらに、本専門分野の構成員は、教員はもちろんのこと、院生も学会の委員として積極的に参加することによって、日本における学術・研究活動の推進に大きく寄与することができた。日本学術振興会研究員の採択率を上げることなどの課題は残ったものの、以上の点を総合的に判断して、全体的な目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

上記のような学会活動などに参加することによって、歴史学が直面する諸問題に誠実に取り組み、日本史研究者としての責務を果たすことができた。また研究成果を学会内部に留めるのではなく、講演や執筆活動を通じて市民に広く発信することができた。さらに歴史資料の調査・整理をおこなうにあたり、町おこしグループと連携することによって、研究成果を共有することに一定の成果をあげることができた。また教員や多くの院生が自治体史の編纂事業に協力し、新たな地域社会像の構築に向けて努力した。その他、自治体と協定を結んで当該自治体の行政区内の古文書の調査・整理を行ったことは、社会連携活動として新しい試みである。これらの活動を総合的に判断して、社会連携の目標についても十分に達成されたと考える。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	0	2	2
2019	1	0	1
計	1	2	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【論文博士】

飯塚一幸「明治期の地方制度と名望家」2018/5

主査：村田路人 副査：川合 康、市 大樹、奥村 弘（神戸大学）

志賀節子「中世荘園制社会の地域構造」2018/5

主査：川合 康 副査：村田路人、野村 玄

【課程博士】

康 昊「日元交流期の禅宗と室町幕府」2020/3

主査：川合 康 副査：村田路人、市 大樹

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	5(4)	2(0)	0(0)	0(0)	3(0)	10(4)
2019	11(11)	4(2)	0(0)	1(1)	8(1)	24(15)
計	16(15)	6(2)	0(0)	1(1)	11(1)	34(19)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	4	19	20	1	0	44
2019	7	34	23	8	1	73
計	11	53	43	9	1	117

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

晁 越「2018年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(1)『近世日中比較史』「宗教からみた近世日中の権威と権力」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ16』, 大阪大学歴史教育研究会, pp.24-46, 2019/3

※畔勝俊弥氏・趙文暖氏・中村友輝氏との共著

〔博士後期〕

安東 峻「『日本後紀』弘仁二年十月甲戌条の再検討」, 『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書(2018年度大学院学内GP<他大学大学院との研究交流プログラム>)』, 明治大学大学院文学研究科, pp.62-67, 2019/3

伊藤大貴「応仁・文明の乱後における石見山名氏の動向」『地方史研究』※68-5, 地方史研究協議会, pp.33-49, 2018/10

伊藤大貴「石見守護山名氏の権力構造とその変遷」『古代文化研究』27, 島根県古代文化センター, pp.218-234, 2019/3

康 昊「東福寺円爾の伝法衣と中世禅宗の法脈意識」『仏教史学研究』※60-2, 仏教史学会, pp.44-69, 2019/1

田辺 旬「鎌倉期武士の先祖観と南北朝内乱」『鎌倉遺文研究』※42, 鎌倉遺文研究会, pp.52-76, 2018/10

田村 亨「中世的世界への視座—平報告に対するコメントとして—」『歴史科学』236, 大阪歴史科学協議会, pp.18-22, 2019/3 ※大阪歴史科学協議会前近代史研究部会ワーキンググループのコメント

永野弘明「日本中世社会形成期における荘園制の展開と震災復興」『高梨学術基金年報 研究成果報告』平成29年度, 高梨学術奨励基金, 2018/10

永山 愛「鎌倉幕府滅亡時における軍事編成—護良親王令旨の検討を中心に—」, 『鎌倉遺文研究』※41, 鎌倉遺文研究会, pp.47-70, 2018/4

増成一倫「新任国司への給粮と「公廩」」, 『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書(2018年度大学院学内GP<他大学大学院との研究交流プログラム>)』, 明治大学大学院文学研究科, pp.46-51, 2019/3

【2019年度】

〔博士前期〕

小川莉菜「2019年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(1)『新学習指導要領解説「歴史総合」の「問い」を考える』—欧米で生まれた国民国家は、なぜ日本をはじめとして世界へ広がったのだろうか—(※谷垣美有氏・内藤裕子氏・

- 向井健悟氏との共著)『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第17号, pp.1-24, 査読無, 2020/3/1
- 石垣萌香「2019年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(2)『新学習指導要領解説「歴史総合」の「問い」を考える』—第一次世界大戦は、国際関係をどのように変えたのだろうか—(※浦田光氏・富谷竜一郎氏・松尾和花菜氏との共著)『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第17号, pp.25-46, 査読無, 2020/3/1
- 富谷竜一郎「2019年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(2)『新学習指導要領解説「歴史総合」の「問い」を考える』—第一次世界大戦は、国際関係をどのように変えたのだろうか—(※石垣萌香氏・浦田光氏・松尾和花菜氏との共著)『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第17号, pp.25-46, 査読無, 2020/3/1
- 長谷川昇平「観察使制と平城天皇」『続日本紀研究』第417号, pp.36-55, 査読有, 2019/9/1
- 向井健悟「武蔵国の大贄「鼓」について」『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』第一号, pp.52-57, 査読無, 2020/3/31
- 向井健悟「2019年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(1)『新学習指導要領解説「歴史総合」の「問い」を考える』—欧米で生まれた国民国家は、なぜ日本をはじめとして世界へ広がったのだろうか—(※小川莉菜氏・谷垣美有氏・内藤裕子氏との共著)『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第17号, pp.1-24, 査読無, 2020/3/1
- 梶尾良太「戦時体制下における日本の海運業と統制—1937年～1942年—」『北大史学』第59号, pp.21-42, 査読有, 2019/11/1
- 向井健悟「御食つ国」研究の現状と課題」『第2回若手研究者フォーラム要旨集』 pp.18-21, 査読有, 2020/3/23
〔博士後期〕
- 伊藤大貴「応仁・文明の乱後の山名氏と室町幕府」『ヒストリア』第274号, pp.26-50, 査読有, 2019/6/10
- 伊藤大貴「因幡守護山名豊時・豊重父子と室町幕府」『鳥取地域史研究』第22号, pp.3-16, 査読有, 2020/2/1
- 大上幹広「戦国末期の能島村上氏と河野氏—天正一二年を中心に—」『地方史研究』第69巻, 第3号, pp.1-19, 査読有, 2019/6/1
- 大上幹広「豊臣期の能島村上氏—海賊衆の変質—」『戦国史研究』第78号, pp.16-30, 査読有, 2019/8/25
- 尾崎真理「適塾特別展示 北船場地域と適塾・除痘館」『適塾』第52号, pp.7-20, 査読無, 2019/11/1
- 尾崎真理「近世中後期における幕府の代官配置原則」『ヒストリア』第277号, pp.135-165, 査読有, 2019/12/20
- 尾崎真理「近世中後期における幕領配置政策についての基礎的考察—私領渡差障有無調を中心に—」『待兼山論叢(史学篇)』第53号, pp.1-28, 査読有, 2019/12/25
- 康昊「日本密教研究的新動向—近年寺院聖教整理與寺院社会研究簡述」『浙江大学東亜宗教研究センター編『佛教史研究』、新文豊出版』第3号, pp.335-350, 査読無, 2019/8/1
- 康昊「再論日本禅宗成立史上的の十四世紀—從禅教之爭的角度」『王頌編『宗門教下一東亜佛教宗派研究』、宗教文化出版社』第一号, pp.308-327, 査読無, 2019/10/1
- 康昊「中国の台禅論争と虎関師鍊」『日本仏教総合研究』第17号, pp.125-149, 査読有, 2019/10/1
- 康昊「南北朝期における幕府の鎮魂仏事と五山禅林—文和三年の水陸会を中心に—」『アジア遊学(原田正俊編『アジアの死と鎮魂・追善』)』第245号, pp.135-158, 査読有, 2020/3/10
- SATO Kazuki「The Emperor's Gyoko and Funeral in Early Modern Japan」, 大阪大学大学院文学研究科研究推進室編『大阪大学・ハーバード大学 院生交流会—日本文化をめぐる対話—報告書』, 大阪大学大学院文学研究科研究推進室, pp.47-77, 査読無, 2020/3/30
- 田辺旬「北条政子発給文書に関する一考察—「和字御文」をめぐる—」『ヒストリア』第273号, pp.1-17, 査読有, 2019/4/20
- 永山愛「元弘・建武内乱期における軍事編成—南北朝初期の軍勢催促状の検討—」『歴史学研究』第986号, pp.16-25, 査読有, 2019/8/15
- 濱田恭幸「三新法体制下における府県分合と府県会—地方税支出の再検討—」『日本史研究』第683号, pp.1-28, 査読有, 2019/7/20
- 増成一倫「新任国司への給糧と律令地方財政」『続日本紀研究』第416号, pp.49-71, 査読有, 2019/6/20

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

有藤 萌「古代における追放の検討—左遷と流罪の比較を中心に—」, 続日本史研究会 10 月例会, アウリーナ大阪/大阪府大阪市, 2018/10/26

植村優恵「内親王から見る後白河王家」, 大阪歴史学会・日本史研究会合同卒論報告会, 機関紙会館 5F 大会議室/京都府京都市, 2018/7/15

岡田康佑「日本古代の老人の位置—給侍制度を手がかりに—」, 続日本紀研究会 9 月例会, アウリーナ大阪/大阪府大阪市, 2018/9/28

越智勇介「論評: 黒羽亮太「観隆寺陵—忘れられた平安時代天皇陵の発見—」」, 日本史研究会古代史部会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2018/4/9

越智勇介「古代難波をめぐる開発と交通」, 続日本史研究会 10 月例会, アウリーナ大阪/大阪府大阪市, 2018/10/26

佐藤一希「佐藤雄介氏の業績について」, 日本史研究会近世史部会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2018/4/7

佐藤一希「光格天皇の譲位と松平信明政権」, 畿内近国史研究会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2018/6/16

佐藤一希「光格天皇の皇位継承構想と朝幕交渉の展開」, 朝幕研究会, 学習院大学/東京都豊島区, 2018/10/30

高見薪之介「中世後期における地域流通」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, クレオ大阪中央/大阪府大阪市, 2018/9/1

晁 越「宗教からみた近世日中の権威と権力(院生グループ報告『近世日中比較史』、畔勝俊弥氏・趙文暖氏・中村友輝氏とのグループ報告)」, 大阪大学歴史教育研究会第 117 回例会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2018/12/15

望月みわ「日露戦争前後期の大陸利権と通信省—在外通信機関の動向を中心に—」, 日露関係史研究会, 小樽商科大学札幌サテライト/北海道札幌市, 2018/7/15

望月みわ「日露戦争前後期の大陸利権と通信省—在外郵便電信局の動向を中心に—」, 大阪大学政治史研究会, 大阪大学法学部/大阪府豊中市, 2018/10/6

望月みわ「日露戦争前後の満韓利権と通信省—在外郵便電信局を中心に—」, 政治外交史研究会, 京都大学/京都府京都市, 2018/10/10

望月みわ「書評: 佐々木雄一『帝国日本の外交 1894-1922』」, 日露関係史研究会, 首都大学東京/東京都八王子市, 2019/3/1

〔博士後期〕

安東 峻「蝦夷村と蝦夷郡」, 続日本紀研究会 6 月例会, アウリーナ大阪/大阪府大阪市, 2018/6/29

安東 峻「蝦夷村と蝦夷郡」, 古代史サマーセミナー, 活水女子大学/長崎県長崎市, 2018/8/24

安東 峻「『日本後紀』弘仁二年十月甲戌条の再検討」, 大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学 4 大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2018/6/1

安東 峻「古代東北における蝦夷系住民の姓と分類」, 日本史研究会古代史部会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2019/1/28

伊藤大貴「吉川氏の温泉三方支配」, 島根県中近世史勉強会, 島根県立古代出雲歴史博物館/島根県出雲市, 2018/8/3

伊藤大貴「室町期の山名氏と因幡・伯耆」, 鳥取地域史研究会, 鳥取県立博物館/鳥取県鳥取市, 2019/2/24

糸川風太「相給村落における各個別領分の再検討—7 世紀前期を中心に—」, 大阪歴史学会近世史部会, 淀川区民センター/大阪府大阪市, 2018/11/30

尾崎真理「近世中後期、幕領配置方式の特質—支配替に着目して—」, 大阪歴史学会近世史部会, 淀川区民センター/大阪府大阪市, 2019/3/29

康 昊「日本原古志稽『大施餓鬼集類分解』與宋元施食科儀」, 第七屆漢傳佛教與聖嚴思想國際學術シンポジウム, 集思

- 臺大會議中心／台北市，2018/6/2
- 康 昊「日本鎌倉時代東福寺の成立與圓爾祖師形象的形成」，第二屆徑山祖庭禪宗文化論壇，陸羽山莊・徑山萬壽禪寺／浙江省杭州市，2018/7/16
- 康 昊「南北朝期における禪宗の鎮魂仏事と室町幕府」，寺院史研究会例会，東京大学／東京都文京区，2018/8/18
- 康 昊「再論日本禪宗成立史的十四世紀：从禪教之爭的角度」，第二屆中國佛教史論壇，北京大學／北京市，2018/9/1
- 康 昊「顯密體制論與日本禪宗史研究的現狀」，第四屆東亞文獻與文學中的佛教世界國際學術研討會，浙江工商大學／浙江省杭州市，2018/9/22
- 康 昊「文和三年の鎮魂水陸會と室町幕府」，第3回東アジア日本研究者協議會，國際日本文化研究センター／京都府京都市，2018/10/28
- 康 昊「建武政權の禪宗政策と虎関師鍊」，大阪歴史科学協議會前近代史部會，淀川区民センター／大阪府大阪市，2018/12/10
- 高岡 萌「第18回 おいな〜れ塾 伊勢参りの道—相続講と柏原・国分—」，れきし・まち・まなび おいな〜れ塾（平成30年度），柏原おいな〜れガイドの会，リビエールホール第一會議室／大阪府柏原市，2019/1/29
- 田辺 旬「武家政權と寺号」，中世政治史研究会，東京大学／東京都文京区，2018/10/7
- 田村 亨「鎌倉幕府理非裁斷の成立過程」，日本史研究会中世史部會，日本史研究会事務所會議室／京都府京都市，2018/5/22
- 田村 亨「平雅行氏報告へのコメント（※大阪歴史科学協議會ワーキンググループ [その他のメンバーは、吳偉華・永野弘明・永山愛・道上祥武・吉元加奈美] を代表してコメント）」，大阪歴史科学協議會大会，關西大学／大阪府吹田市，2018/6/9
- 田村 亨「鎌倉中期寺社紛争解決と關東・六波羅・公家政權」，鎌倉時代研究会10月例会，京都大学／京都府京都市，2018/10/29
- 田村 亨「鎌倉中期幕府訴訟対応の展開」，東京大学中世史研究会11月例会，東京大学／東京都文京区，2018/11/23
- 田村 亨「鎌倉幕府の訴訟対応と戦争—承久の乱後を中心に—」，大阪歴史科学協議會前近代史部會1月例会，浪速区民センター／大阪府大阪市，2019/1/28
- 永野弘明「荘園の立荘と領域支配」，日本史研究会中世史部會，日本史研究会，日本史研究会事務所會議室／京都府京都市，2018/4/24
- 永山 愛「南河内と十四世紀内乱」，第56回中世史サマーセミナー，第56回中世史サマーセミナー実行委員会，河内長野莊／大阪府河内長野市，2018/8/22
- 濱田恭幸「宮間純一氏の業績について」，日本史研究会近現代史部會，日本史研究会，日本史研究会事務所會議室／京都府京都市，2018/6/1
- 濱田恭幸「奥村弘氏の業績検討」，神戸大学大学院人文学研究科近代史研究会，神戸大学大学院人文学研究科近代史研究会，神戸大学／兵庫県神戸市，2018/6/8
- 平田良行「第4章「民衆蜂起の世界像」を読んで」，第1回ウィンターセミナー（『日本の近代化と民衆思想』から考える），第1回ウィンターセミナー実行委員会，一橋大学／東京都国立市，2018/12/2
- 増成一倫「平安時代中期の地方財政研究と論点」，科学研究費助成事業（學術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「日本古代〜中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究」研究会，科学研究費助成事業（學術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「日本古代〜中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究」研究会，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2018/8/4
- 増成一倫「新任国司への給糧と郡稻」，日本史研究会古代史部會，日本史研究会，日本史研究会事務所會議室／京都府京都市，2018/11/19
- 増成一倫「新任国司への給糧と「公廩」」，大阪大学・關西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム，大阪大学・關西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2019/1/6

増成一倫「池溝修理と律令地方財政—修理池溝料の検討を中心に—」, 名古屋古代史研究会 2 月例会, 名古屋古代史研究会, 名古屋大学/愛知県名古屋市, 2019/2/3

【2019 年度】

〔学部生〕

遠山佳之「近世後期京都における遊女商売の基本構造—島原遊廓の遊所支配を軸に—」, 大阪歴史学会近世史部会卒論報告会, クレオ大阪西, 2019/4/21

北山航「室町幕府奉行人家の存在形態—族・被官の活動から—」, 日本史研究会・大阪歴史学会合同卒論報告会, 機関紙会館 5F 大会議室, 2019/8/4

〔博士前期〕

石垣萌香「昭和七年陸軍特別大演習と都市大阪」, 日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会合同第 2 回卒論報告会, 日本史研究会事務所会議室, 2019/7/14

石垣萌香「陸軍特別大演習における郷土偉人顕彰」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, クレオ大阪中央, 2019/8/4

石垣萌香「第一次世界大戦は、国際関係をどのように変えたのだろうか (大学院生グループ報告『新学習指導要領解説「歴史総合」の「問い」を考える』、浦田光氏・富谷竜一郎氏・松尾和花菜氏との共同報告)」, 大阪大学歴史教育研究会第 125 回例会, 大阪大学大学院文学研究科, 2019/12/21

植村優恵「後白河王家の成立・変遷過程と内親王の役割」, 中世文化史研究会, 奈良女子大学, 2019/9/21

小川莉菜「第五回内国勸業博覧会の開催と会場周辺地域の整備—道路拡幅と「長町」—」, 日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会合同第 2 回卒論報告会, 日本史研究会事務所会議室, 2019/7/14

小川莉菜「第五回内国勸業博覧会と大阪市の都市整備」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, クレオ大阪中央, 2019/8/4

小川莉菜「欧米で生まれた国民国家は、なぜ日本をはじめ世界へ広がったのだろうか (大学院生グループ報告『新学習指導要領解説「歴史総合」の「問い」を考える』、谷垣美有氏・内藤裕子氏・向井健悟氏とのグループ報告)」, 大阪大学歴史教育研究会第 125 回例会, 大阪大学大学院文学研究科, 2019/12/21

小野公三「天明期の大凶作と白河藩政治」, 大阪歴史学会近世史部会, 大阪市立淀川区民センター, 2019/11/29

梶尾良太「海上交通保護作戦と日本海軍—海上護衛戦の三要素論的分析—」, 軍事史学会第 10 回軍事史研究フォーラム, 國學院大學, 2019/11/16

菊池康貴「私たちは「天皇陵」をどう教えればよいのか」, 第 14 回九州大学歴史学・歴史教育セミナー, 九州大学箱崎文系キャンパス・, 2019/8/25

高見薪之介「中世における木の利用—伊勢神宮遷宮の事例を中心に—」, 第 15 回地域史卒論報告会, 兵庫勤労市民センター, 2020/3/7 (※新型コロナウイルス対応により中止。報告レジュメは提出)

富谷竜一郎「明治初年の華族の結集と岩倉具視—華族会館建設に至るまで—」, 日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会合同第 1 回卒論報告会, 日本史研究会事務所会議室, 2019/6/16

富谷竜一郎「第一次世界大戦は、国際関係をどのように変えたのだろうか (大学院生グループ報告『新学習指導要領解説「歴史総合」の「問い」を考える』、石垣萌香氏・浦田光氏・松尾和花菜氏との共同報告)」, 大阪大学歴史教育研究会第 125 回例会, 大阪大学大学院文学研究科, 2019/12/21

向井健悟「「御食つ国」と贅」, 続日本紀研究会・日本史研究会古代史部会合同卒業論文大報告会, 大阪歴史博物館, 2019/6/16

向井健悟「「御食つ国」と贅をめぐる」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, クレオ大阪中央, 2019/8/4

向井健悟「欧米で生まれた国民国家は、なぜ日本をはじめ世界へ広がったのだろうか (大学院生グループ報告『新学習指導要領解説「歴史総合」の「問い」を考える』、小川莉菜氏・谷垣美有氏・内藤裕子氏とのグループ報告)」, 大阪大学歴史教育研究会第 125 回例会, 大阪大学大学院文学研究科, 2019/12/21

向井健悟「武蔵国の大贅「鼓」について」, 明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生

- 研究交流プログラム，大阪大学大学院文学研究科， 2020/1/12
- 向井健悟「『御食つ国』研究の現状と課題」，第2回若手研究者フォーラム，大阪大学， 2020/3/23（新型コロナの影響で延期）
- 森川太貴「南北朝期における北畠氏と伊勢国」，大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告，クレオ大阪中央， 2019/8/4
〔博士後期〕
- 居上静香「磯長谷陵墓の形成について」，続日本紀研究会5月例会，アウイーナ大阪， 2019/5/31
- 伊藤大貴「石見銀山周辺の浄土宗寺院と毛利氏」，鳥根県中近世史合同研究会，大田市民会館， 2019/6/22
- 伊藤大貴「因幡守護山名豊時・豊重父子と室町幕府」，鳥取地域史研究会，鳥取県立博物館， 2019/11/9
- 糸川風太「領国地域における幕府支配の展開と変遷—紀州藩熊野地域の御城米廻漕を対象として」，四藩合同研究会，金沢大学角間キャンパス， 2019/9/17
- 糸川風太「江戸期の円珠院—無縁・無旦寺院の運営—」，和歌山地方史研究会第40回大会，和歌山市立博物館， 2020/3/29
- 岡田康佑「日本古代の疾病観・障がい者観をめぐる試論」，続日本紀研究会7月例会，アウイーナ大阪， 2019/7/26
- 岡田康佑「日本古代の疾病観・障がい者観をめぐる試論」，第47回古代史サマーセミナー，国立歴史民俗博物館， 2019/8/23
- 岡田康佑「堀井佳代子氏報告を聞いて〈2019年度大会共同研究報告反省会〉」，日本史研究会古代史部会，日本史研究会事務所会議室， 2019/11/25
- 大上幹広「鎌倉後期の東寺供僧と公家訴訟—弓削島莊関連史料に注目して—」，第4期第3回東寺文書研究会，東京大学法文1号館， 2019/12/8
- 大上幹広「鎌倉末期の伊予国弓削島莊と公家訴訟—百姓等逃散の—前提—」，四国中世史研究会第75回研究会，坂出市勤労センター， 2019/12/21
- 尾崎真理「近世中後期における幕府の代官配置原則」，大阪歴史学会近世史部会，池田市立中央公民館， 2019/5/11
- 尾崎真理「近世中後期における幕府の代官配置原則」，大阪歴史学会2019年度大会，関西大学千里山キャンパス， 2019/6/30
- 尾崎真理「古文書にみる幕末の大坂近郊村と長州戦争—長州戦争で活躍した大坂代官手代と人足—」，「にんやか田邊」歴史講座，大阪市立東住吉会館， 2019/10/27
- 尾崎真理「“大坂”と洪庵・適塾生—北船場を中心に—」，第12回適塾講座，大阪大学中之島センター， 2019/11/21
- 車谷航「信長が越前にやってきた！～興福寺高僧がみた戦国越前～」，あわらし郷土歴史資料館第3回ふるさと講座，あわらし市民文化研修センター， 2020/2/16
- 康昊「中世禅宗の服色秩序と後醍醐天皇」，中世史研究会例会，愛知県産業労働センター， 2019/4/26
- 康昊「室町幕府初期の秩序重建與元代江南禅林」，第7回全球史学術フォーラム，首都師範大学， 2019/6/8
- 康昊「南北朝期における幕府の鎮魂仏事と五山禅林—文和三年の水陸会を中心に—」，2019年度第4回東西学術研究所研究例会，関西大学， 2019/7/19
- 康昊「室町幕府の秩序重建與入元僧集団」，国際シンポジウム「東亜視域下的中日文化関係」，浙江工商大学， 2019/10/27
- 康昊「蒙古襲来与日本中世宗教体制的轉換」，復旦大学文史研究院小型学術研究会，復旦大学， 2019/10/31
- 康昊「日本中世的袈裟與政治権力」，第3回中国佛教史フォーラム，南京大学， 2019/11/3
- 康昊「延暦寺的暴力—1345年の天龍寺紛争與室町幕府的困境」，国際シンポジウム「從天台到比叡—中、日、韓天台の伝播、互動與東亞社会」，北京大学， 2019/12/8
- 佐藤一希「光格天皇の皇位継承構想と江戸幕府—后妃・皇子をめぐる動向を中心に—」，日本史研究会・大阪歴史学会合同近世史部会，日本史研究会事務所会議室， 2019/4/27
- 佐藤一希「泉涌寺における近世天皇葬送儀礼の展開と構造」，大阪歴史学会近世史部会，大阪市立淀川区民センター， 2019/10/18
- SATO Kazuki「The Emperor's Gyoko and Funeral in Early Modern Japan」，大阪大学・ハーバード大学 院生交流

会「日本文化をめぐる対話」，ハーバード大学，2020/2/28

高岡萌「臨時教育委員会における七年制高等学校の設置論—嘉納治五郎・東京高等師範学校「三派同盟」の動向を中心に—」，大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会，大阪市立淀川区民センター，2019/11/14

高岡萌「大正期における高等教育機関の増設政策の展開—官立7年制高等学校を事例に—」，歴史学会第44回大会，東京経済大学国分寺キャンパス，2019/12/8

高岡萌「大和川の付け替えの歴史的意義—市村新田・庭井新田の成立を題材に—」，長吉ふれあい歴史塾，大阪市立長吉南小学校，2020/1/25

田村亨「南北両朝関係に関する一考察—「天野殿」を中心として—（※科学研究費補助金（基盤研究（C））「河内国金剛寺文書に基づく中世地域社会史の研究」（研究代表者：川合康）の調査に伴う研究会での報告」，第1回河内国金剛寺文書研究会，河内長野荘，2019/9/13

田村亨「承久の乱直後における鎌倉幕府の訴訟対応」，鎌倉時代研究会9月例会，京都大学大学院文学研究科，2019/9/30

田村亨「「天野殿」光厳印と河内国金剛寺（※ポスター発表）」，第4回大阪大学豊中地区研究交流会，大阪大学大学院基礎工学研究科国際棟セミナー室，2019/12/17

永野弘明「13・14世紀の流通・商業を考える—伊藤啓介「13・14世紀の流通構造と商業」をきいて—（2019年度日本史研究会大会共同研究報告反省会）」，日本史研究会中世史部会，日本史研究会事務所会議室，2019/11/4

永野弘明「南北朝内乱とその影響」，大阪府北部コミュニティカレッジ，高槻市市民会館，2019/11/12

永野弘明「平安～鎌倉初期黒田荘荘官考」，歴史学研究会中世史部会，早稲田大学戸山キャンパス，2019/11/23

永野弘明「南北朝の合一と足利義満の王権」，大阪府北部コミュニティカレッジ，南高槻スクエア，2019/12/10

永野弘明「室町文化と京都五山」，大阪府北部コミュニティカレッジ，南高槻スクエア，2020/1/14

永山愛「南北朝期における軍事指揮者と軍事編成」，東京大学中世史研究会11月例会，東京大学史料編纂所，2019/11/7

濱田恭幸「三新法体制下における道路開鑿事業—府県域の変遷と府県土木事業の成立—」，明治維新史学会2019年度4月例会，大阪市立中央会館，2019/4/6

濱田恭幸「明治中後期における府県統廃合計画—山縣系官僚大森鐘一を中心に—」，近現代史研究会2019年度4月例会，名古屋大学大学院文学研究科，2019/4/27

濱田恭幸「三新法体制下における道路開鑿事業—府県域の変遷と府県土木事業の成立—」，明治維新史学会2019年度大会，京都橘大学清和館，2019/6/8

濱田恭幸「旧両替商長田家の処分と小西家—「長田事件」を中心に—」，小西家論集研究会，神戸大学，2019/9/16

平田良行「近世後期幕府代官役所による金融機能の一考察—「声掛り」に注目して—」，畿内近国史研究会，大阪大学大学院文学研究科，2019/10/6

平田良行「地域の古文書について—高畑家文書の整理に携わって—」，朝宮自治振興会文化遺産振興部会，朝宮コミュニティーセンター，2020/2/23

平田良行「近世後期幕府代官の金融機能について—近江国信楽代官を事例に—」，岡山地方史研究会3月例会，岡山大学社会文化科学研究科，2020/3/22

平田良行「村田路入氏の業績について」，大阪歴史科学協議会前近代史研究部会・拡大研究委員会，クレオ大阪中央，2020/3/29

増成一倫「救急料の特質と機能—用途の分析を中心に—」，続日本紀研究会9月例会，アウイーナ大阪，2019/9/13

増成一倫「公廩稲制度の展開と国司」，続日本紀研究会1月例会，アウイーナ大阪，2020/1/31

増成一倫「公廩稲制度の展開と国司」，続日本紀研究会3月例会，アウイーナ大阪，2020/3/27

望月みわ「日清・日露戦間期の対韓政策と通信省—在外郵便電信局を中心に—」，日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会合同修論報告会，日本史研究会事務所会議室，2019/4/28

望月みわ「日清・日露戦間期の対韓政策と通信省—在外郵便電信局を中心に—」，日露関係史研究会，名城大学，2019/6/22

望月みわ「近代日本の対外政策と通信利権—在外郵便電信局を中心に—」，東アジア日本研究者協議会第4回国際学術大

会, 国立台湾大学文学院, 2019/11/2

望月みわ「朝鮮半島における日本電信網の拡大」, マチカネ政治史研究会, 大阪大学大学院法学研究科, 2019/12/21

(3)その他(書評・翻訳など)

【2018年度】

[学部生]

澤居美奈実「地域史卒論報告会に参加して」, 『史料ネット News Letter』90, 歴史資料ネットワーク, pp.8-9, 2019/2

[博士前期]

植村優恵「部会ニュース(中世史部会): 2018年7月中世史部会報告「内親王から見る後白河王家」要旨」, 『日本史研究』677, 日本史研究会, pp.92-93, 2019/1

上原駿一「堺のフィールドワークに参加して」, 『歴史科学』234, 大阪歴史科学協議会, pp.16-19, 2018/10

越智勇介「部会ニュース(古代史部会): 2018年1月古代史部会山上憲太郎報告討論要旨」, 『日本史研究』670, 日本史研究会, pp.128-129, 2018/6

越智勇介「部会ニュース(古代史部会): 2018年3月古代史部会花川真子報告討論要旨」, 『日本史研究』675, 日本史研究会, pp.87-88, 2018/11

越智勇介「部会ニュース(古代史部会): 2018年5月古代史部会佐藤真海報告討論要旨」, 『日本史研究』675, 日本史研究会, p.89, 2018/11

越智勇介「2017年10月例会「日本古代の地方支配構造と郡司」彙報」, 『歴史科学』236, 大阪歴史科学協議会, p.52, 2019/3

荻野瑞生「部会ニュース(近現代史部会): 2018年2月近現代史部会報告「大韓帝国期の日語学校「京城学堂」の研究—日本の対韓政策・韓国内の動向を踏まえて—」要旨」, 『日本史研究』671, 日本史研究会, pp.95-96, 2018/7

荻野瑞生「部会ニュース(近現代史部会): 2018年2月近現代史部会長岡航報告討論要旨」, 『日本史研究』671, 日本史研究会, pp.97-98, 2018/7

金沢大輔「部会ニュース(中世史部会): 2017年12月中世史部会永山愛報告討論要旨」, 『日本史研究』668, 日本史研究会, pp.98-99, 2018/4

金沢大輔「大阪歴史学会委員会報告(2017年度第5回・第6回)」, 『ヒストリア』267, 大阪歴史学会, pp.126-127, 2018/4
※岸本直文氏との共同執筆

金沢大輔「大阪歴史学会委員会報告(2017年度第7回・第8回)」, 『ヒストリア』268, 大阪歴史学会, pp.109-110, 2018/6
※岸本直文氏との共同執筆

佐藤一希「2018年度「第34回歴史学入門講座」の記録」, 『ヒストリア』270, 大阪歴史学会, pp.124-126, 2018/10

高見薪之介「部会ニュース(中世史部会): 2018年5月中世史部会田村亨報告討論要旨」, 『日本史研究』673, 日本史研究会, p.93-94, 2018/9

長谷川昇平「大阪歴史科学協議会委員会記録(2017年度11月・12月)」, 『歴史科学』232, 大阪歴史科学協議会, p.64, 2018/4 ※北泊謙太郎氏との共同執筆

長谷川昇平「大阪歴史科学協議会委員会記録(2017年度1月・2月・3月)」, 『歴史科学』233, 大阪歴史科学協議会, pp.74-75, 2018/5 ※北泊謙太郎氏との共同執筆

長谷川昇平「大阪歴史科学協議会委員会記録(2017年度4月・5月・6月臨時、2018年度6月)」, 『歴史科学』234, 大阪歴史科学協議会, pp.67-68, 2018/10 ※北泊謙太郎氏との共同執筆

望月みわ「『建国記念の日』不承認 2.11 大阪府民のつどい」参加記」, 『歴史科学』235, 大阪歴史科学協議会, pp.13-16, 2019/1

望月みわ「2017年12月例会「明治維新史像の形成をめぐる権力と社会—明治150年によせて—」討論要旨」, 『歴史科学』236, 大阪歴史科学協議会, p.51, 2019/3

[博士後期]

- 安東 峻「2017年10月例会報告「古代東北における人身支配と地域支配」要旨」,『續日本紀研究』272, 續日本史研究会, p.37, 2019/3
- 安東 峻「質疑・討論(2018年度大阪歴史学会大会古代史部会・吉永壮志「古代西日本海地域の水上交通一若狭と出雲を中心に」報告討論要旨)」,『ヒストリア』, 271, 大阪歴史学会, pp.79-80, 2018/12
- 安東 峻「大山古墳(百舌鳥耳原中陵)の発掘調査見学報告」,『ヒストリア』272, 大阪歴史学会, pp.105-113, 2019/2
- 伊藤大貴「書評:市川裕士著『室町幕府の地方支配と地域権力』」,『日本史研究』673, 日本史研究会, pp.73-79, 2018/9
- 糸川風太「質疑・討論(2018年度大阪歴史学会大会近世史部会・高橋伸拓「京都代官役所の幕領・朝廷領支配一摂津国島下郡を中心に」報告討論要旨)」,『ヒストリア』271, 大阪歴史学会, pp.159-160, 2018/12
- 糸川風太「大阪歴史科学協議会委員会記録(2018年度7月・9月・10月)」,『歴史科学』235, 大阪歴史科学協議会, pp.59-60, 2019/1 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 糸川風太「大阪歴史科学協議会委員会記録(2018年度11月・12月)」,『歴史科学』236, 大阪歴史科学協議会, pp.54-55, 2019/3 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 尾崎真理「徳川奨励賞を受賞して(テーマ:「近世中後期における幕領支配の研究」)」,『徳川記念財団会報』, 31, p.2, 2018/6
- 康 昊「部会ニュース(中世史部会):2018年1月中世史部会報告「南北朝・室町前期における禅院の千僧齋、水陸会と追善」要旨」,『日本史研究』669, 日本史研究会, pp.87-88, 2018/5
- 高岡 萌「2017年1月例会『『大学でまなぶ日本の歴史』から考える教養教育としての日本史』彙報」,『歴史科学』232, 大阪歴史科学協議会, pp.61-62, 2018/4
- 高岡 萌『柏原市古文書調査報告書 第13集 河内国安宿部郡国分村南西尾家文書』, 柏原市立歴史資料館, 2019/3
※上記の古文書調査報告書は柏原市立歴史資料館編。
- 田村 亨「部会ニュース(中世史部会):2018年5月中世史部会報告「鎌倉幕府理非裁断の成立過程」要旨」,『日本史研究』673, 日本史研究会, pp.92-93, 2018/9
- 永野弘明「被災地・地域社会と向き合う」,『史料ネット News Letter』87, 歴史資料ネットワーク, p.1, 2018/5
- 永野弘明「部会ニュース(中世史部会):2018年2月中世史部会三輪眞嗣報告討論要旨」,『日本史研究』670, 日本史研究会, pp.130-131, 2018/6
- 永野弘明「部会ニュース(中世史部会):2018年4月中世史部会報告「荘園の立荘と領域支配一備後国大田荘を素材として一」要旨」,『日本史研究』672, 日本史研究会, pp.84-85, 2018/8
- 永野弘明「部会ニュース(中世史部会):2018年7月中世史部会浅井尚希報告討論要旨」,『日本史研究』677, 日本史研究会, p.99, 2019/1
- 永野弘明「部会ニュース(中世史部会):2018年7月中世史部会植村優惠報告討論要旨」,『日本史研究』677, 日本史研究会, p.99, 2019/1
- 永野弘明「部会ニュース(中世史部会):2018年7月中世史部会丸井惇報告討論要旨」,『日本史研究』677, 日本史研究会, pp.99-100, 2019/1
- 永野弘明「部会ニュース(中世史部会):2018年7月中世史部会小松明日香報告討論要旨」,『日本史研究』677, 日本史研究会, p.100, 2019/1
- 永山 愛「部会ニュース(中世史部会):2017年12月中世史部会報告「南北朝期の惣領について一軍事指揮権の問題を中心に一」要旨」,『日本史研究』668, 日本史研究会, pp.97-98, 2018/4
- 永山 愛「部会ニュース(中世史部会):2018年4月中世史部会永野弘明報告討論要旨」,『日本史研究』672, 日本史研究会, pp.85-86, 2018/8
- 永山 愛「2018年度大会「日本中世社会をどう把握するか」討論要旨」,『歴史科学』236, 大阪歴史科学協議会, pp.23-24, 2019/3
- 増成一倫「部会ニュース(古代史部会):2018年11月古代史部会報告「新任国司への給糧と郡稲」要旨」,『日本史研究』679, 日本史研究会, p.198, 2019/3

【2019年度】

〔学部生〕

北山 航「部会ニュース(中世史部会)：2019年8月中世史部会報告「室町幕府奉行人家の存在形態—一族・被官の活動から—」要旨」,『日本史研究』690,日本史研究会,p.241,2020/2

〔博士前期〕

菊池康貴『日本史研究ノートⅡ』,光文館,2020/4 ※上記の『日本史研究ノートⅡ』は福岡県高等学校歴史研究会編。菊池氏は、同会幹事(日本史研究ノート担当)の立場で編集・執筆に関わる

高見薪之介「創出された「歴史」に向き合う—第34回歴史学入門講座参加記—」,『歴史科学』238,大阪歴史科学協議会,pp.42-44,2019/9

晁 越「信陽師範学院(中華人民共和国河南省信陽市)で開講された吉田曠二氏の集中講義の通訳、および集中講義に関する日本近代史の内容紹介」,2019/5/11-5/20

網澤広貴「2018年3月例会「書物・読者・読書の文化史」討論要旨」,『歴史科学』237,大阪歴史科学協議会,pp.20-21,2019/5

網澤広貴「質疑・討論(2019年度大阪歴史学会大会近世史部会・尾崎真理「近世中後期における幕府の代官配置原則」報告討論要旨)」,『ヒストリア』277,大阪歴史学会,pp.164-165,2019/12

向井健悟「第47回古代史サマーセミナー(千葉)参加記」,『歴史学研究月報』720,歴史学研究会,pp.2-4,2019/12

向井健悟「部会ニュース(古代史部会)：2019年6月古代史部会報告「御食つ国」と贅」要旨」,『日本史研究』688,日本史研究会,p.128,2019/12

向井健悟「部会ニュース(古代史部会)：2019年6月古代史部会蟹江友和報告討論要旨」,『日本史研究』688,日本史研究会,pp.132-133,2019/12

向井健悟「大阪歴史科学協議会委員会記録(2019年度9月・10月・11月)」,『歴史科学』240,大阪歴史科学協議会,pp.67-68,2020/2 ※北泊謙太郎氏・森川太貴氏との共同執筆

森川太貴「大阪歴史科学協議会委員会記録(2019年度6月・7月)」,『歴史科学』239,大阪歴史科学協議会,p.59,2019/11 ※北泊謙太郎氏との共同執筆

森川太貴「大阪歴史科学協議会委員会記録(2019年度9月・10月・11月)」,『歴史科学』240,大阪歴史科学協議会,pp.67-68,2020/2 ※北泊謙太郎氏・向井健悟氏との共同執筆

〔博士後期〕

安東 峻「部会ニュース(古代史部会)：2019年1月古代史部会報告「古代東北における蝦夷系住民の姓と分類」要旨」,『日本史研究』683,日本史研究会,pp.77-78,2019/7

安東 峻「特集にあたって(特集「土塔—行基・土師氏—)」,『ヒストリア』276,大阪歴史学会,p.1,2019/10

糸川風太「大阪歴史科学協議会委員会記録(2018年度1月・2月)」,『歴史科学』237,大阪歴史科学協議会,p.63,2019/5 ※北泊謙太郎氏との共同執筆

糸川風太「大阪歴史科学協議会委員会記録(2018年度3月・4月・5月・5月臨時)」,『歴史科学』238,大阪歴史科学協議会,pp.63-64,2019/9 ※北泊謙太郎氏との共同執筆

岡田康佑「岡山史料ネット活動参加記—地域の遺産を守るために—」,『岡山地方史研究』149,岡山地方史研究会,pp.25-26,2019/12

尾崎真理「2019年度大会報告要旨(近世・部会報告)「近世中後期における幕府の代官配置原則」」,『ヒストリア』274,大阪歴史学会,pp.87-88,2019/6

康 昊「部会ニュース(中世史部会)：2019年3月中世史部会高鳥廉報告討論要旨」,『日本史研究』684,日本史研究会,pp.85-86,2019/8

康 昊『應仁之亂：催生日本戦国時代的京都大亂』(翻訳：吳座勇一著『応仁の乱』),遠足文化事業(台湾),2019/2

佐藤一希「部会ニュース(近世史部会)：2019年4月近世史部会報告「光格天皇の皇位継承構想と江戸幕府—后妃・皇子をめぐる動向を中心に—」要旨」,『日本史研究』685,日本史研究会,pp.85-86,2019/9

佐藤一希「部会ニュース(近世史部会)：2019年5月近世史部会高橋伸拓報告討論要旨」,『日本史研究』686,日本史研究

会, p.83, 2019/10

- 佐藤一希「書評と紹介：朝幕研究会編『論集 近世の天皇と朝廷』」, 『日本歴史』 863, 日本歴史学会, pp.88-90, 2020/4
- 田村 亨「部会ニュース(中世史部会): 2019年8月中世史部会下坂碧報告・金澤木綿報告・池田拓哉報告・川崎智文報告
討論要旨」, 『日本史研究』 690, 日本史研究会, pp.242-243, 2020/2
- 永野弘明「新刊紹介：海老澤衷編『中世荘園村落の環境歴史学—東大寺領美濃国大井荘の研究—』」, 『日本史研究』 680,
日本史研究会, pp.85-86, 2019/4
- 永野弘明「「フィールドワーク 大和郡山・筒井地域を歩く」に参加して」, 『歴史科学』 238, 大阪歴史科学協議会,
pp.20-22, 2019/9
- 永山 愛「安見流砲術関係資料について—歴博所蔵コレクションから—」, 『交野市文化財だより』 31, 交野市教育委員会
社会教育課・交野市立教育文化会館(歴史民俗資料展示室), pp.22-25, 2020/3
- 濱田恭幸「私と公文書館」, 『公文書館だより』 65, 富山県公文書館, p.7, 2019/7
- 濱田恭幸「2018年11月例会「明治時代像の再構築を目指して—書評：飯塚一幸『明治期の地方制度と名望家』—」討論
要旨」, 『歴史科学』 238, 大阪歴史科学協議会, pp.40-41, 2019/9
- 濱田恭幸「新刊紹介：大阪民衆史研究会島田邦二郎史料集成編集委員会『『立憲政体改革の急務』島田邦二郎史料集成—
淡路島の「自由民権」と憲法構想—』」, 『ヒストリア』 278, 大阪歴史学会, pp.110-111, 2020/2
- 増成一倫「続日本紀研究会9月例会報告要旨「救急料の特質と機能—用途の分析を中心に—」」, 『続日本紀研究』 418, 続
日本紀研究会, p.53, 2019/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

佐藤一希：大阪大学文学研究科賞, 受賞年月：2019/3/8

永野弘明：第13回読売あをによし賞特別賞, 受賞年月：2019/6/16

(※歴史資料ネットワークとして受賞。永野さんはその運営委員)

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD：3名 DC2：2名 DC1：1名(計6名)

2019年度 PD：2名 DC2：2名 DC1：1名(計5名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部：0名 大学院：0名(計0名)

2019年度 学部：0名 大学院：0名(計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

中尾 浩康 博士後期課程、東京家政大学、講師、2018/4

東野 将伸 博士後期課程、岡山大学、専任講師、2018/10

溝口 優樹 日本学術振興会特別研究員、大阪大学、助教、2019/4

高木 純一 博士後期課程、滋賀県立大学、専任講師、2020/4

久野 洋 博士後期課程、ノートルダム清心女子大学、専任講師、2020/4

溝口 優樹 日本学術振興会特別研究員、中京大学、専任講師、2020/4

尾崎 真理 博士後期課程、大阪大学、特任助教、2020/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 6名

2018年度：4名 2019年度：2名

<内訳>2018年度 中・高等学校の教員 2名 (大阪府立佐野高等学校・青森県立弘前中央高等学校)
博物館等の学芸員 2名 (朝日町歴史博物館・泉大津市教育委員会生涯学習課史料室)

<内訳>2019年度 中・高等学校の教員 1名 (大阪青凌高等学校)

ジャーナリスト 1名 (日本放送協会)

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度：0名 2019年度：0名

9. 刊行物

2018年度 『史友会会報』第33号 (待兼山史友会編、同、2019年3月)

2019年度 『史友会会報』第34号 (待兼山史友会編、同、2020年1月)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「大阪歴史科学協議会」(学会、事務局引き受け) 2014年6月～現在に至る

「続日本紀研究会」(学会、事務局引き受け) 2019年4月～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

研究室例会 (1998年度～2017年度)

・「古代日本の国際環境」 2019年1月23日

発表者：熊谷公男先生 (東北学院大学名誉教授)

・「権門体制論再考—鎌倉時代の朝幕関係を考える—」 2020年1月29日

発表者：近藤成一先生 (放送大学教授)

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 村田 路人 教授

1955年生。1977年大阪大学文学部史学科卒業。1981年大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程中途退学。文学博士 (大阪大学、1994年)。大阪大学文学部助手、京都橘女子大学文学部専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、2002年4月より現職 (2020年3月定年退職)。専攻：日本近世史

1-1. 論文

村田路人 「緒方洪庵と適塾」『適塾』52, 適塾記念会, pp. 21-43, 2019/12

村田路人 「幕末期における大坂町奉行所の広域支配と医療行政—種痘事業の検討から—」『幕末期における大坂・大坂城の軍事的役割と畿内・近国藩』(平成26～30年度科学研究費補助金基盤研究(B)代表岩城卓二), pp. 77-86, 2019/2

1-2. 著書

村田路人, 島田昌一, 木下タロウ他 (共編著) 『新版 緒方洪庵と適塾』大阪大学出版会, pp. 4-8, pp. 9-12, pp. 46-50, pp. 54-57, 2019/3

村田路人 『近世畿内近国支配論』塙書房, 448p., 2019/2

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

交野市文化財審査委員会・委員, 2018年4月～現在に至る
豊中市歴史的文化的文書審議会・委員, 2014年11月～現在に至る
豊中市文化財保護審議会・委員, 2014年4月～現在に至る
文化庁文化審議会・専門委員, 2014年3月～現在に至る
摂津市文化財保護審議会・委員, 2013年7月～現在に至る
吹田市立博物館協議会・委員, 2011年11月～現在に至る
摂津市史編さん委員会・編さん委員長, 2011年7月～現在に至る
島本町文化財保護審議会・委員, 2008年10月～現在に至る
吹田市文化財保護審議会・委員, 2003年11月～現在に至る

2. 飯塚 一幸 教授

1958年生。1988年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学博士（大阪大学、2018年）。舞鶴工業高等専門学校専任講師、佐賀大学助教授、大阪大学准教授を経て、2010年1月より現職。専攻：日本近代史

2-1. 論文

飯塚一幸 「書評へのリプライ」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 238, 大阪歴史科学協議会, pp. 34-39, 2019/9

飯塚一幸 「日露戦争時の軍事郵便－陸軍歩兵中尉南檜一郎宛書簡を中心に－」『枚方市史年報』21, 枚方市教育委員会文化財課市史資料室, pp. 1-15, 2019/3

2-2. 著書

飯塚一幸, 山本長次, 藤井鹿男他(共編)『佐賀近代史年表大正編－大正6年1月～大正6年12月』佐賀大学地域学歴史文化研究センター, pp. 1-165, 2020/3

飯塚一幸(監修)『禁野火薬庫爆発遭難手記』枚方市教育委員会, pp. 1-244., 2019/8

原田敬一, 飯塚一幸, 笹部昌利他(共著)『近代日本の政治と地域』吉川弘文館, pp. 1-20, 2019/6

山本四郎, 伊藤之雄, 飯塚一幸他(共編)『吉田清成関係文書』7, 思文閣出版, pp. 1-573, 2018/10

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

飯塚一幸「書評 中元崇智著『明治期の立憲政治と政党:自由党系の国家構想と党史編纂』、『歴史評論』(歴史科学協議会), 838, 歴史科学協議会, pp. 90-94, 2020/2

飯塚一幸「書評 中西啓太著『町村「自治」と明治国家:地方行財政の歴史的意義』、『歴史学研究』(歴史学研究会), 988, 歴史学研究会, pp. 59-62, 2019/10

2-4. 口頭発表

飯塚一幸「今村直樹・中西啓太報告へのコメント」近現代史研究会第11回大会, 近現代史研究会, 名古屋大学, 2019/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014年度～2018年度、基盤研究(B) 一般、代表者:飯塚一幸

課題番号:26284096

研究題目:小西家資料の総合的研究

研究経費:2018年度 直接経費 2,100,000円 間接経費 630,000円

研究の目的:

伊丹市の小西家は近世から現代に至る日本を代表する酒造家である。本研究は、伊丹市立博物館に寄託されている小西家資料と小西酒造萬歳蔵から発見された新出資料を対象として、(1)近世史・近代史・思想史・経済史・文学にまたがる学際的研究を行う、(2)(1)の研究を踏まえ『小西家資料の総合的研究』(仮)を刊行する、(3)(1)(2)の前提として、小西酒造萬歳蔵に所蔵されている新出資料の目録化を行い、CD-Rによる配布といった方法で公開することを目的とする。

2-6-2. 2019年度～2023年度、基盤研究(B) 一般、代表者:飯塚一幸

課題番号:19H01309

研究題目:巨大塩田地主野崎家史料の総合的研究

研究経費:2019年度 直接経費 3,400,000円 間接経費 1,020,000円

研究の目的:

岡山県倉敷市児島の野崎家は、近世～近代の日本を代表する巨大塩田地主である。本研究は、野崎家塩業歴史館所蔵の野崎家史料を対象として、(1)野崎家史料の目録化を図り全容を公開する、(2)「野崎家史料研究会」を立ち上げ、野崎家史料から得られた新たな知見をもとに、岡山・瀬戸内の有力者から出発した野崎家が、どのように日本の近代化を担い帝国化に対応していたのかについて、学際的研究を行う、(3)(2)を通して、『巨大塩田地主野崎家の総合的研究(仮)』を刊行することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究・委員, 2018年4月～現在に至る

大阪府公文書館運営懇談会・委員, 2018年4月～現在に至る

歴史科学協議会・理事, 2016年11月～現在に至る

大阪歴史科学協議会・委員長, 2016年6月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2013年6月～現在に至る

八尾市史編集委員会・編集委員, 2011年4月～現在に至る

摂津市史編さん委員会・編さん委員, 2011年4月～現在に至る

枚方市史編纂委員会・編纂委員, 2011年4月～現在に至る

3. 川合 康 教授

1958年生。1987年、神戸大学大学院文化科学研究科博士課程単位修得退学。文学博士（神戸大学、1994年）。樟蔭女子短期大学助教授、東京都立大学准教授、日本大学教授を経て、2012年4月より現職。専攻：日本中世史

3-1. 論文

川合康 「山内首藤俊綱の「討死」と軍記・絵巻・合戦図屏風」『戦国軍記・合戦図屏風と古文書・古記録をめぐる学際的研究 2016年度～2018年度科学研究費補助金（基盤研究(B))研究成果報告書』共立女子大学, pp. 15-30, 2019/3

3-2. 著書

川合康 『院政期武士社会と鎌倉幕府』吉川弘文館, 320p., 2019/2

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

川合康 「平安末期・鎌倉初期の金剛寺文書について」第2回金剛寺文書研究会, 科学研究費助成事業・基盤研究(C)(一般)「河内国金剛寺文書に基づく中世地域社会史の研究」, 紀伊見荘, 2019/11

川合康 「三度の宇治川合戦と『平家物語』」第42回中世政治史研究会, 中世政治史研究会, 東京大学法文1号館, 2019/8

川合康 「山内俊綱の「討死」をめぐる諸問題 —『平治物語』『平治物語絵巻』『平治合戦図屏風』との関連から—」東京大学史料編纂所国際研究集会: 合戦のイメージ形成から実像を考える, 東京大学史料編纂所/科学研究費補助金「戦国軍記・合戦図屏風と古文書・古記録をめぐる学際的研究」(研究代表者堀新・共立女子大学), 東京大学弥生講堂, 2019/1

川合康 「源義経と伊勢国惣追捕使」大阪歴史学会中世史部会 11月例会, 大阪歴史学会中世史部会, 淀川区民センター, 2018/11

川合康 「金剛寺文書と河内長野」第56回中世史サマーセミナー: 奥河内の中世を探る, 第56回中世史サマーセミナー実行委員会, 河内長野荘, 2018/8

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2015年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 川合康

課題番号: 15K02831

研究題目: 京都大番役の成立・展開に関する実態的研究

研究経費: 2018年度 直接経費 300,000円 間接経費 90,000円

研究の目的:

本研究の目的は、鎌倉幕府のもとで制度的に確立した京都大番役について、Ⅰ平安末期、Ⅱ治承・寿永内乱期(文治年間以前)、Ⅲ鎌倉前期(建久年間から承久の乱以前)、Ⅳ鎌倉中後期の4段階に区分して、その成立・展開の段階的特徴を実態的に明らかにすることである。その際、(a)里内裏警固、(b)大内守護(警固)、(c)院御所警固という3種類の御所の警固役を明確に区別したうえで、Ⅰ～Ⅳの段階においてそれぞれの警固役がどのように成立・展開し、鎌倉幕府のもとで京都大番役として統合・整備されていくのかを検討する。

3-6-2. 2019年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:川合康

課題番号:19K00952

研究題目:河内国金剛寺文書に基づく中世地域社会史の研究

研究経費:2019年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

本研究の目的は、平安時代末期に草創され、地方有力寺院として発展した河内国金剛寺に伝わる約350点にのぼる中世文書を、Ⅰ平安時代末期～鎌倉時代中期、Ⅱ鎌倉時代後期～南北朝内乱期前半、Ⅲ南北朝内乱期後半～戦国時代、Ⅳ寺内法と武家権力、Ⅴ金剛寺院主職と貴族社会という5つの視点から詳細に分析し、中世の地域社会の実態を解明しようとするものである。また、金剛寺文書の高精密カラーデジタル撮影を行い、研究期間終了後には、今後の研究推進に資するため、関係機関と協議のうえ河内長野市立図書館において画像を公開する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術振興会特別研究員等審査会・専門委員, 2019年7月～2020年6月

中世史サマーセミナー実行委員会・実行委員長, 2017年8月～2018年8月

4. 市大樹 教授

1971年生まれ。2000年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士（大阪大学、2001年）。奈良文化財研究所研究員、同主任研究員、2009年4月大阪大学文学研究科准教授を経て、2020年4月より現職。日本学術振興会賞（2012年）、日本学士院学術奨励賞（2012年）、濱田青陵賞（2013年）、古代歴史文化賞大賞（2014年）。専攻：日本古代史

4-1. 論文

市大樹 「日本列島における漢字使用の始まりと東アジア」『グローバルヒストリーから考える大学歴史教育』大阪大学出版会, pp. 18-43, 2020/3

市大樹 「藤原京—中国式都城の受容—」『古代史講義【宮都篇】』筑摩書房, pp. 63-83, 2020/3

市大樹 「躍動する飛鳥時代の都」『シリーズ古代史をひらく 古代の都—なぜ都は動いたのか—』岩波書店, pp. 19-92, 2019/7

市大樹 「子代離宮と小郡宮—難波長柄豊碓宮遷居への道程—」『歴史・民族・考古学論攷』1, 大阪郵政考古学会, pp. 24-70, 2019/6

Ichi, Hiroki, “日本の7世紀木簡からみた韓国木簡”『文字と木簡』(韓国木簡学会), 22, pp. 99-124, 2019/6

市大樹 「日中比較交通論—律令条文を中心として—」『古代の都城と交通』竹林舎, pp. 356-385, 2019/5

市大樹 「木簡の視覚機能という考え方」『古代文化』(古代学協会), 70-3, 古代学協会, pp. 57-63, 2018/12

市大樹 「古代における東高野街道とその周辺」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 270, 大阪歴史学会, pp. 42-63, 2018/10

市大樹 「公民制の成立と大化改新」『歴史評論』(歴史科学協議会), 821, 歴史科学協議会, pp. 39-49, 2018/9

市大樹 「厩牧令からみた日本律令国家の馬牛政策」『律令国家の理想と現実』竹林舎, pp. 342-379, 2018/9

市大樹 「天平期節度使体制下の文書送達—出雲国計会帳にみえる節度使関係文書の検討—」『島根史学会会報』(島根史学会), 56, 島根史学会, pp. 1-22, 2018/7

市大樹 「木簡と日本書紀の用字」『日本書紀の誕生—編纂と受容の歴史—』八木書店, pp. 273-293, 2018/4

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

市大樹 「書評 馬場基著『日本古代木簡論』」『木簡研究』(木簡学会), 40, 木簡学会, pp. 226-236, 2018/12

市大樹 「新刊の情報と紹介 小倉慈司・三上喜孝編『国立歴史民俗博物館研究叢書4 古代日本と朝鮮の石碑文化』『歴史と地理』(山川出版社), 720, 山川出版社, pp. 44-48, 2018/12

4-4. 口頭発表

市大樹 「門籍制と門榜制をめぐる日唐比較試論」第117回史学会大会報告, 史学会, 東京大学, 2019/11

市大樹 「『出雲国風土記』の駅家記載めぐって」山陰における古代交通の研究, 島根県古代文化センター, 島根県古代文化センター, 2019/3

市大樹 「日本の7世紀木簡からみた韓国木簡」ワークショップ「韓国木簡と日本木簡との対話—韓国木簡研究20年—, 韓国木簡学会, 早稲田大学朝鮮文化研究所, 早稲田大学, 2019/1

市大樹 「孝徳朝における難波諸宮の展開」名古屋古代史研究会12月例会, 名古屋古代史研究会, 名古屋大学, 2018/12

市大樹 「古代における東高野街道とその周辺」大阪歴史学会現地見学会, 大阪歴史学会, 高安コミュニティセンター, 2018/5

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

市大樹 大阪大学賞(若手教員部門), 大阪大学, 2017/11

市大樹 古代歴史文化賞大賞, 島根県, 2014/10

市大樹 濱田青陵賞, 岸和田市・朝日新聞社, 2013/9

市大樹 大阪大学総長奨励賞(研究部門), 大阪大学, 2012/7

市大樹 日本学士院学術奨励賞, 日本学士院, 2012/2

市大樹 日本学術振興会賞, 日本学術振興会, 2012/2

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2017年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:市大樹

課題番号:17K03065

研究題目:日本古代木簡の源流と特質

研究経費:2018年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

2019年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究では、(1)東アジアという視点から「日本古代木簡の源流と特質」を探ることを最大の目標としている。中国・韓国の木簡研究にも正面から向き合うことによって、その方法論を学ぶとともに、日本古代木簡の研究で培われた方法論の発信につとめ、その相乗効果によって日本古代木簡研究の飛躍を図りたい。関連して、(2)木簡研究から導き出される〈文書機能論〉の観点から、従来の〈文書様式論〉に依拠した古文書学の再検討をおこない、新たな史料学に向けた提言をする。さらに、(3)木簡研究の成果を日本古代国家成立論のなかに反映させることも狙う。(2)(3)によって、木簡研究の有効性を示したい。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

続日本紀研究会・代表・事務局長, 2019年3月～現在に至る

史跡古市古墳群整備検討委員会・委員, 2016年4月～現在に至る

太子町国史跡二子塚古墳整備検討委員会・委員, 2016年4月～現在に至る

新修摂津市史・編さん委員, 2011年7月～現在に至る
古代文化刊行委員会・編集参与, 2010年4月～現在に至る
続日本紀研究会・編集委員, 2006年6月～2019年2月
条里制・古代都市研究会・集会委員, 2006年4月～現在に至る
新修福岡市史・専門委員, 2006年4月～現在に至る

5. 野村 玄 准教授

1976年生まれ。2004年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)(大阪大学)。大阪青山短期大学専任講師、防衛大学校講師、同准教授を経て、2016年4月より現職。専攻：日本近世史

5-1. 論文

野村玄 「安定的な皇位継承と南北朝正閏問題－明治天皇による「御歴代ニ関スル件」の「聖裁」とその歴史的影響－」『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 59, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-125, 2019/3

5-2. 著書

野村玄 『徳川家康の神格化 新たな遺言の発見』平凡社, 296p., 2019/10

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

野村玄 「書評 高野信治著『武士神格化の研究』」『新しい歴史学のために』(京都民科歴史部会), 294, 京都民科歴史部会, pp. 88-96, 2019/5

野村玄 「書評 山口和夫著『近世日本政治史と朝廷』」『日本史研究』(日本史研究会), 675, 日本史研究会, pp. 62-69, 2018/11

5-4. 口頭発表

野村玄 「元禄十六年十二月の七社七寺祈祷・内侍所御神楽と徳川綱吉－天皇と将軍に「宗教的機能」とその相剋は存在したのか－」国際日本文化研究センター基幹共同研究「比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想－王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼－」(伊東貴之氏研究代表)共同研究会, 国際日本文化研究センター研究棟第一共同研究室, 2019/8

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

野村玄 研究奨励賞, 財団法人防衛大学校学術・教育振興会, 2009/3

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本史研究会・編集委員, 2019年10月～現在に至る
摂津市史・執筆委員, 2019年6月～現在に至る

6. 北泊 謙太郎 助教

1971年生。1995年、大阪大学文学部史学科国史学専攻卒業、1997年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(史学専攻、日本史学専門分野)修了、2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化形態論専攻、日本史学専門分野)単

位修得退学。修士(文学、大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科ティーチング・アシスタント(1997年6月～1998年2月)。2001年より現職。専攻：日本史学／日本近現代史

6-1. 論文

北泊謙太郎「日中戦争期の科学技術動員政策と大学設備の拡充―戦時期の大阪帝国大学を事例に―」現代(いま)いのちを問う実行委員会『現代(いま)いのちを問う 抄録集』(現代(いま)いのちを問う実行委員会), 現代(いま)いのちを問う実行委員会, pp. 38-41, 2019/10

北泊謙太郎「シリーズ軍港都市史研究の到達点とその意義をめぐって―坂根嘉弘氏の論文に関する若干のコメント―」大阪歴史科学協議会『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 237, 大阪歴史科学協議会, pp. 32-41, 2019/5

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

北泊謙太郎「近代の日朝関係と「日本人」意識の成立―日韓歴史認識問題の起源―」日本科学者会議大阪支部 哲学研究会 11月例会, 日本科学者会議大阪支部, 国労大阪会館第一小会議室/大阪府大阪市, 2019/11(『日本科学者会議大阪支部ニュース』539, p. 3, 2019/12)

北泊謙太郎「日中戦争期の科学技術動員政策と大学設備の拡充―戦時期の大阪帝国大学を事例に―」現代(いま)いのちを問うシンポジウム, 「現代(いま)いのちを問う」実行委員会, 高槻現代劇場/大阪府高槻市, 2019/10

北泊謙太郎「消去される〈歴史〉、つくり出される〈歴史〉―日本人の〈歴史〉認識と歴史教科書問題―」大阪商工団体連合会理事会プレ学習会, 大阪商工団体連合会, 大阪商工団体連合会大会議室/大阪府大阪市, 2019/8

北泊謙太郎「シリーズ軍港都市史研究の到達点とその意義をめぐって―坂根論文に関する若干のコメント―」大阪歴史科学協議会 7月例会, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央/大阪府大阪市, 2018/7

北泊謙太郎「「軍港都市」とは何か―シリーズ軍港都市史研究の論点と意義―」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, 淀川区民センター/大阪府大阪市, 2018/6

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪歴史科学協議会・庶務委員長, 2014年6月～現在に至る

歴史科学協議会・全国委員, 2012年6月～現在に至る

2-8 東洋史学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 3 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：桃木 至朗、松井 太、田口宏二郎

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
24	4	3	0	0	1	2	1

*うち留学生3名、社会人学生1名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	6	1	2	2
2019	6	4	1	3
計	12	5	3	5

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

大学院の教育においては、以下の6項目を目標とする。①修士・博士論文作成演習を行い、教員および院生相互の批評を糧にして学位論文の水準を向上させる。2018年度は博士論文2本、修士論文1本を、2019年度は博士論文3本、修士論文4本を提出させる。②東洋史学研究分野独特の伝統として、全教員・院生・学部生が参加する合同演習と通称する演習の場において、博士後期課程の院生には学部生向けに数種類の東洋史入門講義を数年サイクルで交互に担当させ、教育者として独立する際の訓練を行う。③本研究分野の教員が主催する国内学会の企画・実施、また中心メンバーとして開催している研究会の運営、あるいは雑誌の編集に院生を積極的に関わらせることによって、研究者として就職する際の有利な条件作りをする。④教員が科研費などによって実施する海外現地調査ないし文書調査に、できるだけ多くの博士後期課程の院生を帯同して訓練する。⑤学内外で開催される各種関連学会や研究会のいずれかにおいて、毎年1回は発表するようにする。⑥専門教育と連動するかたちで、阪大が進めている新しい世界史教育の試みに参加させ、深い専門性と広い視野の両方を備えられるようにする。

また学部の教育においては、以下の4項目を目標とする。①2年次生向けの漢文演習を2種類開講し、卒業論文執筆の

ための基礎となる漢文史料読解能力の充実をはかる。3 年次生、4 年次生についてもしかるべき漢文の授業を開講する。②中央アジア史・中国史・東南アジア史の 3 分野別に学部生向けの英語論文を読む演習を開講し、外国語を含む先行研究論文の批判的かつ精密な読み方の訓練を行うと共に、卒業論文作成に向けての能力を涵養する。③東洋史専修独特の伝統として、全教員・院生・学部生が参加する合同演習と通称する演習の場において、学部生に積極的に質問させるようなシステムの構築を行い、それを実行する。さらにこの合同演習を通じて、他大学には見られない学部生と大学院生との学問的連携体制を構築する。④学内外で開催される関連学会や研究会に積極的に参加する習慣をつけさせる。

2. 研究

教員は、研究活動の成果として、各人が年度平均で 1 本以上の単著論文ないし同等の著作を刊行することを目標とする。博士後期課程の院生では 2 年に 1 本の単著論文ないし研究動向・書評の投稿を目標とする。また教員全員が新規ないし継続中の科学研究費に関わる海外現地調査ないし文書調査、ならびにそれと連動する研究を行う。研究代表者になっていない教員の場合は、新たに科学研究費・財団研究助成を申請する。このほか国際学会・国内学会のオルガナイザーないし発表者として活動するとともに、専門雑誌の編纂に携わり、関係分野の日本優位に尽力することも目標とする。

3. 社会連携

全国の高校歴史教員と協力して運営している大阪大学歴史教育研究会の活動をさらに発展させ、世界史教育のさらなる改善をはかるとともに、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることを目標とする。また自らの研究成果を社会に還元できる機会である、社会人向けの講演・講義を積極的に引き受けることも目標とする。

Ⅲ. 活動の概要(2018 年度～2019 年度)

1. 教育

2018～2019 年度を通じて、合同演習および中央アジア史・中国史・東南アジア史の各種ゼミにおいて、学部生・院生の教育が当初の予定に沿って着実に進められた。

2018 年度においては博士論文 2 本、修士論文 1 本、卒業論文 6 本を提出させることができた。院生の発表した研究論文は計 15 点、そのうち 10 点は外国語による。院生の国内外の学会・研究会における口頭発表は計 15 件、そのうち 7 件は国際学会におけるものである。

2019 年度においては博士論文 3 本、修士論文 4 本、卒業論文 7 本を提出させることができた。院生の発表した研究論文は計 10 点、そのうち 6 点は外国語による。院生の国内外の学会・研究会における口頭発表は計 23 件、そのうち 10 件は国際学会におけるものである。

提出された学位論文はいずれも水準が高く、また院生の論文発表および国内外の学会での口頭報告も、教員の指導のもとに十分な成果をあげた。また教員が科研費などによって実施する海外現地調査に、博士前期課程の院生を帯同して訓練した。

これらの点から、所期の目標を達成できたと判断できる。

2. 研究

【2018 年度】

荒川は、中央ユーラシア史研究の入門書を編著者として出版（山川出版社）するとともに、「古代東ユーラシアの国際関係と人流」と題する国際シンポジウムで研究報告を行った。この報告は既に論文として刊行している。また中国の雑誌（『絲路文明』）に論文を公表した。また、2018 年 9 月に西安より西北方と西南方に延びた交通路に置かれた関所に関する科研調査を継続して行うとともに、唐の駅伝制と宋および日本の同制度との比較研究を行った。

桃木は、モンゴル時代のグローバルヒストリーとベトナム史の位置について（ベトナム語）、日本の高校・大学歴史教

育について（英語）でそれぞれ国際学会発表をおこない、前者はベトナムの雑誌に要約版が掲載された。また歴史教育については日本語論文1本を投稿した（掲載は新年度）。また、東南アジアを中心とするグローバルヒストリーの論文集（英語）の出版準備作業を続行した。またジェンダー史（分担者）の科研、それに阪大の先導的学際研究機構（旧未来戦略機構）のグローバルヒストリー研究、学振の「グローバル展開プログラム」（大学歴史教育のグローバル化）などでそれぞれの研究を進め、そのうち「グローバル展開」ではカリフォルニアの大学・高校・中学の歴史教育の状況を現地調査した。

松井は、中央アジア出土古代ウイグル語・モンゴル語文書資料を扱った研究論文を合計6本発表した（うち日本語2本、英語2本、中国語2本）。また、2017年度に刊行した中国・敦煌石窟に関する研究成果『敦煌石窟多言語資料集成』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）が高い評価を受け、第12回立命館白川静記念東洋文字文化賞優秀賞を受賞した（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所、2018年5月26日）。また、科研プロジェクト（基盤B・挑戦的萌芽研究）を遂行し、トルコ・ドイツにおいて中央アジア出土文献資料の調査を行なった。

田口は、明代史に関する入門書を刊行（かもがわ出版、2018年）。1930年代の中国における外国人の私法上の地位に関する論考（日本語）を科研費報告書に掲載するとともに、中国史と「基準政体」に関する論考（英語）をV.リーバーマン記念論文集に投稿。また、主権国家に関するレビュー論文および書評（いずれも日本語）を刊行した。また、台北（国史館・台湾大学図書館）にて史料調査を進めた。

伊藤一馬（2019年3月退職）は、宋代の軍事・文書制度を扱った論考2本（中国語・日本語）、および10～13世紀のユーラシア東方における国際情勢に関する研究動向（英語・共著）を発表した。また、中国・陝西省での景観・遺址・文物調査を行った。

その他、松井は『内陸アジア言語の研究』33号（2018年12月、136頁、論文7本）を発行し、桃木は海域アジア史研究会（計7回）の運営を主導し、自己の研究のみならず、我が国の学界全体の研究水準向上に貢献した。桃木は未来戦略機構第9部門、それに科研分担者となったジェンダー史の研究活動にもあたった。

【2019年度】

荒川は、シルクロード交易と商人に関する概論を公表した。ジェンダーに関わる論文の中国語版と英語版は校正を行い、刊行は2020年度の予定である。また、東部ユーラシア地域に展開した駅伝制の比較研究を継続し、9月に「京師四面関」の遺跡を実地調査した。

桃木は、日本のベトナム史研究の動向に関するベトナム語論文、東・東南アジアの近世化と歴史教育の定式化に関する日本語論文（後者の執筆は前年度）をそれぞれ発表したほか、グローバルヒストリーについての書評（日本語）も執筆した。また、最終年度にあたる学術振興会「グローバル展開プログラム」で日本の大学歴史教育の問題点について報告したほか、同プログラムについての雑誌での特集記事のとりまとめをした。分担者となっていたジェンダー史の科研では東・東南アジア近世の家族について総括シンポで報告した。

松井は、中央アジア出土古代ウイグル語・モンゴル語文書資料を扱った研究論文を合計5本（うち英語3本、中国語2本）、批評1本を発表した。また、科研プロジェクト（基盤B・挑戦的萌芽研究）を遂行して中央ユーラシア出土文献資料の調査を行なうとともに、日独6大学アライアンス（HeKKSaGOn）学長会議（ハイデルベルク大学）に参加し、研究成果を報告した。

田口は、史料紹介を発表、分担執筆した入門書、およびFO文書を用いた日本語論考は2020年度以降に刊行予定。また、台北における史料調査を進め、大量の檔案・報刊史料を探し出した。

その他、荒川・松井は中央アジア学フォーラム（計1回）、桃木は海域アジア史研究会（計6回）の運営を主導し、学会の活性化に貢献した。このほか松井は『内陸アジア言語の研究』34号を予定通り発行した（2019年9月、106頁、論文3本）。

3. 社会連携

【2018年度】

2017年10月の斯波義信名誉教授（東洋史学）の文化勲章受章、東野治之名誉教授（日本史学）の文化功労者顕彰を記念して、文学研究科の公式行事として実施された両教授の特別講演会（2018年4月30日）の企画・準備に全面的に

協力し、文学研究科として「人文学の魅力」を発信することに尽力した（毎日新聞 2018/5/21 東京夕刊参照）。

荒川は内陸アジア史学会の会長としてその運営を主導する。また懐徳堂秋季講座において、シルクロード交易に関して一般に向けた講演を行った。

桃木は、荒川とともに全国の高校歴史教員と協力して運営している大阪大学歴史教育研究会の活動をさらに発展させるべく、月例会活動以外に、堺市「日本と世界が会おうまち 堺 2018」プロジェクトや神奈川県世界史研究会（8月に高大連携セミナーを開催）など各地域の活動との協力を進めた。また全国規模で立ち上げられた「高大連携歴史教育研究会」の運営委員長として会の発展に尽力し、第4回大会（7月、名古屋。席上で新会長に選出）。さらに年度後半には、同会と日本学術会議にまたがって歴史の大学入試問題の出題改善に関する検討を進めた。

松井は東方学会（学術委員）・内陸アジア史学会（理事・編集委員）の運営に参画した。また、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所での講演を行ない、研究成果のアウトリーチに務めた。

伊藤は、NPO 法人大阪府高齢者大学校において「世界史から学ぶ科」の講師として講義を行った。また、内陸アジア史学会（庶務・会計幹事）、遼金西夏史研究会（幹事）の運営に参画した。

【2019年度】

荒川は、内陸アジア史学会の会長として、また東方学会の学術委員・編集委員として、それぞれの学会の運営に携わった。

桃木は、大阪大学歴史教育研究会の代表としての活動（堺市と協力した「日本と世界が会おうまち・堺 2019」プロジェクトや8月の神奈川県での高大連携世界史セミナーを含む）のほか、全国組織「高大連携歴史教育研究会」会長として、第5回大会（7月・札幌）や教材共有部会など各種活動を推進した。そのほか日本学術会議（連携会員）、東方学会（理事・編集委員）、東南アジア学会（教育・社会連携担当理事）その他の運営にもたずさわった。

松井は東方学会（学術委員）・内陸アジア史学会（理事・編集委員）の運営に参画した。また田口が運営準備を担当した第10回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座で講演を行ない、研究成果のアウトリーチに務めた。

IV. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

2018～2019年度を通じて、教育目標として掲げた諸項目については、おおむね順調に行われた。とくに教育の中心となる合同演習による学部生・院生の教育は当初の予定に沿って着実に進められ、中央アジア史・中国史・東南アジア史の3分野に分かれての各種ゼミでも目標通りの進歩が見られ、卒業論文・修士論文・博士論文の提出に結びつけることができた。提出論文は何れも高いレベルで作成されている。また院生の査読付き全国学会誌を中心とする論文発表および、国際学会を含む学会・研究会における口頭報告も、教員の指導のもとに十分な成果をあげた。これらの点から判断して、所期の目標は達成できたと評価したい。

2. 研究

前記の活動を総括して自己評価すれば、2018～2019年度を通じて、教員・大学院生による著書・論文の執筆および学会発表その他の研究活動については、おおむね当初の目標を達成したと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動を総括して自己評価すれば、2018～2019年度を通じて、社会連携の目標について、おおむね当初の目標を達成したと考えられる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	2	0	2
2019	3	0	3
計	5	0	5

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

石川禎仁（大阪大学特任研究員）「帰義軍期敦煌オアシスの耕地経営：「一族経営地」の起源と発展」

主査：荒川正晴 副査：松井太、坂尻彰宏（全学総合教育機構准教授）

西田祐子（大阪大学特任研究員）「唐帝国の統治体制と「羈縻」：『新唐書』の再検討を手掛かりに」

主査：荒川正晴 副査：桃木至朗、松井太

早川尚志（博士後期課程）「ポストモンゴル期ユーラシア中央域の交通制度と交通路」

主査：荒川正晴 副査：松井太、磯貝健一（京都大学教授）

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	12(12)	0(0)	3(0)	0(0)	1(0)	16(12)
2019	8(7)	0(0)	1(0)	0(0)	1(0)	10(7)
計	20(19)	0(0)	4(0)	0(0)	2(0)	26(19)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	8	3	3	0	1	15
2019	10	2	10	0	1	23
計	18	5	13	0	2	38

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

趙浩衍「近世の市場と社会秩序からみた日中朝の比較史」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第16巻、

2019/3/29

趙文暖「宗教から見た近世日中の権威と権力」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第16巻, 2019/3/29
裴奕「近世の市場と社会秩序からみた日中朝の比較史」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第16巻,
2019/3/29

[博士後期]

石川禎仁「一〇世紀敦煌オアシスの灌漑用水と渠人集団：S 六一二三「宜秋西枝渠人転帖」の分析から」『東洋学報』第
100巻, 第1号, pp.33-67, 2018/6/15

吉川和希 "Giao thương nội địa giữa khu vực Đông Bắc Việt Nam và Quảng Tây – Trung Quốc vào nửa sau thế kỷ
XVII", *Tạp chí Nghiên cứu và Phát triển*, 第145巻, pp.42-55, 2018/7

遠藤総史 (共著) "Recent Japanese Scholarship on The Multi-state Order in East Eurasia from The Tenth to
Thirteenth Centuries.", *Journal of Sung-Yuan Studies*, 第47巻, pp.193-205, 2019/1/15

早川尚志 (共著) "A great space weather event in February 1730", *Astronomy & Astrophysics*, 第616巻, p.A177,
2018/7

早川尚志 (共著) "The Great Space Weather Event during 1872 February Recorded in East Asia", *The Astrophysical
Journal*, 第862巻, pp.15-15, 2018/7

早川尚志 (共著) "Sunspot observations on 10 and 11 February 1917: A case study in collating known and previously
undocumented records", *Space Weather*, 第16巻, pp.1740-1752, 2018/10

早川尚志 (共著) "Low-Latitude Aurorae during the Extreme Space Weather Events in 1859", *The Astrophysical
Journal*, 第869巻, p.57, 2018/11

早川尚志 (共著) "The Extreme Space Weather Event in September 1909", *Monthly Notices of the Royal Astronomical
Society*, 第484巻, 第3号, pp.4083-4099, 2018/11

早川尚志 (共著) "The Celestial Sign in the Anglo-Saxon Chronicle in the 770s: Insights on Contemporary Solar
Activity", *Solar Physics*, 2019/4

早川尚志 (共著) "Do the Chinese Astronomical Records Dated A.D. 776 January 12/13 Describe an Auroral Display or
a Lunar Halo? A Critical Re-examination", *Solar Physics*, 2019/4

早川尚志 (共著) "Two debatable cases for the reconstruction of the solar activity around the Maunder Minimum:
Malapert and Derham", *Monthly Notices of the Royal Astronomical Society*, 2019/5

猪原達生「宦官という生き方：中国唐代の事例から」『第14回松下幸之助国際スカラシップフォーラム報告書』松下幸
之助記念財団, pp.14-23, 2019/5

【2019年度】

[博士前期]

内藤裕子「「国民国家」概念の考察から「歴史総合」を展望する」『世界史教育研究』第6号, pp.3 月末発行予定-のため
未定, 査読無, 2019/12/14

内藤裕子「欧米で生まれた国民国家は、なぜ日本をはじめ世界へ広がったのだろうか」『大阪大学歴史教育研究会報告書』
第17号, pp.3 月末発行予定-のため未定, 査読無, 2020/3/31 (予定)

[博士後期]

遠藤総史「Recent Japanese Scholarship on The Multi-state Order in East Eurasia from The Tenth to Thirteenth
Centuries」『*Journal of Sung-Yuan Studies*』第47号, pp.193-205, 査読有, 2017-2018 (刊行は2019年)

遠藤総史「宋代朝贡的特征与其地域史的意义」『*信息沟通与国家秩序国际会议 会议论文集*』 pp.152-176, 査読無,
2019/11/1

早川尚志「Unaided-Eye Sunspot Observations in 1769 November: A Comparison of Graphical Records in the East
and the West」『*Solar Physics*』第294巻, pp.95-95, 査読有, 2019/7/18

早川尚志「Temporal and Spatial Evolutions of a Large Sunspot Group and Great Auroral Storms around the

- Carrington Event in 1859」『Space Weather』第17巻, pp.1553-1569, 査読有, 2019/11/19
- 早川尚志 「The Earliest Candidates of Auroral Observations in Assyrian Astrological Reports: Insights on Solar Activity around 660 BCE」『The Astrophysical Journal Letters』第884巻, pp.L18-L18, 査読有, 2019/10/7"
- 早川尚志 「Thaddäus Derfflinger's sunspot observations during 1802-1824: A primary reference to understand the Dalton Minimum」『The Astrophysical Journal』第890巻, pp.98-98, 査読有, 2020/2/17"
- 早川尚志 「Occurrence of great magnetic storms on 6-8 March 1582」『Monthly Notices of the Royal Astronomical Society』第487巻, pp.3550-3559, 査読有, 2019/6/24"

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

趙浩衍「15世紀、ベトナム黎明前期の自然災害に関する詔について」, 中国四国歴史学地理学協会2018年度大会, 広島大学, 2018/07/22

趙浩衍「15~16세기 동아시아해역의 화기국가로서의 조선에 관한 시론(15~16世紀東アジア海域の火器国家としての朝鮮に関する試論)」, 第3回海洋領土論文大会, 韓国船主協会, 2018/08/23

趙浩衍「近世の市場と社会秩序からみた日中朝の比較史」, 第117回大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学, 2018/12/15
〔博士後期〕

遠藤総史「宋代の朝貢と翻訳: 宋代朝貢の特徴とその地域史的意義」, 第19回遼金西夏史研究会大会, 龍谷大学瀬田キャンパス, 2019/3/10

遠藤総史 "The Song Dynasty's "International" Order and Boundary World", The 4th Congress of the Asian Association of World Historians, 大阪大学中之島センター, 2019/1/5

吉川和希「18世紀における中越境界地帯の社会変容と在地首長: ベトナム諒山地域を中心に」, 2018台日明清研究交流合宿研究營, 中央研究院近代史研究所档案館, 2018/8/21

遠藤総史「宋代朝貢と翻訳」, 中日古代社会文化史学術研討会, 中山大學增城饒宗頤研究院, 2018/10/28

遠藤総史「宋代冊封の理念と中華世界におけるベトナムの『独立』——東部ユーラシア論と比較史という二つの方法的視角から——」, シンポジウム 歴史のなかの中越関係, 東京外国語大学府中キャンパス, 2018/12/15

早川尚志 "Extreme Space Weather Events in History: Beyond the Carrington Event", The Royal Observatory of Belgium Weekly Seminar, The Royal Observatory of Belgium, 2018/08/09

早川尚志 "Going beyond the database to the Historical Data: Geomagnetic Storms and Aurorae", European Space Weather Week, The University of Leuven, 2018/11/06

早川尚志 "Reconstructing Extreme Space-Weather Events in History", AGU Chapman Conference, Westin Pasadena, 2019/02/13"

早川尚志 "The Earliest Datable Records and Drawings of Auroral Candidates: A Crossroad of Mesopotamian Astral Science and Modern Geophysics", In Time: Astronomy and Calendars in the Ancient Near East, Hebrew University, 2018/06/12

猪原達生「東洋史学における入門教育とは——阪大東洋史の入門講座を例に——」, 大阪大学歴史教育研究会第113回例会, 大阪大学, 2018/05/19

猪原達生「宦官という生き方: 中国唐代の事例か」, 第14回松下幸之助国際スカラシップフォーラム, 東京大学, 2018/10/20

猪原達生「グローバル化時代の歴史教育2: 中国の大学での事例調査」, 大阪大学歴史教育研究会第119回例会, 大阪大学, 2019/03/23

【2019年度】

〔学部生〕

- 岡田悠希「四川移住民社会の成熟とそれに伴う移住活動の変化」, 清代档案史料研究会, 大阪経済法科大学 OUEL 研究センター, 2019/6/29
- [博士前期]
- 坂本直人「唐代西州(トゥルフアン)における墓葬について: トゥルフアン出土の墓券に注目して」, 中国四国歴史学地理学協会大会, 高知大学, 2019/6/16
- 坂本直人「トゥルフアン出土の墓券と紙の利用について」, 第 56 回野尻湖クリルタイ, 藤屋旅館, 2019/7/12~15
- 松尾遼平「19 世紀初頭ベトナム・シヤム間の外交関係一両国間の使節交換を中心に」, 海域アジア史研究会 11 月例会, 大阪大学, 2019/11/30
- 内藤裕子「欧米で生まれた国民国家は、なぜ日本をはじめ世界へ広がったのだろうか」, 大阪大学歴史教育研究会第 125 回例会, 大阪大学, 2019/12/21
- [博士後期]
- 遠藤総史「宋代朝貢與翻譯—宋代朝貢の特徴與其地域史的意義」, 宋史座談會, 臺灣師範大學, 2019/4/13
- 遠藤総史「宋代朝貢与翻译—宋代朝貢的特征与其地域史的意义」, 信息沟通与国家秩序国际会议, 北京大学, 2019/11/1
- 遠藤総史「宋代朝貢與翻譯—宋代朝貢の特徴與其地域史的意義」, 國立臺北大學歷史學系學術演講, 臺北大學, 2019/5/3
- 猪原達生「武漢大学における歴史学教育—その「実践」を中心に—」, グローバル展開プログラム「国民国家型の大学歴史教育をグローバル化時代に適応させる方法に関する国際比較」研究会, 大阪大学, 2019/4/7
- 猪原達生「唐代における宦官の家族形成に関する試論」, 第 217 回宋代史談話会, 大阪市立大学, 2019/6/29
- 猪原達生(桃木至朗と共同報告)「世界の大学の歴史教育の比較研究から」, 高大連携歴史教育研究会第 5 回大会, 北海学園大学, 2019/7/28
- INOHARA Tatsuo “Comment: Panel 4 (B-2) Teaching at/by Different Types of Universities and Institutes” , Globalizing University History Education: Diversity, Trans-borders and Intersectionality, Osaka University, 2019/8/6
- 猪原達生「唐代における宦官の家族形成に関する試論」, 第 73 回東洋史学研究会・九州歴史科学研究会合同研究会, 西南学院大学, 2019/12/7
- 早川尚志 “Historical Candidate Auroras in Comparison with Auroral Reports during Known Extreme Events” , Space Climate 7, Hôtel Estrimont Suites & SPA, 2019/7/9
- 早川尚志 “Reconstructing the Extreme Space Weather Event in 1872 Based on Multiple Source Documents” , IUGG 2019, Palais des Congrès, 2019/7/12
- 早川尚志 “A brief Overview for the Sunspot Observations in Paris Observatory” , ISSI: Recalibration of the Sunspot Number Series, ISSI, 2019/8/21
- 早川尚志 “Are these Sunspot Drawings original? A Case Study in the East Asian Sunspot Drawings and Its Insight” , ISSI: Recalibration of the Sunspot Number Series, ISSI, 2019/8/21
- 早川尚志 “Key References for the Dalton Minimum: Sunspot Observations by Derfflinger (1802 — 1824) and his contemporaries” , ISSI: Recalibration of the Sunspot Number Series, ISSI, 2019/8/21
- 早川尚志 “Hisako Koyama’s Sunspot Observations and their Digitization” , ISSI: Recalibration of the Sunspot Number Series, ISSI, 2019/8/22
- 早川尚志「過去の環境変動の復元における歴史学の寄与: 8 世紀と 17 世紀についての太陽活動復元の試みの事例紹介」, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学, 2019/5/19
- 早川尚志「17 世紀の危機と 14 世紀の危機太陽活動復元の現状と環境史への展望」, WS 14 世紀の危機, 北海道大学, 2019/10/5
- 早川尚志 “Derfflingers Sunspot Observations: Revision of Key Observational Data for the Dalton Minimum” , PSTEP4, 名古屋大学, 2020/1/30
- 早川尚志「ユーラシア中央域における使節と隊商—ティムール朝期の事例研究—」, 東方キリスト教世界の旅と移動, 京

(3)その他(書評・翻訳など)

【2018年度】

なし

【2019年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

伊藤崇展 「〔翻訳〕「ダシドンドギーン・バヤルサイハン 2016. 『フレグ・ウルス史研究の史料としての中世アルメニア聖人伝の利用可能性』」. D. バヤルサイハン, C. アトウッド(編) 『フレグ・ウルス研究, 新動向』ウランバートル: モンゴル国立大学出版会印刷所 157-174.」 『東方キリスト教世界研究』第3巻, pp.35-48, 査読有, 2019/5/1

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 1名 (計2名)

2019年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 1名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名) (早川)

2019年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名) (中井)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

中田美絵 博士後期課程修了 京都産業大学文化学部 准教授 2019/4

鈴木宏節 博士後期課程修了 神戸女子大学文学部 准教授 2019/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2018年度: 1名 2019年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

2018年度: 2名 2019年度: 2名

※招へい研究員 呉水田, Zeynep Pinar CAN (ユルドゥズ工科大学), 付馬 (北京大学)

9. 刊行物

【2018年度】

・『内陸アジア言語の研究』33号, 2018年12月, 136pp. (中央ユーラシア学研究会: 東洋史学研究室に事務局)

【2019年度】

・『内陸アジア言語の研究』34号, 2019年9月, 106pp. (中央ユーラシア学研究会: 東洋史学研究室に事務局)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

・海城アジア史研究会

参加人数は毎回10名～40名, 参加者の所属機関は延べ約30

2018年度 2018年5月13日, 2018年6月30日～7月1日, 2018年7月28日, 2018年8月18日, 2018年9月22日, 2018年12月4日, 2018年12月22日, 2019年1月26日

2019年度 2019年4月27日, 2019年6月21日, 2019年6月22日, 2019年8月4日, 2019年9月14日, 2019年11月22日, 2019年11月30日

・大阪大学歴史教育研究会

参加人数は毎回25～40名。参加者の所属機関は延べ約50

2018年度 2018年4月21日(第112回), 2018年5月19日(第113回), 2018年6月16日(第114回), 2018年7月14日(第115回), 2018年10月20日(第116回), 2018年12月15日(第117回), 2019年1月19日(第118回), 2019年3月23日(第119回)

2019年度 2019年4月20日(第120回), 2019年5月11日(第121回), 2019年6月15日(第122回), 2019年7月20日(第123回), 2019年10月19日(第124回), 2019年12月21日(第125回), 2020年1月25日(第126回)

・中央アジア学フォーラム

参加人数は毎回25～40名。参加者の所属機関は延べ約30

2019年度 2019年5月25日(特別例会), 2020年3月28日(特別講演会, ただし新型コロナウイルス流行により開催中止)

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 荒川正晴 教授

1955年生。1986年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程中退。文学博士(大阪大学)。早稲田大学非常勤講師、大阪大学文学部助教授を経て、2001年4月より現職(2020年3月定年退職)。(財)東洋文庫研究員。専攻: 中央アジア古代史

1-1. 論文

荒川正晴(共著)「シルクロードの交易と商人」『人々がつなぐ世界史』ミネルヴァ書房, pp. 15-43, 2019/8

荒川正晴「ソグド人の交易活動と香料の流通」『専修大学 古代東ユーラシア研究センター年報』5, 古代東ユーラシア研究センター, pp. 29-48, 2019/3

荒川正晴「粟特人と高昌国麴氏王室」『絲路文明』3, 浙江大学“一帯一路”合作与發展協同创新中心, pp. 27-42, 2018/9

1-2. 著書

小松久男, 荒川正晴, 岡洋樹(共編著)『中央ユーラシア史研究入門』山川出版社, 413p., pp. 35-52, 2018/4

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

荒川正晴 「「死後の世界」と東西文化の交流」Handai-Asahi 中之島塾，朝日カルチャーセンター，中之島センター，2019/6

荒川正晴 「6世紀、高昌国のトゥルフアン統治とソグド人集落」国際東方学会会議，東方学会，日本教育会館，2019/5

荒川正晴 「シルクロード交易と香料の流通」懐徳堂秋季講座，懐徳堂記念会，大阪大学、中之島センター，2018/11

荒川正晴 「ソグド人の交易活動と香木の流通－法隆寺伝来の香木と中央アジア出土文書を手がかりとして－」第一回シンポジウム「古代東ユーラシアの国際関係と人流」，古代東ユーラシア研究センター，専修大学，2018/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

荒川正晴 大阪大学共通教育賞，大阪大学共通教育機構，2010/11

荒川正晴 流沙海西奨学会賞，流沙海西奨学会，1986/12

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2017年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:荒川正晴

課題番号:17K03131

研究題目:唐帝国の駅伝体制の特質とその時代的変遷－日本および宋の駅伝制との比較を踏まえて－

研究経費:2018年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2019年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

本研究は、唐帝国の駅伝制を天聖令と出土史料により再検討し、併せて宋朝や日本の駅伝制と比較することにより、ユーラシア東部の移動・流通に対する公的管理のあり方とその時代的な変遷を究明することを目的とする。とくに駅道の果たした役割と機能、および通行証(過所と公驗)とそれをチェックする関津体制の実態とその時代的な変容の解明に努める。本研究を通じて、断代史的に検討されてきた従来の駅伝制研究を乗り越えて、ユーラシア東部地域の新たな交通史の構築を目指す。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・学術委員，2019年6月～現在に至る

内陸アジア史学会・会長，2017年4月～2020年3月

2. 桃木 至朗 教授

1955年生。京都大学文学部卒、同大学院文学研究科単位取得退学。論文博士(文学、広島大学)。大阪外国語大学専任講師(ベトナム語)、大阪大学教養部助教授、同文学部助教授(いずれも東洋史学)などを経て2001年から現職(2010～12年度はコミュニケーションデザイン・センターと兼任)。現在、日本学術会議連携会員。専攻:東南アジア史/海域アジア史/歴史教育

2-1. 論文

秋田茂，桃木至朗 「序論 グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育」秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育－日本史と世界史のあいだで－』大阪大学出版会，pp. 1-17，2020/3

桃木至朗 「現代東アジア諸国の少子化を歴史的に理解する」秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴

史教育—日本史と世界史のあいだで—』大阪大学出版会, pp. 318-344, 2020/3

Momoki, Shiro, “Tình hình nghiên cứu lịch sử Việt Nam ở Nhật Bản: lịch sử và đặc trưng của bộ” *Nghiên cứu Lịch sử*, 517, Viện Sử học Việt Nam, pp. 3-25, 2019/5

2-2. 著書

桃木至朗 『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育——日本史と世界史のあいだで——』大阪大学出版会, pp. 1-17, pp. 321-347, 2020/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

桃木至朗 「書評 妹尾達彦著『グローバル・ヒストリー』」『史林』102-6, 史学研究会, pp. 72-78, 2019/11

2-4. 口頭発表

桃木至朗 「日本史と世界史をつなぐ: 東アジアの勤勉革命・近世化と人口減少・過労死社会の到来を表裏一体の現象として理解できる教科書を目指して」シンポジウム「アジアから問うジェンダー史——世界史を読み替える」, 比較ジェンダー史研究会・奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター, 奈良女子大学, 2019/12

桃木至朗 「人口と人の移動から見た東南アジアの長期変動～「日本史」「世界史」との対話に向けた論点整理～」第101回研究大会(シンポ「東南アジアと日本の長期変動: 人口変動・労働移民・少子高齢化」), 東南アジア学会, 静岡県立大学, 2019/11

Momoki, Shiro, “University History Education in a Country of Craftsmen”, :Globalozong University History Education: Diversity, Trans-borders, Intersectionality, Osaka University Global Initiatives Project; Reinventing University History Education: International Comparison on How to Adapt Nation-State Based University History Education to Globalization, 大阪大学中之島センター, 2019/8

桃木至朗, 猪原達生 「世界の大学の歴史教育の比較研究から」第5回大会(パネル2-②), 高大連携歴史教育研究会, 北海学園大学, 2019/7

Momoki, Shiro, “The Reform of Entrance Examinations and Teacher Trainings in Contemporary Japan”, 4th AAWH Congress, Asian Association of World Historians, 大阪大学中之島センター, 2019/1

Momoki, Shiro, “Tầm nhìn Đa tầng về Lịch sử Thời Trần: Cách Tiếp cận Mới của Phương pháp Sử học Toàn cầu”, Hội thảo Bạch Đằng và Nhà Trần trong bối cảnh thế giới thế kỷ XIII (ベトナム語発表「陳朝史の多層的な見方: グローバルヒストリーの方法による新しいアプローチ」, 国際会議「13世紀の世界を背景とした白藤江の戦いと陳朝」), ハノイ社会・人文科学大学, クアンニン省人民委員会, クアンニン省立博物館, 2018/12

Momoki, Shiro, “History Education in Japanese Senior High Schools and Its Reform: What Should Be Changed to Help Students ‘Think’ about History”, International History Education Comparative Research Workshop, East China Normal University, East China Normal University, Shanghai, 2018/9

桃木至朗 「日本史と世界史の統合の難しさと面白さ」第59回全国大会シンポジウム「新科目“歴史総合”にどう向き合うか」, 全国歴史教育研究協議会, 神戸市・ラッセホール, 2018/7

桃木至朗 「中高接続と高校歴史の用語・概念(児玉祥一・桃木至朗・中村薫)」第4回大会(シンポジウム2B「歴史的思考力と用語精選・教科書の刷新」), 高大連携歴史教育研究会, 愛工大名電中学校, 2018/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

桃木至朗 大阪大学総長顕彰 2015 研究部門, 大阪大学, 2015/7

桃木至朗 ベトナム・ハノイ国家大学 20周年にあたり同大学の事業に貢献した外国人として記念章授与, 2013/12

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本と世界が会おうまち・堺 2018・審査委員長, 2018年7月～2018年11月

高大連携歴史教育研究会・会長, 2018年7月～2020年7月

東方学会・理事, 2017年7月～現在に至る

東南アジア学会・理事, 2017年1月～2020年12月

東洋史研究会・評議員, 2016年11月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2011年10月～現在に至る

アジア太平洋研究賞(アジア太平洋フォーラム・淡路会議事務局)・選考委員, 2004年4月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2000年6月～現在に至る

3. 松井 太 教授

1969年生。1999年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)(大阪大学)。2001年弘前大学人文学部講師、2004年同助教授、2007年同准教授、2010年同教授。2015年4月、大阪大学文学研究科准教授。2017年10月より現職。(財)東洋文庫客員研究員。専攻：中央アジア史・モンゴル帝国史

3-1. 論文

Matsui, Dai, "Oni "Decury" in the Old Uigur Administrative Orders", *Türk Dilleri Araştırmaları*, 24-1 [2014], Yıldız Teknik Üniversitesi, pp. 151-158, 2019/12

松井太 「敦煌石窟中回鶻文題記割記(二)」『吐魯番学研究』2019-1, 吐魯番学研究院, pp. 117-127, 2019/6

松井太 「高昌 α 寺遺址所出摩尼教・佛教寺院回鶻文帳歴研究」『中山大學學報』2019-2, 中山大学, pp. 209-224, 2019/3

Matsui, Dai, "Turfan bölgesindeki Eski Uygur yer adları", *Türk Dünyası Dil ve Edebiyat Dergisi* 47, Türk Dili Kurumu, pp. 149-175, 2019/3

Matsui, Dai, "Remarks on Buyan-Qaya, a Uighur Buddhist Pilgrim to Dunhuang", *Unter dem Bodhi-Baum: Festschrift für Klaus Röhrborn anlässlich des 80. Geburtstags*, Vandenhoeck & Ruprecht Verlage, pp. 209-204, 2019/2

松井太 「モンゴル命令文とウイグル文書文化: ティムール朝期の『ウイグル文書教本』から」『待兼山論叢』52, 大阪大学文学研究科, pp. 1-27, 2018/12

松井太 「ウイグル文書出命文書の機能に関する再考察」『内陸アジア言語の研究』33, 中央ユーラシア学研究会, pp. 109-134, 2018/12

松井太 「契丹和回鶻的關係」『河西學院學報』2018-3, 河西学院, pp. 11-19, 2018/5

松井太 「榆林窟第16窟叙利亞字回鶻文景教徒題記」『敦煌研究』2018-2, 敦煌研究院, pp. 34-39, 2018/4

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

松井太 「宮紀子『モンゴル時代の知の東西』を読む」『内陸アジア言語の研究』34, 中央ユーラシア学研究会, pp. 61-84, 2019/9

3-4. 口頭発表

Matsui, Dai, "Religious Interactions among the Turkic Uigurs as Seen in the Dunhuang Wall Inscriptions", HeKKSaGON German-Japanese Conference: Working Group 3: Humanities and Social Sciences "Transcultural Encounters", Heidelberg

University, Kyoto University, Karlsruhe University, Tohoku University, Osaka University, Georg-August-Universität Göttingen, Heidelberg University, 2019/9

Matsui, Dai, "Old Uigur Buddhist pilgrim inscriptions at Dunhuang and Turfan", 94. Collegium Turfanicum, Akademienvorhaben Turfanforschung, Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, 2019/3

Matsui, Dai, "“幾龍治水”與古回鶻族中民間信仰", 第六屆世界漢學大會, 孔子學院總部・國家漢辦・中國人民大學, 中國人民大學, 2018/11

Matsui, Dai, "Old Uigur Socio-Economic Documents: Philological and Historical Perspectives", 中國少數民族語言研究院系列講座 第 30 期, 中央民族大學中國少數民族語言研究院, 中央民族大學, 2018/11

松井太 「高昌回鶻王國佛僧的敦煌巡禮」絲綢之路民族語言研究工作坊, 蘭州大學敦煌學研究所, 蘭州大學, 2018/11

松井太 「回鶻佛教的僧名“毗尼”與龜茲佛教・漢人佛教」絲綢之路民族語言研究工作坊, 蘭州大學敦煌學研究所, 蘭州大學, 2018/11

松井太 「敦煌石窟の多言語文献からみる東アジア文化交流」第 12 回立命館白川静記念東洋文字文化賞受賞記念講演, 立命館白川静記念東洋文字文化研究所, 立命館大学, 2018/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

松井太 第 12 回立命館白川静記念東洋文字文化賞優秀賞, 立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所, 2018/5

松井太 第 23 回東方学会賞, 東方学会, 2004/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2016 年度～2019 年度、挑戦的萌芽研究、代表者: 松井太

課題番号: 16K13286

研究題目: 仏教石窟壁画と題記銘文の比較検討によるウイグル仏教のトレンドの分析

研究経費: 2018 年度	直接経費	800,000 円	間接経費	240,000 円
2019 年度	直接経費	0 円	間接経費	0 円

研究の目的:

中央アジア東部地域の仏教石窟遺跡に遺存する壁画の美術史的検討と、石窟に残された古ウイグル語銘文の文献学的解読とを比較・融合させる学際的なアプローチにより、主に西暦 7～10 世紀頃の仏教壁画に表現される種々の仏教的思想が、後世(10～14 世紀)のトルコ系ウイグル族により如何に受容され「トレンド」となったか、という問題を解明することを目的とする。※研究期間を当初予定より1年間延長(2019 年度まで)

3-6-2. 2017 年度～2019 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 松井太

課題番号: 17H02401

研究題目: 古代・中世中央ユーラシア世界の交通・交易・交流

研究経費: 2018 年度	直接経費	4,900,000 円	間接経費	1,470,000 円
2019 年度	直接経費	4,500,000 円	間接経費	1,350,000 円

研究の目的:

古代・中世(西暦 6 世紀～14 世紀)の中央ユーラシア世界(とくに現在の中国新疆ウイグル自治区から甘粛・内モンゴルに跨がる地域)を主要な対象に設定し、当地で展開された交易活動や文化交流の諸相、ならびにそれらを支えた交通システムを、現地出土の諸言語文献資料と現地調査によりつつ実証的に再構成する。その成果を総合して、前近代のユーラシア世界の諸文化圏が、中央ユーラシア地域を媒介として広く連動していたことをより実態的に解明し、「ユーラシア世界史」の理解の深化に資することを目的とする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・編集委員, 2019年4月～現在に至る

内陸アジア史学会・理事・編集委員, 2016年4月～現在に至る

東方学会・学術委員, 2015年7月～現在に至る

4. 田口 宏二郎 教授

1971年生。1999年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）（大阪大学）。2003年大阪大学文学研究科助手、2004年追手門学院大学文学部講師、2008年追手門学院大学国際教養学部准教授を経て、2012年4月大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2018年4月より現職。専攻：中国近世・近代史

4-1. 論文

田口宏二郎「政体の構造をいかなるアナロジーで記述するかという問いの先に」『歴史学研究』(歴史学研究会), 976, 歴史学研究会, pp. 192-194, 2018/10

4-2. 著書

田口宏二郎『14～17世紀の中国』かもがわ出版, p. 36, 2018/10

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

田口宏二郎「(史料紹介) 国史館蔵の国民政府档案からみる民国期南京の不動産官牙・官中・經紀人」『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』(なし), 9, pp. 57-67, 2019/3

田口宏二郎「(書評) 新宮学著『明清都市史商業史の研究』」『都市史研究』(都市史研究会), 5, 山川出版社, pp. 100-105, 2018/11

4-4. 口頭発表

田口宏二郎「登記の時代2」近現代中国の制度とモデル研究班, 人文科学研究所, 京都大学, 2019/11

Taguchi, Kojiro, "Syncretizing and demarcating institutions: Extraterritoriality and land registration in Republican China", 18th World Economic History Congress, IEHA, MIT, 2018/8

Taguchi, Kojiro, "Syncretism and the unit of analysis", 6th German-Japanese University Presidents' Conference, HeKKSaGOn University Network, Osaka University, 2018/4

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2019年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田口宏二郎

課題番号: 19K01018

研究題目: 中華民国南京国民政府期における土地登記事業の制度分析

研究経費: 2019年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

中国都市土地制度史に関する研究の蓄積は希薄である。本研究は、登記制度——不動産を支配・用益する権限の範囲を物理

的・法的に定義、標準化された様式を以て公示することで、不動産市場や抵当を媒介とした「資本主義型」金融市場の整備を実現するための仕組み——に焦点を絞り、これが土地取引ならびに産権保護制度全体にいかなる刻印を与えたか、民国期の南京や上海など都市の事例から解明する試みである。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

5. 伊藤 一馬 助教

1984年生まれ。2013年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（東洋史学）修了。博士（文学）。大阪大学文学研究科特任研究員、日本学術振興会特別研究員PDなどを経て、2017年4月より助教（2019年3月退職）。専攻：中国宋代史

5-1. 論文

伊藤一馬「北宋太祖・太宗期の内外軍事情勢と軍事指揮官——都部署を中心に——」『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 59, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-34, 2019/3

Endō Satoshi, Iiyama Tomoyasu, Itō Kazuma, 他(共著), “Resent Japanese Scholarship on the Multi-State Order in East Eurasia from the Tenth to Thirteenth Centuries” *Journal of Song-Yuan Studies*, (Dept. of East Asian Studies, State University of New York at Albany), 47, Dept. of East Asian Studies, State University of New York at Albany, pp. 193-205, 2019/1

伊藤一馬「南宋建立時期的中央政府和陝西地区——《宋西北辺境軍政文書》中的高宗《登極赦書》」余蔚・平田茂樹・温海清(編)『十至十三世紀東亜史の新可能性——首届中日青年学者遼宋西夏金元史研讨会論文集』中西書局, pp. 183-199, 2018/9

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

遼金西夏史研究会・幹事, 2018年4月～現在に至る

内陸アジア史学会・庶務会計幹事, 2016年7月～現在に至る

2-9 西洋史学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 4 准教授 1 講師 1 助教 1

教授：秋田 茂、藤川 隆男、中野耕太郎、栗原 麻子

准教授：中谷 惣

講師：見瀬 遥

助教：石田 真衣

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
52	8	8	0	0	3	1	0

*うち留学生2名、社会人学生1名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	10	5	0	0
2019	11	1	0	0
計	21	6	0	0

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

今日の西洋史学では、「世界史」を視野に入れた西洋文明のインパクトとレスポンスを相互的過程として考察することが求められている。そのためには、特定の地域や時代を超えた多様な世界の歴史を知り、また他の人文・社会諸科学の成果を活用できなくてはならない。学部と大学院の教育では、そうした広範な研究領域の中に、個々の学習と研究を適切に位置づけられるように講義・演習を構成する。また同時に、卒業・修了後、専門職業人として活躍できる基礎的な実務能力を身に付けられるように、特に、高度の論理力・分析力と、高い外国語能力の養成を重視する。具体的には、学部においては、①ディベート演習、リサーチ演習によって、英語の活用能力や口頭発表・論文執筆能力を向上させること、②パワーポイントを使ったプレゼンテーションを実践させること、大学院においては、①論文作成に向けてのモ

デル・タイムスケジュールを提案する等、修士、博士論文の効率的な作成指導を徹底すること、②文学研究科内外の他専修との共同授業、「歴史学のフロンティア」を実施し、学際的かつ領域横断的な思考を涵養すること、③研究ジャーナルの刊行を通して、出版事業の編集・渉外等の実務を習得させることを目標とした。

2. 研究

西洋史学研究室は、学会の運営や定期刊行物の発行、さらには各種共同研究の結節点となって、日本の西洋史研究の中核を担うことを目指している。教員は個人として積極的に単著論文を刊行するだけでなく、世界史・各国史、歴史事典類の編集、執筆など、学界の共有財産の形成や基礎的研究の充実のために尽し、あわせて研究室の主催・協賛による国際研究集会の企画・運営をととした研究の国際化に寄与することを目標とした。また、大学院生には外部の研究資金への応募や海外での研究機会の活用を勧奨するとともに、査読つき学術雑誌への投稿、学会での口頭報告を数多く行えるように支援することとした。

3. 社会連携

西洋史学研究室は、研究成果を社会一般、とりわけ高等学校での世界史教育に広く還元することをめざしている。具体的には、①高校世界史教科書の執筆、②高等学校へ出張授業、③大阪大学歴史教育研究会の共催（東洋史学専修、日本史学専修、共生文明論コースとの共催）、④世界史副読本の編集、⑤海外での講義の実施、⑥個人および研究室のホームページの充実を目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

演習をディベート、リサーチ等に分化することによって、大学院、学部における論文作成指導などのシステムを効率的に運用した。また、パワーポイントを用いたプレゼンテーションや英語での演習を積極的に実施した。また、大学院では、他学部、他専修との共同授業「歴史学のフロンティア」の充実をはかり、加えて、研究ジャーナル『パブリック・ヒストリー』の刊行を通じた出版実務の習得、雑誌編集業務の実習も順調に進めた。

2. 研究

西洋史学研究室は、雑誌『西洋史学』、『パブリック・ヒストリー』の編集やワークショップ西洋史・大阪を恒常的に主催するだけでなく、学会や研究会などの事務局や代表者を提供することで、西洋史学や他分野との共同研究の発展に貢献してきた。そのうえ、グローバルヒストリー・セミナーなど、海外からの招聘研究者との学術集会を恒常的に開催し、研究の国際化にも尽力した。教員個人も専門学術誌・研究書への寄稿、国際学会での報告など、活発に研究活動を行った。さらに、日本学術振興会科学研究費補助金をはじめとする競争的外部資金の代表者として、外部資金の獲得も順調であった。大学院生等は、計15篇の学術論文（2016年度7篇、2017年度8篇）、計49回の学会報告（2016年度19回、2017年度30回）を公表した。

3. 社会連携

高等学校での世界史教育との連携に関しては、高校世界史の執筆に関わるとともに、高等学校へ出張講義を実施した。また、東洋史学専修、日本史学専修、共生文明論コースと協力して、高校の世界史教員をまじえた大阪大学歴史教育研究会を2年間で17回共催した。さらに、海外での講義など、海外への発信も行った。加えて、高等学校へ出張講義やサイエンスカフェの開催、それに研究室ホームページの充実など社会一般への発信も積極的に行った。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

上記の活動をとおして、論文作成指導の体制は充実している。卒業論文、修士論文ともに質が向上した。さらに教職を中心に計5名の高度職業人を輩出しており、これらの点から目標はおおむね達成されたと言える。

2. 研究

研究の項に掲げられた目標は達成された。教員、院生による学術論文の刊行、学会発表はいずれも十分な成果をあげることができた。また、グローバルヒストリー・セミナーなど国際学会議の継続的な開催は、日本での西洋史研究の国際化に一定の貢献をなすものであった。加えて、西洋史学研究室が、枢要な学会、研究会の事務局を運営し、共同研究機関のような機能を果たしたことは、外部の研究者からの高い評価に裏打ちされたものと考えられる。

3. 社会連携

上記の活動をとおして、社会連携の項に掲げた目標は、十分に達成されたと自己評価できる。とりわけ高校世界史教育との連携には、東洋史学専修・日本史学専修・共生文明論コースとの協力体制を構築した上で、充実した成果が得られたと考えられる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	0	0	0
2019	0	1	1
計	0	1	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

上山益己『中世盛期北フランスの諸侯権力』

審査教員：中谷惣、藤川隆男、栗原麻子

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)
2019	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	7(7)	8(8)
計	2(2)	0(0)	1(1)	0(0)	7(7)	10(10)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	4	1	13	0	0	18
2019	2	0	29	0	0	31
計	6	1	42	0	0	49

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

Tamamura, Shin, “British East Africa as an intersection of two empires: Competition and collaboration between the British and Japanese cotton and chemical industries in the interwar period”, 『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会）16, pp.25-38, 2019/2/27

〔博士後期〕

大西悠「ジェヴォンズ『石炭問題』を読む——熱は国家なり——」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会）16, pp.48-66, 2019/2/27

【2019年度】

〔博士前期〕

谷垣美有「植民地の軍事利用—第一次世界大戦期仏領西アフリカを事例として—」『第1回若手研究者フォーラムプロシーディング』 pp.21-23, 査読有, 2019/9

福永耕人「1950～60年代のドイツ連邦軍におけるヒトラー暗殺未遂事件の評価—裏切り者から英雄へ—」『第1回若手研究者フォーラムプロシーディング』 pp.17-20, 査読有, 2019/9

畔勝俊弥「スコットランド人のみた「アメリカの大義」—長老派聖職者ジョン・ウィザーズプーンの視点から—」『第1回若手研究者フォーラムプロシーディング』 pp.24-28, 査読有, 2019/9

谷垣美有「植民地の軍事利用—第一次世界大戦期仏領西アフリカ連邦における援助と見返り—」『パブリック・ヒストリー』第17号, pp.25-41, 査読有, 2020/2

浦田光「「肥やしをかき漁る者ども」—19世紀後半アメリカ合衆国におけるジャーナリズムの社会的役割の変容—」『第2回若手研究者フォーラム要旨集』 pp.22-25, 査読有, 2020/3/23

福永耕人「1950～60年代のドイツ連邦軍における「抵抗」の受容」『第2回若手研究者フォーラム要旨集』 pp.26-29, 査読有, 2020/3/23

〔博士後期〕

嶽麻美「The Iwakura Mission: A Connection in Global History」『The 9th Flying University Transnational Humanities (FUTH): The Holocaust Meets the Post-colonial in the Global Memory Space』 pp.200-205, 査読無, 2019/8

子守健康「1960年におけるNAACPの法廷闘争—フロリダ州におけるNAACPを中心に—」『パブリック・ヒストリー』第17号, pp.42-57, 査読有, 2020/2

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

畔勝俊弥「ジョン・アダムズの混合政体論：英国国制論の展開と英領北米植民地の独立論」, 大阪大学西洋史学会若手セ

- ミナー第 58 回例会, 大阪大学, 2018/7/19
- 畔勝俊弥「晩期スコットランド啓蒙における建国期アメリカ合衆国: ジョン・ミラーとアダム・ファーガソンを中心に」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 60 回例会, 大阪大学, 2018/11/15
- 畔勝俊弥, 趙文暖, 中村友輝、梶越「宗教から見た近世日中両国の権威と権力」, 大阪大学歴史教育研究会第 117 回例会, 大阪大学, 2018/12/15
- 工藤雅史「ミハウ・ボブジンスキのポーランド国家論: 二重帝国期ガリツィアにおける近世的国制と近代市民社会の相克」, 第 90 回ポーランド史研究会,, 関西学院大学大阪梅田キャンパス , 2018/12/1
- 工藤雅史「ハウ・ボブジンスキのポーランド国家論: 『ポーランド史概説』にみる近世と近代の架橋」, ハプスブルク史研究会関西例会, 神戸大学, 2019/2/23"
- 嶽麻美「日英経済関係の再考—杉山伸也『日英経済関係史研究 1860—1940』に基づいて」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー, 第 59 回例会,, 大阪大学, 2018/8/6
- 玉村紳"British East Africa as an intersection of two empires in the interwar period—The complementarity of competition and cooperation in the British and Japanese cotton and soda industries—", The Asian Association of World Historians, 大阪大学, 2019/1/5
- 玉村紳「Sansom report から読み取る日英産業構造の「二重性」」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 59 回例会,, 大阪大学, 2018/8/6
- 福永耕人「The Unification Styles of the Uniform of the Army in imperial Germany 1907-1910」, 大阪大学西洋史学会第 56 回若手セミナー, 大阪大学, 2018/6/26
- 福永耕人「1950～60 年代のドイツ連邦軍におけるヒトラー暗殺未遂事件の評価—裏切り者から英雄へ」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 61 回例会, Hotel Amba, 2019/3/2
- 森井一真"Rethinking of the Resistance to Anti-Slave Trade Movement in Britain," HeKKSaGOn 2018 Young Scholar Symposium, Osaka Universit, 2018/4/11
- 森井一真「イギリスにおける奴隷貿易廃止運動に対する抵抗—選挙区利害から」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 57 回例会, 大阪大学, 2018/7/12
- 森井一真"Opponents of the Abolition of the British Slave Trade in the House of Commons, 1788-1807: Their Economic, Electoral and Political Interests," Historians Workshop 7th Research Showcase, 2019/2/14
〔博士後期〕
- 高垣里衣「Conflict and Connection: Trading Network of Bilbao Merchant during the Seven Years War (1756-1765)」, Workshop on ""Political Economies of International Commerce"" , 東京大学, 2018/4/20"
- 高垣里衣「Bilbao's Mercantile Trade in the North Atlantic in the late 18th century」, KCL World History Student Conference 2018 , King's College London, 2018/5/5
- 高垣里衣「18 世紀後半におけるビルバオ商人の商業ネットワーク — 港灣徴税史料からみるガルドキ家の対ニューイングランド貿易—」, 社会経済史学会第 87 回全国大会, 大阪大学, 2018/5/26
- 高垣里衣「18 世紀後半の北大西洋におけるビルバオ商人の商業活動—ガルドキ家とマサチューセッツ湾直轄植民地を中心に—」, 国際商業史研究会, 京都府立大学, 2018/7/1
- 高垣里衣"Trade Network of Bilbao Merchant in the late 18th Century (1756-1765): The Case of Gardoqui in the North Atlantic <Poster Session>," XVIII World Economic History Congress, MIT, 2018/7/31
【2019 年度】
〔博士前期〕
- 伊藤光葉「ドイツ兵の戦争神経症と精神医学的解釈——Svenja Goltermann, The War in Their Minds: German Soldiers and Their Violent Pasts in West Germany を手掛かりに」, 第 63 回大阪大学西洋史学会若手セミナー, 大阪大学, 2019/7/30
- 伊藤光葉「「重荷」としての戦争障害者——第二次世界大戦後ドイツにおける戦争障害者と家族を中心に」, 第 64 回大阪

- 大学西洋史学会若手セミナー，大阪大学， 2019/12/6
- 浦田光(共同発表)「新学習指導要領解説『歴史総合』の「問い」を考える：第一次世界大戦は、国際関係をどのように変えたのだろうか」，大阪大学歴史教育研究会，大阪大学， 2019/12/21
- 浦田光「マックレイキング再考：世紀転換期アメリカジャーナリズムの「道徳家」」，第 64 回大阪大学西洋史学会若手セミナー，大阪大学， 2019/12/6
- 浦田光「19-20 世紀転換期アメリカ都市共同体の形成—Julia Guarneri, *Newsprint Metropolis: City Papers and the Making of Modern Americans* にもとづいて」，第 62 回大阪大学西洋史学会若手セミナー，大阪大学， 2019/6/7
- 郝宇「20 世紀末オーストラリア多文化主義における中国人移民」，第 65 回 大阪大学西洋史学会若手セミナー，大阪大学， 2019/12/11
- 谷垣美有「第一次世界大戦期仏領西アフリカにおける兵員動員について」，第 63 回大阪大学西洋史学会若手セミナー，大阪大学， 2019/7/30
- 谷垣美有「植民地の軍事利用—第一次世界大戦期仏領西アフリカを事例として—」，第 1 回若手研究者フォーラム，大阪大学， 2019/9/27
- 谷垣美有「戦間期仏領西アフリカにおける植民地兵」，第 64 回大阪大学西洋史学会若手セミナー，大阪大学， 2019/12/6
- 谷垣美有「戦間期のセネガル歩兵—フランス植民地主義と植民地の軍事利用—」，第 4 回大阪大学豊中地区研究交流会，大阪大学， 2019/12/17
- 谷垣美有（共同発表）「新学習指導要領解説『歴史総合』の『問い』を考える：欧米で生まれた国民国家は、なぜ日本をはじめ世界へ広がったのだろうか」，大阪大学歴史教育研究会第 125 回例会，大阪大学， 2019/12/21
- 福永耕人 “Wie wurde das Stauffenberg-Attentat in den 1950er und -60er Jahren in der Bundeswehr bewertet? Vom Verräter zum Held”，eKKSaGOn Graduate Student Workshop "Transcultural Encounters", HeKKSaGOn, ハイデルベルク大学， 2019/9/11
- 福永耕人「1950～60 年代のドイツ連邦軍におけるヒトラー暗殺未遂事件の評価 裏切り者から英雄へ」，第 1 回若手研究者フォーラム，大阪大学， 2019/9/27
- 福永耕人「1950～60 年代のドイツ連邦軍における「抵抗」の受容」，第 2 回若手研究者フォーラム，大阪大学， 2020/3/23(コロナ対策により延期)
- 畔勝俊弥「スコットランド人のみた「アメリカの大義」—長老派聖職者ジョン・ウィザースプーンの視点から—」，第 1 回若手研究者フォーラム，大阪大学， 2019/9/27
- 畔勝俊弥 “Scotland, England and America in John Witherspoon: British Composite Monarchy from the Scottish-American Perspective”，9th Research Showcase, Historians' Workshop, 京都大学， 2019/10/11
- 浦田光「「肥やしをかき漁る子ども」— 19 世紀後半アメリカ合衆国におけるジャーナリズムの社会的役割の変容 —」，第 2 回若手研究者フォーラム，大阪大学， 2020/3/23 (新型コロナの影響で延期)
- 〔博士後期〕
- 高垣里衣 “Thinking the Position of Bilbao Merchants in the late 18th-century Global Trade: Comparisons and Relationships”，Seminario de Facultad de Economía y Empresa (経済史・経済理論専攻主催セミナー), Universidad del País Vasco/Bilbao (バスク大学/ビルバオ市) ， 2019/6/20
- 高垣里衣「18 世紀後半のスペインにおける魚の重要性と貿易—バスクを事例として—」，ヨーロッパ地域史研究会，福岡大学， 2020/2/18
- 嶽麻美「19 世紀後半におけるアジアからの遣欧使節—岩倉使節団を中心に—」，第 24 回ワークショップ西洋史，大阪大学， 2019/6/15
- 嶽麻美 “The Iwakura Mission: A Connection in Global History”，The 9th Flying University Transnational Humanities (FUTH): The Holocaust Meets the Post-colonial in the Global Memory Space, 西江大学， 2019/8/28
- 玉村紳「戦間期日英帝国経済圏における競争と協調 —綿工業と化学工業の「二重性」を中心に—」，第 14 回 (2018 年度) 南アジア学会修論・博論発表会，京都大学， 2019/4/1

- 玉村紳 “British East Africa’s engagement to “Afrasian” trading network in the interwar period”, The Japan Society of Afrasian Studies, 2nd. International conference, 東京大学, 2019/7/27
- 玉村紳「两大戦間期の日英両帝国経済圏間における相互依存関係—東アフリカ産マガジ・ソーダとウガンダ棉を中心として—」, 政治経済学・経済史学会 冬季学術大会, 早稲田大学, 2020/1/11
- 森井一真「19 世紀初頭イギリス議会における奴隷貿易廃止反対派の変容」, 第 18 回歴史家協会大会, 同志社大学, 2019/6/16
- 森井一真 “Changing Attitudes of MPs against the Abolition of the British Slave Trade 1787-1807”, The 9th Flying University Transnational Humanities (FUTH): The Holocaust Meets the Post-colonial in the Global Memory Space, 西江大学, 2019/8/28
- 森井一真 “Changing Attitudes of MPs Opposing the Abolition of the British Slave Trade 1787-1807”, Global History Collaborative 5th Summer School in Tokyo, 東京大学, 2019/11/9
- 森井一真「19 世紀初頭におけるスコットランド選出議員の帝国進出——奴隷貿易廃止反対派のその後」, 2019 年度近世イギリス史研究会例会, 大阪大学, 2019/10/13
- 子守健康「公民権運動研究の現在・近年のブラックパワー研究について」, 関西アメリカ史研究会, キャンパスプラザ京都 /京都市, 2019/5/26
- 山内瑞貴「19 世紀後半における中央ユーラシアへのインド茶の流通」, 九州史学会大会・西洋史部会, 九州大学, 2019/12/15
- 堤亮介「古代ローマの疫病と公衆衛生—ウィトルウィウス『建築書』を中心に—」, 広島史学研究会大会, 広島大学, 2019/10/27

(3)その他(書評・翻訳など)

【2018 年度】

〔博士前期〕

畔勝俊弥「コリン・ウッダート著『11 の国のアメリカ史 分断と相克の 400 年 (上・下)』『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 16, pp.80-85, 2019/2

Kazuma Morii “Rethinking the Resistance to the Anti-Slave Trade Movement in Britain” (Summary of the Presentation at HeKKSaGOn 2018 Young Schlor Symposium), Public History, Department of Occidental History, Osaka University, 16, pp.67-69, 2019/2

〔博士後期〕

高垣里衣〈新刊紹介〉「細川道久著『ニューファンドラント いちばん古くていちばん新しいカナダ』彩流社『西洋史学』(日本西洋史学会), 266, pp.113-114, 2018/12/30

高垣里衣〈新刊紹介・採録決定済み〉「北村厚著『教養のグローバル・ヒストリー: 大人のための世界史入門』ミネルヴァ書房『史学雑誌』(史学会), 128 編 3 号, pp. 93 (353) -94 (354), 2019/4

【2019 年度】

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 1 名 (計 1 名)

2019 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部：3名 大学院：2名（計5名）

2019年度 学部：2名 大学院：1名（計3名）

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

岸本廣大(学振PD・同志社大学文学部助教), 2018/4

岩崎佳孝(博士後期課程・甲南女子大学文学部准教授), 2018/4

森本慶太(助教・関西大学文学部准教授), 2019/4

小林和夫(博士前期課程・大阪産業大学経済学部講師→早稲田大学政治経済学術院准教授), 2019/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2018年度：0名 2019年度：0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度：0名 2019年度：0名

9. 刊行物

2019年度 『西洋史学』267-268号 学術誌(日本西洋史学会)

『パブリック・ヒストリー』第17号 学術誌(大阪大学西洋史学会)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

グローバルヒストリー・セミナー	2008年度～現在に至る
日本西洋史学会『西洋史学』編集部	2008年度～現在に至る
大阪大学西洋史学会	2008年度～現在に至る
関西アメリカ史研究会	2008年度～現在に至る
東アジアブリテン史学会(EAABH)事務局	2011年3月～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

大阪大学西洋史学会若手セミナー 学内

第56回 福永耕人 “The Unification Styles of the Uniform of the Army in imperial Germany 1907-1910” (2018/6/26)

第57回 森井一真 「イギリスにおける奴隷貿易廃止運動に対する抵抗——選挙区利害から」 (2018/7/12)

第58回 畔勝俊弥 「ジョン・アダムズの混合政体論：英国国制論の展開と英領北米植民地の独立論」 (2018/7/19)

第59回 玉村紳 「Sansom report から読み取る日英産業構造の「二重性」」 (2018/8/6)

嶽麻美 「日英経済関係の再考—杉山伸也『日英経済関係史研究 1860—1940』に基づいて」 (2018/8/6)

第60回 畔勝俊弥「晩期スコットランド啓蒙における建国期アメリカ合衆国：ジョン・ミラーとアダム・ファーガソンを中心に」（2018/11/15）

大阪大学グローバルヒストリー・セミナー 学内

第68回 HEKKSAGON 2018 Osaka Conference related Workshop (2018/4/12)

第69回 “Before the Great Transformation: small units, labor intensive growth and aristocratic bourgeois societies, 18th-19th centuries”(2018/5/17)

講師 Alessandro Stanziani (フランス社会科学高等研究院教授)

第70回 "Vietnamese Guns and Chinese Warfare (1550-1683): A Global Approach"(2018/6/29)

講師 Sun Laichen (カリフォルニア州立大学フラトン校教授)

第71回 「11-12世紀フランス王国の貨幣と地域秩序ー北フランスの諸事例からー」（2018/7/13）

講師 山田雅彦（京都女子大学教授）

第72回 “Rethinking the American Empire”(2018/11/6)

講師 A.G. Hopkins (Emeritus Professor, University of Cambridge and University of Texas, Austin)

第73回 “State and Society in Early Nineteenth Century Vietnam: The Quest for a New History” (2018/12/4)

講師 Vu Duc Liem (Hanoi National University of Education, University of Hamburg)

第74回 "Global Implications of the Indian Understanding of and Resistance to Colonialism" (2019/1/8)

講師 Mridula Mukherjee (Professor of Modern Indian History (Retd.) Centre for Historical Studies Jawaharlal Nehru University)

"The Great Divergence and the 19th Century World"

講師 Aditya Mukherjee (Professor of Contemporary History Centre for Historical Studies Jawaharlal Nehru University)

第75回 “The End of the Silk Road” (2019/1/9)

講師 李 伯重 (Chair Professor of Humanities at Peking University, China)

第76回 「1840年以来中国における二回の対外開放：比較と啓示」（2019/2/11）

講師 江沛（法学研究科／中国・南開大学）

「中日共同歴史研究と九一八事変後日本の対中政策再認識」（2019/2/11）

講師 宋志勇（法学研究科／中国・南開大学）

第77回 “Exploring the Poverty of Others: Kuwata Kumazô, European Labour and Japanese Social Reform, 1895-1925“ (2019/2/23)

講師 Wolfgang Schwentker (大阪大学人間科学研究科)

大阪大学グローバルヒストリー・ワークショップ

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 秋田 茂 教授

1958年生。1985年、広島大学大学院文学研究科博士課程中退。博士（文学）（大阪大学）2003年。大阪外国語大学外国語学部助手、同講師、同助教授を経て、2003年10月より現職。先導的学際研究機構(OTRI)グローバルヒストリー研究部門長、アジア世界史学会(AAWH)会長。専攻：イギリス帝国史・グローバルヒストリー

1-1. 論文

秋田茂, 桃木至朗「序論 グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育ー日本史と世界史のあいだでー」『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育ー日本史と世界史のあいだでー』(大阪大学歴史教育研究会), 大阪大学出版会, pp.

1-16, 2020/3

秋田茂 「世紀転換期のインド系移民排斥と「インド太平洋世界」の形成」『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育—日本史と世界史のあいだで—』(大阪大学歴史教育研究会), 大阪大学出版会, pp. 72-99, 2020/3

秋田茂 「アジアからグローバル・ヒストリーを問い直す」『越境する歴史学と世界文学』(「国際日本研究」コンソーシアム), 臨川書店, pp. 33-46, 2020/3

Akita, Shigeru, “Global History Studies at Osaka University”, *Bulletin of Asia-Pacific Studies*, (大阪大学グローバルイニシアティブ・センター), 22, 大阪大学グローバルイニシアティブ・センター, pp. 25-41, 2020/3

Akita, Shigeru, “Introduction (Special Issue: A View from the East)”, *Asian Review of World Histories* (Asian Association of World Historians), 8-1, Brill Publisher, pp. 5-6, 2020/2

Akita, Shigeru, “Introduction to the Special Issue (The First British-East Asian Conference of Historians 2018: Core and Periphery in British and East Asian Histories)”, *The East Asian Journal of British History*, (East Asian Society of British History), 7, kyungpook National University and Hirosaki University, pp. 1-2, 2019/9

秋田茂 「江沛報告へのコメント」『現代中国研究』(現代中国史研究会), 43, 現代中国史研究会, pp. 118-119, 2019/7

秋田茂 「序章・グローバル化の世界史」秋田茂(共編著)『グローバル化の世界史』(MINERVA 世界史叢書編集委員会), 2, ミネルヴァ書房, pp. 1-17, 2019/3

秋田茂 「第5章・19世紀「バクス・ブリタニカ」の世界」秋田茂(共編著)『グローバル化の世界史』(MINERVA 世界史叢書編集委員会), 2, ミネルヴァ書房, pp. 171-210, 2019/3

秋田茂 「第9章・アジア太平洋の世紀」秋田茂(共編著)『グローバル化の世界史』(MINERVA 世界史叢書編集委員会), 2, ミネルヴァ書房, pp. 329-356, 2019/3

秋田茂 「終章・地球社会の行方と課題」秋田茂(共編著)『グローバル化の世界史』(MINERVA 世界史叢書編集委員会), 2, ミネルヴァ書房, pp. 377-383, 2019/3

Akita, Shigeru, “Intra-Asian Competition and Collaboration against the West: The N.Y.K. Bombay Line, Tata & Sons, and Indian Cotton at the End of the Nineteenth Century”, *Asian Review of World Histories* (Asian Association of World Historians), 6-2, Brill, pp. 277-293, 2018/7

1-2. 著書

秋田茂, 桃木至朗, 市大樹, 中村翼, 向正樹, 高木純一, 岡田雅志, 山本千映, 久保田裕次, 中嶋啓雄, 岡田友和, 池田一人, 『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育—日本史と世界史のあいだで—』大阪大学出版会, pp. 1-16, pp. 72-99, 2020/3

秋田茂, 坪井秀人, テッサ・モーリス・スズキ, 岡本隆司, 松本佐保, 麻田雅文, 小林ハツサル柔子, 瀧井一博, 伊藤貴之他8名, 『越境する歴史学と世界文学』臨川書店, pp. 33-46, 2020/3

秋田茂(共編著)『グローバル化の世界史』2, ミネルヴァ書房, pp. 1-17, pp. 171-210, pp. 329-356, pp. 377-383, 2019/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

秋田茂(解説) 「第3節・歴史総合、第5節・世界史探究」文部科学省初等中等教育局(共著)『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』平成30年7月, 文部科学省, pp. 123-190, pp. 271-349 「学習指導要領の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者」として共同執筆, 2019/3

Akita, Shigeru(コメント), “Comments on Nohara Shinji, ‘The dissemination of Adam Smith’s ideas to East Asia’”, *The Journal of Economics*, 82-3, Graduate School of Economics, The University of Tokyo, pp. 42-44, 2019/2

秋田茂(書評) 「書苑周遊 新刊この一冊 木村光彦著『日本統治下の朝鮮 統計と実証研究は何を語るか』」『中央公論』2018年7月号, 中央公論新社, pp. 232-233, 2018/6

1-4. 口頭発表

秋田茂(招待講演)「パクス・ブリタニカの世界③:冷戦と脱植民地化—なぜインドは1947年という早期に独立できたのか」大阪府高齢者大学校「世界史から学ぶ科」:講義,大阪府高齢者大学校,2020/2

Akita, Shigeru, “British Economic Interests and the International Order of Asia in the 1930s”, Chinese History seminar, School of East Asian Studies, Getttingen University, 2020/1

秋田茂「アジアからグローバルヒストリーを問い直す」先導的学際研究機構シンポジウム「学際研究の新たな地平を目指して」,大阪大学先導的学際研究機構,大阪大学、大阪大学会館,2020/1

Akita, Shigeru, “From Empires to Development Aid—A Global Historical Perspective on the Asian International Economic Order in the 1950s and 1960s”, Heiderberg History Workshop: “From War to Cold War: The Asian World Order in the Middle of the Twentieth-Century”, Heiderberg Center of Transcultural Studies (HCTS), Heiderberg University, Karl Yaspers Center, 2019/12

Akita, Shigeru, “Methodology of Global History”, History Seminar at Department of History, Department of History, Heidelberg University, 2019/11

Akita, Shigeru, “Intra-Asian competition” and collaboration against the West: the Emergence of a “Cotton-centered Linkages” at the end of the 19th century”, Special seminar on Global History, Heiderberg Center of Transcultural Studies (HCTS), Heidelberg University, 2019/10

Akita, Shigeru, “Global History Studies at Osaka University”, Final Symposium : Globalizing History Education: Diversity, Trans-borders and Intersectionality, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学・中之島センター, 2019/8 (*Bulletion of Asia-Pacific Studies*, 22, pp. 25-41, 2020/3)

秋田茂「インド「緑の革命」(農業開発)と石油危機—化学肥料問題を中心に」科研費基盤A・2019年度第二回定例研究会, 科研研究会, 大阪大学・中之島センター, 2019/7

秋田茂「アジアからグローバル・ヒストリーを問い直す」国際ワークショップ「グローバル・ヒストリーと世界文学」, 国際日本研究コンソーシアム, 大阪大学, 大阪大学会館, 2019/6 (『越境する歴史学と世界文学』3, pp. 33-46, 2020/3)

Akita, Shigeru, (パネリスト)“Green Revolution” in India, the World Bank and the Oil Crises: Focusing on Chemical Fertilizer Problems”, Transformation of International Economic Order of Asia in the 1970s: The 12th Indo-Japanese Dialogue, Center for Historical Studies, Jawaharlal Nehru University, Center for Historical Studies, Jawaharlal Nehru University, 2019/3

秋田茂 (パネリスト)「グローバルヒストリーの挑戦—第4回アジア世界史学会大阪大会を事例に」8つの研究部門による革新的イノベーション:先導的学際研究機構シンポジウム, 大阪大学先導的学際研究機構, 大阪大学, 2019/2

秋田茂 (招待講演)「パクス・ブリタニカの世界②—大阪から考えるグローバルヒストリー」大阪府高齢者大学校「世界史から学ぶ科」:講義, 大阪府高齢者大学校, 2019/2

Akita, Shigeru, (パネリスト)“The Aid-India Consortium and the “Green Revolution” in India in the late 1960s-1970s”, 4th International Conference of the Asian Association of World Historians (AAWH): Creating World Histories from Asian Perspectives, Asian Association of World Historians, Nakanoshima-center, Osaka University, 2019/1 (*Abstracts of Conference*, pp. 74-74, 2019/1)

秋田茂 (パネリスト)「コメント:シンポジウム「ドイツと東アジア—外交・通商・謀略・阿片・追放」」近現代東北アジア地域史研究会・2018年度年次大会:シンポジウム, 近現代東北アジア地域史研究会, 近畿大学学芸学部, 2018/12

秋田茂 (パネリスト)「インド「緑の革命」(農業開発)と石油危機—化学肥料問題を中心に」2018年度第3回定例研究会: 科研共同研究, 大阪大学グローバルヒストリー研究会, 大阪大学・中之島センター, 2018/12

秋田茂 (招待講演)「アジアから見たグローバルヒストリーの構築」2018年度国際交流基金招聘・日本研究集中講義: 集中講義, ハノイ国家大学人文社会科学大学日本語学科, ハノイ国家大学人文社会科学大学日本語学科, 2018/11

Akita, Shigeru, (パネリスト)“Beyond the “Core-Periphery” framework: Reinterpretation of the Modern World-System from Asian Perspectives”, 1st British-East Asian Conference of Historians: British History, Korean Society of British History & BK21 Plus Project, Depart of History, Kyungpook National University, Daegu, Korea, 2018/9

Akita, Shigeru, (パネリスト)“Comments: The Middle East and the Economy of the British Empire”, Comparative Studies of Islamic Areas: New Actors, Fresh Angles: Islamic Studies, Center for Islamic Studies, Waseda University, Waseda University, 2018/9

秋田茂 (パネリスト)「コメント: 同化主義を考える—フランス植民地帝国を中心に」比較植民地史研究会 2018 年大会: 比較植民地史ワークショップ, 比較植民地史研究会, 東北学院大学文学部, 2018/7

Akita, Shigeru, (パネリスト)“Comments on the Panel, “The dissemination of Adam Smith’s ideas to East Asia””, 第 82 回経済学史学会大会: The dissemination of Adam Smith’s ideas to East Asia, 経済学史学会, 東京大学経済学研究科, 2018/6 (*The Journal of Economics*, 82-3, pp. 42-44, 2019/2)

秋田茂 (招待講演)「新学習指導要領の歴史系科目を構想する」2018 年度年次大会: 歴史教育, 大阪私立中学校・高等学校社会科教育研究会, 金蘭千里学園中学・高等学校, 2018/6

Akita, Shigeru, (パネリスト)“Response: ‘Linda Colley, “Writing Constitutions into British History””, David Cannadine & Linda Colley Workshop: International Workshop, Institute for Advanced Studies, The University of Tokyo, 2018/4

Akita, Shigeru, (パネリスト)“The Reform of Osaka University’s History Education in the 19th–20th Centuries”, Embattled History and Reform: “How is History Taught? Local, National, and/or Global Perspectives”: International Conference on History Education, Californis State University, Fullerton, Department of History & Department of Foreign Languages and Literatures, 2018/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

秋田茂 大阪大学総長顕彰・研究部門, 大阪大学, 2014/7

秋田茂 第 14 回読賣・吉野作造賞, 読賣新聞社, 中央公論新社, 2013/7

秋田茂 第 20 回大平正芳記念賞, 大平正芳記念財団, 2004/6

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2017 年度～2021 年度、基盤研究(A) 一般、代表者: 秋田茂

課題番号: 17H00933

研究題目: 世界システムの転換点としての 1970 年代—石油危機の衝撃

研究経費: 2018 年度 直接経費 6,800,000 円 間接経費 2,040,000 円

2019 年度 直接経費 6,300,000 円 間接経費 1,890,000 円

研究の目的:

1970 年代の二回の石油危機によって、近代世界システム・世界経済はいかに変容し、21 世紀現代世界の原型が形成されたのか。「広義の東アジア地域」の経済成長(東アジアの奇跡)はなぜ可能になり、南アジアの農業開発「緑の革命」は成果をあげる一方で、アフリカの経済開発政策はなぜ失敗して「南南問題」が生まれたのか。経済援助(ODA)、民間投資の動向と関連づけて分析する。さらに、石油危機を通じて国際金融は、ブレトン＝ウッズ体制から「民営化された国際通貨システム」へといかに変容したのか、オイルマネーの行方に着目して考察する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

社会経済史学会・評議員, 2017 年 5 月～現在に至る

文部科学省初等中等教育局教育課程課・学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等のための指導・助言等, 2016 年 10 月～2018 年 9 月

East Asian Society of British History–Japan・President (会長), 2015 年 8 月～現在に至る

Asian Association of World Historians (AAWH)・President (会長), 2015 年 5 月～現在に至る

The Journal of Imperial & Commonwealth History, Editorial Board member, 2014 年 10 月～現在に至る
北海道大学スラブ研究センター・共同研究員, 2011 年 4 月～現在に至る
日本学術会議・連携会員(史学), 2006 年 10 月～現在に至る
The Royal Historical Society (United Kingdom)・Fellow, 2002 年 10 月～現在に至る

2. 藤川 隆男 教授

1959 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士（大阪大学）、MA（ANU）。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋史、とくにオーストラリアの歴史

2-1. 論文

- 藤川隆男 「21 世紀の歴史学とパブリック」『資料と公共性(2019 研究成果年次報告書)』(九州大学大学院人文科学研究院), 1, 九州大学大学院人文科学研究院, pp. 4-17, 2020/3
- 藤川隆男 「「パブリック・ヒストリー」とは何か。」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 17, 大阪大学西洋史学会, pp. 12-24, 2020/2
- Chenhui Chu, Koji Tanaka, Haolin Ren, Benjamin Renoust, Yuta Nakashima, Noriko Takemura, Hajime Nagahara, Fujikawa, Takao, “Public Meeting Corpus Construction and Content Delivery”『じんもんこん 2019 論文集』(じんもんこん), 2019, じんもんこん, pp. 139-144, 2019/12
- 藤川隆男 「歴史研究におけるビッグデータの活用」『西洋史学』(日本西洋史学会), 268, 日本西洋史学会, pp. 50-61, 2019/12
- 藤川隆男 「メディア・スポーツ複合体とオーストラリアのカントリー・フットボールクラブ」『関学西洋史論集』(関西学院大学西洋史研究会), 42, 関西学院大学西洋史研究会, pp. 49-74, 2019/3

2-2. 著書

- 藤川隆男, 谷川稔, 川島昭夫他(共著) 『越境する歴史家たちへ』ミネルヴァ書房, pp. 97-102, 2019/6
- 坂上康弘, 中房敏朗, 藤川隆男他 『スポーツの世界史』一色書房, pp. 349-372, 2018/9

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

- 藤川隆男 「自然言語処理による新聞データの分析を通じた 19-20 世紀オーストラリアの公開集会と世論形成の構造の解明」2020 Spring Tokyo Digital History Symposium, Tokyo Digital History, 東京大学 本郷キャンパス 経済学研究科学術交流棟・小島ホール, 2020/2
- Fujikawa, Takao, “Public History and Digital History in University Education”, Global History Education Conference, 国民国家型の大学歴史教育をグローバル化時代に適応させる方法に関する国際比較, 中之島センターの佐治敬三ホール, 2019/8
- 藤川隆男 「21 世紀の歴史学とパブリック-IMBY/【インターネット・アニメ・モノ・アート・デジタル】・ヒストリー」九州西洋史学会 2019 年度春季大会, 九州西洋史学会, 九州歴史科学研究会, 科研共同研究「資料と公共性」, 九州大学西新プラザ, 2019/4
- 藤川隆男 「メディア・スポーツ複合体とオーストラリアのスポーツ・クラブ文化」関学西洋史研究会第 21 回年次大会講演, 関学西洋史研究会, 関西学院大学, 2018/11
- 藤川隆男 「地域とクラブから見たオーストラリアスポーツ史」ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学西洋史学会, 大阪大学, 2018/6
- 藤川隆男 「The Past and Present of Australian Studies from Japanese Perspectives (discussant)」2018 年度全国研究大会, オーストラリア学会, 筑波大学, 2018/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2019年度～2022年度、基盤研究(B) 一般、代表者:藤川隆男

課題番号:19H01330

研究題目:オーストラリアの世論形成の歴史的解明:自然言語処理による公開集会データの分析

研究経費:2019年度 直接経費 4,800,000円 間接経費 1,440,000円

研究の目的:

公開集会は、19世紀西欧の世論形成の支柱であるとされたが、歴史的構造としての分析は十分になされてこなかった。本研究はこのテーマを、オーストラリアの新聞データベースに掲載されるすべての公開集会の資料を用いて追及する。情報系研究者との連携により、情報技術を駆使してデータを集積・分類・分析し、19世紀前半から20世紀半ばまでの公開集会による世論形成の構造を、オーストラリア全国に関して長期的に解明する研究である。本研究はデジタル・ヒストリーの最先端に立ち、この研究手法を応用すれば、検証できる資料の量(ビッグデータ)を幾何級数的に増大できる。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

第70回日本西洋史学会大会準備委員会・委員長, 2019年6月～現在に至る

日本西洋史学会・代表, 2016年3月～現在に至る

日本歴史学協会・理事, 2016年3月～現在に至る

日本歴史学協会・委員, 2015年9月～現在に至る

日本西洋史学会・理事, 2015年5月～現在に至る

大阪大学西洋史学会・理事, 2003年6月～現在に至る

パブリック・ヒストリー・編集委員, 2003年6月～現在に至る

西洋史学・編集委員, 1996年4月～現在に至る

3. 中野 耕太郎 教授

1967年生。1994年、京都大学文学研究科博士後期課程(西洋史学専攻現代史学)中退。博士(文学)(京都大学)。日本学術振興会特別研究員、大阪市立大学助手、同講師、同助教授、大阪大学准教授を経て、2016年4月より現職。専攻:アメリカ現代史

3-1. 論文

中野耕太郎 「「改革」のなかの反知性主義—ホーフスタッター『改革の時代—農民神話からニューディールへ』藤原辰史『歴史書の愉悦』ナカニシヤ出版, pp. 133-145, 2019/7

中野耕太郎 「「偉大な社会」から破砕の時代へ—1960年代アメリカ史試論」山室信一、岡田暁生、小関隆、藤原辰史『われわれはどんな「世界」を生活しているのか—来るべき人文学のために』ナカニシヤ出版, pp. 136-156, 2019/3

中野耕太郎 「人文学の「自己弁護」—アメリカの事例から」山室信一『人文学宣言』ナカニシヤ出版, pp. 154-157, 2019/3

3-2. 著書

中野耕太郎 『20世紀アメリカの夢—世紀転換期から1970年代』岩波書店, 244p., 2019/10

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

中野耕太郎 「貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』へのコメント」第45回例会—貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』合評会, 日本アメリカ史学会, 明治大学駿河台キャンパス, 2019/7

中野耕太郎 「60年代アメリカと「ニューディール」の退潮—去り行くリベラル政治の現代史」共同研究班「21世紀の人文科学」, 京都大学人文科学研究所, 京都大学, 2019/5

中野耕太郎 (招待講演)「失われたアメリカのリベラル政治—「ニューディール秩序」再考」2018年4月例会, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央, 2018/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

中野耕太郎 第2回齋藤眞賞, アメリカ学会, 2012/6

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2016年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:中野耕太郎

課題番号:16K03113

研究題目:アメリカ市民ナショナリズムの変容—1970年代における社会再編の歴史学的分析

研究経費:2018年度 直接経費 97,548円 間接経費 210,000円

2019年度 直接経費 343,281円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究は1970年代を主たる対象として、現代アメリカの市民ナショナリズムの歴史の変容を検証するものである。その際、相互に重なり合う多様な市民(=国民)原理—すなわち、①差別のない機会均等を意味するリベラルな市民権、②福祉国家特有の社会的な市民権、③国家への軍事奉仕と成員資格とを一体視する軍事的市民権、④国際的な反植民地主義等に立脚したコスモポリタンな市民権等が交錯し、また競合する場として当時の社会・思想状況を捉える視座をとる。そうした観点から、今日に至るアメリカ合衆国における国民統合のメカニズムを解明することが本研究の目的である。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

アメリカ学会・理事, 2016年6月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2014年11月～現在に至る

パブリック・ヒストリー・編集委員, 2008年6月～現在に至る

大阪大学西洋史学会・理事, 2008年6月～現在に至る

二十世紀研究・編集委員, 2008年4月～現在に至る

日本西洋史学会・編集委員, 2003年4月～現在に至る

アメリカ史評論・編集委員, 1995年11月～現在に至る

4. 栗原 麻子 教授

1968年生。1995年、京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)指導認定のうえ退学。博士(文学)(京都大学、1998年)。日本学術振興会特別研究員、奈良大学講師を経て、2004年10月より大阪大学文学研究科助教授、准教授を経て2017年4月より現職。専攻:古代ギリシア史

4-1. 論文

栗原麻子「文字そのものの力」角谷常子(編)『古代東アジアの文字文化と社会』pp. 197-215, 2019/3

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

栗原麻子(翻訳), J・M・カーボン、E・ハリス「J・M・カーボン、E・ハリス著「特別寄稿 ギリシア聖法と基金を再考する—分類にむけて—」角谷常子編著『古代東アジアの文字文化と社会』臨川書店, pp. 261-285, 2019/3

栗原麻子「『歴史資料の現在』によせて(特集 歴史資料の現在)」『西洋史学』268, pp. 136-139, 2019

4-4. 口頭発表

栗原麻子「アッティカ法廷弁論における感情の共有と公共圏」大阪市立大学文学研究科プロジェクト「東地中海世界の歴史的展開を、古代から現代に至るまで通時的に再検討する」第2回定例研究会, 大阪市立大学文学研究科プロジェクト, 大阪市立大学, 2019/9

Asako, Kurihara, “Nothoi in Birds 1660-1668: A Brief Reconsideration”, A Workshop: In and Out of the Written Materials, 2019/7/6 (Kyoto)

栗原麻子「アテナイ法廷における伝聞証拠(アコエー)」広島大学史学会(西洋史部会), 広島大学史学研究会, 広島大学, 2018/10

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2017年度～2020年度、基盤研究(C) 一般、代表者:栗原麻子

課題番号:17K0173

研究題目:互酬性と民主制—前4世紀アテナイにおける公私関係の変容

研究経費:2018年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

2019年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究は前4世紀アテナイにおける共同体的なるもの(コイノニア)の変容と連続性を問い直す試みである。とりわけ、私的領域と公的領域のあいだに位置する共同体的な領域を重視し、市民や外国人の恩恵・施与行為にたいする顕彰、前4世紀後半の墓碑によって提示される家族の情愛といった世紀後半の事象を法廷弁論とつきあわせ、政治史偏重の時代区分ではなく社会史的にヘレニズムへむけてのアテナイの変容を捉え、続くヘレニズム時代のギリシア世界と比較することを目的とする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋古典学会・常任委員, 2019年6月～現在に至る

日本西洋古典学会・委員, 書評委員, 2013年6月～現在に至る

日本西洋古典学会・編集委員, 2013年6月～2019年6月

古代文化協会・編集参与, 2011年4月～現在に至る

古代学協会・編集参与, 2009年4月～現在に至る

日本西洋史学会・編集委員、運営委員、編集幹事, 2004年10月～現在に至る

5. 中谷 惣 准教授

1979年生。大阪市立大学大学院文学研究科修了。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員、信州大学助教を経て、2018年4月より現職。専攻：ヨーロッパ中世史(イタリア中世史)

5-1. 論文

中谷惣 「イタリア中世都市におけるキリスト教徒の金貸し」『待兼山論叢』53, pp. 1-27, 2019/12

中谷惣 「中世イタリアの都市の司法」『歴史と地理(世界史の研究)』256, 山川出版社, pp. 57-60, 2018/8

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

中谷惣 「Small loans to rural men in late medieval Tuscany」Change and transformation of premodern credit markets. The importance of small-scale credits: Change and transformation of premodern credit markets. The importance of small-scale credits, Heidelberg Academy, Heidelberg University, 2019/11

Nakaya, So, "The Credits and the Moneylenders in Late Medieval Italy", International Medieval Congress in Leeds: International Medieval Congress in Leeds, 2019/7

中谷惣 「ユダヤ人以前の金貸しの世界——ある医者“banco”から見る」関西中世史研究会 3月例会, 関西中世史研究会, 京都大学, 2019/3

Nakaya, So, "La denuncia nelle fonti giudiziarie lucchesi del Trecento", Denuncia/Delazione: forme di collaborazione tra cittadini e autorità civili ed ecclesiastiche, ボローニャ大学, ボローニャ大学, 2019/3 (ペーパーでの参加)

中谷惣 「ある医者“banco”からみる金貸しの世界」イタリア中近世史研究会, イタリア中近世史研究会, 名城大学, 2018/8

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

中谷惣 日本学術振興会賞(第14回), 日本学術振興会, 2018/3

中谷惣 日本学士院学術奨励賞(第14回), 日本学士院, 2018/3

中谷惣 フォスコ・マライーニ賞(第3回), イタリア政府機関イタリア文化会館, 2017/12

中谷惣 天野和夫賞(第15回), 立命館大学, 2017/11

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2017年度～2019年度、若手研究(B)、代表者: 中谷惣

課題番号: 17K13558

研究題目: 中世イタリアにおける「市井の金貸し」と都市当局

研究経費: 2018年度 直接経費 110,000円 間接経費 330,000円

2019年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本研究は、イタリア中世都市における金銭貸付の世界を、「市井の金貸し」と都市当局の活動に注目して明らかにするものである

る。イタリア都市ルッカに伝来する公証人契約や裁判記録を分析することで、質屋の外側に広がる一般市民の公証人を介した金銭貸付、都市法廷による貸付取引の保証、都市執政府による金銭貸付への政策を検討し、質屋主導の私的な世界とは異なる、一般市民や都市当局が参画する金銭貸付の世界を明らかにし、新たな都市社会像を提示する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

イタリア学会・事務局長, 2018年4月～現在に至る

関西比較中世都市研究会・幹事, 2009年4月～現在に至る

6. 石田 真衣 助教

1984年生。2017年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（西洋史学専門分野）単位取得退学。博士（文学）（大阪大学、2018年）。日本学術振興会特別研究員、神戸学院大学ほか非常勤講師を経て2019年4月より現職。専攻：西洋史学／ヘレニズム史

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

石田真衣「ヘレニズム文化を読み解くーパピルスと碑文を手がかりにー」第102回京都ギリシア・ローマ美術館の集い, 京都ギリシア・ローマ美術館, 2019/10

石田真衣「プトレマイオス朝エジプトにおける嘆願書をめぐる社会関係」第17回歴史家協会大会, 歴史家協会, 関西学院大学, 2018/6

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2017年度～2018年度、特別研究員奨励費、代表者:石田真衣

課題番号:17J04256

研究題目:ヘレニズム・ローマ期エジプトにおける嘆願書の通時的研究ー紛争処理の変容と連続性

研究経費:2018年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

本研究は、エジプトから出土した嘆願書を主史料とし、ヘレニズム・ローマ時代の在地社会における紛争処理の実態を考察することによって、エジプト社会の変容プロセスを明らかにすることを目的とするものである。

6-6-2. 2019年度～2022年度、若手研究、代表者:石田真衣

課題番号: 19K13385

研究題目:ヘレニズム期エジプトにおける社会規範の形成と変容—書簡研究を通じて

研究経費:2019年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究は、古代の多文化・多言語社会であるヘレニズム期エジプトにおける書簡を介したコミュニケーションの分析を通じ、これまで看過されてきた社会規範の形成と変化の過程を解明するものである。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-10 考古学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：福永 伸哉、高橋 照彦
助教：上田 直弥

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
23	7	1	0	0	1	0	0

*うち留学生1名、社会人学生1名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	4	1	0	0
2019	7	3	0	1
計	11	4	0	1

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、考古学研究に必要な発掘調査や出土資料分析などにかかわる方法論や技術などといった基礎力について、確実に習得することを重視している。そのために1988年の講座開設以来、毎年欠かさずフィールド調査を行い、成果を学術報告書にまとめる取り組みの継続を第一の目標にしている。そして、フィールド調査をカリキュラムに取り入れた実践的かつ課題追求型の教育を行うとともに、遺跡や博物館を訪ねる臨地研修を実施し、授業の不足を補うようにつとめることも、全般的な教育目標としている。

また、大学院においては、①授業としての修士・博士論文作成演習に加え、投稿論文作成のための個別指導を強化すること、②研究室のプロジェクトにかかわる共同研究への参加を通じて、資料分析の方法を実践的に習得させること、③専門機関の採用情報の入手につとめ、専門職への就職を支援すること、などを目標とした。学部においては、①学部生向けの講義を継続して開講し、専門基礎学力の充実をはかること、②出土資料の整理分析作業を通じて、考古資料の特性や扱い方を実践的に習得させること、③考古学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知して学習意

欲を向上させること、などを目標とした。

2. 研究

研究面では、世界の考古学の研究動向に目を配りながら比較研究を積極的に進め、広い視野で日本考古学の研究に取り組むことを目指している。そして、一人平均で教員が2本、博士後期課程在籍生が1本以上の論文または研究ノート等を公表または投稿すること、さらに博士前期課程在籍生全員が発掘調査報告書などの分担執筆あるいは編集に携わること、に具体的な数値目標を置いている。また、①これまでに調査を行った遺跡の出土遺物を整理して、発掘調査報告書の刊行に向けた準備をすること、②継続のフィールド活動として、発掘調査や測量調査を行うこと、③科学研究費などの外部資金を導入して研究活動を推進すること、なども目標とした。

3. 社会連携

社会連携としては、教育・研究活動を通じた社会との積極的なかかわりを重視しており、地域社会に入って地域の学校・生涯教育活動などにもかかわり、学問と社会とのあるべき関係の追求を目指している。特に、①フィールド調査の成果に関して、発掘成果報告会の開催やHPでの情報発信などを通じて社会への還元を行うこと、②大阪大学埋蔵文化財調査室が行う大学構内の発掘調査および文化財活用業務に協力すること、③考古学研究室所蔵あるいは保管の資料の社会的活用をはかるために、各地の博物館などからの貸出や写真提供、資料熟覧といった依頼に積極的に応じること、④教育委員会などの発掘調査や遺跡整備などで指導ならびに協力を行うこと、⑤地方自治体の出土品整理あるいは自治体史編纂への学術協力を通じて地域の文化行政を支援すること、などを目標にした。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

まず、フィールド調査やその際に出土した資料の整理作業をカリキュラムに取り入れた演習などを継続的に実施した。また、学内での授業を補うために、兵庫県の播磨地域や奈良県、石川県・福井県、大分県・熊本県などへの臨地研修も実施した。大学院生については、授業以外にも個別の論文指導を行っており、そのほかにもプロジェクトにかかわる共同研究の中で実践的な専門技術の教育なども行うことができた。学部生向けには、基礎的な講義を開講しており、授業などを通して、適宜展覧会などの情報提供も行った。就職支援については、随時指導を行いつつ、大学院修了生が文化財行政などにかかわる正規職員などとして就職することができた。

2. 研究

研究では、海外での調査・研究を行いつつも、広い視野で日本考古学の研究を行ってきており、教員・大学院生ともに、論文や報告書の執筆に取り組んだ。院生の投稿論文については、博士後期課程の在籍者は1年に複数本の論文をまとめており、博士前期課程の在籍者でも1人1回程度の学会発表などを行っているため、概ね成果を挙げることができた。また、2018・2019年度には冬に兵庫県宝塚市の八州嶺古墳の測量調査などを行い、新たな調査成果を得た。さらに、奈良国立博物館や鹿児島大学をはじめとする諸機関・関係の諸氏の全面的な協力のもとで、大阪大学文学研究科所蔵の野中古墳出土品（甲冑類）についてのX線CT撮影やその解析作業を進めた。この他にも、教員は科学研究費の助成を受けて、種々の研究を推進した。

3. 社会連携

兵庫県宝塚市の八州嶺古墳の調査において、宝塚市教育委員会と連携しつつ、事業を推進した。また、かつて調査した宝塚市の万籾山古墳の発掘調査成果の情報は、地元の宝塚市においてこれまでの発掘成果の報告会を開催した。このほか、阪大埋蔵文化財調査室の発掘調査や整理の業務にも引き続きの協力を行った。

その一方で、国の重要文化財指定を受けた野中古墳出土品については、奈良国立博物館における展示に出品したのをは

はじめとして、百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産の登録にも合わせて学内でも、大阪大学総合学術博物館において『大阪府の古代・中世の鏡と瓦—百舌鳥・古市古墳群周辺出土品を中心に—』と題する特集展示などを開催し、それに伴ってパンフレットなどの作成も行った。他にも各機関あるいは研究者からの資料の閲覧や写真提供にも積極的に応じている。

さらに、地方自治体に対する学術協力も行っており、考古学研究室として三木市史の編纂業務などにも携わっている。このほか、(公財)生涯学習かめおか財団ガレリアかめおかが主催となった「つながる須恵器職人と私たち—三角窯の再現と千年前のおはなし—」などのプロジェクトにも学術協力をしている。

IV. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

前記の活動などの結果、学部生・大学院生とも実践的な技術の習得に効果をあげている。また、大学院修了生では、専門機関での採用において、正規職員を含む就職の実績を残している。また、学部生に対しても、考古学の基礎知識の充実に向けた講義などにより、一定の成果を得た。このように、所期の目標は十分に達成することができた。

2. 研究

教員・大学院生ともに、論文などの執筆においておおむね数値目標を達成できた。博士後期課程の学生が少なくなったこともあり、論文数や口頭発表などの総数は少なくなったものの、人数あたりの本数としては例年以上に多い結果となった。また、フィールド調査の実施、既往発掘調査の出土遺物の整理なども、予定通りに行うことができた。このほか、クラウドファンディング事業による資金をもとにしつつ、所蔵の野中古墳出土品についての X 線 CT 撮影などによる研究活動も推進した。当該年度の目標は十二分に達成できたものと評価できる。

3. 社会連携

前記のような諸活動を行っており、とりわけこれまで宝塚市内の万籟山古墳の発掘調査を引き継ぐ形で、新たなフィールドとして隣接する八州嶺古墳についても、地元教育委員会との連携をしながら調査を始めた。それらの成果についても講演会などを通して地域へ還元する成果を上げることができた。その他も、奈良国立博物館などと連携を取りながら、世界遺産登録などに対応する形で、相互貸借事業を推進するとともに、阪大総合学術博物館での野中古墳出土品の展示を行うなど、社会連携の面において非常に充実した成果を出すことができた。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	0	0	0
2019	1	0	1
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

2018年度

なし

2019年度

【課程博士】

木村理「古墳時代の政治権力と埴輪生産」2020/3

主査：福永伸哉教授、副査：高橋照彦教授、市大樹准教授

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	4(2)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	5(2)
2019	2(0)	0(0)	0(0)	0(0)	9(0)	11(0)
計	6(2)	0(0)	0(0)	0(0)	10(0)	16(2)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	1	2	7	2	1	13
2019	0	1	4	2	0	7
計	1	3	11	4	1	20

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

木村理「古墳時代中期における朝顔形埴輪の基礎的研究」『埴輪論叢』第8号, pp.11-30, 査読無, 2018/6/16

木村理「古墳時代後期大和における蓋形埴輪の生産体制」『埴輪論叢』第8号, pp.173-183, 査読無, 2018/6/16

木村理「古墳時代中期における古市古墳群出土埴輪の系統と生産」『考古学研究』第65巻第1号, pp.55-76, 査読有, 2018/6/30

木村理「百舌鳥古墳群における埴輪生産の展開—竈窯焼成導入以降を中心として—」『古代学研究』第220号, pp.13-29, 査読有, 2019/3/16

木村理「埴輪にみられる技術系統と労働力動員に関する予察—古墳時代中期後葉を対象に—」『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』, pp.15-22, 査読無, 2019/3/31

【2019年度】

〔博士前期〕

飯塚信幸「緑釉陶器にみる外来土器生産技術の受容過程—西山1号窯出土資料を対象に—」『撰開期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』, pp.199-214, 査読無, 2020/3/31

谷本峻也「中世前半期における東播系須恵器碗の分布—兵庫県中南部地域を対象として—」『大阪大学・関西大学・京都

- 府立大学・明治大学 4 大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』, pp.36-38, 査読無, 2020/3/31
- 谷本峻也「西山 1 号窯出土鉢の型式学的再検討」『撰関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に一』, pp.229-244, 査読無, 2020/3/31
- 西浦熙「生駒山西麓産土器の搬出様相-弥生時代後期を中心に-」『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学 4 大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』, pp.11-16, 査読無, 2020/3/31
- 西浦熙「篠窯跡群における須恵器供膳具の変遷-西山 1 号窯の位置づけを中心に-」『撰関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に一』, pp.215-228, 査読無, 2020/3/31
- 野島悠之「西山 1 号窯出土遺物の色調と硬度に関する基礎的分析」『撰関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に一』, pp.179-198, 査読無, 2020/3/31
- 樋口太地「西山 1—1 号窯における窯詰め復元と生産量の検討」『撰関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に一』 pp.293-302, 査読無, 2020/3/31
- 渡邊都季哉「西山 1—2 号窯の窯内出土瓦と窯内構造」『撰関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に一』, pp.303-314, 査読無, 2020/3/31
- [博士後期]
- 木村理「埴輪生産からみた馬見古墳群と畿内大型古墳群の特質」『埴輪論叢』第 9 号, pp.1-15, 査読無, 2019/6/1
- 木村理「埴輪生産の変遷と諸段階—中期後葉の再検討を中心として—」『待兼山論叢』第 53 号, pp.61-87, 査読無, 2019/12/25
- 木村理「篠窯跡群における瓦生産の展開—西山 1 号窯出土の平瓦を中心に—」『撰関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に一』, pp.261-280, 査読無, 2020/3/31

(2)口頭発表

【2018 年度】

[学部]

- 樋口太地「古墳出現期における鉄斧の地域性とその背景」, 若き考古学徒、論壇デビュー 6th チャレンジ, 大阪府立弥生文化博物館, 2019/3/2
- 渡邊都季哉「紡錘車形滑石製品の展開とその画期」, 若き考古学徒、論壇デビュー 6th チャレンジ, 大阪府立弥生文化博物館, 2019/3/16
- [博士前期]
- 平井洸史「西山 1 号窯出土軒瓦の検討」, 第 157 回歴史土器研究会例会（「日本古代～中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究」研究会）, 大阪大学, 2018/9/29
- 平井洸史"Being an Archive Volunteer", Annual Report on the Archive Volunteer, UNHCR 本部, 2018/8/30
- 平井洸史「考古資料×アーカイブ」, 海外アーカイブ・ボランティアの会 2018 年度活動報告会, 株式会社カネカ本社, 2018/11/26
- 飯塚信幸「西山 1 号窯出土緑釉陶器類の検討」, 第 157 回歴史土器研究会例会（「日本古代～中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究」研究会）, 大阪大学, 2018/9/29
- 谷本峻也「西山 1 号窯出土須恵器鉢の検討」, 第 157 回歴史土器研究会例会（「日本古代～中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究」研究会）, 大阪大学, 2018/9/29
- 西浦熙「生駒山西麓産土器関連文献の整理」, 第 14 回土器移動検討会, 大阪府立弥生文化博物館, 2018/8/26
- 西浦熙「西山 1 号窯出土須恵器供膳具類の検討」, 第 157 回歴史土器研究会例会（「日本古代～中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究」研究会）, 大阪大学, 2018/9/29
- [博士後期]
- 木村理「古墳時代中期における馬見古墳群形成過程と埴輪生産の展開」, 大阪歴史学会考古部会 9 月例会, 阿倍野市民学習センター, 2018/9/22

木村理「篠窯跡群・西山1号窯の調査と出土資料」, 第157回歴史土器研究会例会(「日本古代～中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究」研究会), 大阪大学, 2018/9/29

木村理「埴輪にみられる技術系統と労働力動員に関する予察—古墳時代中期後葉を対象に—」, 大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学 4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学, 2019/1/6

木村理「出土埴輪からみた地域経営の展開—古墳時代中期における近畿北部地域を中心に—」, 考古学研究会関西例会, 神戸市勤労会館, 2019/3/23

【2019年度】

[学部生]

岩崎郁実「大阪湾岸における古墳時代中期土器製塩の展開と集団の諸相」, 若き考古学徒、論壇デビュー 7th チャレンジ, 大阪府立弥生文化博物館, 2020/1/25

上村緑「古墳時代後期の埋葬施設構造における地域性について—石室と石棺の関係に着目して—」, 若き考古学徒、論壇デビュー 7th チャレンジ, 大阪府立弥生文化博物館, 2020/2/29 (※コロナ対応につき中止)

[博士前期]

谷本峻也「中世前半期における東播系須恵器碗の分布—兵庫県中南部地域を対象として—」, 2019年度大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学 5大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学豊中キャンパス文法経本館大会議室, 2020/1/11

西浦熙(荒田敏介・桐井理揮・相馬勇介と連名)「生駒山西麓産土器の研究状況」, 『土器生産技術は、いかに共有化され、維持・伝達されていたのか』第4回研究会, 大阪府立弥生文化博物館, 2019/6/8

西浦熙「生駒山西麓産土器の搬出様相—弥生時代後期を中心に—」, 2019年度大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学 4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学豊中キャンパス文法経本館大会議室, 2020/1/11

[博士後期]

木村理「儀仗鏃からみた百舌鳥・古市古墳群の器物生産」, 古代学研究会 11月例会, アネックスパル法円坂, 2019/11/16

木村理・飯塚信幸・谷本峻也・西浦熙・野島悠之・樋口太地・渡邊都季哉「考古資料における理科学分析導入と実践の展望(ポスター発表)」, 第二回文理融合シンポジウム量子ビームで歴史を探る—加速器が紡ぐ文理融合の地平—, 大阪大学中之島センター講義室 703, 2019/12/26

(3)その他(書評・翻訳など)

【2018年度】

[博士前期]

飯塚信幸 2019「第2章 宝塚市万籟山古墳の調査成果 1. 墳丘の現状と測量調査の成果」『宝塚市万籟山古墳第1次・第2次調査概報』(『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』所収), pp.181-182, 2019/3/31

飯塚信幸 2019「第2章 宝塚市万籟山古墳の調査成果 2—(3)前方部の調査」『宝塚市万籟山古墳第1次・第2次調査概報』(『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』所収), pp.186-188, 2019/3/31

飯塚信幸 2019「緑釉陶器・緑釉陶器素地供膳具」『古代日本の手工業生産をめぐる諸問題』, pp.89-91, 2019/3/31

谷本峻也 2019「第3章 宝塚市万籟山古墳の出土遺物」『宝塚市万籟山古墳第1次・第2次調査概報』(『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』所収), pp.189-190, 2019/3/31

谷本峻也 2019「宝塚市八州嶺古墳の採集遺物 2. 採集遺物」『宝塚市万籟山古墳第1次・第2次調査概報』(『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』所収), pp.192-193, 2019/3/31

谷本峻也 2019「須恵器鉢」『古代日本の手工業生産をめぐる諸問題』, pp.98-107, 2019/3/31

西浦熙 2019「第5章 川西市小戸遺跡の出土遺物 3. 出土土器」『宝塚市万籟山古墳第1次・第2次調査概報』(『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』所収), pp.211-215, 2019/3/31

西浦熙 2019「第1章 調査経過 1. 周辺の遺跡」『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研

- 究展開』(『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』所収), pp.171-174, 2019/3/31
- 西浦 熙 2019「第5章 川西市小戸遺跡の出土遺物 4-(2) 小戸遺跡出土土器の位置づけ」『宝塚市万籟山古墳第1次・第2次調査概報』(『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』所収), pp.216, 2019/3/31
- 西浦 熙 2019「遺物の概要」『古代日本の手工業生産をめぐる諸問題』, pp.65-78, 2019/3/31
- 西浦 熙 2019「須恵器供膳具」『古代日本の手工業生産をめぐる諸問題』, pp.92-96, 2019/3/31
- 平井洸史・西浦 熙 2019「第2章 宝塚市万籟山古墳の調査成果 2-(2) 後円部の調査」『宝塚市万籟山古墳第1次・第2次調査概報』(『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』所収), pp.182-186, 2019/3/31
- 平井洸史 2019「軒瓦」『古代日本の手工業生産をめぐる諸問題』, pp.107-110, 2019/3/31
〔博士後期〕
- 木村 理 2019「第5章 川西市小戸遺跡の出土遺物 1. 遺跡の概要」『宝塚市万籟山古墳第1次・第2次調査概報』(『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』所収), pp.195-196, 2019/3/31
- 木村 理 2019「第5章 川西市小戸遺跡の出土遺物 2. 出土埴輪」『宝塚市万籟山古墳第1次・第2次調査概報』(『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』所収), pp.196-210, 2019/3/31
- 木村 理 2019「第5章 川西市小戸遺跡の出土遺物 4-(1) 小戸遺跡出土埴輪の意義」『宝塚市万籟山古墳第1次・第2次調査概報』(『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』所収), pp.215-216, 2019/3/31
- 木村 理 2019「整理の方針と方法」『古代日本の手工業生産をめぐる諸問題』, pp.61-64, 2019/3/31
- 木村 理 2019「平瓦」『古代日本の手工業生産をめぐる諸問題』, pp.112-129, 2019/3/31
- 木村 理 2019「西山1号窯操業以前・以後の遺物」『古代日本の手工業生産をめぐる諸問題』, pp.134-136, 2019/3/31
- 【2019年度】
- 〔博士前期〕
- 飯塚信幸 2019「伝西琳寺出土品」『大阪府の古代・中世の鏡と瓦一百舌鳥・古市古墳群周辺出土品を中心に— 展示リーフレット』, p.10, 2019/8/8
- 飯塚信幸 2019「緑釉陶器・緑釉陶器供膳具」『摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』, pp.32-35, 2020/3/31
- 飯塚信幸 2019「窯壁」『摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』, pp.82-83, 2020/3/31
- 谷本峻也 2019「鉢」『摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』, pp.41-51, 2020/3/31
- 谷本峻也・高橋照彦 2019「伝開口神社付近出土品」『大阪府の古代・中世の鏡と瓦一百舌鳥・古市古墳群周辺出土品を中心に— 展示リーフレット』, pp.2-3, 2019/8/8
- 西浦 熙 2019「伝河内国分寺出土品」『大阪府の古代・中世の鏡と瓦一百舌鳥・古市古墳群周辺出土品を中心に— 展示リーフレット』, p.9, 2019/8/8
- 西浦 熙 2019「遺物の概要」『摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』, pp.9-22, 2020/3/31
- 西浦 熙 2019「須恵器供膳具」『摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』, pp.35-40, 2020/3/31
- 西浦 熙 2019「周辺での表面採集遺物」『摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』, pp.87-91, 2020/3/31
- 野島悠之 2019「伝片山廃寺出土品」『大阪府の古代・中世の鏡と瓦一百舌鳥・古市古墳群周辺出土品を中心に— 展示リーフレット』, p.8, 2019/8/8
- 野島悠之 2019「壺」『摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』, pp.40-41, 2020/3/31
- 樋口太地 2019「伝高井田廃寺出土品」『大阪府の古代・中世の鏡と瓦一百舌鳥・古市古墳群周辺出土品を中心に— 展示

- リーフレット』, p.5, 2019/8/8
- 樋口太地 2019「ブロック類」『摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』, pp.78-81, 2020/3/31
- 渡邊都季哉 2019「伝通法寺跡出土品」『大阪府の古代・中世の鏡と瓦—百舌鳥・古市古墳群周辺出土品を中心に— 展示リーフレット』, p.11, 2019/8/8
- 渡邊都季哉 2019「トチン／色見・転用焼台」『摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』, pp.83-84, 2020/3/31
〔博士後期〕
- 木村理 2019「整理の方針と方法」『摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』, pp.5-8, 2020/3/31
- 木村理 2019「平瓦」『摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』, pp.57-77, 2020/3/31
- 木村理・唐麗薇 2019「伝善正寺跡出土品」『大阪府の古代・中世の鏡と瓦—百舌鳥・古市古墳群周辺出土品を中心に— 展示リーフレット』, pp.6-7, 2019/8/8
- 木村理・西浦熙 2019「西山1号窯操業以前・以後の遺物」『摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』, pp.84-87, 2020/3/31
- 唐麗薇 2019「研究の経緯と概要／研究经过及概要（翻訳）」『対照実験を主軸とした東アジア鑄造技術史解明のための実験考古学的研究』, pp.1-3, 2020/3/31
- 唐麗薇 2019「镂空青銅器の製作技法解明のための対照実験／以解明镂空青铜器制作技法为目的的对照实验（翻訳）」『対照実験を主軸とした東アジア鑄造技術史解明のための実験考古学的研究』, pp.6-13, 2020/3/31
- 唐麗薇 2019「人工刻線の機能解明のための対照実験／以解明人工刻线功能为目的的对照实验（翻訳）」『対照実験を主軸とした東アジア鑄造技術史解明のための実験考古学的研究』, pp.14-18, 2020/3/31
- 唐麗薇 2019「X線CTスキャナによる鑄造実験試料の内部構造調査／利用X光CT扫描技术进行的铸造实验样品内部结构分析（翻訳）」『対照実験を主軸とした東アジア鑄造技術史解明のための実験考古学的研究』, pp.19-21, 2020/3/31
- 唐麗薇 2019「失鉛法」をめぐる諸問題／“失鉛法”相关问题（翻訳）」『対照実験を主軸とした東アジア鑄造技術史解明のための実験考古学的研究』, pp.22-27, 2020/3/31
- 唐麗薇 2019「土製鑄型の機能解明を目的とした実験考古学的研究序説／以解明泥范功能为目的的实验考古学研究序论（翻訳）」『対照実験を主軸とした東アジア鑄造技術史解明のための実験考古学的研究』, pp.28-33, 2020/3/31
- 唐麗薇 2019「レプリカ法による東周時代镂空状青銅器紋様の実験鑄造試料の比較検討／基于复制法的东周时期镂空青铜器纹饰实验铸造样品的对比研究（翻訳）」『対照実験を主軸とした東アジア鑄造技術史解明のための実験考古学的研究』, pp.34-37, 2020/3/31

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計1名)

2019年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2019年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

平井 洸史 博士課程前期, 大阪府立近つ飛鳥博物館, 学芸員, 2019/4
肥田 翔子 博士課程前期, 堺市博物館, 学芸員, 2019/4
上田 直弥 博士課程後期, 大阪大学大学院文学研究科, 助教, 2018/4
肥田 翔子 博士課程前期, 大阪府立近つ飛鳥博物館, 学芸員, 2018/4
内藤 元太 博士課程前期, 奈良県立橿原考古学研究所, 技師, 2018/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2018年度: 0名 2019年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度: 0名 2019年度: 0名

9. 刊行物

【2018年度】

大阪大学大学院文学研究科考古学研究室『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』, 2019/3/31

大阪大学文学部考古学研究室 2018年度学部学生自主研究グループ『遺跡の「解説看板」から探る情報発信の現状と展望 —「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録に向けて—』平成30年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書, 2019/3/31

大阪大学大学院文学研究科考古学研究室『古代日本の手工業生産をめぐる諸問題』, 2019/3/31

【2019年度】

大阪大学大学院文学研究科考古学研究室『大阪府の古代・中世の鏡と瓦—百舌鳥・古市古墳群周辺出土品を中心に—』奈良国立博物館・大阪大学考古資料相互活用促進事業特集小展示パンフレット, 2019/8/8

大阪大学大学院文学研究科考古学研究室『世界遺産! 百舌鳥・古市古墳群と野中古墳の出土品』展示パンフレット, 2019/8/8

大阪大学大学院文学研究科考古学研究室『撰関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究』, 2020/3/31

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「万籟山古墳発掘調査成果報告講演会 2018 (主催: 大阪大学考古学研究室・宝塚市教育委員会)」, 2018/10/14

「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」の実施, 2019/1/6

「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」の実施, 2020/1/6

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

「日本古代～中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究」研究会 (第3回), 2018/8/4

「日本古代～中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究」研究会 (第4回), 2018/9/29

「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」, 2019/1/6
「平安時代の物資流通に関する多角的基礎研究」研究会（第1回）, 2019/8/4
「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」, 2020/1/6
「考古学・古代史合同研究会」, 2020/1/15

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 福永 伸哉 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学博士（大阪大学、2005年）。大阪大学埋蔵文化財調査室助手、大阪大学文学部助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授をへて、2005年より現職。専攻：日本考古学，比較考古学

1-1. 論文

福永伸哉 「国の成り立ちと史跡城の山古墳」『史跡城の山古墳国指定記念講演会記録集』(新潟県胎内市教育委員会), pp. 20-39, 2020/3
福永伸哉 「百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録」『月刊文化財』(第一法規), 675, pp. 11-15, 2019/12
福永伸哉 「邪馬台国期における畿内の地域関係」『つどい』(豊中歴史同好会), 381, pp. 1-10, 2019/10
福永伸哉 「三角縁神獣鏡の伝世現象と出土古墳の性格」『古墳と国家形成期の諸問題－白石太一郎先生傘寿記念論文集』(山川出版社), pp. 384-388, 2019/10
福永伸哉 「如意谷銅鐸の評価をめぐる」『歴史・民俗・考古学論攷』(郵政考古学会), III, pp. 419-430, 2019/6
福永伸哉 「近畿弥生社会における銅鐸の役割」『季刊考古学別冊』28, 雄山閣, pp. 65-74, 2019/5
福永伸哉 「日本の古墳と世界の墳丘墓」『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』大阪大学文学研究科, pp. 9-18, 2019/3
Fukunaga, Shin'ya, "Mounded Tombs of the Kofun Period: Monuments of Administration and Expressions of Power Relationships", *Burial Mounds in Europe and Japan; Comparative and Contextual Perspectives*, Archaeopress, pp. 195-204, 2018/11
福永伸哉 「邪馬台国と纏向遺跡・箸墓古墳」『畿内の古代学』II, 雄山閣, pp. 2-15, 2018/9

1-2. 著書

松木武彦, 福永伸哉, 佐々木憲一他(共編著) 『日本の古墳はなぜ巨大なのかー古代モニュメントの比較考古学ー』吉川弘文館, pp. 234-253, 2020/3
石野博信, 来村多加史, 福永伸哉他(共著) 『魏都・洛陽から倭都・邪馬台国へ』雄山閣, pp. 133-148, 2019/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

福永伸哉 「大阪初の世界遺産、百舌鳥・古市古墳群」『三洋化成ニュース』No.517, p.12, 2019/11

1-4. 口頭発表

福永伸哉 「王陵考古学の比較研究－日本の王陵を中心に」忠南大学校百済研究所特別講演会, 忠南大学校百済研究所, 大韓民国忠南大学校, 2019/11
福永伸哉 「国の成り立ちと史跡城の山古墳」城の山古墳国史跡指定記念講演会, 新潟県胎内市教育委員会, 胎内市産業文化会館, 2019/11
福永伸哉 「ヤマト政権の国づくりと雪野山古墳」琵琶湖に君臨した王「雪野山古墳記念講演会, 東近江市, 明治大学アカデミーコモン, 2019/10
福永伸哉 「百舌鳥・古市古墳群と古墳時代」堺市博物館特別展「百舌鳥古墳群－巨大墓の時代－」講演会, 堺市博物館, 堺市博物館, 2019/8

福永伸哉「鏡研究の最前線—ヤマト政権の成り立ちを探る—」広島県立歴史博物館開館 30 周年記念講演会, 広島県立歴史博物館, 広島県立歴史博物館, 2019/6

福永伸哉「兵庫県南あわじ市松帆銅鐸の調査成果について」日本考古学協会第 85 回総会, 日本考古学協会, 駒澤大学, 2019/5

福永伸哉「日本列島の古墳」歴博国際シンポジウム:日本の古墳はなぜ巨大なのか—巨大モニュメントの比較考古学—, 国立歴史民俗博物館, 明治大学アカデミーコモン, 2018/11

福永伸哉「邪馬台国期における畿内の地域関係」豊中歴史同好会創立 30 周年記念シンポジウム, 豊中歴史同好会・豊中市教育委員会, 豊中市立文化芸術センター, 2018/11

福永伸哉「三角縁神獣鏡と雪野山古墳」観峰館秋季特別企画展記念講演会:雪野山古墳の全貌, 東近江市教育委員会, 観峰館, 2018/9

福永伸哉「文化財保護法の改正と遺跡の保存活用」日本考古学協会第 84 回総会, 日本考古学協会, 明治大学駿河台キャンパス, 2018/5

中久保辰夫, 高橋照彦, 福永伸哉「猪名川流域における前期古墳の築造動態—万籟山古墳発掘調査による新知見を基礎として—」日本考古学協会第 84 回総会, 日本考古学協会, 明治大学駿河台キャンパス, 2018/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

福永伸哉 大阪大学総長顕彰(2015 年度), 大阪大学, 2015/6

福永伸哉 第 19 回濱田青陵賞, 岸和田市, 朝日新聞社, 2006/9

福永伸哉 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2003/12

福永伸哉 第6回雄山閣考古学特別賞(編著書に対して), 雄山閣出版, 1997/9

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2015 年度～2018 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:福永伸哉

課題番号:15H01900

研究題目:日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開

研究経費:2018 年度 直接経費 4,200,000 円 間接経費 1,260,000 円

研究の目的:

日本発の「世界墳丘墓考古学」を世界考古学の主要テーマとして確立し、古墳時代研究の新たな地平を開拓するという構想の下に、①人類史における墳丘墓築造の多様な歴史的意義の解明、②世界初の墳丘墓三次元データベースを開発、③日本考古学の独創的方法である「首長古墳系譜分析」の良好なフィールド調査、④世界の墳丘墓遺跡を人類の文化遺産活用に供するための確かな理念と方策の探求・提言、の4点を柱として実施する国際共同研究。

1-6-2. 2019 年度～2021 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:福永伸哉

課題番号:19H01339

研究題目:畿内の地域間関係の解明に基づくヤマト政権成立史の新理解

研究経費:2019 年度 直接経費 4,900,000 円 間接経費 1,470,000 円

研究の目的:

本研究の目的は以下の二つ。第一は、弥生後期～古墳前期の畿内内部の地域間関係を解明し、諸地域間の親疎関係の変動を見据えたダイナミックなヤマト政権成立過程と政権構造の新理解を提起すること。第二は、該期の畿内の墳丘墓・古墳・集落のネットワークを、地形及び三次元位置情報の観点から分析し、ネットワーク変動とヤマト政権成立史の相関関係を解明するとともに、これを近年世界的に活発になっている「景観考古学」の日本における研究成果として国際的に発信すること。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

公益財団法人三菱財団人文科学選考委員会・委員, 2019年10月～現在に至る
文化庁技術審査会・委員, 2019年7月～2019年7月
百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産学術委員会・委員, 2019年4月～現在に至る
一般財団法人大阪市文化財協会・理事, 2019年4月～現在に至る
肝付町塚崎古墳群保存活用検討委員会・委員, 2017年3月～現在に至る
三木市史通史編専門委員会・委員, 2016年12月～現在に至る
藤井寺市史跡古市古墳群整備検討委員会・委員, 2016年8月～現在に至る
羽曳野市史跡古市古墳群整備検討委員会・委員, 2016年8月～現在に至る
東串良町唐仁古墳群保存活用検討委員会・委員, 2016年6月～現在に至る
南あわじ市松帆銅鐸調査研究委員会・委員, 2016年5月～現在に至る
国立歴史民俗博物館展示プロジェクト外委員会・委員, 2016年4月～2019年3月
文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査検討委員会・委員, 2015年4月～現在に至る
文化庁文化審議会文化財分科会第1専門調査会・委員, 2015年3月～現在に至る
文化庁文化審議会文化財分科会第3専門調査会・委員, 2015年3月～現在に至る
日本学術会議・会員, 2014年10月～現在に至る
高槻市史跡整備指導検討会・委員, 2014年4月～現在に至る
大垣市昼飯大塚古墳保存活用委員会・委員, 2013年10月～現在に至る
大阪大学接合科学研究所・共同研究員, 2013年7月～現在に至る
兵庫県立考古博物館運営委員会・委員, 2013年3月～現在に至る
桜井市纏向学研究センター・共同研究員, 2012年11月～現在に至る
国立歴史民俗博物館外部評価委員会・委員, 2012年7月～現在に至る
百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議・委員, 2012年7月～現在に至る
百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録有識者会議・委員, 2012年7月～2019年7月
桜井市纏向遺跡調査委員会・委員, 2011年10月～現在に至る
公益財団法人大阪市博物館協会・理事, 2011年4月～2019年3月
豊中市文化財審議委員会・委員, 2010年4月～現在に至る
考古学研究会・常任委員, 2009年4月～現在に至る
杵築市市内遺跡にかかる調査指導委員会・委員, 2008年5月～現在に至る
考古調査士資格認定機構・資格審査専門委員, 2007年12月～現在に至る
川西市文化財審議委員会・委員, 2006年6月～現在に至る
大阪府立近つ飛鳥博物館運営協議会・委員, 2006年6月～現在に至る
考古学研究会関西例会・世話人, 1980年4月～現在に至る

2. 高橋 照彦 教授

1966年生。1992年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士（文学）（京都大学、2014年）。国立歴史民俗博物館考古研究部助手、奈良国立博物館学芸課研究員を経て、2002年大阪大学大学院文学研究科助教授、2007年同准教授、2015年より現職。専攻：日本考古学、東アジア考古学

2-1. 論文

- 高橋照彦「日本古代の窯業生産—土器・陶磁器と瓦埴から探る歴史像—」『撰関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に一』, 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp. 391-414, 2020/3
- 高橋照彦「洛北・本山官山遺跡の基礎的検討—石作窯成立前夜の様相—」『平安期緑釉陶器・緑釉瓦生産の多分野協働型研究』, 公益財団法人古代学協会, pp. 95-112, 2020/3
- 高橋照彦「賤機山古墳の被葬者像と駿河の地域支配」『季刊考古学・別冊』30, 雄山閣, pp. 110-124, 2019/10
- 高橋照彦「三彩・緑釉埴再論」『古代寺院史の研究』, 思文閣出版, pp. 37-54, 2019/7
- 高橋照彦「日本列島における古墳築造の終焉とその背景」『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 33-44, 2019/3
- 高橋照彦「後期前方後円墳の諸相とその背景」『境界の考古学』, 日本考古学協会 2018 年度静岡大会実行委員会, pp. 337-348, 2018/10
- 高橋照彦「東北地方北部出土の緑釉陶器とその歴史的背景」『尾駸の駒・牧の背景を探る』(六ヶ所村「尾駸の牧」歴史研究会), 六一書房, pp. 63-84, 2018/8

2-2. 著書

- 高橋照彦『撰関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に一』, 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, 414p., pp. 1-4, pp. 245-260, 2020/3
- 谷川章雄, 高橋照彦他『日本考古学・最前線』, 雄山閣, pp. 84-93, 2018/11

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 谷本峻也, 高橋照彦「(伝開口神社付近出土品)花禽双鸞八花鏡」『大阪府の古代・中世の鏡と瓦—百舌鳥・古市古墳群周辺出土品を中心に—』, 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp. 2-3, 2019/8
- 高橋照彦「近江俊秀著『入門 歴史時代の考古学』」『考古学研究』65-4, 考古学研究会, p. 90, 2019/3

2-4. 口頭発表

- 高橋照彦「摂津の古代寺院をめぐる—猪名川流域の寺院造営氏族—」豊中市市民講演会, 豊中市立蜷池公民館・豊中歴史同好会, 豊中市立蜷池公民館, 2019/11
- 高橋照彦「平安京周辺における緑釉陶器生産—石作窯の特質をめぐる—」シンポジウム「京の翠とわざの粹—緑釉陶器と緑釉瓦」, 京都府・京都文化博物館, 京都文化博物館, 2019/9
- 高橋照彦「須恵器生産と古代氏族—泉北丘陵窯跡群の管掌者の変転—」和泉市いずみの国歴史館特別展記念講演会, 和泉市いずみの国歴史館, 和泉市いずみの国歴史館, 2019/8
- 高橋照彦「日本古代銭貨をめぐる諸問題—研究の現状と課題—」第9回(山口大学)考古学研究会, 山口大学考古学研究室, 山口大学, 2019/6
- 高橋照彦「正倉院宝物と日本古代の文化」豊中茶華道連盟講演会, 豊中茶華道連盟, 千里阪急ホテル, 2019/1
- 高橋照彦「宝塚市周辺の後期・終末期古墳」万籟山古墳発掘調査成果報告講演会, 宝塚市教育委員会・大阪大学考古学研究室, 宝塚市立東公民館, 2018/10 (『万籟山古墳発掘調査成果報告講演会資料集』, pp. 15-20, 2018/10)
- 高橋照彦「後期前方後円墳の諸相とその背景」一般社団法人日本考古学協会 2018 年度大会, 日本考古学協会, 静岡大学, 2018/10 (『一般社団法人日本考古学協会 2018 年度大会発表要旨集』, pp. 46-47, 2018/10)
- 齋藤努, 高橋照彦「会昌開元の鉛同位体比分析」日本文化財科学会第35回大会, 日本文化財科学会, 奈良女子大学, 2018/7 (『日本文化財科学会第35回大会研究発表要旨集』, pp. 28-29, 2018/7)
- 中久保辰夫, 福永伸哉, 高橋照彦他「猪名川流域における前期古墳の築造動態—万籟山古墳発掘調査による新知見を基礎として—」一般社団法人日本考古学協会第84回総会, 日本考古学協会, 明治大学, 2018/5 (『一般社団法人日本考古学協会 2018 年度総会発表要旨集』, pp. 48-49, 2018/5)

木立雅朗, 石井清司, 高橋照彦他「京都府亀岡市篠窯跡群「小型三角窯」の復原と焼成実験」一般社団法人日本考古学協会第84回総会研究発表要旨, 日本考古学協会, 明治大学, 2018/5 (『一般社団法人日本考古学協会第84回総会研究発表要旨』, pp. 252-253, 2018/5)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2016年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:高橋照彦

課題番号:16K03155

研究題目:日本古代～中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究

研究経費:2018年度 直接経費 616,290円 間接経費 330,000円

2019年度 直接経費 483,710円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究は、瓦や須恵器といった個別の手工業生産部門を統合した研究を目指し、瓦陶兼業窯という側面を通して、古代から中世への動態を多角的に明らかにすることを目的とした。とりわけ、注目の乏しい撰関期前後を重点的に解明することや、考古学にとどまらず、自然科学的手法を取り入れつつ、文献史学も含めた研究整理を進めた。

2-6-2. 2019年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:高橋照彦

課題番号:19K01095

研究題目:平安時代の物資流通に関する多角的基礎研究—須恵器・施釉陶器・中国陶磁を中心に—

研究経費:2019年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

本研究は、日本の古代から中世への変容過程の解明を目指し、平安時代の考古学の側面から追究する。とりわけ物資流通の解明に重点目標を置き、考古資料として残りやすい国産の須恵器や施釉陶器、中国産の陶磁器といった焼物を中心としつつも、焼物以外の物資も視野に納めて基礎研究を深める。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪府立近つ飛鳥博物館等指定管理者評価委員会・委員, 2017年4月～現在に至る

豊中市今西氏屋敷史跡整備委員会・委員, 2016年4月～現在に至る

猪名川町多田銀銅山遺跡史跡整備委員会・委員, 2016年4月～現在に至る

東洋陶磁学会・常任委員, 2009年5月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2005年11月～現在に至る

3. 上田直弥 助教

1990年生。2018年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(考古学専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、2018年)。

2018年4月より現職。専攻:考古学

3-1. 論文

上田直弥「小型三角窯の型式学的研究」『撰関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』(大阪大

学大学院文学研究科考古学研究室), 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp. 315-334, 2020/3

上田直弥「常陸鏡塚古墳の粘土槨について」『常陸鏡塚 大洗町第3回埋蔵文化財企画展シンポジウム資料集』(大洗町教育委員会), 大洗町教育委員会, pp. 11-20, 2019/12

上田直弥「前期首長墓の系列展開と埋葬施設構造の変遷」『古代学研究』(古代学研究会), 223, 古代学研究会, pp. 15-32, 2019/12

上田直弥「摂津前期古墳の葺石と内部構造」『待兼山論叢』52, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 29-55, 2018/12

Ueda, Naoya, "An Introduction to the Yukinoyama Mounded Tomb"『Burial Mounds in Europe and Japan, Comparative and Contextual Perspectives』Archaeopress, pp. 216-220, 2018/11

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上田直弥「「陵墓限定公開」40周年記念シンポジウム『文化財としての「陵墓」と世界遺産』参加記」『考古学研究』(考古学研究会), 66-4, 考古学研究会, pp. 16-21, 2020/3

上田直弥「書評・岡林孝著作『古墳時代棺槨の構造と系譜』」『考古学研究』(考古学研究会), 66-3, 考古学研究会, pp. 118-120, 2019/12

3-4. 口頭発表

上田直弥「考古学的フィールド調査のサイクルと科学分析—京都府篠塚跡群での調査を例に—」第2回 文理融合シンポジウム 量子ビームで歴史を探る—加速器が紡ぐ文理融合の地平—, 高エネルギー加速器研究機構 物質構造科学研究所、大阪大学核物理研究センター, 大阪大学 中之島センター, 2019/12

上田直弥「前期首長墓の系列展開と埋葬施設構造の変遷」古代学研究会3月例会, 古代学研究会, アネックスパル法円坂, 2019/3

上田直弥「前期古墳研究の方法論—三角縁神獣鏡とその周辺—」研究会『ミュオンによる非破壊分析の可能性 考古学・文化財への応用を考える』, 大阪大学理学研究科, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/11

中久保辰夫, 福永伸哉, 高橋照彦, 上田直弥「猪名川流域における前期古墳の築造動態—万籟山古墳発掘調査による新発見を基礎として—」日本考古学協会第84回(2018年度)総会, 日本考古学協会, 明治大学, 2018/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

考古学研究会・常任委員, 2018年4月～現在に至る

2-11 人文地理学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：堤 研二、佐藤 廉也

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
28	3	3	0	0	0	1	0

*うち留学生4名、社会人学生0名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	8	1	0	1
2019	7	1	0	0
計	15	2	0	1

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、広い視野の中に自己の学習や研究を位置付けられるよう、講義・演習を構成することとし、卒業・修了時までに実社会で要請される基礎的スキルを習得できるよう講義・演習・論文発表などを配置することを目標とした。大学院においては、①能率的な研究の進行にむけて、研究計画の立案から指導すること、②GIS などデジタル処理手法の習得につとめさせ、その応用を推進すること、③TA・RAなどの機会を積極的に利用し、コミュニケーションや指導の能力を養成することなどを目標とした。学部においては、①人文地理学の基礎を、その応用を意識させつつ身につけさせること、②地図学、統計解析などの実習を通じて基礎的手法を習得させること、③卒業論文作成を機会に、企画からプレゼンテーションまで、総合的な能力の養成をはかる、ということなどを目標とした。

2. 研究

教員・大学院生は学会発表において研究成果の公表をおこなうとともに、国内・国外の審査つき学術誌・学術書等への

投稿に努力し、あわせて紀要・報告書の執筆も推進することとし、教員全員が代表者として科学研究費補助金の申請をおこなうだけでなく、他の競争的外部資金の獲得にも努めるようにすることを目標とした。大学院生には、日本学術振興会の特別研究員への応募をすすめるほか、機会があれば、他の研究資金の獲得にも努めさせることとした。また、不断に研究室の設備・備品を点検し、研究環境の維持・改善に努力し、学内外の共同研究に積極的に参加し、研究の視野と可能性を拡大することなども目標とした。

3. 社会連携

研究成果に関する報道機関の取材、執筆依頼等には積極的に協力することとし、教室ならびに個人のHPを充実させ、研究成果や資料の公開に努めることを目標とした。また、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることとし、学会の研究グループ・研究ワークショップでの活動や博物館などの展示企画には積極的に参加し、研究成果の普及を図るよう努力することとした。さらに、放送大学教科書や文部科学省検定教科書を含め、研究成果を社会に還元する書物の刊行を、出版助成金などを得ながら積極的に推進することも目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

講義・演習では、基礎から先端、応用までの手法・スキルの習得を意識した教育をおこなった。大学院生の研究計画・研究報告については、通常の授業時間ではスケジュールや研究テーマの絞込みをはじめ、研究テーマに即した事項を中心にディスカッションを行い、年度の初めと終わりに演習で発表させ、指導するほか、学会発表や論文の執筆に際しても綿密な指導をおこなってきた。また、地域調査のスキルについては実地での経験を重視する教育をおこなった。

2. 研究

教員は、科学研究費での助成研究を続けつつ、研究を継続して実施し、国際学会・国際研究集会での発表をおこない、国内外での地域調査を実施した。また、院生は国内外の学会等における発表を実現した。教員による外部資金による獲得研究費の有効活用のほか、大学院生の日本学術振興会特別研究員への応募も積極的におこなっている。このほか、研究室の設備・備品は定期的に点検し、メンテナンスを実施するとともに、旧式化したものは更新している。学内外の共同研究にも積極的に参加してきている。目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

教室ならびに個人のHPでその公開に努めている。さらに日本地理学会、人文地理学会の代議員・理事など学外の職務にも積極的に応じた。放送大学における新規科目の開講や、文部科学省検定教科書(中学社会科・高校地理)の執筆など、学外の職務にも積極的に応じている。社会連携の目標についても十分に達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。卒業学生・修了大学院生以外の学生たちに関しても、種々の地理学的スキルや思考の基礎に関する授業その他の教育実践を行うことができた。掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・大学院生が学会発表をおこなうという目標はほぼ達成され、論文による成果発表も活発に行うことができた。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	1	0	1
2019	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

小林基

「農産物産地におけるイノベーション過程への進化的アプローチ ―日本におけるブランド化と品種転換の事例から―」

審査委員：佐藤廉也（主査）、堤研二・井本恭子・大呂興平（副査）

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	1(1)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(1)
2019	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	1(1)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(1)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	1	4	0	0	0	5
2019	0	2	0	0	0	2
計	1	6	0	0	0	7

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

佐藤廉也・李宝峰・高橋司「アメリカ国立公文書館（NARA）所蔵の空中写真標定図—GIS を用いたマップ検索システム構築に向けて—」『待兼山論叢<日本学編>』第 52 巻, pp.1-17, 2018/12/25

〔博士後期〕

小林基「日本におけるイチゴの育種・普及プロセスとその産地間差異」『地理学評論』第 91 巻第 5 号, pp.376-394, 2018/9

【2019年度】

なし

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

佐藤廉也・李宝峰・高橋司「アメリカ国立公文書館所蔵の空中写真—標定図の集計による全容把握の試み—」, 人文地理学会大会, 奈良大学, 2018/11/24

〔博士後期〕

小林基「日本のイチゴ産地における品種の開発・普及プロセス」, 経済地理学会関西支部例会, 阪南大学, 2018/4/14

Hajime KOBAYASHI “Acquiring and Maintaining A Regional Advantage in Agriculture: Focusing on Innovation and Shipment Strategy in Japanese Soybean and Strawberry Production Districts”, the 5th Global Conference on Economic Geography, University of Cologne, 2018/7/26

小林基「イノベーションによる農業変化への進化的アプローチの試み」, 日本地理学会 2019 年春季学術大会, 専修大学, 2019/3/20

小林基「イノベーションからみた現代日本の農業地域：ブランド化と品種転換の事例を中心に」, 日本地理学会 2019 年春季学術大会, 専修大学, 2019/3/21

【2019年度】

〔学部生〕

鈴木美佳「日本の都市部におけるシェアサイクル運営の課題」, 日本地理学会 2020 年春季学術大会, 駒澤大学, 2020/3/27
(コロナ対応により学会中止)

〔博士前期〕

李宝峰「ビエンチャンの新中華街における中国系移民」, 日本地理学会 2020 年春季学術大会, 駒澤大学, 2020/3/27 (コロナ対応により学会中止)

〔博士後期〕

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:1名 (計1名)

2019年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部:1名 大学院:0名 (計1名)

2019年度 学部:1名 大学院:0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

小林基、博士後期課程修了、大阪大学大学院文学研究科、助教(常勤)、2019/4

小林基、博士後期課程修了、摂南大学外国語学部、特任講師(常勤)、2020/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2018年度:0名 2019年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度:0名 2019年度:0名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 堤 研二 教授

1960年生。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士(九州大学、1986)・博士(文学)(九州大学、2009)。佐世保工業高等専門学校助手・講師、島根大学法文学部講師・助教授、大阪大学文学研究科助教授・准教授を経て、2009年11月より現職。地域地理科学学会賞(1997)、昭和シェル石油環境研究助成財団環境研究課題賞(2005)、大阪大学教育・研究功績賞(2006)、大阪大学総長顕彰(研究部門)(2015)、大阪府スポーツ少年団功労者表彰(2016)。専攻:人文地理学、とくに社会経済地理学

1-1. 論文

堤研二 「ポストアーバン時代における縁辺地域の持続可能性: 島根県隠岐の島町を事例として」『グローバルビジネス学会 2019 年度発表会予稿集』pp. 1-6, 2019/7

Tsutsumi, Kenji, “Rural-Urban Regional Relationships and Social Scape Networks in Japan at the Post-Urban Era” *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (Marginal Areas Research Group), 12, Marginal Areas Research Group, pp. 19-29, 2019/3

1-2. 著書

堤研二(共訳) 『【翻訳】ポストアーバン都市・地域論: スーパーメガリージョンを考えるために』ウエッジ, 416p., 2019/11

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

堤研二 「隠岐の島町の今と未来について: ポストアーバン、ソサエティ 5.0 の新時代に生き残る」大阪大学人文地理学教室・島根県立隠岐高等学校コラボレーション企画「この町の今と未来を語ろう」, 大阪大学リーディング大学院超域イノベーション博士課程プログラム、共催: 島根県立隠岐高等学校, 隠岐島文化会館, 2019/12

堤研二 「大阪大学・人文地理学教室・隠岐の島調査について」大阪大学人文地理学教室・島根県立隠岐高等学校コラボレーション企画, 大阪大学文学研究科、大阪大学文学研究科人文地理学教室、島根県立隠岐高等学校、MARG(過疎地域研究会)、大阪大学, 2019/10

堤研二 「ポストアーバン時代と西日本危機に対応する大阪の新たなノード: 縁辺地域との関係を事例として」大学を核とした共創: 知識産業時代と共創まちづくり, 大阪大学エリアマネジメント研究会, 大阪大学, 2019/8

堤研二 「ポストアーバン時代における縁辺地域の持続可能性: 島根県隠岐の島町を事例として」グローバルビジネス学会 2019 年度発表会, グローバルビジネス学会, 天草市民ホール, 2019/7

堤研二 「ポストアーバン時代のスーパーメガリージョンと都市-農村関係: 人口メガシュリンクと西日本危機を越えて」スーパーメガリージョンとしての関西におけるインフラ高度化戦略に関するワークショップ, 土木学会関西支部, キャンパスプラザ京都, 2019/6

Tsutsumi, Kenji, “Industrial Modernization, Innovation and Agents: A Case of Tea Industry in Yame District, Fukuoka Prefecture Japan in the Modern Era”, The 1st Workshop on Social Capital and Development Trends of Countryside of Knowledge Society, Marginal Areas Research Group, Alam Puisi Villa, 2019/6

堤研二 「大阪大学 人文地理学教室と社会経済地理学」大阪大学・在阪報道機関関係者との懇談会, 大阪大学, 大阪大学、大阪大学中之島センター, 2019/3

堤研二 「人文地理学とエリアマネジメント」大阪大学 Innovation Bridge グラント「共創まちづくりコンソーシアム」研究発表会, 大阪大学 Innovation Bridge グラント「共創まちづくりコンソーシアム」, 大阪大学、大阪大学中之島センター, 2019/1

堤研二 「5年間の隠岐の島調査」大阪大学人文地理学教室・島根県立隠岐高等学校コラボレーション企画, 大阪大学文学研究科、大阪大学文学研究科人文地理学教室、島根県立隠岐高等学校, 大阪大学、大阪大学会館, 2018/10

堤研二 「人口減少地域社会の持続可能性: 社会経済地理学的視点から」未来共創思考サロン「池田市 研究×まちづくり サロン」キックオフセッション, 大阪大学共創機構 産学共創本部, 大阪大学、大阪大学会館, 2018/7

Tsutsumi, Kenji, “Regional Management of Depopulated and Aged Community in Japan: A Case of Okinoshima Island”, The 5th Global Conference on Economic Geography, The Global Conference on Economic Geography, Cologne University, 2018/7

Tsutsumi, Kenji, “Rural-Urban Regional Relationships and Social Scape Networks in Japan”, The 15th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Marginal Areas Research Group, Daigoji Temple, 2018/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 大阪大学総長顕彰(研究部門), 国立大学法人大阪大学, 2015/7
堤研二 市民スポーツ・レクリエーション指導者表彰, 豊中市民体育振興協議会, 2012/10
堤研二 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 国立大学法人大阪大学, 2006/2
堤研二 昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9
堤研二 地域地理科学会賞, 地域地理科学会, 1997/7

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2014年度～2018年度、基盤研究(A) 一般、代表者:堤研二

課題番号:26244051

研究題目:中山間地域における林業合理化・森林管理・住民生活の為のマネジメント=モデルの構築

研究経費:2018年度 直接経費 3,700,000円 間接経費 1,110,000円

研究の目的:

本研究の目的は、中山間地域における基幹産業である林業の再生と森林環境の維持管理とを結びつけ、林業を支える兼業形態と地域生活機能の持続可能性を高めるための「フォーレストタウン=マネジメント=モデル(FTMM)」を構築する目的でのパイロット研究を行うことにある。具体的には、(1)林業再生のための合理的方策に関するモデル、(2)森林環境保全のための管理モデル、(3)中山間地域における産業・兼業と生活のリーズナブルな持続性を可能にするモデルを設計し、(4)それらを統合的にアレンジして、中山間地域に適用可能な具体的な総体的社会経済モデルとしての“FTMM”のパイロット=モデルを試験的に構築しつつ、並行して、あるいはそれに沿って調査研究を実行し、成果の社会への発信と政策提言を行っていく。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・代議員および理事, 2018年10月～現在に至る

大阪府スポーツ少年団本部・本部委員, 2014年4月～2018年3月

豊中市スポーツ振興協議会・委員, 2014年4月～2018年3月

豊中市スポーツ少年団本部・本部委員、副本部長, 2012年4月～2018年3月

豊能地区スポーツ少年団連絡協議会・役員・事務局担当, 2012年4月～2018年3月

2. 佐藤 廉也 教授

1967年東京都生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程(地理学専修)中退。博士(文学)(京都大学、1999年)。京都大学総合博物館助手、九州大学大学院比較社会文化研究院助教授(准教授)を経て、2015年4月より現職。専攻:人文地理学

2-1. 論文

佐藤廉也他「アメリカ国立公文書館(NARA)所蔵の空中写真標定図—GISを用いたマップ検索システム構築に向けて—」『待兼山論叢(日本学編)』(大阪大学大学院文学研究科), 52, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-17, 2018/12

2-2. 著書

福井勝義, 小松和彦, 佐藤廉也(共著)『焼畑のむら 昭和45年、四国山村の記録』終風舎, pp. 411-416, 2018/4

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

佐藤廉也「改善されない高校地理教科書の焼畑に関する誤記述」2019年日本地理学会春季学術大会, 日本地理学会, 専修大学, 2019/3

Sato, Ren'ya, "Sedentarization, Immigration and Land Grabbing: A Case from the Majangir, Southwestern Ethiopia.", International workshop for the reorganization of rural settlement system., Kyoto University, 京都大学, 2019/1

佐藤廉也「アメリカ国立公文書館所蔵の空中写真—標定図の集計による全容把握の試み—」人文地理学会大会, 人文地理学会, 奈良大学, 2018/11

佐藤廉也「自然に関する知識はいかに獲得・維持・継承されるのか? —ユネスコ生物圏保存地区「マジヤンの森」における樹木知識の性・年齢差—」福岡地理学会夏季例会, 福岡地理学会, 九州大学, 2018/7

佐藤廉也「森の樹木に関する知識と個人差 —エチオピア南西部・マジヤンギルにおける「樹種同定テスト」の試み—」アフリカ学会第55回学術大会, 日本アフリカ学会, 北海道大学, 2018/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

佐藤廉也 日本ナイル・エチオピア学会高島賞, 日本ナイル・エチオピア学会, 2000/4

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2015年度～2018年度、基盤研究(B) 海外、代表者:佐藤廉也

課題番号:A15H051310

研究題目:中国・黄土高原における1940年代以降の土地被覆・土地利用・地形変化の復原研究

研究経費:2018年度 直接経費 2,860,000円 間接経費 660,000円

研究の目的:

中国・黄土高原は、20世紀以降、森林伐採・農地開発・放牧、さらには21世紀以降の造林プロジェクトによって大規模な土地変化を受けてきたことが知られているが、これらのプロセスの定量的な復原は、中国における過去の地理情報(地形図、空中写真、統計情報)の活用が大きく制限されるなかで、不明なままであった。本研究は、黄土高原の村落調査によって土地変化の歴史と要因を具体的に明らかにするとともに、近年公開されたアメリカ合衆国の公文書館が所蔵する1940年代～60年代の高解像度空中写真を用いて微地形レベルの地形復原、土地被覆・土地利用復原をおこない、これに80年代以降の衛星データ解析をあわせ、1940年代から現在までの環境変化の歴史を定量的に明らかにしようとするものである。

2-6-2. 2018年度～2020年度、挑戦的(開拓・萌芽)研究、代表者:佐藤廉也

課題番号:18K18539

研究題目:系統解析手法を用いた知識の伝達・継承・変容・拡散に関する実証的研究

研究経費:2018年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

2019年度 直接経費 1,800,000円 間接経費 540,000円

研究の目的:

本研究の目的は、小規模な生業社会に生きる人びとを対象として、人びとの生きる糧である文化(知識・技術)の伝達・継承・変容・拡散のパターンを、生物遺伝学の系統解析で用いられる統計学的方法を応用することによって実証的に明らかにすることである。知識・技術の拡散やイノベーションの実態は、その複雑性やデータ収集の困難さの故に、そのメカニズムを定量的に捉えることが難しい研究課題であった。本研究は、文化を人から人へと伝達・継承される情報ととらえ、個人および集団の持つ知識のバリエーションをデータとして、生物学における系統解析の手法を応用することによって、個々の文化要素の伝達・変容・拡散に「親から子への垂直的伝達」「地理的近接性に基づく水平的伝達」「生態学的要因による適応的選択」という、異なる伝達経路がそれぞれの程度寄与しているのかを具体的に明らかにする。本研究は、生物学における系統解析と検定の手法(近隣結合法、最大節約法、最尤法を主とする)を文化(知識・技術の拡散)研究に応用しようとするものであり、文化動態の研究においてより計量的かつ汎用的な手法を確立するための突破口と位置づけ得る挑戦的課題である。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・代議員, 2018年11月～現在に至る

日本地理学会・編集委員, 2018年3月～現在に至る

人文地理学会・集会委員, 2017年10月～2019年10月

人文地理学会・理事, 2016年4月～現在に至る

日本ナイル・エチオピア学会・評議員, 2015年4月～現在に至る

日本ナイル・エチオピア学会・編集幹事, 2015年4月～2018年3月

3. 小林基助教

1990年生。2019年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（文化形態論専攻）修了。博士（文学）（大阪大学、2019年）。2019年、大阪大学大学院文学研究科助教（2020年3月退職）。専攻：人文地理学

3-1. 論文

小林基 「技術の復活—経済地理学におけるイノベーション研究の深化に向けて—」『待兼山論叢（日本学編）』（大阪大学文学会），53, pp. 19-37, 2019/12

小林基 「日本におけるイチゴの育種・普及プロセスとその産地間差異」『地理学評論』（日本地理学会），91-5, 日本地理学会, pp. 376-394, 2018/9

小林基, 大塚剛毅, 阪本慧一他(共著) 「第2章 観光産業とその課題」堤研二(編)『平成26-平成30年度科学研究費補助金基盤研究(A)「中山間地域における林業合理化・森林管理・住民生活のためのマネジメントモデルの構築」(研究代表者:堤研二)平成29年度研究成果報告書『隠岐の島の産業と生活(隠岐の島調査報告4)』大阪大学文学部／大学院文学研究科人文地理学教室, pp. 17-28, 2018/8

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

Kobayashi, Hajime, “The Revival of Ideas: The impact of knowledge circulation on economic geography”, The oral session in the 14th Japan-Korea-China Joint Conference on Geography, Okayama University(Tsushima campus), 2019/10

小林基 「イノベーションによる農業変化への進化的アプローチの試み」日本地理学会 2019年春季学術大会, 日本地理学会, 専修大学, 2019/3

小林基 「イノベーションからみた現代日本の農業地域:ブランド化と品種転換の事例を中心に」日本地理学会 2019年春季学術大会研究グループ集会, 日本地理学会, 専修大学, 2019/3

Kobayashi, Hajime, “Acquiring and Maintaining A Regional Advantage in Agriculture: Focusing on Innovation and Shipment Strategy in Japanese Soybean and Strawberry Production Districts”, the 5th Global Conference on Economic Geography, University of Cologne, 2018/7

小林基 「日本のイチゴ産地における品種の開発・普及プロセス」経済地理学会関西支部 4月例会, 経済地理学会関西支部, 阪南大学あべのハルカスキャンパス, 2018/4(『経済地理学年報』64-3, pp. 89-90, 2018/9)

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-12 日本文学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 2 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：飯倉 洋一、滝川 幸司

准教授：斎藤 理生、勢田 道生

助教：尹 芷汐

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
70	19	19	3	0	2	1	1

*うち留学生6名、社会人学生1名

**日本文学・国語学専修として

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	15	8	2	1
2019	16	6	0	1
計	31	14	2	2

*日本文学・国語学専修として

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、学問的な連携体制を形成するために、学部・大学院共通の講義を設定し、また学部演習への大学院生の参加を促している。日本文学には留学生も多数在籍しており、TA・RAの機会を与えることで、コミュニケーションや教育指導の能力を高めることにも努めている。大学院においては、①修士・博士論文作成演習の授業に連動して、学会発表、投稿論文作成等のための個別指導を行い、院生が研究進捗状況を報告・発表しあう研究発表会を開催する、②専門機関の採用情報等の入手につとめ、専門職への就職を積極的に支援する、また日本学術振興会特別研究員(PD/DC2/DC1)に関する学生への情報提供とともに、積極的な応募を促す、③『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』など、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促す。また研究分野に関連する学会での口

頭発表や学会誌への投稿を促す、などを目標とした。学部においては、①卒業論文作成演習の授業に連動して、個別指導を行うほか、卒業論文中間発表会を開き、学生の卒業論文完成に導く、②日本文学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知するとともに参加を促す、③『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』など、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促す。また研究分野に関連する学会での口頭発表や学会誌への投稿を促す、などを目標とした。

2. 研究

教員は科学研究費補助金を中心とした競争的外部資金の獲得に努め、継続中の科学研究費および諸プロジェクトに関わる研究を行う。また学生・卒業生・修了生とともに研究活動を促進するために、「大阪大学国語国文学会」を開催し、学会機関誌『語文』を刊行する。教員および大学院生を中心とした研究会活動として、「大阪大学古代中世文学研究会」「大阪大学近代文学研究会」「上方読本を読む会」ほかの研究会活動を行い、合わせて研究誌『詞林』『阪大近代文学研究』を刊行し、国内外の関係者・機関に送付することなどを目標とした。

3. 社会連携

所蔵保管資料の社会的活用を図るため、各方面からの閲覧複写依頼に応じ、資料の一部を年1回解題を付して展示公開し、またウェブ上で画像データベースとして公開することを目指した。そのほかにも、懐徳堂記念会による「懐徳堂古典講座」など、一般の方を対象とする講座から派遣依頼のあった場合、あるいは高校教員の国語研究会や高校生を対象とする講座からの講師派遣依頼などにも積極的に対応する、などを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

【2018年度】

授業形態においては、学部・大学院共通の講義を設定し、学部演習への大学院生の参加を促した。論文作成のための演習授業に加え、7月、11月に院生発表会を、10月に修士論文・卒業論文中間発表会を行い、卒業・修士・博士論文執筆に向けての指導を行った。また学会発表・投稿論文作成のための個別指導も発表会とは別に行った。

『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』などの、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促した結果、学会誌等も含めて12本の論文が掲載され、学会・研究会での研究発表も22本を数えるという状況にある。

【2019年度】

授業形態においては、学部・大学院共通の講義を設定し、学部演習への大学院生の参加を促した。論文作成のための演習授業に加え、7月、11月に院生発表会を、10月に修士論文・卒業論文中間発表会を行い、卒業・修士・博士論文執筆に向けての指導を行った。また学会発表・投稿論文作成のための個別指導も発表会とは別に行った。

『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』などの、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促した結果、学会誌等も含めて23本の論文が掲載され、学会・研究会での研究発表も45本を数えるという状況にある。

2. 研究

【2018年度】

科研費による研究プロジェクトとしては「定家本源氏物語と古今集・後撰集との相関性に関する文献学的研究」(2016～)、「近世中期の有職家・神道家をめぐる学芸ネットワークの研究—神村正鄰を中心に—」(2016～)、「室鳩巢の漢詩における盛唐詩受容の研究」(2016～)、「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」(2017～)、「1940年代の新聞における文芸欄の基礎的研究」(2017～)等を行った。科研費以外の研究プロジェクトとしては、人間文化研究機構国文学研

研究資料館「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」異分野融合共同研究のうち「GISを用いた総合地域情報に関する国際発信方法に関する研究」(2017～)を行った。

2019年1月に「大阪大学国語国文学会」を開催し、機関誌『語文』110輯(2018年6月)、111輯(2018年12月)を刊行した。また詳細は10の研究会開催の状況を参照していただきたいが、各研究会も活発に開催され、研究誌である『詞林』63号(2018年6月)・64号(2018年10月)、『阪大近代文学研究』17号(2019年3月)を刊行した。

【2019年度】

科研費による研究プロジェクトとしては「近世中期の有職家・神道家をめぐる学芸ネットワークの研究—神村正鄰を中心に—」(2016～)、「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」(2017～)、「1940年代の新聞における文芸欄の基礎的研究」(2017～)等を行った。科研費以外の研究プロジェクトとしては、人間文化研究機構国文学研究資料館「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」異分野融合共同研究のうち「GISを用いた総合地域情報に関する国際発信方法に関する研究」(2017～)を行った。

2020年1月に「大阪大学国語国文学会」を開催し、機関誌『語文』112輯(2019年6月)、113輯(2019年12月)を刊行した。また詳細は10の研究会開催の状況を参照していただきたいが、各研究会も活発に開催され、研究誌である『詞林』65号(2019年6月)・66号(2019年10月)、『阪大近代文学研究』18号(2020年3月)を刊行した。

3. 社会連携

【2018年度】

各方面からの閲覧複写依頼に応じるとともに、データベースを公開中。懐徳堂古典講座「『太平記』の名場面を読む—鎌倉幕府滅亡まで—」(4月～12月：勢田)、2018年度春期 大阪・京都文化講座「講座で巡る京都・大阪一円の寺々」「天野山金剛寺の歴史と文化財」(6月：勢田)、Handai-Asahi 中之島塾「南北朝時代はどのようにして論じられてきたか」(11月：勢田)、龍谷大学学術講演会「近世後期の京都文壇—妙法院宮真仁法親王とその周辺」(11月：飯倉)、大手前大学交流文化講演会「上田秋成の人と文学」(1月：飯倉)に講師として参加するなど、積極的な対応に努めた。

【2019年度】

各方面からの閲覧複写依頼に応じるとともに、データベースを公開中。懐徳堂古典講座「『太平記』の名場面を読む—建武の新政から後醍醐天皇の死去まで—」(4月～12月：勢田)、2019年度 大阪・京都文化講座「楠木正成一〈忠臣〉の虚像と実像—」(6月：勢田)「織田作之助—敗戦直後の人気新聞小説作家—」(12月：斎藤)、NPO 法人高齢者大学校「もっと知りたい大阪の歴史科」(5月：斎藤)に講師として参加するなど、積極的な対応に努めた。

IV. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

活動の概要の項、前掲の「修了生・卒業生」の実績および後掲の「大学院生等による論文発表等」の項にまとめたところからすれば、当初の目標を概ね達成できていると思われる。

2. 研究

科研費を中心とした各種の研究プロジェクトは順調に遂行され、また教員および大学院生による研究成果も着実に積み上げられており、目標は充分達成できていると判断してよいと思われる。

3. 社会連携

活動の概要の項にその実績をまとめたが、社会連携の目標についても十分に達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	1	0	1
2019	1	0	1
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

- 李 慧珏「大正末期から昭和初期の雑誌における芥川龍之介受容の諸相と新時代の文学の形成
—『文芸時代』、『文芸戦線』、『辻馬車』を中心として—」(2019.3)
主査：斎藤理生 副査：清水康次・加藤洋介
- 福田 涼「三島由紀夫作品の方法—同時代文脈を視座として—」(2020.3)
主査：斎藤理生 副査：飯倉洋一・滝川幸司

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	1(1)	1(1)	8(8)	0(0)	2(0)	12(10)
2019	3(2)	3(2)	10(5)	0(0)	6(4)	22(13)
計	4(3)	4(3)	18(13)	0(0)	8(4)	34(23)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	1	5	12	0	4	22
2019	2	14	22	0	7	45
計	3	19	34	0	11	67

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

武久真士「中原中也「修羅街輓歌」論—詩篇あるいは詩集として」『阪大近代文学研究』第17号, pp.104-118, 2019/03/30

〔博士後期〕

岡部祐佳「『万の文反古』巻二の一「縁付まへの娘自慢」考—「今程、世間に見せかけのはやる事はなし」をめぐって—」

『語文』第111号, pp.22-34, 2018/12/10

- 小田桐ジェイク「変貌する太宰治『津軽』——パラテキストの観点から」『阪神近代文学研究』第 19 号, pp.115-129, 2018/05/31
- 小田桐ジェイク"The Changing Faces and Paratext of a Work Collection: A Case Study of Dazai Osamu's Ai to Bi ni tsuite", 『大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスター報告書』第 2 号, 2019/03/31
- 北島紘「院政期歌合における判者歌の利用」『語文』第 110 号, pp.1-14, 2018/6/30
- 金智慧「河竹黙阿弥作「富士額男女繁山」の作劇法」『待兼山論叢』第 52 号, pp.1-30, 2018/12/25
- 服部峰大「「妹」の登場—宮沢賢治受容におけるトシの扱い—」『日本研究論集』第 18 号, pp.21-41, 2018/10
- 福田涼「三島由紀夫『潮騒』論—初江に着目して—」『語文』第 111 号, pp.35-48, 2018/12/10
- 福田涼「川端康成と前期『辻馬車』—反「リアリズム」・「新人生派」・「伊豆の踊子」—」『阪大近代文学研究』第 17 号, pp.61-75, 2019/3/30
- 福田涼「「日記」という形式—三島由紀夫「祈りの日記」の方法と位置—」『阪大近代文学研究』第 17 号, pp.119-133, 2019/3/30
- 尹美羅「瀧井孝作「父」における志賀直哉受容—『和解』との比較を中心に—」『日本研究論集』第 18 号, pp.1-20, 2018/10
- LECKIE RICHARD WILLIAM III "A Japanese Proletarian Mystery in New York: Maedakō Hiroichirō's "The Death of the Laborer Joe O'Brien"', 『大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスター報告書』第 2 号, 2019/03/31
【2019 年度】
〔博士前期〕
- 川上莉奈「和歌序にみえる『萬葉集』」『第 2 回若手研究者フォーラムプロシーディング』 pp.41-44, 査読有, 2020/3/23
- 黄夢鶴「『文集百首』における定家の本歌取りの特徴—原拠詩と本歌との関係に注目して—」『第 1 回若手研究者フォーラムプロシーディング』 pp.59-63, 査読有, 2019/9/27
- 武久真士「中原中也の定型詩—「旋回型」の詩型に注目して」『第 1 回若手研究者フォーラムプロシーディング』 pp.64-68, 査読有, 2019/9/27
- 森島万似子「アイドルとしての矢田津世子—昭和初期の矢田津世子—」『GLOBAL NETWORK FOR GENDER STUDIES IN ASIA』 pp.29-30, 査読無, 2019/9/7
- 森島万似子「『婦人倶楽部八月号（第十八巻第八号）附録 婦人手紙文全集』」『阪大近代文学研究』第 18 号, pp.36-53, 査読無, 2020/3/30
- 李俊甫「上方絵本『絵本太平伝記』の創作手法」『第 2 回若手研究者フォーラムプロシーディング』 pp.49-52, 査読有, 2020/3/23
〔博士後期〕
- 岡部祐佳「瀬川采女説話と松浦佐用姫伝承—近世期俗文芸における『太閤記』受容の一端」『北陸古典研究』第 34 号, pp.29-40, 査読無, 2019/12/20 R86R86:R101
- 小田桐ジェイク「Repackaging Dazai Osamu and the Process of Branding "Ningen Shikkaku"」『大阪大学大学院文学研究科越境文化研究（The Anthology of Transborder Cultural Studies Papers）』第 3 巻, pp.77-89, 査読無, 2020/3/31
- 北島紘「『千載集』における源有房と長覚法師」『待兼山論叢』第 53 号, pp.19-32, 査読有, 2019/12/25
- 北島紘「歌語「草ぶし」の詠まれ方の変遷」『国文学（関西大学）』第 104 号, pp.51-61, 査読有, 2020/3/1
- 金智慧（KIM JIHYE）「Shinko Engeki Jisshu by Onoe Kikugorō V and the History of Onnagata / 五代目菊五郎の新古演劇十種と女方の歴史」『大阪大学・ハーバード大学大学院生交流会報告書』 pp.79-102, 査読無, 2020/3/31
- 後藤京「『源氏物語』の男性観—<あやにく>表現を端緒として—」『詞林』第 66 号, pp.14-24, 査読無, 2019/10/20
- 小林理正「大阪天満宮御文庫蔵木戸元齋筆『狭衣物語』巻四・翻刻と解題（上）」『詞林』第 65 号, pp.38-78, 査読無, 2019/4/20
- 小林理正「平安（末期）写本の痕跡—鎌倉写本の和歌書式からみえてくるもの—」『語文』第 32 号, pp.32-42, 査読有, 2019/6/1
- 小林理正「『狭衣物語』本文の点描(1)—引歌表現の本文異同雑考—」『詞林』第 66 号, pp.25-36, 査読無, 2019/10/20
- 服部峰大「一人のブドリー—ざらされた偉人像—」『宮沢賢治研究アニュアル』第 30 号, pp.未定-未定, 査読有, 2020/3/31

- 福田涼「三島由紀夫「朝倉」論『昭和文学研究』第80号, pp.84-97, 査読有, 2020/3/1
- 蒲姣艶「「松に藤」の構図形成についての一考察 「藤詠」の変化との関わりを中心に」『詞林』第66号, pp.1-13, 査読無, 2019/10/20
- 蒲姣艶「古今集時代における「松を引く」表現の出現—子日行事との関わりを中心に—」『語文』第113号, pp.1-12, 査読有, 2019/12/10
- 尹美羅「志賀直哉「襖」の表現構造」『語文』第112号, pp.43-56, 査読有, 2019/6/30
- 尹美羅「広津和郎「悔」論—志賀直哉受容を中心に—」『阪大近代文学研究』第18号, pp.1-17, 査読有, 2020/3/30
- LECKIE RICHARD WILLIAM III「前田河広一郎『労働者ジョウ・オ・ブラインの死』の成立過程—犯罪実話から風刺ミステリーへ—」『社会文学』第51号, pp.140-154, 査読有, 2020/3/1

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

- 稲本紀佳「忍者と黒装束の融合—近世演劇を手掛かりに—」, 第2回国際忍者学会大会, 佐賀県嬉野市公会堂, 2018/9/8
- 大野暖奈「お伽草子『木幡狐』考—異類を通して表現された女人救済思想—」, 第290回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/5/19
- 黄夢鶴「文集百首における慈円・定家の結題詠的詠法について」, 第289回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/4/28
- 後藤京" "The Tale of Genji " in the perspective of the Transcultural ", HeKKSaGOn Spring School 2018 in Kyoto/Graduate School of Letters, Kyoto University, 京都大学吉田キャンパス, 2018/4/20
- 後藤京「桜の唐の綺の御直衣—一行幸巻における光源氏の装い—」, 第291回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/7/21
- 後藤京「落葉の宮物語—その呼称に着目して—」, 第292回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/9/22

〔博士後期〕

- 岡部祐佳「近世期「書簡文化」における『太閤記』受容の一端—「菊子の文」をめぐる諸現象—」, 北陸古典研究会 2018年度上半期研究発表会, 金沢大学サテライトプラザ, 2018/8/25
- 岡部祐佳「『太閤記』巻十四「秀吉公憐於夫婦之間事」の受容と展開—近世期書簡文化の文脈の中で—」, 平成31年度大阪大学国語国文学会, 大阪大学豊中キャンパス, 2019/1/12
- 小田桐ジェイク「太宰治『津軽』再考—七十年以上の変遷を中心に—」, 言語圏の文学研究会第19回例会, 関西学院大学梅田キャンパス, 2018/8/3
- 小田桐ジェイク「太宰治の作品集『愛と美について』の行方—その形と変化とパラテキスト—」, 日本比較文学会関西支部第54回関西大会, 立命館大学衣笠キャンパス, 2018/11/10
- 小田桐ジェイク"The Changing Faces of Dazai Osamu's Ai to Bi ni tsuite: The Movement, Transformation, and Paratext of a Work Collection", Graduate Conference in Japanese Studies II, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/12/5
- 小田桐ジェイク「太宰治の初期作品『思ひ出』のリパッケージ—自作引用・言及の方法—」, 同徳・松蔭日本研究会 2019, 同徳女子大学校, 2019/1/26
- 小林理正「流布本『狭衣物語』、「それがしがめ」をめぐる一巻二を再考する端緒として—」, 第289回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/4/28
- 小林理正「『源氏物語』若菜下巻住吉詣における和歌—光源氏への返歌と独詠歌の詠者をめぐって—」, 中古文学会 2018年度秋季大会, ノートルダム清心女子大学カリタスホール, 2018/10/21
- 小林理正「東山御文庫蔵源氏物語（各筆源氏）からいえること—平安期書写本における和歌書式推定の試み—」, 第295回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2019/1/26

- 服部峰大「『妹』の登場—宮沢賢治受容におけるトシー」, 第9回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究
交流集会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/6/26
- 服部峰大「宮沢賢治「グスコブドリ」の伝記—雑誌『児童文学』が与えた視座—」, 2018年日本近代文学会関西支部
春季大会, 花園大学無聖館, 2018/11/10
- 福田涼「三島由紀夫「朝倉」論—イロニイからの「訣別」—」, 平成31年度大阪大学国語国文学会, 大阪大学豊中キャン
パス, 2019/1/12
- 蒲姣艶「歌ことば「たのむ」の変遷」, 第290回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/5/19
- 蒲姣艶「歌語「花のかげ」について」, 第294回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/11/24
- 蒲姣艶「あやめ草の新側面」, 第296回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2019/3/23
- LECKIE RICHARD WILLIAM III "A Japanese Proletarian Mystery in New York: Maedakō Hiroichirō's "The Death
of the Laborer Joe O' Brien", Graduate Conference in Japanese Studies II, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/12/5
【2019年度】
〔博士前期〕
- 川上莉奈「記紀に描かれた兄弟—〈末子成功譚について〉—」, 第297回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学,
2019/4/27
- 川上莉奈「『万葉集』巻二・一四七番歌の解釈史—近世から現代まで—」, 第301回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪
大学, 2019/10/26
- 川上莉奈「和歌序にみえる『万葉集』」, 第2回大阪大学大学院文学研究科若手研究者フォーラム, 大阪大学, 2020/3/23
(新型コロナの影響で延期)
- 徐永林「『徒然草』に描かれた「入道」について」, 第297回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2019/4/27
- 李俊甫「上方絵本『絵本太平伝記』の創作手法」, 第2回大阪大学大学院文学研究科若手研究者フォーラム, 大阪大学,
2020/3/23 (新型コロナの影響で延期)
- 武久真士「中原中也の定型詩—「旋回型」の詩型に注目して」, 第1回大阪大学大学院文学研究科若手研究者フォーラム,
大阪大学, 2019/9/27
- 大野暖奈「異類婚姻譚における『木幡狐』—和歌素材としての異類とお伽草子—」, 第299回大阪大学古代中世文学研究
会, 大阪大学, 2019/7/27
- 黄夢鶴「『文集百首』における定家の詠歌方法について—句題の一部の文字を和歌に詠まない場合に注目して—」, 第299
回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2019/7/27
- 黄夢鶴「『文集百首』における定家の本歌取りの特徴—原拠詩と本歌との関係に注目して—」, 第1回大阪大学大学院文
学研究科若手研究者フォーラム, 大阪大学, 2019/9/27
- 黄夢鶴「藤原定家の句題和歌の一側面—「夢中歎笑亦勝愁」と「恋しき人を見てはたのまじ」を例として—」, 第4回大阪大
学豊中地区研究交流会・ポスター発表, 大阪大学, 2019/12/17
- 中村麻耶「『うつほ物語』における賜姓源氏について」, 第298回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2019/6/15
- 中山紗恵「藤原行成和歌不得手に関する文章の考察—『枕草子』「職の御曹司の西面の立藪のもとにて」段における〈歌〉
を〈うたふ〉という表現について—」, 第298回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2019/6/15
- 福山美都「『蜻蛉日記』上巻の長歌の考察」, 第298回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2019/6/15
- 李俊甫「江戸後期における五冊物草双紙の出版」, 大阪大学・ハーバード大学大学院生交流会, ハーバード大学,
2020/2/28
〔博士後期〕
- ABRAR Basir「永井荷風『瀬東綺譚』論—大江の「瀬東綺譚」の相対化—」, 日本近代文学会二〇一九年度秋季大会, 新
潟大学, 2019/10/27
- 岡部祐佳「瀬川采女説話の展開」, 国文学研究資料館共同研究「軍記および関連作品の歴史資料としての活用のための基
盤的・学際的研究」第二回研究会, 国文学研究資料館, 2019/6/7

- 岡部祐佳「瀬川采女説話の受容と展開—妻・菊の貞女性と好色性を中心に—」, 日本近世文学会 2019 年度秋季大会, 県立広島大学 サテライトキャンパスひろしま, 2019/11/10
- 岡部祐佳 “How to Map Utamakura on DLM”, WORKSHOP 「Digital Humanities in Asian and East Asian Studies」, Heidelberg University, 2019/11/22
- 岡部祐佳「浮世草子にみえる艶書の意味と時代性—書肆・川勝五郎右衛門刊の作品を中心に—」, 上智大学国文学会 2019 年度冬季大会, 上智大学, 2020/1/11
- 北島紘「保安二年九月十二日内大臣忠通家歌合 庭露二番」, 龍谷大学歌合研究会, 龍谷大学, 2019/5/30
- 北島紘「保安二年九月十二日内大臣忠通家歌合 庭露五番」, 龍谷大学歌合研究会, 龍谷大学, 2019/9/26
- 北島紘「保安二年九月十二日内大臣忠通家歌合 恋三番」, 龍谷大学歌合研究会, 龍谷大学, 2020/1/16
- 北島紘「保安二年九月十二日内大臣忠通家歌合 恋五番」, 龍谷大学歌合研究会, 龍谷大学, 2020/2/26
- 金智慧 (KIM JIHYE) 「「夢物語盧生容画」考—明治歌舞伎の〈改良〉と〈懐古〉の狭間—」, 日本演劇学会全国大会, 成城大学, 2019/6/1
- 金智慧 (KIM JIHYE) “Shōhon-utsushi: Recapturing Kabuki Stage through Illustration and Text”, AAS-in-Asia, The Royal Orchid Sheraton Hotel & Towers, 2019/7/3
- 金智慧 (KIM JIHYE) “A Compromise between Japanese and Western performances”, SEC - AAS, New College of Florida, 2020/1/19
- 金智慧 (KIM JIHYE) “Shinko Engeki Jisshu by Onoe Kikugorō V and the History of Onnagata”, 大阪大学・ハーバード大学大学院生交流会, ハーバード大学, 2020/2/28
- 黄鶯「柏木如亭の拗体詩」, 第 143 回和漢比較文学会例会 (西部), 神戸研究学園都市 大学共同利用施設 UNITY, 2019/4/13
- 黄鶯「服部南郭の韻律意識」, 京都近世小説研究会例会, 京都府立大学, 2019/9/21
- 黄鶯「『徂徠集』の律詩における荻生徂徠の韻律意識」, 第 145 回和漢比較文学会例会 (西部), 立命館大学, 2019/12/21
- 黄鶯「市河寛斎の拗体詩」, 京都近世小説研究会例会, 京都府立大学, 2020/2/8
- 後藤京「:賢木巻・野宮のわかれ再考—典拠としての『うつほ物語』俊蔭巻—」, 第 297 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2019/4/27
- 後藤京「光源氏論—その「心長さ」の両義性をめぐって—」, 第 300 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2019/9/21
- 後藤京「大江斉光考」, 第 305 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2020/3/28
- 小林理正「紹巴本の再検討からいえること—流布本狭衣物語巻四本文攷—」, 2019 年度広島大学国語国文学会研究集会, 広島大学, 2019/7/13
- 小林理正「深川本狭衣物語 (巻一) から本文研究を見つめなおす」, 第 300 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2019/9/21
- 小林理正「宇和島伊達文化保存会蔵『狭衣物語』について—伝本の位置付けとその意義—」, 令和二年度大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2020/1/11
- 小林理正「天稚御子降下条のヴァリエーション—鎌倉写本の狭衣物語本文小考—」, 第 304 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2020/2/15
- 寺田伝「伝藤原家隆筆大六半切『古今和歌集』について」, 第 303 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2019/12/22
- 蒲姣艶「古今集時代における「紅の涙」の創出」, 第 143 回和漢比較文学会例会 (西部), 神戸研究学園都市 大学共同利用施設 UNITY, 2019/4/13
- 蒲姣艶「貫之集における「すれる衣」の一側面」, 第 299 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2019/7/27
- 蒲姣艶「古今集撰者時代における「六月祓」の一考察」, 第 301 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2019/10/26
- LECKIE RICHARD WILLIAM III 「前田河広一郎『労働者ジョウ・オ・ブラインの死』の成立過程—犯罪実話から風刺ミステリーへ—」, 日本社会文学会二〇一九年度春季大会, 早稲田大学, 2019/6/30
- LECKIE RICHARD WILLIAM III 「葉山嘉樹『死屍を食ふ男』論—豊津と怪談—」, 日本近代文学会二〇一九年度秋季

大会, 新潟大学, 2019/10/27

小田桐ジェイク「自己宣伝としての無題序文—太宰治の作品集『思ひ出』を中心に」, 日本近代文学会・昭和文学会・社会文学会 合同国際研究集会, 二松学舎大学, 2019/11/24

(3)その他(書評・翻訳など)

【2018年度】

〔博士前期〕

西出春菜「紹介・藤田真一編注『蕪村文集』』『語文』第110輯, p.44, 2018/06/30

武久真士「『辻馬車』第二十号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.39-40, 2019/03/30

武久真士「『辻馬車』第二十六号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.48-49, 2019/03/30

タルヴァイニーテ・エレナ「『辻馬車』第二十一号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.31-32, 2019/03/30

タルヴァイニーテ・エレナ「『辻馬車』第三十二号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.58-60, 2019/03/30

ハジッチ・アムラ「『辻馬車』第七号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.15-17, 2019/03/30

ハジッチ・アムラ「『辻馬車』第十八号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.34-36, 2019/03/30

ハジッチ・アムラ「『辻馬車』第二十九号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.53-54, 2019/03/30

羽原綾香「『辻馬車』第八号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.17-19, 2019/03/30

羽原綾香「『辻馬車』第十七号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.32-34, 2019/03/30

羽原綾香「『辻馬車』第三十号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.54-56, 2019/03/30

福田亮「『辻馬車』第十号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.20-22, 2019/03/30

福田亮「『辻馬車』第十六号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.31-32, 2019/03/30

福田亮「『辻馬車』第二十八号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.51-52, 2019/03/30

森島真似子「『辻馬車』第十九号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.36-37, 2019/03/30

森島真似子「『辻馬車』第二十七号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.49-51, 2019/03/30

〔博士後期〕

小林理正「紹介・伊井春樹著『光源氏の運命物語 「かたり」から読み解く新しい『源氏物語』』『語文』第111輯, pp.65-66, 2018/12/10

福田涼「『辻馬車』第一号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.5-6, 2019/03/30

福田涼「『辻馬車』第十二号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.24-25, 2019/03/30

福田涼「『辻馬車』第十三号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.25-27, 2019/03/30

李慧珏「『辻馬車』第二号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.6-8, 2019/03/30

服部峰大「『辻馬車』第三号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.8-10, 2019/03/30

服部峰大「『辻馬車』第十一号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.22-23, 2019/03/30

服部峰大「『辻馬車』第十四号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.27-29, 2019/03/30

服部峰大「『辻馬車』第三十一号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.56-58, 2019/03/30

尹美羅「『辻馬車』第四号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.10-12, 2019/03/30

尹美羅「『辻馬車』第十五号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.29-30, 2019/03/30

尹美羅「『辻馬車』第二十四号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.45-46, 2019/03/30

レッキー・リチャード・ウィリアム「『辻馬車』第二十二号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.41-42, 2019/03/30

レッキー・リチャード・ウィリアム「『辻馬車』第二十五号』『阪大近代文学研究』第17号, pp.46-48, 2019/03/30

【2019年度】

〔博士前期〕

西谷龍二「紹介 岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太編『バリエーションの中の日本語史』』『語文』第112輯, p.81, 2019/06/30

黄夢鶴「紹介 三村晃功『いろは順 歌語辞典—有賀長伯『和歌八重垣』—』』『語文』第113輯, p.54, 2019/12/10

[博士後期]

岡部祐佳「紹介 飯倉洋一・盛田帝子編『文化史のなかの光格天皇一朝儀復興を支えたネットワーク』『語文』第112輯, p.78, 2019/06/30

小林理正「紹介 秋本吉徳・藤井由紀子編『兵部卿物語全釈』『語文』第113輯, p.53, 2019/12/10

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)

2019年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2019年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

有澤 知世 博士後期課程, 国文学研究資料館, 助教, 2017/10

瓦井 裕子 博士後期課程, 就実大学, 講師, 2018/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 11名

2018年度:9名 2019年度:2名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 10名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度:0名 2019年度:0名

9. 刊行物

2018年度 『語文』(大阪大学国語国文学会)第110輯・第111輯

『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会)第63号・第64号

『上方文藝研究』(上方文藝研究会)第15号

『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会)第17号

2019年度 『語文』(大阪大学国語国文学会)第112輯・第113輯

『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会)第65号・第66号

『上方文藝研究』(上方文藝研究会)第16号

『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会)第18号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

【2018年度】

[国内学会の開催]

大阪大学国語国文学会総会

2019年1月7日

[研究会の開催]

大阪大学古代中世文学研究会

2018年度：第289回	4月28日	第290回	5月19日	第291回	7月21日	
	第292回	9月22日	第293回	10月27日	第294回	11月24日
	第295回	1月26日	第296回	3月23日		

上方読本を読む会

2018年度：4月7日 6月16日 9月22日 12月1日 2月23日

第9回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会

2018年6月26日

共同研究会「昭和戦前期の新聞小説を考える」

2018年9月14日

【2019年度】

[国内学会の開催]

大阪大学国語国文学会総会

2020年1月11日

[研究会の開催]

大阪大学古代中世文学研究会

2019年度：第297回	4月27日	第298回	6月15日	第299回	7月27日	
	第300回	9月21日	第301回	10月26日	第302回	11月23日
	第303回	12月22日	第304回	2月15日		

上方読本を読む会

2019年度：4月27日 8月3日

共同研究会「昭和戦前期の新聞小説を考える」

2019年9月13日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

* (国語学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会 (1月1日間)

研究誌「語文」の編集・発行 2018・2019年度2回

* (国語学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会 (10月4日間)

大学院研究発表会 (2018・2019年度 7月・11月 各2日間)

専門分野主催の研究会等の活動については、10.に詳述した。

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 飯倉 洋一 教授

1956年生。1985年九州大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学)(九州大学、1998年)。九州大学助手・山口大学専任講師・同助教授・同教授・大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻：日本近世文学

1-1. 論文

飯倉洋一「秋成の学問は創作とどう関わるのか」『古典文学の常識を疑うⅡ 縦・横・斜めから書き換える文学史』勉誠出版, pp. 200-203, 2019/9

飯倉洋一 「『作者評判千石籬』考」『日本文学研究ジャーナル』7, 古典ライブラリー, pp. 9-20, 2018/9

飯倉洋一 「妙法院宮真仁法親王の文芸交流—『妙法院日次記』を通して、和歌を中心に—」『文化史のなかの光格天皇—朝儀復興を支えた文芸ネットワーク』勉誠出版, pp. 338-360, 2018/6

1-2. 著書

飯倉洋一, 勝又基, 猿倉信彦他(共編著)『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』文学通信, pp. 83-127, 2019/9

飯倉洋一, 日置貴之, 真山蘭里(共編著)『真山青果とは何者か?』文学通信, pp. 1-271, 2019/7

飯倉洋一, 富田真由, 藤野育『翻刻『三猷演談』』大阪大学文学研究科日本文学国語学研究室, pp. 1-45, 2019/3

飯倉洋一, 田中則雄(共編著)『近世後期小説の作者・読者・出版』古典ライブラリー, pp. 1-128, 2018/9

飯倉洋一, 盛田帝子(共編著)『文化史のなかの光格天皇—朝儀復興を支えた文芸ネットワーク』勉誠出版, pp. 1-393, 2018/6

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

飯倉洋一 「俳諧紀行『去年の枝折』について」シンポジウム「上田秋成の俳諧を考える」, 科研基盤C「上田秋成の俳諧研究のための資料整備と基礎的研究」(研究代表者・近衛典子), 駒沢大学会館, 2020/3

飯倉洋一 「『絵本太閤記』『淀君行状』についての一報告」京都近世小説研究会, 京都近世小説研究会, 京都府立大学, 2020/2
likura, Yoichi, “Topography of Literary imagination and memory —Settu Meisho Zue as an example”, Work Shop Digital Humanities in Asia and East asian Studies, ハイデルベルク大学CATS, 2019/11

likura, Yoichi, “Sermon and Anecdotes in 18th-Century Japan”, AAS IN ASIA, Association for asian studies, Royal Orchid Sheraton Hotel, 2019/7

飯倉洋一 「『雨月物語』の怪」懐徳堂春季講座, 懐徳堂記念会, 大阪大学中之島センター, 2019/6

飯倉洋一 「『摂津名所図会』は何を描いたのか」懐徳忌, 懐徳堂記念会, 誓願寺, 2019/4

飯倉洋一 「『三猷演談』について」京都近世小説研究会, 京都近世小説研究会, 京都府立大学, 2019/4

飯倉洋一 「上田秋成の人と文学」交流文化講演会, 大手前大学交流文化研究所, 大手前大学さくら夙川キャンパス CELL フォーラム, 2019/1

飯倉洋一 「『摂津名所図会』における挿絵の役割」絵入本ワークショップ, 絵入本学会, 韓国ソウル明知大学校, 2018/12

飯倉洋一 「近世後期の京都文壇—妙法院宮真仁法親王とその周辺」学術講演会, 龍谷大学世界仏教文化研究センター, 龍谷大学, 2018/11

飯倉洋一 「デジタル文学地図のコンテンツ作成 —「長柄」を例に—」国際ワークショップ: デジタル日本文学地図 — コンテンツ・機能・将来への展望 —, ハイデルベルク大学日文学科・大阪大学文学研究科・国文学研究資料館, ハイデルベルク大学日文学科, 2018/9

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

飯倉洋一, 大谷俊太, 加藤弓枝他 第6回ゲスナー賞 目録・索引部門 銀賞, 雄松堂書店, 2010/10

飯倉洋一 柿衛賞(第3回), 財団法人柿衛文庫, 1993/6

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2017年度~2020年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 飯倉洋一

課題番号: 17H02310

研究題目: 近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉

研究経費:2018年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円
2019年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

近世中後期の上方文壇における文芸は、ある〈場〉に人々が集まり、共に学び、時に戯れることで、豊かな稔りとなって結実した。それらは現代の「共同研究」「共同制作」のあり方と、共通する部分もあり、異なる部分もある。その人的交流の〈場〉や共有する知的基盤の具体的なありようを明らかにすることで、現代における人文学の再構築へのヒントを得られよう。とりわけ上方は伝統的な書物文化と学芸の〈場〉を有するとともに、志学の人々が往来し、新たな文芸を生み出してきた地域であった。本研究では、特に漢詩文や和歌和文という雅文芸を中心に、その文芸の生成を、人々の繋がり〈場〉に注目して、総合的に考察し、近世中後期の文学史・思想史に新たな視角を提供することを目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

人間文化研究機構国文学研究資料館運営会議・委員, 2017年4月～現在に至る

独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会・科学研究費委員会基盤研究等第1段専門委員, 2016年12月～2019年3月
放送大学学園・客員教員, 2014年4月～2019年3月

国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター拠点連携委員会・委員, 2013年4月～2019年3月
一般財団法人柿衛文庫・理事, 2012年3月～現在に至る

園田学園女子大学近松研究所・評議員, 2009年4月～2019年3月

財団法人関西・大阪21世紀協会上方文化芸能運営委員会・運営委員, 2007年4月～現在に至る

日本近世文学会・常任委員, 2002年6月～2020年3月

日本近世文学会・委員, 2000年6月～現在に至る

2. 加藤 洋介 教授

1962年生。1989年名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。国文学研究資料館助手、愛知県立女子短期大学・愛知県立大学講師、同助教授、同教授、大阪大学准教授を経て、2010年10月より現職（2019年3月退職）。専攻：日本平安文学

2-1. 論文

加藤洋介「伝定家筆 源氏物語行幸巻の出現」『語文』111, pp. 1-9, 2018/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2016年度～2020年度、基盤研究(B) 一般、代表者:加藤洋介

課題番号:16H03387

研究題目:定家本源氏物語と古今集・後撰集との相関性に関する文献学的研究

研究経費:2018年度 直接経費 1,500,000円 間接経費 450,000円

研究の目的:

本研究の目的は、定家本源氏物語と古今集・後撰集との相関性について横断的に検証し、新たな定家本源氏物語および古今集・後撰集の本文形成史を構築しようとするものである。また源氏物語および古今集・後撰集の本文異同を確認する校本として、池田亀鑑『源氏物語大成 校異篇』(1953～56年)、西下経一・滝沢貞夫『古今集校本』(1977年)、小松茂美『後撰和歌集 校本と研究 校本編』(1961年)があるが、今日の研究環境からは信頼度に問題があると言わざるをえない。そこで二つ目の目的として、源氏物語および古今集・後撰集の本文研究のための基盤を整備・確立し、学界や社会にその成果を還元することを掲げる。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

中古文学会・常任委員、編集委員, 2011年5月～現在に至る

和歌文学会・委員, 2007年4月～現在に至る

3. 滝川 幸司 教授

1969年生。1998年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士(文学)(大阪大学)。1998年奈良大学文学部専任講師、2003年同助教授、2007年同准教授、2013年同教授、2015年京都女子大学文学部教授。2019年10月より現職。専攻:平安文学

3-1. 論文

滝川幸司「菅原道真と遣唐使(一)―「請令諸公卿議定遣唐使進止状」「奉勅為太政官報在唐僧中權牒」の再検討―」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 65, pp. 17-30, 2019/4

滝川幸司「平安朝漢文学の基層―大学寮紀伝道と漢詩人たち―」『アジア遊学』229, 勉誠出版, pp. 10-22, 2019/2

3-2. 著書

滝川幸司『菅原道真 学者政治家の栄光と没落』中央公論新社, 280p., 2019/9

滝川幸司, 後藤昭雄, 本間洋一, 北山円正, 三木雅博, 仁木夏実(共著)『菅家文草注釈文章篇第二冊卷七下』勉誠出版, pp. 55-75, 132-155, 221-233, 2019/5

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

滝川幸司「三木雅博著『平安朝漢文学鉤沈』」『和漢比較文学』63, 汲古書院, pp. 106-121, 2019/8

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

滝川幸司 第4回池田亀鑑賞, 池田亀鑑文学碑を守る会, 2015/6

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

中古文学会・常任委員, 2019年6月～現在に至る

中古文学会・編集委員, 2019年6月～現在に至る

和歌文学会・編集委員, 2018年11月～現在に至る

和漢比較文学会・例会委員長(西部), 2013年9月～現在に至る

和漢比較文学会・編集委員, 2007年10月～現在に至る

和漢比較文学会・常任理事, 2003年10月～現在に至る

4. 齋藤 理生 准教授

1975年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)(大阪大学、2004年)。群馬大学教育学部講師、同准教授を経て、2014年4月より現職。専攻：日本近現代文学

4-1. 論文

齋藤理生 「織田作之助全集未収録作品紹介(四)―随筆「女と婦人」と談話」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 18, pp. 1-5, 2020/3

齋藤理生 「『定本横光利一全集』未収録資料紹介―座談会「横光利一氏をかこんで」、談話「永久の勝利へ 征戦第二年の想念」『横光利一研究』(横光利一文学会), 18, pp. 148-162, 2020/3

齋藤理生 「序―新聞小説の研究にあたって」『新聞小説を考える―昭和戦前・戦中期を中心に』パブリック・ブレイン, pp. 3-7, 2020/3

齋藤理生 「高見順『東橋新誌』論―『東京新聞』を手がかりに」『新聞小説を考える―昭和戦前・戦中期を中心に』パブリック・ブレイン, pp. 92-109, 2020/3

齋藤理生 「織田作之助『人情断論』待兼山論叢」(大阪大学文学会), 53, pp. 1-17, 2019/12

齋藤理生 「『毎日新聞』のなかの『帰郷』」『おさらぎ選書』27, 大佛次郎記念館, pp. 27-48, 2019/11

齋藤理生 「太宰治『正義と微笑』論―〈笑い〉を手がかりに」『キリスト教文藝』(日本キリスト教文学会関西支部), 35, pp. 38-54, 2019/7

齋藤理生 「大佛次郎『帰郷』の成立」『国語国文』88-6, 臨川書店, pp. 1-16, 2019/6

齋藤理生 「解説・もう一つの「現代青年論」の発掘」『新潮』116-5, 新潮社, pp. 171-174, 2019/5

齋藤理生 「一九四〇年一月一四月 紀元二六〇〇年の幕開けと系譜小説」内海紀子・小澤純・平浩一(共著)『太宰治と戦争』ひつじ書房, pp. 34-37, 2019/5

齋藤理生 「一九四四年一月一三月 創作発表媒体縮小期における執筆活動」『太宰治と戦争』ひつじ書房, pp. 82-85, 2019/5

齋藤理生 「「瘡取り」論―「前書き」・「コブトリ」・「現代」を手がかりに」『太宰治と戦争』ひつじ書房, pp. 221-241, 2019/5

齋藤理生 「《資料紹介》織田作之助全集未収録作品紹介(三)「関西の文学運動」」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 17, pp. 151-157, 2019/3

齋藤理生 「「桜桃」と応答」『テキスト分析入門 実践編』神奈川大学外国語学部松本研究室, pp. 42-49, 2018/6

齋藤理生 「一九四七年前後の〈小説の面白さ〉―織田作之助と「虚構派」あるいは「新戯作派」―」『国語と国文学』(東京大学国語国文学会), 95-4, pp. 34-49, 2018/4

齋藤理生 「新発掘・坂口安吾「復員」とその背景」『新潮』115-4, 新潮社, pp. 79-82, 2018/4

4-2. 著書

齋藤理生『小説家、織田作之助』大阪大学出版会, 368p., 2020/1

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

齋藤理生「辻馬車」再考にあたって』『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 17, pp. 1-4, 2019/3

齋藤理生「坂口安吾による織田作之助追悼文の発掘についてのコメント」『日本経済新聞』日本経済新聞社, p. 11, 2019/2

齋藤理生「書評 尾崎名津子著『織田作之助論 〈大阪〉表象という戦略』」『昭和文学研究』(昭和文学会), 77, pp. 160-162, 2018/9

齋藤理生「敗戦直後の新聞の片隅に掲載された短篇(けし粒小説)についてのコメント」『朝日新聞』朝日新聞社, p. 36, 2018/4

4-4. 口頭発表

齋藤理生(パネリスト)「関西支部の意義と展望」日本近代文学会関西支部秋季大会創設 40 周年特別企画, 日本近代文学会関西支部, 神戸大学, 2019/11

齋藤理生「戦中戦後の新聞における作家の談話の位置—横光利一・谷崎潤一郎・織田作之助・志賀直哉」共同研究会 新聞小説を多角的に考える, 大阪大学近代文学研究会, 大阪大学, 2019/9

齋藤理生「大佛次郎『帰郷』と新聞」共同研究会 新聞小説の時代・領域横断, 立教大学, 2019/3

齋藤理生(パネリスト)『正義と微笑』の(笑い)」日本キリスト教文学会関西支部冬季大会, 日本キリスト教文学会関西支部, 大阪大学, 2019/1

齋藤理生「高見順『東橋新誌』論—「東京新聞」を手がかりに」共同研究会 昭和戦前期の新聞小説を考える, 大阪大学近代文学研究会, 大阪大学, 2018/9

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

齋藤理生 群馬大学ベストティーチャー賞 優秀賞(平成 24 年度), 群馬大学, 2013/5

齋藤理生 群馬大学ベストティーチャー賞 優秀賞(平成 22 年度), 群馬大学, 2011/5

齋藤理生 群馬大学ベストティーチャー賞(平成 19 年度), 群馬大学, 2008/5

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2017 年度～2021 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:齋藤理生

課題番号:17K02450

研究題目:1940 年代の新聞における文芸欄の基礎的研究

研究経費:2018 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

2019 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

本研究では 1940 年代の新聞における文芸欄の実態を調査・分析する。研究の主な目的は、戦中戦後の新聞における文学者の創作・随想・論説などが、混乱期の日本の何をどのように表現していたのか、それらの特徴と社会的役割を明らかにすることである。その際、中央の大手新聞社が東京で発行したものだけでなく、その地方版や地方紙、夕刊紙、専門紙、機関紙など、多様な種類の新聞を取り扱い、多角的にアプローチする。このような研究は、個別の新聞・作家・作品の理解を深め、埋もれていた資料を発掘し、近代の文芸・文化とメディアと読者との関係を再検討する歴史的な視座をもたらすはずである。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本近代文学会・評議員, 2018年4月～現在に至る
昭和文学会・幹事, 2016年5月～現在に至る
日本近代文学会関西支部・運営委員, 2015年3月～2019年3月

5. 勢田 道生 准教授

1980年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学)(大阪大学、2011年)。大阪大学大学院文学研究科助教、日本学術振興会特別研究員(PD)、大阪大学大学院文学研究科特任講師(常勤)を経て、2017年10月より現職。専攻：日本中近世文学

5-1. 論文

勢田道生 『『大日本史』論贊における歴史の展開と天皇』『文化史のなかの光格天皇—朝儀復興を支えた文芸ネットワーク—』pp. 187-208, 2018/6

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

勢田道生 第十回日本近世文学会賞, 日本近世文学会, 2014/5

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2016年度～2019年度、若手研究(B)、代表者:勢田道生

課題番号:16K16773

研究題目:近世中期の有職家・神道家をめぐる学芸ネットワークの研究—神村正鄰を中心に—

研究経費:2018年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

2019年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

神村正鄰を中心的対象として、有職家・神道家の学芸の特徴とその社会的意義を明らかにする。これにより、従来の国学中心主義的近代学芸史を相対化し、近世和学の総体を把握する手がかりとする。また、神村正鄰旧蔵書を手がかりとして、有職家・神道家をめぐる人的・文献的ネットワークの実態を明らかにする。これにより、有職家・神道家をめぐる学問的影響関係のみならず、近世における知的資源の流通構造や、知的資源の媒介者としての近世有職家の役割を明らかにする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 山本 嘉孝 講師

1985年生。2008年、米国ハーバード大学学士号（Literature専攻）。2012年、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻比較文学比較文化分野修士号。2012～2015年、日本学術振興会特別研究員（DC1）。2016年、東京大学大学院（同上）博士課程単位取得退学。2017年より大阪大学文学研究科講師（2019年3月退職）。専攻：日本漢文学／日本近世文学

6-1. 論文

山本嘉孝「室鳩巢の和陶詩 — 模倣的作詩における宋詩の影響」『アジア遊学 — 文化装置としての日本漢文学』勉誠出版, pp. 69-79, 2019/1

山本嘉孝「清水赤城と『名山図譜』」『水田紀久先生追悼文集』中尾松泉堂書店, pp. 77-80, 2018/12

山本嘉孝「室鳩巢の擬古詩 — 模倣・虚構・寓意」『北陸古典研究』(北陸古典研究会), 33, 北陸古典研究会, pp. 22-34, 2018/12

山本嘉孝「中村蘭林と和歌 — 学問吟味の提言と平安朝の讃仰」『文化史のなかの光格天皇 — 朝儀復興を支えた文芸ネットワーク』勉誠出版, pp. 209-226, 2018/6

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

山本嘉孝「置き字を見分けるには？」『漢文のルール』笠間書院, pp. 31-46, 2018/5

6-4. 口頭発表

山本嘉孝「光格天皇歌壇と漢詩 — 天明三年九月十三日当座詩歌会を中心に」科研基盤研究B「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」公開研究会Ⅱ, 科研基盤研究B「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」, 大阪大学, 2019/3

山本嘉孝「蕙斎・北斎の『絵本孝経』挿絵について」第14回北斎序文を読む研究会, Late Hokusai: Thought, Technique, Society, 大英博物館, 2018/8

Yamamoto, Yoshitaka, “Transcultural Dimensions of Edo Japan: Flower Arrangement and Tea Ceremony”, Workshop: Transcultural Dimensions of Edo Japan, Cluster Asia and Europe, Heidelberg University, Heidelberg University, 2018/7

Yamamoto, Yoshitaka, “Paper and Threads: My Encounter with Early Modern Japanese Books”, JSPS 外国人特別研究員サマー・プログラム2018, 日本学術振興会, 湘南国際村センター, 2018/6

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

山本嘉孝 第10回日本近世文学学会賞, 日本近世文学学会, 2014/5

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-13 比較文学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：橋本 順光

准教授：鈴木 暁世

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
14	3	3	0	0	0	1	0

*うち留学生4名、社会人学生0名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	9	2	0	2
2019	2	0	0	2
計	11	2	0	4

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、講義・演習で、比較文学の基礎的概念および文学批評の主要な分析方法が吸収できることを目標とする。その際に、とりわけ英語文献を中心にして、文学史・歴史の流れを押さえたうえで、小説を精読し、関連の外国語文献を参照しながら、レポート、レビュー、論文が執筆できるよう心がける。関連して、学術的な口頭発表と質疑応答の習得も視野に入れ、論文執筆に必要な先行研究の整理、問題の発見、調査、執筆にかかわる総合的な能力を涵養する。

大学院においては、上記に加えて、研究計画の立案と実行をできるかぎり院生同士で議論しながら確認を行い、TA・RAなどの機会も積極的に利用することで、コミュニケーションや指導にかかわる総合的な能力の養成を目標とする。研究室においては、比較文学の入門や教育に資する文献を広く収集・紹介し、講読を奨励する。

2. 研究

教員は毎年最低2本の論文を執筆、大学院生は毎年最低1回の学会発表をおこなうとともに、教員・大学院生は、国内・国外での研究発表および論文投稿に努力し、あわせて紀要・報告書の執筆も推進することを目標とする。大学院生には、機会に応じて学内・学外の研究資金への応募を奨励するとともに、教員も適宜、共同プロジェクトの企画応募を努力するよう心がける。また、研究室の設備と備品の点検に留意するとともに、とりわけ図書について研究に支障のないよう収集に心がけ、研究環境の維持・改善に努力し、研究の視野と可能性を拡大することを目標とする。

3. 社会連携

研究成果や資料を広く一般に公開するよう努力し、研究成果を社会に還元する書物の刊行も積極的に推進するよう心がける。学会や各種団体の委員などの依頼や、学会・研究会などの開催校としての受け入れ依頼にも、できるかぎり応じ、研究成果の普及を図るよう、一般向けの公開講座や研究会などにおいても積極的に発表に努力することを目標とする。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

講義・演習では、主として英語圏と明治大正期の資料を使用し、適宜、現代の大衆文化の事例に言及しながら、比較文学の基礎から応用までの教育を行った。その際には、文学批評の基本概念と応用の習得を徹底した。学部生向けの授業でも英書を中心に外書講読の演習を必ず受講するよう奨励した。学部・大学院ともに口頭発表と論文をできるかぎり各受講生同士で論評するよう徹底させ、質疑応答の練習を行った。また博士論文作成演習の一部を延長して、その後半部分で卒業論文作成演習を合同で行い、基礎的な技術や知識の共有とともに、院生の指導能力の涵養に努めた。

2. 研究

院生は、ほぼ全員が1本以上の論文を執筆し、学会発表や研究会での発表を行い、積極的に学会に参加した。この2年で教員は、目標以上の多数の論文を執筆した。科学研究費や外部資金を利用して研究を行い、共同研究を組織したほか、研究分担者として複数の海外を含む研究機関での共同研究に参加した。大学院生も学内外の助成やプログラムなどに申請した。その結果、多くの海外調査および外国語による研究発表が可能となった。研究室の設備備品は定期的に点検した。メーリングリストや授業などで、比較文学に関係する内外の書籍を幅広く推薦・紹介しあい、収集と講読とともに、最新の研究動向をふまえるよう心がけた。

3. 社会連携

外部から講師を招き、共同研究の成果発表として一般に開かれた複数のワークショップやシンポジウムを行った。その際には院生、学部生、教員が積極的に協力し、発表を行った。この2年間で教員は、非会員にも開かれた学会や一般向けの会合で多数発表し、一般向けの論考を寄稿したほか、積極的に研究成果の還元を図った。さらに日本比較文学会、国際比較文学会（ICLA）などで、運営と社会還元に努力した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

前記の活動の結果、所期の目標は十分に達成できたと考えられる。

2. 研究

前述の活動の結果、初期の目標は十分に達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前述の活動の結果、初期の目標は十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	2	0	2
2019	2	0	2
計	4	0	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【2018年度】〔課程博士〕

陳 潮涯 「日本近代文学における『聊齋志異』の受容 ―近代作家を中心に―」

主査：清水 康次教授

副査：中 直一教授・橋本 順光准教授・高橋 文治（大阪大学名誉教授）

LIN TZUYING 「大岡昇平文学における体験と創造 ―戦争小説を中心に―」

主査：清水 康次教授

副査：北村 卓教授・橋本 順光准教授・斎藤 理生准教授

【2019年度】〔課程博士〕

吉田大輔 「ものをつくることを書く、ものをつくるひとを書く―幸田露伴について―」

主査：橋本順光教授

副査：中直一教授・出口智之東京大学准教授

朴秀浄 「三島由紀夫におけるセクシュアリティの表象―同時代の性に関する知を手掛かりに―」

主査：橋本順光教授

副査：中直一教授・梶尾文武神戸大学准教授

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	2(2)	1(1)	0(0)	1(0)	3(3)	7(6)
2019	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
計	3(3)	1(1)	0(0)	1(0)	3(3)	8(7)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	1	4	3	4	4	16
2019	3	5	0	0	0	8
計	4	9	3	4	4	24

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

有村友里「「つながり」を「回復」する物語としての『八つ墓村』—執筆の同時代背景を踏まえた横溝正史ブーム再考—」
『日本研究論集』第18巻, pp.42-65, 2018/10

〔博士後期〕

陳潮涯「国木田独歩と『聊齋志異』—「竹青」と「王桂庵」を中心に—」『阪大近代文学研究』第16号, pp.1-19, 2018/3
陳潮涯「佐藤春夫の『聊齋志異』翻訳—『支那童話集』をめぐる—」『阪神近代文学研究』第19号, pp.52-69, 2018/5
陳潮涯「芥川龍之介「首が落ちた話」と『聊齋志異』の「諸城某甲」—継承と変容—」『待兼山論叢 文学篇』第52号,
2019/3

朴秀浄「三島由紀夫と澁澤龍彦—『血と薔薇』創刊号をめぐる—考察—」『三島由紀夫研究』第18巻, pp.26-37, 2018/05
朴秀浄「三島由紀夫における同性愛言説の受容—『仮面の告白』と『禁色』とを中心に—」『比較文学』第61号, 2019/03
朴秀浄「三島由紀夫『潮騒』における「純愛」—同時代の性教育との関連性を視座として—」『阪大近代文学研究』第17号, 2019/03

【2019年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

ESCANDE Jessy Yvon「ジャンル論から見る谷崎潤一郎の怪奇小説「人面疽」——ファンタスティック小説論を巡って——」『阪神近代文学研究』第20号, pp.14-29, 査読有, 2019/5/31

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

有村友里「横溝正史『八つ墓村』とインペリアル・ゴシック—科学と非科学、本格と変格のはざままで—」, 大阪大学・チュエロンコン大学日本文学国際研究交流集会, 大阪大学、豊中キャンパス 中庭会議室, 2018/6/26

有村友里「『八つ墓村』に見る横溝正史の H.R.Haggard 受容 —本格と変格、科学と怪奇のはざままで—」, 2018年度阪大比較文学学会学位論文発表会(学士・修士・博士), 大阪大学、豊中キャンパス中庭会議室, 2019/2/12

川手寛子「安部公房による海外 SF 受容」, 2018年度阪大比較文学学会学位論文発表会(学士・修士・博士), 大阪大学、豊中キャンパス中庭会議室, 2019/2/12

有村友里「『八つ墓村』と横溝正史ブーム—『週刊少年マガジン』を補助線として—」, 阪大比較文学学会シンポジウム 児童と文学 —怪と奇と性をめぐって—, 大阪大学、豊中キャンパス芸術研究棟芸3講義室, 2018/11/15

川手寛子「安部公房による海外 SF 受容 —1957年を境に現れる表現の変化に注目して—」, 阪大比較文学学会シンポジウム 児童と文学 —怪と奇と性をめぐって—, 大阪大学、豊中キャンパス芸術研究棟芸3講義室, 2018/11/15

〔博士後期〕

陳潮涯「日本近代作家における『聊齋志異』の受容」,2018年度阪大比較文学会学位論文発表会(学士・修士・博士),大阪大学、豊中キャンパス中庭会議室, 2019/2/12

林姿瑩「大岡昇平文学における体験と創造 —戦争小説を中心に—」,2018年度阪大比較文学会学位論文発表会(学士・修士・博士),大阪大学、豊中キャンパス中庭会議室, 2019/2/12

エスカンド ジェシ「怪奇小説鑑賞における不安の機能と手法 谷崎潤一郎『人面疽』の一例を巡って」,第56回阪神近代文学会2018年度冬季大会,大谷大学慶間館2階 K207教室, 2018/12/08

陳潮涯「太宰治「竹青—新曲聊齋志異—」の作意—原典『聊齋志異』との比較考察を通じて—」,第37回和漢比較文学会大会,帝塚山学院大学狭山キャンパス E棟 E200教室, 2018/9/23

朴秀浄「『潮騒』における「純愛」—同時代の性教育を視座として—」,阪大比較文学会シンポジウム 児童と文学—怪と奇と性をめぐって—,大阪大学、豊中キャンパス芸術研究棟芸3講義室, 2018/11/15

エスカンド ジェシ「文学研究における自民族中心主義の悪影響に関して—幻想文学論を中心に—」,2018インターナショナル・カルチュラル・タイフーン in Ryukoku, Kyoto, 龍谷大学、大宮キャンパス北翼 104教室, 2018/06/24

朴秀浄「三島由紀夫にみる同性愛言説の受容—『仮面の告白』と『禁色』とを中心に—」,日本比較文学会第80回全国大会,日本大学文理学部3号館B室(3404教室), 2018/06/09

パフチャレク パヴェウ「現代美術における女性性と自己(セルフ)—ポーランド美術を中心に—」,ポーランドの美術,京都市立芸術大学、交流室, 2018/05/10

パフチャレク パヴェウ「日本の戦後美術と草間彌生」,日本の現代美術,近代美術館ヴロツワフ, 2018/08/17

パフチャレク パヴェウ「日本と中央ヨーロッパの現代美術」,栗棟美里,ルシア・タロヴァの展覧会のトーク・イベントとレクチャー,大阪、テツカヤマ・ギャラリー, 2018/09/15

パフチャレク パヴェウ「日本ポーランド国交樹立100周年—現代美術」,ポズナン美術大学のオープンレクチャー,ポズナン美術大学、アトリウム, 2018/12/13

【2019年度】

〔博士前期〕

飯村言葉「『東京デパート戦争体験記』にみる怪異と消費社会の関係」,阪大比較文学会シンポジウム 恐怖と想像力の行方,阪大文学研究科, 2019/11/7

胡恒穎「ホラー映画におけるシミュレーションとシミュラクル—人面魚を例として—」,阪大比較文学会シンポジウム 恐怖と想像力の行方,阪大文学研究科, 2019/11/7

〔博士後期〕

朴秀浄 “Reception of Stendhal in Mishima Yukio: Focusing on the Sexuality Issues”, The 22nd General Congress of International Comparative Literature Association, University of Macau, 2019/7/30

朴秀浄「三島由紀夫におけるセクシュアリティの表象—同時代の性に関する知を手掛かりに—」,阪大比較文学会学位論文発表会,大阪大学大学院文学研究科, 2020/2/10

PACHCIAREK Pawel Lukasz “Yayoi Kusama and the Queer Theory”, 21st International Congress of Aesthetics, University of Belgrade, 2019/7/25

PACHCIAREK Pawel Lukasz “Japaneseness in Polish contemporary art practices”, THE SIGNATURE OF THE ARTIST THE PRESENCE OF JAPANESE TRADITION IN CONTEMPORARY POLISH ART, The Association of Polish Architects, 2019/6/10

PACHCIAREK Pawel Lukasz 「クイア理論と草間彌生—キャンブ様式としての文学とハブニング活動—」,第70回美学会全国大会,成城大学, 2019/10/12

ESCANDE Jessie Yvon 「文芸翻訳における間文化的移行の問題性に関して—意味を成す通底ネットワークの崩壊: 宮部みゆき「時雨鬼」における<鬼>を事例に—」,日本記号学会第39回大会,早稲田大学, 2019/5/26

ESCANDE Jessie Yvon 「日本ファンタジー文芸作品における西洋趣味 —モチーフ導入のクロスメディア性を巡って—」,

カルチュラルタイフーン2019, 慶應義塾大学, 2019/6/1

ESCANDE Jessy Yvon 「日本ファンタジーの文化移転的ジャンル成立に関して—西洋由来のモチーフの移転プロセスを中心に—」, 阪大比較文学会シンポジウム 恐怖と想像力の行方, 阪大文学研究科, 2019/11/7

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2019年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2019年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

サワシユ 晃子 博士後期課程修了、Victoria & Albert Museum, London, Research Fellow, 2018/4

小橋 玲治 博士後期課程修了、東京成徳大学人文学部日本伝統文化学科、助教、2018/4

吉田 大輔 博士後期課程修了、大阪府立大学工業高等専門学校、講師、2018/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 5名

2018年度:0名 2019年度:5名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 2名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 2名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2018年度:0名 2019年度:1名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2018年11月15日 阪大比較文学会シンポジウム 「児童と文学—怪と奇と性をめぐって—」

2019年11月7日 阪大比較文学会シンポジウム 「恐怖と想像力の行方」

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

2019年2月12日 学位論文発表会

2020年2月10日 学位論文発表会

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 清水 康次 教授

1954年生まれ。京都大学文学部（国語学国文学専攻）卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程（国語学国文学専攻）修了。博士（文学）（京都大学、1995）。大阪女子大学助教授、京都光華女子大学教授等を経て、2009年10月より現職（2019年3月定年退職）。専攻：日本近代文学、書誌出版文化研究

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

清水康次『「羅生門」の世界と芥川文学』大阪大学出版会, 240p., 2019/1

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 橋本 順光 教授

1970年生。大阪大学文学部英文学専攻卒業（1994）、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究修士課程修了（1997）、ランカスター大学大学院歴史研究科博士課程修了 Ph.D., (2008)。2001年4月より横浜国立大学教育人間科学部講師、2009年4月より大阪大学文学研究科准教授を経て、2019年4月より現職。専攻：比較文学・英国地域研究

2-1. 論文

Hashimoto, Yorimitsu, “On the Marine Road: Anglo-Japanese Encounters and Exchanges in Modern Maritime Culture”, *Yearning for Foreign Cultures*, 国際日本文化研究センター, pp. 79-93, 2020/3

橋本順光「英国エージェントH・P・シャストリの情報活動 東京・上海・ロンドンで活躍した「情報ブローカー」 付・インドで押収され

- た大川周明の英文書簡とその翻訳」、『大阪大学文学研究科紀要』60, 大阪大学文学研究科, pp. 77-106, 2020/3
- 橋本順光 「和辻哲郎の「江戸城」発見—「城」(1935)における濠と高層建築の対比」『風土 (Fûdo) から江戸東京へ』(法政大学江戸東京研究センター), 法政大学出版局, pp. 61-107, 2020/3
- 橋本順光 「東洋人アメリカ発見説とその転生—日本の写しとしてのインカ帝国幻想」、『映しと移ろい—文化伝播の器と触変の実相』花鳥社, pp. 349-363, 2019/9
- 橋本順光 「翻案されたタイ表象—モームの「九月姫とナイチンゲール」(1922)と光吉夏弥の翻訳(1954)—」『タイ国日本研究国際シンポジウム 2018 報告書』(チューラーロンコーン大学文学部), チューラーロンコーン大学文学部, pp. 66-70, 2019/3
- 橋本順光 「欧亜にまたがる露伴—露伴の参照した英文資料とその転用」『文学研究科紀要』(大阪大学文学部), 59, 大阪大学文学部, pp. 55-90, 2019/3
- 橋本順光 「裁量労働制の寓話—ヴェネツィアの彫刻家から博多の仙厓まで」『美学研究』(大阪大学文学部), 13, 大阪大学文学部, pp. 152-157, 2019/3
- 橋本順光 「『評論の評論』の風刺漫画と 1920 年代—プロパガンダとファシズムと女性嫌悪」『万国風刺漫画大全第 3 期 戦間期の世界』日本語別冊解説, エディション・シナプス, pp. 3-27, 2018/11
- Hashimoto, Yorimitsu, “Review of Reviews and the roaring twenties: From War to end War to Peace to end Peace”, *Caricatures and Cartoons : a History of the World 1921-30*, Edition Synapse, pp. 5-25, 2018/11
- 橋本順光 「マレー半島横断運河計画—クラ地峡をめぐる日英の相関と衝突—」『日本研究論集』(チューラーロンコーン大学文学部), 18, チューラーロンコーン大学文学部, pp. 96-127, 2018/10

2-2. 著書

Hashimoto, Yorimitsu, *Caricatures and Cartoons : a History of the World 1921-30*, 3 volumes, Edition Synapse, 1620p. (資料の編集と解説), 2018/11

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- Hashimoto, Yorimitsu, “Marine Vessel and Road as a Socializing Vehicle”, *Yearning for Foreign Cultures*, 国際日本文化研究センター, pp. 75-77, 2020/3
- 橋本順光 「北極航路と北の果て楽園伝説」『産経新聞関西版朝刊』(産経新聞社), 産経新聞社, p. 11, 2018/4/2

2-4. 口頭発表

- Hashimoto, Yorimitsu, “The Mongolian Alexander’s Tomb as a Heartland: Theosophy, the Naros Cycle, and the Resurrection of Genghis Khan”, Mutual understanding of different cultures, ethnicity, language through the prism of comparative typological research, Tashkent State Institute of Oriental Studies, Tashkent State Institute of Oriental Studies, 2020/3/6(コロナ対応により学会延期)
- 橋本順光 「獅子文六の『南の風』(1942)にみる「からゆき」—カオダイ教と西郷隆盛生存説の転用」阪大比較文学学会学位発表会, 阪大比較文学会, 阪大文学研究科, 2020/2/10
- Hashimoto, Yorimitsu, “Rule of Divide? Difficulties and Challenges of Comparing Modern East Asian Literatures”, International Conference Commemorating the 60th Anniversary of the Korea Comparative Literature Association, the Korea Comparative Literature Association, Sungkyunkwan University, Seoul, 2019/12/8
- 橋本順光 「手塚治虫が描いた原子力の平和利用—来るべき人類と鉄腕アトム」阪大比較文学学会シンポジウム 恐怖と想像力の行方, 阪大比較文学会, 阪大豊中キャンパス, 2019/11/7
- Hashimoto, Yorimitsu, “How the Invisible Man Appears in Japan: Revelation and Subversion of the Gender Hierarchy”, The Challenge of Information Society: Japanese Perspective, Tartu University, Estonia, Tartu University, 2019/9/25
- Hashimoto, Yorimitsu, “Spectacular Tentacular: Transmedial Image of the Octopus”, International Comparative Literature Association Worlds Congress, International Comparative Literature Association, Macau University, China, 2019/7/30

Hashimoto, Yorimitsu, “Marine Vessel and Road as a Socializing Vehicle Enroute Experiences, Transnational Encounters and Exchanges”, International Comparative Literature Association Worlds Congress, International Comparative Literature Association, Macau University, China, 2019/7/31

Hashimoto, Yorimitsu, “The Two Faces of a Travel Agent: Japanese Passengers and A. K. Hasheem at Colombo”, International Comparative Literature Association Worlds Congress, International Comparative Literature Association, Macau University, China, 2019/7/31

Hashimoto, Yorimitsu, “Cycle or Recycle of Millenarianism Theosophy, the Naros Cycle, and Resurrection of Genghis Khan”, International Comparative Literature Association Worlds Congress, International Comparative Literature Association, Macau University, China, 2019/7/31 (台風のため午後の部の開催が中止)

橋本順光 「手塚治虫における喋る生首の系譜と典拠－鉄腕アトムからブラック・ジャックまで－」2018 年度阪大比較文学学会学位論文発表会 (学士・修士・博士), 阪大比較文学学会, 阪大豊中キャンパス, 2019/2/12

橋本順光 「ある「混血児」の肖像－志賀直哉とジョン・パリに描かれたイネ・プリנקリー」招待講演, 神戸学院大学人文学部研究推進費公開研究会「久米民十郎の再発見」, 神戸学院大学有瀬キャンパス, 2019/1/27

Hashimoto, Yorimitsu, “Representations of torture across media: Oriental, Medieval or Occidental?””, Literature, Arts, and Media: Rivalry or Alliance?, Institute of Cultural Research, University of Tartu, University of Tartu, 2018/12/13

橋本順光 「博覧会であいましよー博覧会を舞台にした恋愛作品とマイナー・トランスナショナルリズムの可能性」 「万国博覧会と人間の歴史」第 12 回公開研究会, 国際日本文化研究センター共同研究班, 国際日本文化研究センター, 2018/12/8

橋本順光 「手塚治虫における『聊齋志異』の転用－「狐聊」から「四谷快談」まで」阪大比較文学学会シンポジウム「児童と文学 怪と奇と性」, 阪大比較文学学会, 阪大豊中キャンパス, 2018/11/15

橋本順光 「翻案されたタイ表象－モームの「九月姫とナイチンゲール」(1922)と光吉夏弥の翻訳(1954)－」タイ国日本研究国際シンポジウム 2018, チュラーロンコーン大学文学部, チュラーロンコーン大学, 2018/8/25

Hashimoto, Yorimitsu, “Encounter as an accident or accident as an encounter? Twist of “Coup de Foudre” in Jane Eyre”, Prismatic Jane Eyre Workshop, Oxford University, Oxford University, 2018/7/10

橋本順光 「和辻哲郎の「江戸城」発見－「城」(1935)における壕と並木」国際シンポジウム「風土(FUDO)から江戸東京へ」, 法政大学江戸東京研究センター, 法政大学市ヶ谷キャンパス, 2018/7/7

Hashimoto, Yorimitsu, “How Many Miles to Fusang? Rediscovery and Appropriation of a Chinese Buddhist Missionary Hui Shen’s Record”, the 9th Chinese Cultural Renaissance Forum, Kunming University, Kunming University (昆明大学, 雲南), 2018/7/5

橋本順光 「マレー半島横断運河計画－クラ地峡をめぐる日英の戦略と宣伝」第 9 回 大阪大学・チュラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 大阪大学文学部・チュラーロンコーン大学文学部, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/6/26

橋本順光 「偽史と物語のあいだ－インカ帝国日本起源説とその転用－」 「多分化交渉におけるあいだの研究」公開セミナー, 国際日本文化研究センター共同研究班, 国際日本文化研究センター, 2018/5/28

橋本順光 「欧州州航路の文学のために－『欧州航路の文化誌』読書会に寄せて」日本比較文学学会関西支部 4 月例会, 日本比較文学学会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/4/28

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2016 年度～2018 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:橋本順光

課題番号:16K02601

研究題目:20 世紀前半における英国黄禍論小説と日本のアジア主義小説の比較文学的研究

研究経費:2018 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

英国では黄禍論が娯楽小説の題材として流通した。東洋の怪人が西洋世界の転覆や侵略をもくろむという小説は、その娯楽性と汎用性の高さゆえ世界に広がり、日本でも明治期から翻訳ないし翻案が続いた。本研究では、① 英国黄禍論小説と日本の翻案とを比較し、黄禍論がアジア主義へと書き換えられた系譜を発掘する。その際には、② 山田長政や源義経にまつわるアジア主義的な偽史の宣伝が相互影響した過程に注目したい。これらの作業をふまえ、③ 英国黄禍論小説が、高垣眸らのアジア主義小説へと転用された過程を解明し、日英双方でいわば共犯的に偽史が利用された可能性を探る。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2019年度～2021年度、6：研究助成、助成金獲得者：橋本順光

助成金名：2019年度アジア歴史研究助成

研究題目：諜報記録にみるインド独立運動家とアジア主義者の交流とその表象

助成団体名：公益財団法人 JFE21 世紀財団

助成金額：2019年度 直接経費 400,000 円(総額 1,500,000 円)

研究の目的：

英国政府に依頼され、日中のアジア主義者について膨大な諜報報告書を送った H・P・シャストリ(Hari Prasad Shastri)は英国の対日政策に多大な影響を与えたにもかかわらず、これまでほとんど研究されてこなかった。Poplewell(1995)が「エージェント P」という正体を初めて指摘し、対日警戒論を加速した経緯について詳述したが、R・B・ボース、サバルワル、ポール・リシャール、大川周明らの言動を監視していた諜報記録は等閑視されたままである。そこで本研究は、来日中(1916-18)のシャストリの報告を中心に、その活動の再構築を目指す。シャストリが孫文に招かれ上海に渡ったという回顧は極めて疑わしく、アジア主義的な諸団体を隠れ蓑にして、諜報活動を続けたことは日本の外交文書からも裏付けられる。したがって、シャストリが神智学協会上海支部長の際に発展したベサント・スクールは、アニー・ベサントからインド自治運動という反英的要素を抜き取り、女子教育に特化することで神智学協会を友愛の共同体として脱色した可能性が高い。これまでシャストリの日中での活動の連続性に注目し、英国への移住との関連からその活動の全貌をとらえなおしたい。

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本比較文学会・国際活動委員長, 2017年6月～2019年6月

ジャポニスム学会・奨励賞推薦委員, 2017年3月～現在に至る

International Comparative Literature Association(国際比較文学会)・理事, 2013年7月～2019年7月

日本比較文学会・理事, 2013年6月～2019年6月

日本比較文学会・国際活動委員, 2013年6月～現在に至る

日本比較文学会・関西支部幹事, 2009年4月～2020年6月

2-14 中国文学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 1 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：浅見 洋二

助教：陳 竺慧

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
6	10	1	1	0	0	0	0

*うち留学生6名、社会人学生0名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	4	1	0	1
2019	2	3	0	0
計	6	4	0	1

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

本専門分野は、主に清朝時代以前の漢語文献について、文言体と白話体の別なく、文献学的手法を用いて正確な訓詁を与える点に教育の主眼が置かれている。また、研究室内の教育・研究活動をより活性化するために、カリキュラムとは別に、教員スタッフを中心に研究会も組織されている。

こうした体制の成果として、近年、大学院生の学力はかなり向上し、学外からも一定の評価を受けるに至っている。たとえば、大学院生の論文は学会誌にも掲載されるようになってきている。

だが、一方で、学部・MC・DCの学力に合わせた、段階的なカリキュラム編成は必ずしも十分には整備されていない。これは主にスタッフの不足による。

今後は、大学院生、学部生ともに学生数を増やし、学年別に近いカリキュラム編成を取れるよう、努力したい。

2. 研究

教室構成員はそれぞれの分野で研究をすすめ、大学院生の論文の学会誌への掲載も見られる。ただし、大学院生に関しては在籍者の減少により、論文掲載の数は減少している。

海外、学外の研究者との連携も維持しており、教員の海外出張も行われている。

また、科学研究費の取得にもつとめ、教員スタッフは「基盤研究 (B)」、「基盤研究(C)」等を取得している。

研究活動という面においては、本教室の教員は十分活性化されていると言えよう。今後もこの方向を維持できるよう努力し、学生獲得にも努力したい。

3. 社会連携

研究成果に関する報道機関の取材、執筆依頼等には積極的に協力することとし、研究室のHPを充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とした。また、研究室編著の学術的一般書等を刊行し、教員等が公開講座や講演会等に積極的に対応することによって、研究成果や専門知識の社会への還元を図りたい。その他、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼にも、積極的に対応したい。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

演習においては、基礎的な語学力の習得を意識した教育をおこない、講義においては、専門的知識の習得とその応用に主眼を置いた教育を行った。大学院生の研究計画・研究報告については、通常の授業時間ではスケジュールや研究テーマの絞込みをはじめ、研究テーマに即した事項を中心にディスカッションを行い、年度の初めと終わりに演習で発表させ、指導するほか、学会発表や論文の執筆に際しても綿密な指導をおこなってきた。

2. 研究

教員は科学研究費を取得して国内外の学会で研究発表を行ったほか、国内外の学術誌に論文を発表した。また、教員は日本中国学会や東方学会で専門委員等をつとめるなど、各学会において主導的活動を行った。

3. 社会連携

教員が年間で10回程度の公開講座・講演会を実現した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標はおおむね達成できたと考えている。卒業学生・修了大学院生以外の学生たちに関しても、中国学にかかわる基礎的知識、思考法について、教育実践によって一定の成果を獲得していると判断し得る。掲げた目標はおおむね達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・博士後期課程の大学院生については、目標はほぼ達成された。特に教員の研究活動については、この十年、一貫して高い水準を保っている。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	0	0	0
2019	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
2019	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)
計	2(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(1)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	0	0	0	0	0	0
2019	0	0	3	0	0	3
計	0	0	3	0	0	3

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

ファン・ダム・トム「黄遵憲「台湾行」について」『待兼山論叢』第52号, pp.31-43, 2018/12

【2019年度】

〔博士前期〕

小川主悦「愛国舞台から飛び降りて —— 張愛玲「色、戒」における女学生の自己決定」『第2回若手研究者フォーラム 要旨集』 pp.54-57, 査読有, 2020/3/23

[博士後期]

ファン・ダム・トム「黄遵憲「降將軍歌」について」『待兼山論叢』第53号, pp.33-40, 査読無, 2019/12/25

(2)口頭発表

【2018年度】

なし

【2019年度】

[博士前期]

小川主税「同志という名のもとに一路翎「洼地上的“戦役”」における男性世界」, 大阪大学文学研究科第一回若手研究者フォーラム, 大阪大学, 2019/9/27

喜多由吏「皎然の離別詩における詩語「孤月」について」, 大阪大学文学研究科第一回若手研究者フォーラム, 大阪大学, 2019/9/27

小川主悦「愛国舞台から飛び降りて —— 張愛玲「色、戒」における女学生の自己決定」, 第2回若手研究者フォーラム, 大阪大学, 2020/3/23 (新型コロナの影響で延期)

[博士後期]

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2019年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

2019年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2018年度:0名 2019年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 6名

2018年度：4名 2019年度：2名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本宋代文学学会事務局

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 浅見 洋二 教授

1960年生。東北大学大学院文学研究科博士課程中途退学。文学博士（京都大学、2009年）。東北大学助手、山口大学講師、同助教授、大阪大学助教授、同准教授を経て、2009年4月、現職。専攻：中国古典詩学

1-1. 論文

浅見洋二 「「避言」と「秘密」—中国の詩をつらぬくもの—」『現代詩手帖』(思潮社), 2020年4月号, 思潮社, pp. 62-69, 2020/3

浅見洋二 「文本的“公”与“私”—蘇軾尺牘与文集編纂—」『文学遺産』(文学遺産), 2019年第5期, 文学遺産, pp. 72-84, 2019/9

浅見洋二 「韓愈「拘幽操」について—罪人の文学史・初探—」『唐宋八大家の諸相』(花書院), 花書院, pp. 93-129, 2019/3

浅見洋二 「文本与秘密—再論言論統制下の文学文本—」『宋代文学評論』(浙江大学出版社), 3, pp. 243-267, 2018/6

1-2. 著書

浅見洋二 『中国宋代文学の圏域—草稿と言論統制—』研文出版, 335p., 2019/9

川合康三, 富永一登, 浅見洋二他 『文選 詩篇 5』岩波書店, 408p., 2019/2

川合康三, 富永一登, 浅見洋二他 『文選 詩篇 4』岩波書店, 436p., 2018/10

川合康三, 富永一登, 浅見洋二他 『文選 詩篇 3』岩波書店, 408p., 2018/7

川合康三, 富永一登, 浅見洋二他 『文選 詩篇 2』岩波書店, 419p., 2018/4

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

浅見洋二 「罪与田園—蘇軾、陸游詩文札記—」第11回宋代文学国際学術研討会, 中国宋代文学学会, 復旦大学, 2019/10

浅見洋二 「テキストの公と私」第3回唐宋八大家シンポジウム, 九州大学QRプログラム, 九州大学, 2019/3

浅見洋二 「文本的公与私—以蘇軾的文学創作活動为中心」2018年国際中青年学者宋代文学研討会, 蘇州大学文学院・文学遺産編集部, 蘇州大学文学院, 2018/8

浅見洋二 「論韓愈《拘幽操》—罪人文学史初探」中国唐代文学学会第19回大会, 中国唐代文学学会, 復旦大学文学院,

2018/8

浅見洋二「闇のなかのテキスト、テキストのなかの闇

一言論統制下における蘇軾の文学活動をめぐって」国際文学倫理学批評研究会第8回大会，国際文学倫理学批評研究会，九州大学，2018/7

浅見洋二「蘇軾文集の編纂与尺牘」[文本世界的内与外—多重視域下的中国古典文学研究]国際學術研討会，華中師範大学，華中師範大学，2018/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2015年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:浅見洋二

課題番号:15K02437

研究題目:南宋文学における故郷・田園に関する研究—陸游・楊万里・劉克莊の詩を中心に—

研究経費:2018年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

中国南宋の陸游・楊万里・劉克莊の詩を中心に取りあげて、そこに表現された故郷・田園の表象について考察する。南宋文学史の特質を明らかにするとともに、士大夫の地方化が進んだとされる南宋期における文学と地域社会との関連性について新たな視点・方法を確立することを目的とする。

1-6-2. 2019年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:浅見洋二

課題番号:19K00369

研究題目:テキストの公と私—蘇軾の詩詞・書簡と文集編纂に関する研究—

研究経費:2019年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本研究は、北宋・蘇軾の詩詞・書簡テキストと文集編纂について、当時の文人社会の圏域・ネットワークと関連づけながら考察することを目的とし、(1)蘇軾の書簡と文集に関する文献学的研究、(2)蘇軾の詩詞と書簡の相互連関に関する研究、(3)蘇軾の書簡と奏議・詔勅・策論との比較研究の三つを基軸として実施する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本中国学会・理事，2018年4月～現在に至る

文部科学省・大学設置・学校法人審議会大学設置分科会 文学専門委員会委員，2016年4月～2020年11月

日本宋代文学学会・会長，2013年6月～2020年3月

日本中国学会・評議員，2011年4月～現在に至る

中国社会文化学会・評議員，2006年4月～現在に至る

2-15 国語学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：金水 敏、岡島 昭浩

准教授：岸本 恵実

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
70	3	9	0	0	0	2	0

*うち留学生6名、社会人学生0名

**日本文学・国語学専修として

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	15	4	0	1
2019	16	1	1	5
計	31	5	1	6

*日本文学・国語学専修として

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

修士・博士論文作成演習の授業に連動して、学会発表、投稿論文作成等のための個別指導を行う。また院生が研究進捗状況を報告・発表しあう研究発表会を開催する。卒業論文作成演習の授業に連動して、個別指導を行うほか、卒業論文中間発表会を開き、学生の卒業論文完成に導く。専門機関の採用情報の入手につとめ、専門職への就職を積極的に支援する。国語学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知する。学部生と大学院生の学問的な連携体制を形成するために、授業形態等に工夫を行う。『待兼山論叢』『語文』等の学内雑誌及び学会誌への投稿を促す。

2. 研究

継続中の科学研究費に関わる研究を行うとともに、新たに科学研究費を申請する。研究を促進するために「大阪大学国

語国文学会」を開催し、学会機関誌『語文』を刊行する。研究を促進し、近隣大学の研究者と連携を深めるために、「国語語彙史研究会」「国語文字史研究会」「土曜ことばの会」を開催する。

3. 社会連携

「Handai-Asahi 中之島塾」「懐徳堂古典講座」その他の社会連携講座に講師として参加する。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

【2018年度】

■学部：卒業論文発表会を2018年10月に実施した。日本文学・国語学専修のうち国語学1名の学生が卒論を提出した。ポスター掲示、メーリングリストその他の手段を通じて、展示会・学外研究会等の情報を広く周知した。

■大学院・共通：研究発表会を2018年7月および11月に実施した。4名が博士前期課程を修了、1名が博士学位申請論文を提出し、その1名に博士の学位を授与した。学部・大学院合同の講義を半期4コマ実施した。大学院生の論文が、学会誌等へのべ9本掲載され、研究発表が15本行われた、という状況である。

【2019年度】

■学部：卒業論文発表会を2019年10月に実施した。日本文学・国語学専修のうち国語学2名の学生が卒論を提出した。ポスター掲示、メーリングリストその他の手段を通じて、展示会・学外研究会等の情報を広く周知した。

■大学院・共通：研究発表会を2019年7月および11月に実施した。1名が博士前期課程を修了、4名が博士学位申請論文を提出し、その4名に博士の学位を授与した。学部・大学院合同の講義を半期4コマ実施した。大学院生の論文が、学会誌等へのべ14本掲載され、研究発表が12本行われた、という状況である。

2. 研究

【2018年度】

科学研究費に関わる研究では、引き続き「キリシタン対訳辞書の語彙比較」が行われ、そのほか分担金によるものが複数行われた。「大阪大学国語国文学会」を2019年1月に実施、学会機関誌『語文』の第110輯(6月)・111輯(12月)を刊行した。「国語語彙史研究会」を3回、「土曜ことばの会」を4回開催した。

【2019年度】

科学研究費に関わる研究では、「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」「キリシタン対訳辞書の語彙比較」が行われ、そのほか分担金によるものが複数行われた。「大阪大学国語国文学会」を2020年1月に実施、学会機関誌『語文』の第112輯(6月)・113輯(12月)を刊行した。「国語語彙史研究会」を3回、「土曜ことばの会」を4回開催した。また2019年5月、国語学研究室の成果発表としていちょう祭展示「近代の作文関係資料」を行った。

3. 社会連携

【2018年度】

金水教授が、プロジェクトマネジメント学会関西支部平成30年度春季シンポジウム、豊中市中央公民館講演会、すぎなみ大人塾総合コース「コトバ・ラボ」、兵庫教育大学言語表現学会平成30年度第2回研究発表会、都市の美を考える会、Handai-Asahi 中之島塾、吹田ロータリークラブ例会に出講し、また、天神寄席8月席鼎談、MBSテレビ「コトノハ図鑑」(2回分)、ABCラジオ「わかぎゑふのハカセちゃん」「伊藤文隆のラジオノオト」、MBSラジオ「福島のおひろの、どうぞお構いなく。」に出演した。

【2019年度】

金水教授が、大村はま先生に学ぶことばの会、豊中市立岡町図書館「文字・活字文化推進事業講演会」、二月天神寄席鼎談「役割語の醍醐味」、Handai-Asahi 中之島塾に出講した。また岡島教授と蜂矢助教・博士後期課程・博士前期課程院

生とで、いちよう祭にて展示「近代の作文関係資料」を行った。

IV. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

学生は、多くの口頭発表を行い、学術誌に載った論文も多かった。論文のうち査読付き雑誌に掲載されたものも少なくなく、目標通りの達成と言える。

2. 研究

科学研究費では「キリシタン対訳辞書の語彙比較」「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」のほか、分担金による複数の研究が行われ、そのほか国立国語研究所の通時コーパスプロジェクトにおける研究などを行った。それを含めて、目標通りの達成と言える。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	1	0	1
2019	4	0	4
計	5	0	5

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

市地 英「馬琴読本における仮名字体の表記研究」

主査：岡島昭浩 副査：金水敏 岸本恵実

後藤 睦「日本語における格標示法の歴史的変化についての研究」

主査：金水敏 副査：岡島昭浩 岸本恵実

百瀬みのり「日本語接続詞の通時的研究—日本語接続詞の成立と展開—」

主査：金水敏 副査：岡島昭浩 岸本恵実

劉 翔「役割語の日中対照研究」

主査：金水敏 副査：岡島昭浩 岸本恵実

高谷由貴「接続表現の歴史的研究—文法史・文体史の観点から—」

主査：金水敏 副査：岡島昭浩 岸本恵実

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	3(3)	1(1)	4(1)	0(0)	1(0)	9(5)
2019	8(5)	3(3)	0(0)	0(0)	3(2)	14(10)
計	11(8)	4(4)	4(1)	0(0)	4(2)	23(15)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	2	3	10	0	0	15
2019	1	3	7	0	1	12
計	3	6	17	0	1	27

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

後藤 睦「「周縁」から眺める日本語」『知のスイッチ——「障害」からはじまるリベラルアーツ』, pp.172-190, 2019/2/21

坂井晶子「明治・大正期の初等教育における句読法—作文教育を中心に—」『日本語の研究』第14巻, 第2号, pp.84-100, 2018/04/01

坂井晶子「句読法の定着過程における規範意識の考察—博文館の投稿雑誌を中心に—」『語文』第111号, pp.49-64, 2018/12/10

高谷由貴「近世資料におけるト書きの史的研究—接続表現トの成立を中心に—」『国立国語研究所論集』第16号, pp.107-127, 2018/10/31

久田行雄「近世蘭学関係の医学書に使用された長音符号の実態」『国語語彙史の研究』第38巻, pp.25-43, 2019/3

石村小春「定家監督書写本における仮名遣訂正の様相」『詞林』第63号, pp.1-26, 2018/6/20

百瀬みのり「中古和文物語作品における「カクテ」と「カカルホドニ」について」『詞林』第63号, pp.36-64, 2018/6/20

百瀬みのり「中古中世散文作品における感動詞「サテ」の成立：前文脈を踏まえない「サテ」について」『詞林』第64号, pp.47-62, 2018/10/20

百瀬みのり「指示詞系フィラーの出現位置—インタビュー談話における—」『待兼山論叢』第52号, pp.55-76, 2018/12/25

【2019年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

後藤睦「『宇治拾遺物語』のノ・ガ尊卑の実態について—「ノ・ガ尊卑説」再考のための端緒として—」『語文』第112号, pp.7(102)-22(87), 査読有, 2019/6/30

- イ・ジェソク「男性一人称<ボク>と<オレ>のキャラクター属性」『日本研究(日本研究)』第 81 号, pp.177-200, 査読有, 2019/9/30
- イ・ジェソク「<発話>のカタカナ表記が表すキャラクター性について」『일어일문학연구(日語日文學研究)』第 111 号, pp.63-81, 査読有, 2019/11/30
- 石村小春「為家本私家集の書写者について—『肥後集』『二条太皇太后宮大式集』『小大君集』の表記をめぐって—」『語文』第 113 号, pp.13-24, 査読有, 2019/12/10
- Sven Sebastian Lindskog「『騎士団長殺し』のキャラクターのスウェーデン語への翻訳の仕方について」『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書』第 3 巻, pp.1-11, 査読無, 2020/3/1
- 劉翔「フィクション作品におけるオネエキャラの表現方法—日中対照を通して—」『待兼山論叢』第 53 号, pp.61-78, 査読有, 2019/12/25
- 劉翔「中国・抗日作品のメディアミックスと日本人表象—『鶏毛信』を例に— (金水敏と共著)」『メディアとことば』第 5 巻, pp.98-116, 査読有, 2019
- カン・ソンムン「『尚古仮字用格』と『増補正誤仮名遣』の関係について — 共通に見られる漢語に注目して —」『日本学報』第 121 巻, pp.63-82, 査読有, 2019/11/30
- カン・ソンムン「『文章仮字用格』の漢語について」『日本研究』第 33 巻, pp.243-266, 査読有, 2020/2/29
- 伊藤智弘「音情報の表示方法より見た「字鏡集」掲出字配列構造の改編とその意味付けについて」『訓点語と訓点資料』第 143 巻, pp.40-14, 査読有, 2019/9/30
- 百瀬みのり「中古中世散文作品における転換の「サテ」について—接続詞の「サテ」に向かうものとしての—」『詞林』第 65 巻, pp.79-102, 査読無, 2019/4/20
- 百瀬みのり「中古・中世散文作品における「カクテ」、「サテ」の機能の差異」『詞林』第 66 巻, pp.37-52, 査読無, 2019/10/20
- 百瀬みのり「フィラー的用法の「で」、「あの (-)」、「え (-)」、「ま (-)」のインタビュー談話における出現率について」『三重大学国際交流センター紀要』第 15 号, pp.33-47, 査読有, 2020/3/31

(2)口頭発表

【2018 年度】

〔博士前期〕

- 山田伸武「上代語助詞ヤによる構文—「係」と「間投」と—, 日本語学会 2018 年度秋季大会, 岐阜大学, 2018/10/13
- セバスティアン・リンドソグ「『パック』シリーズの少年語・上司語について」, 役割語研究会, 大阪大学, 2018/4/23
- セバスティアン・リンドソグ「スウェーデン語における役割語」, 役割語研究会, 大阪大学, 2019/3/17

〔博士後期〕

- GOTO Mutsumi (後藤 睦)「Rethinking the “Breakdown of Limitations of Nouns Preceding Particles -ga and -no” in Middle Japanese (中世期における「ガ・ノ」の上接語の制限の崩壊) 再考」, NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウム「通時コーパスに基づく日本語文法研究」, 国立国語研究所, 2018/9/9
- 後藤 睦「「ノ・ガ尊卑説」再考」, 度 大阪大学国語国文学会, 大阪大学豊中キャンパス, 2019/1/12
- 久田行雄「近世期に使用された長音符号「一」の再検討」, 2018 年第 3 回 土曜ことばの会, 大阪大学, 2018/8/4
- 久田行雄「近世後期板本における書記体選択の様相—楷書体漢字平仮名交じり文を中心に—」, 第 123 回「書物・出版と社会変容」研究会, 一橋大学, 2018/9/29
- 石村小春「藤原為家の『下官集』享受考—私撰集および仮名書状の表記を手がかりとして—」, 第 292 回 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学 豊中キャンパス 文法経本館 2 階大会議室, 2018/9/22
- 石村小春「藤原為家の『下官集』享受考—為家本私家集からの検討—」, 和歌文学会 関西 12 月例会 (第 128 回), 大阪大学 文法経講義棟 41 教室, 2018/12/1
- 石村小春「為家本資料の書写者についての—試論—」, 第 296 回 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学 豊中キャンパス 文法経本館 461 教室, 2019/3/23

市地 英「行頭の仮名字体—後期読本の稿本と板本の比較を通して—」, 日本語学会 2018 年度秋季大会, 岐阜大学, 2018/10/13

カン・ソンムン「渾沌齋松月編『和字便覧』とその増補版について—仮名遣語例集を中心に—」, 韓国日本学会第 98 回 国際学術大会, 高麗大学校, 2019/2/15

藤本 能史「外来語に付される傍線の成立について」, 2018 年第 4 回土曜ことばの会, 大阪大学, 2018/10/27

百瀬みのり「接続詞「で」のフィラー的用法」, 表現学会第 55 回全国大会, 同志社大学, 2018/6/3

百瀬みのり「『うつほ物語』における話題転換の『サテ』について」, 第 43 回表現学会近畿例会, 同志社大学, 2019/2/2

【2019 年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

イ・ジェソク「敬語表現で表出されるキャラクターの属性」, 한국일어일문학회(韓国日語日文學會), 韓国外語大学校, 2019/12/19

石村小春「藤原為家の「越」字用法」, 第 302 回 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2019/11/23

坂井晶子「句読点の一字表記の規範形成過程について—印刷出版と義務教育課程の比較を通して—」, 第 44 回表記研究会研究発表会, 関西大学, 2019/9/21

坂井晶子「明治における句読法の変遷—文典及び作文書の解説を手掛かりとして—」, 令和 2 年度大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2020/1/11"

Sven Sebastian Lindskog「軍人キャラクターにおける「諸君ら」の使用」, 役割語研究会, 大阪大学, 2019/10/30

Sven Sebastian Lindskog「『騎士団長殺し』における登場人物の発話分析—スウェーデンと日本訳の比較—」, 役割語研究会, 大阪大学, 2020/03/20 (コロナ対応により中止)

劉翔「フィクション作品における大阪弁・関西弁の翻訳について—日中対照を通して—」, 役割語研究会, 大阪大学, 2020/03/20(コロナ対応により中止)

カン・ソンムン「『尚古仮字用格』と『増補正誤仮名遣』の関係について—共通に見られる漢語に注目して—」, 土曜ことばの会, 大阪大学, 2019/10/5

カン・ソンムン「『古言梯』以降の仮名遣書における定家仮名遣いについて」, 韓国日本学会 国際学術大会, 東国大学校, 2020/02/08 (コロナ対応により中止)

百瀬みのり「日本語接続詞「で」の成立—文法化の観点から—」, 日本語学会 2019 年度春季大会, 甲南大学, 2019/5/18

山田伸武「上代語における「不定語+ト」引用句と潜伏疑問文, 間接疑問文」, 日本語学会 2019 年度秋季大会, 東北大学, 2019/10/26

百瀬みのり「インターンシップ派遣対象留学生に対する日本語指導と通常授業とのリンクの試み」, 第 28 回ビジネス日本語研究会, 神戸学院大学, 2020/02/20 (コロナ対応により中止)

(3)その他(書評・翻訳など)

【2018 年度】

〔博士後期〕

中野直樹「紹介 岡崎友子・堤良一・松丸真大・岩田美穂編『ココが面白い! 日本語学』, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 第 110 輯, pp. 45-46, 2018/6/30

【2019 年度】

〔博士前期〕

西谷龍二「紹介 岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太編『バリエーションの中の日本語史』『語文』第 112 号, pp.81-81, 査読無, 2019/6/30

〔博士前期・博士後期〕

岡島昭浩・蜂矢真弓・坂井晶子・市地英・藤本能史・カン・ソンムン・高谷由貴・西谷龍二「近代の作文資料」『平成 31 年度／令和元年度いちょう祭展示会 展示目録・解説』, pp.6-21, 査読無, 2019/5/2

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2019 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2019 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018 年度～2019 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

中野 直樹、博士後期課程修了、常葉大学短期大学部日本語日本文学科、助教、2018/4

清田 朗裕、博士後期課程修了、大阪教育大学教育学部、特任准教授、2019/4

山田 昇平、博士後期課程修了、奈良大学文学部、講師、2019/4

依田 恵美、博士後期課程修了、帝塚山大学文学部日本文化学科、准教授、2019/4

高谷 由貴、博士後期課程修了、東亜大学人間科学部国際交流学科、専任講師、2019/9

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018 年度～2019 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2018 年度 : 1 名 2019 年度 : 0 名

<内訳> 中・高等学校の教員 1 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2018 年度 : 0 名 2019 年度 : 0 名

9. 刊行物

2018 年度 『語文』(大阪大学国語国文学会) 第 110 輯・111 輯

2019 年度 『語文』(大阪大学国語国文学会) 第 112 輯・113 輯

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

事務局 国語語彙史研究会 2002 年度以前から現在に至る

国語文字史研究会 2002 年度以前から現在に至る

土曜ことばの会 2002 年度以前から現在に至る

研究会 土曜ことばの会開催 4回
国語語彙史研究会開催 3回

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

* (日本文学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会 (1月 1日間)

研究誌「語文」を年2回編集・発行

* (日本文学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会 (10月 4日間)

大学院研究発表会 (7月・11月 各2日間)

専門分野主催の研究会等の活動については、10.に詳述した。

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 金水敏教授

1956年生。1982年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。博士(文学)(大阪大学、2006年)。東京大学助手、神戸大学教養部講師、大阪女子大学助教授、神戸大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。専攻：国語学／言語学

1-1. 論文

金水敏 「古賀悠太郎著『現代日本語の視点の手研究-体系化と精緻化-』」日本語文法学会(編)『日本語文法』(日本語文法学会), 20-1, くろしお出版, pp. 62-70, 2020/3

金水敏 「村上春樹作品と日本語史の「共鳴」-『騎士団長殺し』騎士団長の「あらない」再考-(増補版)」金水敏(編)『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(3)』科学研究費助成事業「「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」, pp. 38-47, 2020/3

土井光祐, 金水敏(共著) 「高山寺蔵『観智記 第二』鎌倉時代中期写本・影印」高山寺典籍文書総合調査団(編)『平成三十年度高山寺典籍文書総合調査団 研究報告論集』(高山寺典籍文書総合調査団), pp. 120-165, 2020/3

土井光祐, 金水敏(共著) 「高山寺蔵『観智記』鎌倉時代中期写本 解題並びに翻字本文」高山寺典籍文書総合調査団(編)『高山寺経蔵の形成と伝承』汲古書院, pp. 321-393, 2020/3

中野直樹, 金水敏(共著) 「岩屋寺蔵思溪版『高僧伝』巻第一 改題」国際仏教学大学院大学 日本古写経研究所(編)『日本古写経善本叢刊第十輯 法道寺蔵天平写経 雑阿含経 卷第三十六／岩屋寺蔵思溪版 高僧伝 巻第一』(国際仏教学大学院大学 日本古写経研究所), pp. 107-110, 2019/11

金水敏 「SP レコード資料における人の存在文」金澤裕之・矢島正浩(編)『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』笠間書院, pp. 190-199, 2019/8

金水敏 「村上春樹作品と日本語史の共鳴-『騎士団長殺し』騎士団長の「あらない」再考-」中村三春(監修)『村上春樹における共鳴』(村上春樹研究センター), 淡江大学出版中心, pp. 29-40, 2019/7

金水敏 「「焦点」の外延的意味論による解釈一斑」『語文』(大阪大学国語国文学会), 第112輯, 大阪大学国語国文学会, pp. 1-6, 2019/6

金水敏 「第六章 アニメキャラクターの言葉」田中牧郎(編)『現代の語彙-男女平等の時代- シリーズ〈日本語の語彙〉7』朝倉書店, pp. 72-83, 2019/4

金水敏 「役割語としてのヴァーチャル時代語」田中ゆかり・金水敏・小玉竜一(共編著)『時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる!』笠間書院, pp. 9-20, 2018/11

金水敏 「小説における仮名の一用法と翻訳-村上春樹作品を例に-」『ことばと文字』10, くろしお出版, pp. 83-89, 2018/10

金水敏 「キャラクターとフィクション-宮崎駿監督のアニメ作品、村上春樹の小説をケーススタディとして」『「キャラ」概念の広がりとお深まりに向けて』ひつじ書房, pp. 64-83, 2018/7

金水敏 「魅惑するナカタさんワールド」『村上春樹における魅惑』淡江大学出版中心, pp. 43-60, 2018/6

金水敏 「リスト存在文について」『ヴァリエーションの中の日本語史』くろしお出版, pp. 89-100, 2018/4

1-2. 著書

金水敏(編)『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書 (3)』大阪大学大学院文学研究科, 50p., 2020/3

金水敏(編)『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書 (2)』大阪大学大学院文学研究科, 59p., 2019/3

金水敏, 田中ゆかり, 児玉竜一(共編)『時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる! : 世界観を形作る「ヴァーチャル時代語」』笠間書院, 135p., 2018/11

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

金水敏 「文学部卒業セレモニーの式辞をめぐる所感」『懐徳』(懐徳堂記念会), pp. 2-4, 2019/1

金水敏 「ヴァーチャル日本語 平成最後の! 金水×田中の年忘れ&新春対談(新春編)」『研究社 WEB マガジン Lingua (リング)』研究社, p. 1, 2019/1

金水敏 「ヴァーチャル日本語 平成最後の! 金水×田中の年忘れ&新春対談(番外編)」『研究社 WEB マガジン Lingua (リング)』研究社, p. 1, 2019/1

金水敏 「ヴァーチャル日本語 平成最後の! 金水×田中の年忘れ&新春対談(年忘れ編)」『研究社 WEB マガジン Lingua (リング)』研究社, p. 1, 2018/12

金水敏 「卒業式「式辞」をめぐる所感」『大阪大学国語国文学会会報』(大阪大学国語国文学会), 50, p. 1, 2018/10

金水敏 「格助詞【歴史】」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 137-138, 2018/10

金水敏 「口語文法・文語文法」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 363-365, 2018/10

金水敏 「構文史」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 370-371, 2018/10

金水敏 「構文論」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 371-373, 2018/10

金水敏 「存在表現」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 587-588, 2018/10

金水敏 「陳述」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 648-649, 2018/10

金水敏 「人称」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 730-732, 2018/10

金水敏 「役割語」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 967-968, 2018/10

金水敏 「書評: 泉子・K・メイナード(著)『話者の言語哲学-日本文化を彩るバリエーションとキャラクター-』くろしお出版. 2017」『社会言語科学』(社会言語科学会), 21-1, pp. 381-383, 2018/9

金水敏 「研究社紹介 008 金水 敏「日本語史・現代日本語・役割語 多岐にわたる研究のルーツに迫る」『国語研 ことばの波止場』(国立国語研究所), 4, 国立国語研究所, p. 13, 2018/9

金水敏 「第3回「役割語とキャラクターの悩ましい関係(2)」」『研究社 WEB マガジン Lingua (リング)』研究社, p. 1, 2018/7

金水敏 「第2回「役割語とキャラクターの悩ましい関係(1)」」『研究社 WEB マガジン Lingua (リング)』研究社, p. 1, 2018/6

金水敏 「第1回「役割語って何? 私たちはどうやって役割語の知識を得るの?」」『研究社 WEB マガジン Lingua (リング)』研究社, p. 1, 2018/5

1-4. 口頭発表

金水敏 「大阪弁ぼちぼち講座-「知らんけど」の秘密」Handai-Asahi 中之島塾, 大阪大学 21 世紀懐徳堂、朝日カルチャーセンター, 大阪大学中之島センター, 2020/1

金水敏 「二受身文と被害の意味について」日本語文法学会第 20 回記念シンポジウム「日本語文法研究の射程」第 1 部「受身文研究の現在地」, 日本語文法学会, 学習院大学, 2019/12

金水敏 「焦点構文の統語論と意味論(試論)」研究会「係り結び関連現象の通言語的研究に向けて」, 科研費(新学術領域)「ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明」公募班「日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて」, 大阪大学豊中キャンパス法経研究棟 3FL2 講義室, 2019/12

- 金水敏 「日本語ポップカルチャー作品の言語の特徴—ジブリアニメを例に—」明治大学国際日本学研究科 特別講義, 明治大学国際日本学研究科, 明治大学国際日本学研究科 特別講義, 2019/12
- 金水敏 「「ほんまかいな」「しらんけど」大阪弁の虚像と実像」文字・活字文化推進事業講演会, 豊中市立岡町図書館, 豊中市立岡町図書館, 2019/11
- 金水敏 「フィクションの話し言葉を考える—役割語を軸として—」安田女子大学 日本文学会学術講演会, 安田女子大学 日本文学会, 安田女子大学 1号館3階 1305教室, 2019/11
- 金水敏 「日本語名詞述語文の構造と意味再訪」形態・レキシコン研究会 (MLF) 2019, 形態・レキシコン研究会 (MLF), 神戸大学 六甲台第2キャンパス 人文学研究科 B棟, 2019/8
- 金水敏 「基調講演③「村上春樹と方言について—登場人物・作家の移動と痕跡—」」2019年第8回村上春樹国際シンポジウム, 村上春樹研究センター, 北海道大学, 2019/7
- 金水敏, 高島幸次 「SP レコード音源に聞く明治・大正の上方落語」Handai-Asahi 中之島塾, 21世紀懐徳堂/朝日カルチャー, 大阪大学中之島センター, 2019/3
- 金水敏 「都市の美を考える会: 座学「言葉から見た街。」」都市の美を考える会, DAS(一般社団法人 総合デザイナー協会), 長堀安田ビル(6階会議室), 2019/2
- 金水敏 「日本語の指示詞研究再訪」「言語と主観性」プロジェクト勉強会, inalco, inalco, 2018/12
- 金水敏 「日本語の役割語・キャラクター言語研究と翻訳」講演会, inalco, inalco, 2018/11
- 金水敏 「日本の大衆文化・大衆芸能の発達と役割語について」役割語研究会, 役割語研究会, 大阪大学豊中キャンパス文法経済学教育研究棟・文11教室, 2018/10
- 金水敏 「講演「日本の大衆文化・大衆芸能の発達と役割語について」」兵庫教育大学言語表現学会 平成30年度第2回研究発表会, 兵庫教育大学言語表現学会, 兵庫教育大学言語表現学会, 2018/9
- 金水敏 「Role Language, Character Language and Structure of Fiction」Festival: Japanska språket i popkultur(Popular Culture Festival), Göteborgs Universitet(ヨーテボリ大学), Göteborgs Universitet(ヨーテボリ大学), 2018/9
- 金水敏 「私の言語研究と「人文学」のめざすところ」生命機能研究科長主催セミナー Dean's Night 第1回, 大阪大学大学院生命機能研究科長, 大阪大学生命機能研究科生命システム棟2F セミナー室, 2018/9
- 金水敏 「Functional Change of Adnominal Form in Heian-Kamakura Japanese」Corpus-Based Studies on Japanese Historical Grammar(NINJAL-Oxford International Symposium on the Japanese Diachronic Corpora), 国立国語研究所/Oxford University, 国立国語研究所 2階 講堂, 2018/9
- 金水敏 「発話によってキャラクターを表現する—役割語・キャラクター言語の漢日対照研究と翻訳—」第10回中日対照言語学シンポジウム, 中日対照言語学研究(協力)会, 蘇州大学敬賢堂, 2018/8
- 金水敏 「文学部長と経済学者との対話から—“社会”とどのように関わるか—」「国際日本研究」コンソーシアム主催国際ワークショップ「人文科学と社会科学の対話—国際日本研究の立場から—」, 国際日本研究コンソーシアム, 国際日本文化研究センター, 2018/7
- 金水敏 「関西人のコミュニケーションのイメージと実態」芦屋読書会, 津村雅一氏, 芦屋・津村邸, 2018/7
- 金水敏 「『騎士団長殺し』騎士団長の話し方について」役割語研究会, 役割語研究会, 大阪大学豊中キャンパス文法経済学教育研究棟 文11教室, 2018/5
- 金水敏 「パネルディスカッション『『騎士団長殺し』をめぐって』パネリスト②」2018年第7回村上春樹国際シンポジウム, 村上春樹研究センター, 淡江大学守権国際会議センター, 2018/5
- 金水敏 「基調講演 2『騎士団長殺し』騎士団長の「あらない」再考」2018年第7回村上春樹国際シンポジウム, 村上春樹研究センター, 淡江大学守権国際会議センター, 2018/5
- 金水敏 「“主題”について」NINJAL コロキウム, 国立国語研究所, 国立国語研究所・多目的室, 2018/5
- 金水敏 「関西人のコミュニケーションのイメージと実態」プロジェクトマネジメント学会(PM学会)関西支部 平成30年度春季シンポジウム, プロジェクトマネジメント学会(PM学会)関西支部, マイドームおおさか 8階 第1・2会議室, 2018/4
- 金水敏 「フィクションのこぼれいろいろ～役割語を中心に～」豊中市中央公民館, 豊中市中央公民館, 豊中市中央公民館,

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

金水敏 第25回新村出賞, 新村出版記念財団, 2006/11

原口裕, 南出康世, 金水敏 豊田賞, 日本英学史学会, 1992/10

金水敏, 田窪行則 日本認知科学会論文賞, 日本認知科学会, 1991/7

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2019年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:金水敏

課題番号:19K00574

研究題目:役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究

研究経費:2019年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究では、フィクションの登場人物の発話が表現する人物像に着目し、これを「役割語・キャラクター言語」の観点から分析するとともに、その翻訳の(不)可能性や代替手段について研究し、人物像の描写の観点から見た翻訳の評価について探求を進める。具体的な方法としては、村上春樹の小説作品の各国語訳と原典との対照、またさまざまな外国語作品の日本語訳の分析を語彙・文法等言語学的な観点から進めるとともに、発話以外の部分や非言語的な側面、また物語の構造とアーキタイプ等にも着目して進めていく。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

地方裁判所委員会・委員, 2019年7月～現在に至る

日本語学会・会長, 2018年6月～現在に至る

国際日本文化研究センター・運営委員, 2018年4月～現在に至る

国立国語研究所客員教授, 2016年4月～現在に至る

訓点語学会・委員, 2015年4月～現在に至る

日本言語学会・評議員, 2015年4月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2014年10月～現在に至る

日本語学会・評議員, 2014年4月～現在に至る

関西言語学会・委員, 1996年4月～現在に至る

2. 岡島 昭浩 教授

1961年生。1987年、九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(九州大学、1986年)。九州大学文学部助手、京都府立大学女子短期大学部講師・助教授、福井大学教育学部(教育地域科学部)助教授、本研究科助教授・准教授を経て2010年現職。専攻:国語史・日本語学史

2-1. 論文

岡島昭浩 「大正時代の菊池方言資料『言葉の葉』』『坂口至教授退職記念 日本語論集』(坂口至教授退職記念 日本語論集刊行會), 想創社, pp. 28-39, 2020/3

岡島昭浩 「西郷隆盛はどのように語らせられてきたか」『語文』(大阪大学国語国文学会), 113, pp. 39-52, 2019/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岡島昭浩「於乎軽重義」,「大矢透」,「漢字三音考」,「備字例」,日本語学会『日本語学大辞典』武蔵野書院, p.75(於乎軽重義), p.80(大矢透), pp.183-184(漢字三音考), pp.989-990(備字例), 2018/10

2-4. 口頭発表

岡島昭浩「近代における方言資料について」,京都府立大学国中文学会,京都府立大学, 2019/12

岡島昭浩「過去における(先端的な動向)の解明のために」2018 年度秋季大会シンポジウム「日本語の先端的な動向の解明と、そのための新しい資料論」,日本語学会,岐阜大学, 2018/10

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

訓点語学会・委員, 2017 年 8 月～現在に至る

日本語学会・評議員, 2009 年 6 月～現在に至る

国語文字史研究会・委員, 2008 年 4 月～現在に至る

国語語彙史研究会・委員, 2003 年 4 月～現在に至る

3. 岸本 恵実 准教授

1972 年生。2000 年、京都大学大学院文学研究科国語学国文学専修博士後期課程研究指導認定退学。博士(文学)(京都大学、2003 年)。大阪外国語大学助手・講師・助教授、国際基督教大学准教授、京都府立大学准教授を経て、2017 年 4 月より現職。専攻：国語学

3-1. 論文

エリザ・タシロ, 白井純, 岸本恵実他,「ポルトガル語辞書史における『日葡辞書』』『リオ・デ・ジャネイロ国立図書館蔵 日葡辞書』

(八木書店出版部), 八木書店, pp. 831-846, 2020/3 ※記述言語は、日本語・英語の両方

安部清哉, 山本真吾, 岸本恵実他(共著)『『日葡辞書』の語彙』『中世の語彙』朝倉書店, pp. 165-176, 2020/1

岸本恵実「西文資料與日語研究」『中国語学』(日本中国語学会), 266, pp. 63-78, 2019/10

岸本恵実「アレクサンドル・ド・ロード『ベトナム語・ポルトガル語・ラテン語辞書』(1651)の日本語」『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 38, 和泉書院, pp. 1-18, 2019/3

岸本恵実, 白井純(共著)「新出本・ヘルツォーク・アウグスト図書館蔵ローマ字本『コンテムツスムンヂ』(1596 年天草刊)について」『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 59, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 37-53, 2019/3

岸本恵実「キリシタン語学書の展開:ジョアン・ロドリゲスとアレクサンドル・ド・ロード」『語文』(大阪大学国語国文学会), 110, 大阪大学国語国文学会, pp. 1-15, 2018/6

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岸本恵実「土井忠生」『日本語学』39-1, 明治書院, pp. 38-41, 2020/3

3-4. 口頭発表

Kishimoto, Emi, ““Vocabulário” in the History of Lexicography/辞書史の中の「日ポ辞書」”, International Symposia: “Vocabulário da Língua de Japão” (1603): a Missionary Linguistic Approach/国際シンポジウム キリシタン版「日ポ辞書」の世界 ― 宣教に伴う言語学の視点から, 上智大学学術研究特別推進費重点領域研究「キリシタン版文字論の集大成」, 上智大学四ツ谷キャンパス(2/21・英語)・上智大学大阪サテライト(2/23・日本語), 2020/2

岸本恵実「『日葡辞書』における動物に関する記述」「近世日本のキリシタンと異文化交流」第3回報告会, 科学研究費補助金基盤研究(B)「近世日本のキリシタンと異文化交流」, フランス国立極東学院京都支部, 2020/1

岸本恵実「ポルトガル語辞書編纂史における『日葡辞書』」第11回キリシタン語学研究会, キリシタン語学研究会, 中部大学名古屋キャンパス, 2019/10

岸本恵実「羅葡日辞書の翻訳と日本イエズス会教育」国際ワークショップ「外語の熟達から世界の統制へ」, フランス国立極東学院・東洋文庫, 東洋文庫, 2019/10

Kishimoto, Emi, “Latin Lexicography in Japan: *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595)”, 「グローバルなコンテキストにおける黄金時代スペインと日本」, マドリード自治大学, マドリード自治大学, 2019/3

岸本恵実, 中野遙「『日葡辞書』諸本比較から見るキリシタン版」第10回キリシタン語学研究会, 大阪大学, 2019/3

岸本恵実「欧文資料による日本語研究」日本中国語学会第68回全国大会, 日本中国語学会, 神戸市外国語大学, 2018/11(『日本中国語学会第68回全国大会予稿集』pp. 37-41, 2018/11)

岸本恵実「アレクサンドル・ド・ロード『ベトナム語・ポルトガル語・ラテン語辞書』(1651)の日本語」第9回キリシタン語学研究会, 大阪大学, 2018/9

岸本恵実「キリシタン版『羅葡日辞書』におけるプリニウス『博物誌』の翻訳」科学研究費 基盤研究(B)「近世日本のキリシタンと異文化交流」第2回会, 科学研究費 基盤研究(B)「近世日本のキリシタンと異文化交流」, フランス国立極東学院京都支部, 2018/7

Kishimoto, Emi, “Translation of Pliny the Elder’s *Naturalis Historiæ* in the *Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum* (1595) compiled by the Jesuits in Japan”, 9th International Conference on Historical Lexicology and Lexicography, International Society on Historical Lexicology and Lexicography, ジェノバ大学, 2018/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

豊島正之, 岸本恵実他, 第35回日本出版学会賞(2013年度), 日本出版学会, 2014/5

岸本恵実, 第18回平成12年度新村出記念財団研究助成金, 新村出記念財団, 2000/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2015年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岸本恵実

課題番号:15K02573

研究題目:キリシタン対訳辞書の語彙比較

研究経費:2018年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

キリシタン版『羅葡日辞書』(1595刊)・『日葡辞書』(1603・04刊)は、日本語史だけでなく宣教言語学・言語史の分野でも世界的注目を集めている。本研究では、『羅葡日』『日葡』に収載された日本語語彙のうち、『日葡』に優劣や特殊語の注記のある語を

中心に、語形・意義・用法の相違を調査する。そしてその背景について、キリシタン版の『落葉集』(1598 年刊)など同時代の国内外の資料を手がかりに考察し、各辞書の性格の相違を一層明確にするとともに、イエズス会による日本語語彙研究の流れを把握する。

3-6-2. 2019 年度～2022 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岸本恵実

課題番号: 19K00626

研究題目:知識受容の面からみたキリシタン対訳辞書の研究

研究経費:2019年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

キリシタン版『羅葡日対訳辞書』(1595 年刊)は、ヨーロッパで版を重ねたラテン語辞書『カレピヌス』諸版のうち、1580 年リヨン版を主要な典拠にしたとみられる。本研究では知識受容に着目し、(A)『カレピヌス』との比較、(B)『日葡辞書』との比較という二つの柱を立て、『羅葡日辞書』の翻訳の特徴を明らかにする。(A)では、『カレピヌス』にみられる西欧の古典・知識受容のあり方と、それらの『羅葡日』における翻訳方法を調査する。(B)では、(A)の様相と比較しつつ、日本語文献を多数参照している『日葡辞書』(1603・1604 年刊)を調査し、知識受容の面での二辞書の共通点および相違点を浮き彫りにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

国語語彙史研究会・編集主任, 2019 年 5 月～現在に至る

4. 蜂矢 真弓 助教

1977 年生。2008 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化表現論専攻国語学専門分野)単位取得退学。博士(文学)(大阪大学、2009 年)。2018 年、大阪大学大学院文学研究科助教(2020 年 3 月退職)。専攻:国語学

4-1. 論文

蜂矢真弓, 中川ゆかり, 橋本雅之他(共著)「一音節名詞ア・イ・ウ・エ・オ」毛利正守監修, 佐野宏・尾山慎・植田麦編『上代学論叢』研究叢書 512, 和泉書院, pp. 93-110, 2019/5

蜂矢真弓, 岡崎友子, 池上尚他(共著)「一音節名詞被覆形」青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本文法史研究4』, ひつじ書房, pp. 109-130, 2018/10

4-2. 著書

蜂矢真弓, 瀬間正之, 笹原宏之他(共著)『「上代のことばと文字」入門』花鳥社, pp. 79-83, 2019/12

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

蜂矢真弓(朝日新聞大阪本社校閲センター竹下円氏が執筆したコラムの中に、取材を受けた内容が引用された。)「毎週土曜掲載コラム「ことばサプリ」内の「水無月一無は、「無い」では、ないー」』『朝日新聞』朝日新聞社, p. 13, 2019/6

4-4. 口頭発表

蜂矢真弓「水無月考―「無」字表記の解釈の変遷―」第 44 回表記研究会, 表記研究会, 関西大学, 2019/9

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

蜂矢真弓 新村出研究奨励賞, 新村出記念財団 重山文庫, 2015/11

蜂矢真弓 萬葉学会奨励賞, 萬葉学会, 2015/10

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-16 英米文学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 4 准教授 1 外国人教師 1 助教 1

教授：服部 典之、片渕 悦久、石割 隆喜、山田 雄三

准教授：森本 道孝

外国人教師：ポール・ハーヴィ

助教：好井 千代

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
28	4	4	0	0	2	1	0

*うち留学生2名、社会人学生0名

**英米文学・英語学専修として

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	17	3	0	1
2019	9	2	0	0
計	26	5	0	1

*英米文学・英語学専修として

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

大学院・学部の教育においては、広い視野で学生が自己の学習や研究を位置づけられるよう、講義・演習を構成し、卒業・修了時まで社会で要請される基礎的能力を習得できるよう講義・演習・論文指導などを配置することを目標とした。大学院生については、①修士論文作成演習、博士論文作成演習の授業をより活性化し、論文執筆能力をつけさせる。②文学テキストを読解し、分析する力の増進をはかり、プレゼンテーション能力の涵養をはかる。③各種学会での口頭発表の申し込み、各種学術誌への投稿を積極的に勧めることを目標とした。また学部学生については、①英米文学全般についての幅広い知識と教養を身につけさせる。②卒業論文の作成に向けて積極的な指導を行う。③英語の総合的力をつけ自己表現技術を身につけさせることを目標とした。さらに、大学院生と学部生の交流を図り、教育の面で相互に協力し刺激しあ

う態勢をつくることも、大学院・学部双方にわたる目標とした。

2. 研究

教員・大学院生は毎年最低 1 回の研究成果を、各種学会で口頭および論文の形で行うよう積極的に研究活動を継続する。また、教員全員が代表者として科学研究費補助金を中心とした競争的外部資金の獲得に努めるようにすることを目標とした。教員は大学院生、学部学生の研究意欲を高めるために学外研究者と協力して、院生執筆者を含む共同の研究書・書物の刊行を心がける。また、同窓の研究者と連携して、阪大英文学会、阪大英文学会刊行物のいっそうの充実をめざすことも目標とした。

3. 社会連携

卒業生との連携を密にして、その多彩な才能を多方面に活用するためのシステムの立ち上げを考える。また、出版社と共同企画をし、英米文学を専攻する大学院生および学部学生のための教科書やガイドブック等の編集・刊行を実現する。さらに、大学院生に国際的感覚を付けさせるために英米の大学に派遣するプログラムを継続的に実施することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2018 年度～2019 年度)

1. 教育

講義・演習では基礎から応用までのスキルの習得がなされ、ほぼ当初の計画どおりの成果があがっている。大学院・学部ともにテキストの読解力は向上してきている。また、論文作成に関する指導が細やかに行われた結果、研究発表も活発で、大学院生の学会での口頭発表や学会誌への論文発表などが活発に行われていることがそのことを実証している。研究室の物理的整備などを工夫したこともあり、院生・学部生間の交流も進み、研究室の雰囲気はきわめて良好な状態を保っていると言える。

2. 研究

【2018 年度】

当該年度中は教員のほぼ全員が科学研究費補助金を獲得し、著書・論文を刊行するなど目覚ましい活躍を続けている。また執筆者に大学院生を含む阪大英文学会叢書はすでに第 8 巻まで出版を終えているが、2018 年度には阪大英文学会の中堅・若手を中心とした新たな叢書刊行計画が進み、原稿の査読などを経て、出版に向けて着々と準備を進めている。2018 年度の課程博士号提出者は 1 名で、博士が授与された。院生の研究発表については 1. においてもふれたように、口頭・論文ともに堅調を維持しており、目標は十分に達成されたと言える。

【2019 年度】

当該年度中は教員のほぼ全員が科学研究費補助金を獲得し、著書・論文を刊行するなど目覚ましい活躍を続けている。また執筆者に大学院生を含む阪大英文学会叢書はすでに第 8 巻まで出版を終えているが、2018 年度からの阪大英文学会の中堅・若手を中心とした新たな叢書刊行計画が進行中で、原稿の査読などを経て、出版に向けて着々と準備を進めている。院生の研究発表については 1. においてもふれたように、口頭・論文ともに堅調を維持しており、目標は十分に達成されたと言える。

3. 社会連携

【2018 年度】

2018 年度には卒業生を研究会等に継続的に招聘し、大きな教育的成果を挙げた。大学院生を活用した教科書・ガイドブックはすでに刊行され好評を得ているが、さらなる出版計画を考慮中である。また海外派遣については、今後も長期継続が望めるようにプログラム(ペンシルベニア大学派遣)を、2019 年度中に具体的な動きが取れるように整備中である。

【2019年度】

2019年度には卒業生を研究会等に継続的に招聘し、大きな教育的成果を挙げた。大学院生を活用した教科書・ガイドブックはすでに刊行され好評を得ているが、さらなる出版計画を考慮中である。また海外派遣については、今後も長期継続が望めるようにプログラム（ペンシルベニア大学派遣）を整え、1名の派遣者を輩出した。

IV. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

学部学生については日頃のクラス内での取組や卒業論文の出来から判断して比較的水準の高い成果が出ている。また、このところ学部学生から多くの海外留学生が出ているのは教育指導面での成果の表れであると自負している。大学院生については、すでに述べた学会活動などで外部から高い評価を得ており、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・大学院生の全員が口頭・論文・著書等で成果を世に問うという目標は達成できた。その他の活動も含め、外部から高い評価を得ている点を考慮しても目標は達成されたと考えられる。

3. 社会連携

同窓生との連携、海外との連携などに代表されるように、この面でも社会連携の責任はほぼ達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	1	0	1
2019	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

林 日佳里 Writing toward the Other: Post-Postmodern Sincerity in the Novels of Paul Auster, Richard Powers, Toni Morrison, and Margaret Atwood 2018/09

主査：片瀬悦久 副査：服部典之、山田雄三、石割隆善、森本道孝

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	0(0)	2(2)	0(0)	0(0)	1(0)	3(2)
2019	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	2(2)	0(0)	0(0)	1(0)	3(2)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	0	1	2	0	0	3
2019	0	0	0	0	0	0
計	0	1	2	0	0	3

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

西口暖乃"Creation of a Patched Monster: A Study of Frankenstein", *Osaka Literary Review*, 第 57 巻, pp.1-16, 2019/01/31

三角 成彦"Sympathizing Imperial Eyes": The Politics of Western Representation in The Sketch Book", *Osaka Literary Review*, 第 57 巻, pp.17-32, 2019/01/31

〔博士後期〕

中嶋 彩佳「記憶と忘却の狭間で——『忘れられた巨人』における集団的記憶喪失と雌竜クエリグ」『カズオ・イシグロの視線—記憶・想像・郷愁』, pp.182-207, 2018/07/30

【2019年度】

〔博士前期〕

三角成彦「The Object-Oriented Aspect of Irving's *A Tour on The Prairies*.」『*Language Literacy: Journal of Linguistics, Literature and Language Teaching*』第 3 巻, 第 1 号, pp.1-9, 2019/06/28

三角成彦「Existences Unbound: An Exploration of a Liberal Perspective in Rick Bass's "The Hermit's Story"」『*Journal of Humanities and Cultures Studies R&D*』第 4 巻, 第 3 号, pp.1-6, 2019/05/14

三角成彦「Nicolaus Cusanus Unbound: An Investigation into Parallels between His Liberal Philosophy and Object-Oriented Ontology」『*Thesis*』第 8 巻, 第 1 号, pp.51-67, 2019/06/08

三角成彦「The Republic of Objects: Prolegomena to an Object-Oriented Reading of *A Tour on the Prairies*」『*Thesis*』第 8 巻, 第 2 号, pp.65-83, 2019/12/21

三角成彦「Fragmented Self: Hawthorne's Prescient Eye in "The Prophetic Pictures" and "Wakefield."」『*Litinfinitive Journal*』第 1 巻, 第 1 号, pp.21-34, 2019/05-06

三角成彦「Toward a Dramatic World: The Latest Resurgence of Drama and Speculative. Materialism.」『*Litinfinitive*

Journal』第1巻, 第2号, 2019/12

三角成彦「縛めを解かれた「諦め」: “Answer” に読む《無解釈的なもの》」『第2回若手研究者フォーラム要旨集』 pp.30-33, 査読有, 2020/3/23

三角成彦「“Sympathizing Imperial Eyes”: The Politics of the Western Representation in The Sketch Book.」『*Osaka Literary Review*』57号, pp. 17-32, 2019/01/31

[博士後期]

宮原駿「Waste in the 'Shem the Penman' Chapter in Finnegans Wake.」『中国四国英文学研究』第16号, pp.1-10, 査読有, 2020/1/20

篠直樹「On the Relationship between a Self-Hater and the Socio-Historical Discourse: A Reading of Bernard Malamud's *The Fixer*.」『待兼山論叢』第53号, pp.79-92, 査読有, 2019/12/25

(2)口頭発表

【2018年度】

[博士前期]

西口 暖乃「『フランケンシュタイン』におけるつぎはぎの意味について——友人との関係性から——」, 大阪大学・東北学院大学・東北大学合同研究発表会, 東北大学, 2018/08/11

[博士後期]

宮原 駿「『フィネガンズ・ウェイク』における濁った水から読む夢見人の人生観」, 大阪大学・東北学院大学・東北大学合同研究発表会, 東北大学, 2018/08/11

中嶋 彩佳「小説と映画とを往還するイシグロ」, 日本英文学会関西支部第13回大会, 神戸女学院大学, 2018/12/08

【2019年度】

[博士前期]

三角成彦 “The Commonwealth of Objects: Prolegomena to an Object-Oriented Reading of *A Tour on the Prairies*”, The 91st ELSJ Annual General Meeting, 安田女子大学, 2019/5/25-26

三角成彦 “Embracing the Unreachable Other: The Development of Motoo Fujiwara's Speculative Conception of the Relationship between 'You' and 'I'”, The 1st Forum of Young Scholars, 大阪大学, 2019/9/27

三角成彦 “Non-Relationality Unbound: A Critical Investigation into the Concept of “the Non-Interpretive” and its Applicability in Literary Studies”, The 18th Workshop in Philosophy, 大阪大学, 2020/2/11

三角成彦「縛めを解かれた「諦め」: “Answer” に読む《無解釈的なもの》」, 第2回若手研究者フォーラム, 大阪大学, 2020/3/23 (新型コロナウイルスの影響で延期)

[博士後期]

宮原駿「ジョイスにおける排泄物のイメージの変遷——『フィネガンズ・ウェイク』と精神分析の思考様式」, 日本英文学会関西支部第14回大会, 奈良女子大学, 2019/12/8

篠直樹「Jonathan Safran Foer 作品にみられる距離生成によるアイデンティティ戦略」, 第77回関西英語英文学会大会, 大阪産業大学・梅田サテライトキャンパス, 2019/07/21

篠直樹 “Symbolic Prison-Breaking of A Self-Hater: Reading Bernard Malamud's *The Fixer*.”, 第31回ソール・ベロー協会大会, 関西外国語大学, 2019/09/03

篠直樹「距離生成の技法と self-exile——Everything Is Illuminated の語りにみられるユダヤ的アイデンティティ」, 2019年度大阪大学・東北学院大学・東北大学合同研究会, 大阪大学, 2019/09/07

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2019年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2019年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

林 日佳理、博士後期課程修了、岐阜大学教育学部、助教(常勤)、2018/10

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2018年度:0名 2019年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度:0名 2019年度:0名

9. 刊行物

2018年度 *Osaka Literary Review (OLR)* No. 57, 2019/1

2019年度 *Osaka Literary Review (OLR)* No. 58, 2020/1

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会第51回大会 2018/10/27

阪大英文学会第52回大会 2019/10/26

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 服部 典之 教授

1958年生。1981年、大阪大学文学部(英文学専攻)卒業。1983年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。同博士

課程中途退学。文学博士（大阪大学、2003年）。和歌山大学教育学部助手、大阪大学言語文化学部講師、同助教授を経て、2000年10月文学研究科助教授、2008年4月現職。専攻：英文学

1-1. 論文

服部典之「ユニオンの行方——ジェイムズ・ホッグの解体していく罪人」『待兼山論叢』52, 大阪大学文学会, pp. 1-16, 2018/12

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

西山徹, 服部典之他(共訳)「生粋のイングランド人」ダニエル・デフォー他著、西山徹編『生粋のイングランド人』音羽書房鶴見書店, pp. 1-190, 2020/3

1-4. 口頭発表

服部典之「シンポジウム「冒険の残滓——『ロビンソン・クルーソー』から300年」における司会及び講師。講師としての発表タイトル「浜辺の想念——クルーソーの垂直的冒険」日本英文学会関西支部第14回大会, 日本英文学会, 奈良女子大学, 2019/12

服部典之(パネリスト)「ユニオンの行方——ジェイムズ・ホッグの解体していく罪人」日本英文学会第90回全国大会:シンポジウム第3部門「ナショナルなもの(再)構築——スコットランド、アイルランド、ウェールズ、イングランドの300年」講師。服部発表題目「ユニオンの行方——ジェイムズ・ホッグの解体していく罪人」, 日本英文学会, 東京女子大学, 2018/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

服部典之 大阪大学共通教育賞(2003年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2004/1

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2018年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:服部典之

課題番号: 18K00371

研究題目:移動と地政学——「イギリス/英語」小説に見る地理学的想像力

研究経費:2018年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

2019年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

小説の物語展開に登場人物の地理学的移動が伴わないものはないが、殊にイギリス小説では、移動、特に海外への出立および母国と相手国間の地政学的葛藤を伴うのが大きな特徴だ。従来研究で「旅行文学」という簡便なジャンルに分類された作品群は、交易を伴ったグローバルネットワークの絶え間ない変化と更新に伴う流動的物語として地政学的見地から包括的に捉えなおす必要がある。イギリス国内においても、1707年にイングランドと合同しながら今日まで緊張関係を持つスコットランドの作家が、海外移動をよくテーマとしている意味を探ることは、連合王国のEU離脱問題の根本を考えると文学からの現状分析提示へと繋がることになる。本研究は昔の文学を美学的に読解するだけのものではなく、今日的な困難なグローバルネットワークを視野に入れ、現代社会の不安定化をもたらす地政学的闘争に対する文学的提言を行おうとする研究である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

阪大英文学会・会長, 2014年4月～2019年4月

日本英文学会関西支部理事会・理事, 2011年4月～現在に至る

2. 片渕 悦久 教授

1965年生。1995年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士（大阪大学、1991年）。博士（文学）（大阪大学、2007年）。北陸大学講師、同志社女子大学講師、助教授を経て、2003年4月文学研究科助教授、2013年4月現職。専攻：アメリカ文学

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

Katafuchi, Nobuhisa, *Narrative Renewal Theory: A Brief Introduction*, BookWay, 88p., 2019/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Katafuchi, Nobuhisa, "Theorizing the Continuous Process of Narrative Renewal," 9th Annual Arts, Humanities, Social Sciences & Education Conference, Hawaii University International Conferences, Prince Waikiki, 2020/1

片渕悦久（招待講演）「物語更新とは何か？」静岡文化芸術大学特別講演，静岡文化芸術大学文化政策学部，静岡文化芸術大学，2019/1

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2017年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者：片渕悦久

課題番号：17K02660

研究題目：認知物語論および可能世界論の統合の場としての物語更新理論の可能性の探求

研究経費：2018年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

2019年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的：

メディアやジャンルの枠を越え、同一の物語が形を変えて再生産されるという現代表象文化において顕著な事象を観察するため、独自に提案した物語更新理論を土台として、認知物語論および可能世界論という物語研究で注目されている最新のアプローチを取り入れることで、物語更新のありようを解明する理論の発展可能性を探る。そのうえで、メディアの変換を経て物語が再創造される原理やその形態、また更新された物語の受容のあり方などについても理解を深め、新たな物語論の実践過程を体系的に提示することをめざす。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本ソール・ベロー協会・理事, 2009年4月～現在に至る

関西英語英米文学会・理事, 2008年4月～現在に至る

3. 石割 隆喜 教授

1970年生まれ。大阪外国語大学外国語学部（英語学科）卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程（英文学専攻）修了。博士（文学）（大阪大学、1999）。大阪外国語大学助手、講師、助教授、准教授、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2019年4月より現職。日本英文学会第22回新人賞(1999)。専攻：アメリカ文学

3-1. 論文

石割隆喜「光は暴く——*Vineland*における映画的リアリズム」『待兼山論叢 文化動態論篇』(大阪大学大学院文学研究科), 53, pp. 1-19, 2019/12/25

石割隆喜「映画的ミメシス——*Gravity's Rainbow*における現実の表象」『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 59, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 201-219, 2019/3

石割隆喜「光は暴く——*Vineland*における映画的リアリズム」『日本英文学会第90回大会 Proceedings』(日本英文学会), 日本英文学会, pp. 23-24, 2018/9

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

石割隆喜「光は暴く——*Vineland*における映画的リアリズム」日本英文学会第90回大会, 日本英文学会, 東京女子大学, 2018/5『日本英文学会第90回大会 Proceedings』pp. 23-24, 2018/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞, 日本英文学会, 1999/12

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2017年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:石割隆喜

課題番号:17K02545

研究題目:「見ること」を中心とする、ピンチョン小説における認識論の残余についての研究

研究経費:2018年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

2019年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

本研究は、「見ること」をめぐる小説としてのピンチョン作品における認識論の残余」という観点からトマス・ピンチョンの小説作品の特質を解明することを全体構想とする研究の一環として、特に『重力の虹』『ヴァインランド』『メイスン&ディクソン』を取り上げ、同観点からの分析により、これら3つの小説のピンチョン作品全体の中での位置付けを明らかにしようとするものである。3作品との関連で本研究が具体的に取り上げる「見ること」とは、映画『重力の虹』『ヴァインランド』と天体観測(『メイスン&ディクソン』)である。また「見ること」をより原理的に考察するために、哲学における認識論を本研究遂行上の基本的参照枠とする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会関西支部・大会運営委員, 2019年4月～現在に至る

日本アメリカ文学会関西支部・評議員, 2011年4月～現在に至る

4. 山田 雄三 教授

1968年生。1990年大阪大学文学部卒業。1995年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。1995-2013年、大阪大学言語文化部、同大学院言語文化研究科講師、助教授、准教授を経て、2013年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2020年4月より現職。専攻：英文学／文化理論研究

4-1. 論文

Yamada, Yuzo, "Lost in Alignment: Alun Richards in Japan" *International Journal of Welsh Writing in English*, (The Association for Welsh Writing in English), 6, University of Wales Press, pp. 1-23, 2019/6

山田雄三 「ルポルタージュの語り手—比較文学的徳永直論」『木綿葉』(木綿葉の会), 13, 木綿葉の会, pp. 88-102, 2019/3

Yamada, Yuzo, "The Unreliable Representation of the Subaltern: The Case Study of Tokunaga Sunao's Reportage" 『ポストコロニア
ル・フォーメーションズ』(CFS研究会), 13, pp. 15-21, 2018/5

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

山田雄三 「リフレインのドラマトゥルギー—バラッドの流通と受容をめぐって」関西シェイクスピア研究会4月例会, 関西シェイクスピア研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2019/4

山田雄三 「リフレインのドラマトゥルギー—バラッドの流通と受容をめぐって」『シェイクスピア劇の小唄』研究会, 学習院大学英文科科研費プロジェクト, 学習院大学, 2019/3

山田雄三 「アーツ・カウンシルの挑戦—田舎と都会の文化政策」高知人文社会科学会第7回公開シンポジウムアート・ポリティクス—地域社会におけるアート実践と文化行政の「ほどよい距離」とは？, 高知人文社会科学会, 高知県立県民文化ホール, 2019/3

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

山田雄三, 森祐司, 小口一郎 大阪大学共通教育賞(2011年度後期), 大阪大学共通教育機構, 2012/5

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2018年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:山田雄三

課題番号:18K00415

研究題目:近現代英語圏における「二つの文化」論争の系譜をたどる

研究経費:2018年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2019年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

本研究は19世紀なかばから現代まで英語圏でさまざまなかたちをとって起きた各「ふたつの文化論争」の論点を明らかにするとともに、その系譜を歴史的にあとづける試みである。19世紀なかばに Matthew Arnold が Culture and Anarchy (1869)を著し、価値を帯びた文化観の普及に努めて以来、価値付けから外れた文物や慣習に価値を再発見する反応および活動は、たえず生まれてきた。本研究では、このような反応や活動を「もうひとつの文化」普及活動とみなし、支配的な文化との論争が、時と場所を変えて20世紀末までふたつの文化論争の形態をとってきたことを広汎な資料調査をもとに明らかにする。ひいては、このふたつの文化論争の歴史的な変化のなかに、近代の成熟および衰微を探りたい。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部・理事, 2019年4月～現在に至る

日本英文学会関西支部・副事務局長, 2019年4月～2020年3月

日本シェイクスピア協会・協会委員, 2015年4月～2019年3月

5. 森本 道孝 准教授

1978年生。2001年大阪大学文学部卒業。2009年大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士（大阪大学、2003年）。博士（文学）（大阪大学、2009年）。近畿大学経済学部講師、同准教授を経て、2018年4月より、現職。専攻：アメリカ文学

5-1. 論文

森本道孝「加齢と孤独—Sam Shepard の *Heartless* (2012)を中心に—」『待兼山論叢 文学篇』(大阪大学文学会), 53, pp. 1-20, 2019/12

森本道孝「抵抗のロック音楽——サム・シェパード作品に見るアンチエイジング志向——」『待兼山論叢 文学篇』(大阪大学文学会), 52, pp. 17-37, 2018/12

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

森本道孝「Ayad Akhtar 演劇における視線—*Disgraced* と *The Who & The What* を中心に—」日本アメリカ文学会関西支部9月例会, 日本アメリカ文学会関西支部, 神戸女学院大学, 2019/9

森本道孝「加齢と孤独—Sam Shepard の *Heartless* (2012)を中心に—」阪大英文学会第51回大会, 阪大英文学会, 大阪大学, 2018/10

森本道孝「つぎはぎの声——Edward Albee 作品に見る生と死を奏でる音楽の効果」日本アメリカ演劇学会第8回全国大会 シンポジウム Edward Albee の詩学, 日本アメリカ演劇学会, HOTEL ルブラ王山, 2018/8

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2015年度～2018年度、若手研究(B)、代表者:森本道孝

課題番号:15K16705

研究題目:現代アメリカ演劇における「マスキュリティ」と「老い」

研究経費:2018年度 直接経費 1,341,822円 間接経費 0円

研究の目的:

世界的に見て、高齢化社会への危機感は切実である。中でも「老い」と向き合う姿勢は、文学作品のテーマに取り上げられることが多いにもかかわらず、アメリカ文学研究では体系的に分析されてきていない。この「老い」の問題は、役者の身体による演技を前提とする演劇ジャンルにおいて、「記憶」の衰えなどの身体的減退という観点から考察することが最も有効である。アメリカ演劇では、男同士のかかわりの中で浮上する葛藤への防御手段として身体の「マッチョ」化がしばしば見られる。本研究は、マスキュリティに対する彼らの過剰な意識を、「老い」への恐怖を解消する「アンチ・エイジング」意識の表出として多面的に捉えることを目的とする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部・大会準備委員, 2019年4月～現在に至る

阪大英文学会・幹事, 2018年10月～現在に至る

日本アメリカ演劇学会・幹事, 2018年8月～現在に至る

阪大英文学会・運営委員, 2014年10月～2018年10月

6. ポール・ハーヴィ 外国人教師

1961年生。1980年9月、Oriental College, Oxford University 入学。1986年6月 Oriental College, Oxford University 卒業退学 (MA, MPhil 取得)。1986年10月、京都大学教養部招聘研究員 (1年間)。1988年4月、大阪大学言語文化部講師。1990年4月、カナダ商工会議所専務理事(1年間)。1991年4月、大阪大学言語文化部講師。1999年10月、大阪大学文学部・大阪大学大学院文学研究科外国人教師に着任し現在に至る。専攻:シェイクスピア/イギリスルネッサンス/英文学

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

Stean Anthony (HARVEY, A. S. Paul), *Saint Mary 365 Book 7*, Yamaguchi Shoten, 169p., 2019/12

Stean Anthony (HARVEY, A. S. Paul), *Japan Angels*, Yamaguchi Shoten, 114p., 2019/11

Stean Anthony (HARVEY, A. S. Paul), *Bərešitbara*, Yamaguchi Shoten, 388p., 2018/12

Stean Anthony (HARVEY, A. S. Paul), 『Songs 365 Japanese Edition』Yamaguchi Shoten, 377p., 2018/10

Stean Anthony (HARVEY, A. S. Paul), *Hana I*, Yamaguchi Shoten, 158p., 2018/5

※Stean Anthony is the penname of HARVEY, A. S. Paul.

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

7. 好井 千代 助教

1959年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。1987年大阪大学文学部助手を経て、2007年4月より現職。専攻：アメリカ文学。

7-1. 論文

なし

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

Yoshii, Chiyo, "Humanity as Matter: Hawthorne and Vivacious Materialism", International Poe & Hawthorne Conference, Poe Studies Association, Poe Society of Japan, Nathaniel Hawthorne Society, Nathaniel Hawthorne Society of Japan, Kyoto Garden Palace Hotel, 2018/6

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

好井千代他 第1回福原賞, 福原記念英米文学助成基金, 1993/2

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-17 ドイツ文学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 1 准教授 1 特任講師 1 助教 0

教授：三谷 研爾

准教授：吉田耕太郎

特任講師：ヨハネス・ヴァスマー

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
6	3	2	0	0	0	0	0

*うち留学生0名、社会人学生0名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	2	0	1	0
2019	3	1	0	0
計	5	1	1	0

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

本専門分野は、テキストの精密な読解という文学研究の基本姿勢を堅持しつつ、国内外の新しい研究状況をにらんで、中東欧を対象とした文化史的なアプローチによる教育プログラムを提供する。また、卒業論文・修士論文・博士論文の作成プロセスを重視し、課題発見から論文執筆までの工程をできるかぎり丁寧にフォローする、所属の学生全員参加の演習 Forschungskolloquium を開講するとともに、オフィスアワーを利用した個別指導を充実させる。

ドイツ語の実際の運用能力の涵養にあたっては、ネイティブ・スピーカー教員による授業を提供するとともに、現教員では十分にカバーできない研究テーマや研究方法に関して、学外非常勤講師の来講を得て、学生の知的関心の拡大に努める。

2. 研究

教員は、個人研究の維持発展に努めるとともに、学内外のプロジェクト研究や共同研究に積極的に参加して、コンスタントに成果発表をおこない、またレベルの高い学術専門誌などに論文を公刊する。同じく大学院学生も、プロジェクト研究や共同研究に参加して研究交流と成果発表に努めるとともに、積極的に留学や海外調査をおこない、海外の研究者との連携も構築する。これらの活動により、従来の研究の枠組に拘束されない、新たなテーマ設定やアプローチの開拓に取り組む。

3. 社会連携

教員は、本専門分野修了者を主体として組織された大阪大学ドイツ文学会をはじめ、関係する学会・研究会などにおいて各自の研究活動の公開に努めるとともにその運営に積極的に参画し、また本専門分野にかかわる公共団体あるいは NGO などにたいして、積極的な専門知識の提供をおこなう。また、専門家以外を対象とした公開講座をはじめ、一般読者をも想定した著書・翻訳書の刊行に努め、研究成果の社会還元を図る。

Ⅲ. 活動の概要(2018 年度～2019 年度)

1. 教育

学部においては、大半の学生にとってドイツ語が初修外国語であることを考慮し、グレードの異なる演習を開講、また講義においては本分野にかかわる基礎的な知識および研究方法論を習得させるとともに、新しい研究動向の紹介にも努めた。クラウス・テルゲ特任講師は、実践的なドイツ語運用力の向上につとめた。大学院では、より高度な内容の文献演習を開講するとともに、個別的な論文指導をおこなった。また、研究室所属の学生全員が参加する演習 *Forschungskolloquium* を開講し、プレゼンテーションとディスカッションを重ねることで知識と問題意識の共有化を図った。学外からは、大津留厚 (2018、2019 年度) を講師として招き、多彩かつ充実した授業を提供した。

2. 研究

三谷教授は科研費基盤研究(C)「(プラハのドイツ語文学) 受容の社会文化史的研究」(2015 年度より)の交付を受けて研究活動を展開し、その成果を著書ならびに論文として発表した。吉田准教授は、科研費基盤研究(C)「18 世紀ドイツの印刷メディアのなかの自死-自死を受容する社会と読者の文化史研究」(2017 年度開始)の交付を受けて研究活動をおこなった。テルゲ特任講師は、科研費若手研究(B)「Poetics of the here-and-now: German-language poetry after 2000」(2018 年度まで)、続けて科研費基盤研究(C)「A historical-descriptive study of the relationship between authorship and translation in German poetry from the early modern period to modernity」(2019 年度より)の交付を受けて研究活動をおこなった。大学院博士後期課程学生は、それぞれ博士論文の完成を目指して、口頭発表と論文発表を重ねた。

3. 社会連携

三谷教授、吉田准教授は、日本独文学会、日本 18 世紀学会、日本ゲーテ協会、阪神ドイツ文学会、大阪大学ドイツ文学会などの学術団体、神戸ユダヤ文化研究会、日本チェコ協会、関西チェコ/スロバキア協会などの国際文化交流 NGO の運営に役員として積極的に参画し、研究成果の社会への発信および還元を図った。テルゲ特任講師もオーストリア現代文学研究会の運営委員として活動し、オーストリアの現代作家を日本に招聘して日本の各大学で朗読会などを企画している。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018 年度～2019 年度)

1. 教育

授業をとおしてできるだけバラエティに富んだ、幅広いトピックについて知見を提供したことで、新しい意欲的なテーマに取り組む卒業論文や修士論文が作成されるなど、所期の教育目標はおおむね達成された。*Forschungskolloquium* の

開講は、学生のあいだで問題意識や研究方法の共有だけでなく、プレゼンテーション技術の向上という点で、効果を挙げている。論文作成の工程管理についても、全ての学生に共通の問題として指導をおこなった。

大学院博士後期課程修了者の研究者としての就職状況の悪化を背景に、同前期課程学生の進路は多様化しつつあり、それに対応して教育プログラムを漸進的に改編するという状況が続いている。結果として、前期課程では恒常的に入学者を確保できているが、後期課程への進学者の確保とそのキャリア形成について、今後さらなる工夫と努力が欠かせないと考える。

2. 研究

三谷教授、吉田准教授、テルゲ特任講師は、それぞれ研究代表者として科研費を獲得するとともに、学内外のプロジェクト研究や共同研究にも参画し、積極的な研究活動を展開して論文を発表した。国内外のシンポジウムや研究会に定期的に参加し国際的な視野で研究活動をすすめている。大学院学生は、学会発表や論文投稿・公刊を着実に重ねるとともに、学内外の各種の資金援助制度・交換留学制度を活用して、海外での研究活動を展開、今後とも、国内外のさらにレベルの高い学術誌への投稿・執筆が望まれる。

3. 社会連携

阪神地区を代表するドイツ語・ドイツ文学研究の拠点として、本専門分野に期待されている学会や研究会等の運営支援はけっして小さなものではなく、そうした責務に関して従来と変わらない水準を維持することができた。また、研究成果の社会への還元については、著書・翻訳書の出版のみならず、市民向けの講座・講演などをおして、目標レベルが達成されたといえる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	0	0	0
2019	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	1(1)
2019	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
計	1(1)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	2(2)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	0	1	0	0	0	1
2019	1	0	0	0	0	1
計	1	1	0	0	0	2

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

島田淳子「チェコにおける〈プラハのドイツ語文学〉研究機関の現状」『独文学報』第34号, pp.77-84, 2018/12/1

山本鉄平「科学と文学のあいだで—ミュージル『特性のない男』における都市空間について」『待兼山論叢』第52号, pp.97-113, 2019/3/15

【2019年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

山本鉄平「統計学と文学テキスト」『独文学報』第35巻, pp.7-28, 査読有, 2019/11/9

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

山本鉄平「液化化する自我—ミュージル『特性のない男』における群衆」, 阪神ドイツ文学会研究発表会, 大阪大学, 2018/4/7

【2019年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

山本鉄平 “The “Average Man” in German-Language Literature of the 19th and 20th Century”, Transcultural Encounters, ハイデルベルク大学, 2019/9/11

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2019年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部:2名 大学院:1名 (計3名)

2019年度 学部:2名 大学院:1名 (計3名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2018年度:0名 2019年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度:0名 2019年度:0名

9. 刊行物

2018年度 『独文学報』34号

2019年度 『独文学報』35号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

オーストリア現代文学ゼミナール	2018年11月, 2019年11月
ドイツ文学における家庭の表象研究会	2018年11月, 2019年2月、9月、11月
大阪大学ドイツ文学会研究発表会	2018年12月、2019年12月
ヘキサゴン 2018 人文科学系若手ワークショップ	2018年4月
Thomas Stangl (作家・オーストリア) 氏の作品朗読会	2019年11月
ボヘミアフォーラム大阪大会	2019年11月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

院生研究発表会 2018年6月、7月、10月、11月

院生研究発表会 2019年6月、7月、10月、11月

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 三谷 研爾 教授

1961年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士（文学、大阪大学）。大阪府立大学助手、講師、大阪大学准教授をへて2008年4月から現職。専攻：ドイツ、オーストリア文学および文化研究

1-1. 論文

三谷研爾 「ある越境的知識人の肖像 プラハ出身の文学者ペーター・デーメツ」『独文学報』34, 大阪大学ドイツ文学会, pp. 63-75, 2018/11

1-2. 著書

三谷研爾 『東欧文学の多言語的トポス』水声社, pp. 16-58, 2020/3/25

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

三谷研爾 「中島敦 植民地・存在論・物語」十三社会思想研究会例会, 十三社会思想研究会, 大阪大学, 2019/3

三谷研爾 「ボヘミアにおけるドイツ文学史記述」東欧文学の多言語的トポス, 「東欧文学の多言語的トポスをめぐる研究」研究グループ, 東京大学, 2018/10

三谷研爾 「地域文学史を書く ボヘミアとシレジア」十三社会思想研究会例会, 十三社会思想研究会, 大阪大学, 2018/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2015年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:三谷研爾

課題番号:15K02414

研究題目:〈プラハのドイツ語文学〉受容の社会文化史的研究

研究経費:2018年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究課題は、世紀転換期のプラハの複数文化的環境の経験と記憶、およびその環境を背景に生まれたドイツ語文学が、第二次世界大戦後に受容されてきた過程を検証する。そこでは、受容者自身が社会的・文化的な「境界」に身を置いたとき、プラハの過去との対話をとおして積極的な表現活動の主体となるという文化生産・創造のメカニズムが働いてきた。このメカニズムを、1960年代から2000年代にかけて、それぞれ異なった社会文化的コンテキストのもとで著述をおこなった知識人グループに即して検討し、〈プラハのドイツ語文学〉受容の意義を明らかにする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本オーストリア文学会・学会賞選考委員, 2017年5月～現在に至る

日本オーストリア文学会・阪神地区幹事, 2015年5月～現在に至る

関西チェコ/スロバキア協会・会長, 2009年4月～現在に至る

大阪大学ドイツ文学会・会長, 2008年1月～現在に至る

2. 吉田 耕太郎 准教授

1970 年生まれ。東京外国語大学外国語学部（ドイツ語学科）卒。2007 年、東京外国語大学地域文化研究科博士後期課程単位取得退学。学術修士（東京外国語大学）。京都外国語大学、立命館大学、京都大学人文科学研究所等での非常勤講師を経て、2009 年 4 月より現職。専攻：ドイツ文化史・思想史

2-1. 論文

吉田耕太郎 「18 世紀ドイツの旅行記・地理誌とその受容」『ドイツ啓蒙主義研究』(ドイツ啓蒙主義研究), 16, pp. 47-59, 2019/5

吉田耕太郎 「嬰兒殺しをめぐる言説の再検討 I 論争の背景」『ドイツ啓蒙主義研究』(ドイツ啓蒙主義研究), 15, pp. 17-22, 2018/5

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Yoshida, Kotaro, “Blind people in the Edo period and Transcultural Alteration of this information”, Transcultural Encounters, HeKKSaGON GERMAN-JAPANESE CONFERENCE, ハイデルベルク大学(ドイツ), 2019/9

吉田耕太郎 「18 世紀の結婚・家庭と感情の問題について」2019 年夏大会, 身体文化研究会, 立命館大学, 2019/8

Yoshida, Kotaro, “Bettler, Eremiten oder Künstler: Blinde in Japan in europäischen völkerkundlichen Berichten des 18. Jahrhunderts”, Japanese body culture and sport in textual and visual representations., ゲント大学(ベルギー), 2019/2

吉田耕太郎 「ヨーロッパに伝えられた日本人の身体—18 世紀前後の旅行記を例に」大阪大学ドイツ文学会研究発表会, 大阪大学ドイツ文学会, 大阪大学, 2018/12

Yoshida, Kotaro, “Identity and Writing – from a Travel diary of the Eighteenth Century”, HeKKSaGOn Workshop on Migration: Multicultural Identities and Social Change, 大阪大学, 2018/4

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2017 年度～2020 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 吉田耕太郎

課題番号: 17K02616

研究題目: 18 世紀ドイツの印刷メディアのなかの自死 自死を受容する社会と読者の社会史研究

研究経費: 2018 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

2019 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

本研究は、18 世紀ヨーロッパとりわけドイツにおける自死の意味について、印刷メディアという視点からアプローチするものである。この時代、自死をモチーフとする文芸作品が出版されていた。こうした作品が創作され受容されるための背景を、神学、哲学、医学といった言説、多数出版されていた自死報告、書評誌を手がかりに、とりわけ当時の若い読者層がフィクションとしての自死をどのように受容したのかという側面から解明することで、自死をとりまく社会状況ならびに自死の持っていた文化史意味を明らかにする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

阪神ドイツ文学会・渉外幹事, 2018年4月～現在に至る

日本独文学会 学会誌査読担当

3. クラウス・テルゲ 特任講師（常勤）

Literatur- und Kulturwissenschaftler. Studium der Fächer Angewandte Sprachwissenschaft, Literatur und ästhetische Kommunikation und Politikwissenschaft an der Universität Hildesheim und der Universidad de Valladolid (M. A. 2007). Promotion an der Universität Leipzig und der University of Arizona (Dr. phil./Ph.D. 2015). Von 2009-2010 Teaching Assistant am Department of German Studies der University of Arizona. Promotionsstipendium der Studienstiftung des deutschen Volkes (2009-2013). Von 2013-2015 wissenschaftlicher Mitarbeiter am Institut für Germanistik der Universität Leipzig; seit 2015-2019 Associate Professor für Neuere Deutsche Literatur am Institut für Germanistik der Universität Osaka. 専攻：ドイツ近現代文学。

3-1. 論文

TELGE, Claus, “Displaced Writing. Surface Translation as Post-Conceptual Réécriture in Contemporary German Poetry.”, *Sound/Writing: traduire-écrire entre le son et le sens, Homophonic Translation - Traducson - Oberflächenubersetzung. Paris: Éditions des archives contemporaines*, pp. 253-268, 2019/4

TELGE, Claus, “Übersetzen als Entharmonisierungsstrategie: Hans Magnus Enzensbergers poésie impure.”, *Internationales Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur*, 44, Internationales Archiv für Sozialgeschichte der deutschen Literatur, pp. 382-398, 2019/4

TELGE, Claus, “Making Paper Liquid: Thoughts on Erasure and Translation in the Poetry of Uljana Wolf”, *FPC-Formes Poétiques Contemporaines*, 14, FPC-Formes Poétiques Contemporaines, pp. 123-134, 2019/4

TELGE, Claus, “Poetologische Clownerie. Ann Cotten aka STABIGABII als Element einer Theorie des schlechtesten Werkzeugs.”, *Germanistik zwischen Tradition und Innovation*, Internationalen Germanistenkongresses, pp. 85-89, 2018/10

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

TELGE, Claus, “The Divided Poet: Translations of Pablo Neruda into German by Erich Arendt and Hans Magnus Enzensberger.”, *Poetry Today in Europe and Latin America - Parallels, Interactions, Translations*, DFG-Kolleg-Forschungsgruppe Lyrik in Transition im Rahmen der Moscow Biennial of Latin American and Russian Contemporary Poetry, ロシア科学アカデミー, 2019/12

TELGE, Claus, “Grenzüberwindende Kombinatorik: Das Sonett als transkulturelle Gattung”, Tagung DFG-Kolleg-Forschungsgruppe Lyrik in Transition, DFG-Kolleg-Forschungsgruppe Lyrik in Transition im Rahmen der Moscow Biennial of Latin American and Russian Contemporary Poetry, 早稲田大学, 2019/10

TELGE, Claus, “Experimental Forms of Translation in Contemporary German Poetry.”, Symposium DFG-Kolleg-Forschungsgruppe

Lyrik in Transition”, Tagung DFG-Kolleg-Forschungsgruppe Lyrik in Transition, 阪神ドイツ文学会, 神戸大学, 2019/7
クラウス・テルゲ “Mare liberum: Poetiken und Politiken der Meeresdichtung im Anthropozän.” Zwischen Diagnose, Widerstand und Therapie, DFG-Kolleg-Forschungsgruppe Lyrik in Transition im Rahmen der Moscow Biennial of Latin American and Russian Contemporary Poetry, トリア大学, 2019/4

TELGE, Claus, “Mare liberum: Poetiken und Politiken der Meeresdichtung im Anthropozän”, the DFG Center for Advanced Studies: Poetry in Transition: Natur in der Lyrik und Philosophie des Anthropozäns, University Trier, 2019/3

TELGE, Claus, (パネリスト) “Vom Übersetzen”, Seminar on Contemporary Austrian Literature: Seminar on Contemporary Austrian Literature, Nozawaonsen (Nagano), 2018/11

TELGE, Claus, (基調講演) “(Tr-)Aurigkeit: Dystopien des Zwischenmenschlichen bei Clemens J. Setz, Conference: Utopien und Dystopie”, Umbrüche, Erwartungen, Möglichkeiten: Umbrüche, Erwartungen, Möglichkeiten, Fudan University, 2018/10

TELGE, Claus, (基調講演) “Experimental Forms of Translation in Contemporary German Poetry, Symposium with Rebecca Walkowitz”, Cross-Lingual Writing in an Age of World Literature: Cross-Lingual Writing in an Age of World Literature, 立命館大学, 2018/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-18 フランス文学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 1 准教授 0 特任准教授 1 助教 0

教授：山上 浩嗣

特任准教授：エリック・アヴォカ

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
10	7	5	0	0	3	0	0

*うち留学生0名、社会人学生0名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	1	1	0	0
2019	2	1	0	0
計	3	2	0	0

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

(大学院)

- ・フランス文学作品の高度な読解力および分析力を養うとともに、フランス語による論文作成力を身につける。
- ・修士論文・博士論文作成演習を開講し、学生による研究発表をもとに論文作成の指導を行う。
- ・学会、研究会での口頭発表、論文投稿を支援し、特に研究成果を海外に発信すべく、フランス語による執筆を指導する。

(学部)

- ・講義・演習を通じてフランス文学の基礎知識やフランス語読解の基礎的方法を習得させるとともに、フランス語作文および会話の基礎的能力を養う。
- ・卒業論文作成に向けて、研究発表、個人面談など段階的に指導を行う。
- ・交換留学生制度を積極的に活用するよう支援し、フランス語運用能力を高めるとともに、国際的感覚を学ばせる。

(共通)

- ・フランスより学者、作家、詩人等を招聘し、日仏学術交流を通して、国際的視野を獲得するとともに、実作者との直接的交流により文学研究へのさらなる興味を持たせる。
- ・研究会、卒論中間発表などには大学院生、学部生ともに参加し、質疑応答、討論を通して、研究のテーマ設定、分析法を学べるようにする。

2. 研究

- ・教員、大学院生ともに研究会、学会等で積極的に口頭発表、論文執筆に努める。またフランス語による執筆を奨励・支援する。
- ・学術誌『ガリア』を刊行する。これまで同様、フランス語による執筆を推進し、国内のみでなく、国外へも発送し、研究成果をより広く知らせよう努力する。バックナンバーのデータを OUKA (大阪大学学術情報庫) 上で公開し、「大阪大学フランス文学研究室」サイトからも閲覧できるようにする。
- ・大阪大学フランス語フランス文学会研究会を年 2 回開催し、研究成果の発表の場とするとともに、討論を通して研究を促進する。
- ・日仏の学術交流を積極的に推進し、国際的レベルの研究を促進する。
- ・フランス文学研究室のホームページ (<http://www.gallia.jp/wordpress/>) を充実させ、研究・教育活動ならびに研究成果をより広く公開する。

3. 社会連携

- ・学内外の一般向け学術講座・文化セミナーの講師を担当し、フランス語・フランス文化の普及に貢献する。

Ⅲ. 活動の概要(2018 年度～2019 年度)

1. 教育

- ・講義・演習では、16 世紀から現代にかけての幅広い文学テキストを教材としながら、基礎知識および作品分析方法の習得をめざした教育を行った。
- ・卒業論文作成のために、卒論ガイダンス、個人面談、中間発表と段階を追った指導を行った。2017 年度には 3 本の、2018 年度には 1 本の、2019 年度には 2 本の、それぞれきわめて優れた卒業論文が提出された。
- ・大学院生の研究指導においては、各セメスターに 1 回の研究成果の発表を行い、修士論文・博士論文および学会発表を目標とした教育を実施した。2017 年度の博士前期課程修了者は 2 名であった。その 2 名とも博士後期課程には進学せず、うち 1 名は一般企業に就職した。また、2018 年度の博士前期課程修了者は 1 名であり、その 1 名は博士後期課程に進学した。2019 年度の博士前期課程修了者は 1 名であり、その 1 名は博士後期課程に進学しなかった。
- ・2018-2019 年度には、以下の講演会を開催した。
 - ①マリア・スザーナ・スガン氏 (モンペリエ大学 HDR 准教授)、「Accès aux fonds patrimoniaux numérisés : le défi des humanités numériques」(「文化遺産デジタル・アーカイブの構築：電子化人文学の挑戦」)。2018 年 5 月 28 日、主催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館 2 階大会議室にて。通訳は山上浩嗣 (大阪大学大学院文学研究科教授)。
 - ②アニエス・ディソン氏 (元大阪大学大学院文学研究科外国人教師)、「Pierre Alferi : “La poésie aussi parle du réel... mais autrement.”」(ピエール・アルフェリ：「詩も現実を語る…ただし別の仕方で」)。2018 年 6 月 4 日、主催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館中庭会議室にて。通訳は太田晋介 (大阪大学大学院文学研究科助教)。
 - ③アレクサンドル・ジェファン氏 (CNRS [フランス国立学術研究センター] 研究指導教授)、「Réparer le monde : La littérature française face au XXIe siècle」(「世界を修復する - 21 世紀に対峙するフランス文学」)。2018 年 10 月

29日、主催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館中庭会議室にて。通訳は久保昭博氏（関西学院大学文学部教授）。

④マックス・アンガマル氏（スイスの学術出版社ドロディレクター／代表取締役）、« De l'icône aux icônes — Le portrait littéraire et le portrait peint chez Ronsard et Bèze »（「図像（アイコン）から『図像集』（イコネス）へ——ロンサル、ペーズにおける文学的肖像と描かれた肖像」）。2019年10月21日、主催：大阪大学大学院言語文化研究科・林千宏准教授、共催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館2階大会議室にて。通訳なし。

⑤オード・フォーヴェル氏講演会、講演タイトル未定。2019年10月28日。主催：大阪大学フランス文学研究室、共催：富山大学人文学部・梅澤礼准教授。大阪大学文学部本館中庭会議室にて。通訳は山上浩嗣。

・2018年度には、学部生1名がフランスに私費留学した。2019年度は留学生0名。

2. 研究

・2018年度は、大阪大学フランス語フランス文学会として10月と3月に研究会を開催した。会誌『ガリア』58号を「北村卓教授退職記念号」として刊行、5本の学術論文（うち1本はフランス語で）、コリンヌ・アトラン氏およびアニエス・ディソン氏の講演原稿（後者はフランス語）、北村卓教授の略歴・研究業績一覧、北村教授の思い出に関するエッセー20本を収めた。2019年度は、大阪大学フランス語フランス文学会として10月に研究会を開催した。3月の研究会では、和田章男教授・岩根久教授の退職記念講演を行う予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大のため急遽中止とした。会誌『ガリア』59号を「和田章男教授・岩根久教授退職記念号」として刊行、6本の学術論文、1本の国際シンポジウム開催報告、和田章男教授・岩根久教授の略歴・研究業績一覧、和田章男教授・岩根久教授の思い出に関するエッセー49本、和田章男教授・岩根久教授のエッセー各1本を収めた。

・2020年2月、『コレスポンドランス 北村卓教授、岩根久教授、和田章男教授退職記念論文集』を朝日出版社から刊行した。大阪大学フランス語フランス文学会、大阪大学大学院言語文化研究科修了生、ならびに三教授の研究上の同志計57名が寄稿する充実した論文集となった。

・毎年、関西の大学でフランス文学を研究する大学院生が合同の研究発表会として、「関西学生フランス文学研究会」を開催している。2018年度は8月27日に神戸大学にて開催し、大阪大学からは大学院生3名が発表した。2019年度は8月30日に大阪大学にて開催し、大阪大学からは2名が発表した。これまで発表者の出身大学は、大阪大学、京都大学、神戸大学、関西学院大学の4校だが、今後さらに増やしたい。

・2018年度、海外留学中の博士後期課程在籍中の学生2名が留学先のパリ、リヨンでフランス語による口頭発表を行った。後者は、国際的なシンポジウム・コロクワの枠内での発表であることを強調しておきたい。

・2019年度、和田章男教授は、大阪大学にて2日間にわたる国際シンポジウムを主催した（9月28-29日）。また、同年度、山上浩嗣教授がパリで1回、エリック・アヴォカ特任准教授がエジンバラ（スコットランド）で1回、それぞれフランス語による口頭発表を行った。

3. 社会連携

・和田教授が、次の講演を行った。

①「文学と音楽が出会うとき — フランス人作家によるベートーヴェン受容」（第9回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座、大阪大学中之島センター、2018年5月12日）。

②「ブルーストと音楽受容 人間的な、あまりに人間的な」（和田章男教授・大阪大学文学研究科最終講義、大阪大学豊中キャンパス文法経講義棟文41講義室、2020年2月19日）。

・山上教授が、次の講演を行った。

①「「今日は何もしなかった」—『エッセー』に見るモンテーニュの脱力的生き方」（ラスタ教養大学・言葉文化コース、伊丹ラスタホール、2018年10月22日）

②「フランス近代文学における文明の自己批判—モンテーニュ、ヴォルテール、ディドロ」（国際理解ゼミナール、宝塚南口会館、

2019年6月11日)

- ③「ラシーヌとモリエール—フランス古典演劇の楽しみ」(ラスタ教養大学・言葉文化コース、伊丹ラスタホール、2019年10月21日)

IV. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

卒業論文・修士論文はいずれも優秀な論文であり、段階を踏まえた教育・指導の成果であると思われる。博士課程在学中の学生たちも、留学先のフランスまたは日本で、それぞれ順調に執筆を進めている。

学外の研究者、詩人による講演会を、2018年度は3回、2019年度は2回開催し、研究交流を推進した。とりわけ、フランス語による講演会で、いつも学生たちから活発な質問が出されることは、フランス語による発言能力の向上として高く評価できる。

2. 研究

教員・大学院生はともに活発に学会発表を行った。研究成果を積極的に公表するという点で目標は達成できたと思われる。

3. 社会連携

和田教授と山上教授は、積極的に一般向けの講演を行うことで、社会連携活動の発展に尽力している。また研究室のホームページおよび OUKA (大阪大学学術情報庫) 上で公開している『ガリア』誌掲載論文へのアクセス数は着実に伸びており、研究成果の公開という面においても成果を挙げている。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	0	1	1
2019	0	1	1
計	0	2	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【論文博士】

吉井亮雄 「ジッドとその時代」 2018年5月

主査：和田章男 (大阪大学教授)

副査：北村卓 (大阪大学教授)、山上浩嗣 (大阪大学教授)、森本淳生 (京都大学准教授)

【論文博士】

安藤麻貴 「カミュ晩年における文学創造の軌跡—追放から再生へ」 2020年1月

主査：和田章男 (大阪大学教授)

副査：三野博司 (奈良女子大学名誉教授)、岩根久 (大阪大学教授)、山上浩嗣 (大阪大学教授)

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	3(3)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(3)
2019	5(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(0)	8(0)
計	8(3)	0(0)	0(0)	0(0)	3(0)	11(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	1	0	3	0	1	5
2019	1	2	5	0	1	9
計	2	2	8	0	2	14

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

植村実江「スタール夫人における北の文学とメランコリー」『Gallia』第58号, pp.39-48, 2019/3/1

安達孝信「ゾラ『クロードの告白』における郊外と「自然」ーゴンクール兄弟『ジェルミニー・ラセルトゥー』と比較して」『フランス語フランス文学研究』第113号, pp.299-315, 2018/8/25

安達孝信「ゾラ『パリ』における物語構造の変化ー円環から直線へー」『待兼山論叢』第52号, pp.77-95, 2018/12/25

【2019年度】

〔博士前期〕

涌井萌子「17世紀テキスト周辺とパンフレ受容ーレ枢機卿のマザリナードにおける《public》ー」『第2回若手研究者フォーラム要旨集』 pp.34-37, 査読有, 2020/3/23

〔博士後期〕

川上紘史「バンセにおける《Voir》」『Correspondance コレスポンドンス 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集』 pp.75-88, 査読無, 2019/2/29

川上紘史「パスカル『バンセ』断章 S132 における視覚のメタファーー判断の対立ー」『Gallia』第59号, pp.39-48, 査読有, 2020/3/7

植村実江「スタール夫人とシャトーブリアンー『文学論』をめぐってー」『Gallia』第59号, pp.49-58, 査読有, 2020/3/7

安達孝信「ゾラにおける郊外行楽の物語的役割ーフォントネーからベンヌクールへー」『Correspondance コレスポンドンス 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集』 pp.285-298, 査読無, 2019/2/29

安達孝信「ゾラ『テレーズ・ラカン』における環境・気質理論の実践」『日本フランス語フランス文学会関西支部論叢、関西フランス語フランス文学』 pp. 39-50, 査読有, 2020/3/31

堤崎暁「ジョルジュ・サンド『ジャンヌ』におけるヒロインの象徴性」『待兼山論叢』第53号, pp.95-109, 査読有, 2019/12/25

堤崎暁「ジョルジュ・サンド『ジャンヌ』における「境界」の存在」『Gallia』第59号, pp.59-68, 査読有, 2020/3/7

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

堤崎暁「サンド『ジャンヌ』におけるヒロインの人物像」, 第7回関西学生フランス文学大会, 神戸大学, 2018/8/27

道廣千世「ロマンティック・バレエにおける身体の在り方について—カルロ・ブラジスの身体像を軸に」, 第7回関西学生フランス文学大会, 神戸大学, 2018/8/27

小林愛斗「パスカル『パンセ』における写本の生成について」, 第7回関西学生フランス文学大会, 神戸大学, 2018/8/27
〔博士後期〕

Takanobu Adachi(安達孝信), « Le passage de la banlieue à la nature dans *La Confession de Claude*. Une comparaison avec *Germinie Lacerteux*, des frères Goncourt. », Séminaire « Perception(s), imaginaire et savoir. Point de repère, point de fiction : le degré Zola de l'écriture », パリ 第三大学, 2018/4/12(フランス語)

Hirofumi Kawakami (川上紘史), « Voir dans les Pensées », Colloque international « "Tout hors le vrai" Pascal ou la modernité brisée », リヨン第3大学, 2019/3/29 (フランス語)

【2019年度】

〔博士前期〕

小林愛斗「『パンセ』における写本の成立過程について—「預言」および「表徴」の章を中心に—」, パスカル研究会第168回例会, 武蔵大学, 2019/11/9

三原大輝「『パンセ』草稿における「複読法」および草稿の運用について」, 第8回関西学生フランス文学研究会, 大阪大学, 2019/8/30

三原大輝「パスカル『パンセ』草稿における加筆修正について」, パスカル研究会第168回例会, 武蔵大学, 2019/11/9

涌井萌子「マザリナードの機能-シラノ・ド・ベルジュラックによるマザリナードを例に-」, 文芸事象の歴史研究会, 関西大学, 2019/4/21

涌井萌子「レ枢機卿のマザリナード: 1651年 関西学生フランス文学研究会 大阪大学 日本 研究会」, 第8回関西学生フランス文学研究会, 大阪大学, 2019/8/30

涌井萌子「17世紀テキスト周辺とパンフレ受容-レ枢機卿のマザリナードにおける« public »-」, 第2回若手研究者フォーラム, 大阪大学, コロナ対応により学会中止

〔博士後期〕

堤崎暁「サンド『ジャンヌ』におけるヒロインの象徴性」, 日本ジョルジュ・サンド学会春季研究会, 成城大学, 2019/5/1

堤崎暁「ジョルジュ・サンド『ジャンヌ』のける「境界」の存在とヒロインの役割」, 第85回大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大学, 2019/10/5

安達孝信「ゾラ『テレーズ・ラカン』における環境・気質理論の実践」, 日本フランス語フランス文学会 関西支部大会, 神戸大学, 2019/12/17

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2019年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部：1名 大学院：3名（計4名）（羽山、安達、川上、松川をカウント）

2019年度 学部：0名 大学院：3名（計3名）（安達、川上、松川をカウント）

6. 専門分野出身の研究者

（大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について）

2019年度 青木佑介 大谷大学助教

7. 専門分野出身の高度職業人

（2018年度～2019年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 0名

2018年度：0名 2019年度：0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度：0名 2019年度：0名

9. 刊行物

2018年度 *GALLIA*（機関誌：大阪大学フランス語フランス文学会） n°58

2019年度 *GALLIA*（機関誌：大阪大学フランス語フランス文学会） n°59

2019年度 『コレスポンダンス 北村卓教授、岩根久教授、和田章男教授退職記念論文集』朝日出版社（2020年2月刊）

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

マリア・スザーナ・スガン氏（モンペリエ大学 HDR 准教授）、« Accès aux fonds patrimoniaux numérisés : le défi des humanités numériques »（「文化遺産デジタル・アーカイブの構築：電子化人文学の挑戦」）。2018年5月28日、主催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館2階大会議室にて。通訳は山上浩嗣（大阪大学大学院文学研究科教授）。

アニエス・ディゾン氏（元大阪大学大学院文学研究科外国人教師）、« Pierre Alferi : “La poésie aussi parle du réel... mais autrement.” »（ピエール・アルフェリ：「詩も現実を語る…ただし別の仕方」）。2018年6月4日、主催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館中庭会議室にて。通訳は太田晋介（大阪大学大学院文学研究科助教）。

大阪大学フランス語フランス文学研究会(第83回)(国内学会)、2018年9月29日

アレクサンドル・ジェファン氏（CNRS [フランス国立学術研究センター] 研究指導教授）、« Réparer le monde : La littérature française face au XXIe siècle »（「世界を修復する - 21世紀に対峙するフランス文学」）。2018年10月29日、主催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館中庭会議室にて。通訳は久保昭博氏（関西学院大学文学部教授）。

大阪大学フランス語フランス文学研究会(第84回)(国内学会)、2019年3月2日

関西学生フランス語フランス文学研究会(第8回)(国内学会)、2019年8月30日

国際シンポジウム：« Proust et l'esthétique de la réception »（「プルーストと受容の美学」）、2019年9月28-29日、主催：大阪大学大学院文学研究科・和田章男教授。大阪大学文学部本館2階大会議室にて。フランス語通訳なし。発表者13名。

大阪大学フランス語フランス文学研究会(第85回)(国内学会)、2019年10月5日

マックス・アンガマル氏(スイスの学術出版社ドロディレクター/代表取締役)、「De l'icône aux icônes — Le portrait littéraire et le portrait peint chez Ronsard et Bèze」（「図像(アイコン)から『図像集』(イコネス)へ——ロンサル、ペーズにおける文学的肖像と描かれた肖像」)。2019年10月21日、主催：大阪大学大学院言語文化研究科・林千宏准教授、共催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館2階大会議室にて。通訳なし。

オード・フォーヴェル氏講演会、「Femmes fatales, diaboliques et perverses : une histoire littéraire et médicale française (1810s-1960s)」（「運命の女、魔性の女、倒錯の女：フランス医学文学史(1810～1960年代)」)。2019年10月28日。主催：大阪大学フランス文学研究室、共催：富山大学人文学部・梅澤礼准教授。大阪大学文学部本館中庭会議室にて。通訳は山上浩嗣。

和田章男教授最終講義「プルーストと音楽受容 人間的な、あまりに人間的な」2020年2月19日。主催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学豊中キャンパス文法経講義棟文41講義室にて。司会は山上浩嗣。

大阪大学フランス語フランス文学研究会(第86回)(国内学会)、2020年3月7日(新型コロナウイルス感染拡大のため中止)

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

大阪大学フランス語フランス文学研究会(第83回)(国内学会)、2018年9月29日

大阪大学フランス語フランス文学研究会(第84回)(国内学会)、2019年3月2日

大阪大学フランス語フランス文学研究会(第85回)(国内学会)、2019年10月5日

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 和田章男教授

1954年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。パリ第四大学第三課程博士(文学)。大阪大学文学部助手、言語文化学部講師、助教授を経て、1993年大阪大学文学部助教授、1999年文学研究科助教授、2004年より現職(2020年3月定年退職)。専攻：フランス文学

1-1. 論文

和田章男「プルーストと『春の祭典』」*STELLA*, 38号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, pp. 1-21, 2019/12

和田章男「プルーストとバートーヴェン受容」『大阪大学大学院文学研究科紀要』, 59巻, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 91-124, 2019/3

和田章男「プルーストとモネの睡蓮画—ヴィヴオンヌ川の睡蓮の場面をめぐる—」, *STELLA*, 37号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, pp. 193-211, 2018/12

1-2. 著書

柏木孝雄, 和田章男, 山上浩嗣他(共編著)『フランス文学小事典(増補版)』, 朝日出版社, 393p., 2020/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

和田章男「国際シンポジウム『プルーストと受容の美学』報告」, *GALLIA*, 59号, 大阪大学フランス語フランス文学会, pp. 89-90, 2020/3

和田章男「国際シンポジウム『プルーストと受容の美学』報告」, *STELLA*, 38, 九州大学フランス語フランス文学研究会, pp. 93-100, 2019/12

Wada, Akio, "Cécile Leblanc, *Proust écrivain de la musique : l'agglégresse du compositeur*" *Bulletin d'informations proustiennes*, 48号, pp. 189-191, 2018/11

1-4. 口頭発表

Wada, Akio, "Proust et *Le Sacre du Printemps*", 国際シンポジウム « Proust et l'esthétique de la réception », 大阪大学, 2019/9

和田章男 「プルーストとドビュッシー『ペレアスとメリザンド』」, 関西プルースト研究会, 京都大学, 2018/12

和田章男 「文学と音楽が出会うとき—フランス人作家によるベートーヴェン受容」, 第9回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座, 大阪大学中之島センター, 2018/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2017年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:和田章男

課題番号:17K02593

研究題目:プルーストにおける音楽受容と小説創造

研究経費:2018年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2019年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

研究の目的:

マルセル・プルーストの小説『失われた時を求めて』は、文学・芸術論の小説化とみなせるほどに実在の芸術家・芸術作品への言及や暗示を多く含んでいる。本研究では、プルーストにおける音楽受容と小説創造の関係に焦点を当て、草稿や書簡の調査・分析に基づいて実在の作曲家や音楽作品が小説の中にいつどのように導入され、いかなる変容をとげたかを明らかにするとともに、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのフランス、特にパリにおける音楽演奏の記録、および新聞・雑誌等の批評言説を調査し、プルーストの音楽観を音楽受容史・批評史の中に位置づけ、相対化することを目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

京都大学人文科学研究所運営委員会委員, 2018年4月～現在に至る

日本フランス語フランス文学会関西支部・支部長, 2017年11月～2020年11月

大阪大学フランス語フランス文学会・会長, 2008年4月～2020年3月

日本プルースト研究会・幹事, 2006年4月～2012年3月

関西プルースト研究会・世話役, 2005年9月～現在に至る

2. 山上 浩嗣 教授

1966年生。京都大学文学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。パリ・ソルボンヌ大学にて文学博士号取得(2010年)。東京大学大学院総合文化研究科助手、関西学院大学社会学部専任講師、同准教授、同教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2015年より現職。専攻：フランス文学・思想

2-1. 論文

山上浩嗣 「デイドロ『サロン』抄訳(5)」『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 60, pp. 41-76, 2020/3

- 山上浩嗣 「モンテーニュにおける「見かけ」の批判—パスカルとの対比において」『ガリア』(大阪大学フランス語フランス文学会), 59, pp. 29-38, 2020/3
- 山上浩嗣 「パスカルにおける「見かけ」の批判」『CORRESPONDANCE (コレスポンドダンス) 北村卓・岩根久・和田章男教授退職記念論文集』(北村卓・岩根久・和田章男教授退職記念論文集編集委員会), pp. 89-102, 2020/2
- 山上浩嗣 「『パンセ』原稿と写本および校訂について: 研究の現状」『ガリア』(大阪大学フランス語フランス文学会), 58, pp. 29-38, 2019/3
- 山上浩嗣 「デイドロ『サロン』抄訳(4)」『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 59, pp. 125-171, 2019/3
- 山上浩嗣 「モンテーニュの「気をそらすこと」とパスカルの「気晴らし」」『ステラ』(九州大学フランス語フランス文学研究会), 37, pp. 91-112, 2018/12

2-2. 著書

- 山上浩嗣 『フランス文学小事典 増補版』朝日出版社, 2020/3 ※岩根久、柏木隆雄、金崎春幸、北村卓、永瀬春男、春木仁孝、和田章男(編)
- 山上浩嗣 『Correspondances (コレスポンドダンス) 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集』朝日出版社, pp. 89-102, 2020/2 ※井元秀剛、太田晋介、高橋克欣、林千宏、三藤博ほか全 57 名
- M・ルコント、中畑寛之、山上浩嗣他 『フランス語初級文法 ななつ星 (Coccinelle : grammaire française élémentaire)』朝日出版社, pp. 14-17, pp. 20-25, pp. 34-37, 2019/1
- 松田浩則、山上浩嗣(共著) 『2018 年度版 仏検公式ガイドブック 傾向と対策+実施問題 準2級』公益財団法人 フランス語教育振興協会(APEF), pp. 223-273, 2018/4

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 山上浩嗣 「書評:Takeshi KUBOTA, MONTAIGNE LECTEUR DE LA CITÉ DE DIEU D'AUGUSTIN, PARIS, HONORÉ CHAMPION, 2019」『ロンサール研究』(日本ロンサール学会), 32, pp. 109-123, 2019/9
- Yamajo, Hirotsugu, "Compte rendu de lecture : Takeshi KUBOTA, MONTAIGNE LECTEUR DE LA CITÉ DE DIEU D'AUGUSTIN, PARIS, HONORÉ CHAMPION, 2019" 『ロンサール研究』(日本ロンサール学会), 32, pp. 124-127, 2019/9
- 山上浩嗣 「【翻訳】コリヌ・アトラン「読むこと、書くこと、訳すこと」」『ガリア』(大阪大学フランス語フランス文学会), 58, pp. 69-76, 2019/3
- 山上浩嗣 「【事典項目】懐疑主義」『社会思想史事典』(社会思想史学会), pp. 92-93, 2019/1

2-4. 口頭発表

- Yamajo, Hirotsugu, "La critique de l'apparence chez Pascal et chez Montaigne", Séminaire à Paris III pour le CENTRE D'ÉTUDES INTERDISCIPLINAIRES SUR PASCAL, PORT-ROYAL ET L'ÉPOQUE MODERNE, CEIPREM, structure fédérative de recherche de la Sorbonne nouvelle - Paris 3, Université Paris III, 2020/2
- 山上浩嗣 「ラシーヌとモリエール—フランス古典演劇の楽しみ」2019 年度 ラスタ教養大学 言葉文化コース, 伊丹市, 伊丹ラスタホール, 2019/10
- 山上浩嗣 「パスカルとモンテーニュにおける「見かけ」の批判」「フランス近世の〈知脈〉」第5回研究会, JSPS 科研費: 課題番号 17K02594 (研究代表者: 山上浩嗣), 大阪大学豊中キャンパス, 2019/8
- 山上浩嗣 「フランス近代文学における文明の自己批判—モンテーニュ、ヴォルテール、デイドロ」国際理解ゼミナール, 国際理解ゼミナール, 宝塚南口会館, 2019/6
- 山上浩嗣 「「今日は何もしなかった」—『エッセー』に見るモンテーニュの脱力的生き方」平成 30 年度ラスタ教養大学・言葉文化コース, 伊丹市立生涯学習センター(ラスタホール), 伊丹市立生涯学習センター(ラスタホール), 2018/10
- 山上浩嗣 「『パンセ』原稿と写本および校訂について: 研究の現状」第 83 回大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大

学フランス語フランス文学会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/9

山上浩嗣 『『パンセ』原稿と写本および校訂について:研究の現状』フランス近世の〈知脈〉第4回研究会, フランス近世の〈知脈〉研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

山上浩嗣 平成 25 年度「科研費」審査委員表彰者, 日本学術振興会, 2013/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2017 年度～2020 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:山上浩嗣

課題番号:17K02594

研究題目:パスカル『パンセ』の人間学—文献学的研究ならびにモンテーニュ思想との比較研究

研究経費:2018 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

2019 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

本研究課題は、1)『パンセ』の全断章を、草稿資料も用いて正確に解釈すること、2)モンテーニュ『エッセー』がパスカル『パンセ』に及ぼした影響について、前者から後者への「継承」の側面のみならず「反発」の側面も明らかにし、パスカルの独自の思想形成の過程を精緻にたどること、を主たる目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フランス語フランス文学会・学会のあり方検討委員, 2019 年 6 月～現在に至る

3. AVOCAT ERIC MARC 特任准教授(常勤)

1972 年生まれ。高等師範学校エコル・ノルマル・シュペリウール卒業。ギリシア・ラテン古典文学大学教授資格取得。フランス文学博士。イエール大学(1995-1996 年)、京都大学(2005-2015 年)で教員を務める。フランスのリセでの教員経験もある。2016 年 4 月より現職。専攻:フランス文学

3-1. 論文

Avocat Eric Marc, “Poésie tragique / Langue révolutionnaire. La logomachie dans le théâtre des Actes des Apôtres”北村卓教授、岩根久教授、和田章男教授退職記念論文集編集委員会『コレスポンダンス 北村卓教授、岩根久教授、和田章男教授退職記念論文集』朝日出版社, pp. 103-115, 2020/2

Avocat Eric Marc, “Ce que vaut la parole. La rhétorique et ses métaphores monétaires”Xavier Bonnier et Ariane Ferry *Le Retour du comparant. La métaphore à l'épreuve du temps littéraire*, Classiques Garnier, pp. 237-254, 2019/7

Avocat Eric Marc, “A Tale of two cities. La politique révolutionnaire au prisme de la scène parlementaire anglaise chez Lebrun-Tossa”Thibaut Julian et Vincenzo De Santis *Fièvre et vie du théâtre sous la Révolution française et l'Empire*, Classiques Garnier, pp. 55-69, 2019/5

Avocat Eric Marc, “Le contrat de lecture, dans l'ombre portée du contrat social”大浦康介退職記念論文集編集委員会『虚実のあわいに Le fictif, ou le réel, Mélanges offerts à Yasusuke Oura』pp. 91-100, 2019/4

Avocat Eric Marc, “Un topos à revisiter dans les Mazarinades : la question des régimes politiques”Patrick Rebollar et Tadako Ichimaru *L'exploration des Mazarinades, colloque international de Tokyo, 3 novembre 2016, Université de Tokyo*, Publication en ligne sur le site des Recherches Internationales sur les Mazarinades (RIM), 2019/4

※下記サイトにて公開:<http://mazarinades.org/2019/06/colloque-tokyo-2016-eric-avocat/>

Avocat Eric Marc, “Le Protecteur et l’Incorruptible : où commence Victor Hugo finit Romain Rolland” *Gallia*, (大阪大学フランス語フランス文学会), 58, pp. 59-68, 2019/3

Avocat Eric Marc, “Recension : François Vanoosthuyse, Le Moment Stendhal” *LITTERA*, (日本フランス語フランス文学会), 4, pp. 104-109, 2019/3

3-2. 著書

Xavier Bonnier, Avocat Eric Marc, *Le Retour du comparant. La métaphore à l’épreuve du temps littéraire*, Classiques Garnier, pp. 237-254, 2019/5

Thibaut Julian, Avocat Eric Marc, *Fièvre et vie du théâtre sous la Révolution française et l’Empire*, Classiques Garnier, pp. 55-69, 2019/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

Avocat Eric Marc, “Parole des représentants, parole représentée : quelles formes pour le spectacle de la politique pendant la Révolution ?”, *Révolution française et spectacles*, 奥香織, 明治大学, 2019/11

Avocat Eric Marc, “Être ou ne pas être en révolution : la représentation politique mise en question par le théâtre dans Le Faux Député de Hyacinthe Dorvo et L’Homme d’État imaginaire de Cubières-Palmézeaux”, *Identités en scène. Reconfigurations du personnage des Lumières à la Révolution (ISECS 15th International Congress)*, Renaud Bret-Vitoz et Pierre Frantz, University of Edinburgh, 2019/7

Avocat Eric Marc, “Les scènes de la vie privée dans le théâtre de la Révolution”, *La famille au 18e siècle*, Yoichi Sumi et Sakurako Inoue, 慶應義塾大学, 2019/7

Avocat Eric Marc, (招待講演) “Perfection référentielle, imperfection esthétique : paradoxes et oscillations de la parole vive en Révolution”, *L’imperfection littéraire et artistique, II: L’imperfection littéraire et artistique*, CÉRÉdI (Rouen), CPTC (Dijon), Université de Rouen (France), 2019/3

Avocat Eric Marc, (招待講演) “Sénat, Communes, Congrès… : les assemblées délibérantes de la Révolution, en leurs miroirs dramaturgiques”, *Théâtre et espace public pendant la Révolution française: フランス大革命における演劇と公共空間*, 慶應義塾大学, 慶應義塾大学 三田, 2018/12

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2019年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者: AVOCAT ERIC MARC

課題番号: 19K00473

研究題目: Rethinking political representation in the light of dramatic art under the French Revolution

研究経費: 2019年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

The notion of theatricality is a key to the political modernity originated in the French Revolution. What is at stake is the concept of representation, in its double meaning: the process endowing an assembly of elected delegates with a political legitimacy, and the theatrical performance.

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フランス語フランス文学会・学会誌編集委員, 2011年6月～現在に至る

4. 太田 晋介 助教

1985年生。2017年、大阪大学大学院博士文学研究科後期課程（文化表現論専攻）単位取得満期退学。2018年、大阪大学大学院文学研究科任期制助教（2020年3月退職）。専攻／フランス文学

4-1. 論文

太田晋介 「負の文学から正のポエジーへの回帰—ポンジュ『マレルブのために』における〈現代性〉という問題系」『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学会関西支部), 26, 日本フランス語フランス文学会関西支部, pp. 51-62, 2020/3

太田晋介 「フランシス・ポンジュはフォルマリストか？—ポンジュ『マレルブのために』における〈現代性〉という問題系」『CORRESPONDANCES コレスポンドダンス 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集』朝日出版社, pp. 533-546, 2020/2

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

太田晋介 「現代性の問いとしてのポンジュ『マレルブのために』」日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 神戸大学, 2019/12

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念事業会発起人会・世話人, 2018年9月～現在に至る

大阪大学フランス語フランス文学会・委員, 2018年4月～現在に至る

2-19 英語学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：岡田 禎之、神山 孝夫

准教授：田中 英理

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
28	5	4	0	0	1	1	0

*うち留学生2名、社会人学生1名

**英米文学・英語学専修として

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	17	2	0	1
2019	9	3	0	2
計	26	5	0	3

*英米文学・英語学専修として

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

大学院に関する目標は、(1) 機能文法、(形式)意味論、語用論、認知言語学、言語変化論、生成文法、比較言語学などに関わる研究論文を読み、内容理解と高度な分析方法を教育・指導すること、(2) 修士論文作成演習と博士論文作成演習の授業を開講し、年数回の研究発表と本の書評を課し、これらの論文が書けるよう教育・指導すること、(3) 国内学会あるいは国際学会での口頭発表と論文投稿のための教育・指導を行うことである。学部に関しては、(1) 機能文法、(形式)意味論、語用論、認知言語学、音声学、言語変化論、生成文法、比較言語学などの領域において、基本的な知識が習得できるよう教育・指導すること、(2) 卒業論文作成演習の授業を開講し、年間予定をたてそれに沿って卒業論文が書けるように教育・指導すること、(3) 中学校、高等学校の英語教員や英語に関わる職業に携わる学部生もいるので、英語の基礎学力を高めるよう教育・指導をすることである。また学部生と大学院生の学問的な連携体制を形成するために、研究

室や授業形態等に工夫を行うことや、研究室の活動報告書を兼ねている HLC News を編集してホームページに掲載することで、卒業論文と修士論文の題目と要旨、授業計画、院生の研究活動、就職状況等の情報を学部卒業生、大学院修了生に連絡することも目標としている。

2. 研究

教員は、各自の予定・計画に合わせて論文を発表し、科学研究費の研究を年次計画に沿って行い、研究成果をあげるよう努める。大学院生には、国内学会あるいは国際学会においてできるだけ多くの口頭発表と論文発表等ができるように指導する。学術雑誌 *Osaka University Papers in English Linguistics* を刊行し、国内外の関係者・大学等に合わせて約 300 部を発送する。大学院生の研究を促進するために、「待兼山ことばの会」と「阪大英文学会」を開催する。

3. 社会連携

研究成果に関する執筆依頼等には積極的に協力することとし、教室の HP を充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とする。また、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることとし、学会活動などにも積極的に参加し、研究成果の普及を図るよう努力する。

Ⅲ. 活動の概要(2018 年度～2019 年度)

1. 教育

学部では、学校文法、機能文法、(形式)意味論、語用論、音声学、生成文法、歴史言語学関係の講義と演習のほか卒業論文作成演習を行い、一定の成果がえられた。大学院では、理論言語学、機能文法理論、(形式)意味論、語用論関係の講義と演習、論文書評の演習、博士論文作成演習、修士論文作成演習などを行なった。また、HLC News を編集し、英語学研究室や院生の研究活動、就職状況等を同窓生の方々に報告した。

2. 研究

教員は各自の計画に合わせて論文を発表し、科学研究費の研究も各自の年次計画に沿って実行している。大学院学生の研究活動は、論文が 19 本(2018 年度に 4 本、2019 年度に 15 本)、口頭発表が 24 本(2018 年度に 7 本、2019 年度に 17 本)と活発に行われた。OUPEL についても 2019 年度に予定通り 19 号を刊行し、国内外の研究者、大学図書館などに送付した。また、「待兼山ことばの会」と「阪大英文学会」も当初の予定通りに開催した。

3. 社会連携

教室の HP は逐次更新し、常に最新の情報が提供できるように努めている。また教員は、日本英語学会、日本英文学会(関西支部)、関西言語学会などの各種学会の理事、評議員、編集委員、運営委員、Japanese/Korean Linguistics や各種大会の論文審査員の職務を遂行しており、学会活動にも積極的に対応している。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018 年度～2019 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。

2. 研究

教員・大学院生の研究活動は活発に行われ、研究会や学会の開催も予定通り行われた。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の通り、教員は、日本英語学会、日本英文学会、関西言語学会などの各種学会の理事、評議員、編集委員、運営委員等の職務を遂行しており、学会活動にも積極的に対応している。また、教室のHPでは、教員・大学院生の研究活動や講演会開催等の最新情報を逐次更新しており、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	1	0	0
2019	2	0	2
計	3	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

山口真史 “The Directionality of Agreement and the Nature of Secondary Predicate Constructions” 2019/3
主査：加藤正治 副査：岡田禎之 神山孝夫、田中英理、大庭幸男

水谷謙太 “Arguments for the Situation-based Approach of Adverbial Quantifiers.” 2020/3
主査：田中英理 副査：岡田禎之、加藤正治、神山孝夫

平山裕人 “Toward a Deeper and Broader Understanding of Evidentials.” 2020/3
主査：田中英理 副査：岡田禎之、加藤正治、神山孝夫

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)	4(4)
2019	5(1)	1(1)	9(2)	0(0)	0(0)	15(4)
計	7(3)	1(1)	9(2)	0(0)	2(2)	19(8)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	4	1	2	0	0	7
2019	8	4	0	0	5	17
計	12	5	2	0	5	24

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

平山裕人 "The time-quantification by floating proportional quantifier 'hotondo' and subinterval property", the Proceedings of the 42nd meeting of the Kansai Linguistics Society, 第38巻, pp.37-48, 2018/6

平山裕人 "The syntax and semantics of the Japanese pseudo-partitive construction", Japanese/Korean Linguistics 25 (Online), 第25巻, 2018/12

平山裕人 "Evidentials referring to different temporalities", Proceedings of LENLS 15, 第15巻, 2018/11

山口真史 "Deriving the Direct Object Restriction", English Linguistics, 第35巻, 第1号, pp.151-172, 2018/9

【2019年度】

〔博士前期〕

美馬未歩 "A Generalization on the Descriptivity of Lexical Verbs" 『Osaka University Papers in English Linguistics』第19巻, pp.85-102, 査読無, 2019/12/1

森藤庄平 "A Note on Change Denoted by N-free" 『Osaka University Papers in English Linguistics』第19巻, pp.117-124, 査読無, 2019/12/1

槇原尚紀 "The Restriction on Epistemic Must" 『Osaka Literary Review』第58巻, pp.21-38, 査読有, 2020/1/8
〔博士後期〕

水谷謙太 "On Japanese Adverbial Quantifiers and their Interaction with Proper Nouns" 『KLS Selected Papers』第1巻, 第1号, pp.85-98, 査読有, 2019/6/1

水谷謙太 "Equative hodo and the Polarity Effects of Existential Semantics" 『Proceedings of LENLS』 pp.1-13, 査読無, 2019/11/10

水谷謙太 "Existential Semantics in Equatives in Japanese and German" 『Proceedings of the 22nd Amsterdam Colloquium』 pp.387-396, 査読無, 2019/12/20

水谷謙太 "Comparing Constraints on Adverbs of Quantification" 『Osaka University Papers in English Linguistics』第19巻, pp.39-53, 査読無, 2019/12/1

平山祐人 "A Note on Why and How Manners of Acquisition Should Be Analyzed" 『Osaka University Papers in English Linguistics』第19巻, pp.45-64, 査読無, 2019/12/1

平山祐人 "Epistemic Adverbs that can/cannot be Embedded under Imperatives" 『Proceedings of Linguistics Society of America』第4巻, pp.1-15, 査読無, 2019/5/26

平山祐人 "The Syntax and Semantics of the Japanese Pseudo-partitive Construction" 『Japanese / Korean Linguistics 25 (Online Proceedings)』第25巻, pp.1-13, 査読無, 2019/7/26

平山祐人 "A Dynamic Account for the Scope Properties of Evidentials" 『待兼山論叢』第53巻, pp.41-60, 査読有, 2019/12/25

菊池由記 "A Note on Semantic Interpretations of Resultative Constructions with very A" 『Osaka University Papers in English Linguistics』第19巻, pp.75-84, 査読無, 2019/12/1

徳永和博 "Discourse Functions of Optional Subject-auxiliary Inversion Constructions in Than- and As-clauses" 『Osaka University Papers in English Linguistics』第19巻, pp.177-198, 査読無, 2019/12/1

徳永和博 "文頭の And 再考—コーパスを用いた文脈の機能と用法に関する研究—" 『立命館言語文化研究』第31巻, 第2号, pp.39-50, 査読無, 2019/10/1

岩宮努 "複合動詞 overeat とその代替表現 eat too much に生じる目的語の性質と生起率に関する一考察" 『Osaka

(2)口頭発表

【2018 年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

平山裕人「Evidentials referring to different temporalities」, LENLS 15, 慶應義塾大学, 2018/11/12-14

平山裕人「Temporal requirement in the semantics of evidence」, the 26th meeting of Japanese/Korean Linguistics (JK26), カリフォルニア大学ロサンゼルス校, 2018/11/30

平山裕人「Epistemic adverbs that can/cannot be embedded under imperatives」, the 93rd annual meeting of Linguistics Society of America, ニューヨーク大学, 2019/1/5

平山裕人「The temporal anteriority/posteriority parameter in inferentials」, the 43rd annual meeting of Penn Linguistics Conference, ペンシルベニア大学, 2019/3/23

水谷 謙太「日本語の量化副詞の考察—固有有名との相互作用の観点から—」, 関西言語学会第 43 回大会, 甲南大学, 2018/6/9-10

山口真史「The Directionality of Agreement: Evidence from Secondary Predication」, Linguistic Collegium at Ryukoku, 龍谷大学, 2018/4/1

山口真史「The Syntactic Nature of Resultatives in English: An Analysis under the Theory of Upward Agree」, 阪大英文学会, 大阪大学, 2018/10/27

【2019 年度】

〔博士前期〕

美馬未歩「動詞の記述性における Act-Nucleus と Troponymy」, 日本言語学会第 158 回大会, 一橋大学, 2019/6/22

〔博士後期〕

水谷謙太 “On the Semantics of the Japanese Degree Morpheme hoo”, ELSJ International Spring Forum 2019, 聖心女子大学, 2019/5/12

水谷謙太「量化副詞の複数性制約について」, 関西言語学会第 44 回大会, 関西大学, 2019/7/12

水谷謙太 “On the Interaction between the Embedded Tense and the Matrix Existential Expression”, Japanese / Korean Linguistics 27, Sogang University, 2019/10/19

水谷謙太 “Hurford Conditionals in Japanese”, Japanese / Korean Linguistics 27, Sogang University, 2019/10/19

水谷謙太 “The Rescuing Effect of Degree Morphemes”, 日本英語学会第 37 回大会 スチューデント・ワークショップ, 関西学院大学, 2019/11/9

水谷謙太 “Equative hodo and the Polarity Effects of Existential Semantics”, Logic and Engineering of Natural Language Semantics (LENLS) 16, 慶応大学, 2019/11/11

水谷謙太 “Existential Semantics in Equatives in Japanese and German”, Amsterdam Colloquium 2019, Amsterdam University, 2019/12/20

水谷謙太 “On Two Polarity-Sensitive Equative Constructions”, Variation in the Lexical Semantics of Adjectives and their Crosslinguistic Kin, Hambrug University, 2020/3/6

水谷謙太 “Equative Semantics and Polarity Sensitivity”, DegPol2020 (Workshop on Degree Expressions and Polarity Effects), ZAS, 2020/3/9

水谷謙太 “Licensing of Minimizer PPIs under Negation”, DegPol2020 (Workshop on Degree Expressions and Polarity Effects), ZAS, 2020/3/10

平山祐人 “Temporal Evidentials without Tense”, Expressing Evidence Workshop, University of Konstanz,

2019/6/6

平山祐人 “Restriction on Evidence in Evidentiality: the Part-whole Relation between Situations”, The 24th Meeting of Sinn und Bedeutung, Osnabrück University, 2019/9/4

平山祐人 “On the Interaction between the Embedded Tense and the Matrix Existential Expression”, Japanese / Korean Linguistics 27, Sogang University, 2019/10/19

平山祐人 “Association between Floating Quantifiers and their Hosts beyond Islands: a Possibility of Semantic Analysis”, 日本英語学会第 37 回大会 スチューデント・ワークショップ, 関西学院大学, 2019/11/9

岩宮努 「基数詞目的語によって生じる over-V の意味の考察」, 英語語法文法学会第 27 回大会, 北九州市立大学, 2019/10/19

菊池由記 「N-free X と N-less X の構文形態論に基づく分析」, 日本英語学会第 37 回大会, 関西学院大学, 2019/11/9

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

2019 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018 年度 学部 : 3 名 大学院 : 0 名 (計 3 名)

2019 年度 学部 : 1 名 大学院 : 0 名 (計 1 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018 年度～2019 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

山口真史 博士後期課程 関西外国語大学 助教 2019/4

森藤庄平 博士後期課程 岐阜市立女子短期大学 教授 2019/5

山口麻衣子 博士後期課程 ノートルダム清心女子大学 講師 2020/4

水谷謙太 博士後期課程 名古屋外国語大学 講師 2020/4

平山裕人 博士後期課程 関西外国語大学 助教 2020/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018 年度～2019 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2 名

2018 年度 : 1 名 2019 年度 : 1 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 2 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度：0名 2019年度：0名

9. 刊行物

2018年度 *OLR (Osaka Literary Review)* No. 57 2018/12

2019年度 *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 19 2019/12

OLR (Osaka Literary Review) No. 58 2019/12

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

第101回待兼山ことばの会 2018年8月3日

講演者：松井理直(大阪保険医療大学) 「現代日本語の撥音と促音について」

第102回待兼山ことばの会 2019年8月2日

講演者：松井理直(大阪保険医療大学) 「日本語の無声化母音再考」

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会 51回大会

2018年10月27日

第101回待兼山ことばの会

2018年8月3日

阪大英文学会 52回大会

2019年10月26日

第102回待兼山ことばの会

2019年8月2日

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 岡田 禎之 教授

1965年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程(英語学専攻)中途退学。文学博士(大阪大学、2001年)。第37回市河賞(2003年)。大阪大学助手、岡山大学講師、金沢大学助教授、神戸市外国語大学助教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2010年4月より現職。専攻：英語学

1-1. 論文

岡田禎之「因果的結束関係を表す副詞句と語彙概念拡張」『大阪大学大学院文学研究科紀要』60, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-40, 2020/3

岡田禎之「因果関係の副詞句における概念拡張とofの脱落について」『英語学の深まり・英語学からの広がり』(阪大英文学会叢書10) 阪大英文学会, pp. 120-131, 2020/3

Okada, Sadayuki, "Nominal Conceptual Expansions in Predicational and Modification Contexts." *Osaka University Papers in English Linguistics* 19, 大阪大学大学院文学研究科英語学研究室, pp. 125-149, 2019/12

岡田禎之「英語の補文形式と事態の統合について」『英語学を英語授業に活かすー市河賞の精神(こころ)を受け継いでー』開拓社, pp. 158-176, 2018/9

岡田禎之「認知言語学は言語普遍性、個別言語の特殊性をどのように考えるのだろうか?」『認知言語学とは何か?』くろしお出版, pp. 157-176, 2018/5

1-2. 著書

Okada, Sadayuki, & Eri Tanaka (eds.) *Osaka University Papers in English Linguistics*, 19, 大阪大学文学研究科英語学研究室, pp. 125-149, 2019/12, (243頁)

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

畠山雄二, 縄田浩幸, 岡田禎之他(共著), 『正しく書いて読むための英文法用語辞典』, 朝倉書店, pp. 239-266, 2019/9, (318頁)

1-4. 口頭発表

岡田禎之 「因果関係の副詞句における新規表現の発展について」筑波大学言語学講演会, 筑波大学人文社会科学研究所, 筑波大学, 2019/12

Okada, Sadayuki, "On the rise of truncated causal adjuncts in English", 15th International Cognitive Linguistics Conference, International Cognitive Linguistics Association, Kwansai Gakuin University, 2019/8

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡田禎之 10 papers selection, Annual Report of Osaka University Academic Achievement 2009-2010, Osaka University, 2010/12

岡田禎之 第37回市河賞, 財団法人語学教育研究所, 2003/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2018年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田禎之

課題番号:18K00646

研究題目:テキストの結束関係と語彙概念拡張

研究経費:2018年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2019年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

語彙概念拡張が、叙述関係や修飾関係において、中心的参加者から周辺の参加者に浸透していくという意味拡張の一般的な特徴が認められるが、その一方で、このような一般化と合致しない独自の語彙概念拡張を見せる場合もある。テキスト形成レベルにおける結束関係、という捉え方を導入することによって、この例外的な事象について解決していくことができると考えられる。本研究では、様々な結束関係に認められる語彙概念拡張現象について検討していく。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英語学会・副編集委員長, 2019年11月～現在に至る

日本英語学会・編集委員, 2019年7月～現在に至る

日本認知言語学会大会発表査読委員 2019年4月～現在に至る

阪大英文学会・会長, 2018年10月～現在に至る

日本英語学会・理事, 2018年4月～現在に至る

日本英文学会関西支部・理事, 2013年4月～2019年3月

日本英語学会・評議員, 2013年4月～現在に至る

2. 加藤 正治 教授

1955年生。名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程修了(英語学講座)。文学修士(名古屋大学、1979年)。名古屋大学助手、甲南女子大学講師、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授(2020年3月定年退職)。専攻:英語学

2-1. 論文

加藤正治「Moulton (2004) "External arguments and gerunds"に対する短評」『待兼山論叢』53, 大阪大学文学研究科, pp. 21-28, 2019/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 神山 孝夫 教授

1958年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：歴史言語学、音声学、ヨーロッパ文化史

3-1. 論文

Kamiyama, Takao, "Sanki ICHIKAWA (市河三喜): Father of Historical and Related Studies of English in Japan" 『OUPEL= Osaka University Papers in English Linguistics』19, 大阪大学文学研究科英語学研究室, pp. 1-21, 2019/12

神山孝夫「英語 R 音をめぐる諸問題」『SIMELL = Studies in Medieval English Language and Literature』34, 日本中世英語英文学会, pp. 61-61, 2019/7

Kamiyama, Takao, "Sanki ICHIKAWA (市河三喜): Father of Historical and Related Studies of English in Japan" 『日本中世英語英文学会ホームページ (<http://www.jsmes.jp/pioneers/>)』日本中世英語英文学会, pp. 1-22, 2019/4

神山孝夫「英語における H の歴史」『待兼山論叢 文化動態論篇』52, 大阪大学文学研究科, pp. 41-66, 2018/12

3-2. 著書

神山孝夫『新装版 脱・日本語なまり: 英語(+α)実践音声学』大阪大学出版会, 223p., 2019/9

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

神山孝夫「英語 R 音をめぐる諸問題」日本中世英語英文学会, 三重県勤労者福祉会館(三重大学), 2018/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

神山孝夫 大阪大学共通教育賞(2008 年前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本古代ロシア研究会・理事, 2015 年 4 月～現在に至る

4. 田中英理 准教授

1975 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。2007 年博士(文学)。日本学術振興会特別研究員(PD)、愛媛大学教育学生支援機構英語教育センター講師、大阪医科大学総合教育講座講師を経て 2015 年 10 月より現職。専攻：英語学

4-1. 論文

田中英理「二種類の Measure Phrases と尺度理論」『英語学の深まり・英語学からの広がり』(阪大英文学会), 英宝社, pp. 18-30, 2020/3

Tanaka, Eri, "Reconsidering Degree Abstraction Parameter in Japanese: Negative Island Effects in Comparatives and Equatives" *OUPEL*, (大阪大学文学研究科英語学研究室), 19, 大阪大学文学研究科英語学研究室, pp. 151-164, 2020/2

Tanaka, Eri, "Existential Semantics in Equatives in Japanese and German" *Proceedings of 22nd Amsterdam Colloquium*, (Amsterdam Colloquium), pp. 377-386, 2019/12

Tanaka, Eri, "Scalar particles in comparatives: A QUD approach" *New Frontiers in Artificial Intelligence, JSAI-isAI 2018 Workshops, JURISIN, AI-Biz, SKL, LENLS, IDAA, Yokohama, Japan, November 12-14, 2018, Revised Selected Papers*, (LENLS), Springer, pp. 357-371, 2019/11

Tanaka, Eri, "Equative hodo and the polarity effects of existential semantics" *Proceedings of LENLS 2019*, (LENLS), pp. 1-13, 2019/11

Tanaka, Eri, "Comparatives and Negative Island Effect in Japanese" *Proceedings of LENLS 2019*, (LENLS), pp. 1-11, 2019/11

Tanaka, Eri, "Scalar Particles in Comparatives: A QUD Approach" *Proceedings of LENLS*, (LENLS), 13, LENLS, pp. 1-13, 2018/11

田中英理「焦点辞と比較構文」『日本英文学会関西支部 12 回大会プロシーディングス』(日本英文学会関西支部), pp. 259-260, 2018/7

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

-
- Tanaka, Eri, 水谷謙太, Stephanie Solt, “On two polarity-sensitive equative constructions”, Workshop on Variation in the Lexical Semantics of Adjectives and its Kin, ドイツ言語学会, ハンブルグ大学, 2020/3
- Tanaka, Eri, 水谷謙太, Stephanie Solt, “Equative semantics and polarity sensitivity”, Degree Expressions and Polarity Effects, ZAS, ZAS Berlin, 2020/3
- 井原駿, Stephanie Solt, Tanaka, Eri et al., “Licensing of Minimzer PPIs under Negation. Degree Expressions and Polarity Effects”, Degree Expressions and Polarity Effects, ZAS, ZAS Berlin, 2020/3
- Tanaka, Eri, 水谷謙太, Stephanie Solt, “Existential Semantics in Equatives in Japanese and German”, 22nd Amsterdam Colloquium, Amterdam Colloquim, アムステルダム大学, 2019/12
- 吉本真由美, Tanaka, Eri, “Comparatives and Negative Island Effect in Japanese”, LENLS 16, JSAI International Symposia on AI, 慶應義塾大学・日吉キャンパス, 2019/11
- Tanaka, Eri, 水谷謙太, Stephanie Solt, “Equative hodo and the polarity effects of existential semantics”, LENLS 16, JSAI International Symposia on AI, 慶應義塾大学・日吉キャンパス, 2019/11
- Tanaka, Eri, “Polarity Sensitivity of Some Comparative Markers in Japanese”, 言語と論理的思考の発達に関する研究 第二回国際シンポジウム, 大阪大学国際共同研究促進プログラム(言語文化研究科), ZAS Berlin, 2019/3
- Tanaka, Eri, “Scalar Particles in Comparatives: A QUD Approach”, LENLS 15, LENLS, 慶應義塾大学, 2018/11
- Tanaka, Eri, “Scalar Particles in Comparatives”, 言語と論理的思考の発達に関する研究 第一回国際シンポジウム, 大阪大学国際共同研究促進プログラム(言語文化研究科), 大阪大学, 2018/7

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2017年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:田中英理

課題番号:17K02810

研究題目:程度が存在論:統語論・意味論・語用論からの多角的アプローチ

研究経費:2018年度 直接経費 600,000円 間接経費 0円

2019年度 直接経費 600,000円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究は、比較という人間の認知発達に重要な役割を果たしている概念の自然言語での表れと考えられる比較構文を対象として、この構文の意味解釈が日英語において共通のメカニズムに基づいているかどうかを明らかにする。本研究は、比較構文の意味解釈に関わるとされる程度という概念について、(i)程度は個体と同じ振る舞いをするか、(ii)どの言語にも程度を導入すべきか、を問題とし、これまで多くの研究で取られてきたような統語論、意味論的観点だけでなく、比較構文における焦点や前提といった語用論的な振る舞いを分析することによって明らかにすることを目的とする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

関西言語学会・編集委員, 2012年10月～現在に至る

2-20 日本語学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 5 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：石井 正彦、田野村忠温、渋谷 勝己、マシュー・バーデルスキー、三宅 知宏

准教授：高木 千恵

助教：東条 佳奈

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
46	14	11	0	0	2	3	2

*うち留学生 19名、社会人学生 4名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	7	7	1	2
2019	22	2	0	3
計	29	9	1	5

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

1. 大学院、学部ともに、論文作成演習を開講するとともに、専門分野全体の間際発表会を開いて、分野内での議論の活性化をはかる。
2. 大学院については、各種学会で口頭発表を行ったり学術雑誌に論文を投稿したりするための個別指導を充実させる。
3. 学部については、日本語学や日本語教育学をめぐる基本的な知識や技能を幅広く習得できるよう、授業を組織する。あわせて、日本語や日本語教育をめぐるさまざまな言語的・社会的問題を自発的に発見し、的確に把握しつつ、初歩的な分析を行える能力を養成する。
4. また、大学院、学部ともに、フィールド調査やコーパスの作成、言語データの分析、教育実習等を取り入れた実践的な課題追求型の演習科目を開講し、指導を行う。
5. 大学院生と学部生との共通演習を開講し、両者の学問的連携体制を維持する。

2. 研究

1. 1人平均で、教員は2本の研究論文を執筆し、博士後期学生は1本の研究論文の執筆と1件の口頭発表を行う。教員はまた、個人で行う研究のほか、外部の研究者や学生との、科学研究費その他による共同研究プロジェクトに従事する。
2. 博士前期学生は、今後、学会での口頭発表・研究論文の執筆を行うことを視野に入れた研究を推進する。
3. 研究室全体で研究雑誌『阪大日本語研究』を刊行し、日本語研究界に専門分野の研究成果を発信する。

3. 社会連携

1. フィールド調査、言語分析、教育実践研究等の結果を速やかにまとめ、資料を現地等に還元する。また印刷物やHPによって、一般に公開する。
2. 高校生等の自主研究や公開講演会に積極的に協力することなどを通して、研究成果を社会に還元することにつとめる。
3. 地域の外国人の日本語学習支援活動、各種日本語教育機関の企画などに、積極的に協力する。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

設定した目標を達成するべく、活動を行った。具体的には、

1. 大学院、学部ともに、論文作成演習や専門分野全体の論文中間発表会をとおして、専門分野内での議論を活性化した。
2. 引き続き、学部開講科目について、配当年次を明示した資料をガイダンス時に配布する等により、科目間の有機的なつながりが学生の目に明らかになるように配慮した。
3. 大学院については、各種学会の口頭発表や査読雑誌への論文投稿にあたって、個別指導を行った。
4. 学部については、日本語学の基本的な知識や技能を幅広く習得できる講義を開講した。また、演習において、日本語や日本語教育をめぐるさまざまな言語的・社会的問題を自発的に発見し、初歩的な調査と分析を行ったり、参加型の授業で協働的学習を行ったりする機会を提供した。
5. 大学院、学部ともに、フィールド調査やコーパスの作成、言語データの分析、日本語教育実習等を取り入れた実践的な課題追求型の演習科目を開講し、指導を行った。
6. 大学院生と学部生との共通演習を開講し、研究室内において調査・研究の手法等の教育が効果的に行われるようにした。

2. 研究

1. 教員、大学院生ともに、目標とした数の研究論文をほぼ執筆した。各教員はまた、科学研究費その他による共同研究プロジェクトに従事した。
2. 博士前期学生は、演習で研究成果の発表を行いつつ、学会での口頭発表・研究論文の執筆を行うことのトレーニングを重ねた。
3. 『阪大日本語研究』を刊行し、研究成果を学界に発信した。

3. 社会連携

1. フィールド調査の報告論文を発表するなど、研究成果を社会に広めることにつとめた。
2. その他、学会の委員等を積極的に引き受けた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

個人差はあるものの、演習等での活発な議論をとおして、比較的水準の高い博士論文、修士論文、卒業論文が提出されている。

また講義や低学年配当の演習をとおして、学生の基礎体力を築くことができている。
以上、所期の目標はおおむね達成できたと思われる。

2. 研究

目標はおおむね達成できたと思われる。

3. 社会連携

学会での活動状況は良好である。

その他の社会連携については、積極的に取り組む用意を整えていたが、対象年度後半のコロナ禍もあり、その機会が十分に得られなかった。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	2	0	2
2019	3	0	3
計	5	0	5

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

【2018年度】

藤原京佳「EPA介護福祉士候補者は何ができるようになったのか—就労開始後1年間の縦断的インタビューを通して—」

2018/9

主査：マシュー・バーデルスキー 副査：石井正彦、高木千恵

郭 菲「ある文系中国人留学生の日本の大学院における学習経験—エスノグラフィーを用いた縦断的調査—」 2019/3

主査：マシュー・バーデルスキー 副査：高木千恵、渋谷勝己

【2019年度】

栄 苗苗「中国人技能実習生の日本語学習アプローチ—日本語能力試験の N1、N2 に合格していない人に焦点を当てる—」 2020/3

主査：マシュー・バーデルスキー 副査：石井正彦、高木千恵

上林 葵「関西若年層のカジュアル談話にみるスタイルの運用—首都圏移住者を事例として—」 2020/3

主査：高木千恵 副査：渋谷勝己、マシュー・バーデルスキー

張 希西「現代日本語における空間的な関係を表す表現の意味用法と機能語化—意味機能の広がりにおける関連性を中心に—」 2020/3

主査：田野村忠温 副査：石井正彦、三宅知宏

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	1(1)	1(0)	3(3)	0(0)	0(0)	5(4)
2019	1(1)	3(1)	1(0)	0(0)	0(0)	5(2)
計	2(2)	4(1)	4(3)	0(0)	0(0)	10(6)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	1	6	1	0	0	8
2019	3	1	0	0	1	5
計	4	7	1	0	1	13

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

李頌雅「留学生と日本人チューターの学習活動：会話における評価に着目して」『言語文化教育研究』第16巻， pp.157-176, 2018/12

郭菲「日本の大学院の実践共同体に参加する初期段階における学習過程—ある中国人留学生のインタビュー調査から得た理解—」『阪大日本語研究』第31号， pp.17-48, 2019/2

栄苗苗「中国人技能実習生の日本語学習アプローチ —日本語能力試験のN1、N2に合格していない人に焦点を当てる—」『阪大日本語研究』第31号， pp.49-72, 2019/2

李河恩「現代新聞の「うれしい+名詞」表現における感情惹起のパターン」『阪大日本語研究』第31号， pp.73-88, 2019/2

張希西「接尾辞「上（じょう）」を後要素とする語の機能—機能の移行と移行の条件について—」『言語文化学』第28号， 2019/3

【2019年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

上林葵「発話の引用方法に関する対照研究—関西・首都圏若年層を例に—」『阪大社会言語学研究ノート』第16号， pp.55-69, 査読無, 2019/7/7

上林葵「関西方言における終助詞的断定辞「ジャ」の機能—マイナス感情・評価の提示—」『日本語の研究』第15巻， 第2号， pp.1-17, 査読有, 2019/8/1

上林 葵「関西若年層のカジュアル談話にみるスタイル切換え—首都圏移住者を例に—」『阪大日本語研究』第32号， pp.37-61, 査読有, 2020/3/30

金道瑛「韓国人日本語学習者の情報伝達行動におけるストラテジーの場面間切り換え—分析のための枠組み試論—」『待兼山論叢日本学篇』第53号， pp.81-98, 査読無, 2019/12/25

近藤優美子「副詞的要素”ほぼほぼ”について」『待兼山論叢』第53号， pp.63-80, 査読無, 2019/12/25

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

上林 葵「関西若年層のカジュアル談話にみるアクセント切換え—方言文節量の観点から—」, 日本方言研究会第106回研究発表会, 日本大学, 2018/5/18

上林 葵「関西方言のコピュラ「ジャ」にみるマイナスの感情性」, 日本語学会2018年度春季大会, 明治大学, 2018/5/19

近藤優美子「教師・学生に低負担な継続的接触場面のデザイン—日本人大学生と日本語学校留学生を無料通話アプリで結ぶ—」, 2018年度日本語教育学会春季大会, 東京外国語大学, 2018/5/27

近藤優美子「日タイスカイプ交流のデザインとタイ人大学生の変容—日本人大学生とタイ人大学生が「日本語」を学び合う—」, タイ国日本語教育研究会第31回年次セミナー, 国際交流基金バンコク日本文化センター, 2019/3/16

張希西「上下関係を表す空間表現「うえ」と「した」の記述研究—具体と抽象の間—」, 日本語学会2018年春季大会, 明治大学, 2018/5/19

張希西「空間的な関係を表す表現の意味と用法—語構成要素「上(じょう)」を中心に—」, 土曜ことばの会, 大阪大学, 2018/8/4

〔研究生〕

本廣田鶴子「スペイン語教師の資格について—スペイン語教師養成とインスティトゥト・セルバンテスの役割—」, 外国語教育学会(JAFLE)第22回大会, 東京外国語大学, 2018/12/16

本廣田鶴子「日本語学習者の作文における副詞使用傾向について—日本語学習者作文コーパスを資料として—」, 日本語教育学会関西支部集会, 武庫川女子大学, 2019/3/23

【2019年度】

〔博士前期〕

蔡真彦「対談式タンデム学習における自律的な学習とその変化」JASAL2019 National Conference, 追手門学院大学, 2019/12/1

〔博士後期〕

近藤優美子「"はぼはぼ"と"はぼ"はぼはぼ同じ?—言葉の"生態"を観察する—」, 第5回阪大院生「知の横断」, 大阪大学豊中キャンパス, 2019/11/4

近藤優美子「従属節における補助動詞"しまう"」日本語文法学会第20回大会, 学習院大学, 2019/12/7

沙広聡「接尾辞『性』の成立と発展:日中両語間の相互影響」, 漢日対照言語学研究(協力)会, 西安外国語大学(中国), 2019/8/24,25

李頌雅「留学生と日本人チューターの学習活動における言葉の説明の実践:会話分析の観点からの一考察」東アジア日本研究者協議会第4回学術大会, 国立台湾大学(台湾), 2019/11/2

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD:1名 DC2:0名 DC1:0名 (計1名)

2019年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部：0名 大学院：0名（計0名）

2019年度 学部：0名 大学院：0名（計0名）

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

東条佳奈 目白大学、専任講師、2018/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3名

2018年度：2名 2019年度：1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 3名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2名

2018年度：0名 2019年度：2名

9. 刊行物

『阪大日本語研究』（機関誌・年1回）定期刊行物

1989年度～現在に至る

『阪大社会言語学研究ノート』（機関誌・年1回）逐次刊行物

1999年度～現在に至る

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本方言研究会第108回研究発表会 2019年5月17日 於 大阪大学豊中キャンパス 大阪大学会館

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 石井 正彦 教授

1958年生。東北大学文学部卒、東北大学大学院文学研究科修了。博士（文学）（東北大学）。国立国語研究所研究員、同室長、大阪大学准教授を経て、2009年4月より現職。専攻：現代日本語学

1-1. 論文

石井正彦 「語彙調査の裏側－基本語彙から周辺語彙へ－」『日本語学』38-12, 明治書院, pp. 12-23, 2019/12

石井正彦 「コロケーションの成立と変化に関する事例的検討－新聞「デフレ＋動詞」句の通時的頻度調査から－」『現代日本語研究』11, 文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室, pp. 107-126, 2019/3

1-2. 著書

石井正彦(編)『語彙の原理－先人たちが切り開いた言葉の沃野－』朝倉書店, pp. iii-vii, 2-14, 2019/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

石井正彦「慣用連語「デフレから脱却する」の成立—連語の単位性をめぐる事例的検討—」中国海洋大学日語言語学国際学術
研討会, 中国海洋大学外国語学院, 中国海洋大学労山キャンパス図書館第一会議室, 2019/9

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・評議員, 2009年6月～現在に至る

2. 田野村 忠温 教授

1958年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学(言語学専攻)。文学修士(京都大学、1984)。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻: 言語学・日本語学

2-1. 論文

田野村忠温「ドイツ国名「独逸」成立の過程とその背景—社会的条件と日本語における音訳語の特異性—」『東アジア文化交渉研究』13, 関西大学大学院東アジア文化研究科, pp. 61-79, 2020/3

田野村忠温「日本語の呼称の歴史」『大阪大学大学院文学研究科紀要』60, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 127-183, 2020/3

田野村忠温「『日本語学』とその関連語—意味と構造の変容—」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 三十九』, 和泉書院, pp. 左 1-18, 2020/3

田野村忠温「福沢諭吉の「コルリ」(カレー)をめぐって」『阪大日本語研究』32, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 25-35, 2020/2

田野村忠温「新出資料道光本《华英通语》及中国早期英语学习书の系譜」(朱晓平译)沈国威・彭曦・王奕红主编『亚洲概念史研究』第五卷, 商务印书馆, pp. 113-136, 2019/12

田野村忠温「言語研究資料としての近代中国地理文献彙集の信頼性—『海国図志』と『小方壺齋輿地叢鈔』—」『或問』36, 白水社, pp. 1-10, 2019/12

田野村忠温「19世紀中国有关英语的出版物对日本人英语学习的影响: 概観与福泽谕吉《增订华英通语》的分析」(孫晓译)李雪涛、沈国威主编『亚洲与世界』第2辑, 社会科学文献出版社, pp. 320-334, 2019/11

田野村忠温「和製英語—悪習との訣別—」『日本語学』38-7, 明治書院, pp. 54-63, 2019/7

田野村忠温「中国初期英語学習書における英語発音の漢字表記—流音の知覚と表記—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』59, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 221-272, 2019/3

田野村忠温 「中国語を表す言語名の諸相—その多様性、淘汰と変質、用法差—」『待兼山論叢』52 文化動態論篇, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 67-102, 2018/12

田野村忠温 「ダッシュ、プライム」『数学セミナー』57-8, 日本評論社, pp. 54-58, 2018/8

2-2. 著書

内田慶市, 田野村忠温(共編著) 『『華英通語』四種—解題と影印—』, 関西大学出版部, 解題篇 pp. 21-67, 影印篇 pp. 69-661, 2020/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

田野村忠温 「正規表現」, 日本語学会編『日本語学大辞典』, 東京堂出版, p. 560, 2018/10

2-4. 口頭発表

田野村忠温 「咖喱の中文名称小史」“近代以来的西餐、洋饭书与大餐馆”工作坊, 复旦大学, 2020/3/27-28 (COVID-19 のため開催中止)

田野村忠温 「再論日本語の呼称の歴史」漢字文化圏近代語研究会 2020 年国際シンポジウム, 漢字文化圏近代語研究会, 上海外国語大学, 2020/3/14-15 (COVID-19 のため開催中止)

田野村忠温 「『英吉利国訳語』の編纂過程」関西大学東西学術研究所研究例会(言語交渉研究班), 関西大学, 2020/1

田野村忠温 「中日两国语言中的德国国名的历史—附论“额呼马尼雅”」四百年來东西方语言之互动—近代东西语言接触研究学术会议 2019, 北京外国语大学, 2019/11

田野村忠温(基調講演) 「日本語の呼称の歴史」日本近代語研究会 2019 年度春季発表大会, 日本近代語研究会, 関西大学, 2019/5

田野村忠温 「日中言語交流の過去と現在」湖北第二師範学院講演会, 湖北第二師範学院, 2019/5

田野村忠温 「近代日中語彙交流の研究と言語資料アーカイブ」華中科技大学講演会, 華中科技大学, 2019/5

田野村忠温(基調講演) 「言語研究に対する電子資料の新たな衝撃—コーパスの先にあるもの—」第四屆中南地区日语教学研究学术研讨会, 湖南大学, 2019/3

田野村忠温 「中国語における日本語の呼称の変遷」漢字文化圏近代語研究会 2019 年国際シンポジウム, 漢字文化圏近代語研究会, 北京外国語大学, 2019/3(『漢字文化圏近代語研究会 2019 年国際シンポジウム 予稿集』pp. 52-55, 2019/3)

田野村忠温 「『華英通語』道光本—首部由中国人编写的正统英语学习书」语言互动史研究—近代东西语言接触研究学术会议 2018, 北京外国语大学历史学院/全球史研究院、日本关西大学开放式亚洲文化研究中心(KU-ORCAS), 北京外国语大学, 2018/12(『语言互动史研究—近代东西语言接触研究学术会议 2018 会议手册』p. 9, 2018/12)

田野村忠温(基調講演) 「デジタル情報と言語の研究」関西大学3研究所合同シンポジウム, 関西大学東西学術研究所、経済・政治研究所、法学研究所, 関西大学, 2018/11

田野村忠温 (基調講演) 「指称汉语的诸名称—它们的历史与用法差异」数位化时代下的汉语全球教育史国际学术研讨会暨世界汉语教育史研究会第十届年会, 世界汉语教育史研究会, 関西大学, 2018/10

田野村忠温 「中国初期英語学習書における英語発音の漢字表記—英語の流音の知覚と表記—」東アジア文化交渉学会第 10 回国際学術大会, 東アジア文化交渉学会, 香港城市大学, 2018/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2018 年度～2021 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田野村忠温

課題番号: 18K00535

研究題目:コーパス日本語研究の高度化と多面化のための総合的研究—語史研究への応用を中心に—

研究経費:2018年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2019年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

応募者の従来の研究を踏まえ、日本語研究の学界におけるより高度かつ多面的なコーパス利用の基盤の形成に寄与することを目的として総合的なコーパス日本語研究に取り組む。

特に大規模な近現代語コーパスの構築とそれによる近現代語史研究の高度化を重点的な課題とする。近年利用可能になってきた各種の歴史的資料や手段をうまく組み合わせて利用することによって近現代語史の記述の水準を飛躍的に高められることを、最近いくつかの事例研究を通じて明らかにした。その方向の可能性をさらに追求し、事例研究を重ねるとともに方法論の一般化、洗練を図る。

また、従来に引き続き、上記以外の新たな研究手法・領域の開拓についても模索を重ねるとともに、日本語研究の学界に対する啓発・支援活動として、コーパスに関する一般的な考察・提言や、各種コーパス関連ソフトウェアの開発・公開などにも積極的に取り組む。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 渋谷 勝己 教授

1959年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士（大阪大学）。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授、大阪大学准教授等を経て、2009年4月より現職。専攻：日本語学

3-1. 論文

渋谷勝己 「「裏側」のこぼれ」『日本語学』38-12, 明治書院, pp. 2-10, 2019/12

渋谷勝己 「方言・社会言語学」窪菌晴夫編『よくわかる言語学』ミネルヴァ書房, pp. 144-153, 2019/10

渋谷勝己 「未来の研究に向けたデータ収集—第二言語の習得・維持・摩滅の過程を解明するために—」野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育研究』くろしお出版, pp. 43-62, 2019/5

渋谷勝己 「書き手デザイン—平賀源内を例にして—」『バリエーションの中の日本語史』くろしお出版, pp. 231-249, 2018/5

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渋谷勝己 「書評『日本語条件文の諸相—地理的変異と歴史的変遷』」『日本語文法』19-1, pp. 80-88, 2019/3

渋谷勝己 「可能」, 「言語変種」, 「コード・スイッチング」, 「社会言語学」, 「接触場面」, 日本語学会編『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 156-157, pp. 329-330, pp. 375-377, pp. 482-486, pp. 568-569, 2018/10

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2019年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渋谷勝己

課題番号:19K00627

研究題目:複雑性を指標とする日本語諸方言の類型論的研究

研究経費:2019年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円

研究の目的:

本研究課題の目的は、標準語や海外の日本語変種を含めた日本語諸方言を取り上げて、複雑性という側面から総覧することにある。具体的には、次のようなことを分析する。①日本語諸方言を、各レベル(音素、音節、アクセント、形態、文法カテゴリー等)の体系や構造のあり方をもとに、類型化する。②まだ認定基準があいまいな複雑性という概念とその度合いの算出方法を精緻化しつつ、個々の方言の個々のレベルの形式や当該方言全体の複雑度を測定する。③個々の方言の複雑度を、その方言が使用される過去、現在の社会状況と関連づけて解釈し、言語的複雑性と社会的状況が連動するかどうかを検討する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語文法学会・会長, 2019年4月～現在に至る

日本語学会・理事、評議員, 2015年5月～現在に至る

社会言語科学会・理事, 2015年4月～2019年3月

日本語文法学会・評議員, 2015年4月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2014年10月～現在に至る

4. マシュー・バーデルスキー 教授

1967年生。2006年 UCLA 大学院東アジア言語文化科 PhD 修了。カリフォルニア州立大学ロングビーチ校非常勤講師、スワスモア大学(米ペンシルバニア州)客員助教授・メロン財団ポストドックフェロー、同准教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2015年4月より現職。専攻:日本語学

4-1. 論文

BURDELSKI, Matthew 他(共著), "Introduction: Language socialization in classrooms" Matthew J. Burdelski, Kathryn M. Howard (eds.) *Language socialization in classrooms: Culture, interaction, and language development*, Cambridge University Press, pp. 1-25, 2020/3

BURDELSKI, Matthew, "Embodiment, ritual, and ideology in a Japanese-as-a-heritage language preschool classroom" Matthew J. Burdelski, Kathryn M. Howard (eds.) *Language socialization in classrooms: Culture, interaction, and language development*, Cambridge University Press, pp. 200-223, 2020/3

BURDELSKI, Matthew, "Emotion and affective stance in language socialization" Sonya E. Pritzker, Janine Fenigsen & James M. Wilce *The Routledge Handbook of Language and Emotion*, Routledge, pp. 28-48, 2019/11

BURDELSKI, Matthew 他(共著), "Multimodal membership categorization and storytelling in a guided tour." Jacob L. Mey *Pragmatics and Society*, 10-3, John Benjamins, pp. 337-359, 2019/9

BURDELSKI, Matthew, "Young children's multimodal participation in storytelling: Analyzing talk and gesture in Japanese family

interaction”Asta Cekaite, Maryanne Theobald *Research on Children and Social Interaction*, 3-1, Equinox, pp. 6-35, 2019/8
BURDELSKI, Matthew 他(共著), “Young children’s multimodal and collaborative tellings in family and preschool interaction”Asta Cekaite, Maryanne Theobald *Research on Children and Social Interaction*, 3-1, Equinox, pp. 1-5, 2019/8
BURDELSKI, Matthew(共著), “Multimodal demonstrations of understanding of visible, imagined, and tactile objects in guided tours”Charles Antaki *Research on Language and Social Interaction*, 52-1, Taylor & Francis, pp. 20-40, 2019/3

4-2. 著書

BURDELSKI, Matthew 他(共編著), *Language socialization in classrooms: Culture, interaction, and language development*, Cambridge University Press, pp. 1-274, 2020/3

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

BURDELSKI, Matthew, “Compassionate touch in a Japanese preschool”, The European Association on Learning and Instruction (EARLI), EARLI, RWTH Aachen University, 2019/8

BURDELSKI, Matthew, “Children’s crying and responses in a Japanese preschool”, 16th International Pragmatics Association (IPrA) conference, IPrA, 香港工科大学, 2019/6

BURDELSKI, Matthew, (パネリスト) “Distress and appeal: Children’s crying and caregiver responses in a Japanese preschool.”, 117th American Anthropological Association Annual Meeting, American Anthropological Association, San Jose (California, USA) Convention Center, 2018/11

BURDELSKI, Matthew, (基調講演) “Narrating exclusion, discrimination, and heritage: Discursive practices of positioning and engagement at a Japanese American museum.”, Mobility, discrimination and cultural conflicts across time and space: A symposium celebrating 10 years of Euroculture at Osaka University, Euroculture (EM), 大阪大学, 2018/11

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

マシュー・バーデルスキー 大阪大学賞 教育貢献部門, 大阪大学, 2019/11

マシュー・バーデルスキー 大阪大学総長顕彰 2015(教育部門), 大阪大学, 2015/7

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

5. 三宅 知宏 教授

1965年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程退学。博士(文学) (大阪大学)。鶴見大学専任講師, 同准教授, 同教授を経て, 2016年4月より大阪大学文学研究科准教授。2019年1月より現職。専攻: 日本語学・言語学

5-1. 論文

三宅知宏 「「愛」からはじめる文法研究」『日本語学』38-4, 明治書院, pp. 2-10, 2019/4

三宅知宏 「日本語における『聖書』由来の語彙 (IV) : “目からウロコ(が落ちる)”をめぐって」『現代日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室), 11, pp. 91-106, 2019/4

三宅知宏 「[森山卓郎, 森篤嗣の両氏との共著]日本語文法学会の展望(2015年1月~2017年12月)記述的研究と教育的研究」『日本語文法』(日本語文法学会), 19-1, pp. 90-97, 2019/4

三宅知宏 「日本語の「使役」をめぐって I」『待兼山論叢 日本学篇』(大阪大学文学会), 52, 大阪大学文学会, pp. 19-37, 2018/12

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

三宅知宏 「格」日本語学会(編)『日本語学大辞典』(日本語学会), 東京堂出版, pp. 132-133, 2018/10

三宅知宏 「格文法」日本語学会(編)『日本語学大辞典』(日本語学会), 東京堂出版, pp. 139-140, 2018/10

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語文法学会・学会誌委員長, 2019年4月~現在に至る

日本語文法学会・運営委員, 2019年4月~現在に至る

日本語学会・編集委員, 2018年6月~現在に至る

関西言語学会・運営委員, 2017年4月~現在に至る

関西言語学会・大会委員, 2017年4月~現在に至る

日本語文法学会・大会委員, 2016年4月~2019年3月

日本言語学会・大会運営委員, 2015年7月~2018年6月

日本語学会・庶務委員長, 2015年6月~2018年5月

日本語学会・評議員, 2015年4月~現在に至る

日本語文法学会・評議員, 2013年4月~現在に至る

6. 高木 千恵 准教授

1974年生まれ、大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻修了、博士(文学)。神戸松蔭女子学院大学非常勤講師、京都光華女子大学非常勤講師、関西大学専任講師、同准教授を経て、2010年10月より現職。専攻：社会言語学・方言学

6-1. 論文

高木千恵 「若年層関西方言話者のカジュアルスタイルにおける「ネ」の使用」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 32, pp. 1-24, 2020/2

高木千恵 「縦断的インタビューデータにみる神戸出身女性話者のスピーチスタイル—ことばの経年変化とライフステージ—」『方言の研究』(日本方言研究会), 5, pp. 267-293, 2019/9

高木千恵 「大阪方言におけるノダ補充疑問文と終助詞ナ」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座社会言語学研究室), 16, pp. 15-34, 2019/7

高木千恵 「大阪方言の補充疑問文と終助詞ナ・イナについて:形態統語的な特徴を中心に」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 52, pp. 39-56, 2018/12

高木千恵 「大阪方言の行為要求表現における終助詞ナの共起と前接語の長呼について」『方言の研究』(日本方言研究会), 4, pp. 21-48, 2018/9

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

Takagi, Chie, "Quotations as expression of negative emotions in narrative", 30 Years of Talk: Research into Discourse Across Lifespan, 30 years of talk project team, メルボルン大学, 2019/7

高木千恵 「縦断的インタビューデータにみる神戸出身女性話者のスピーチスタイル:ライフステージの変化とことばの変容」日本方言研究会第107回研究発表会, 日本方言研究会, 岐阜大学, 2018/10

Takagi, Chie, "The Choice of Grammatical Variants in Dialects and Standard Japanese Caused by Changes in Speaker's Social Status", Sociolinguistics Symposium 22, Sociolinguistics Symposium, オークランド大学, 2018/6

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語文法学会・学会誌委員, 2019年4月～現在に至る

日本語学会・常任査読委員, 2018年6月～現在に至る

日本語学会・編集委員, 2015年6月～2018年6月

7. 酒井 雅史 助教

1984年生。2015年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化表現論専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、2015年)。大阪大学大学院文学研究科 文化表現論専攻 特任助教を経て、2018年4月より現職。(2020年3月退職)専攻:社会言語学/方言学

7-1. 論文

酒井雅史「滋賀県長浜市方言談話資料集」『全国方言文法辞典資料集(6)滋賀県長浜市方言談話資料』(方言文法研究会), 6, pp. 1-125, 2019/3

酒井雅史「関西方言における素材待遇形式の分布—読みがたり昔ばなし資料を手がかりに—」『阪大日本語研究』(大阪大学文学研究科日本語学講座), 31, pp. 1-16, 2019/2

酒井雅史「甕島方言の素材待遇形式の運用とその地域差」『鹿児島県甕島方言からみる文法の諸相』(窪菌晴夫/木部暢子/高木千恵[編]), くろしお出版, pp. 83-103, 2019/2

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

酒井雅史「日本語諸方言の敬語運用から見えてくるもの」国立国語研究所シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言」, 国立国語研究所, 関西大学, 2020/2(COVID-19のため延期)

酒井雅史「九州方言における甕島方言の敬語運用」日本言語学会 159 回大会, 日本言語学会, 名古屋学院大学, 2019/11

酒井雅史「甕島方言の敬語」甕島方言研究会, 国立国語研究所, 関西大学, 2019/2

酒井雅史「読みがたりむかし話資料にみる素材待遇形式—関西方言における分布と運用の特徴—」日本語学会 2018 年度秋季大会, 日本語学会, 岐阜大学, 2018/10

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2018 年度～2019 年度、研究活動スタート支援、代表者:酒井雅史

課題番号:18H05579

研究題目:西日本方言の敬語運用に関する言語地理学的研究

研究経費:2018 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

2019 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

本研究は、西日本諸方言の敬語運用の地理的バリエーションを明らかにしようとするものである。これまでの方言敬語に関する研究では、敬語形式の地理的分布と特徴的な運用が個別に指摘されてきているという問題があった。本研究では、この問題に対して、収集した会話データをもとに敬語形式の体系とその運用の双方に関する記述を行い、敬語運用の地理的分布を明らかにすることを目的とするものである。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-21 美学・文芸学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 1 准教授 2 講師 1 助教 0

教授：高安 啓介

准教授：渡辺 浩司、田中 均

講師：西井 奨

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
39	9	9	0	0	0	1	0

*うち留学生5名、社会人学生1名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	13	0	4	0
2019	17	5	0	1
計	30	5	4	1

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

学部の教育においては、基礎的な講義、重要な個別の主題について探究する講義、原典講読の能力を養う演習を開講することによって、基礎的な知識の定着を図るとともに、自ら問題を探究する能力を育成する。卒業論文作成のための演習では、研究経過のプレゼンテーションとそれについての議論を通じて、卒業論文執筆へ向けて個々の学生の問題関心を深める。

大学院の教育においては、最新の研究動向を踏まえた講義・演習を開講し、美学・文芸学研究の視野を広げることを目指す。また、修士論文作成演習、博士論文作成演習を開講し、学会での口頭発表にも耐える専門的な研究報告を行い、それについて、教員と大学院生が互いの観点を尊重し討論を行う。

学部・大学院を通じて、オフィスアワーその他の機会において、指導教員による個別指導を充実させる。

加えて、芸術学講座の他の専門分野、芸術史講座、および文化動態論専攻アート・メディア論講座との連携をはかるとともに、ティーチング・アシスタント制度を通じて、大学院生に対する教育指導能力についてのトレーニングの場を提供し、学部教育や博士前期課程教育を充実させる。

2. 研究

本学では美学と文芸学が一つの専修・専門分野を構成しており、これは全国的に見ても特色のあることだが、古代以来の修辞学の伝統から美学が生まれた歴史的経緯に即したものである。

美学分野は哲学の一分野として、美や崇高などのカテゴリー、芸術の概念、感性の働きなどを原理的に考察するが、美術、デザイン、映画などの個別領域を専門とする芸術学とも密接な関係を保ち、理論的な深みと実証的な堅実さのどちらも重視して、多様化する美的・芸術的諸現象を探究する。

文芸学分野は、芸術としての文学を扱う。研究の関心は広く古今東西の文芸に及ぶが、特に西洋古典の理解を重視し、その上で文芸の一般原理の研究の対象とする。

上記の専修・専門分野の特質を踏まえて、各教員は、期間中に2点以上の著書または論文を執筆すること、また翻訳、書評を積極的に執筆することを目標とする。博士後期課程の各大学院生は、積極的に国内外の学会で研究成果を発表し、期間中に1点以上の査読付き論文を執筆することを目標とする。また研究推進のため、科学研究費補助金その他の競争的外部資金、および日本学術振興会特別研究員に積極的に応募する。

研究に関してはさらに以下の目標を設定する。紀要『文芸学研究』、『美学研究』を継続的に刊行すること。美学会、意匠学会、民族芸術学会、映像学会など関係学会、および学内の文学会、待兼山芸術学会の運営に協力するほか、文芸学研究会、ギリシア・ローマ神話学研究会を開催し、学内外の共同研究に積極的に参画すること。また海外から研究者を招聘する、国際的な研究集会に参加するなど、国際的な学術交流を推進すること、以上である。

3. 社会連携

国・地方公共団体の文化行政、博物館・美術館の運営、芸術祭の開催などに、専門的な知見を生かして協力する。各種学会の運営に参画する。

研究会を広く公開して研究成果の普及を図るほか、ウェブサイト等を通じて研究室の活動内容を外部に発信するなどの活動を通じて、美学・文芸学という学問分野の社会的認知度の向上に努める。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

「Ⅱ. 掲げた目標」に対応する授業を開講した。ティーチング・アシスタント制度も積極的に活用し、教育の充実に努めた。

美学分野では、卒業論文に向けた演習において、個人発表にたいしてグループ討議の時間を設けたり、テーマの決めかたや論文の書き方についての学びの機会をつくったり、テキストを作成して使用したり、学習を深める様々な工夫を取り入れた。大学院では、書いてきた短い文章を相互にチェックしあうことに重点をおき、アカデミックな文章を書く力を伸ばそうとした。

文芸学研究室では、古代ギリシア語ならびにラテン語の教育に力を入れた。文学部の外国語科目にギリシア語とラテン語がなく、文学部において西洋の古典語を学ぶ機会が少なくなっている現状を考えると、当研究室が提供する古典語の教育はますます重要になると思われる。非常勤講師として勝又泰洋氏が授業を担当した。また、論文作成演習では、学部生・大学院生ともに研究発表の力を高めさせた。

2. 研究

各教員の著書、論文等の刊行の実績、および科学研究費補助金の採択状況は、「Ⅴ. 基本情報」の「12. 教員の研究活

動」のとおりである。また大学院生の研究業績は、「2. 大学院生等による論文発表等」のとおりである。

美学研究室では、美学思想をめぐる多様な視点からの研究を進めている。高安教授は、デザイン評価の問題を歴史的・理論的に考察しており、2019年9月に九州産業大学でおこなわれたアジアデザイン史学国際会議および11月に大阪大学でおこなわれた研究例会にて、成果の発表をおこなった。田中准教授は、2019年度の前半にサバティカルを取得して研究に研鑽した。

文芸学研究室はギリシアとローマの文学や神話を中心とする研究を行った。渡辺准教授がアリストテレスの悲劇論、ローマの弁論術などをそれぞれ研究した。西井講師は、ホラティウス『詩論』などのローマにおける文芸論およびオウィディウス『変身物語』を研究した。文芸学研究会では、機関誌として『文芸学研究』が順調に定期刊行されてきている。この研究会は本研究室を事務局兼活動母体としながらも、広く西日本の他大学の多くの研究者、学生とも連携したものであり、研究発表会を年3回開催すると共に、機関誌を年1冊発行し、そのたびごとに合評会を催すなど、活発な活動を継続した。

教員の国際学会での発表は下記「教員の研究活動」のとおりである。

3. 社会連携

外部役員等の引き受け状況および芸術評論の活動については、下記「教員の研究活動」および「大学院生等の業績」に挙げたとおりである。

また文化庁補助金「大学を活用した文化芸術推進事業」の助成を受け、文学研究科を中心として運営された「アート・フェスティバル人材育成プログラム」に、渡辺准教授は事務局として参画した。

IV. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

教育については、目標を上回る成果を上げたとき自己評価する。

2. 研究

研究については、目標を上回る成果を上げたとき自己評価する。大学院生については、国内外の学会における口頭発表および学会誌への論文の投稿に向けた研究指導を今後も充実させる。

3. 社会連携

社会連携活動は全体として目標を達成したとき自己評価する。専門的知見に基づく社会連携活動を今後も継続する。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	0	0	0
2019	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
2019	0(0)	0(0)	3(1)	0(0)	0(0)	3(1)
計	0(0)	1(1)	3(1)	0(0)	0(0)	4(2)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	0	0	0	0	0	0
2019	0	1	3	0	0	4
計	0	1	3	0	0	4

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

西影めぐみ「アルド・ロッシと20世紀美術—建築家の描くイメージをめぐって—」『待兼山論叢』第52号（芸術篇）、pp.29-46、2018/12/25

【2019年度】

〔博士前期〕

坂東晴妃「サウンドスケープにおける美的鑑賞の規範性」『第1回若手研究者フォーラム』 pp.46-49, 査読無, 2019/9/1

坂東晴妃「環境美学とサウンドスケープの鑑賞の問題」『第70回美学会全国大会 若手研究者フォーラム発表報告集』 pp.27-36, 査読無, 2020/3/1

松尾和花菜「叙事詩『カレワラ』編集における「一神教」観念の反映」『第2回若手研究者フォーラム要旨集』 pp.38-41, 査読有, 2020/3/23

〔博士後期〕

なし

(2)口頭発表

【2018年度】

なし

【2019年度】

〔博士前期〕

坂東晴妃「サウンドスケープの美的鑑賞—環境美学の視点から」, 日本サウンドスケープ協会 第27回春季研究発表会, 東京大学, 2019/5/25

坂東晴妃「サウンドスケープにおける美的鑑賞の規範性」, 第1回 大阪大学大学院文学研究科 若手研究者フォーラム, 大阪大学, 2019/9/27

坂東晴妃「環境美学とサウンドスケープの鑑賞の問題」, 第70回美学会全国大会, 成城大学, 2019/10/13

坂東晴妃「環境美学とサウンドスケープ論—身の回りの音をどう聴くか」, 待兼山芸術学会 第30回研究発表会, 大阪大学, 2020/3/28

松尾和花菜「叙事詩『カレワラ』編集における「一神教」観念の反映」, 第2回大阪大学大学院文学研究科若手研究者フォーラム, 大阪大学, 2020/3/23(コロナ対応により延期)

(3)その他(書評・翻訳など)

【2018年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

西影めぐみ「さまざまな自画像集まる「横尾忠則 画家の肖像」展」『大阪日日新聞』新日本海新聞社, p.10, 2018/7/24

【2019年度】

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2019年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名) 美学学部生は足立さん

2019年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2018年度: 0名 2019年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度：0名 2019年度：0名

9. 刊行物

2018年度 『a+a 美学研究』13号

2018年度 『フィロカリア』36号

2018年度 『文芸学研究』22号

2019年度 『フィロカリア』37号

2019年度 『文芸学研究』23号

2019年度 『神話学研究』2号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

【学会等の開催】

美学会西部会第320回研究発表会	2018年9月22日
待兼山芸術学会第29回研究発表会	2019年3月30日
美学会西部会第320回研究発表会	2018年9月28日
第239回意匠学会研究例会	2019年11月23日

【事務局等の引き受け】

日本シェリング協会事務局	2016年度以降
芸術学関連学会連合事務局	2018年度以降

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 高安 啓介 教授

1971年生。一橋大学社会学部卒業。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了(芸術学)。博士(文学)。愛媛大学法文学部准教授、2016年4月より大阪大学文学研究科准教授を経て、2019年4月より現職。専攻：美学／芸術学

1-1. 論文

Takayasu Keisuke, 高安啓介, "The Natural and Social Environment and Historical Background of Japan" *Encyclopedia of East Asian Design*, (Bloomsbury), 1, Bloomsbury, pp. 190-193, 2019/10

高安啓介, 高安啓介 「現代社会における嗜好品のデザイン」『嗜好品文化研究』(嗜好品文化研究会), 4, 嗜好品文化研究会, pp. 4-12, 2019/3

高安啓介, 高安啓介 「無装飾から超装飾へ」『a+a 美学研究』(大阪大学美学研究室), 13, 大阪大学美学研究室, pp. 32-51, 2019/3

高安啓介, 高安啓介 「人間の脳・機械の脳・環境の脳」『a+a 美学研究』(大阪大学美学研究室), 13, 大阪大学美学研究室, pp. 106-119, 2019/3

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

高安啓介「良いデザインと評価の問題」第239回 意匠学会研究例会, 意匠学会, 大阪大学豊中キャンパス, 2019/11

Takayasu Keisuke, “Modern Design and the Aesthetics of Virtue”, Asian Conference of Design History and Theory, ACDHT, Kyushu Sangyo University, Fukuoka, 2019/9

高安啓介「デザイン史におけるバウハウスの位置」, 待兼山芸術学会, 大阪大学豊中キャンパス, 2019/3

高安啓介「批判デザインから思弁デザインへ : ダン&レイビーのイメージ使用をめぐって」第14回 形象論研究会, 形象論研究会, 神戸大学, 2019/2

高安啓介「社会デザインの文脈におけるモリスの位置」第3回 ウィリアム・モリス研究会, ウィリアム・モリス研究会, 日本女子大学, 2018/12

高安啓介「What is Good Design? Five Considerations for Design Assessment」ICDHS 2018 Barcelona, ICDHS, Universitat de Barcelona, 2018/10(*Back to the Future, The Future in the Past, Book of Abstracts*, p. 151, 2018/10)

高安啓介 (パネリスト)「人間の脳・機械の脳・環境の脳」デザイン関連学会シンポジウム: 人工知能×デザイン, デザイン関連学会連合, 九州産業大学, 2018/5(『芸術工学会誌』78号, pp. 41-43, 2019/3)

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

藝術学関連学会連合・事務局長, 2018年6月～現在に至る

意匠学会・役員, 2017年4月～現在に至る

美学会・委員, 2016年11月～現在に至る

2. 加藤 浩 准教授

1960年生。大阪大学文学部美学科(美学・文芸学)卒。大阪大学大学院文学研究科博士課程(芸術学)単位修得退学。文学修士。岡山大学文学部助手・講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職(2019年3月退職)。専攻: 現代文芸学/古典文献学

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 渡辺 浩司 准教授

1962年生。大阪大学文学部卒業。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。大阪大学助手、助教を経て2017年4月より現職。専攻：文芸学／西洋古典学

3-1. 論文

渡辺浩司「カトゥッルス64歌とはどういう歌なのか」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 52, 大阪大学, pp. 1-28, 2018/12

3-2. 著書

渡辺浩司(共著)「アート・ファシリテーター育成プログラムとしての「記憶の劇場」」『記憶の劇場 総合学術博物館の試み』大阪大学出版会, pp. 187-208, 2020/3

渡辺浩司, 山崎達哉(共著)「展覧会「記憶の劇場」」『記憶の劇場 総合学術博物館の試み』大阪大学出版会, pp. 209-224, 2020/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

渡辺浩司「キケローにおける *varietas*」初期近代の芸術・文芸における *varietas* と *inventio*, 桑木野幸司, 科研基盤研究(B), 青山学院大学, 2020/3/8(COVID-19のため中止)

渡辺浩司「大阪大学「記憶の劇場」」2019年度「大学における文化芸術推進事業」報告会, 文化庁, TOC GOTANDA MESSE, 2019/11

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学生活共同組合・監事, 2019年5月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 2018年4月～現在に至る

4. 田中均 准教授

1974年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了(美学芸術学、2007年)。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員(PD、2005年から2008年)、山口大学人文学部講師(2008年から2011年)、同准教授(2011年から2012年)を経て、2012年4月から現職。2016年4月から2020年3月まで大阪大学COデザインセンターに派遣。日本シェリング協会第7回研究奨励賞(2011年)。専攻:美学

4-1. 論文

田中均 「デザイン哲学の陥穽——スローターダイクにおける「島化」と「泡塊」」『a+a 美学研究』13, 大阪大学美学研究室, pp. 128-139, 2019/3

田中均 「「ポストドラマ演劇」と「悲劇の現在」——ハンス＝ティース・レーマンとクリストフ・メンケの演劇理論をめぐって」『演劇学論集』67, 日本演劇学会, pp. 55-70, 2019/3

田中均 「シャノン・ジャクソン『ソーシャル・ワークス』における「インフラストラクチャーの美学」: 「アートプロジェクト」の美的評価——その理論的モデルを求めて③」『CO デザイン』4, CO デザインセンター, pp. 91-103, 2019/2

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

田中均 「アートプロジェクトでは何を鑑賞するのか? 芸術哲学からのアプローチ」豊中地区研究交流会, 大阪大学, 基礎工学国際棟, 2019/12

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

田中均 日本シェリング協会第7回研究奨励賞, 日本シェリング協会, 2011/7

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2019年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:田中均

課題番号:19K00154

研究題目:芸術の美的体制と対話・協働の美学の比較研究——芸術の自律性と社会関与の關係の解明

研究経費:2019年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

本研究では、芸術の自律性をめぐる現代の論争的状况を代表する重要な議論として、ジャック・ランシエールによる「芸術の美的体制」の理論と、グラント・ケスターの「対話」と「協働」の美学を分析する。この分析を通じて、芸術の自律性と社会への関与とは、表面上は対立するが、実際には密接な関係にあること、また、ランシエールとケスターの理論は、論争関係にあるにもかかわらず共通点が見いだされることを示す。それに基づいて本研究は芸術の自律性の概念の新たなモデルを呈示し、美学史に位置づける。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本シェリング協会・事務局代表, 2016年12月～現在に至る

日本シェリング協会・理事, 2008年10月～現在に至る

5. 西井 奨 講師

1982年生。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員PDを経て、2015年11月より大阪大学文学研究科特任講師を経て、2018年4月より現職。専攻: 文芸学/西洋古典学

5-1. 論文

西井奨 「書評: Ovid's Homer: Authority, Repetition, Reception」『西洋古典学研究』(日本西洋古典学会), 68, 岩波書店, pp. 128-130, 2020/3

西井奨 「無に帰す長い忠告——オウィディウス『変身物語』第15巻におけるピュタゴラスの教説の位置付け」『フィロカリア』(待兼山芸術学会), 37, 待兼山芸術学会, pp. 1-5, 2020/3

西井奨 「オウィディウス『変身物語』の時代説話とリュカオンの食卓」『神話学研究』(ギリシア・ローマ神話学研究会), 2, ギリシア・ローマ神話学研究会, pp. 38-47, 2019/12

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2018年度～2019年度、若手研究、代表者: 西井奨

課題番号: 17K13422

研究題目: 古代ローマにおける文芸論の形成とその受容

研究経費:2018年度 直接経費 498,800円 間接経費 150,000円

2019年度 直接経費 501,200円 間接経費 150,000円

研究の目的:

古代ローマにおける文芸活動では、先行するギリシア文化を取り組む過程においてギリシア以上に弁論術という規範が重視され、そのことは詩人たちがその作中で築き上げてきた文芸論にも反映されることとなった。このような文芸論は、知的伝統として後代のヨーロッパの中世・ルネサンス期以降の文芸活動に大きな影響を与えることとなったが、その特質については未だ表層的な理解に留まっている。そこで本研究では、特に古代ローマの詩人たちのうち、ホラティウスとオウィディウスの作品における文芸論の特質について文献学的研究の手法によりこれまで以上に明瞭なものとし、これを踏まえて、ルネサンス期以降における古代ローマの文芸論の受容について、従来の解釈に対してより良い修正案を提示することを目的とする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

懐徳堂記念会・企画ワーキング委員, 2018年4月～現在に至る

大阪大学文学会・委員, 2017年4月～2019年3月

ギリシア・ローマ神話学研究会・編集代表, 2017年4月～現在に至る

日本西洋古典学会・HP運営委員, 2012年6月～2019年3月

6. 土田 耕督 助教

1980年生。2012年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（文学）（大阪大学、2013年）。2011～13年、日本学術振興会特別研究員DC2。2014～17年、日本学術振興会特別研究員PD（国際日本文化研究センター外来研究員）。2017～19年、大阪大学大学院文学研究科助教（2019年3月退職）。専攻：美学

6-1. 論文

土田耕督 「「あたらし」／「めづらし」—中世和歌に見る価値判断の変遷と〈独創性〉の出自—」『美学』(美学会), 69-1, 美学会, pp. 1-12, 2018/6

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

7. 上月 翔太 助教

1985年生。2019年、大阪大学文学研究科文化表現論専攻博士後期課程（文芸学）単位修得退学。修士（文学、2010年）。2018年、日本学術振興会特別研究員。2019年、大阪大学大学院文学研究科（文芸学）助教（2020年3月退職）。専攻：文芸学、西洋古典学、高等教育論

7-1. 論文

上月翔太「ヴィーダ『キリスト物語』第2巻「シモンの歌」と「最後の晩餐」の関連性—神のアクチュアリティを導く叙事詩」『神話学研究』2, ギリシア・ローマ神話学研究会, pp. 1-19, 2020/3

上月翔太「歌われる噂—ヴィーダ『キリスト物語』におけるファーマー」『フィロカリア』36, 待兼山芸術学会, pp. 1-24, 2019/3

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

上月翔太「古代末期とルネサンス期における聖書叙事詩—伝統の継承と「教化」の展開—」第52回ルネサンス研究会, ルネサンス研究会, 同志社大学, 2019/12

上月翔太「「接続」と「揺れる真偽」—ラテン語叙事詩におけるいわゆる「神話」について」神戸神話・神話学研究会 2018年度研究会, 神戸神話・神話学研究会, 神戸大学梅田インテリジェントラボラトリー, 2019/1

上月翔太「ヴィーダ『キリスト物語』におけるエクフラシス—変容/展開する「語り行為」—」民族芸術学会第34回大会, 民族芸術学会, 林原美術館, 2018/4

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2018年度、特別研究員奨励費、代表者：上月翔太

課題番号：18J11395

研究題目：ネオ・ラテン叙事詩における伝統の形象化—ファーマ、エクフラシス、光

研究経費：2018年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 0円

研究の目的：

古代ローマより連なるラテン語叙事詩の伝統が、古代以降のラテン語叙事詩作品においていかなる変容を遂げたかを通時的に追う。16世紀のカトリック司教ヴィーダによるキリスト教叙事詩『キリスト物語』を一つの到達点として、そこに至るラテン語叙事詩の代表的作品を構造や技法の観点から考察し、文学史的な位置づけを行う。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

文芸学研究会・編集委員, 2018年4月～現在に至る

2-22 音楽学・演劇学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 2 准教授 3 (兼任1) 講師 0 助教 2 (兼任1)

教授：永田 靖、伊東 信宏

准教授：輪島 裕介、中尾 薫、古後奈緒子 (兼任)

助教：鈴木 聖子、横田 洋 (兼任)

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
48	12	24	0	0	2	3	0

*うち留学生15名、社会人学生3名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	12	6	1	2
2019	8	8	3	3
計	20	14	4	5

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

教育の中心となるのは学部レベル、大学院レベルそれぞれで開講されている各種演習である。ここでは、卒業論文、修士論文、博士論文の主題、研究手法、論文構成などについて真剣な討議を行う。これに加えて、合宿や特別演習の形で行われている場で、学位論文についての中間報告を行う。さらにオフィスアワーその他の個人指導の機会を通じて、よりきめ細かい指導を行う。また、複数の音楽ホールや劇場における音楽実務や演劇制作に関するインターンシップを実施し、文学研究科のインターンシップ報告書に掲載される報告集を作成する。

2. 研究

音楽学研究室・演劇学研究室ともに、開設から半世紀近くを経たが、今も我が国の総合大学における専攻分野としては極めて稀な存在でありつづけている。そのことも意識しながら、音楽学研究室は、芸術大学や教育大学音楽科における音

楽学研究とは異なる問題を志向しており、いわゆる歴史的美学的探究、作曲学的分析法、民族学的なフィールドワーク、カルチュラルスタディーズ的アプローチなど、様々な方法を組み合わせながら音楽が文化の中でどのような意味を持っているか、ということについて取り組み続けてきた。また演劇学研究室も、西欧演劇史や日本演劇史一般の基礎教育や演劇学一般理論に加えて、文化研究やパフォーマンス・スタディーズなどの接触領域との学際性をも意識しつつ、演劇の現代世界の中での役割を解明し続けている。こういった特色を堅持しながら、教員は、学術的報告2本以上の発表を目標とする。院生においては、博士予備論文提出時に論文2本以上を発表していることを目標とする。また研究室が主催する『阪大音楽学報』『演劇学論叢』の刊行を継続する。さらに科学研究費補助金、および他の競争的外部資金の獲得、日本学術振興会の特別研究員への応募を積極的に推し進める。また、各種大型プロジェクト研究、学内外の共同研究に積極的に参加し、研究の視野と可能性を拡大することなども目標とした。

3. 社会連携

音楽学研究室主催の「コレgium・ムジクム」を年に1~2回程度開催し、本研究室で行われている多様な研究活動をレクチャー・コンサートという形で広く一般に還元する。また、演劇学研究室では博物館での企画展や、共催する関連講演会などを積極的に開催する。21世紀懐徳堂などが主催するイベントに協力し、全学的な社会貢献にも参加する。さらに、各種学会には委員等として積極的に参加し、研究会、研究グループなどの活動にも参加して、研究成果の普及を図るよう努力することとした。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度~2019年度)

1. 教育

講義・演習では、卒業論文、修士論文、博士論文に向けてそれぞれのテーマに応用可能な方法論や論理構成を意識した教育を行った。さらに個別の指導において、より具体的な問題設定、先行研究の検討、各種調査方法の検討などについて議論を行い、綿密な指導をおこなってきた。インターンシップも予定通り実施され、文学研究科刊行のインターンシップ報告書に受講学生の報告を寄稿した。学生にとって有意義な場であるため、今後さらなる広報に努め、学生の積極的な参加をうながしたい。

2. 研究

音楽学研究室では、教員2名それぞれに著書、論文、訳書などを刊行しており、順調に成果を挙げた。演劇学研究室では教員4名による著書、論文、博物館展覧会図録などが刊行され、学界で高く評価された。また両研究室教員の多くは、科学研究費での助成研究を続けている。さらに院生は国内外の多くの学会での発表、および学会誌ないし研究書への掲載を実現した。音楽学研究室は、2018年7月にラップを中心とした実演と討議(第20回、環ROY、Moment Joon、輪島裕介、矢野原佑史)、同年10月に大阪大学会館講堂のベーゼンドルファーのピアノを中心としたレクチャーと演奏(伊東信宏、鷺野彰子)、2019年2月にチンドン屋という日本の大衆芸能を国際的文脈で捉え直すレクチャーと実演(阿部万理江(ポストン大学准教授)、ちんどん通信社)、同年11月にレクチャーコンサート「イスラエルから響くアルゼンチン・ユダヤの音」(川端美都子氏(香川大学准教授)、ブスケダ・エテルナ)、さらに2020年1月、大阪大学会館講堂で、パンノニア少年少女合唱団コンサート「ちいさなこえ、ハンガリーのうた」(大阪大学外国語学部ハンガリー語専攻と協力)などを開催し、研究の成果を社会に還元するイベントが続いた。

演劇学研究室では、2018年11月にThe 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliationを台北藝術大学にて開催し、院生ら8名が、2019年11月にもThe 7th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliationを上海戯劇学院にて開催し、院生ら9名が英語の口頭発表を行った。また音楽学研究室の教員は、民族芸術学会、日本ポピュラー音楽学会、日本音楽学会の委員、支部長、理事などとしての活動を続けており、学会活動の拠点としての存在感を示している。とりわけ2019年秋には、日本音楽学会全国大会、ポピュラー音楽学会大会が大阪大学を会場校として開催され、多くの院生、学生が学術的にも運営面でも参画した。演劇学研究室

の教員も、日本演劇学会、日本演劇学会分科会近現代演劇研究会、IFTR 国際演劇学会、民族藝術学会、能楽学会、藝能史研究会などの会長、事務局、WG 代表、理事、常任幹事、委員を務めるなど、積極的な活動を行っている。教員、招へい研究員、大学院生による科学研究費、民間の財団への研究費の申請も毎年おこなっており、とりわけ院生の日本学術振興会特別研究員採択については、近年着実に成果があがっている。文化庁「大学における文化芸術推進事業」など、文学研究科がかかわる大型資金においても各教員は事業推進者として中心的な役割を果たし、学内外でさまざまな公演やイベントを開催した。さらに演劇学研究室が刊行する『演劇学論叢』は予定通り出版された。音楽学研究室刊行の『阪大音楽学報』は合併号として 2020 年 9 月に出版されることになった。

3. 社会連携

教員の多くが新聞、雑誌などへの批評寄稿、放送での解説などを定期的に行っており、研究成果の社会還元を果たしている。また院生も、音楽学、演劇学のそれぞれについて、新聞の大きい誌面を割いて月 1 回の寄稿の場が与えられ、自らの関心を幅広い読者に向けて発信する訓練ともなっている。また教員は、民族藝術学会、日本ポピュラー音楽学会などの委員、理事、日本演劇学会における会長、幹事などを務め、さらに各種財団の専門委員、選考委員などを務めて学外の職務にも応じている。「コレギウム・ムジクム」など各種レクチャー・コンサートや、大阪大学シンポジウムなどを学内外で企画立案運営また協力し、研究室を発信源とする社会連携に努めた。

IV. 自己点検・自己評価(2018 年度～2019 年度)

1. 教育

卒業論文、修士論文とも、例年どおりの水準を維持した。博士論文についても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員、大学院生による研究成果の発表、刊行は極めて盛んであり、大きな成果を挙げたと評価できる。『阪大音楽学報』は、刊行が遅れた時期があったが、合併号として刊行されることで遅れを取り戻しつつあり、引き続き多くの論文が寄稿されている。特筆すべき成果の一つとしてあげられるのは、2019 年 3 月にブルガリア、ソフィア大学（古典・現代文献学部）が国際交流基金の助成を受けて開催したシンポジウム「日本とブルガリアにおけるポップカルチャーと若者」において、文化庁助成事業との関連で企画されたモノローグ・オペラ『新しい時代』の記録映像（英語字幕付き）を上映したことである。2019 年 12 月には、第 31 回日本ポピュラー音楽学会全国大会を主催し、台湾、韓国、アメリカの有力な研究者を招いて開催した全体シンポジウム「アジアの東、アメリカの西：環太平洋ポピュラー音楽の地政学」では、音楽学研究室の大学院生が通訳やファシリテーターとして重要な役割を果たした。また、2018 年 11 月には The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation、2019 年 11 月には、The 7th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation を共催した。ここで、国立韓国藝術総合学校演劇院の大学院生、国立台北台湾芸術大学、上海戯劇学院の大学院生らとともに演劇学研究室の教員と大学院生が参加し、英語での研究発表を行ったことによって国際的な場での研究活動に、積極的に参加することの重要性を認識させる契機となっており、若手研究者の育成に大きく寄与している。

3. 社会連携

上記のとおり、新聞雑誌への寄稿、演奏会や企画展の企画などの活動を通じての社会還元、民間財団委員や公立劇場企画運営委員としての専門知識の提供、学会活動への寄与など、多方面に渡って社会連携を達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2018 年度～2019 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	2	0	2
2019	3	1	4
計	5	1	6

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

秋山良都「統一後ドイツにおけるポザウネンコアの研究

—ハノーファー福音ルーター派教会教区の事例を中心に—

主査：伊東信宏、副査：永田靖、三谷研爾、輪島裕介、岡田暁生（京都大学教授）

黄資絜「野田秀樹の社会政治劇の成立」

主査：永田靖、副査：伊東信宏、中尾薫、古後奈緒子

松本俊樹「劇作家・演出家堀正旗の宝塚における作品研究」

主査：永田靖、副査：伊東信宏、中尾薫、古後奈緒子

金裕彬「飯沢匡作品研究」

主査：永田靖、副査：伊東信宏、中尾薫、古後奈緒子

上畑 史「セルビアのポピュラー音楽「ターボフォーク」における民族的アイデンティティの表出とその文化的実践」

主査：伊東信宏、副査：永田靖、輪島裕介、寺田吉孝（国立民族学博物館教授）

【論文博士】

須田悦生「幸若舞の展開—芸能伝承の諸相—」

主査：永田靖、副査：天野文雄（大阪大学名誉教授）、阪口弘之（大阪市立大学・神戸女子大学名誉教授）、伊東信宏、中尾薫

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	4(2)	5(0)	0(0)	0(0)	6(6)	15(8)
2019	2(2)	5(3)	2(2)	0(0)	8(4)	17(11)
計	6(4)	10(3)	2(2)	0(0)	14(10)	32(19)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	11	7	7	0	0	25
2019	8	7	11	0	0	26
計	19	14	18	0	0	51

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

Fuki MIYAMOTO, 'Memory and Place in David Greig's Victoria.' The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation, proceedings, 2018, pp.83-88.

〔博士後期〕

秋山良都「南西ドイツの寒村から世界の街路へ—西プファルツの出稼ぎ楽師音楽文化史研究序論—」『阪大音楽学報』第15号, pp.33-49, 2018/5

Ayako KAKINUMA, Sexual Liberation and Historical Continuity of Early Strip Shows in Japan: An Experiment by Hata Toyokichi and Okada Keikichi., *Forum of Theatre and Drama*, Korea National University of Arts, 2018/12/11, pp.291-312.

垣沼絢子『『モン・パリ』における岸田辰彌の試みと環境演劇の近代化（一）』『演劇学論叢』第18号、大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室、2019年3月、pp.25-45.

Yun Jeong KIM, 'The Origin of Ōta Shōgo's "Silence": Focusing on The First Work of the Okinawa Trilogy, Nine Scenes on a Bus (1969).' The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation, proceedings, 2018, pp.150-157.

金潤貞「太田省吾の「沈黙」の発端—処女作『乗合自動車の上の九つの情景』から—」『フィロカリア』第36号、大阪大学大学院文学研究科、2019年3月、pp.53-67,

Iryna KASTYLIANCHANKA, 'Between truth and consolation: some points in the interpretation of Gorky's The Lower Depths in Japanese theatre.' The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation, proceedings, 2018, pp.8-14.

イリーナ・カスティリアンチャンカ「三浦基の上演におけるチェーホフ戯曲のいくつかの特徴」『演劇学論叢』第18号、大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室、2019年3月、pp.84-101.

青嶋絢「開かれた形式」コンセプトの探求と記譜の実験—アール・ブラウン Folio を中心に—」『フィロカリア』第36号、大阪大学大学院文学研究科、2019年3月、pp.25-51.

杉山恵梨「戦後日本のバッハ声楽作品の受容と実践—西洋での古楽運動（1960-2000年代）と比較して—」『第69回美学会全国大会若手研究者フォーラム発表報告集』、2019年3月、pp.151-159.

関屋弥生「伝統芸能と共同体意識—日系ブラジル移民が伝えた能楽の活動を中心に—」『演劇学論叢』第18号、大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室、2019年3月、pp.46-62.

中川登美子「荒川哲生による「演劇的肉体」の理論と試み」『待兼山論叢』第52号、大阪大学大学院文学研究科、2018/12、pp.47-71.

Toshiki MATSUMOTO, Cooperation and Conflict in Jikyokumono: An Investigation of HORI Seiki's Works During World War II., The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation, proceedings, 2018, pp.158-172.

Kaoru YANO, 'The Role of "Dialogue" in Primary Education During the Meiji Era.' The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation, proceedings, 2018, pp.62-69.

矢野郁「明治三〇年代の『対話体教材』に見る演劇と教育の関係」『演劇学論叢』第18号、大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室、2019年3月、pp.63-83.

【2019年度】

〔博士前期〕

(音楽学)

小松啓子「権力を上演する君主:フィレンツェにおけるコジモー世の婚礼(1539)」『Arts and Media / volume 09』 pp.212-223, 査読有, 2019/7/1

小松啓子(「フィレンツェにおけるコジモー世の婚礼(1539):権力を上演する君主」,『第1回若手研究者フォーラム要旨集』, 査読有, pp.41-45

近祥伍「デイヴ・ブルーベックのジャズにおける拍子の実験——その発想と展開」『第2回若手研究者フォーラム要旨集』 pp.74-77, 査読有, 2020/3/23

佐藤馨「シャルル・ケ克蘭の「モノディー期」研究」『第2回若手研究者フォーラム要旨集』 pp.70-73, 査読有, 2020/3/23 (演劇学)

馮縁「Takarazuka Revue's performances that adapted from manga_The topic of "The Rose of Versailles" During the Showa Era」『The 7th International Asian Theatre Studies Conference proceedings』 pp.33-39, 査読無, 2019/11/2

〔博士後期〕

(音楽学)

平尾佳子「洋楽受容につながれた上級士族の素養—唱歌科教師島田英雄の写譜と祖父・父の学びの記録から—」『大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座フィロカリア』第37号, pp.7-31, 査読有, 2020/3/27

杉山恵梨「トーマス・マン『ファウスト博士』にみる古楽実践——20世紀中葉までのドイツ語圏における古楽運動——」『待兼山論叢』第53号, pp.55-78, 査読有, 2020/3/1

(演劇学)

松本俊樹「戦時下宝塚における「時局物」オペレッター堀正旗『愛国大学生』(1939)を例に—」『近現代演劇研究』第8号, pp.32-41, 査読有, 2019/8/31

垣沼絢子「『モン・パリ』における岸田辰彌の試みと環境演劇の近代化(二)」『近現代演劇研究』第8号, pp.42-57, 査読有, 2019/8/31

金潤貞「Telling a Story that Cannot Be Told: Talking Through the Dead in Breasts of the Black Swallowtail Butterfly (1970)」『Forum of Theatre and Drama』 pp.268-278, 査読有, 2019/12/13

松本俊樹「Hamlet acting decisively: "Modernization" and the character description of Hamlet in Hori Seiki's Hamuretto Gendai ni Ikinaba (1930)」『Forum of Theatre and Drama』 pp.279-288, 査読有, 2019/12/13

垣沼絢子「The transition of nude-Noh by Takechi Tetsuji」『The 7th International Asian Theatre Studies Conference proceedings』 pp.40-49, 査読無, 2019/11/2

イリーナ・カスティリアンチャンカ「Two interpretation of Doastoevsky's Crime and Punishment in Theatre Cocoon/Bunkamura: The adaptation of the text in the universal and national aspects」『The 7th International Asian Theatre Studies Conference proceedings』 pp.1-8, 査読無, 2019/11/2

中川登美子「The Acceptance of Tango in Japan in 1968 The Premieres by the Bungakuza Theatre Company and the Haiyuza Theatre Company」『The 7th International Asian Theatre Studies Conference proceedings』 pp.17-24, 査読無, 2019/11/2

金潤貞「演出家金亜羅と太田省吾の沈黙劇—『地の駅』を中心に—」『演劇学論叢』第19号, pp.29-41, 査読無, 2020/3/2

杉本亘「明治初期の梅若実の活動とその影響—能楽興行における料金体系の観点から—」『演劇学論叢』第19号, pp.42-59,

査読無, 2020/3/2

岡田登貴「観世小次郎信光と応仁の乱 — 能《胡蝶》の舞台「一条大宮の古宮」をめぐる」『第2回若手研究者フォーラム要旨集』 pp.46-49, 査読有, 2020/3/23

杉本亘「明治前期における能楽の外国貴賓響応芸能構想と芝能楽堂」『第2回若手研究者フォーラム要旨集』 pp.62-65, 査読有, 2020/3/23

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

Ken KATO, Who Is Locating Shibuya-kei in Shibuya?: Musical Revival, Standardization, and Gentrification, the 6th Inter-Asia Popular Music Studies Conference 2018, 中国伝媒大学、10 June 2018

加藤賢「ニッポンの音楽は『アジアの音楽』か?」日本ポピュラー音楽学会 2018年度第2回関西地区例会、関西大学、2018年8月29日

加藤賢「都市の音楽文化を考える:心斎橋アメリカ村とレゲエを事例に」大阪市立大学・文学研究科オープンファカルティ 2018 第2回都市文化研究フォーラム「若手研究者が考える、都市と文化の〈現在〉」グランフロント大阪北館タワーB、2018年11月23日

Minako KONDO, “Local Musicking as Lifelong Music: Japanese Engagements with Irish Music”, 6th Inter-Asia Popular Music Studies Conference、中国伝媒大学、10 June 2018

Yixuan LI, The Hysterical Aesthetics of Jun Togawa: An Archetype of Japanese "Fushigi Chan" in the 80s, 6th Inter-Asia Popular Music Studies Conference、中国伝媒大学、9 June 2018

Fuki MIYAMOTO, “Regionalization and Contemporary theatre in Scotland”, World Social Science Forum 2018 (Poster Presentation) , Fukuoka Convention Centre, 27 September 2018.

Fuki MIYAMOTO, ‘Memory and Place in David Greig’s Victoria.’ The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation, Taipei National University of the Arts, 2018, 2 Nov.

〔博士後期〕

サウガゲレル、マハバル『『モンゴル伝統音楽』を示す用語に関する考察』第34回民族芸術学会大会、林原美術館、2018年4月21日

藤下由香里「嗜好品としての音楽コンテンツ — 同人音楽作品を事例に」嗜好品文化研究会 第16回嗜好品文化フォーラム平成29年度助成研究口頭発表、京都新聞文化ホール、2018年5月12日

Yukari FUJISHITA, “Amateur Female Music Producers in Otaku Culture : The Creativity of Divas in *Dojin* Music”, 6th Inter-Asia Popular Music Studies Conference、中国伝媒大学、9 June 2018

藤下由香里「IAPMS2018 参加報告～海外の研究者が見る日本のポピュラー音楽というフィールド～」日本ポピュラー音楽学会 2018年度第2回関西地区例会、関西大学、2018年8月29日

松井拓史「戦後初期のハンガリー国立民俗アンサンブル:文化ナショナリズムとスターリン主義の摩擦と妥協」日本音楽学会西日本支部 第41回例会、同志社大学、2018年6月16日

Ayako KAKINUMA, ‘Sexual Liberation and Historical Continuity of Early Strip Shows in Japan: An Experiment by Hata Toyokichi and Okada Keikichi.’ The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation, Taipei National University of the Arts, 2018, 3 Nov.

Yun Jeong KIM, ‘The Origin of Ōta Shōgo’s “Silence”: Focusing on The First Work of the Okinawa Trilogy, Nine Scenes on a Bus (1969).’ The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation, Taipei National University of the Arts, 2018, 3 Nov.

金潤貞「太田省吾の『沈黙』の発端—初期三部作から」待兼山芸術学会、大阪大学、平成31年3月30日

Iryna KASTYLIANCHANKA, “The body’s aesthetic in performance: the interpretation of Chekhov’s plays by Motoi

Miura”, 近現代演劇研究会 5・7月合同例会、大阪大学、平成 30 年 7 月 21 日

Iryna KASTYLIANCHANKA, ‘Between truth and consolation: some points in the interpretation of Gorky’s The Lower Depths in Japanese theatre.’ The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation, Taipei National University of the Arts, 2018, 2 Nov.

杉本亘「能楽における『劇場』とは何か——昭和 17 年後楽園スタジアムの能楽上演を中心に——」日本演劇学会平成 30 年研究集会、静岡文化芸術大学、平成 30 年 11 月 11 日

杉山恵梨「戦後日本のバッハ声楽作品の受容と実践——西洋での古楽運動（1960-2000 年代）と比較して——」第 69 回美学会全国大会若手研究者フォーラム、関西大学、2018 年 10 月 7 日

関屋弥生「赤道祭の系譜～儀礼から演劇への転換点～」サンパウロ人文科学研究所研究例会、ブラジル・サンパウロ、平成 31 年 2 月 12 日

Toshiki MATSUMOTO, ‘Cooperation and Conflict in Jikyokumono: An Investigation of HORI Seiki’s Works During World War II.’ The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation, Taipei National University of the Arts, 2018, 3 Nov.

松本俊樹「戦間期宝塚少女歌劇におけるドイツ表象—堀正旗『ベルリン娘』『シェーネス・ベルリン』を例に一」日本演劇学会平成 30 年度研究集会、静岡文化芸術大学、平成 30 年 11 月 11 日

矢野郁「英語学習での演劇アクティビティ」第 2 回全国演劇教育研究集会 2018 年全劇研 in 滋賀・京都、立命館大学草津キャンパス、平成 30 年 12 月 22 日-23 日

Kaoru YANO, ‘The Role of “Dialogue” in Primary Education During the Meiji Era.’ The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation, Taipei National University of the Arts, 2018, 2 Nov.

矢野郁「明治 40 年代の演劇教育・巖谷小波と葛原しげるを例に」近現代演劇研究会 3 月例会、大阪大学、平成 31 年 3 月 23 日

【2019 年度】

〔博士前期〕

（音楽学）

LI YIXUAN「戸川純における『レディ・ヒステリック』の表象」, 日本ポピュラー音楽学会 2019 年度第 3 回関西地区例会、関西大学千里山キャンパス, 2019/7/13

近祥伍「修士論文中間発表：デイヴ・ブルーベック《ポイント・オン・ジャズ》分析——模倣、重畳、融合の側面から」, 日本ポピュラー音楽学会 2019 年度第 4 回関西例会、関西大学千里山キャンパス, 2019/11/15

小松啓子「フィレンツェにおけるコジモ一世の婚礼（1539）：権力を上演する君主」, 第 1 回大阪大学大学院文学研究科若手研究者フォーラム、大阪大学豊中キャンパス, 2019/9/27

小松啓子“Deme e Musica alla corte estense nel Cinquecento”, ルネサンス宮廷の占星術・音楽文化、大阪大学豊中キャンパス, 2020/02/27（延期となった）

近祥伍「デイヴ・ブルーベックのジャズにおける拍子の実験——その発想と展開」, 第 2 回若手研究者フォーラム、大阪大学, 2020/3/23（新型コロナの影響で延期）

佐藤馨「シャルル・ケ克蘭の「モノディー期」研究」, 第 2 回若手研究者フォーラム、大阪大学, 2020/3/23（新型コロナの影響で延期）

（演劇学）

温彬「日中伝統演劇における狂—『牡丹亭』と『松風』を中心に」, シンガポール獅城国際戯曲学術検討会, 2019/11/10

馮縁“Takarazuka Revue’s performances that adapted from manga_The topic of “The Rose of Versailles” During the Showa Era”, The 7rd International Asian Theatre Studies Conference, Shanghai Theatre Academy, 2019/11/2

〔博士後期〕

（音楽学）

- 加藤賢「音楽文化からみる『アメリカ村』:一戦後大阪のポピュラー音楽史再考」,第4回都市文化研究フォーラム,大阪市立大学都市文化研究センター,2019/11/23
- 加藤賢「グローバル化に不応するもの/抗するもの:2010年代以降の『渋谷系』再評価を事例に」,日本ポピュラー音楽学会第31回大会,大阪大学豊中キャンパス,2019/12/7
- 平尾佳子「南満洲教育会教科書編集部「日本人用唱歌科教科書」(1923-1937)の分析と受容の調査」,日本音楽学会第70回全国大会,大阪大学豊中キャンパス,2019/10/20
- 張佳能「「アメリカンジャズと昭和歌謡の間で:貫戦期における「上海リル」の諸像」[ワークショップ]貫戦期日本ポピュラー音楽における越境の諸像:日系アメリカ人、カウガール、上海リル(発表者:永富真梨、張佳能、平川享)」,日本ポピュラー音楽学会第31回全国大会,大阪大学豊中キャンパス,2019/12/8
- 張佳能「「大陸歌謡」再考:大衆音楽史の視座からの試み」,近代日本大衆音楽における「大陸」:その理想と現実,大阪大学豊中キャンパス,2020/2/28
- 松井拓史「ハンガリー国立民俗アンサンブルの東西ツアー:彼らは旅するプロパガンダ集団なのか?」,待兼山芸術学会大会,大阪大学豊中キャンパス,2020/03/30(延期)
- (演劇学)
- 松本俊樹“Hamlet acting decisively: “Modernization” and the character description of Hamlet in Hori Seiki’s Hamuretto Gendai ni Ikinaba (1930)”, The 7th International Asian Theatre Studies Conference, Shanghai Theatre Academy, 2019/11/3
- 垣沼絢子“The transition of nude-Noh by Takechi Tetsuji”, The 7th International Asian Theatre Studies Conference, Shanghai Theatre Academy, 2019/11/2
- 矢野郁「演劇教育ワークショップ 演劇を使った英語学習」,中国地区演劇教育セミナー,2019/4/27
- 矢野郁「演劇教育ワークショップ 演劇を使った英語学習」,演劇と教育の会,2019/8/12
- 金潤貞「韓国舞台における太田省吾の沈黙劇—演出家の金亜羅(キム・アラ)の『地の駅』を中心に」,近現代演劇研究会5月7月合同例会,大阪大学,2019/7/27
- 金潤貞“Telling a Story that Cannot Be Told: Talking Through the Dead in Breasts of the Black Swallowtail Butterfly (1970)”, The 7th International Asian Theatre Studies Conference, Shanghai Theatre Academy, 2019/11/3
- 金潤貞「劇団『エジプト』と三一路倉庫劇場—アーカイブ展示『この演劇のタイトルはありません』から」,大阪大学総合学術博物館研究会,大阪大学,2019/12/10
- イリーナ・カスティリアンチャンカ“Two interpretation of Doastoevsky’s Crime and Punishment in Theatre Cocoon/Bunkamura: The adaptation of the text in the universal and national aspects”, The 7th International Asian Theatre Studies Conference, Shanghai Theatre Academy, 2019/11/2
- イリーナ・カスティリアンチャンカ“Три романа Достоевского в театральном пространстве Японии: к вопросу понимания и трактовки текста”, XLIV МЕЖДУНАРОДНОГО ЧТЕНИЯ «Достоевский и мировая культура», F.DOSTOEVSKY LITERARY MEMORIAL MUSEUM, 2019/11/10
- 岡田登貴「「シラウト」能役者 下間少進研究」,第4回大阪大学豊中地区研究交流会ポスター・セッション,大阪大学,2019/12/17
- 岡田登貴「能『船弁慶』と大物の船頭」,六麓会12月例会,大阪大学,2019/12/28
- 中川登美子“The Acceptance of Tango in Japan in 1968 The Premieres by the Bungakuza Theatre Company and the Haiyuza Theatre Company”, The 7th International Asian Theatre Studies Conference, Shanghai Theatre Academy, 2019/11/3
- 岡田登貴「観世小次郎信光と応仁の乱—能《胡蝶》の舞台「一条大宮の古宮」をめぐる—」,第2回若手研究者フォーラム,大阪大学,2020/3/23(新型コロナの影響で延期)
- 杉本亘「明治前期における能楽の外国貴賓饗応芸能構想と芝能楽堂」,第2回若手研究者フォーラム,大阪大学,2020/3/23(新型コロナの影響で延期)

(3)その他(書評・翻訳など)

【2018年度】

〔博士前期〕

- 八谷誠人「パララックス・レコード 古都に息づく前衛音楽の殿堂」『大阪日日新聞』、2018年9月18日
- 加藤賢「FM802サーキット・フェス「ミナミ・ホイール 20th アニバーサリー」 激動の時代超え、あこがれに」『大阪日日新聞「関西の音と人」』、2018年11月20日
- 李怡璇「戸川純の大阪ライブ 中国のファンから再発見」『大阪日日新聞』、2019年3月19日
- 工藤春菜「人の数だけ家族の形—虚空旅団公演『きつねのかみそり』」『大阪日日新聞』平成30年10月2日
- 佐々木美里「サーカスの概念揺るがすエンターメーシルク・ドゥ・ソレイユ創設30周年記念作品『キュリオス』」『大阪日日新聞』平成30年7月3日
- 瀧尻浩士「地域演劇と劇場の可能性—SENDAI座プロジェクト公演『十二人の怒れる男』」『大阪日日新聞』平成31年2月26日
- 右田誠弥「分かりやすさと面白さ追求—池田 呉服座 11月公演『劇団飛翔』」『大阪日日新聞』平成31年12月4日
- 宮本露「名作『かもめ』を日韓舞台に—『가 모 메 칼메기』」『大阪日日新聞』平成30年9月4日
- 馮縁「仏の原作しのぐ、華麗な演出—東宝ミュージカル『1789—バステューユの恋人たち』」『大阪日日新聞』平成30年11月6日

〔博士後期〕

- 杉山恵梨「神戸の教会に響く祈りの音楽 「守護天使」と歩む」『大阪日日新聞』、2018年4月24日
- 平尾佳子「邪気祓う伝統の継承 天神祭の太鼓中」『大阪日日新聞』、2017年9月19日
- 平尾佳子「がんばる5代目皮張り職人 大阪職人の伝統・三味線作り」『大阪日日新聞』、2018年6月19日
- 青嶋絢「組曲 六道 — 地獄の音風景をたずねる」 猥雑で俗世的な魅力」『大阪日日新聞』、2018年8月21日
- 藤下由香里「野洲市音楽のあるまちづくり事業 気軽に楽しむ出演者と鑑賞者」『大阪日日新聞』、2018年10月16日
- 戸田直夫「全日本吹奏楽コンクール」大学の部、職場一般の部 見出し・邦人作品の選曲増え、充実」『大阪日日新聞』、2018年12月18日
- 肥後楽「「北欧のチェロの調べ」 地域に根ざした音楽活動を楽しむ」『大阪日日新聞』、2019年2月5日
- 松本俊樹「人間より人間らしいロボットたち—韓国ミュージカル『メイビー、ハッピーエンド』」『大阪日日新聞』平成30年6月5日
- 金潤貞「生きづらさを抱える人たちの物語—Ping Chong's ドキュメンタリー・シアター『Undesirable Elements』」『大阪日日新聞』平成31年3月5日
- イリーナ・カスティリアンチャンカ「雨の音、2人の夢は無限—劇団『KUDAN Project』『真夜中の弥次さん喜多さん』」『大阪日日新聞』平成31年1月8日
- 杉本亘「楽しくも丁寧な表現力—ミュージカル『巴里のアメリカ人』」『大阪日日新聞』平成30年4月10日
- 関屋弥生「芯の強い女性感じさせる—篠山春日能」『大阪日日新聞』平成30年5月8日
- 矢野郁「言葉を託し、心意気を貫く—舞台劇「シラノ・ド・ベルジュラック」」『大阪日日新聞』平成30年8月7日

【2019年度】

〔博士前期〕

- 佐々木美里「多様化するキャスティング—ミュージカル『レ・ミゼラブル』」『大阪日日新聞』令和元年8月20日
- 瀧尻浩士「家族の記憶は不変—文学座公演『ガラスの動物園』」『大阪日日新聞』令和元年10月1日
- 馮縁「暗やみに光を照らす神聖感—劇団四季ミュージカル『ノートルダムの鐘』」令和元年12月4日

〔博士後期〕

- 青嶋 絢 「サイトスペシフィックな音の表現」『arts/』民族芸術学会誌 vol. 36, 2020
- 青嶋 絢 「「場所」のための音楽を聴く」『大阪日日新聞』2019年10月22日

杉山恵梨「楽曲解説」『アマービレ・フィルハーモニー管弦楽団コンチェルトシリーズ Vol. 12 (兵庫県立芸術文化センター)』、2019年5月16日

杉山恵梨「楽曲解説」『アマービレ・フィルハーモニー管弦楽団コンチェルトシリーズ Vol. 13 (兵庫県立芸術文化センター)』、2019年8月3日

杉山恵梨「楽曲解説」『アマービレ・フィルハーモニー管弦楽団第8回定期演奏会(いずみホール)』、2019年12月27日

張佳能「ちんどん芸能マニアックサロン これぞ大衆芸能の醍醐味！」『大阪日日新聞』、2019年11月19日

張佳能「歌う舞台「SIZUKO! QUEEN OF BOOGIE〜ハイヒールとつけまつげ〜」 蘇る希代の異色歌手・笠置シズ子 「ブギの女王」役に挑んだ神野美伽」『大阪日日新聞』、2020年1月21日

内藤多寿子(翻訳)、ミカエル・ジャレル《エコ》(Michael Jarrel. *Eco*. Paris: Editions Henry Lemoine, 1986)「サントリーホールサマーフェスティバル 2019——サントリー芸術財団 50周年記念——プログラム」東京:サントリー芸術財団、2019年、68頁。

Tazuko Naito (翻訳)、Janés, Clara. 『愛と四季』 *El amor y las cuatro estaciones* の詩全編 . (1st ed., Cuenca, 2016). Madrid: Ediciones del Oriente y del Mediterráneo, 2019, p.15-73.

松井拓史「TRANCE MUSIC FESTIVAL 2019 音楽の“危険な力”再認識」『大阪日日新聞』、2019年4月16日

中川登美子「人生のオアシスとは何か?—虚構の劇団公演『ピルグリム』」『大阪日日新聞』平成31年4月2日

垣沼絢子「荻田&斉藤の名コンビ—ミュージカル『イヴ・サンローラン』」『大阪日日新聞』令和元年5月14日

関屋弥生「スピード感で時事ネタ取り入れ—新元号記念 鴨川をどり」『大阪日日新聞』令和元年6月4日

柏木純子「舞台上で「感じる」意義—県立宝塚北高演劇科卒業公演」『大阪日日新聞』令和元年7月2日

矢野郁「夢を追い求めるマリオネット—ブロードウェイミュージカル『PIPPIN』」『大阪日日新聞』令和元年9月17日

松本俊樹「“ご当地” ジュークボックス・ミュージカルの「宝塚化」—宝塚月組公演『I am from Austria』」『大阪日日新聞』令和元年11月5日

岡田登貴「面白き能をおもしろく—シテ方観世流能楽師田茂井廣道独立披露 20周年記念『第五回 道の会』」『大阪日日新聞』令和2年1月7日

金潤貞「結末のない童話—劇団不労社第6回公演『マッチ売りの少女』」『大阪日日新聞』令和2年2月4日

杉本亘「大衆演劇の奥深さ体感—池田呉服座『澤村慎太郎劇団』」『大阪日日新聞』令和2年3月3日

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

【2018年度】

〔博士前期〕

(音楽学)

八谷誠人 2018年度大阪大学大学院文学研究科賞

〔博士後期〕

(演劇学)

Ayako KAKINUMA, The Best Paper Award, International Asian Theatre Studies Conference, 2018.

【2019年度】

〔博士前期〕

(音楽学)

小松啓子 第1回文学研究科・優秀若手研究者奨励賞

〔博士後期〕

(演劇学)

Toshiki MATSUMOTO, The Best Paper Award, International Asian Theatre Studies Conference, 2019.

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD : 0名 DC2 : 2名 DC1 : 0名 (計2名)
2019年度 PD : 0名 DC2 : 4名 DC1 : 0名 (計4名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部 : 1名 大学院 : 1名 (計2名)
2019年度 学部 : 0名 大学院 : 2名 (計2名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2018年度 : 1名 2019年度 : 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度 : 0名 2019年度 : 0名

9. 刊行物

2018年度 『演劇学論叢』第18号
2018年度 『阪大音楽学報』第15号
2019年度 『演劇学論叢』第19号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

近現代演劇研究会事務局

2018年度

近現代演劇研究会 3月例会を開催、2018年3月

近現代演劇研究会 5月7月合同例会を開催、2018年7月

近現代演劇研究会 10月例会を開催、2018年10月

講演会「ポーランド現代演劇連続講義」を開催、2018年11月

近現代演劇研究会 12月例会を開催、2018年12月

国際演劇会議 The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation を国立韓国芸術
総合学校演劇院と上海戯劇學院と台北藝術大学と共催、2018年11月

展覧会・シンポジウム「朝日会館と京阪神モダンイズム-戦前・戦中・戦後-」を朝日会館・会館芸術研究会と共催、2018年
11月～12月

展覧会「森本薫と『女の一生』」を開催、2018年12月

近現代演劇研究会事務局

2019年度

近現代演劇研究会 3月例会を開催、2019年3月

山崎正和名誉教授文化勲章受賞記念フォーラムを開催、2019年6月

近現代演劇研究会5月7月合同例会を開催、2019年7月

近現代演劇研究会10月12月例会を開催、2019年12月

国際演劇会議 The 7th International Asian Theatre Studies Conference; Controversy and Conciliation を国立韓国芸術総合学校演劇院と上海戯劇學院と台北藝術大学と共催、2019年11月

日本音楽学会第70回全国大会を当番校として開催、2019年10月の2日間

日本ポピュラー音楽学会第31回年次大会を当番校として開催、2019年12月の2日間

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

(音楽学)

伊東信宏教授、輪島裕介准教授は、いずれも活発な研究活動を展開した。伊東教授は、科学研究費国際共同研究強化B「東欧の音楽文化に関する民俗学的調査と編曲作品」が年度末近くに採択され、2016年度から取り組んできた挑戦的萌芽研究と併せて、東欧の音楽に関わる研究を進めた。輪島准教授は、4名の大学院生とともに、中国伝媒大学で開催された6th Inter-Asia Popular Music Studies Conferenceに参加し、アジア圏の大衆音楽研究者との交流を深めた。また、台北藝術大学を拠点とする東アジアの大衆的な上演文化に関する比較研究プロジェクトにも積極的に関与している。

2名の教員は、新聞、雑誌への寄稿や一般向けの講座など、アウトリーチ活動も活発に行っている。また、研究室主宰のコンサートシリーズ、大阪大学コレギウム・ムジクムも毎年開催しているが、2018年度は、7月にラップを中心とした実演と討議(第20回、環ROY、Moment Joon、輪島裕介、矢野原佑史)、10月に大阪大学会館講堂のベーゼンドルファーのピアノを中心としたレクチャーと演奏(第21回、伊東信宏、鷺野彰子)、2月にチンドン屋という日本の大衆芸能を国際的文脈で捉え直すレクチャーと実演(第22回、阿部万理江(ボストン大学准教授)、ちんどん通信社)の3回を開催した。またこれとは別にレクチャーコンサート「イスラエルから響くアルゼンチン・ユダヤの音」(川端美都子氏(香川大学准教授)、ブスケダ・エテルナ)も11月に開催した。また2019年度には、第23回阪大コレギウム・ムジクム「音楽と身体」特別公開講座・ワークショップ「韓国の打楽器芸能『農楽』の身体性～叩いて、踏んで、結んで、ほどく～」を2019年6月に開催した。さらに2020年1月、大阪大学会館講堂で、パンノニア少年少女合唱団コンサート「ちいさなこえ、ハンガリーのうた」(大阪大学外国語学部ハンガリー語専攻と協力)を、科学研究費の成果として開催した。

また学会活動として、日本音楽学会第70回全国大会が2019年10月に2日間にわたって大阪大学で開催された。また日本ポピュラー音楽学会第31回年次大会が2019年12月に2日間にわたって大阪大学で開催された。いずれの大会においても輪島准教授が大会実行委員長となり、研究室の多くのメンバーが学術面、運営面で参画した。

(演劇学)

永田靖教授、中尾薫准教授、古後奈緒子准教授、横田洋助教、岡田助教とも、いずれも多く論文や著書、また学会等への出席、会議運営などきわめて活発に研究活動を行っている。本研究室には、永田教授が会長を務める日本演劇学会の分科会である近現代演劇研究会を永田教授が主宰して、毎年5回ほどの研究会を行い、関西圏における数少ない演劇研究者の定期的な研究発表の機会を提供して関西での演劇研究の拠点となっている。永田教授は引き続き、科学研究費基盤研究(B)を獲得し、日本を含むアジア演劇の近現代演劇史の再考を進めているが、国際会議への出席が頻繁となっており、主催する国際研究会「国際演劇学会アジア演劇ワーキング・グループ」を毎年2回世界諸都市で開催し、アジア諸国における演劇研究との連携を図っている。演劇学研究室では、2018年11月にはThe 6th International Asian Theatre Studies Conference; Controversy and Conciliationを台北藝術大学にて開催し、院生ら8名が英語の口頭発表を行い、2019年11月には、国際演劇会議 The 7th International Asian Theatre Studies Conference; Controversy and Conciliationを国立韓国芸術総合学校演劇院と上海戯劇學院と台北藝術大学と共催し、大学院生の将来的な国際的活躍への意識をうながした。中尾准教授は、一般向け講座の講師を依頼される事例が多く、研究成果を積極的に公開するほか、能楽学会の関西例会・能楽フォーラムの世話人、能楽学会常務委員、民族芸術学会理事、芸能史研究会委員のひとりとして、学会での存在感をしめしている。また、国際学会にも積極的に参加している。永田教授、中尾准教授、岡田助教はそれぞれ、複数の科研グループの代表者や分担者、研究協力者、東京大学、京都市立芸術大学など他大学の研究会に参

画し、これらの成果は科研費成果報告書ばかりではなく、個別の論文や学会発表に反映されている。このことは大学院学生の研究活動の活発化につながっており、その評価は上記「教育活動」において触れた。これらのことを通して、日本伝統演劇と西欧近代演劇とを相互に参照しつつ多様で活発な研究を展開し、日本のみならず国際的にも評価されている演劇研究拠点として評価されている。

【研究会等実施状況】

第20回阪大コレギウム・ムジクム、特別講演 環 ROY「ラップで見通す現代のオンガク」ラップ実演：環 ROY、Moment Joon、コメンテーター：輪島裕介、矢野原佑史、会場：大阪大学サイエンス・スタジオ A（豊中キャンパス）、2018年7月13日。

第21回阪大コレギウム・ムジクム「ベーゼンドルファー1920を囲んで」講師：伊東信宏、ゲスト：鷺野彰子（福岡県立大学准教授）、会場：大阪大学会館講堂（豊中キャンパス）、2018年10月30日。

レクチャーコンサート「イスラエルから響くアルゼンチン・ユダヤの音」講師：川端美都子氏（香川大学准教授）、演奏：ブスケダ・エテルナ、会場：大阪大学会館講堂（豊中キャンパス）、2018年11月20日。

第22回 阪大コレギウム・ムジクム+京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究「近現代の伝統音楽および民謡の変容と実践」（研究代表斎藤桂）研究会共催「チンドン屋が聞こえる／街に響く音、心に響く音」、講演：阿部万理江（ボストン大学准教授）、実演：ちんどん通信社、大阪大学21世紀懐徳堂スタジオ（豊中キャンパス）、2019年2月19日。

第23回 阪大コレギウム・ムジクム「音楽と身体」特別公開講座・ワークショップ「韓国の打楽器芸能『農楽』の身体性～叩いて、踏んで、結んで、ほどく～」、大阪大学21世紀懐徳堂スタジオ（豊中キャンパス）、2019年6月28日。

近現代演劇研究会3月例会、神戸松蔭女子学院大学、2018年3月3日。

近現代演劇研究会5月7月例会、大阪大学、2018年7月21日。

近現代演劇研究会10月例会、大阪大学、2018年10月27日。

講演会「ポーランド現代演劇連続講義」講師：ダリウス・コシニスキ（ヤゲロニアン大学パフォーマンス・アーツ学科教授）、フィリップ・フロンチャック（俳優・演出家・演劇プロデューサー）、大阪大学、2018年11月13日。

近現代演劇研究会12月例会、大阪大学、2018年12月22日。

国際演劇会議「The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation」（国立韓国芸術総合学校演劇院と上海戯劇学院と台北藝術大学と共催）台北藝術大学、2018年11月。

展覧会・シンポジウム「朝日会館と京阪神モダニズム-戦前・戦中・戦後-」（朝日会館、会館芸術研究会と共催）シンポジウム：大阪大学アセンブリーホール、2018年12月2日、展覧会：大阪大学会館歴史展示室・セミナー室1・2、2018年11月29日～12月9日。

展覧会「森本薫と『女の一生』」ピッコロシアター展示室、2018年12月4日～16日。

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 永田 靖 教授

1957年生。1981年上智大学外国語学部ロシア語学科年卒業、1988年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位取得退学。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究科客員研究員、ロシア国立映画大学研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：演劇学

1-1. 論文

永田靖「外地のチェーホフ」『Time Capsule』(「徴しの上を鳥が飛ぶ」報告書)、大阪大学文学研究科、2020/2

永田靖「演劇のアジア的転回-ポスト・グローバリゼーション時代に向けて」『適塾』(適塾記念会)、52, 適塾記念会, pp. 83-94,

2019/12

永田靖 「震災後の身体」『Arts and Media』(p286-p289), Vol.9 , 大阪大学文学研究科文化動態論アート・メディア論コース, 2019/7

Nagata, Yasushi, “Assimilation of Asia: On Okawa’s Revenge and Nayotake”, *Modernization of Asian Theatres Process and Tradition*, Springer, pp. 241-255, 2019/6

永田靖 「記憶の上演—博物館資料を活用する演劇上演」『Arts and Media』Vol.8, 文学研究科アートメディア論コース, pp. 190-193, 2018/7

Nagata, Yasushi, “Crossing the Sea: The Ishinha Theatre Company’s Geographical Trail”, *Transnational Performance, Identity and Mobility in Asia*, Palgrave Macmillan, pp. 53-67, 2018/6

1-2. 著書

永田靖, 山崎達哉共編 『記憶の劇場—大阪大学総合学術博物館の試み』, 大阪大学出版会, 2020/3

永田靖, 青野智子, 伊藤洋他 『西洋演劇論アンソロジー』, 月曜社, 「アレクサンドル・タイロフ」pp.378-382、「ニコライ・エブレイノフ」pp.373-377、「ユージェニオ・バルバ」pp.549-553, 2019/9

Nagata, Yasushi, Ravi Chaturvedi, ed., *Modernization of Asian Theatres Process and Tradition*, pp.1-262, Springer & Rawat Publication, Introduction, pp.1-6. Assimilation of Asia: On Okawa’s Revenge and Nayotake, pp.241-256, 2019/5

永田靖, 佐伯康孝(共編) 『街に拓く大学』, 大阪大学出版会, 248p. , pp. 1-248, 2019/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖 「三人の姉妹」『ベスト・プレイズⅡ』, pp.633-686, 論創社, 2020/2

永田靖 「極東退屈同情#010 公演『ジャンクション』」『ENOCO』p.7, 江之子島文化芸術センター, 2020/2

永田靖 「演劇における日露交流」『ロシア文化事典』, 丸善出版, pp. 716-717, 2019/10

永田靖(書評) 「関西戦後新劇史 1945～1969」『図書新聞』3393号, 武久出版, pp.6-6, 2019/3

永田靖 「会長挨拶」*Journal of Korean Theatre Studies Association*, Korean Theatre Studies Association, 67, pp. 235-238, 2018/9

1-4. 口頭発表

Nagata, Yasushi, “Killing a Father: An Angura Response to Cold War Culture”, IFTR Hanoi Colloquium, Asian Theatre Working Group, Hanoi Young Theatre, Hanoi, Vietnam, 2020/3(新型コロナウイルス感染拡大のため中止)

Nagata, Yasushi, “Bridge across Asia”, Theatre Olympics Forum *Cultural Bridges in Theatre World*, Theatre Olympics, Hermitage General Staff, St. Petersburg, Russia, 2019/11

永田靖 「シンガポールの社会風土と潮州歌劇」日本演劇学会研究集会「演劇と風土」, 日本演劇学会, 西和賀町銀河ホール, 西和賀町、岩手県、2019/10

Nagata, Yasushi, “Japanese Diaects Plays or Multilingualism?”, IFTR Annual Conference, *Theatre, Performance and Urbanism*, International Federation for Theatre Research, Shanghai Theatre Academy, Shanghai, China, 2019/7

永田靖 「中之島における野外演劇の可能性」、シンポジウム「水辺における野外演劇の可能性」、文化庁戦略的芸術文化創造推進事業, 大阪大学, 2019/2

Nagata, Yasushi, “Expanding or going beyond the boundaries of theatre”, Asian Theatre WG Seoul Colloquium: Expanding the boundary of theatre, IFTR Asian Theatre Working Group, Korean National University of Arts, Seoul, South Korea, 2019/2

永田靖 「演劇のアジア的転回—ポスト・グローバリゼーションの時代に向けて」、適塾記念講演会, 適塾記念会, 大阪大学中之島センター, 2018/12

永田靖 「劇団維新派のアジア—『台湾の、灰色の牛が背のびをしたとき』を中心に」大阪・京都文化講座, 立命館大学, 立命館大学梅田キャンパス, 2018/11

永田靖 「演劇に劇場がなぜ必要なのか？」日本演劇学会研究集会, 日本演劇学会, 浜松文化芸術大学, 2018/11

Nagata, Yasushi, “Nose Ningyo Joruri: its challenge and dilemma”, The 2nd Asian Theatre Summit, Asian Theatre Association, Bangladesh Fine Arts and Performance Academy, Dhaka, Bangladesh, 2018/10

Nagata, Yasushi, “Representation of ‘Machuria’ in Japanese Post-War Plays”, Theatre and Migration: Theatre, nation and Identity, IFTR Annual Conference, Belgrade University, Belgrade, Serbia, 2018/7

永田靖 「『忠臣蔵・序 ビッグバン／抜刀』について」アフタートーク, エイチエムピー・シアター・カンパニー, 伊丹アイホール, 2018/7

永田靖 「演劇と文化現象」日本演劇学会全国大会, 日本演劇学会, 神戸松蔭女子学院大学, 2018/6

永田靖 「会長挨拶」日韓共同演劇学会, 日本演劇学会・韓国演劇学会, 神戸松蔭女子学院大学, 2018/6

永田靖 「藝術と教養—藝術は教養たりえるのか?」藝術学関連学会連合第 13 回公開シンポジウム, 藝術学関連学会連合, 慶應義塾大学, 2018/6

永田靖 「中村貞夫と演劇」, シンポジウム「歴代博物館長、画伯に迫る」, 大阪大学総合学術博物館, 2018/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2018 年度～2022 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:永田靖

課題番号:18H00624

研究題目:アジア近現代演劇の超域性の研究—クラスター構築と次世代研究者育成の国際共同研究

研究経費:2018 年度 直接経費 3,000,000 円 間接経費 900,000 円

2019 年度 直接経費 3,400,000 円 間接経費 1,020,000 円

研究の目的:

ポスト植民地主義的、またポスト・グローバリゼーション時代を迎える現代において、多様な実践が試みられているアジア近現代演劇の多様性を総合的に理解し、広い世界の演劇学・演劇史的観点から捉え返すことが求められている。この共同研究では、アジア間の相互影響やその共通する芸術的特徴を西欧演劇との比較のもとで明らかにすること、20 世紀後半以後のグローバリゼーション時代の今日的課題を検討すること、人種や言語を越えて接触し合ってきたアジアの近現代演劇を総合的に研究することを目的とする。またアジア諸都市間、西欧のアジア演劇研究者とのネットワークを生かして、クラスター構築を進めて行く。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2016 年度～2018 年度、5：その他補助金、助成金獲得者:永田靖

助成金名:大学を活用した文化芸術推進事業

研究題目:大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座

助成団体名:文化庁

助成金額:2018 年度 直接経費 25,000,000 円

研究の目的:

本プログラムは、大学博物館の特性を生かしながら様々なジャンルの芸術活動に関わり、企画運営しつつアート・マネジメント人材を育てるプログラムである。博物館に収められているいわゆる〈ミュージアム・ピース〉の豊かさを引き出し、〈生きたアート〉として公開していく文化芸術ファシリテーターの育成を目指す。様々な〈ミュージアム・ピース〉を活用したり、また創造や収集したりすることで、地域社会との協奏による芸術実践の試みと基礎研究的な潜在力とを連動させた「リサーチ型ミュージアム」のあり方を探求する。演劇、音楽、美術、アートなどばかりではなく、自然科学の領域までカバーして、多様な文化領域のファシリテートに柔軟に対応できる人材育成のプログラムを用意している。

1-7-2. 2019 年度～2020 年度、5：その他補助金、助成金獲得者:永田靖

助成金名:大学を活用した文化藝術推進事業

研究題目:文学研究科におけるアート・プラクシス人材育成プログラム

助成団体名:文化庁

助成金額:2019年度 直接経費 18,000,000円

研究の目的:

文学研究科の人文科学研究とアート・マネジメント講座を噛み合わせることで、現代社会において求められている諸課題に対して人文学的なアプローチを行うアート・ファシリテーターの人材育成を行う。担当教員が芸術諸ジャンルのアート経験を人文学の側からの解釈を行いつつ、人間や共同体のアイデンティティに関する諸問題について考察を深め、アートの社会での実際的な展開能力を身につけることを目的としている。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

兵庫県立尼崎ピッコロ劇団企画運営委員会・委員長, 2019年月～現在に至る

稲盛財団京都賞選考専門委員会・委員, 2017年5月～現在に至る

公益財団法人吹田市文化振興事業団・理事, 2015年5月～現在に至る

日本演劇学会・会長, 2014年6月～現在に至る

豊中市文化審議会・委員, 2014年6月～現在に至る

兵庫県立ピッコロ劇場企画運営委員会・運営委員, 2011年3月～現在に至る

Asian Theatre Working Group, International Federation for Theatre Research・Convener, 2009年7月～現在に至る

芸術学関連学会連合・委員, 2005年6月～現在に至る

日本演劇学会・理事, 2002年6月～現在に至る

日本映像学会関西支部・幹事, 2002年4月～現在に至る

日本演劇学会近現代分科会・主宰, 2000年11月～現在に至る

2. 伊東 信宏 教授

1960年、京都市生まれ。大阪大学文学部美学科（音楽学）卒業。同大学院修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、リスト音楽院（ハンガリー）客員研究員などを経て、1993年、大阪教育大学助教授。2004年、大阪大学助教授、准教授を経て、2010年4月より現職。専攻：音楽学

2-1. 論文

伊東信宏「モノローグ・オペラ『新しい時代』再演をめぐる3年間」『『記憶の劇場』大阪大学社会学連携叢書』大阪大学出版会, pp. 123-142, 2020/3

伊東信宏「「ポップフォーク」の展開」『民族芸術学会機関誌 arts/』（民族芸術学会）, 創刊号, 民族芸術学会, pp. 34-37, 2020/3

伊東信宏「民俗音楽の採譜と作品の記譜ーバルトークのヴァイオリン音楽」久保田慶一（編集代表）（共著）『楽譜でわかる20世紀音楽』アルテス, pp. 65-84, 2020/3

2-2. 著書

伊東信宏『東欧音楽夜話』音楽之友社, 256p., 2018/10

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

伊東信宏「いずみホール『ピグマリオン』」『朝日新聞』2019年12月26日夕刊, 朝日新聞, 2019/12

伊東信宏「ユリウス・イッサーリスのスクリアピン、そして最後に「東欧」について」『レコード芸術』2019年12月号, 音楽之友社, pp. 55-58, 2019/12

伊東信宏「ティールレマン指揮ウィーン・フィルハーモニー演奏会」『朝日新聞』2019年11月21日夕刊, 朝日新聞, 2019/11

- 伊東信宏 「コパチンスキ家のモルドヴァ」『レコード芸術』2019年11月号, 音楽之友社, pp. 55-58, 2019/11
- 伊東信宏 「ジョシボヴィッチの描くシェルシ」『レコード芸術』2019年10月号, 音楽之友社, pp. 55-58, 2019/10
- 伊東信宏 「加藤洋之による新ウィーン楽派の音楽」『レコード芸術』2019年9月号, 音楽之友社, pp. 53-56, 2019/9
- 伊東信宏 「へボ仕立て屋ではない！」『レコード芸術』2019年8月号, 音楽之友社, pp. 55-58, 2019/8
- 伊東信宏(訳), サーシャ・バッチャーニ著『月下の犯罪:一九四五年三月、レヒニッツでおきたユダヤ人虐殺、そして或るハンガリー貴族の秘史』講談社, 304p., 2019/8
- 伊東信宏 「ミュージカル『オン・ザ・タウン』」『朝日新聞』2019年7月25日夕刊, 朝日新聞, 2019/7
- 伊東信宏 「『右ハンドル』と「ろっ骨レコード」」『レコード芸術』2019年7月号, 音楽之友社, pp. 53-56, 2019/7
- 伊東信宏 「ウラジオストクにて」『レコード芸術』2019年6月号, 音楽之友社, pp. 87-90, 2019/6
- 伊東信宏 「ロナルド・ブラウティハム 演奏会」『朝日新聞』2019年5月30日夕刊, 朝日新聞, 2019/5
- 伊東信宏 「ノット+スイス・ロマン管弦楽団」『朝日新聞』2019年5月9日夕刊, 朝日新聞, 2019/5
- 伊東信宏 「ドホナーニ家の群像」『レコード芸術』2019年5月号, 音楽之友社, pp. 55-58, 2019/5
- 伊東信宏 「ドゥダメル+ロスアンゼルス・フィル」『朝日新聞』2019年4月11日夕刊, 朝日新聞, 2019/4
- 伊東信宏 「クルンツィス+ムジカエテルナ+コパチンスカヤ来日」『レコード芸術』2019年4月号, 音楽之友社, pp. 53-56, 2019/4
- 伊東信宏 「西村朗「紫苑物語」公演評」『朝日新聞』2019年3月11日夕刊, 朝日新聞社, 2019/3
- 伊東信宏 「映画『この歌は誰のもの?』」『レコード芸術』42063, 音楽之友社, pp. 57-60, 2019/3
- 伊東信宏 「バルトークと第一次大戦末期の『歴史的演奏会』」『レコード芸術』42035, 音楽之友社, pp. 57-60, 2019/2
- 伊東信宏 「クルンツィスの誘い込むところへ」『ムジカエテルナ演奏会パンフレット』42035, pp. 4-5, 2019/2
- 伊東信宏 「プファルツの楽師村・ポザウネンコア・バルカンのブラス」『レコード芸術』42004, 音楽之友社, pp. 57-60, 2019/1
- 伊東信宏 「郷古廉、オッテンザマー、ガヤルド公演評」『朝日新聞』2018年12月10日夕刊, 朝日新聞社, 2018/12
- 伊東信宏 「ドビュッシー晩年の作品群、そしてグールドのピアノ」『レコード芸術』41973, 音楽之友社, pp. 53-56, 2018/12
- 伊東信宏 「芸能の地平へ:宇多田ヒカルの行方」『レコード芸術』41943, 音楽之友社, pp. 57-60, 2018/11
- 伊東信宏 「ローマ歌劇場「椿姫」」『朝日新聞』2018年10月1日夕刊, 朝日新聞社, 2018/10
- 伊東信宏 「もう1度バッチャーニの話」『レコード芸術』41912, 音楽之友社, pp. 53-56, 2018/10
- 伊東信宏 「音楽の感触、触覚の音楽」『レコード芸術』2018年9月号, 音楽之友社, pp. 53-56, 2018/9
- 伊東信宏 「自然の音楽:『東欧』から」『草津国際音楽アカデミーパンフレット』草津国際音楽アカデミー, pp. 74-75, 2018/9
- 伊東信宏 「ハイドンの時間」『フィルハーモニー』NHK 交響楽団, pp. 24-25, 2018/9
- 伊東信宏 「「イェルク・ヴァイトマン演奏会」」『朝日新聞』2018年9月10日夕刊, 朝日新聞社, 2018/9
- 伊東信宏 「アルトシュテットとハイドン・フィル」『レコード芸術』2018年8月号, 音楽之友社, pp. 57-60, 2018/8
- 伊東信宏 「クラヴィコードを触りながら考える」『レコード芸術』2018年7月号, 音楽之友社, pp. 55-58, 2018/7
- 伊東信宏 「アルトシュテット+ハイドン・フィル」『朝日新聞』平成30年7月9日夕刊, 朝日新聞社, 2018/7
- 伊東信宏, 太田峰夫(共訳)『バルトーク音楽論選』筑摩書房, 287p., 2018/6
- 伊東信宏 「越えられない国境/未完の防衛線」『レコード芸術』2018年6月号, 音楽之友社, pp. 55-58, 2018/6
- 伊東信宏 「ロト+ル・シエクル「春の祭典」」『朝日新聞』2018年6月18日夕刊, 朝日新聞社, 2018/6
- 伊東信宏 「挑発:コパチンスカヤとレシュチェンコ」『レコード芸術』2018年5月号, 音楽之友社, pp. 55-58, 2018/5
- 伊東信宏 「日本フィル「ペルセフォース」」『朝日新聞』2018年5月23日夕刊, 朝日新聞社, 2018/5
- 伊東信宏 「ケルンのマーラー「交響曲第5番」」『レコード芸術』2018年4月号, 音楽之友社, pp. 53-56, 2018/4
- 伊東信宏 「シュニトケとシヨスタコーヴィチ」『朝日新聞』2018年4月2日夕刊, 朝日新聞社, 2018/4

2-4. 口頭発表

- 伊東信宏 「日本:お箏と歌」アルテ音楽講座, 堀江アルテ, 2020/2/27
- 伊東信宏 「ロシアの西端と東端:熊蜂は飛ぶ」アルテ音楽講座, 堀江アルテ, 2019/11/28

伊東信宏 「モンゴル:笛とホーミー」アルテ音楽講座, 堀江アルテ, 2019/10/24

伊東信宏 「自動演奏ピアノと演奏の歴史」アルテ音楽講座, 堀江アルテ, 2019/9/19

伊東信宏 「様々なトランペットから見る音楽史」アルテ音楽講座, 堀江アルテ, 2019/8/22

伊東信宏 「1920年代のハンガリー:解放と閉塞の交錯」シンポジウム「第一次大戦と音楽」, 桐朋学園大学, 2019/7

伊東信宏 「中欧音楽夜話 15「オーケストラの現在 ロトトル・シエクル」」, 箕面メイプルホール大阪大学連携講座, 2019/6/28

伊東信宏 「ショパンを歴史的ピアノで弾くこと」, トマシュ・リッテル・ワークショップ, フェニーチェ堺, 2019/6/14

伊東信宏 「中欧音楽夜話 14「オーケストラの現在 イル・ジャルディーノ・アルモニコ」」, 箕面メイプルホール大阪大学連携講座, 箕面メイプルホール小ホール, 2019/6/7

伊東信宏 「中欧音楽夜話 13「オーケストラの現在 クルレンツィスとムジカエテルナ」」, 箕面メイプルホール大阪大学連携講座, 箕面メイプルホール小ホール, 2019/5/31

伊東信宏 「ドイツの教会金管合奏『ボザウネンコア』」, アルテ音楽講座, 堀江アルテ, 2019/5/23

伊東信宏 「クルターグの『遊び』をめぐって」アルテ音楽講座, シニア CITY カレッジ公開講座, 堀江アルテ, 2019/3/28

伊東信宏 (基調講演)「2010年代の日本の若者における音楽行動」ソフィア大学シンポジウム:日本とブルガリアにおけるポップカルチャーと若者」, ソフィア大学, ソフィア大学大講堂, 2019/3/12

伊東信宏 「バルトークと民俗音楽」アルテ音楽講座, シニア CITY カレッジ公開講座, 堀江アルテ, 2019/2/28

伊東信宏 「阪大のバーゼンドルファーに触れながら」大阪大学連携講座:中欧音楽夜話, 箕面メイプルホール, 箕面メイプルホール, 2019/1/11

伊東信宏 「中欧音楽夜話「ピアノの歴史 19世紀以降」」大阪大学連携講座, 箕面メイプルホール, 2018/12/21

伊東信宏 「ヤナーチェクと自然の音楽」アルテ音楽講座, シニア CITY カレッジ公開講座, 堀江アルテ, 2018/12/20

伊東信宏 「マーラーとクレズマー音楽」アルテ音楽講座, シニア CITY カレッジ公開講座, 堀江アルテ, 2018/11/22

伊東信宏 「中欧音楽夜話「ピアノの歴史 18世紀まで」」大阪大学連携講座, 箕面メイプルホール, 2018/11/16

伊東信宏 「水車小屋の娘とは誰か?:シューベルトの歌曲」アルテ音楽講座, シニア CITY カレッジ公開講座, 堀江アルテ, 2018/7/26

伊東信宏 「楽長ハイドンの周辺」アルテ音楽講座, シニア CITY カレッジ公開講座, 堀江アルテ, 2018/6/28

伊東信宏 「中欧音楽夜話「ギル・シャハムの演奏会に」」大阪大学連携講座, 箕面メイプルホール, 2018/6/20

伊東信宏 「中欧音楽夜話「村の楽師とソナタ:エネスクの作品」」大阪大学連携講座, 箕面メイプルホール, 2018/6/6

伊東信宏 「中欧音楽夜話「ヴァイオリンは死神の楽器?」」大阪大学連携講座, 箕面メイプルホール小ホール, 2018/5/23

伊東信宏 「中欧の芸能:オペレッタを観る」アルテ音楽講座, シニア CITY カレッジ公開講座, 堀江アルテ, 2018/4/26

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

伊東信宏 木村重信民族芸術学会賞, 民族芸術学会, 2010/5

伊東信宏 大阪大学教育研究功績賞, 大阪大学, 2010/2

伊東信宏 サントリー学芸賞, サントリー文化財団, 2009/12

伊東信宏 吉田秀和賞, 吉田秀和芸術振興財団, 1997/11

伊東信宏 アリオン賞奨励賞(音楽評論部門), アリオン音楽財団, 1990/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2016年度~2018年度、挑戦的(開拓・萌芽)研究、代表者:伊東信宏
 課題番号:16K13164
 研究題目:「演歌型」大衆音楽の国際比較研究:東欧とアジアを中心に
 研究経費:2018年度(延長分) 直接経費 683,077円 間接経費 0円
 研究の目的:

本研究では、東欧諸国の「演歌型」大衆音楽に加えて、日本、韓国、台湾、タイ、インドネシアなどアジアにおける「演歌型」大衆

音楽の比較を行うことを目指し、その理論的枠組みの形成、国際共同研究組織の構築、多言語、多文化社会における大衆文化の比較研究のモデルを提示することを目的とする。

2-6-2. 2018年度～2022年度、国際共同研究加速基金(B)、代表者：伊東信宏

課題番号：18KK0002

研究題目：東欧の音楽文化に関する民俗学的調査と編曲作品研究

研究経費：2018年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

2019年度 直接経費 3,700,000円 間接経費 1,110,000円

研究の目的：

本研究は、東欧の音楽文化を対象に、ブルガリア、セルビア、スロヴェニアといった各地域相互の比較、およびそれらと日本との比較を通じて、東欧および日本の文化の理解を深めることを目的としている。注目するのは、音楽の二つの階層である。A) まず民衆文化のレベルで、東欧と日本の民俗的風習について、とりわけ日本の来訪神行事(2018年にユネスコの無形文化遺産に登録された)と東欧の「コレダ」「コリンダ」のような外形的に類似する現象を調査する。この民衆文化の共通性の基盤のうえに、B) 第二のレベルとして、その現代的表現形態(音楽における「ポップフォーク」、あるいは民俗音楽の編曲作品など)についても比較検討を行う。このような調査研究を通じて、東欧各国にこれまで築いてきたネットワークを利用しながら、音楽学と民俗学の両面にまたがる研究組織を構築し、国際的発信のための研究拠点を形成することを目指す。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

文化庁、次代の文化を創造する新進芸術家育成事業・音楽分野 協力者会議委員、2019年4月～現在に至る

日本芸術文化振興会の評価等に関する有識者会議・委員、2018年4月～現在に至る

日本音楽学会・支部監事、2017年4月～現在に至る

日本万国博覧会記念基金事業審査会・委員、2017年4月～現在に至る

日本芸術文化振興会・音楽専門委員、2013年4月～現在に至る

京都府文化力チャレンジ意見聴取会議・委員、2012年4月～現在に至る

ザ・フェニックスホール・プログラム・アドバイザー、2011年4月～2020年3月

民族芸術学会・理事、2008年4月～現在に至る

サントリー芸術財団、サントリー音楽賞、佐治敬三賞・選考委員、2000年6月～現在に至る

朝日新聞音楽懇話会・委員、2000年4月～現在に至る

3. 輪島 裕介 准教授

1974年生。東京大学大学院人文社会系研究科(美学芸術学)博士課程単位修得退学。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員、国立音楽大学ほか非常勤講師を経て、2011年4月より現職。専攻：音楽学

3-1. 論文

輪島裕介「大阪労音の時代」竹内幸絵(編)『開封・戦後日本の印刷広告：『プレスアルト』同梱広告傑作選(1945-1977)』創元社、pp. 188-209, 2020/3

輪島裕介「美空ひばりにおける「歌う時代劇スター」から「座長」への転身とその文化産業史的意義」細井尚子『東アジア文化圏の芸能にみる『大衆』～観念・実体・空間～論文集』立教大学アジア地域研究所、pp. 136-150, 2020/3

輪島裕介「環太平洋・アジアから日本ポピュラー音楽史を見る：演歌、カクコト歌謡、ドドンパから(プラスチック・ラヴ)まで」大和田俊之(編著)『ポップ・ミュージックを語る10の視点』アルテスパブリッシング、pp. 305-336, 2020/2

- 輪島裕介 「北からやってきたザ・スターリン、北へ帰る遠藤ミチロウ:「上京者の歌謡史」のために」『ユリイカ』51-15, 青土社, pp. 226-233, 2019/8
- 輪島裕介 「解説—『J-POP 進化論』はいかに進化したのか?」佐藤良明『ニッポンのうたはどう変わったか:[増補改訂]J-POP 進化論』平凡社, pp. 260-271, 2019/4
- 輪島裕介 「演歌は「演じる歌」か? :近代日本における大衆音楽と上演文化のミッシング・リンク」『大衆文化』立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター, pp. 19-39, 2019/3
- 輪島裕介 「書評 三井徹『戦後洋楽ポピュラー史 1945-1975 資料が語る受容熱』」『ポピュラー音楽研究』(日本ポピュラー音楽学会), 22, 2019/3
- 輪島裕介 「KとJのはざま:「ダンシング・ヒーロー」の越境と架橋」『ユリイカ』青土社, pp. 172-176, 2018/11

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

- Wajima, Yusuke, “日本ポピュラー音楽学会 2019 年度第 1 回中部例会「踊る J-POP?:ダンスと振付の間”Pseudo-International” Songs in Japanese Disco: Rethinking the Dichotomy of Foreign/Domestic in Japanese Popular Music”, International Symposium “Music in Global Context”: , 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究「近現代の伝統音楽および民謡の変容と実践」, 大阪大学, 2020/3
- 輪島裕介 「「ディスコと日本人」への旅」現代風俗研究会 2,020 年度 2 月例会, 現代風俗研究会, 徳正寺, 2020/2
- 輪島裕介 「「美空ひばりにおける「歌う時代劇スター」から「座長」への転身とその文化産業史的意義」国際シンポジウム「東アジア文化圏の芸能にみる「大衆」～観念・実体・空間～」, アジア地域研究所、立教 SFR 共同プロジェクト研究『「東アジア文化圏」研究基盤の構築—娯楽市場における「大衆」「演劇」「大衆演劇」から—」主催, 立教大学, 2019/12
- 輪島裕介 「カタコト、空耳、デタラメの歌謡史:聞こえることと歌うこと」ラボカフェスペシャル featuring 鉄道芸術祭, 21 世紀懐徳堂, アートエリア B1, 2019/11
- 輪島裕介 「「世界の人びとに音楽の喜びを!」:日本とブラジルにおける国際歌謡祭」東文研ワークショップ「音楽とグローバル関係学」, 東京大学東洋文化研究所, 東京大学東洋文化研究所, 2019/11
- 輪島裕介 「踊る J-POP?-ダンスと振付の間」日本ポピュラー音楽学会2019年度第1回中部例会, 日本ポピュラー音楽学会, 愛知県立大学・県立芸術大学サテライトキャンパス, 2019/11
- 輪島裕介 「1960 年代における演歌の発見/発明」国際日本文化研究センター・パリ・アカデミックプログラム「大衆文化の発見」, 国際日本文化研究センター, パリ・デイドロ大学, 2019/10
- 輪島裕介 「演歌・歌謡曲ジャンルの現在」日本ポピュラー音楽学会 2019 年度第 2 回関東例会, 日本ポピュラー音楽学会, 大東文化大学・大東文化会館, 2019/9
- 輪島裕介 「演じる歌手/歌う映画スターとしての美空ひばり」2019 東亜大衆戯劇研究国際論壇「面向大衆:戯劇視野、場域的建構與生成」, 国立台北藝術大学・立教大学, 国立台北藝術大学, 2019/9
- Wajima, Yusuke, “A Genealogy of ‘Pseudo-International’ Songs”, Shared Campus, Thematic Focus “Pop Cultures” Kick-off Symposium, “GLOBAL POP CULTURES. MOVING BEYOND THE HIGH-LOW, EASTWEST DIVIDE”, Shared Campus, 京都精華大学, 2019/7
- 輪島裕介 「「日本を代表する歌謡」の内と外:演歌と国際歌謡祭」翰林大学校日本学研究所主催国際シンポジウム「冷戦時代の東アジアにおける大衆文化の中のナショナリズムと文化権力」(国際学会), 翰林大学校日本学研究所, 翰林大学校日本学研究所, 2019/6

Wajima, Yusuke, "Japanese Disco as Precursor to J-Pop and City Pop", International Symposium, "What's Up, A-Pop?: Re-Thinking the Relationships between/among Asian and Asian American Popular Music Cultures", コロンビア大学グローバルセンター北京, コロンビア大学グローバルセンター北京, 2019/4

輪島裕介 「ダンスと振り付けの間——70年代以降の日本の大衆音楽史から考える」音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究, 国立民族学博物館共同研究(代表・野澤豊一), 国立民族学博物館, 2019/2

輪島裕介 「書評 柳沢史朗『(ニグロ芸術)の思想文化史』」合評会・著者との対話「アフリカをめぐる思考の現在」, 民族芸術学会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/12

輪島裕介 「日本のディスコ史における音と身体」音響と聴覚の文化史, 国際日本文化研究センター共同研究(代表・細川周平), 国際日本文化研究センター, 2018/12

輪島裕介 「音楽:大阪労音の時代」シンポジウム: 関西広告を開梱(アンパック)する——『プレスアルト』誌というアド・アーカイヴ, 民族芸術学会, 大阪府立江之子島文化芸術創造センター, 2018/10

輪島裕介 「何謂「座長(演出團長)公演」: 従音楽史與戲劇史之夾縫中叩問」2018 東亞大衆戲劇國際學術研討會: 流行的生成與變動, 國立臺北藝術大學戲劇學系、傳統音樂學系, 国立台北藝術大学, 2018/9

輪島裕介 「アジアと/の日本: 日本のポピュラー音楽研究の問題としての「インターアジア」」日本ポピュラー音楽学会関西地区例会, 日本ポピュラー音楽学会, 関西大学, 2018/8

輪島裕介 「環太平洋・間アジア視点から見直す日本ポピュラー音楽史」Music is Music レクチャーシリーズ, 一般社団法人 MAM, Smartnews 社, 2018/7

Wajima, Yusuke, "Making Samba-Reggae Inter-Asian: Japanese Drummers in Taiwanese Carnival Performance", Inter-Asia Popular Music Study Group Conference, Inter-Asia Popular Music Study Group, 中国伝媒大学, 2018/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

輪島裕介 大阪大学賞, 大阪大学, 2017/10

輪島裕介 第33回サントリー学芸賞 芸術・文学部門, サントリー文化財団, 2011/11

輪島裕介 The 2011 IASPM Book Prize for a book written in a language other than English, International Association for the Study of Popular Music, 2011/8

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2016年度～2018年度、挑戦的萌芽研究、代表者: 輪島裕介

課題番号: 16K13183

研究題目: 世界諸地域の大衆音楽における「日本」表象の関係史的研究

研究経費: 2018年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究は、概ね第二次世界大戦後の日本内外の大衆音楽において、「日本」がどのように表象されたかを、相関的な視点から読み解くための基本的な視点を獲得し、国際研究ネットワークを構築することを目指す。

3-6-2. 2019年度～2022年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 輪島裕介

課題番号: 19K00220

研究題目: 環太平洋・間アジア視点から近代日本大衆音楽史を読み直す

研究経費: 2019年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

概ね1920年代から現代までの日本の大衆音楽史を、太平洋圏という観点から、特にアジア諸地域内部の相互関連に注目して再検討する。それによって、従来もっぱら「洋楽」の受容という観点から語られてきた日本の近代音楽史(必ずしも大衆音楽に限定されない)を相対化し、近隣諸国・諸地域との比較が可能となるような歴史記述を行うための諸前提を探求する。具体的には、レコ

ード、ラジオ、トーキー映画といった複製技術に依拠する大衆音楽スタイルの形成と変容過程を、圏域内での「西洋」経験の同時性・近似性と、日本が(20世紀前半は「帝国」として、後半は「経済大国」として)比較的長期間にわたって他地域に一定の影響を及ぼしてきた経緯の双方に留意しながら検討する。以て、「戦前／戦後」や「演歌・歌謡曲／ポップ・ロック」といった、やや恣意的な分断に依拠しがちだった従来の大衆音楽史記述を、包括的に捉える視点の獲得も目指す。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本ポピュラー音楽学会・理事、研究活動委員長, 2018年12月～現在に至る

4. 中尾 薫 准教授

1978年生。2001年、奈良女子大学文学部言語文化学科日本アジア言語文化学卒業、2008年、大阪大学大学院文学研究科(演劇学)博士後期課程修了。博士(文学)。2009年、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館助手。2011年、大阪大学大学院文学研究科専任講師を経て、2014年4月より現職。専攻：演劇学、能楽研究

4-1. 論文

Michael Ingham, Nakao, Kaoru(共著), “Come, You Spirits”: An Alternative Afterlife to Shakespeare’s Macbeth and Othello, as Mediated through Japanese Classical Nō and Kyōgen Theatre” (共著) *Asian Theatre Journal, Spring 2018*, vol. 35, no. 1, University of Hawai‘i Press, pp. 112–132, 2018/4

4-2. 著書

中尾薫 「『夢幻能』という語から能の近代受容史をたどる」毛利三彌・天野文雄(共著)『東アジア古典演劇の伝統と近代』アジア遊学-232, 勉誠出版, pp. 157–176, 2019/3

中尾薫 「新作能《オセロ》における間狂言—愛と嫉妬に隠された業因—」泉紀子(共著)『新作能オセロ』和泉書院, pp. 134–146, 2019/1

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中尾薫「解説」(朝日会館・会館芸術研究会編『会館芸術』第38巻, ゆまに書房, pp. 259–269, 2019/9)

中尾薫「解説」(朝日会館・会館芸術研究会編『会館芸術』第39巻, ゆまに書房, pp. 261–275, 2019/9)

中尾薫「解説」(朝日会館・会館芸術研究会編『会館芸術』第27巻, ゆまに書房, pp. 253–261, 2019/5)

中尾薫 「能と伝統—時代を超えた継承の本質をさぐる」民族芸術学会(共著)『民族芸術』(民族芸術学会), 35, 民族芸術学会, pp. 8–25, 2019/3

中尾薫「観世文庫の文書109「笑直【目+必】」『観世』4, 表紙裏, 2018/4)

中尾薫「『鉄輪』における丑の刻参り—陰陽道の呪詛祭文との関係など—」『篠山春日神社薪能』パンフレット, pp. 2–3, 2018/4/17

4-4. 口頭発表

Nakao, Kaoru, “猿楽能における「儺」の変遷—宗教劇から娯楽劇へ—”, 2019年獅城国国際戯曲学術検討会, シンガポール伝統芸術センター, シンガポール国立図書館, 2019/11

中尾薫 「朝日会館における能楽上演の意味」朝日会館と京阪神モダンリズム—戦後・戦中・戦前—, 朝日会館・会館芸術研究会, 大阪大学, 大阪大学会館アセンブリーホール, 2018/12

Nakao, Kaoru, “The Style of Noh Performance and the Theory of the Samurai: How shikigaku (ceremonial music) and bukekojitsu (Japanese ancient practice of military etiquette) influenced Noh performance”, Creation, Preservation, and Transformation of

Theatre Traditions: East and West, テルアビブ大学芸術学部, テルアビブ大学、メキシコ館, 2018/11

Nakao, Kaoru, Michael Ingham, “Off, off, you lendings! Come. Unbutton here”: The divestment of authority and the cultivation of hope in Makoto Sato’s reincarnation of Lear with Mūgen Nōh elements”, Asian Theatre Working Group: Confrence 2018: Theatre and Migration, International Federation for Theatre Research, the Faculty of Philology University of Belgrade, 2018/7

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2018年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 中尾薫

課題番号: 18K00234

研究題目: 日本統治下の台湾における歌舞伎・浄瑠璃史の構築—現地資料に基づく基礎研究と考察—

研究経費: 2018年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2019年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

本研究では、太平洋戦争以前の台湾における、日本の伝統演劇—歌舞伎・浄瑠璃の活動に着目する。1895年から1945まで50年におよぶ日本の統治時代において台湾で興行された歌舞伎や、現地での浄瑠璃活動について、その展開の様相・組織の成立・活動の場所・活動の担い手などを、資料調査を通じて実態を解明し、これまで明らかにされていない台湾における歌舞伎・浄瑠璃史を構築することを目的とする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

芸能史研究会・委員, 2017年6月～現在に至る

能楽学会・常任委員, 総務委員, 2016年6月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 2015年5月～現在に至る

日本演劇学会・幹事, 2012年6月～2018年6月

5. 古後 奈緒子 准教授

1972年生。2004年大阪大学 文学研究科文化表現論(美学)修了、修士(文学)。京都造形芸術大学、大阪外国語大学、龍谷大学、神戸市外国語大学、奈良大学、神戸女学院大学等の非常勤講師、2014年より大阪大学文学研究科助教を経て、2017年4月より現職。2001年日本演劇批評家協会主催第5回「シアターアーツ賞」受賞。2001年舞踊学会研究奨励賞。専攻: 舞踊学

5-1. 論文

古後奈緒子 「ドキュメンテーション／アーカイヴの残跡」『記憶の劇場 総合学術博物館の試み』大阪大学出版会, pp. 159-183, 2020/3

古後奈緒子 「クリストフ・シュリンゲンジーフとヒトラー—欲望と注視の再分配—」『ナチス映画論』森話社, pp. 251-260, 2019/12

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

古後奈緒子, G, プラントシュテッター, 針谷真理子他(共訳)「制作と稽古と継承のはざま」中島那奈子、外山紀久子(共編)『老いと踊り』頤草書房, pp. 43-57, 2018/12

5-4. 口頭発表

古後奈緒子「〈電気の女神〉は何を表象するのか」第71回舞踊学会, 舞踊学会, 専修大学生田キャンパス, 2019/12

Kogo, Naoko, “Interface between local tradition and modernism of dance”, Working Group: Historiography, International Federation of Theater Research, Shanghai Theatre Academy, 2019/7

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪アーツカウンシル・委員, 2018年5月～現在に至る

大阪市芸術文化活動助成・審査委員, 2018年5月～現在に至る

文化庁芸術文化振興基金・助成事業視察委員, 2018年4月～現在に至る

6. 横田 洋 助教

1976年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。2008年、大阪大学総合学術博物館研究支援推進員。2011年より、大阪大学総合学術博物館助教。

6-1. 論文

永田靖, 横田洋(共著)「パフォーミング・ミュージアムー演劇と博物館の新たな可能性について」永田靖・山崎達哉(共著)『記憶の劇場 大阪大学総合学術博物館の試み』大阪大学出版会, pp. 143-158, 2020/3

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

横田洋「乙女文楽人形肩板の調査」乙女文楽研究会, 大阪大学, 2019/3

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2015年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:横田洋

課題番号:15K02174

研究題目:芸能史的環境における映画とその影響に関する研究

研究経費:2018年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

明治末期に新しい興行物として登場した映画は既存の芸能や興行の環境にきわめて大きな影響を与え、そこにさまざまな変化をもたらした。その映画の登場という歴史的な事象を客観的に検証するには既存の芸能との関連で議論されなければならないが、従来の芸能史では芸能としてあるいは興行物としての映画を本格的な研究対象として扱ってこなかった。本研究では芸能をめぐる環境の制度的側面とその変化を中心に調査することにより、映画の登場が芸能史あるいは文化史に与えた影響を実証的に検証する。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

7. 岡田 蒔子 助教

1986年生。2016年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(演劇学専攻)単位取得退学。博士(文学)(大阪大学、2017年)2018年4月より大阪大学文学研究科助教(2020年3月退職)。専攻:演劇学

7-1. 論文

岡田蒔子「新しい「供養」を考える——『イン・リポーズ』によるオーストラリアの日本人墓地での例を参考に」『旧真田山陸軍墓地、墓標との対話』号数無し、阿吽社、pp. 276-281, 2019/11

Okada, Fukiko, "The Difference of Identity Between Japanese and Korean Residence in Japan: A Comparison of the Play Tsubameyo, Omaeha Naze Konainosa……(Oh swallow, Why Don't You Come?) with Hikariyo! Yomigaere(Oh Light! Revives)." *The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation, Proceedings.*, (The 6th International Asian Theatre Studies Conference), Proceedings, pp. 187-193, 2018/11

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岡田蒔子「「わたしのカラダに音を通して」山城知佳子『あなたをくぐり抜けて—海底でなびく 土底でひびく あなたのカラダをくぐり抜けて—(パフォーマンス)』『京都芸術センター通信』(京都芸術センター), 223, 京都芸術センター, pp. 3-3, 2018/11

岡田蒔子「塚原悠也の2015-2017年度の活動について」『2017年度事業報告書』アニュアルレポート, 公益財団法人セゾン文化財団, pp. 38-38, 2018/10

岡田蒔子「「世界の裏から、表から」エイチエムピー・シアターカンパニー『忠臣蔵・序 ビッグバン／抜刀』『京都芸術センター通信』(京都芸術センター), 220, 京都芸術センター, pp. 3-3, 2018/8

岡田蒔子「「人と形のあわいに想う」ITO プロジェクト『高岡親王航海記』『京都芸術センター通信』(京都芸術センター), 217, 京都芸術センター, pp. 3-3, 2018/5

7-4. 口頭発表

Okada, Fukiko, “The Difference of Identity Between Japanese and Korean Residence in Japan: A Comparison of the Play Tsubameyo, Omaeha Naze Konainosa……(Oh swallow, Why Don’t You Come?) with Hikariyo! Yomigaere(Oh Light! Revives)”, The 6th International Asian Theatre Studies Conference: Controversy and Conciliation, Taipei National University of the Arts, Korean National University of Arts, 大阪大学, Taipei National University of the Arts, 2018/11

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2018年度～2019年度、研究活動スタート支援、代表者:岡田 薔子

課題番号:18H05563

研究題目:劇作家岸田理生の1990年代日韓演劇交流史研究

研究経費:2018年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2019年度 直接経費 400,000円 間接経費 0円

研究の目的:

本研究では、劇作家岸田理生(1946-2003)の1990年以降の韓国演劇界との交流の様相を演出家金亜羅(1956-)との関係を中心に調査し、岸田の問題意識の所在を、作品分析を通して明らかにすることを目的とする。

具体的にはまず、金亜羅が創設に関わったソウルの前衛的小劇場「恵化洞一番地」と、そこに招聘されて岸田が上演した『二人ぼっち』(1995)に関わる資料収集と分析・考察を行う。次に、岸田が金に書き下ろし、京畿道の竹山にある金が作った野外劇場M-camp theatreで金が演出した『人間リア』(1998)に関わる資料収集と考察・分析を行う。以上2点を踏まえて、90年代の岸田と韓国の演劇界との交流の諸相と、岸田の問題意識の所在を考察・分析する。最終的には、本研究で収集した資料を、現在申請者が所有している資料と共にアーカイブ化し、後続の研究発展の礎とする。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

国際演劇評論家協会日本センター関西支部演劇評論誌「Act」・副編集長, 2019年4月～現在に至る

公益財団法人京都文化財団 Kyoto 演劇フェスティバル・実行委員, 2017年2月～現在に至る

公益財団法人セゾン文化財団 評価員・評議員, 2015年11月～現在に至る

2-23 美術史学

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 5(兼任1) 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：園府寺 司、橋爪 節也(兼任)、藤岡 穰、岡田 裕成、桑木野幸司

准教授：門脇むつみ

助教：本多 康子

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
51	12	21	0	0	3	3	0

*うち留学生7名、社会人学生2名

3. 修了生・卒業生(2018年度～2019年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2018	9	5	3	2
2019	18	3	2	0
計	27	8	5	2

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

学部の教育においては、初歩的な講義・演習により専門基礎学力の充実をはかるとともに、美術作品を観察し、記述する能力を養う演習、専門分野の論文を批判的に読む能力、美術史に関わる史料講読の能力を養う演習を開講し、基礎能力の育成に努める。また、卒業論文作成のための演習では、研究経過の発表を通じてプレゼンテーション能力の向上をはかり、かつ相互に批判する能力を培う。

大学院の教育においては、最新の研究動向を踏まえた講義・演習を開講し、専門学力の充実をはかるとともに、美術作品の調査を指導あるいは奨励し、実証的な作品研究能力を養い、隣接領域への関心を喚起し、美術史研究の新たな視点をひらくことを目指す。また、修士論文作成演習、博士論文作成演習を開講し、さらに個別に論文指導を行う。加えて、文化動態論専攻アート・メディア論との連携をはかり、日本学術振興会特別研究員制度、TA や RA、美術館や博物館での

インターンシップなどの積極的利用を促進する。

2. 研究

教員は、一人平均で年間1本以上の論文を執筆し、他に作品解説、書評、調査報告書等を執筆することを目標とする。かつ、科学研究費などの外部資金の獲得につとめ、研究を遂行する。博士後期課程の大学院生は、積極的に国内外の学会で口頭発表し、1人平均で年間1本以上の論文、作品解説等を執筆することを目標とする。この他、研究を促進するため、学外においては美術史学会をはじめとする関係学会等の運営に協力し、学内においては待兼山芸術学会の運営、開催に協力する。また、外国人研究者の招聘、受け入れ等を通じて、研究室の国際性を高める。

3. 社会連携

国、地方公共団体、博物館・美術館等の美術作品に関わる学術調査およびその成果報告に協力するとともに、国、地方公共団体の文化行政、博物館・美術館の運営等に協力する。また、国、地方公共団体、博物館・美術館等が必要とする美術作品の評価に協力する。研究室のホームページを運営し、活動内容を外部に発信する。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

目標に定めた通りの美術史の講義、演習を開講し、十分な教育効果をあげた。また、全学教育推進機構における教育に協力し、2017年度には4セメ分、2018年度には4セメ分の授業を担当した。

日本・東洋美術史においては、伝統の授業である見学演習を継続し、美術史学の基礎となる作品の観察、記述能力の育成に効果をあげた。大学院生には、科研に関わる、あるいは博物館、地方自治体が実施する作品調査、種々の研究会への参加を促すとともに、教員が監修・編集を担当する研究書において論文投稿の機会を提供するなど所期の目標を達成した。西洋美術史においては、学部レベルでは論文を読むための授業が定着し、ゼミにおける研究発表、質疑応答を通じて、大学院、学部ともに論文作成にいたる過程を着実に定着させた。この間3名が欧米に留学し、高度な語学力を養いつつ、本格的な実地調査、研究を行うとともに、大学院授業を受けている。

なお、非常勤講師については、2018年度は日本近世絵画(奥平俊六・大阪大学名誉教授)、日本近世絵画(門脇むつみ)、西洋近代絵画(山城紀子)、2019年度は西洋近代絵画(山城紀子・継続)の専門家をお招きし、専任教員ではカバーができない範囲の、そして最も先進的な研究についての講義を提供し、大きな教育効果をあげた。

2. 研究

各教員とも、著書、論文、作品解説等をおよそ目標通り、あるいは目標以上に発表することができた。また、4人の専任教員が科学研究費の助成を受け、当該の研究を推進した(2人が基盤研究(A)、1人が基盤研究(B)、1人が基盤研究(C)の研究代表者)。なお、この間、美術史学会常任委員、美術史学会西支部事務局長、民族芸術学会理事(副会長)、仏教芸術学会会長などの役職をつとめ、学会の運営にも協力した。

博士後期課程の学生は論文等5件、口頭発表10件、加えて博士前期課程の学生も論文等3件、口頭発表5件と、美術史学の専門分野の大学院として、めざましい研究成果を挙げることができた。

3. 社会連携

国、地方公共団体および私立の博物館、美術館の研究員、評議員などをつとめ、さらに地方史の編纂事業、文化財審議委員会などにも参画し、それぞれの事業に協力した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

前記の活動の結果、学部生、大学院生ともに水準以上の成績を残すことができた。受賞なし。なお、学内からの大学院進学者が2018年度は2名、2019年度は1名あり、教育について着実な成果を挙げている。

2. 研究

前記の活動の通り、著書、論文等の執筆や学会発表については、教員・大学院生ともに目標をほぼ達成した。加えて、4人の専任教員が科学研究費の助成を受けるなど、研究については十分に目標が達成できたと自己評価できる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2018	2	0	2
2019	0	0	0
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

高志緑 「南宋仏画研究—圖像と儀礼の継承と展開—」 2019/3
主査：藤岡穰 副査：橋爪節也、奥平俊六

中村真菜美 「谷文晁研究—大名文化圏における風景愛好趣味との関わりに着目して—」 2019/3
主査：橋爪節也 副査：藤岡穰、奥平俊六

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	1(1)	3(0)	1(0)	0(0)	0(0)	5(1)
2019	1(0)	1(1)	4(1)	0(0)	2(0)	8(2)
計	2(1)	4(1)	5(1)	0(0)	2(0)	13(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	0	4	2	0	2	8
2019	2	5	7	1	0	15
計	2	9	9	1	2	23

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

〔博士前期〕

竹花藍子 “Francis Picabia’s ‘Transparencies’: An Investigation on the Source Images” 『フィロカリア』第36号, pp.1-21, 2019/03/27

〔博士後期〕

菊川亜騎 「関西日仏学館と京都の美術家—第二次世界大戦期の交流について—」 『京都市立美術大学美術学部紀要』第63号, pp.1-8, 2019/3/23

竹中哲也 「光と闇のはざま、半透明の絵画芸術——大阪洋画壇と中村貞夫」 『精神と光彩の画家 中村貞夫 —揺籃期から世界四大文明を超えて—』, pp.8-11, 2018/4/27

中村真菜美 「屋代弘賢文・菅原洞斎画「衆楽園図」(千秋文庫蔵)の制作について」 『待兼山論叢(芸術篇)』第52号, pp.1-26, 2018/12/25

中村真菜美 「谷文晁筆「東海道勝景」(永青文庫蔵)の制作について」 『美術史』第185号, pp.33-49, 2018/10

【2019年度】

〔博士前期〕

池田泉 「土佐光起筆「王昭君図」(ボストン美術館蔵)について」 『若手研究者学会発表補助 要旨 報告集』 pp.1-6, 査読無, 2020/3/30

池田泉 「Tosa Mitsuoki’s Paintings of Birds and Flowers/土佐光起の花鳥画」 『大阪大学・ハーバード大学 院生交流会—日本文化をめぐる対話— 報告書』 第号, pp.1-26, 査読無, 2020/3/30

佐藤優 「金光明最勝王経金宇塔曼荼羅図中における風神雷神の機能について— 本図制作年代にも触れて」 『第2回若手研究者フォーラム要旨集』 pp.58-61, 査読有, 2020/3/23

〔博士後期〕

谷岡彩 「On the Study of Chinese Painting by Nanga Artists in Osaka during the Latter Part of the Taishō Period - With a Focus on Yano Kyōson -/大正後期における大阪の南画家の中国絵画学習について— 矢野橋村を中心に—」 『大阪大学・ハーバード大学 院生交流会—日本文化をめぐる対話— 報告書』 pp.103-131, 査読無, 2020/3/30

波瀬山祥子 「曾我蕭白と『存心』」 『フィロカリア』第37号, pp.57-74, 査読有, 2020/3/27

波瀬山祥子 「「本草稿本」 解題」 『木村兼葭堂全集第二巻 本草・博物学 (辰馬考古資料館所蔵)』 pp.237-237, 査読無, 2019/12/24

袴田舞 「木村兼葭堂『奇貝圖譜』の成立背景—紀州の人々との関わりを中心に—」 『木村兼葭堂全集第二巻 本草・博物学 (辰馬考古資料館所蔵)』 pp.304-327, 査読無, 2019/12/24

藤本真名美 「和歌山市寂光院緊急調査の展開」 『和歌山地方史研究』第78号, pp.24-32, 査読無, 2019/12/21

(2)口頭発表

【2018年度】

〔博士前期〕

竹花藍子「フランス・ピカビアの「透明の時代」—イメージの源泉について—」, 美術史学会西支部例会, 大阪大学豊中キャンパス文法経済学部本館 2階大会議室, 2018/11/17

〔博士後期〕

鵜尾 佳奈「ミニマル・アートにおけるコレクターの役割——ロバート・モリスとジュゼッペ・パンザを中心に——」, 美学会全国大会, 関西大学, 2018/10/7

尾崎登志子「晩年のクリムト肖像画にみる〈中国〉へのまなざし」, 第3回大阪大学豊中地区研究交流会, 大阪大学 理学研究科 南部陽一郎ホール, 2018/12/18

菊川亜騎「古都と彫刻:京都美工彫刻科の変遷から」, レクチャー「遷る学舎—御苑・吉田・今熊野・沓掛」, 京都市学校歴史博物館, 2018/11/18

竹中哲也「中村貞夫とその周辺 一展覧会と絵画の秘密—」, ミュージアムレクチャー, 第11回特別展『四大文明の源流を求めて 探求の旅、描きとめる熱情 洋画家 中村貞夫』, 大阪大学総合学術博物館, 2018/6/16

関大輔「西欧における惑星イメージの形成と変容—古代からルネサンスまで」, 第3回豊中地区研究交流会, 大阪大学, 2018/12/18

乾健一「デモクラート美術家協会時代の泉茂について—フェルナン・レジェの影響を中心に—」, 第71回美術史学会全国大会, 東北大学, 2018/5/20

中澤菜見子「高田敬輔の仏画—「天下和順図」を中心に—」, 第71回美術史学会全国大会, 東北大学, 2018/5/18

【2019年度】

〔博士前期〕

池田泉 “Tosa Mitsuoki's Paintings of Birds and Flowers”, 大阪大学・ハーバード大学大学院生交流会—日本文化をめぐる対話—, Harvard University Sackler Building, 2020/2/28

国井星太「浦上玉堂における朝鮮絵画学習に関する一試論」, 総合学術博物研究発表会, 大阪大学待兼山修学館, 2019/12/11

佐藤優「金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図中における風神雷神の機能について—本図制作年代にも触れて—」, 第2回大阪大学大学院文学研究科 若手研究者フォーラム, 文法経済学部本館大会議室, 2020/3/23 (コロナ対応により開催延期)

安積柊二「「芸術家の家」としてのヴィッラ・シュトゥック考察—アトリエ、サロン室に着目して—」, 第1回 若手研究者フォーラム, 大阪大学, 2019/9/17

安積柊二「フランツ・フォン・シュトゥックの作品における同時代の楽壇からの影響 —ベートーヴェン・ワーグナー受容を手掛かりに—」, 待兼山芸術学会, 大阪大学, 2020/03/28(コロナ対応により学会延期)

〔博士後期〕

王珏人「石山寺兜跋毘沙門天像について」, 美術史学会西支部例会, 大阪市立大学学術情報総合センター1F 文化交流室, 2019/11/16

谷岡彩「第1回主潮社展出品作《降魔圖》にみる矢野橋村の革新—色彩と写実の研究をめぐる—」, 美術史学会西支部例会, 九州大学 伊都キャンパス 日本ジョナサン・KS・チョイ文化館, 2020/1/25

谷岡彩 “On the Study of Chinese Painting by Nanga Artists in Osaka during the Latter Part of the Taishō Period – With a Focus on Yano Kyōson –”, 大阪大学・ハーバード大学大学院生交流会—日本文化をめぐる対話—, Harvard University Sackler Building, 2020/2/28

波瀬山祥子「江戸時代の富士山と絵画」, ときたび展スライドトーク, 嵯峨嵐山文華館, 2019/6/29

藤本真名美「版画家としての前川千帆 その画業と作品について」, 第28回版画史研究会, 東京古書会館, 2019/12/21

関大輔「サンタ・マリーア・デル・ポーポロ聖堂キーズ家礼拝堂クーポラの解釈について: 惑星、天使、光の作用に注目して」, 第72回美術史学会全国大会, 京都工芸繊維大学, 2019/5/19

関大輔 “L'Arte, l'Astrologia e la Prisca Theologia: Affreschi della Sala delle Sibille all'Appartamento Borgia in Vaticano di Pintoricchio”, La cultura astrologica e miscale nella corte rinascimentale/ルネサンス宮廷の占星術・音

楽文化, 大阪大学, 2020/02/27 (コロナ対応により延期)

金ウチャン「パリ外国宣教会のアジアにおける活動とキリスト教美術の伝播」, 第4回 大阪大学豊中地区研究交流会, 大阪大学豊中キャンパス 基礎工学国際棟, 2019/12/17

中北優香「シケイロスの壁画作品《ブルジョアジーの肖像》におけるイメージ修正の背景」, スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会, 東京外国語大学 本郷サテライト, 2019/8/3

畑井恵「現代アーティストによる「リサーチ型」作品プロジェクト」, 第35回民族芸術学会大会, 飯田市美術博物館, 2019/4/20

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2018年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:1名 (計1名)

2019年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:1名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2018年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2019年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2018年度～2019年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

竹嶋康平 博士前期課程 泉屋博古館 学芸員 2018/4

波瀬山祥子 博士後期課程 嵯峨嵐山文華館 学芸員 2018/4

中村真菜美 博士後期課程修了 大田区文化財専門員 2019/4

乾健一 博士後期課程 茨木県近代美術館 学芸員 2019/4

菊川亜騎 博士後期課程 神奈川県立美術館 学芸員 2019/4

中村真菜美 博士後期課程修了 石川県立歴史博物館 学芸員 2020/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2018年度～2019年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2名

2018年度:1名 2019年度:1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2名

2018年度:0名 2019年度:2名

9. 刊行物

2018年度 『フィロカリア』第36号

2019年度 『フィロカリア』第37号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

美術史学会西支部 事務局

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 園府寺司 教授

1957年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren(文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。2004年にワルシャワ・ユダヤ歴史博物館研究員。専攻：西洋美術史／アート・メディア論

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

園府寺司 『ファン・ゴッホ 日本の夢に懸けた画家』KADOKAWA, 220p., 2019/9/25

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

園府寺司 「ファン・ゴッホのユートピアとしての〈日本〉と〈南仏〉」国際シンポジウム『ポスト印象派におけるユートピアの表象ーセザンヌ、ゴッホ、ゴーギャン』, 京都工芸繊維大学・日仏美術学会, 京都工芸繊維大学, 2019/6/24

園府寺司 「企画ならびにキーノートスピーチ「芸術資産をいかに未来に継承発展させるかーコレクター文化育成のための法律・制度設計の具体的提言ー」文化庁主催シンポジウム 芸術資産をいかに未来に継承発展させるかーコレクター文化育成のための法律・制度設計の具体的提言ー:文化庁主催シンポジウム芸術資産をいかに未来に継承発展させるかーコレクター文化育成のための法律・制度設計の具体的提言ー, 文化庁, 国立新美術館, 2019/3

園府寺司 「ファン・ゴッホ美術館の変貌」シンポジウム「美術館をかえようーその役割と展開」:シンポジウム「美術館をかえようーその役割と展開」, 国立新美術館, 国立新美術館, 2018/11

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

園府寺司 大阪大学総長顕彰 2015 研究部門, 大阪大学, 2015/7

園府寺司 大阪大学共通教育賞(2009年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2009/11

園府寺司 Praemium Erasmunianum(エラスムス研究賞), Stichting Erasmusprijs エラスムス財団, 1989/2

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2014年度～2018年度、基盤研究(A) 一般、代表者:園府寺司

課題番号:26244009

研究題目:西洋近世・近代美術における市場、流通、画商の地政経済史的研究

研究経費:2018年度 直接経費 6,600,000円 間接経費 1,980,000円

研究の目的:

西洋の近世・近代美術を対象に、美術市場における流通メカニズムと画商の国際的活動の全体像を、経済史の方法や成果を取り入れつつ明らかにする。具体的には、一般市場とは異なる美術市場の特質、美術作品の市場価値決定のメカニズム、市場において画商や批評家、美術史家らが果たしてきた役割などを、歴史的史料と豊富なデータに基づいて解明する。さらに、経済活動と資本主義の発達とともに急速に国際化した美術市場を「世界システム」として理解するため、各研究分野での調査・研究成果を共同研究のなかで擦り合わせつつ分析し、経済史家との議論を通じて「美術の地政経済史」Geo-Economics of Artの研究基盤と方法を構築したい。

1-6-2. 2019年度～2022年度、基盤研究(A) 一般、代表者:園府寺司

課題番号:19H00519

研究題目:美術市場とその国際化に関する制度論的、交流史的研究。西洋から日本・アジアへの展開

研究経費:2019年度 直接経費 7,200,000円 間接経費 2,160,000円

研究の目的:

西洋近世から現代、ならびに日本、東アジア、東南アジアの近現代を対象に、美術市場の生成と発達、国際化に関する調査・研究を行う。本研究の助走的研究に当たる「西洋近世・近代美術における市場・流通・画商の地政経済史的研究」においては、研究が最も進んでいる西洋近世・近代の特定地域・時代を対象に美術市場研究を進め、この種の研究が著しく遅れている日本でその研究史や方法を吸収しつつ本格的な研究への道筋をつけることを目標とした。この目標をある程度達成した上で、その成果を速やかに引き継ぎ、本研究では研究の視野を以下のように地理的、領域的に拡大して本格的に国際先端研究に参入する。1. 地理的には近代以降の日本ならびにアジアを視野に入れ、西洋圏との美術市場の関わりを調査研究する。2. 美術市場と様々な美術制度との関わりをより重点的に研究する。美術作品の価値付与システムに深く関わる諸制度(美術家組合、美術政策、美術館、批評、美術史学など)と美術市場との関わりについてさらに調査・研究を進める。3. 美術作品の売買だけでなく貸借の市場(展覧会市場)や複製・写真・建築市場など未開拓な研究領域も研究対象に加える。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

内閣府未来投資会議構造改革徹底推進会合・専門委員, 2019年2月～2019年

アート市場活性化事業「日本アート創生委員会」(文化庁・国立新美術館)・副座長, 2018年9月～2020年

独立行政法人 国立美術館・外部評価委員, 2010年4月～現在に至る

独立行政法人国立美術館 外部評価委員会・外部評価委員会・副委員長, 2010年～現在に至る

国際美術史学会 CIHA・国内委員, 2009年4月～現在に至る

2. 橋爪 節也 教授

1958年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。東京芸術大学美術学部附属古美術研究施設助手、大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室主任学芸員。専攻:日本美術史/近世近代絵画史

2-1. 論文

橋爪節也 『『白い巨塔』と戦後復興から高度成長期の大阪の都市イメージ』『大阪商業大学商業史博物館紀要』17, 大阪商業大学商業史博物館, 2020/3

橋爪節也 「平林静斎『吟餘清興』一卷(大阪大学総合学術博物館所蔵)」橋爪節也『美術フォーラム 21』40, 醍醐書房, pp. 4-9,

2019/11

橋爪節也「大大阪と画家たち 第四回 前田藤四郎と「昭和エビナール」の版画世界」関西・大阪 21 世紀協会、上方文化芸能運営委員会『やそしま』13, 関西・大阪 21 世紀協会、上方文化芸能運営委員会, pp. 76-129, 2019/11

橋爪節也, 仲野徹「大大阪って何だ?」『仲野教授の そろそろ大阪の話をしよう』ちいさいミシマ社, pp. 273-297, 2019/7

橋爪節也「水の回廊から空堀街あるきへー地域文化の発信・顕彰とメディアリテラシー」永田靖・山崎達哉『記憶の劇場 大阪大学総合学術博物館の試み』26, 大阪大学出版会, pp. 15-51, 2019/3

橋爪節也「新しいミュゼオロジーの開拓ー大学博物館は地域の“記憶”を揺さぶる」永田靖, 佐伯康考『大阪大学社会学共創叢書 1 街に拓く大学』大阪大学出版会, pp. 115-163, 2019/3

橋爪節也「小出檜重と「下手もの漫談」」『やそしま』12, 関西・大阪 21 世紀協会、上方文化芸能運営委員会, pp. 82-144, 2018/12

橋爪節也「自校史は大学博物館のミッションか?」『大学時報』382, 日本私立大学連盟, pp. 62-67, 2018/9

橋爪節也「“大大阪”と美術館ー理想の文化都市建設を目指した時代ー」『融 融合時代の都市政策提言誌』26, 一般財団法人大阪地域振興調査会, pp. 16-18, 2018/7

橋爪節也「GREATER と GREAT のはざまでー「大大阪」再発見と言葉の問題 ー」『大大阪モダニズムー片岡安の仕事と都市の文化』学校法人常翔学園常翔歴史館／大阪市立住まいのミュージアム, pp. 72-74, 2018/7

橋爪節也「“大大阪モダニズム”の復権ー「阪神間モダニズム」と私鉄沿線モダニズムの再検証」橋爪節也『美術フォーラム 21』37, 醍醐書房, 2018/5

2-2. 著書

橋爪節也『橋爪節也の大阪百景』2, 藝華書房, 302p., 2020/2

橋爪節也, 曾田めぐみ, 中村真菜美(共著)『はたらく浮世絵 大日本物産図会』青幻舎, 256p., 2019/12

橋爪節也, 水田紀久他(監修)『木村兼葭堂全集』2, 藝華書房, 359p., pp. 88-130, 2019/12

橋爪節也他(監修)『大阪市の昭和』樹林舎, 2018/9

橋爪節也, 竹中哲也(共編著)『精神と光彩の画家 中村貞夫 揺籃期から世界四大文明を超えて』大阪大学出版会, 2018/5

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

橋爪節也「「絵を飾る人のキモチ」第 23 回「創業 100 年、河内洋画材料店の“カワチーガタ”は、魔法の正方形」住ムフムラボ『いきかたのカタチ 住ムフムラボ』住ムフムラボ, 2020/3

橋爪節也(10 回連載記事)「美の十選 なにわの街角(1)「大阪案内」2020/2/3、なにわの街角(2)島成園「祭りの装い」2020/2/4、なにわの街角(3)堂本印象「いの字絵本 恋の都大阪の巻」2020/2/5、なにわの街角(4)岡本一平「大大阪君の似顔の図」2020/2/6、なにわの街角(5)小出檜重「街景」2020/2/7、なにわの街角(6)「梅田一大丸地下鉄開通記念のペーパークラフト」2020/2/11、なにわの街角(7)木谷千種「浄瑠璃舟」2020/2/12、なにわの街角(8)島野三秋「漆螺鈿装飾扉」2020/2/13、なにわの街角(9)北野恒富「いとさんこいさん」2020/2/17、なにわの街角(10)前田藤四郎「香里風景」2020/2/1」日本経済新聞『日本経済新聞』日本経済新聞, 2020/2

成瀬國晴, 橋爪節也, 古川武志「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く 31」『大阪春秋』177, 新風書房, 2020/2

橋爪節也「「絵を飾る人のキモチ」第 22 回「空飛ぶ船と山水画ー絵には入り口がある」」住ムフムラボ『いきかたのカタチ 住ムフムラボ』住ムフムラボ, 2019/12

成瀬國晴, 橋爪節也, 古川武志「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く 30 おおさかの風景ー「いま」を描くー」『大阪春秋』176, 新風書房, pp. 103-105, 2019/11

橋爪節也「「大阪大学書評対決 ブックコレクション 教員 VS 学生団体」巻頭言(横光利一『時計』と寺山修司『書を捨てよ、町へ出よう』)大阪大学生協同組合『大阪大学書評対決 ブックコレクション 教員 VS 学生団体』大阪大学生協同組合, pp. 2-3, 2019/10

橋爪節也(41522)「もっと関西 大阪万博に感銘 美術の道 大阪大学教授 橋爪節也さん(私のかんさい) 再誘致は芸術振興

- 目線で」日本経済新聞『日本経済新聞』日本経済新聞, 2019/9
- 橋爪節也「「絵を飾る人のキモチ」第 21 回「モダニズム心齋橋ふたたび“大大阪時代”へのタイムマシーン・大丸心齋橋店」住ムフムラボ『いしかたのカタチ 住ムフムラボ』住ムフムラボ, 2019/9
- 橋爪節也「橋爪節也「おおさか KEY わーど」第 105「水都の祭りにアジアを思う」大阪市生涯学習センター『いちよう並木』437, 大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2019/9
- 成瀬國晴, 橋爪節也, 古川武志「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く 29」『大阪春秋』175, 新風書房, 2019/8
- 橋爪節也「「おおさか KEY わーど」第 104「雲の峰は大阪焼ける煙かな 子どもたちの笑顔が秘めたもの」大阪市生涯学習センター『いちよう並木』436, 大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2019/8
- 橋爪節也「大阪春秋」第 178 号 四條畷ーサンタクロースと出会うまちー「大阪心齋橋専門商店案内」付記」リイド社『大阪春秋』新風書房, pp. 104-104, 2019/7
- 橋爪節也「「おおさか KEY わーど」第 103 回「浪花百景の謎がわかった 揃いのゆかたの模様の意味は？」大阪市生涯学習センター『いちよう並木』435, 大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2019/7
- 橋爪節也(仲野徹特別編集「それだけじゃない大阪!」)「あの日・あの味 200「グローバルな関東煮」 東海教育研究所『望星』2019 年 7 月号, 東海教育研究所, 2019/6
- 橋爪節也「絵を飾る人のキモチ 第 20 回『白い巨塔』における絵の飾り方 ～教授のお宅拝見」住ムフムラボ『いしかたのカタチ 住ムフムラボ』住ムフムラボ, 2019/6
- 橋爪節也「「おおさか KEY わーど」第 102 回「青春の道頓堀 若き芸術家たちのカフェーでの出会い」大阪市生涯学習センター『いちよう並木』434, 大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2019/6
- 成瀬國晴, 橋爪節也, 古川武志「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く 28 ジャケットを描く CD・レコード・テープ」『大阪春秋』174, 新風書房, pp. 91-93, 2019/5
- 橋爪節也「「おおさか KEY わーど」第 101 回あなたもフェルメールになれます「モリメール」森村泰晶の美術館」大阪市生涯学習センター『いちよう並木』433, 大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2019/5
- 橋爪節也「大阪春秋」第 176 号ーお父さんはお人好しー長沖一の作品世界ー「大阪心齋橋専門商店案内」解説」『大阪春秋』176, 新風書房, pp. 87-88, 2019/4
- 橋爪節也「「おおさか KEY わーど」第 100 回連載も 100 回となりました」大阪市生涯学習センター『いちよう並木』432, 大阪市教育委員会, 2019/4
- 橋爪節也「「おおさか KEY わーど」第 94 回「鳥のまなざしで下界を眺める パノラマ地図のたのしみ」大阪市生涯学習センター『いちよう並木』大阪市教育委員会, pp. 18-9, 20/
- 橋爪節也「「おおさか KEY わーど」第 95 回「フィランソロピーをご存知ですか それは大阪人の伝統」大阪市生涯学習センター『いちよう並木』大阪市教育委員会, pp. 18-10, 20/
- 橋爪節也「「おおさか KEY わーど」第 96 回「開館 100 周年記念に、中央公会堂八景を勝手につくってみた」大阪市生涯学習センター『いちよう並木』大阪市教育委員会, pp. 18-11, 20/
- 橋爪節也「「おおさか KEY わーど」第 97 回「メモリアルイヤーオンパレード「キンカ」近畿化学協会も 100 周年」大阪市生涯学習センター『いちよう並木』大阪市教育委員会, pp. 18-12, 20/
- 橋爪節也「「おおさか KEY わーど」第 98 回「冬は関東煮 グローバルな大阪を知る？」大阪市生涯学習センター『いちよう並木』大阪市教育委員会, pp. 19-2, 20/
- 橋爪節也「「おおさか KEY わーど」第 99 回「もうひとつの“大大阪” なにわの情緒を書き残したい」大阪市生涯学習センター『いちよう並木』大阪市教育委員会, pp. 19-3, 20/

2-4. 口頭発表

- 橋爪節也 (招待講演)「“大大阪モダニズム”とアートー大大阪時代を読み直すことで未来を展望する」銭屋塾 おおさか講座, 銭屋塾 おおさか講座, 銭屋ホール, 2019/12
- 橋爪節也「大大阪って何？」中村耄太郎のうえほんまち夜カフェ～知的おおさか塾～: 中村耄太郎のうえほんまち夜カフェ～知

的おおさか塾～, MBS 毎日放送ラジオ, 2019/11

橋爪節也「大大阪時代の文化」中村耆太郎のうえほんまち夜カフェ～知的おおさか塾～:中村耆太郎のうえほんまち夜カフェ～知的おおさか塾～, MBS 毎日放送ラジオ, 2019/11

橋爪節也「橋爪節也さんについて、“大大阪観光”とは？」中村耆太郎のうえほんまち夜カフェ～知的おおさか塾～:中村耆太郎のうえほんまち夜カフェ～知的おおさか塾～, MBS 毎日放送ラジオ, 2019/11

橋爪節也「大大阪の終焉と大阪の未来」中村耆太郎のうえほんまち夜カフェ～知的おおさか塾～:中村耆太郎のうえほんまち夜カフェ～知的おおさか塾～, MBS 毎日放送ラジオ, 2019/11

橋爪節也, 近江晴子, 横川公子 (パネリスト)「船場の画家と大阪の美意識」シンポジウム 大大阪モダニズム再考:大大阪モダニズム再考 塩野家コレクションと船場の美意識, 大阪大学総合学術博物館 武庫川女子大学附属ミュージアム設置準備室, 大阪大学会館アセンブリーホール, 2019/10

橋爪節也 (招待講演)「こたつ会議 未来の OMOSIRO を考える みんなの 2025 年大阪・関西万博」こたつ会議 未来の OMOSIRO を考える みんなの 2025 年大阪・関西万博:こたつ会議 未来の OMOSIRO を考える みんなの 2025 年大阪・関西万博, 一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社 KMO 【後援】一般社団法人2025年日本国際博覧会協会, グランフロント大阪 北館 ナレッジプラザ, 2019/9

橋爪節也他 (パネリスト)「公開シンポジウム・パネリスト「博学連携事業の展望と課題—多様な所蔵資料とその可能性—」(平成 31 年度 文化庁 地域と共働した博物館創造活動支援事業「ようこそ大学ミュージアムへ —つなぐ・つなげる・つながる—)」会場 大阪歴史博物館講堂「博学連携事業の展望と課題—多様な所蔵資料とその可能性—:平成 31 年度 文化庁 地域と共働した博物館創造活動支援事業「ようこそ大学ミュージアムへ —つなぐ・つなげる・つながる—」, かんさい・大学ミュージアム連携実行委員会 【共催】大阪商業大学、大阪歴史博物館, 大阪歴史博物館講堂, 2019/9

橋爪節也 (招待講演)「木村兼葎堂の世界」いちよう大学同窓会 :木村兼葎堂の世界, いちよう大学同窓会, 大阪市立生涯学習センター, 2019/8

橋爪節也, 難波知子, 横川公子他 (パネリスト)「美人画ときもの／絵をどう読み解くか、北野恒富の場合」2019 年秋季展覧会「ハレの日のきもの—近代の裾文様—:2019 年秋季展覧会「ハレの日のきもの—近代の裾文様—」, 武庫川女子大学附属ミュージアム設置準備室 大阪大学総合学術博物館, 武庫川女子大学 学術研究交流館, 2019/8(『シンポジウム「きもの意匠の近代化」報告書』pp. 26-30, 2020/2)

橋爪節也 (招待講演)「北野恒富の芸術と筆塚」北野恒富筆塚建立 60 周年記念事業:北野恒富筆塚建立 60 周年記念事業, 高津宮, 高津宮, 2019/6

橋爪節也 (招待講演)「EXPO70 と大阪のアート」はびきの市民大学:はびきの市民大学 万博と大阪・関西, はびきの市民大学, 羽曳野市立生活文化情報センター (LICはびきの), 2019/6

橋爪節也「大阪大学総合学術博物館の鉱物標本とその活用」第 14 回日本博物科学会発表:第 14 回日本博物科学会, 日本博物科学会, 秋田大学, 2019/6

橋爪節也 (招待講演)「ワールド・アート・デーと大阪ミナミの芸術家たち—小出檜重、北野恒富から、森村泰昌まで」ワールド・アート・デー記念講演:ワールド・アート・デー記念講演, 日本美術家連盟近畿地区, 大大阪芸術劇場, 2019/4

橋爪節也「雑誌『道頓堀』(道頓堀雑誌社)にみる大正時代の道頓堀」国際日本文化研究センター 「近代東アジアの風俗史」研究代表者 井上章一・斎藤光:「近代東アジアの風俗史」, 「近代東アジアの風俗史」研究代表者 井上章一・斎藤光, 国際日本文化研究センター, 2019/3

橋爪節也 (招待講演)「趣味人と大大阪」企画展「モダン都市大阪の記憶」関連企画, 大阪市立住まいのミュージアム, 大阪市住まい情報センター 3 階ホール, 大阪くらしの今昔館, 2019/3

橋爪節也 (招待講演)「座談会「サロン・ド・中之島 2019 橋爪節也氏が語る大阪市中央公会堂にまつわるアートな話」」大阪市中央公会堂開館 100 周年記念:大阪市中央公会堂開館 100 周年記念, 大阪市中央公会堂, 大阪市中央公会堂, 2019/3

橋爪節也 (パネリスト)「大大阪の時代と前衛絵画—前田藤四郎の場合」シンポジウム〈具体〉再考 第 3 回 大阪と前衛美術:〈具体〉再考 大阪と前衛美術, 大阪大学総合学術博物館, 大阪大学中之島センター, 2019/1

橋爪節也 (パネリスト)「20 世紀少年」としての私—大阪と博覧会—北大阪ミュージアム・ネットワーク シンポジウム 大阪で EXPO

を考える:大阪で EXPO を考える, 北大阪ミュージアム・ネットワーク, 関西大学梅田キャンパス「KANDAI MeRISE ホール」, 2019/1

橋爪節也, 寺口淳治, 守谷賢一 (パネリスト)「佐伯祐三の絶筆の問題」佐伯祐三と近代の洋画記念シンポジウム「佐伯祐三作品の魅力」:佐伯祐三と近代の洋画記念シンポジウム「佐伯祐三作品の魅力」, 田辺市立美術館, 田辺市立美術館, 2019/1

橋爪節也, 茂木健一郎 (招待講演)「大阪の“知”の個性を求めて—木村兼葎堂とそのネットワーク—」近畿化学協会委創立 100 周年記念式典 市民公開記念講演会, 近畿化学協会, 大阪市中央公会堂, 2019/1

橋爪節也 (招待講演)「なにわの戯画をコレクションしてみると」BB プラザ美術館「2018 年度コレクション展 II 明治から平成にみるコレクションのかたち」, BB プラザ美術館, BB プラザ美術館, 2019/1

橋爪節也 (招待講演)「大阪の「茶話会」と大正期の日本画壇 —国画創作協会と連動したか—」特別展・創立 100 周年記念「国画創作協会の全貌展」 記念講演会:特別展・創立 100 周年記念「国画創作協会の全貌展」, 和歌山県立近代美術館, 和歌山県立近代美術館, 2018/12

橋爪節也 (招待講演)「花開く百貨店文化—大大阪時代のデパートと美術発信—」逸翁美術館 2018 展示Ⅲ 百貨店で花開く—阪急工美と近代の美術家たち—関連企画, 逸翁美術館, 逸翁美術館, 2018/11

橋爪節也, 藤田富美恵, 古川武志 (パネリスト)「KARAHORIZM 空堀主義—なぜパリ祭と“俄(にわか)”? /蓄音機で町家ザンマイ—」KARAHORIZM 空堀主義—なぜパリ祭と“俄(にわか)”? /蓄音機で町家ザンマイ:なぜ、パリ祭と“俄”?, 記憶の劇場, 大大阪藝術劇場, 2018/9

橋爪節也 (招待講演)「映画『大大阪観光』を読み解く〜都市観光・モダニズム・政策プロモーション〜」大阪市中央公会堂開館 100 周年記念特別展「大大阪モダニズム-片岡安の仕事と都市の文化-」, 大阪市立住まいのミュージアム, 大阪市住まい情報センター 3 階ホール, 大阪くらしの今昔館, 2018/8

橋爪節也 (パネリスト)「大正イマジユリ学会第 43 回研究会・公開シンポジウム「ヴィジュアルから切る“大大阪” アート、博覧会、マスメディア」」大正イマジユリ学会第 43 回研究会・公開シンポジウム「ヴィジュアルから切る“大大阪” アート、博覧会、マスメディア」:「ヴィジュアルから切る“大大阪” アート、博覧会、マスメディア」, 大正イマジユリ学会・大阪市立住まいのミュージアム, 大阪市住まい情報センター 3 階ホール, 大阪くらしの今昔館, 2018/7

橋爪節也, 中村 貞夫, 鷺田 清一 (基調講演)「中村貞夫の芸術」記念講演会」並びに座談会「探求の旅、描きとめる熱情—洋画家 中村貞夫」:記念講演会」並びに座談会「探求の旅、描きとめる熱情—洋画家 中村貞夫」, 主催:大阪大学社会学共創本部/総合学術博物館、豊中市、豊中市市民ホール指定管理者、毎日新聞社 共催:かんさい・大学ミュージアム連携、北大阪ミュージアム・ネットワーク 協力:畑田家住宅活用保存会、大阪大学 21 世紀懐徳堂、豊中市立文化芸術センター, 2018/5

橋爪節也, 肥塚隆, 江口太郎他 (パネリスト)「歴代博物館長、画伯に迫る—“世界四大文明”に寄せて」スペシャルトーク「歴代博物館長、画伯に迫る—“世界四大文明”に寄せて」, 主催:大阪大学社会学共創本部/総合学術博物館、豊中市、豊中市市民ホール指定管理者、毎日新聞社 共催:かんさい・大学ミュージアム連携、北大阪ミュージアム・ネットワーク 協力:畑田家住宅活用保存会、大阪大学 21 世紀懐徳堂、大阪大学会館アセンブリーホール, 2018/5

橋爪節也, 佃一輝 (招待講演)「美術を愛する実業家の見た夢—山本發次郎と慈雲、白隠、佐伯祐三—」講演・対談 MOU-ICHIDO 大阪文化, CAFE Lab. / グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル, 2018/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

橋爪節也 2018 年 関西元気文化圏賞 ニューパワー賞, 関西元気文化圏推進協議会, 2019/1

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2017 年度~2019 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:橋爪節也

課題番号:17H02293

研究題目:木村兼葎堂“知”のネットワークの解析—絵画・本草学資料から探る歴史文化の再構成

研究経費:2018 年度 直接経費 3,600,000 円 間接経費 1,080,000 円

2019 年度 直接経費 6,100,000 円 間接経費 1,830,000 円

研究の目的:

江戸時代、大坂で活躍した町人学者であり、文人画、本草博物学、貴重図書、書画、金石、標本、地図などの大蒐集家として知られた木村兼葭堂を、特に絵画と本草学の面ならびに国内のみならず海外にも及んだネットワークに注目して、文理融合の立場から解明を試みるものである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

堺市美術作品等資料収集会議・委員, 2019年3月～2019年3月

美術史学会・常任委員, 2018年5月～現在に至る

財団法人・天門美術館評議委員会・評議委員, 2017年4月～現在に至る

田辺市立美術館協議会・協議会委員, 2017年月～現在に至る

吹田市立博物館協議会・協議会委員, 2016年月～現在に至る

NPO 大阪美術市民会議・理事, 2015年月～現在に至る

八尾市 今東光資料館・企画展示アドバイザー, 2014年4月～現在に至る

大阪市中央公会堂・文化財保護アドバイザー, 2014年4月～現在に至る

大阪市市民表彰審査会・臨時委員, 2012年4月～現在に至る

大正イマジュリ学会・常任委員, 2012年3月～現在に至る

3. 藤岡 穰 教授

1962年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。大阪市立美術館学芸員、大阪大学大学院文学研究科助教授、同准教授を経て、2009年4月より現職。1991年に第3回国華賞、2014年に大阪大学総長顕彰受賞。専攻：東洋美術史

3-1. 論文

藤岡穰, 吉川真司, 菱田哲郎他「古代寺院の仏像」『シリーズ古代史をひらく 古代寺院』岩波書店, pp. 135-194, 2019/12

藤岡穰, 古田亮(共著)「縄文・弥生から奈良の美術」『教養の日本美術史』ミネルヴァ書房, pp. 13-41, 2019/11

藤岡穰, 寺島典人「園城寺金銅仏の基礎的研究—蛍光X線分析を踏まえて—」『園城寺の仏像』4, 思文閣出版, pp. 176-177, 2019/11

藤岡穰, 菱田哲郎, 吉川真司他(共著)「東大寺法華堂伝来の天平期諸像に関する一考察」『古代寺院史の研究』思文閣出版, pp. 217-238, 2019/7

藤岡穰「初唐期における長安造像の復元的考察」『アジア仏教美術論集東アジアⅡ(隋唐)』pp. 65-105, 2019/3

3-2. 著書

藤岡穰(共著)『もっと知りたい薬師寺の歴史』東京美術, pp. 12-23, pp. 28-31, pp. 36-55, 2020/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤岡穰, [表紙解説]法隆寺金堂壁画 六号壁 阿弥陀三尊』『仏教芸術』1, 表紙裏, 2018/10

3-4. 口頭発表

藤岡穰「美術史と AI—仏像の顔の様式分析をめざして—」日本学術会議公開シンポジウム「科学的知見の創出に資する可視化(3):新しい文理融合研究を創出する可視化」, 日本学術会議総合工学委員会科学的知見の創出に資する可視化分科会, 立命館大学・いばらきフューチャープラザ B棟1階カンファレンスホール, 2019/12

藤岡穰 「技法・金属組成・様式からみた薬師寺像と興福寺(旧山田寺)像」平城薬師寺をめぐるシンポジウム―「伽藍を移す」ことの意味を考える―, 仏教芸術学会, 奈良国立博物館, 2019/11

藤岡穰 「平城京東山の古代仏教彫刻」国際シンポジウム「金城の南山と平城京の東山―王都周辺の山林寺院の日韓比較―」, 基盤研究(A) 古代「仏都圏」の社会と文化に関する地域史的・比較史的研究、国立慶州博物館, 国立慶州博物館, 2019/8

藤岡穰 「大仏様の履歴書」飛鳥寺花会式講演会, 飛鳥寺, 飛鳥寺, 2019/4

藤岡穰 「村山コレクションの仏像彫刻―中国・朝鮮・日本―」中之島香雪美術館開館記念連続講演会, 中之島香雪美術館, 中之島会館, 2018/11

藤岡穰 「金銅仏の新研究―蛍光X線分析の成果―」泉屋博古館特別展「仏教美術の名宝」講演会, 泉屋博古館, 泉屋博古館講堂, 2018/10

藤岡穰 「日本における三国時代金銅仏の新発見」the Academia Koreana International Conference, Reconsidering Korean Art: Identity and Aesthetics, 啓明大学, 啓明大学, 2018/10

藤岡穰 「金銅のみほとけ」第47回奈良国立博物館夏季講座「素材から探る仏像のひみつ」, 奈良国立博物館, 奈良県文化会館国際ホール, 2018/8

藤岡穰 「中金堂四天王像と運慶」興福寺佛教文化講座, 興福寺, 興福寺会館, 2018/7

藤岡穰 「光蓮寺のみほとけと宝物」八尾市光蓮寺仏教文化講座, 光蓮寺, 光蓮寺本堂, 2018/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤岡穰 大阪大学総長顕彰 研究部門, 大阪大学総長顕彰 研究部門, 2014/7

藤岡穰 第3回国華賞, 国華社, 1991/10

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2018年度～2019年度、基盤研究(A) 一般、代表者:藤岡穰

課題番号:18H03571

研究題目:3次元データに基づく人工知能による仏顔の様式研究

研究経費:2018年度 直接経費 6,700,000円 間接経費 2,010,000円

2019年度 直接経費 7,700,000円 間接経費 2,310,000円

研究の目的:

アジア全域に伝播した仏教の所産である仏像の顔(仏顔)について、3次元データに基づきながら、人工知能(AI)によって様式を分析し、ひいては美術史学における様式研究の新たな可能性を探るものである。従来、様式研究は視覚経験に基づき、地域、時代、作者等による特徴的、類型的表現を抽出し、あるいは判断することによって行われてきた。しかし、本研究においては3Dデータにより仏顔の形状を解析し、AIによりそれを統計的に分析することによって、客観的な様式研究の方法の確立をめざす。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

仏教芸術学会・会長, 2019年1月～現在に至る

美術史学会・西支部事務局長, 2018年6月～2020年5月

枚方市文化財保護審議会・委員, 2018年4月～現在に至る

茨木市文化財審議会・文化財審議委員, 2017年3月～現在に至る

摂津市史・執筆委員, 2015年4月～現在に至る

神戸市立博物館外部評価委員会・外部評価委員, 2012年9月～現在に至る

和歌山県文化財保護審議会・委員, 2012年4月～現在に至る

八尾市史編集委員会・編集委員, 2011年4月～現在に至る
八尾市文化財保護審議会・委員, 2009年9月～現在に至る
藤井寺市文化財審議会・審議員, 2008年9月～現在に至る
奈良国立博物館・調査員, 2006年4月～現在に至る

4. 岡田 裕成 教授

1963年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。大阪大学文学部助手、福井大学教育地域科学部准教授、大阪大学文学研究科准教授を経て現職。専攻：西洋美術史

4-1. 論文

岡田裕成 「香雪美術館蔵《レパント戦闘図屏風》:主題同定と制作環境の再検討」『香雪美術館研究紀要』2, 香雪美術館蔵, pp. 27-44, 2020/3

岡田裕成 「適応/消費/収奪 征服後メキシコにおける宣教と先住民共同体の美術」『宣教と適応 グローバル・ミッションの近世』名古屋大学出版会, pp. 286-318, 2020/2

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

岡田裕成 「香雪美術館蔵《レパント戦闘図屏風》:主題同定と制作環境の再検討」美術史学会西支部例会, 美術史学会, 京都ノートルダム女子大学, 2020/3 (コロナ感染症対策により中止)

Okada, Hiroshige, “Imágenes negociadas”: Los “paños” del virrey Toledo y las primeras representaciones del Inca”, Congreso de Arte Virreinal: El Futuro del Arte del Pasado, Thoma Foundation, Centro Cultural Ccori Wasi, Lima, 2019/7

Okada, Hiroshige, “Opening Remarks: Art History at the Crossroads: From Medieval Islamic Spain to the New World”, OPEN ROUNDTABLE: Art History at the Crossroads: From Medieval Islamic Spain to the New World, 科研基盤 B「16世紀イスパニア世界における帝國的な交通空間と(境界的)美術の形成」, 上智大学, 2018/12

Okada, Hiroshige, “Viceroy Toledo Reforms and Location of Art in the Andean Indigenous Communities”, 56th International Congress of Americanists, International Congress of Americanists, Universidad de Salamanca, 2018/7

岡田裕成 「趣旨説明:「帝国スペイン、交通する美術」」公開研究会「帝国スペイン、交通する美術」, 科研基盤 B「16世紀イスパニア世界における帝國的な交通空間と(境界的)美術の形成」, 上智大学, 2018/7

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡田裕成 第12回木村重信民族芸術学会賞, 民族芸術学会, 2015/4

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2017年度～2021年度、基盤研究(B) 一般、代表者:岡田裕成

課題番号:17H02294

研究題目:16世紀イスパニア世界における帝國的な交通空間と「境界的」美術の形成

研究経費:2018年度 直接経費 2,900,000円 間接経費 870,000円

2019年度 直接経費 2,700,000円 間接経費 810,000円

研究の目的:

1492年に達成された国土再征服と、新大陸航路の発見という二つの重大事を象徴的な契機として、ヨーロッパの周縁に位置したスペインは、16世紀を通して広大な帝国を構築する。その帝国は、アイデンティティを異にする様々な人々を統合する文化の交通空間であり、そこでは、多様な図像文化や造形様式、技法・素材が時に起源の差異を超えて組み合わせられ、あるいは、本来とは異なる意味のもとに解釈・転用された。本研究は、スペインを中心とするイスパニア世界に成立した、その「境界的」な美術の諸相を、歴史的な経緯と地理的広がり両面から体系的に明らかにする。

4-6-2. 2019年度～2020年度、挑戦的(開拓・萌芽)研究、代表者:岡田裕成

課題番号:

研究題目:領域横断的な「グローバル・アート学」の構築

研究経費:2019年度 直接経費 2,500,000円 間接経費 750,000円

研究の目的:

本研究は、グローバリズムと文化の相互作用を具体的に解明するとともに、そこに産出される個別的な作品・事象を精密に考証する、領域横断的な「グローバル・アート学」を提唱する。研究チームは、専門領域・フィールドを異にする美術史家2名と音楽学研究者1名の計3名で構成し、芸術作品における「グローバルなもの」と「ローカルなもの」の交渉の過程や、起源を異にする文化的要素の「節合」のメカニズムといった、共通の問題軸に沿って課題に取り組む。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

Mirai. Estudios Japoneses 誌(マドリッド・コンプルテンセ大学)・編集顧問, 2017年2月～現在に至る

美術史学会・常任委員, 2016年6月～現在に至る

Archivo Español de Arte 誌(スペイン学術研究高等院)・編集顧問, 2015年1月～2019年5月

民族芸術学会・理事、副会長, 2007年5月～現在に至る

5. 桑木野 幸司 教授

1975年生。東京大学大学院工学系研究科修士課程修了(西洋建築史)。ピサ大学大学院博士課程修了。Dottore di Ricerca in Storia delle arti visive e dello spettacolo(文学博士(美術史)・ピサ大学)。Kunsthistorisches Institut in Florenz 研究生、2011年4月より大阪大学文学研究科准教授を経て、2020年4月より現職。専攻:西洋美術・建築・庭園史

5-1. 論文

桑木野幸司「ルネサンスのメディア革命と建築創作をめぐる諸テーマ」『建築雑誌3月号』(日本建築学会), 日本建築学会, pp. 8-11, 2020/3

Kuwakino, Koji, "Gardens of Pre-Modern Japan" *Encyclopedia of East Asian Design*, Ava Pub Sa, pp. 259-262, 2019/10

Kuwakino, Koji, "The Great Theatre of Creative Thought. The Inscriptiones vel tituli theatri amplissimi ... (1565) by Samuel von Quicceberg" *La Grande Galleria. Spazio del sapere e rappresentazione del mondo nell'età di Carlo Emanuele I di Savoia*, Carocci editore, pp. 65-100, 2019/9

桑木野幸司「テキストとしての建築、記憶との対話」『Arts and Media』(大阪大学アートメディア論コース), vol.9, pp. 276-279, 2019/7

桑木野幸司「ヴァールブルク他『ムネモシユネ・アトラス』」『ルネサンス・バロックのブックガイド:印刷革命から魔術・錬金術までの知のコスモス』工作舎, pp. 40-41, 2019/1

桑木野幸司「フランセス・A・イエイツ『記憶術』」『ルネサンス・バロックのブックガイド:印刷革命から魔術・錬金術までの知のコスモ

ス』工作舎, pp. 72-73, 2019/1

桑木野幸司 「リナ・ボルツォーニ『記憶の部屋』』『ルネサンス・バロックのブックガイド:印刷革命から魔術・錬金術までの知のコスモス』工作舎, pp. 76-77, 2019/1

桑木野幸司 「伊藤博明『綺想の表象学』』『ルネサンス・バロックのブックガイド:印刷革命から魔術・錬金術までの知のコスモス』工作舎, pp. 88-89, 2019/1

桑木野幸司, 越宏一 「中世庭園の諸相—エデン神苑から風景の発見まで—」『ヨーロッパ中世美術論集5:中世美術の諸相』竹林舎, pp. 219-243, 2018/10

桑木野幸司 「ルネサンス文芸と建築エクフラシスの魅惑:精神イメージとしての宮殿、都市、庭園」『Arts&Media』8, 大阪大学文学研究科アートメディア論研究室, pp. 12-23, 2018/7

5-2. 著書

桑木野幸司 『ルネサンス庭園の精神史:権力と知と美のメディア空間』白水社, 387p., 2019/8

桑木野幸司 『記憶術全史:ムネモシユネの饗宴』講談社, 348p., 2018/12

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

桑木野幸司 「古川萌著『ジョルジョ・ヴァザーリと美術家の顕彰:一六世紀後半フィレンツェにおける記憶のパトロネージ』『総人・人環フォーラム』(京都大学), vol. 38, p. 36, 2020/2

桑木野幸司 「「閉ざされた庭」の悦楽:純潔にして豊饒なる空間」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 冬, p. 7, 2020/1

桑木野幸司 「ヴィッラ・アドリアーナ:記憶のコレクションとしての庭園」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 秋, p. 7, 2019/10

桑木野幸司 「閑暇と公務のはざままで:小プリニウスのヴィッラ庭園」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 夏, p. 7, 2019/7

桑木野幸司 「アン・ブレア『情報爆発』」『化学史研究』(化学史学会), 第46巻-2号, pp. 27-29, 2019/6

桑木野幸司 「黄金宮殿:都心に出現した田園幻想」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 春, p. 7, 2019/4

桑木野幸司 「皇帝の月桂樹:プリマ・ポルタの庭園壁画」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 春, p. 7, 2019/1

桑木野幸司 「ムネモシユネの饗宴への招待」『講談社 PR 誌』(講談社), pp. 44-45, 2019/1

桑木野幸司 「世界史を動かした庭:カエサルとポンペイウスの緑の戦争」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 春, p. 7, 2018/10

桑木野幸司 「キケロの庭:緑陰に生まれたペンの力」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 春, p. 7, 2018/7

桑木野幸司 「カトーが愛したキャベツ:共和政ローマの庭園の変遷」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 春, p. 7, 2018/4

5-4. 口頭発表

桑木野幸司 「多様性(varietas)礼賛:初期近代の視覚芸術における inventio 再考」初期近代の芸術・文芸における varietas と inventio, 桑木野幸司代表科研・基盤B, 青山学院大学, 2020/3(COVID-19のため中止)

桑木野幸司 「思考の庭:知の編集空間としての初期近代イタリア庭園」第41回サントリー文化財団フォーラム, サントリー文化財団, サントリーアネックス9階大会議室, 2020/1

桑木野幸司 「ルネサンス庭園を見る、読む」『ルネサンス庭園の精神史』(白水社)刊行記念, 白水社・ジュンク堂, ジュンク堂池袋本店4階喫茶, 2019/8

桑木野幸司 「パネル6 Ut architectura poesis—建築の文法と修辞学」第14回表象文化論学会大会:パネル6 Ut architectura poesis—建築の文法と修辞学, 表象文化学会, 京都大学, 2019/7

Kuwakino, Koji, "A Geometric Receptacle of Knowledge: Information Management in Padua's Botanical Garden", Gardens: History, Reception, and Scientific Analyses, Nagoya University, Nagoya University, 2019/2

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

桑木野幸司 第41回 サントリー学芸賞, サントリー文化財団, 2019/12

桑木野幸司 大阪大学賞, 大阪大学賞, 2017/11

桑木野幸司 大阪大学総長賞, 大阪大学, 2013/5

桑木野幸司 大阪大学総長奨励賞, 大阪大学, 2012/8

桑木野幸司 地中海学会「ヘレンド賞」, 地中海学会「ヘレンド賞」, 2012/6

桑木野幸司 日本学術振興会賞, 日本学術振興会, 2012/2

桑木野幸司 第五回美術に関する研究奨励賞, 公益財団法人 花王芸術・科学財団, 2011/3

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2016年度～2020年度、基盤研究(B) 一般、代表者:桑木野幸司

課題番号:16H03373

研究題目:創造的思考の基盤としての建築術:初期近代イタリアの美術・文芸における空間の観念

研究経費:2018年度 直接経費 2,500,000円 間接経費 750,000円

2019年度 直接経費 3,000,000円 間接経費 900,000円

研究の目的:

西欧では古来、建築空間を情報整理の際に分類フレームないしは創造的思考の基盤として活用する伝統があった。こうした精神内面の空間構造については、これまで建築史や美術史、思想史などではほとんど明らかにされてこなかった。本研究は、初期近代の記憶術に着目し、精神内に建築的な仮想の情報フレームを組み上げる同術が、同時代の文芸や視覚芸術にいかなる影響を与えていたのかを、領域横断的視点から解明する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

地中海学会・事務局員, 2012年4月～現在に至る

6. 門脇 むつみ 准教授

1970年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了・博士(文学)。日本学術振興会特別研究員(PD)、城西国際大学研究員・助教・准教授を経て、2019年4月より現職。第14回国華奨励賞。専攻:日本美術史/中近世絵画史

6-1. 論文

門脇むつみ 「江月宗玩による表具の記録と制作」『日本の表装と修理』勉誠出版, pp. 101-124, 2020/3

門脇むつみ 「松花堂昭乗筆 十六羅漢図」『國華』1492, 國華社, pp. 31-36, 2020/2

門脇むつみ 「俵屋宗達筆「風神・雷神図屏風」考一雨を司る神々」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 53, 大阪大学文学会, pp. 1-22, 2019/12

門脇むつみ 「継承護持禪之法燈一龍光院の繪畫(翻訳 顔雪雪)」『典藏 古美術』319, 典藏 古美術, pp. 48-53, 2019/4

門脇むつみ 「龍光院の繪畫」『大徳寺龍光院 国宝曜変天目と破草鞋』MIHO MUSEUM, pp. 284-287, 2019/3

6-2. 著書

門脇むつみ他(共著)『公益財団法人 渡辺美術館所蔵品調査報告書(第六回) 中近世繪畫(一)』公益財団法人 渡辺美術館, pp. 26-27, 2020/3

門脇むつみ他(共著)『公益財団法人 渡辺美術館所蔵品調査報告書(第五回) 狩野派・森派 繪畫』公益財団法人 渡辺美術館, pp. 3-4, 20-21 2019/3

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

門脇むつみ 『『欠伸年譜草』現代語訳—江月宗玩和尚の生涯—』『大徳寺龍光院 国宝曜変天目と破草鞋』MIHO MUSEUM, pp. 453-464, 2019/3

門脇むつみ 「大徳寺法系図・天王寺屋関係系図」『大徳寺龍光院 国宝曜変天目と破草鞋』MIHO MUSEUM, pp. 472-473, 2019/3

門脇むつみ 「作品解説」『大徳寺龍光院 国宝曜変天目と破草鞋』MIHO MUSEUM, 作品番号 001, 011, 013, 014, 015, 059, 061, 078, 079, 080, 081, 092, 093, 094, 095, 096, 097, 098, 099, 100, 101, 113, 114, 115, 116, 117, 120, 147, 148, 149, 155, 157, 159, 160, 161, 162, 163, 164, 165, 166, 167, 168, 169, 175, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 186, 187, 189, 190, 191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 198, 199, 2019/3

6-4. 口頭発表

門脇むつみ 「狩野探幽の肖像画制作」待兼山芸術学会, 待兼山芸術学会, 大阪大学, 2020/3/28(COVID-19 のため延期)

門脇むつみ 「狩野探幽—天皇と將軍を魅了した画業」徳島城博物館美術史アカデミー, 徳島市立徳島城博物館, 2020/2

門脇むつみ 「伊藤若冲—その筆技と制作環境—」大阪・京都文化講座, 大阪大学21世紀懐徳堂共催, 立命館大学梅田キャンパス, 2019/10

門脇むつみ 「京都国立近代美術館特別展円山応挙から近代京都画壇へ」, 自然総研, 池田泉州銀行池田営業部, 2019/10

門脇むつみ 「近世絵画鑑賞の道しるべ(6)近世絵画にみる超絶技巧」, 自然総研, 池田泉州銀行池田営業部, 2019/6

門脇むつみ 「江月宗玩と龍光院の宝物」, 二〇一九年春季特別展「大徳寺龍光院国宝曜変天目と破草鞋」講演会」, MIHO MUSEUM, 2019/3

門脇むつみ 「近世絵画鑑賞の道しるべ(5)狩野派を知る」, 自然総研, 池田泉州銀行池田営業部, 2019/2

Kadowaki, Mutsumi, "Itō Jakuchū and Zen", Rosetsu in Context: Rosetsu in Context, Museum Rietberg, the Mary Griggs Burke Center for Japanese Art, Columbia University, Museum Rietberg; Zurich, Switzerland, 2018/10

門脇むつみ 「近世絵画鑑賞の道しるべ(4)模写と創造」, 自然総研, 池田泉州銀行池田営業部, 2018/9

門脇むつみ 「近世絵画鑑賞の道しるべ(3)絵筆をとる天皇・皇族と職業画家」, 自然総研, 池田泉州銀行池田営業部, 2018/6

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

門脇むつみ 第14回国華奨励賞, 國華社, 2002/10

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

八幡市立松花堂庭園・美術館・学芸顧問, 2017年4月～現在に至る

倉吉市文化財審議委員会・文化財審議委員, 2016年4月～現在に至る

鳥取県文化財審議委員会・文化財審議委員, 2014年3月～現在に至る

7. 磯谷 有亮 助教

1983年生。2019年、ニューヨーク市立大学大学院センター美術史学博士課程修了。博士(美術史)(ニューヨーク市立大学、2019年)。2019年4月より大阪大学文学研究科芸術史講座助教(2020年3月退職)。専攻: 西洋美術史/写真史

7-1. 論文

磯谷有亮 「1930年代のフランスにおける写真の位相—グラフィックアート誌『アール・ゼ・メティエ・グラフィック』を中心に—」『美術史』(美術史学会), 188, 美術史学会, pp. 237-252, 2020/3

磯谷有亮 「1920年代のフランスにおけるグラフィックアートの発展と写真の位置—広告写真スタジオ、スタジオ・ドゥベルニー・エ・ペニョ(1929)—」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 53, 大阪大学文学会, pp. 1-27, 2019/12

Isotani, Yusuke, “Hein Gorny and Arts et Métiers Graphiques,” Marc Barbey, ed. *PHOTO: Hein Gorny*, Collection Regard, pp. 3-12, 2019/10 ※記述言語は英語だが記載ページはそのドイツ語訳。同書 pp.45-54 に英語版と、仏語訳版も収録。

7-2. 著書

磯谷有亮(共訳), 尾崎信一郎, 金井直, 小西信之, 近藤學編訳 『ART SINCE 1900 図鑑 1900年以降の芸術』東京書籍, pp. 147-153, pp. 238-243, pp. 329-333, pp. 353-357, pp. 416-421, 2019/5

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

磯谷有亮 「1937年のパリ万博—「近代生活における芸術と技術」の「進歩」と「調和」—博覧会の歩み—’70年万博への道—, 北大阪ミュージアム・ネットワーク, 関西大学梅田キャンパス, 2019/12

磯谷有亮 「1930年代のフランスにおける写真の位相—グラフィックアート誌『アール・ゼ・メティエ・グラフィック』を中心に—」第72回美術史学会全国大会, 美術史学会, 京都工芸繊維大学, 2019/5『美術史』187, 2019/10

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-24 共生文明論

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：藤川 隆男、堤 研二、堤 一昭

准教授：井本 恭子

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
7	0	0	0	0	0

※うち留学生2名、社会人学生1名

3. 修了生(2018年度～2019年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2018	0
2019	3
計	3

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

教育においては、①本コースの教育・研究内容の特色を理解させるための「歴史的・地域社会論講義」「地域文化構造論講義」などの講義科目を、また②高度専門職業人に向けた企画・調査・分析・プレゼンテーションなどの能力を養成するための「歴史的・地域社会論演習」「地域文化構造論演習」などの演習科目を配置することを目標とした。さらに、③本コース所属以外の教員とも協力して、専攻がカバーする分野についての全般的な知識を得る「人文学と社会」、教育に関わる高度専門職業人に向けた能力を養成するため「歴史教育論」といった共同授業科目を設けることを目標とした。

2. 研究

教員全員により、合計4本の単著論文あるいは共著であれば第一著者となっている論文を執筆すること、加えて教員がメンバーである研究プロジェクト(科学研究費補助金等の研究)による研究集会の開催に協力することを目標とした。

3. 社会連携

高等学校教員等の研修の場としての月例研究会「大阪大学歴史教育研究会」の開催に協力することなどによって、研究成果を社会に還元することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2018 年度～2019 年度)

1. 教育

各種の講義・演習により、コースの教育・研究内容の特色の理解をはじめとする目的はほぼ果たすことができた。高度職業人に向けた能力の育成を目指す演習のうち、歴史教育論では高等学校教員のリカレント教育にも協力するとともに、受講者が共同で口頭報告および論文作成を行うグループ研究に参加してプレゼンテーション能力向上をはかった。

2. 研究

教員の研究活動の欄にあるように、論文執筆の目標は達成され、科学研究費ほかによる研究が複数行われた。

教員がメンバーである研究プロジェクト(科学研究費補助金等の研究)による研究集会の開催に協力するという目標については、複数の教員が研究プロジェクトのメンバーとして、国内・国外での研究集会などにおいて開催協力や発表をおこない、研究活動の国際化を図るとともに、国内集会(大阪大学歴史教育研究会月例会など)も頻繁に開催した。

3. 社会連携

本コースの教員が世話役の一員として大阪大学歴史教育研究会月例研究会の開催に協力し、高等学校教員等の研修の場を提供することができた。また本コースの教員が、高等学校との共同プロジェクトで研究集会の開催および参加・助言を行った。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018 年度～2019 年度)

1. 教育

所属の大学院学生は、授業以外にも研究会でのグループ研究および報告書作成などをも通じて、目標とする能力を伸ばし得たといえる。したがって、掲げた目標はおおよそ達成できたと考えられる。なお春夏学期には、修士論文作成指導のための演習を各教員が開講し、加えて修士論文作成への中間報告の場をコース全体で設けて、入学時からの修士論文作成および進路についての指導・助言体制を強化している。

2. 研究

前記の活動をふまえると、全体的な目標は達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえると、社会連携の項に掲げられた目標は達成されたといえる。

Ⅴ. 基本情報(2018 年度～2019 年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0)	2(0)
2019	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0)	2(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	0	0	2	0	0	2
2019	0	1	1	0	0	2
計	0	1	3	0	0	4

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

角倉拓真・趙浩衍・裴奕・羅亜妮「近世の市場と社会秩序からみた日中朝の比較史」『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ16』(ISSN2186-9308) (角倉 pp.4～8,18～20 ; 羅 pp.9～12) , 2019/03

畔勝俊弥・晁越・趙文暖・中村友輝「宗教からみた近世日中の権威と権力」『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ16』(ISSN2186-9308) (中村 pp.31～34, 42～43) , 2019/03

【2019年度】

なし

(2)口頭発表

【2018年度】

中村友輝 (ほか畔勝俊弥・晁越・趙文暖)「宗教からみた近世日中の権威と権力」, 大阪大学歴史教育研究会 第117回例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/12/15

角倉拓真・羅亜妮(ほか趙浩衍・裴奕・弘田真基)「近世の市場と社会秩序からみた日中朝の比較史」, 大阪大学歴史教育研究会 第117回例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/12/15

【2019年度】

角倉拓真「17世紀「帝都」マドリッドにおける異邦人対象施療院の組織形態と慈善観—ポルトガル人対象施療院を中心に—」, スペイン史学会夏季研究会, 同志社大学今出川キャンパス至誠館, 2019/07/27

羅亜妮「顧頡剛の上古史観—『現代初中教科書・本国史』を中心に—」, 第1回若手研究者フォーラム, 大阪大学文学研究科, 2019/9/27

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

【2019年度】

角倉拓真 令和元年度文学研究科賞

3. 大学院生等の留学

2018年度 0名

2019年度 0名

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2018年度～2019年度の大学院修士課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2018年度：0名 2019年度：1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度：0名 2019年度：0名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

グローバル展開プログラム国際シンポジウム：Globalizing University History Education: Diversity, Trans-borders and Intersectionality, 2019年8月5日～6日,大阪大学中之島センター10階佐治敬三メモリアルホール(堤一昭(研究代表者)、藤川隆男(分担者)による報告あり)

7. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 藤川 隆男 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(大阪大学)、MA(ANU)。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋史、とくにオーストラリアの歴史

1-1. 論文

藤川隆男 「21世紀の歴史学とパブリック」『資料と公共性(2019研究成果年次報告書)』(九州大学大学院人文科学研究院), 1, 九州大学大学院人文科学研究院, pp. 4-17, 2020/3

藤川隆男 「「パブリック・ヒストリー」とは何か。」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 17, 大阪大学西洋史学会, pp. 12-24, 2020/2

Chenhui Chu, Koji Tanaka, Haolin Ren, Benjamin Renoust, Yuta Nakashima, Noriko Takemura, Hajime Nagahara, Fujikawa, Takao, "Public Meeting Corpus Construction and Content Delivery" 『じんもんこん 2019 論文集』(じんもんこん), 2019, じんもんこん, pp. 139-144, 2019/12

藤川隆男 「歴史研究におけるビッグデータの活用」『西洋史学』(日本西洋史学会), 268, 日本西洋史学会, pp. 50-61, 2019/12

藤川隆男 「メディア・スポーツ複合体とオーストラリアのカントリー・フットボールクラブ」『関学西洋史論集』(関西学院大学西洋史研究会), 42, 関西学院大学西洋史研究会, pp. 49-74, 2019/3

1-2. 著書

藤川隆男, 谷川稔, 川島昭夫他(共著) 『越境する歴史家たちへ』ミネルヴァ書房, pp. 97-102, 2019/6

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

藤川隆男「自然言語処理による新聞データの分析を通じた 19-20 世紀オーストラリアの公開集会と世論形成の構造の解明」
2020 Spring Tokyo Digital History Symposium, Tokyo Digital History, 東京大学 本郷キャンパス 経済学研究科学術交流棟・小島ホール, 2020/2

Fujikawa, Takao, "Public History and Digital History in University Education", Global History Education Conference, 国民国家型の大学歴史教育をグローバル化時代に適応させる方法に関する国際比較, 中之島センターの佐治敬三ホール, 2019/8

藤川隆男「21 世紀の歴史学とパブリック-IMBY/【インターネット・アニメ・モノ・アート・デジタル】・ヒストリー」九州西洋史学会 2019 年度春季大会, 九州西洋史学会, 九州歴史科学研究会, 科研共同研究「資料と公共性」, 九州大学西新プラザ, 2019/4

藤川隆男「メディア・スポーツ複合体とオーストラリアのスポーツ・クラブ文化」関学西洋史研究会第 21 回年次大会講演, 関学西洋史研究会, 関西学院大学, 2018/11

藤川隆男「地域とクラブから見たオーストラリアスポーツ史」ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学西洋史学会, 大阪大学, 2018/6

藤川隆男「The Past and Present of Australian Studies from Japanese Perspectives (discussant)」2018 年度全国研究大会, オーストラリア学会, 筑波大学, 2018/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2019 年度～2022 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:藤川隆男

課題番号:19H01330

研究題目:オーストラリアの世論形成の歴史的解明:自然言語処理による公開集会データの分析

研究経費:2019 年度 直接経費 4,800,000 円 間接経費 1,440,000 円

研究の目的:

公開集会は、19 世紀西欧の世論形成の支柱であるとされたが、歴史的構造としての分析は十分になされてこなかった。本研究はこのテーマを、オーストラリアの新聞データベースに掲載されるすべての公開集会の資料を用いて追及する。情報系研究者との連携により、情報技術を駆使してデータを集積・分類・分析し、19 世紀前半から 20 世紀半ばまでの公開集会による世論形成の構造を、オーストラリア全国に関して長期的に解明する研究である。本研究はデジタル・ヒストリーの最先端に立ち、この研究手法を応用すれば、検証できる資料の量(ビッグデータ)を幾何級数的に増大できる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

第 70 回日本西洋史学会大会準備委員会・委員長, 2019 年 6 月～現在に至る

日本西洋史学会・代表, 2016 年 3 月～現在に至る

日本歴史学協会・理事, 2016 年 3 月～現在に至る

日本歴史学協会・委員, 2015 年 9 月～現在に至る

日本西洋史学会・理事, 2015年5月～現在に至る
大阪大学西洋史学会・理事, 2003年6月～現在に至る
パブリック・ヒストリー・編集委員, 2003年6月～現在に至る
西洋史学・編集委員, 1996年4月～現在に至る

2. 堤研二教授

1960年生。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士（九州大学、1986）・博士（文学）（九州大学、2009）。佐世保工業高等専門学校助手・講師、島根大学法文学部講師・助教授、大阪大学文学研究科助教授・准教授を経て、2009年11月より現職。地域地理科学学会賞（1997）、昭和シェル石油環境研究助成財団環境研究課題賞（2005）、大阪大学 教育・研究功績賞（2006）、大阪大学 総長顕彰（研究部門）（2015）、大阪府スポーツ少年団功労者表彰（2016）。専攻：人文地理学、とくに社会経済地理学

2-1. 論文

堤研二 「ポストアーバン時代における縁辺地域の持続可能性: 島根県隠岐の島町を事例として」『グローバルビジネス学会 2019年度発表会予稿集』pp. 1-6, 2019/7
Tsutsumi, Kenji, “Rural-Urban Regional Relationships and Social Scape Networks in Japan at the Post-Urban Era” *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (Marginal Areas Research Group), 12, Marginal Areas Research Group, pp. 19-29, 2019/3

2-2. 著書

堤研二(共訳) 『【翻訳】ポストアーバン都市・地域論: スーパーメガリージョンを考えるために』ウエッジ, 416p., 2019/11

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

堤研二 「隠岐の島町の今と未来について: ポストアーバン、ソサエティ 5.0 の新時代に生き残る」大阪大学人文地理学教室・島根県立隠岐高等学校コラボレーション企画「この町の今と未来を語ろう」, 大阪大学リーディング大学院超域イノベーション博士課程プログラム、共催: 島根県立隠岐高等学校, 隠岐島文化会館, 2019/12
堤研二 「大阪大学・人文地理学教室・隠岐の島調査について」大阪大学人文地理学教室・島根県立隠岐高等学校コラボレーション企画, 大阪大学文学研究科、大阪大学文学研究科人文地理学教室、島根県立隠岐高等学校、MARG(過疎地域研究会), 大阪大学, 2019/10
堤研二 「ポストアーバン時代と西日本危機に対応する大阪の新たなノード: 縁辺地域との関係を事例として」大学を核とした共創: 知識産業時代と共創まちづくり, 大阪大学エリアマネジメント研究会, 大阪大学, 2019/8
堤研二 「ポストアーバン時代における縁辺地域の持続可能性: 島根県隠岐の島町を事例として」グローバルビジネス学会 2019年度発表会, グローバルビジネス学会, 天草市民ホール, 2019/7
堤研二 「ポストアーバン時代のスーパーメガリージョンと都市-農村関係: 人口メガシュリンクと西日本危機を越えて」スーパーメガリージョンとしての関西におけるインフラ高度化戦略に関するワークショップ, 土木学会関西支部, キャンパスプラザ京都, 2019/6
Tsutsumi, Kenji, “Industrial Modernization, Innovation and Agents: A Case of Tea Industry in Yame District, Fukuoka Prefecture Japan in the Modern Era”, The 1st Workshop on Social Capital and Development Trends of Countryside of Knowledge Society, Marginal Areas Research Group, Alam Puisi Villa, 2019/6
堤研二 「大阪大学 人文地理学教室と社会経済地理学」大阪大学・在阪報道機関関係者との懇談会, 大阪大学, 大阪大学、大阪大学中之島センター, 2019/3

堤研二 「人文地理学とエリアマネジメント」大阪大学 Innovation Bridge グラント「共創まちづくりコンソーシアム」研究発表会, 大阪大学 Innovation Bridge グラント「共創まちづくりコンソーシアム」, 大阪大学、大阪大学中之島センター, 2019/1

堤研二 「5年間の隠岐の島調査」大阪大学人文地理学教室・島根県立隠岐高等学校コラボレーション企画, 大阪大学文学研究科、大阪大学文学研究科人文地理学教室、島根県立隠岐高等学校, 大阪大学、大阪大学会館, 2018/10

堤研二 「人口減少地域社会の持続可能性:社会経済地理学的視点から」未来共創思考サロン「池田市 研究×まちづくり サロン」キックオフセッション, 大阪大学共創機構 産学共創本部, 大阪大学、大阪大学会館, 2018/7

Tsutsumi, Kenji, “Regional Management of Depopulated and Aged Community in Japan:A Case of Okinoshima Island”, The 5th Global Conference on Economic Geography, The Global Conference on Economic Geography, Cologne University, 2018/7

Tsutsumi, Kenji, “Rural-Urban Regional Relationships and Social Scape Networks in Japan”, The 15th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Marginal Areas Research Group, Daigoji Temple, 2018/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 大阪大学総長顕彰(研究部門), 国立大学法人大阪大学, 2015/7

堤研二 市民スポーツ・レクリエーション指導者表彰, 豊中市民体育振興協議会, 2012/10

堤研二 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 国立大学法人大阪大学, 2006/2

堤研二 昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9

堤研二 地域地理学会賞, 地域地理学会, 1997/7

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014年度～2018年度、基盤研究(A) 一般、代表者:堤研二

課題番号:26244051

研究題目:中山間地域における林業合理化・森林管理・住民生活の為のマネジメント=モデルの構築

研究経費:2018年度 直接経費 3,700,000円 間接経費 1,110,000円

研究の目的:

本研究の目的は、中山間地域における基幹産業である林業の再生と森林環境の維持管理とを結びつけ、林業を支える兼業形態と地域生活機能の持続可能性を高めるための「フォーレストタウン=マネジメント=モデル(FTMM)」を構築する目的でのパイロット研究を行うことにある。具体的には、(1)林業再生のための合理的方策に関するモデル、(2)森林環境保全のための管理モデル、(3)中山間地域における産業・兼業と生活のリーズナブルな持続性を可能にするモデルを設計し、(4)それらを統合的にアレンジして、中山間地域に適用可能な具体的な総体的社会経済モデルとしての“FTMM”のパイロット=モデルを試験的に構築しつつ、並行して、あるいはそれに沿って調査研究を実行し、成果の社会への発信と政策提言を行っていく。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・代議員および理事, 2018年10月～現在に至る

大阪府スポーツ少年団本部・本部委員, 2014年4月～2018年3月

豊中市スポーツ振興協議会・委員, 2014年4月～2018年3月

豊中市スポーツ少年団本部・本部委員、副本部長, 2012年4月～2018年3月

豊能地区スポーツ少年団連絡協議会・役員・事務局担当, 2012年4月～2018年3月

3. 堤一昭教授

1960年生。京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科博士後期課程(東洋史学専攻)学修退学。文学修士(京大)

学、1988)。大阪外国語大学外国語学部国際文化学科比較文化講座専任講師、同助教授、同准教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2013年6月より現職。専攻：東洋史学

3-1. 論文

堤一昭「石濱純太郎は、いつ内藤湖南に出会ったのか？—新出資料『景社紀事』の紹介を兼ねて—」『東西学術研究と文化交渉—石濱純太郎没後 50 年記念国際シンポジウム論文集』、関西大学東西学術研究所研究叢刊 59、関西大学出版部、pp. 297-316, 2019/11

堤一昭「石濱文庫所蔵 石濱純太郎自筆稿本類の発見—明治末年の「支那文学科」の学修、大正初年の「文会」の資料として—」『待兼山論叢 文化動態論篇』、52、文学会(大阪大学文学研究科)、pp. 21-39, 2018/12

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

堤一昭「石濱純太郎をめぐる学術ネットワークと石濱文庫の資料群」令和元年度 大阪大学職員研修 大阪大学の貴重資料を知る：石濱文庫の世界と貴重資料のデジタル化、大阪大学附属図書館、総合図書館 6F 図書館ホール(豊中キャンパス)、2020/2

Tsutsumi, Kazuaki, “History Education at a Large Research University: Reform in the History Major at Osaka University, School of Letters”, Final Symposium : Globalizing University History Education: Diversity, Trans-borders and Intersectionality, International Comparative Research on How to Adapt Nation-State Oriented University History Education to the Era of Globalization, Saji Keizo Memorial Hall, Osaka University Nakanoshima Center, 2019/8(*Final Symposium: Globalizing University History Education: Diversity, Trans-borders and Intersectionality Proceedings*, Panel 4, pp. 1-8, 2019/8)

堤一昭「大阪大学図書館 石濱文庫の調査・研究の現況」東西学術研究と文化交渉—石濱純太郎没後 50 年記念国際シンポジウム(第58回泊園記念講座)、関西大学東西学術研究所、関西大学千里山キャンパス、2018/10『東西学術研究と文化交渉—石濱純太郎没後 50 年記念国際シンポジウム(第58回泊園記念講座)』pp. 99-108, 2018/10)

堤一昭「近代日本における「東洋史」構想とその後—教科書と学問分野形成を手がかりに—」第12次国際學術會議 現代中國與東亞新格局:改革開放40周年の歴史認識、ソウル大学校歴史教育科、韓国中国近現代史学会、ソウル大学校奎章閣韓国学研究院、ソウル大学校、2018/8『第12次国際學術會議 現代中國與東亞新格局:改革開放40周年の歴史認識』上、pp. 81-94, 2018/8)

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2016年度～2019年度、3：受託研究、助成金獲得者：堤一昭

助成金名：課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業(グローバル展開プログラム)

研究題目：国民国家型の大学歴史教育をグローバル化時代に適応させる方法に関する国際比較

助成団体名: 日本学術振興会

助成金額: 2018年度 直接経費 4,800,000円 間接経費 1,440,000円

2019年度 直接経費 4,140,000円 間接経費 1,242,000円

研究の目的:

日本を含む東アジア諸国が共有する国民国家中心の歴史学のしくみを改善する方法について、自国史と世界史の関係、授業方法など教育面から国際比較をおこない、それにもとづく授業モデルや海外発信体制を開発・提案することで、グローバル化時代にふさわしい歴史学の発展をはかる。グローバルヒストリーや地域研究の研究蓄積、国内の高大接続なども踏まえた大学歴史教育の国際比較(中心は東・東南アジア・内陸アジアほかアジア各地)および、それにもとづく日本史と世界史の統合や授業の多言語化など教育法の開発を実施し、海外での授業参画も含めた多様な形態による海外発信と若手研究者の育成に結び付ける。

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本モンゴル学会・理事, 2008年5月～現在に至る

4. 井本 恭子 准教授

1963年生。大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程(イタリア語学専攻)修了。文学修士(大阪外国語大学, 1990)。大阪外国語大学外国語学部地域文化学科ヨーロッパIII講座助手、講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻: 人類学

4-1. 論文

井本恭子 「「近すぎない」関係の形成と「ストリート」の生成－イタリアの都市ボローニャにおける Social Street の実践－」『文学研究科紀要』60, 文学研究科, pp. 107-126, 2020/3

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

5. 古結 諒子 助教

1981年生。2013年、お茶の水女子大学人間文化研究科博士後期課程修了。博士（人文科学）。お茶の水女子大学リサーチ・フェロー、日本学術振興会特別研究員を経て、2018年大阪大学文学研究科文化動態論専攻共生文明論コース助教（2019年3月退職）。専攻：日本史学/近代史

5-1. 論文

なし

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

古結諒子(書評)「森萬佑子著 朝鮮外交の近代：宗属関係から大韓帝國へ」東洋史研究会『東洋史研究』(東洋史研究会), 77-3, 東洋史研究会, pp. 489-499, 2018/12

5-4. 口頭発表

古結諒子「日清・日露戦間期の東アジア国際関係と日本外交」第116回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学, 2018/10

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2018年度～2022年度、若手研究、代表者:古結諒子

課題番号:18K12505

研究題目:日清・日露戦間期における日本外交の再考—日清追加通商航海条約を中心に—

研究経費:2018年度 直接経費 1,150,000円 間接経費 450,000円

2019年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究の目的は、義和団事件後の北京議定書の内容を軸に、清を場とした重層的な国際関係がいかなる構図となったのかを解明し、その見取り図のもと、日清追加通商航海条約締結交渉を分析することである。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 溝口 優樹 助教

1986年生。2014年、國學院大學大学院文学研究科博士後期課程（史学専攻）修了。博士（歴史学）（國學院大學、2014年）。2016年、日本学術振興会特別研究員（PD）。2019年4月より大阪大学大学院文学研究科助教（2020年3月退職）。専攻：日本古代史

6-1. 論文

- 溝口優樹 「氏族からみた古代肥後の地域社会と鞠智城」『鞠智城と古代社会』(熊本県教育委員会), 8, pp. 75-98, 2020/3
- 溝口優樹 「菅家御伝記」第一部の編纂『大阪大学大学院文学研究科紀要』60, 大阪大学文学研究科, pp. 39-60, 2020/3
- 溝口優樹 「九世紀における菅原改姓」『国史学』(国史学会), 230, 国史学会, pp. 21-57, 2020/2
- 溝口優樹 「大野寺土塔の出土文字資料と知識」『待兼山論叢 文化動態論篇』53, 大阪大学文学研究科, pp. 1-24, 2019/12
- 溝口優樹 「地域からみた大野寺土塔の造営」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 276, 大阪歴史学会, pp. 22-35, 2019/10
- 溝口優樹 「土師氏の系譜と伝承—野見宿禰を中心に—」篠川賢(編)『日本古代の氏と系譜』雄山閣, pp. 43-66, 2019/3
- 溝口優樹 「凡河内国造の成立」『続日本紀研究』(続日本紀研究会), 415, 続日本紀研究会, pp. 1-21, 2019/3
- 溝口優樹 「政治的動向からみた土師氏の系譜—『日本書紀』から『新撰姓氏録』まで—」『日本歴史』(日本歴史学会), 849, 日本歴史学会, pp. 1-18, 2019/2
- 溝口優樹 「土師氏の改姓と菅原・秋篠・大枝氏の成立」『ヒストリア』(大阪歴史学会), 270, 大阪歴史学会, pp. 64-91, 2018/10

6-2. 著書

溝口優樹 『日本古代の輸送路道路』八木書店, pp. 367-371, 2019/5

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 溝口優樹 (書評) 「古市晃著『国家形成期の王宮と地域社会 記紀・風土記の再解釈』」『日本歴史』(日本歴史学会), 862, 日本歴史学会, pp.79-81, 2020/3
- 溝口優樹, 岩本健寿 「二〇一七年度陵墓立会調査見学二件および二〇一八年度木幡古墳群二三号支群立会調査見学参加記」『歴史学研究月報』(歴史学研究会), 705, pp. 1-3, 2018/9
- 溝口優樹 (書評) 「鈴木正信著『日本古代の氏族と系譜伝承』」『日本史研究』(日本史研究会), 672, 日本史研究会, pp. 67-75, 2018/8

6-4. 口頭発表

- 溝口優樹 「氏族からみた古代肥後の地域社会と鞠智城」第 8 回鞠智城跡特別研究成果報告会, 熊本県教育委員会, くまもと県民交流館パレア・パレアホール, 2020/3
- 溝口優樹 「文字資料からみた埴輪生産・造墓の労働力と土師氏」古代学研究会拡大例会シンポジウム, 古代学研究会, 大阪歴史博物館, 2020/1
- 溝口優樹 「地域からみた大野寺土塔」大阪歴史学会現地見学検討会, 大阪歴史学会, 土塔町公民館, 2019/5
- 溝口優樹 「9 世紀における改賜姓—菅原姓を中心に—」国史学会 1 月例会, 国史学会, 國學院大學渋谷キャンパス, 2019/1
- 溝口優樹 「9 世紀における傍流の菅原氏」続日本紀研究会例会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪, 2018/12(『続日本紀研究』415, p. 40, 2019/3)
- 溝口優樹 (招待講演) 「茨田氏の系譜と茨田堤」第 16 回兵庫考古学談話会, 兵庫考古学談話会, コミスタこうべ, 2018/12

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2016 年度～2018 年度、特別研究員奨励費、代表者:溝口優樹

課題番号:16J01140

研究題目:富豪層を中心とした奈良・平安期地域社会の研究

研究経費:2018 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

「富豪層」は古代から中世へという時代の移行において社会変容の軸になった社会階層であると考えられてきた。本研究は、

「富豪層」に着目し、「社会統合の原理」という視角を通して奈良・平安時代における地域社会の諸相を明らかにすることを目的とするものである。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

6-7-1. 2019年度、6：研究助成、助成金獲得者：溝口優樹

助成金名：令和元年度鞠智城跡「特別研究」

研究題目：氏族からみた古代肥後の地域社会と鞠智城

助成団体名：熊本県教育委員会

助成金額：2019年度 直接経費 500,000円

研究の目的：

本研究は、古代氏族の分析を通し、倭王権がいかに肥後地域を掌握したかを明らかにすることによって、鞠智城が築かれた歴史的背景の一端を解明することを目的とする。

6-8. 外部役員等の引き受け状況

日本史研究会・研究委員, 2017年10月～2019年10月

2-25 アート・メディア論

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：永田 靖、園府寺 司、桑木野幸司

准教授：古後奈緒子

助教：東 志保

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
24	0	0	0	0	1

※うち留学生6名、社会人学生7名

3. 修了生(2018年度～2019年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2018	11
2019	4
計	15

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

1. アート・メディア論に関する基礎的教育のシステムを構築するとともに、学生にそのような基礎的素養を身につけてもらうこと。
2. さまざまな〈現場〉で活動する専門職の人々と接触する機会をつくり、フィールド的な知のありかたを教育すること。
3. 学生各自が自身のフィールドを見つけ、選択し、そこでの活動を進めていけるような環境を作り出すこと。
4. サイバーメディアを中心としたメディアリテラシーを高めること。

2. 研究

従来の芸術、文化研究にはなかった新領域での研究を行う。萌芽的な研究の成果を徐々に出していければよいと考える。新領域の研究者との接点を増やしつつ、また、〈現場〉との接点も重視した研究を推進する。

3. 社会連携

劇場や博物館、美術館での芸術活動に積極的に参加し、芸術の実践を行い、また作家の創作活動を背後から支えることで、芸術の社会的意義を明確にし、社会に伝えていく。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

授業においては全体演習において、各院生の研究テーマへの個別的、集中的な指導を行った。また学外での実践的活動も推奨したので、院生の多くは学外のさまざまなフィールドで活動、研修を重ねている。具体的には美術館等における展覧会企画やその補助、芸術雑誌への寄稿、上演活動への参加等である。メディア実習は前後期に実施し、授業を通じて各自のメディア運用能力は着実に高まっている。

2. 研究

著書、論文、国内外での研究発表、上演活動、シンポジウムの企画など、「書物」「実践」とともに研究はまずまず順調に遂行されている。なおコース紀要『Arts&Media』については、2018年7月に第8号を、2019年7月には第9号を発刊。

3. 社会連携

美術館における講演、演劇企画・展覧会企画への参加等、さまざまな社会連携活動を進めてきている。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

上記1～3の諸項目についてはいずれもほぼ計画通りに遂行できている。各院生の個人研究はもちろん、研究室のHPから、ブログの作成なども自発的に行うなど、院生は学内外で積極的に活動を進めており、基本方針の指導は浸透しているといっていよい。

2. 研究

成果の質・量にある程度の個人差はあるものの、教員、院生ともに各自の研究は着実に遂行している。紀要『Arts&Media』第8号については、前号に引き続き論文のテーマ特集を行い、「ルネサンス期の建築エクフラシスの魅惑」という企画を行なった。また第9号では「1950年代のドキュメンタリー映画」という企画を行った。学内外からの反響は大きく、今後も内容を充実させてゆきたい。

3. 社会連携

これも上記同様研究テーマによってある程度の個人差はあるが、社会との連携は教員、院生ともに十分に意識し、遂行できているといっていよい。

Ⅴ. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	0(0)	1(1)	2(2)	0(0)	0(0)	3(3)
2019	0(0)	0(0)	3(3)	0(0)	0(0)	3(3)
計	0(0)	1(1)	5(5)	0(0)	0(0)	6(6)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	0	0	2	0	0	2
2019	0	0	1	0	0	1
計	0	0	3	0	0	3

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

西元まり「オーストラリアにおける現代サーカスの受容と発展」『Arts&Media』第8巻, pp.177-188, 2018/07

徐 舒陽「自己解放をする大衆芸術——字幕メディアの考現学」『Arts&Media』第8巻, pp.68-89, 2018/07

小池陽香"La bibliothèque, lieu de rencontre", La Revue de la BNU, 第17号, pp.68-71, 2018/05

小池陽香"How Art Has Been Presented as Common Culture for Europe: The Case Study on the Art Exhibitions of the Council of Europe since 1954", 2018/10 (修了)

【2019年度】

永山宗史「ベルリンのノイエ・ヴァッヘ Neue Wache が持つ記念碑性の源泉について——内部空間との関わりから」『Arts and Media』第9号, pp.176-187, 査読有, 2019/7/31

(共著)新井 静/下津舞子/城 直子/橋本知子/永山宗史/米倉 卓「(小論集)映画鑑賞と上映空間」『Arts and Media』第9号, pp.260-275, 査読有, 2019/7/31

城直子「カトマンズ盆地の中庭建築：ネワール建築試論」『Arts and Media』第9号, pp.188-199, 査読有, 2019/7/31

島田広之「大阪府内における新築建売住宅の住宅広告における和室表現の変遷」『Arts and Media』第9巻, pp.56-71, 査読有, 2019/7/31

稲垣智子「「発酵をよむ」展——制作とコラボレーション」『Arts and Media』第9号, pp.236-245, 査読有, 2019/7/31

稲垣智子・松並百合愛「インタビュー 谷川俊太郎 ことばとアート」『Arts and Media』第9号, pp.236-259, 査読有, 2019/7/31

橋本知子「ダンス映画における実験性、触感性、痕跡」『Arts&Media』第9号, pp.72-85, 査読有, 2019/7/31

城直子「王権とクマリ女神：インドラジャトラ祭りにおけるクマリ崇拝について」『第2回若手研究者フォーラム要旨集』pp.66-69, 査読有, 2020/3/23

(2)口頭発表

【2018年度】

西元まり「オーストラリアでの現代サーカスのはじまりと現状」, サーカス学研究会定例会, 東京・王子, 2018/10/26

小池陽香「ルーヴル美術館の近代化と民衆」, 第3回豊中地区研究交流発表会, 大阪大学, 2018/12/18

【2019年度】

城直子「カトマンズ盆地の中庭建築について：仏教僧院としてのチョークにおける構造と機能」大阪大学文学研究科第1回若手研究者フォーラム、大阪大学文学研究科、2019/9/27

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2018年度 1名

2019年度 0名

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2018年度～2019年度の大学院修士課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2018年度：0名 2019年度：0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度：0名 2019年度：0名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

- ・ 紀要『アーツ&メディア』第8号、2018年7月発行
- ・ 紀要『アーツ&メディア』第9号、2019年7月発行

7. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 永田 靖 教授

1957年生。1981年上智大学外国語学部ロシア語学科年卒業、1988年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位取得退学。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究科客員研究員、ロシア国立映画大学研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：演劇学

1-1. 論文

永田靖 「外地のチェーホフ」『Time Capsule』(「徴しの上を鳥が飛ぶ」報告書)、大阪大学文学研究科、2020/2

永田靖 「演劇のアジア的転回—ポスト・グローバリゼーション時代に向けて」『適塾』(適塾記念会)、52, 適塾記念会, pp. 83-94, 2019/12

永田靖 「震災後の身体」『Arts and Media』(p286-p289), Vol.9, 大阪大学文学研究科文化動態論アート・メディア論コース, 2019/7

Nagata, Yasushi, “Assimilation of Asia: On Okawa’s Revenge and Nayotake”, *Modernization of Asian Theatres Process and Tradition*, Springer, pp. 241–255, 2019/6

永田靖 「記憶の上演—博物館資料を活用する演劇上演」『Arts and Media』Vol.8, 文学研究科アートメディア論コース, pp. 190–193, 2018/7

Nagata, Yasushi, “Crossing the Sea: The Ishinha Theatre Company’s Geographical Trail”, *Transnational Performance, Identity and Mobility in Asia*, Palgrave Macmillan, pp. 53–67, 2018/6

1-2. 著書

永田靖, 山崎達哉共編 『記憶の劇場—大阪大学総合学術博物館の試み』, 大阪大学出版会, 2020/3

永田靖, 青野智子, 伊藤洋他 『西洋演劇論アンソロジー』, 月曜社, 「アレクサンドル・タイエロフ」pp.378–382、「ニコライ・エブレイノフ」pp.373–377、「ユーリエニオ・バルバ」pp.549–553, 2019/9

Nagata, Yasushi, Ravi Chaturvedi, ed., *Modernization of Asian Theatres Process and Tradition*, pp.1–262, Springer & Rawat Publication, Introduction, pp.1–6. Assimilation of Asia: On Okawa’s Revenge and Nayotake, pp.241–256, 2019/5

永田靖, 佐伯康孝(共編著) 『街に拓く大学』, 大阪大学出版会, 248p., pp. 1–248, 2019/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖 「三人の姉妹」『ベスト・プレイズⅡ』, pp.633–686, 論創社, 2020/2

永田靖 「極東退屈同情#010 公演『ジャンクション』」『ENOCO』p.7, 江之子島文化芸術センター, 2020/2

永田靖 「演劇における日露交流」『ロシア文化事典』, 丸善出版, pp. 716–717, 2019/10

永田靖(書評) 「関西戦後新劇史 1945～1969」『図書新聞』3393号, 武久出版, pp.6–6, 2019/3

永田靖 「会長挨拶」*Journal of Korean Theatre Studies Association*, Korean Theatre Studies Association, 67, pp. 235–238, 2018/9

1-4. 口頭発表

Nagata, Yasushi, “Killing a Father: An Angura Response to Cold War Culture”, IFTR Hanoi Colloquium, Asian Theatre Working Group, Hanoi Young Theatre, Hanoi, Vietnam, 2020/3(新型コロナウイルス感染拡大のため中止)

Nagata, Yasushi, “Bridge across Asia”, Theatre Olympics Forum *Cultural Bridges in Theatre World*, Theatre Olympics, Hermitage General Staff, St. Petersburg, Russia, 2019/11

永田靖 「シンガポールの社会風土と潮州歌劇」日本演劇学会研究集会「演劇と風土」, 日本演劇学会, 西和賀町銀河ホール, 西和賀町、岩手県、2019/10

Nagata, Yasushi, “Japanese Diaects Plays or Multilingualism?”, IFTR Annual Conference, *Theatre, Performance and Urbanism*, International Federation for Theatre Research, Shanghai Theatre Academy, Shanghai, China, 2019/7

永田靖 「中之島における野外演劇の可能性」、シンポジウム「水辺における野外演劇の可能性」、文化庁戦略的芸術文化創造推進事業, 大阪大学, 2019/2

Nagata, Yasushi, “Expanding or going beyond the boundaries of theatre”, Asian Theatre WG Seoul Colloquium: Expanding the boundary of theatre, IFTR Asian Theatre Working Group, Korean National University of Arts, Seoul, South Korea, 2019/2

永田靖 「演劇のアジア的転回—ポスト・グローバリゼーションの時代に向けて」、適塾記念講演会, 適塾記念会, 大阪大学中之島センター, 2018/12

永田靖 「劇団維新派のアジア—『台湾の、灰色の牛が背のびをしたとき』を中心に」大阪・京都文化講座, 立命館大学, 立命館大学梅田キャンパス, 2018/11

永田靖 「演劇に劇場がなぜ必要なのか？」日本演劇学会研究集会, 日本演劇学会, 浜松文化芸術大学, 2018/11

Nagata, Yasushi, “Nose Ningyo Joruri: its challenge and dilemma”, The 2nd Asian Theatre Summit, Asian Theatre Association, Bangladesh Fine Arts and Performance Academy, Dhaka, Bangladesh, 2018/10

Nagata, Yasushi, “Representation of ‘Machuria’ in Japanese Post-War Plays”, *Theatre and Migration: Theatre, nation and Identity*,

IFTR Annual Conference, Belgrade University, Belgrade, Serbia, 2018/7

永田靖 「『忠臣蔵・序 ビッグバン／抜刀』について」アフタートーク, エイチエムピー・シアター・カンパニー, 伊丹アイホール, 2018/7

永田靖 「演劇と文化現象」日本演劇学会全国大会, 日本演劇学会, 神戸松蔭女子学院大学, 2018/6

永田靖 「会長挨拶」日韓共同演劇学会, 日本演劇学会・韓国演劇学会, 神戸松蔭女子学院大学, 2018/6

永田靖 「藝術と教養—藝術は教養たりえるのか?」藝術学関連学会連合第 13 回公開シンポジウム, 藝術学関連学会連合, 慶應義塾大学, 2018/6

永田靖 「中村貞夫と演劇」, シンポジウム「歴代博物館長、画伯に迫る」, 大阪大学総合学術博物館, 2018/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2018 年度～2022 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:永田靖

課題番号:18H00624

研究題目:アジア近現代演劇の超域性の研究—クラスター構築と次世代研究者育成の国際共同研究

研究経費:2018 年度 直接経費 3,000,000 円 間接経費 900,000 円

2019 年度 直接経費 3,400,000 円 間接経費 1,020,000 円

研究の目的:

ポスト植民地主義的、またポスト・グローバリゼーション時代を迎える現代において、多様な実践が試みられているアジア近現代演劇の多様性を総合的に理解し、広い世界の演劇学・演劇史的観点から捉え返すことが求められている。この共同研究では、アジア間の相互影響やその共通する芸術的特徴を西欧演劇との比較のもとで明らかにすること、20 世紀後半以後のグローバリゼーション時代の今日的課題を検討すること、人種や言語を越えて接触し合ってきたアジアの近現代演劇を総合的に研究することを目的とする。またアジア諸都市間、西欧のアジア演劇研究者とのネットワークを生かして、クラスター構築を進めて行く。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2016 年度～2018 年度、5：その他補助金、助成金獲得者:永田靖

助成金名:大学を活用した文化芸術推進事業

研究題目:大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座

助成団体名:文化庁

助成金額:2018 年度 直接経費 25,000,000 円

研究の目的:

本プログラムは、大学博物館の特性を生かしながら様々なジャンルの芸術活動に関わり、企画運営しつつアート・マネジメント人材を育てるプログラムである。博物館に収められているいわゆる〈ミュージアム・ピース〉の豊かさを引き出し、〈生きたアート〉として公開していく文化芸術ファシリテーターの育成を目指す。様々な〈ミュージアム・ピース〉を活用したり、また創造や収集したりすることで、地域社会との協奏による芸術実践の試みと基礎研究的な潜在力とを連動させた「リサーチ型ミュージアム」のあり方を探求する。演劇、音楽、美術、アートなどばかりではなく、自然科学の領域までカバーして、多様な文化領域のファシリテートに柔軟に対応できる人材育成のプログラムを用意している。

1-7-2. 2019 年度～2020 年度、5：その他補助金、助成金獲得者:永田靖

助成金名:大学を活用した文化芸術推進事業

研究題目:文学研究科におけるアート・プラクティス人材育成プログラム

助成団体名:文化庁

助成金額:2019年度 直接経費 18,000,000円

研究の目的:

文学研究科の人文学研究とアート・マネジメント講座を噛み合わせることで、現代社会において求められている諸課題に対して人文学的なアプローチを行うアート・ファシリテーターの人材育成を行う。担当教員が芸術諸ジャンルのアート経験を人文学の側からの解釈を行いつつ、人間や共同体のアイデンティティに関する諸問題について考察を深め、アートの社会での実際的な展開能力を身につけることを目的としている。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

兵庫県立尼崎ピッコロ劇団企画運営委員会・委員長, 2019年 月～現在に至る

稲盛財団京都賞選考専門委員会・委員, 2017年 5月～現在に至る

公益財団法人吹田市文化振興事業団・理事, 2015年 5月～現在に至る

日本演劇学会・会長, 2014年 6月～現在に至る

豊中市文化審議会・委員, 2014年 6月～現在に至る

兵庫県立ピッコロ劇場企画運営委員会・運営委員, 2011年 3月～現在に至る

Asian Theatre Working Group, International Federation for Theatre Research・Convener, 2009年 7月～現在に至る

芸術学関連学会連合・委員, 2005年 6月～現在に至る

日本演劇学会・理事, 2002年 6月～現在に至る

日本映像学会関西支部・幹事, 2002年 4月～現在に至る

日本演劇学会近現代分科会・主宰, 2000年 11月～現在に至る

2. 関府寺司教授

1957年生。大阪大学文学部美学科（西洋美術史）卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren（文学博士・アムステルダム大学）。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。2004年にワルシャワ・ユダヤ歴史博物館研究員。専攻：西洋美術史／アート・メディア論

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

関府寺司 『ファン・ゴッホ 日本の夢に懸けた画家』KADOKAWA, 220p., 2019/9/25

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

関府寺司 「ファン・ゴッホのユートピアとしての〈日本〉と〈南仏〉」国際シンポジウム『ポスト印象派におけるユートピアの表象－セザンヌ、ゴッホ、ゴーギャン』, 京都工芸繊維大学・日仏美術学会, 京都工芸繊維大学, 2019/6/24

関府寺司 「企画ならびにキーノートスピーチ「芸術資産をいかに未来に継承発展させるかーコレクター文化育成のための法律・制度設計の具体的提言ー」文化庁主催シンポジウム 芸術資産をいかに未来に継承発展させるかーコレクター文化育成のための法律・制度設計の具体的提言ー:文化庁主催シンポジウム 芸術資産をいかに未来に継承発展させるかーコレクター文化育成のための法律・制度設計の具体的提言ー, 文化庁, 国立新美術館, 2019/3

関府寺司 「ファン・ゴッホ美術館の変貌」シンポジウム「美術館をかえようーその役割と展開」:シンポジウム「美術館をかえようーその役割と展開」, 国立新美術館, 国立新美術館, 2018/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

園府寺司 大阪大学総長顕彰 2015 研究部門, 大阪大学, 2015/7

園府寺司 大阪大学共通教育賞(2009 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2009/11

園府寺司 Praemium Erasmunianum(エラスムス研究賞), Stichting Erasmusprijs エラスムス財団, 1989/2

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014 年度～2018 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:園府寺司

課題番号:26244009

研究題目:西洋近世・近代美術における市場、流通、画商の地政経済史的研究

研究経費:2018 年度 直接経費 6,600,000 円 間接経費 1,980,000 円

研究の目的:

西洋の近世・近代美術を対象に、美術市場における流通メカニズムと画商の国際的活動の全体像を、経済史の方法や成果を取り入れつつ明らかにする。具体的には、一般市場とは異なる美術市場の特質、美術作品の市場価値決定のメカニズム、市場において画商や批評家、美術史家らが果たしてきた役割などを、歴史的史料と豊富なデータに基づいて解明する。さらに、経済活動と資本主義の発達とともに急速に国際化した美術市場を「世界システム」として理解するため、各研究分野での調査・研究成果を共同研究のなかで擦り合わせつつ分析し、経済史家との議論を通じて「美術の地政経済史」Geo-Economics of Art の研究基盤と方法を構築したい。

2-6-2. 2019 年度～2022 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:園府寺司

課題番号:19H00519

研究題目:美術市場とその国際化に関する制度論的、交流史的研究。西洋から日本・アジアへの展開

研究経費:2019 年度 直接経費 7,200,000 円 間接経費 2,160,000 円

研究の目的:

西洋近世から現代、ならびに日本、東アジア、東南アジアの近現代を対象に、美術市場の生成と発達、国際化に関する調査・研究を行う。本研究の助走的研究に当たる「西洋近世・近代美術における市場・流通・画商の地政経済史的研究」においては、研究が最も進んでいる西洋近世・近代の特定地域・時代を対象に美術市場研究を進め、この種の研究が著しく遅れている日本でその研究史や方法を吸収しつつ本格的な研究への道筋をつけることを目標とした。この目標をある程度達成した上で、その成果を速やかに引き継ぎ、本研究では研究の視野を以下のように地理的、領域的に拡大して本格的に国際先端研究に参入する。1. 地理的には近代以降の日本ならびにアジアを視野に入れ、西洋圏との美術市場の関わりを調査研究する。2. 美術市場と様々な美術制度との関わりをより重点的に研究する。美術作品の価値付与システムに深く関わる諸制度(美術家組合、美術政策、美術館、批評、美術史学など)と美術市場との関わりについてさらに調査・研究を進める。3. 美術作品の売買だけでなく貸借の市場(展覧会市場)や複製・写真・建築市場など未開拓な研究領域も研究対象に加える。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

内閣府未来投資会議構造改革徹底推進会合・専門委員, 2019 年 2 月～2019 年

アート市場活性化事業「日本アート創生委員会」(文化庁・国立新美術館)・副座長, 2018 年 9 月～2020 年

独立行政法人 国立美術館・外部評価委員, 2010 年 4 月～現在に至る

独立行政法人国立美術館 外部評価委員会・外部評価委員会・副委員長, 2010 年月～現在に至る

国際美術史学会 CIHA・国内委員, 2009 年 4 月～現在に至る

3. 桑木野 幸司 教授

1975年生。東京大学大学院工学系研究科修士課程修了（西洋建築史）。ピサ大学大学院博士課程修了。Dottore di Ricerca in Storia delle arti visive e dello spettacolo（文学博士（美術史）・ピサ大学）。Kunsthistorisches Institut in Florenz 研究生、2011年4月より大阪大学文学研究科准教授を経て、2020年4月より現職。専攻：西洋美術・建築・庭園史

3-1. 論文

- 桑木野幸司 「ルネサンスのメディア革命と建築創作をめぐる諸テーマ」『建築雑誌 3月号』(日本建築学会), 日本建築学会, pp. 8-11, 2020/3
- Kuwakino, Koji, “Gardens of Pre-Modern Japan” *Encyclopedia of East Asian Design*, Ava Pub Sa, pp. 259-262, 2019/10
- Kuwakino, Koji, “The Great Theatre of Creative Thought. The Inscriptiones vel tituli theatri amplissimi ... (1565) by Samuel von Quicceberg” *La Grande Galleria. Spazio del sapere e rappresentazione del mondo nell’età di Carlo Emanuele I di Savoia*, Carocci editore, pp. 65-100, 2019/9
- 桑木野幸司 「テキストとしての建築、記憶との対話」『Arts and Media』(大阪大学アートメディア論コース), vol.9, pp. 276-279, 2019/7
- 桑木野幸司 「ヴァールブルク他『ムネモシュネ・アトラス』」『ルネサンス・バロックのブックガイド:印刷革命から魔術・錬金術までの知のコスモス』工作舎, pp. 40-41, 2019/1
- 桑木野幸司 「フランセス・A・エイイツ『記憶術』」『ルネサンス・バロックのブックガイド:印刷革命から魔術・錬金術までの知のコスモス』工作舎, pp. 72-73, 2019/1
- 桑木野幸司 「リナ・ボルツォーニ『記憶の部屋』」『ルネサンス・バロックのブックガイド:印刷革命から魔術・錬金術までの知のコスモス』工作舎, pp. 76-77, 2019/1
- 桑木野幸司 「伊藤博明『綺想の表象学』」『ルネサンス・バロックのブックガイド:印刷革命から魔術・錬金術までの知のコスモス』工作舎, pp. 88-89, 2019/1
- 桑木野幸司, 越宏一 「中世庭園の諸相—エデン神苑から風景の発見まで—」『ヨーロッパ中世美術論集5:中世美術の諸相』竹林舎, pp. 219-243, 2018/10
- 桑木野幸司 「ルネサンス文芸と建築エクフランスの魅惑:精神イメージとしての宮殿、都市、庭園」『Arts&Media』8, 大阪大学文学研究科アートメディア論研究室, pp. 12-23, 2018/7

3-2. 著書

- 桑木野幸司 『ルネサンス庭園の精神史:権力と知と美のメディア空間』白水社, 387p., 2019/8
- 桑木野幸司 『記憶術全史:ムネモシュネの饗宴』講談社, 348p., 2018/12

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 桑木野幸司 「古川萌著『ジョルジョ・ヴァザーリと美術家の顕彰:一六世紀後半フィレンツェにおける記憶のパトロネージ』」『総人・人環フォーラム』(京都大学), vol. 38, p. 36, 2020/2
- 桑木野幸司 「「閉ざされた庭」の悦楽:純潔にして豊饒なる空間」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 冬, p. 7, 2020/1
- 桑木野幸司 「ヴィッラ・アドリアーナ:記憶のコレクションとしての庭園」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 秋, p. 7, 2019/10
- 桑木野幸司 「閑暇と公務のはざままで:小プリニウスのヴィッラ庭園」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 夏, p. 7, 2019/7
- 桑木野幸司 「アン・ブレア『情報爆発』」『化学史研究』(化学史学会), 第46巻-2号, pp. 27-29, 2019/6
- 桑木野幸司 「黄金宮殿:都心に出現した田園幻想」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 春, p. 7, 2019/4
- 桑木野幸司 「皇帝の月桂樹:プリマ・ポルタの庭園壁画」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 春, p. 7, 2019/1
- 桑木野幸司 「ムネモシュネの饗宴への招待」『講談社 PR 誌』(講談社), pp. 44-45, 2019/1
- 桑木野幸司 「世界史を動かした庭:カエサルとポンペイウスの緑の戦争」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 春, p. 7, 2018/10
- 桑木野幸司 「キケロの庭:緑陰に育まれたペンの力」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 春, p. 7, 2018/7

桑木野幸司 「カトーが愛したキャベツ:共和政ローマの庭園の変遷」『パブリッシャーズレビュー』(白水社), 春, p. 7, 2018/4

3-4. 口頭発表

桑木野幸司 「多様性(varietas)礼賛:初期近代の視覚芸術における inventio 再考」初期近代の芸術・文芸における varietas と inventio, 桑木野幸司代表科研・基盤B, 青山学院大学, 2020/3(COVID-19のため中止)

桑木野幸司 「思考の庭:知の編集空間としての初期近代イタリア庭園」第 41 回サントリー文化財団フォーラム, サントリー文化財団, サントリーアネックス9階大会議室, 2020/1

桑木野幸司 「ルネサンス庭園を見る、読む」『ルネサンス庭園の精神史』(白水社)刊行記念, 白水社・ジュンク堂, ジュンク堂池袋本店4階喫茶, 2019/8

桑木野幸司 「パネル 6 Ut architectura poesis—建築の文法と修辞学」第 14 回表象文化論学会大会:パネル 6 Ut architectura poesis—建築の文法と修辞学, 表象文化学会, 京都大学, 2019/7

Kuwakino, Koji, “A Geometric Receptacle of Knowledge: Information Management in Padua’s Botanical Garden”, Gardens: History, Reception, and Scientific Analyses, Nagoya University, Nagoya University, 2019/2

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

桑木野幸司 第 41 回 サントリー学芸賞, サントリー文化財団, 2019/12

桑木野幸司 大阪大学賞, 大阪大学賞, 2017/11

桑木野幸司 大阪大学総長賞, 大阪大学, 2013/5

桑木野幸司 大阪大学総長奨励賞, 大阪大学, 2012/8

桑木野幸司 地中海学会「ヘレンド賞」, 地中海学会「ヘレンド賞」, 2012/6

桑木野幸司 日本学術振興会賞, 日本学術振興会, 2012/2

桑木野幸司 第五回美術に関する研究奨励賞, 公益財団法人 花王芸術・科学財団, 2011/3

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2016年度～2020年度、基盤研究(B) 一般、代表者:桑木野幸司

課題番号:16H03373

研究題目:創造的思考の基盤としての建築術:初期近代イタリアの美術・文芸における空間の観念

研究経費:2018年度 直接経費 2,500,000円 間接経費 750,000円

2019年度 直接経費 3,000,000円 間接経費 900,000円

研究の目的:

西欧では古来、建築空間を情報整理の際に分類フレームないしは創造的思考の基盤として活用する伝統があった。こうした精神内面の空間構造については、これまで建築史や美術史、思想史などではほとんど明らかにされてこなかった。本研究は、初期近代の記憶術に着目し、精神内に建築的な仮想の情報フレームを組み上げる同術が、同時代の文芸や視覚芸術にいかなる影響を与えていたのかを、領域横断的視点から解明する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

地中海学会・事務局員, 2012年4月～現在に至る

4. 古後 奈緒子 准教授

1972年生。2004年大阪大学 文学研究科文化表現論(美学)修了、修士(文学)。京都造形芸術大学、大阪外国語大学、

龍谷大学、神戸市外国語大学、奈良大学、神戸女学院大学等の非常勤講師、2014年大阪大学文学研究科助教を経て、2017年4月より現職。2001年日本演劇批評家協会主催第5回「シアターアーツ賞」受賞。2001年舞踊学会研究奨励賞。専攻：舞踊学

4-1. 論文

古後奈緒子 「ドキュメンテーション／アーカイブの残跡」『記憶の劇場 総合学術博物館の試み』大阪大学出版会, pp. 159-183, 2020/3

古後奈緒子 「クリストフ・シュリンゲンジーフとヒトラー—欲望と注視の再分配—」『ナチス映画論』森話社, pp. 251-260, 2019/12

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

古後奈緒子, G, ブラントシュテッター, 針谷真理子他(共訳) 「制作と稽古と継承のはざま」中島那奈子、外山紀久子(共編)『老いと踊り』頸草書房, pp. 43-57, 2018/12

4-4. 口頭発表

古後奈緒子 「(電気の女神)は何を表象するのか」第71回舞踊学会, 舞踊学会, 専修大学生田キャンパス, 2019/12

Kogo, Naoko, “Interface between local tradition and modernism of dance”, Working Group: Historiography, International Federation of Theater Research, Shanghai Theatre Academy, 2019/7

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪アーツカウンシル・委員, 2018年5月～現在に至る

大阪市芸術文化活動助成・審査委員, 2018年5月～現在に至る

文化庁芸術文化振興基金・助成事業視察委員, 2018年4月～現在に至る

5. 東志保 助教

1979年生。国際基督教大学比較文化研究科博士前期課程修了(比較文化論)。パリ第三大学映画視聴覚研究博士(Docteur en Cinéma et Audiovisuel)。国際基督教大学平和研究所助手、同大学非常勤講師、岩手大学非常勤講師を経て2017年より現職。専攻：映像研究／比較文化論

5-1. 論文

Azuma Shiho, “The utilization of the lightweight equipment by Jean Rouch and Chris Marker: Cinéma vérité and images of Africa”, *Dispositif*, Cinema & Transmedia Institute at Dong Eui University, Vol.06, pp.7-17, 2020/01

東志保 「「交差する視線—ジャン・ルーシュとクリス・マルケル」」千葉文夫・金子遊(共著)『ジャン・ルーシュ 映像人類学の越境者』森話社, pp. 185-208, 2019/10

東志保 「「ヨリス・イヴェンスのエッセイ映画—『セーヌの詩』から『ロッテルダム・ユーロポート』まで」」『Arts and Media』9, 大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室, 2019/7

東志保 「シネマ・ヴェリテの勃興—ジャン・ルーシュとクリス・マルケル—」『neoneo』11, neoneo 編集室, pp. 58-61, 2018/7

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

東志保 「書評 須藤健太郎著『評伝 ジャン・ユスターシュ 映画は人生のように』」『日本映画学会学報』(日本映画学会), 59, 日本映画学会, pp. 10-13, 2020/3

東志保 「連続公開セミナーおよび国際ワークショップ「展示の映画」(5/8, 15, 22, 29)「イメージと時間:写真、映画、ニューメディア」(5/26)」, 『表象文化論学会ニューズレター REPRE』(表象文化論学会), 37, 表象文化論学会, 2019/10

東志保 「<シネマフィア>を探して」『日本映像学会報』(日本映像学会), 186, 日本映像学会, p2, 2019/10

東志保 「表象文化論学会第 13 回研究発表集会報告 関連企画 バザン・レリス・闘牛—映画『闘牛』の上映とワークショップ」, 『表象文化論学会ニューズレター REPRE』(表象文化論学会), 35, 表象文化論学会, 2019/2

5-4. 口頭発表

Azuma, Shiho, “La photographie, le cinema et le bricolage : Chris Marker et Agnes Varda (写真、映画、ブリコラージュ:クリス・マルケルとアニエス・ヴァルダ)”, International Workshop L’image et le temps : la photographie, le cinema et les nouveaux medias (国際ワークショップ「イメージと時間:写真、映画、ニューメディア」), 大阪大学文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論講座, 大阪大学文学研究科, 2019/5

東志保 「ジャン・ルーシュとクリス・マルケル—アフリカとシネマ・ヴェリテ」日本映像学会関西支部研究会, 日本映像学会, 関西学院大学, 2019/3

東志保 「クリス・マルケルのトランスポジション」恵比寿映像祭, 東京都写真美術館, 日仏会館, 2019/2

東志保 「アニエス・ヴァルダのインスタレーションにみられるブリコラージュの美学」日本映像学会全国大会, 日本映像学会, 東京工芸大学, 2018/5

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2017 年度～2018 年度、研究活動スタート支援、代表者:東志保

課題番号:17H06824

研究題目:映画における移動の意味に関する研究—イヴェンス、マルケル、ヴァルダの作品を中心に

研究経費:2018 年度 直接経費 300,000 円 間接経費 90,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、1920年代から80年代にかけて活躍した、ヨーロッパの記録映画の草分け的存在であるヨリス・イヴェンス、そして、戦後フランスの代表的な記録映画作家のクリス・マルケルとアニエス・ヴァルダという、同時代に活躍した3人の映像作家の作品を「移動」という主題に沿って分析する。彼らの映画制作において、なぜ「移動」が重要な役割を担ったか、その理由を作品の生成過程を検討することで明らかにし、さらに、彼らが「移動」することで表現した映像美学と社会的・思想的背景の関連性を明らかにすることにある。三者の映像作品のつながりに、「移動」というモチーフから焦点をあてることで、世界各地をカメラに収めた初期の

記録映画にみられる異国趣味や移動の持つ意味の変質の経緯を明らかにしていく。つまり、個別の映像作家についての研究を超え、ヨーロッパの記録映画における「移動」の系譜を問い直す、映画史に新たな視座をもたらす研究となる。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

5-7-1. 2019年度、2：その他共同研究、助成金獲得者：東志保

助成金名：大阪大学国際共同研究促進プログラム(短期人件費支援)

研究題目：映画、写真、ビデオ、インスタレーションの美学的観点からの比較研究

助成団体名：大阪大学

助成金額：2019年度 直接経費 1,771,139円

研究の目的：

デジタルメディアの到来によって、痕跡性によって特徴付けられていた映画や写真固有のメディアの特性が失われた「ポストメディア状況」と呼ばれる現代において、映画をめぐる状況は、刻々と変化している。本研究は、映画的映像の美学的性質を、間メディア性によって分析した映画研究の第一人者であるフィリップ・デュボワ氏を招き、申請者と共同研究を進めることで、写真、映画、ビデオ、インスタレーションの比較考察を通して、変容しつつある映画イメージの映像美学のあり方を明らかにすることを目的とするものである。

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本映像学会関西支部・幹事, 2018年6月～現在に至る

2-26 文学環境論

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 4 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：平田 由美、金水 敏、三谷 研爾、石割 隆喜
准教授：鈴木 暁世

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
4	0	0	0	0	0

※うち留学生1名、社会人学生0名

3. 修了生(2018年度～2019年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2018	3
2019	2
計	5

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

文学環境論コースでは、広い視野を持った研究を求めて、日本文学・東洋文学から欧米文学にわたる文学世界を広く研究領域とし、作品とそれを取り巻く外界（環境）との関わりを多角的に捉え、文学に対する根源的な問いを試みていくことをめざしている。そのために、教育においては、文学テキストの読解力、文学環境論にかかわる研究理論についての理解力、研究分野における基本的文献の分析力の増進を目標とした。同時にまた、高度専門職業人の養成のための基礎教育を充実させることを目標とした。

2. 研究

本コースの研究は、多岐にわたる。一つの時代・地域のあり方や社会通念と文学作品との関係、異文化交流や他言語との接触、サブカルチャーの研究など、テーマが多く、領域横断的なアプローチや新しい研究理論も必要となり、翻訳も研究の一方法となる。そのような文学環境論のディシプリンの確立をめざして、各方面で研究活動を積極的に進めていくことを目標とした。また、科研費等の外部資金の獲得をめざし、努力すること、大学院生については個々の研究課題にしつ

かりと取り組み、着実に進めていくこと、研究室態勢としても、設備・備品の充実と、研究環境の維持・改善に努めること、などを目標とした。

3. 社会連携

本コースは、今日的知見と広範な素養を修得し、ジャーナリズム・マスコミ・教職関係等での活動をはじめ、国際的環境において活躍できる高度な専門的職業人の養成をめざしている。国際化し、情報化していく現代社会について、またさまざまな問題を孕んで多様化していく現代文化について、視野の拡大や知識の拡充に努め、具体的には、翻訳や出版についての実際に触れ、実践を試みて、専門的な知識や知見を増強することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

日本語・英語・ドイツ語文献を中心に読解力と分析力の基礎学力を鍛えるトレーニングを行い、それらの諸力を増進させることにはかなりの進歩が見られた。修士論文の作成についても、主指導教員のみならず全教員による集団指導体制で充実した指導と助言を行うことができた。その結果、2018年度は3名、2019年度は2名が修士論文を提出した。在籍中の院生に対しても、今後の修士論文の作成に向けて同様の体制で指導を行なった。2018年度は、ノルウェー、ロシア、中国からの留学生が院生として在籍し、また韓国からの研究生も在籍、2019年度は中国と韓国からの留学生が院生として在籍するなど、研究活動の活性化に貢献し、広く日本と海外の文学を研究領域とすることの実が挙げられた。2018年度末には修士論文を発表する会を公開で催し、成果を共有するとともに、在籍中の院生ならびに進学予定の学部生に経験に基づくアドバイスを与える貴重な場となったものの、2019年度末は新型コロナウイルス感染拡大防止のため同会の開催は中止となった。2018年度には文化表現論専攻より金水敏教授が兼任教員として加わり、コースの指導体制がより充実したものとなった。同年度末で清水康次教授が定年退職となった。

2. 研究

教員は、活発な研究活動を行い、著作、論文、翻訳などの刊行・出版等の点数は多数にのぼる。また、学会や各種研究会への参加等にも積極的に取り組んだ。院生は、2018年度には3名の修了生を出し、M1の2名と研究生1名を含めて、それぞれの研究テーマについての研鑽に努めた。2019年度には2名の修了生を出し、M1の2名も含め、やはりそれぞれの研究テーマについての研鑽に努めた。研究室の設備・備品についても、着実に充実してきており、研究環境もコース全体の活気も高い。

3. 社会連携

教育においては、所属院生がノルウェーのウェブ媒体で論考を発表するなど、専門的な知識を社会に対して主体的に活用するための力の涵養が進んだ。教員による国内外の学術講演や、21世紀懐徳堂 i-spot 講座をはじめとする一般に向けた講演会等への参加も積極的に行われた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

成果としては、それぞれの研究能力の向上があり、研究自体にも高い評価が得られている。2018年度に提出された修士論文は、日本人学生1名と留学生2名、2019年度に提出された修士論文は日本人学生1名と留学生1名によるもの。いずれも充実した個性的な研究である。留学生は入学後の日本語能力の著しい向上のみならず、研究にも高い評価が得られ、うち1名は、ノルウェーのウェブ媒体に論考が掲載されたばかりでなく、修士論文をもとに『待兼山論叢 文化動態論篇』第53号(2019)にも英語による論文が掲載された。在学中の院生は授業等での熱心な取り組みだけではなく、学

外の研究活動にも参加し、着実に力を伸ばした。2018年度の研究生1名は留学生で、日本の近代文学を研究対象とし、日本語能力を向上させ、将来の研究に向かう準備を整え、専門的研究の基礎となる読解力・理解力・分析力などが着実に向上し、2019年度に院生として入学、日本人院生と机を並べながら本格的な日本近現代文学の研究に着手した。同時に、日本人院生も日本文学を研究する留学生から大いに刺激を受け、伝統的に国際色豊かな研究室の雰囲気は引き続き院生に好影響を与えていると言える。2018年度末には成果および修士論文執筆のノウハウを進学予定の学部生をも含め共有するための修士論文発表会を公開で開催することができた。総じて目標の達成は実現できたと評価する。

2. 研究

教員の論文発表や学術書の刊行、国内外における学会、シンポジウム、ワークショップへの参加などを通じた研究成果が目標どおりに上がっている。大学院生の中にも、海外のウェブ媒体や『待兼山論叢』に論文が掲載されるなど、研究の成果が上がっている。目標の達成は実現できたと評価する。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	0(0)	1(0)
2019	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)
計	1(0)	0(0)	0(0)	1(0)	0(0)	2(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	0	0	0	0	0	0
2019	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2018年度】

イングヴィル・シャースタイン"Ei japansk mors røyndomsflukt", yonda! yonda!, 2018/9/14

【2019年度】

Ingvill Kjaerstein, "Perfect Mirrors: An Examination of Mother and Daughter Relationships in Modern Japanese

(2)口頭発表

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2018年度 0名

2019年度 0名

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2018年度～2019年度の大学院修士課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4名

2018年度：3名 2019年度：1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 4名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度：0名 2019年度：0名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

なし

7. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 清水 康次 教授

1954年生まれ。京都大学文学部(国語学国文学専攻)卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程(国語学国文学専攻)修了。博士(文学)(京都大学、1995)。大阪女子大学助教授、京都光華女子大学教授等を経て、2009年10月より現職(2019年3月定年退職)。専攻：日本近代文学、書誌出版文化研究

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

清水康次『「羅生門」の世界と芥川文学』大阪大学出版会, 240p., 2019/1

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 平田 由美 教授

1956年生。大阪外国語大学外国語学研究科修士課程日本語学専攻修了。博士（文学）（京都大学）。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：日本文学・文化研究／ジェンダー研究

2-1. 論文

Hirata, Yumi, "Transitional identities and heteroglossia in Zainichi Korean Literature"『待兼山論叢 文化動態論編』(阪大文学会), 52, pp. 1-20, 2018/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

平田由美 「Recalling Refugees: Narrative of Mobility in Yoshida Tomoko」"Crossroads of cultures": Sakhalin Island from the perspective of history and literature, Sakhalin State University, Sakhalin State University, 2019/9

Hirata, Yumi, (パネリスト) "Reshaping the Narrative of Mobility", History Course Workshop: The Memories of Conflicts and Reconciliation: The Memories of Conflicts and Reconciliation, The College of Asia and the Pacific, Australian National University, 2019/3

平田由美 (招待講演)「移動の経験を歴史化／現代化する」北京第二外国語学院国際学術研究集会歴史中的移動:歴史の中の移動, 北京第二外国語学院, 北京第二外国語学院, 2018/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 第15回女性史青山なを賞, 2000年

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 金水 敏 教授

1956年生。1982年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。博士（文学）（大阪大学、2006年）。東京大学助手、神戸大学教養部講師、大阪女子大学助教授、神戸大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。専攻：国語学／言語学

3-1. 論文

金水敏 「古賀悠太郎著『現代日本語の視点の手研究-体系化と精緻化-』」日本語文法学会(編)『日本語文法』(日本語文法学会), 20-1, くろしお出版, pp. 62-70, 2020/3

金水敏 「村上春樹作品と日本語史の「共鳴」-『騎士団長殺し』騎士団長の「あらない」再考-(増補版)」金水敏(編)『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(3)』科学研究費助成事業「「役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究」, pp. 38-47, 2020/3

土井光祐, 金水敏(共著) 「高山寺蔵『観智記 第二』鎌倉時代中期写本・影印」高山寺典籍文書総合調査団(編)『平成三十年度高山寺典籍文書総合調査団 研究報告論集』(高山寺典籍文書総合調査団), pp. 120-165, 2020/3

土井光祐, 金水敏(共著) 「高山寺蔵『観智記』鎌倉時代中期写本 解題並びに翻字本文」高山寺典籍文書総合調査団(編)『高山寺経蔵の形成と伝承』汲古書院, pp. 321-393, 2020/3

中野直樹, 金水敏(共著) 「岩屋寺蔵思溪版『高僧伝』巻第一 改題」国際仏教学大学院大学 日本古写経研究所(編)『日本古写経善本叢刊第十輯 法道寺蔵天平写経 雑阿含経 卷第三十六／岩屋寺蔵思溪版 高僧伝 巻第一』(国際仏教学大学院大学 日本古写経研究所), pp. 107-110, 2019/11

金水敏 「SP レコード資料における人の存在文」金澤裕之・矢島正浩(編)『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』笠間書院, pp. 190-199, 2019/8

金水敏 「村上春樹作品と日本語史の共鳴-『騎士団長殺し』騎士団長の「あらない」再考-」中村三春(監修)『村上春樹における共鳴』(村上春樹研究センター), 淡江大学出版中心, pp. 29-40, 2019/7

金水敏 「「焦点」の外延的意味論による解釈一斑」『語文』(大阪大学国語国文学会), 第112輯, 大阪大学国語国文学会, pp. 1-6, 2019/6

金水敏 「第六章 アニメキャラクターの言葉」田中牧郎(編)『現代の語彙-男女平等の時代- シリーズ〈日本語の語彙〉7』朝倉書店, pp. 72-83, 2019/4

金水敏 「役割語としてのヴァーチャル時代語」田中ゆかり・金水敏・小玉竜一(共編著)『時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる!』笠間書院, pp. 9-20, 2018/11

金水敏 「小説における仮名の一用法と翻訳-村上春樹作品を例に-」『ことばと文字』10, くろしお出版, pp. 83-89, 2018/10

金水敏 「キャラクターとフィクション-宮崎駿監督のアニメ作品、村上春樹の小説をケーススタディとして」『「キャラ」概念の広がりと深まりに向けて』ひつじ書房, pp. 64-83, 2018/7

金水敏 「魅惑するナカタさんワールド」『村上春樹における魅惑』淡江大学出版中心, pp. 43-60, 2018/6

金水敏 「リスト存在文について」『ヴァリエーションの中の日本語史』くろしお出版, pp. 89-100, 2018/4

3-2. 著書

金水敏(編)『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書 (3)』大阪大学大学院文学研究科, 50p., 2020/3

金水敏(編)『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(2)』大阪大学大学院文学研究科, 59p., 2019/3

金水敏, 田中ゆかり, 児玉竜一(共編)『時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる! : 世界観を形作る「ヴァーチャル時代語」』笠間書院, 135p., 2018/11

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

金水敏 「文学部卒業セレモニーの式辞をめぐる所感」『懐徳』(懐徳堂記念会), pp. 2-4, 2019/1

金水敏 「ヴァーチャル日本語 平成最後の! 金水×田中の年忘れ&新春対談(新春編)」『研究社 WEB マガジン Lingua (リング)』研究社, p. 1, 2019/1

金水敏 「ヴァーチャル日本語 平成最後の! 金水×田中の年忘れ&新春対談(番外編)」『研究社 WEB マガジン Lingua (リング)』研究社, p. 1, 2019/1

金水敏 「ヴァーチャル日本語 平成最後の! 金水×田中の年忘れ&新春対談(年忘れ編)」『研究社 WEB マガジン Lingua (リング)』研究社, p. 1, 2018/12

金水敏 「卒業式「式辞」をめぐる所感」『大阪大学国語国文学会会報』(大阪大学国語国文学会), 50, p. 1, 2018/10

金水敏 「格助詞【歴史】」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 137-138, 2018/10

金水敏 「口語文法・文語文法」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 363-365, 2018/10

金水敏 「構文史」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 370-371, 2018/10

金水敏 「構文論」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 371-373, 2018/10

金水敏 「存在表現」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 587-588, 2018/10

金水敏 「陳述」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 648-649, 2018/10

金水敏 「人称」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 730-732, 2018/10

金水敏 「役割語」日本語学会(編)『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 967-968, 2018/10

金水敏 「書評: 泉子・K・メイナード(著)『話者の言語哲学-日本文化を彩るバリエーションとキャラクター-』くろしお出版. 2017」『社会言語科学』(社会言語科学会), 21-1, pp. 381-383, 2018/9

金水敏 「研究社紹介 008 金水 敏「日本語史・現代日本語・役割語 多岐にわたる研究のルーツに迫る」『国語研 ことばの波止場』(国立国語研究所), 4, 国立国語研究所, p. 13, 2018/9

金水敏 「第3回「役割語とキャラクターの悩ましい関係(2)」」『研究社 WEB マガジン Lingua (リング)』研究社, p. 1, 2018/7

金水敏 「第2回「役割語とキャラクターの悩ましい関係(1)」」『研究社 WEB マガジン Lingua (リング)』研究社, p. 1, 2018/6

金水敏 「第1回「役割語って何? 私たちはどうやって役割語の知識を得るの?」」『研究社 WEB マガジン Lingua (リング)』研究社, p. 1, 2018/5

3-4. 口頭発表

金水敏 「大阪弁ぼちぼち講座-「知らんけど」の秘密」Handai-Asahi 中之島塾, 大阪大学 21 世紀懐徳堂、朝日カルチャーセンター, 大阪大学中之島センター, 2020/1

金水敏 「ニ受身文と被害の意味について」日本語文法学会第 20 回記念シンポジウム「日本語文法研究の射程」第 1 部「受身文研究の現在地」, 日本語文法学会, 学習院大学, 2019/12

金水敏 「焦点構文の統語論と意味論(試論)」研究会「係り結び関連現象の通言語的研究に向けて」, 科研費(新学術領域)「ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明」公募班「日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて」, 大阪大学豊中キャンパス法経研究棟 3FL2 講義室, 2019/12

金水敏 「日本語ポップカルチャー作品の言語の特徴-ジブリアニメを例に-」明治大学国際日本学研究科 特別講義, 明治大学国際日本学研究科, 明治大学国際日本学研究科 特別講義, 2019/12

金水敏 「「ほんまかいな」「しらんけど」大阪弁の虚像と実像」文字・活字文化推進事業講演会, 豊中市立岡町図書館, 豊中市立岡町図書館, 2019/11

金水敏 「フィクションの話し言葉を考える-役割語を軸として-」安田女子大学 日本文学会学術講演会, 安田女子大学 日本

- 文学会, 安田女子大学 1号館 3階 1305 教室, 2019/11
- 金水敏 「日本語名詞述語文の構造と意味再訪」形態・レキシコン研究会 (MLF) 2019, 形態・レキシコン研究会 (MLF), 神戸大学 六甲台第2キャンパス 人文学研究科 B 棟, 2019/8
- 金水敏 「基調講演③「村上春樹と方言について—登場人物・作家の移動と痕跡—」」2019 年第 8 回村上春樹国際シンポジウム, 村上春樹研究センター, 北海道大学, 2019/7
- 金水敏, 高島幸次 「SP レコード音源に聞く明治・大正の上方落語」Handai-Asahi 中之島塾, 21 世紀懐徳堂／朝日カルチャー, 大阪大学中之島センター, 2019/3
- 金水敏 「都市の美を考える会: 座学「言葉から見た街。」」都市の美を考える会, DAS(一般社団法人 総合デザイナー協会), 長堀安田ビル(6階会議室), 2019/2
- 金水敏 「日本語の指示詞研究再訪」「言語と主観性」プロジェクト勉強会, inalco, inalco, 2018/12
- 金水敏 「日本語の役割語・キャラクター言語研究と翻訳」講演会, inalco, inalco, 2018/11
- 金水敏 「日本の大衆文化・大衆芸能の発達と役割語について」役割語研究会, 役割語研究会, 大阪大学豊中キャンパス文法経済学教育研究棟・文 11 教室, 2018/10
- 金水敏 「講演「日本の大衆文化・大衆芸能の 発達と役割語について」」兵庫教育大学言語表現学会 平成 30 年度第 2 回研究発表会, 兵庫教育大学言語表現学会, 兵庫教育大学言語表現学会, 2018/9
- 金水敏 「Role Language, Character Language and Structure of Fiction」Festival: Japanska språket i popkultur(Popular Culture Festival), Göteborgs Universitet(ヨーテボリ大学), Göteborgs Universitet(ヨーテボリ大学), 2018/9
- 金水敏 「私の言語研究と「人文学」のめざすところ」生命機能研究科長主催セミナー Dean's Night 第 1 回, 大阪大学大学院生命機能研究科長, 大阪大学生命機能研究科生命システム棟2F セミナー室, 2018/9
- 金水敏 「Functional Change of Adnominal Form in Heian-Kamakura Japanese」Corpus-Based Studies on Japanese Historical Grammar(NINJAL-Oxford International Symposium on the Japanese Diachronic Corpora), 国立国語研究所/Oxford University, 国立国語研究所 2階 講堂, 2018/9
- 金水敏 「発話によってキャラクターを表現する—役割語・キャラクター言語の漢日対照研究と翻訳—」第 10 回中日対照言語学シンポジウム, 中日対照言語学研究(協力)会, 蘇州大学敬賢堂, 2018/8
- 金水敏 「文学部長と経済学者との対話から—“社会”とどのように関わるか—」「国際日本研究」コンソーシアム主催国際ワークショップ「人文科学と社会科学の対話—国際日本研究の立場から—」, 国際日本研究コンソーシアム, 国際日本文化研究センター, 2018/7
- 金水敏 「関西人のコミュニケーションのイメージと実態」芦屋読書会, 津村雅一氏, 芦屋・津村邸, 2018/7
- 金水敏 「『騎士団長殺し』騎士団長の話し方について」役割語研究会, 役割語研究会, 大阪大学豊中キャンパス文法経済研究講義棟 文 11 教室, 2018/5
- 金水敏 「パネルディスカッション『『騎士団長殺し』をめぐる』パネリスト②」2018 年第 7 回村上春樹国際シンポジウム, 村上春樹研究センター, 淡江大学守権国際会議センター, 2018/5
- 金水敏 「基調講演 2『騎士団長殺し』騎士団長の「あらない」再考」2018 年第 7 回村上春樹国際シンポジウム, 村上春樹研究センター, 淡江大学守権国際会議センター, 2018/5
- 金水敏 「“主題”について」NINJAL コロキウム, 国立国語研究所, 国立国語研究所・多目的室, 2018/5
- 金水敏 「関西人のコミュニケーションのイメージと実態」プロジェクトマネジメント学会(PM 学会)関西支部 平成 30 年度春季シンポジウム, プロジェクトマネジメント学会(PM 学会)関西支部, マイドームおおさか 8階 第 1・2 会議室, 2018/4
- 金水敏 「フィクションのこぼれいろいろ～役割語を中心に～」豊中市中央公民館, 豊中市中央公民館, 豊中市中央公民館, 2018/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 金水敏 第25回新村出賞, 新村出版記念財団, 2006/11
- 原口裕, 南出康世, 金水敏 豊田賞, 日本英学史学会, 1992/10

金水敏, 田窪行則 日本認知科学会論文賞, 日本認知科学会, 1991/7

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2019年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:金水敏

課題番号:19K00574

研究題目:役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究

研究経費:2019年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究では、フィクションの登場人物の発話が表現する人物像に着目し、これを「役割語・キャラクター言語」の観点から分析するとともに、その翻訳の(不)可能性や代替手段について研究し、人物像の描写の観点から見た翻訳の評価について探求を進める。具体的な方法としては、村上春樹の小説作品の各国語訳と原典との対照、またさまざまな外国語作品の日本語訳の分析を語彙・文法等言語学的な観点から進めるとともに、発話以外の部分や非言語的な側面、また物語の構造とアーキタイプ等にも着目して進めていく。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

地方裁判所委員会・委員, 2019年7月～現在に至る

日本語学会・会長, 2018年6月～現在に至る

国際日本文化研究センター・運営委員, 2018年4月～現在に至る

国立国語研究所客員教授, 2016年4月～現在に至る

訓点語学会・委員, 2015年4月～現在に至る

日本言語学会・評議員, 2015年4月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2014年10月～現在に至る

日本語学会・評議員, 2014年4月～現在に至る

関西言語学会・委員, 1996年4月～現在に至る

4. 三谷 研爾 教授

1961年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、大阪大学)。大阪府立大学助手、講師、大阪大学准教授をへて2008年4月から現職。専攻:ドイツ、オーストリア文学および文化研究

4-1. 論文

三谷研爾 「ある越境的知識人の肖像 プラハ出身の文学者ペーター・デーメツ」『独文学報』34, 大阪大学ドイツ文学会, pp. 63-75, 2018/11

4-2. 著書

三谷研爾 『東欧文学の多言語的トポス』水声社, pp. 16-58, 2020/3/25

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

三谷研爾「中島敦 植民地・存在論・物語」十三社会思想研究会例会, 十三社会思想研究会, 大阪大学, 2019/3

三谷研爾「ボヘミアにおけるドイツ文学史記述」東欧文学の多言語的トポス, 「東欧文学の多言語的トポスをめぐる研究」研究グループ, 東京大学, 2018/10

三谷研爾「地域文学史を書く ボヘミアとシレジア」十三社会思想研究会例会, 十三社会思想研究会, 大阪大学, 2018/7

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2015年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:三谷研爾

課題番号:15K02414

研究題目:〈プラハのドイツ語文学〉受容の社会文化史的研究

研究経費:2018年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究課題は、世紀転換期のプラハの複数文化的環境の経験と記憶、およびその環境を背景に生まれたドイツ語文学が、第二次世界大戦後に受容されてきた過程を検証する。そこでは、受容者自身が社会的・文化的な「境界」に身を置いたとき、プラハの過去との対話をとおして積極的な表現活動の主体となるという文化生産・創造のメカニズムが働いてきた。このメカニズムを、1960年代から2000年代にかけて、それぞれ異なった社会文化的コンテクストのもとで著述をおこなった知識人グループに即して検討し、〈プラハのドイツ語文学〉受容の意義を明らかにする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本オーストリア文学会・学会賞選考委員, 2017年5月～現在に至る

日本オーストリア文学会・阪神地区幹事, 2015年5月～現在に至る

関西チェコ/スロバキア協会・会長, 2009年4月～現在に至る

大阪大学ドイツ文学会・会長, 2008年1月～現在に至る

5. 石割 隆喜 教授

1970年生まれ。大阪外国語大学外国語学部(英語学科)卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程(英文学専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、1999)。大阪外国語大学助手、講師、助教授、准教授、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2019年4月より現職。日本英文学会第22回新人賞(1999)。専攻:アメリカ文学

5-1. 論文

石割隆喜「光は暴く——*Vineland*における映画的リアリズム」『待兼山論叢 文化動態論篇』(大阪大学大学院文学研究科), 53, pp. 1-19, 2019/12/25

石割隆喜「映画的ミメシス——*Gravity's Rainbow*における現実の表象」『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 59, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 201-219, 2019/3

石割隆喜「光は暴く——*Vineland*における映画的リアリズム」『日本英文学会第90回大会 Proceedings』(日本英文学会), 日本英文学会, pp. 23-24, 2018/9

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

石割隆喜 「光は暴く——*Vineland* における映画的リアリズム」日本英文学会第 90 回大会, 日本英文学会, 東京女子大学, 2018/5『日本英文学会第90回大会 Proceedings』pp. 23-24, 2018/9)

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞, 日本英文学会, 1999/12

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2017年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:石割隆喜

課題番号:17K02545

研究題目:「見ること」を中心とする、ピンチョン小説における認識論の残余についての研究

研究経費:2018年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

2019年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

本研究は、「見ること」をめぐる小説としてのピンチョン作品における認識論の残余」という観点からトマス・ピンチョンの小説作品の特質を解明することを全体構想とする研究の一環として、特に『重力の虹』『ヴァインランド』『メイスン&ディクスン』を取り上げ、同観点からの分析により、これら3つの小説のピンチョン作品全体の中での位置付けを明らかにしようとするものである。3作品との関連で本研究が具体的に取り上げる「見ること」とは、映画(『重力の虹』『ヴァインランド』)と天体観測(『メイスン&ディクスン』)である。また「見ること」をより原理的に考察するために、哲学における認識論を本研究遂行上の基本的参照枠とする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会関西支部・大会運営委員, 2019年4月～現在に至る

日本アメリカ文学会関西支部・評議員, 2011年4月～現在に至る

2-27 言語生態論

I. 現在の組織

1. 教員(2020年5月現在)

教授 4 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：田野村忠温、神山 孝夫、渋谷 勝己、岡田 禎之

2. 在学生(2020年5月現在)

2020年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
3	0	0	0	0	1

※うち留学生0名、社会人学生0名

3. 修了生(2018年度～2019年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2018	1
2019	1
計	2

II. 掲げた目標(2018年度～2019年度)

1. 教育

従来の方法にとらわれない柔軟な姿勢で、より広い総合的な見地から言語を見る素地を養うべく、5名の教員が個々に担当する講義および演習等をおとして、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につけさせることを目標とした。

2. 研究

院生各自が既存の枠組みにこだわらず独自に研究課題を設定して、5名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、従来の言語研究の成果に立脚しつつ、新たな分析方法を模索して言語を分析するための実践的な研究能力を身につけることを目標とした。

3. 社会連携

研究者を養成するばかりでなく、実際に言語教育に携わっている学校教員、新聞・雑誌、出版・宣伝広告等に関わっている社会人を高度専門職業人として養成し、その結果を社会に還元することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2018年度～2019年度)

1. 教育

院生は各自の関心に従い、教員が担当する言語生成論、言語接触論、言語変化論、言語分析論、比較言語学の講義および演習を選択履修し、各自の研究のための基礎を養った。

2. 研究

院生は各自の関心に従い、課題を独自に設定し、必ずしも既存の枠組みにとらわれない独自の方法で研究を進めた。その成果を教員と院生の全員が出席する演習において順次発表し、さまざまな議論を交わすなかで修士論文作成の準備を進めた。

3. 社会連携

特筆すべき活動はなかった。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2018年度～2019年度)

1. 教育

学生は各自の関心に従い、5名の教員が個々に担当する講義および演習を履修して、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につけた。よって掲げた目標はほぼ達成されたと考える。

2. 研究

院生各自は既存の枠組みにとらわれずに、自由に実践的な課題を設定し、5名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、従来の言語研究の考え方に立脚しつつ、新たな分析方法を模索した。よって掲げた目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

特筆すべき活動はなかった。

Ⅴ. 基本情報(2018年度～2019年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2018	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2019	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2018	0	0	0	0	0	0
2019	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

なし

(2)口頭発表

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2018年度 0名

2019年度 0名

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2018年度～2019年度の大学院修士課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2018年度：1名 2019年度：0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 1名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2018年度：0名 2019年度：0名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

2018年8月3日 第101回待兼山ことばの会を開催。

松井理直氏(大阪保健医療大学)「現代日本語の撥音と促音について」

2019年8月2日 第102回待兼山ことばの会を開催。

松井理直氏(大阪保健医療大学)「日本語の無声化母音再考」

7. 教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 加藤 正治 教授

1955年生。名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程修了(英語学講座)。文学修士(名古屋大学、1979年)。名古屋大学助手、甲南女子大学講師、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授(2020年3月定年退職)。専攻：英語学

1-1. 論文

加藤正治「Moulton (2004) "External arguments and gerunds"に対する短評」『待兼山論叢』53, 大阪大学文学研究科, pp. 21-28, 2019/12

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 田野村 忠温 教授

1958年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学(言語学専攻)。文学修士(京都大学、1984)。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：言語学・日本語学

2-1. 論文

田野村忠温「ドイツ国名「独逸」成立の過程とその背景—社会的条件と日本語における音訳語の特異性—」『東アジア文化交渉研究』13, 関西大学大学院東アジア文化研究科, pp. 61-79, 2020/3

田野村忠温「日本語の呼称の歴史」『大阪大学大学院文学研究科紀要』60, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 127-183, 2020/3

田野村忠温「[日本語学]とその関連語—意味と構造の変容—」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 三十九』, 和泉書院, pp. 左1-18, 2020/3

田野村忠温「福沢諭吉の「コルリ」(カレー)をめぐる」『阪大日本語研究』32, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp.

25-35, 2020/2

- 田野村忠温 「新出資料道光本《華英通語》及中国早期英語学习書の系譜」(朱晓平译)沈国威・彭曦・王奕红主编『亚洲概念史研究』第五卷, 商务印书馆, pp. 113-136, 2019/12
- 田野村忠温 「言語研究資料としての近代中国地理文献彙集の信頼性—『海国図志』と『小方壺齋輿地叢鈔』—」『或問』36, 白水社, pp. 1-10, 2019/12
- 田野村忠温 「19 世紀中国有关英語的出版物对日本人英語学习的影响: 概観与福泽諭吉《增訂華英通語》的分析」(孫晓译)李雪涛、沈国威主编『亚洲与世界』第 2 辑, 社会科学文献出版社, pp. 320-334, 2019/11
- 田野村忠温 「和製英語—悪習との訣別—」『日本語学』38-7, 明治書院, pp. 54-63, 2019/7
- 田野村忠温 「中国初期英語学習書における英語発音の漢字表記—流音の知覚と表記—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』59, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 221-272, 2019/3
- 田野村忠温 「中国語を表す言語名の諸相—その多様性、淘汰と変質、用法差—」『待兼山論叢』52 文化動態論篇, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 67-102, 2018/12
- 田野村忠温 「ダッシュ、プライム」『数学セミナー』57-8, 日本評論社, pp. 54-58, 2018/8

2-2. 著書

- 内田慶市, 田野村忠温(共編著)『『華英通語』四種—解題と影印—』, 関西大学出版部, 解題篇 pp. 21-67, 影印篇 pp. 69-661, 2020/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 田野村忠温 「正規表現」, 日本語学会編『日本語学大辞典』, 東京堂出版, p. 560, 2018/10

2-4. 口頭発表

- 田野村忠温 「咖喱的中文名称小史」“近代以来的西餐、洋皮书与大餐馆”工作坊, 复旦大学, 2020/3/27-28 (COVID-19 のため開催中止)
- 田野村忠温 「再論日本語の呼称の歴史」漢字文化圏近代語研究会 2020 年国際シンポジウム, 漢字文化圏近代語研究会, 上海外国語大学, 2020/3/14-15 (COVID-19 のため開催中止)
- 田野村忠温 「『英吉利国訳語』の編纂過程」関西大学東西学術研究所研究例会(言語交渉研究班), 関西大学, 2020/1
- 田野村忠温 「中日两国语言中的德国国名的历史—附论“额呀马尼雅”」四百年來东西方语言之互动—近代东西语言接触研究学术会议 2019, 北京外国語大学, 2019/11
- 田野村忠温(基調講演)「日本語の呼称の歴史」日本近代語研究会 2019 年度春季発表大会, 日本近代語研究会, 関西大学, 2019/5
- 田野村忠温 「日中言語交流の過去と現在」湖北第二師範学院講演会, 湖北第二師範学院, 2019/5
- 田野村忠温 「近代日中語彙交流の研究と言語資料アーカイブ」華中科技大学講演会, 華中科技大学, 2019/5
- 田野村忠温(基調講演)「言語研究に対する電子資料の新たな衝撃—コーパスの先にあるもの—」第四屆中南地区日語教学研究学术研讨会, 湖南大学, 2019/3
- 田野村忠温 「中国語における日本語の呼称の変遷」漢字文化圏近代語研究会 2019 年国際シンポジウム, 漢字文化圏近代語研究会, 北京外国語大学, 2019/3(『漢字文化圏近代語研究会 2019 年国際シンポジウム 予稿集』pp. 52-55, 2019/3)
- 田野村忠温 「《華英通語》道光本—首部由中国人编写的正统英語学习書」语言互动史研究—近代东西语言接触研究学术会议 2018, 北京外国語大学历史学院/全球史研究院、日本关西大学开放式亚洲文化研究中心(KU-ORCAS), 北京外国語大学, 2018/12(『语言互动史研究—近代东西语言接触研究学术会议 2018 会议手册』p. 9, 2018/12)
- 田野村忠温(基調講演)「デジタル情報と言語の研究」関西大学3研究所合同シンポジウム, 関西大学東西学術研究所、経済・政治研究所、法学研究所, 関西大学, 2018/11
- 田野村忠温 (基調講演)「指称汉语的诸名称—它们的历史与用法差异」数位化时代下的汉语全球教育史国际学术研讨会暨世

界汉语教育史研究会第十屆年會, 世界汉语教育史研究会, 關西大學, 2018/10

田野村忠温「中国初期英語學習書における英語発音の漢字表記—英語の流音の知覚と表記—」東アジア文化交渉学会第 10 回国際學術大會, 東アジア文化交渉学会, 香港城市大學, 2018/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2018 年度～2021 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田野村忠温

課題番号: 18K00535

研究題目: コーパス日本語研究の高度化と多面化のための総合的研究—語史研究への応用を中心に—

研究経費: 2018 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

2019 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

応募者の従来の研究を踏まえ、日本語研究の学界におけるより高度かつ多面的なコーパス利用の基盤の形成に寄与することを目的として総合的なコーパス日本語研究に取り組む。

特に大規模な近現代語コーパスの構築とそれによる近現代語史研究の高度化を重点的な課題とする。近年利用可能になってきた各種の歴史的資料や手段をうまく組み合わせて利用することによって近現代語史の記述の水準を飛躍的に高められることを、最近いくつかの事例研究を通じて明らかにした。その方向の可能性をさらに追求し、事例研究を重ねるとともに方法論の一般化、洗練を図る。

また、従来に引き続き、上記以外の新たな研究手法・領域の開拓についても模索を重ねるとともに、日本語研究の学界に対する啓発・支援活動として、コーパスに関する一般的な考察・提言や、各種コーパス関連ソフトウェアの開発・公開などにも積極的に取り組む。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 神山 孝夫 教授

1958 年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻: 歴史言語学、音声学、ヨーロッパ文化史

3-1. 論文

Kamiyama, Takao, "Sanki ICHIKAWA(市河三喜): Father of Historical and Related Studies of English in Japan" 『OUPEL= Osaka University Papers in English Linguistics』19, 大阪大学文学研究科英語学研究室, pp. 1-21, 2019/12

神山孝夫「英語 R 音をめぐる諸問題」 『SIMELL = Studies in Medieval English Language and Literature』34, 日本中世英語英文学会, pp. 61-61, 2019/7

Kamiyama, Takao, "Sanki ICHIKAWA(市河三喜): Father of Historical and Related Studies of English in Japan" 『日本中世英語英文学会ホームページ (<http://www.jsmes.jp/pioneers/>)』日本中世英語英文学会, pp. 1-22, 2019/4

神山孝夫「英語における H の歴史」 『待兼山論叢 文化動態論篇』52, 大阪大学文学研究科, pp. 41-66, 2018/12

3-2. 著書

神山孝夫『新装版 脱・日本語なまり:英語(+α)実践音声学』大阪大学出版会, 223p., 2019/9

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

神山孝夫「英語 R 音をめぐる諸問題」日本中世英語英文学会, 日本中世英語英文学会, 三重県勤労者福祉会館(三重大学), 2018/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

神山孝夫 大阪大学共通教育賞(2008 年前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本古代ロシア研究会・理事, 2015 年 4 月～現在に至る

4. 渋谷 勝己 教授

1959 年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授、大阪大学准教授等を経て、2009 年 4 月より現職。専攻：日本語学

4-1. 論文

渋谷勝己「「裏側」のことば」『日本語学』38-12, 明治書院, pp. 2-10, 2019/12

渋谷勝己「方言・社会言語学」窪菌晴夫編『よくわかる言語学』ミネルヴァ書房, pp. 144-153, 2019/10

渋谷勝己「未来の研究に向けたデータ収集—第二言語の習得・維持・摩滅の過程を解明するために—」野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育研究』くろしお出版, pp. 43-62, 2019/5

渋谷勝己「書き手デザイン—平賀源内を例にして—」『バリエーションの中の日本語史』くろしお出版, pp. 231-249, 2018/5

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渋谷勝己「書評『日本語条件文の諸相—地理的変異と歴史的変遷』」『日本語文法』19-1, pp. 80-88, 2019/3

渋谷勝己「可能」, 「言語変種」, 「コード・スイッチング」, 「社会言語学」, 「接触場面」, 日本語学会編『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 156-157, pp. 329-330, pp. 375-377, pp. 482-486, pp. 568-569, 2018/10

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2019年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渋谷勝己

課題番号:19K00627

研究題目:複雑性を指標とする日本語諸方言の類型論的研究

研究経費:2019年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円

研究の目的:

本研究課題の目的は、標準語や海外の日本語変種を含めた日本語諸方言を取り上げて、複雑性という側面から総覧することにある。具体的には、次のようなことを分析する。①日本語諸方言を、各レベル(音素、音節、アクセント、形態、文法カテゴリー等)の体系や構造のあり方をもとに、類型化する。②まだ認定基準があいまいな複雑性という概念とその度合いの算出方法を精緻化しつつ、個々の方言の個々のレベルの形式や当該方言全体の複雑度を測定する。③個々の方言の複雑度を、その方言が使用される過去、現在の社会状況と関連づけて解釈し、言語的複雑性と社会的状況が連動するかどうかを検討する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語文法学会・会長, 2019年4月～現在に至る

日本語学会・理事、評議員, 2015年5月～現在に至る

社会言語科学会・理事, 2015年4月～2019年3月

日本語文法学会・評議員, 2015年4月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2014年10月～現在に至る

5. 岡田 禎之 教授

1965年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程(英語学専攻)中途退学。文学博士(大阪大学、2001年)。第37回市河賞(2003年)。大阪大学助手、岡山大学講師、金沢大学助教授、神戸市外国語大学助教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2010年4月より現職。専攻:英語学

5-1. 論文

岡田禎之「因果的結束関係を表す副詞句と語彙概念拡張」『大阪大学大学院文学研究科紀要』, 60, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-40, 2020/3

岡田禎之「因果関係の副詞句における概念拡張とofの脱落について」『英語学の深まり・英語学からの広がり』(阪大英文学会叢書 10) 阪大英文学会, pp. 120-131, 2020/3

Okada, Sadayuki, "Nominal Conceptual Expansions in Predicational and Modification Contexts." *Osaka University Papers in English Linguistics*, 19, 大阪大学大学院文学研究科英語学研究室, pp. 125-149, 2019/12

岡田禎之「英語の補文形式と事態の統合について」『英語学を英語授業に活かすー市河賞の精神(こころ)を受け継いでー』開拓社, pp. 158-176, 2018/9

岡田禎之「認知言語学は言語普遍性、個別言語の特殊性をどのように考えるのだろうか?」『認知言語学とは何か?』くろしお出

版, pp. 157-176, 2018/5

5-2. 著書

Okada, Sadayuki, & Eri Tanaka (eds.) *Osaka University Papers in English Linguistics*, 19, 大阪大学文学研究科英語学研究室, pp. 125-149, 2019/12, (243 頁)

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

畠山雄二, 縄田浩幸, 岡田禎之他(共著), 『正しく書いて読むための英文法用語辞典』, 朝倉書店, pp. 239-266, 2019/9, (318 頁)

5-4. 口頭発表

岡田禎之 「因果関係の副詞句における新規表現の発展について」筑波大学言語学講演会, 筑波大学人文社会科学研究所, 筑波大学, 2019/12

Okada, Sadayuki, "On the rise of truncated causal adjuncts in English", 15th International Cognitive Linguistics Conference, International Cognitive Linguistics Association, Kwansai Gakuin University, 2019/8

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡田禎之 10 papers selection, Annual Report of Osaka University Academic Achievement 2009-2010, Osaka University, 2010/12

岡田禎之 第 37 回市河賞, 財団法人語学教育研究所, 2003/10

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2018 年度～2022 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田禎之

課題番号:18K00646

研究題目:テキストの結束関係と語彙概念拡張

研究経費:2018 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

2019 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的:

語彙概念拡張が、叙述関係や修飾関係において、中心的参与者から周辺の参与者に浸透していくという意味拡張の一般的な特徴が認められるが、その一方で、このような一般化と合致しない独自の語彙概念拡張を見せる場合もある。テキスト形成レベルにおける結束関係、という捉え方を導入することによって、この例外的な事象について解決していくことができると考えられる。本研究では、様々な結束関係に認められる語彙概念拡張現象について検討していく。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英語学会・副編集委員長, 2019 年 11 月～現在に至る

日本英語学会・編集委員, 2019 年 7 月～現在に至る

日本認知言語学会大会発表査読委員 2019 年 4 月～現在に至る

阪大英文学会・会長, 2018 年 10 月～現在に至る

日本英語学会・理事, 2018 年 4 月～現在に至る

日本英文学会関西支部・理事, 2013 年 4 月～2019 年 3 月

日本英語学会・評議員, 2013 年 4 月～現在に至る

2-28 留学生専門教育

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

留学生専門教育では、留学生の勉学・研究をサポートするために、日本語の授業やオフィスアワーを設けている。日本語の授業では、論文作成法、発表や議論の仕方などを学ぶ。とくに論理的思考の訓練に重点をおき、質を落とさずにわかりやすく文章(論文)を書けるようにすることを目指している。

教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 鄭聖汝 講師

1957年生。神戸大学大学院文化科学研究科博士後期課程修了。博士(学術)。日本学術振興会外国人特別研究員を経て現職。
専攻：日韓対照言語学／類型論

1-1. 論文

鄭聖汝 「韓国語における疑問文の形成と体言化—慶南・済州方言のコピュラ疑問文と動詞述語疑問文を手掛かりに—」『言語研究』(日本言語学会), 157, 2020/9

鄭聖汝, Masayoshi Shibatani 「Causative Constructions in Japanese and Korean」*Handbook of Japanese Contrastive Linguistics.*, Mouton de Gruyter, pp. 137-172, 2018

Masayoshi Shibatani, 鄭聖汝 「Nominal-based nominalization」*Japanese/Korean Linguistics*, (Japanese/Korean Linguistics Conference), 25, pp. 63-88, 2018/12

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

鄭聖汝 「使役」『日本語学大辞典』東京堂出版, pp. 454-456, 2018/10

1-4. 口頭発表

Chung Sung-Yeo, “On the relationship between nominalization and NP-use markers: Japanese-Korean contrastive and historical perspective”, Second International Workshop on Noun Modifying Constructions and Nominalizations, NINJAL & Department of Linguistics, Deccan College (Pune) & Central Institute of Indian Languages (Mysore), Deccan College, 2019/12

Chung Sung-Yeo, “On the relationship between nominalization and NP-use markers: Focusing on the historical development of Korean -kes”, Osaka International Workshop on Nominalization, 2019年度大阪大学国際合同会議助成事業, 大阪大学, 2019/9

Masayoshi Shibatani, 鄭聖汝 (招待講演)「誤用「赤い花」はなぜ起こるか？」東南大学招待講演, 東南大学, 東南大学, 2019/6

Masayoshi Shibatani, Chung Sung-Yeo, Haowen Jiang, (招待講演) “Advances in Functional Linguistics: The case of relative clauses”, 東南大学招待講演, 東南大学, 東南大学, 2019/6

Masayoshi Shibatani, Chung Sung-Yeo, Haowen Jiang, “What is nominalization? Towards the theoretical foundations of nominalization”, Peking University 120th Anniversary Seminars by Distinguished Overseas Scholars, Peking University, Peking

University, 2018/10

Masayoshi Shibatani, Chung Sung-Yeo, Haowen Jiang, “Nominal-based nominalization”, Peking University 120th Anniversary Seminars by Distinguished Overseas Scholars, Peking University, Peking University, 2018/10

Masayoshi Shibatani, Chung Sung-Yeo, Haowen Jiang, “(Numeral) classifiers and nominalization”, Peking University 120th Anniversary Seminars by Distinguished Overseas Scholars, Peking University, Peking University, 2018/10

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2017年度～2020年度、基盤研究(C) 一般、代表者:鄭聖汝

課題番号:17K02681

研究題目:他動性と言語類型—実証的他動性理論の構築を目指して—

研究経費:2018年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2019年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

本研究は、個人的に適用すると相反する結果のである、Hopper & Thompson の普遍仮説ならびに池上の類型仮説による他動性についての二つのアプローチを融合し、他動性パラメータの適用優先順位が最適理論の手法で決められることによって、自他構文の選択が予測できる、実証的他動性理論の構築を目的とする。方法論的には、日本語(ナル型)と英語(スル型)を基軸に置き、SOV型の4言語とSVO型の4言語を取り上げ、自他構文選択に関与するパラメータについて、優位性を独立に測りうる実験的調査を実施して、他動性パラメータの適用優先順位を見極め、理論の構築につなげるものである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西言語学会・学会誌編集委員, 2014年10月～2020年3月

関西言語学会・大会・運営委員, 2011年4月～現在に至る

2-29 国際交流センター

教員の研究活動(2018年度～2019年度の過去2年間)

1. 小林 柔子 助教

1970年生。2016年10月より大阪大学大学院文学研究科 国際交流センター助教（2019年3月退職）。専攻：国際移民（アジア・太平洋地域）

1-1. 論文

小林柔子「21世紀の人文科学系分野がパブリック・ヒストリーから得る示唆」『大阪大学日本学報』(大阪大学日本学), 38, pp. 53-69, 2019/3

Kobayashi, Yasuko, “Crossing the boundaries to survive: Japanese POWs’ Experiences through the Allied Interrogation Report” *International Journal of Diaspora & Cultural Criticism*, (Academy of Mobility Humanities), 9-1, Konkuk University, pp. 6-39, 2019/2

Kobayashi, Yasuko, “From non-immigrant country to de facto immigrant country: recent shifts in Japanese immigration policy” *People Movement: Paradigm Shift*, (The ANU College of Asia and the Pacific), 3-1, The Australian National University, pp. 57-61, 2018/5

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Kobayashi, Yasuko, “War and knowledge mobilities: The demand for Japanese Language in Australia during the Pacific War”, International Conference: Recent Trends and Humanistic Perspectives in Mobility Studies, Academy of Mobility Humanities. Konkuk University, South Korea, Konkuk University, South Korea, 2019/2

Kobayashi, Yasuko, “War and knowledge mobilities: The demand for Japanese Language in Australia during the Pacific War”, The 4th Asian Association of World Historians Conference, Asian Association of World Historian, Osaka University, Nakanoshima Centre, 2019/1

Kobayashi, Yasuko, “The Role of Japanese Language in Australia during World War II”, Asian Studies Association of Australia, University of Sydney, University of Sydney, 2018/7

Kobayashi, Yasuko, “A critical engagement in the Pacific War history from the Southern Hemisphere”, Bringing the Archives of Wartime and Occupied Japan to Life: Perspectives from the Public and Private Sectors, UCLA Richard C. Rudolph East Asian Library, University of California, LA, 2018/4

Kobayashi, Yasuko, “Who Owns National history? Some Insights from Australia’s Recent History Debate for Japan as a De facto Migration Country”, International Conference on History Education: How Is History Taught? Local, National, and/or Global Perspectives, California State University, Fullerton (CSUF), California State University, Fullerton (CSUF), 2018/4

Kobayashi, Yasuko, “We need Japanese language command! - Flows (mobilities) of knowledge between Japan and Australia during WWII”, HeKKSaGOn’s 6th Japanese-German University Presidents’ Conference: East Asia in Global History, Osaka University,

Osaka, Japan, HeKKSaGON, 2018/4

Kobayashi, Yasuko, “Crossing the boundaries to survive: Japanese POWs Experiences through ATIS Interrogation Reports”, Biennial Conference of the Australian Association for Pacific Studies, Australian Association for Pacific Studies 2018, University of Adelaide (Adelaide, Australia), 4-7 April 2018., University of Adelaide, 2018/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

小林柔子 Japanese Studies Fellowship, National Library of Australia, 2017/2

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2018年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:小林柔子

課題番号: 18K11813

研究題目: 兵士という移動の歴史: パプアニューギニアで連合軍捕虜となった日本人兵の事例から

研究経費: 2018年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2019年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

本研究は、兵士を移民のような「移動の主体」としてとらえ、太平洋戦争中にパプアニューギニアで連合軍捕虜になった日本人兵士の日常を、軍事史としてではなく、生活史としての分析を考察する。この作業を通じて、1)捕虜兵士がナショナルな主体から、異文化を通じてナショナルな価値を相対化させ、捕虜先の環境に適応しながら生きていく主体へと変化する動的な過程を分析するための世界史的な視点を導き、2)移動(例えば、戦場に赴く)が持つ意味と機能も同様に動的な過程として捉え、軍事ナショナルリズムに還元することなく、移動の持つ多様な意味と機能が形成される動的な過程を分析することを可能にし、3)太平洋戦争期のオーストラリアやパプアニューギニアなどを含んだ、半球横断的かつ多極的關係性を明らかにすることによって「トランス・パシフィック」という空間を、日米関係を越えた空間として捉え直し、4)米国のアジア政策を軸とした戦史や戦後史の組み替えへとつながることを企図する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2018年度～2019年度、6: 研究助成、助成金獲得者:小林柔子

助成金名: 研究助成金

研究題目: 多民族防災まちづくりの枠組みの構築とわが国への適用に関する研究

助成団体名: 村田科学財団

助成金額: 2018年度 直接経費 1,400,000円 2019年度 直接経費 0円

研究の目的:

本研究は今後わが国においてそのスケールと頻度がますます高くなると予想される自然災害へのレジリエンスを高める上で、昨今増えつつある外国人居住者を考慮した災害リスクマネジメントの枠組みを発展させることを目的としている。具体的には、研究代表者がこれまで発展させてきた災害リスクマネジメントライフサイクルにおいて、災害予防、減災(prevention)及び緩和(mitigation)がレジリエンスを高める上で最も重要と位置づけ、そこに外国人居住者の視点を重視した防災まちづくりの仕組みを確立する。移民が多く住む海外の災害リスクマネジメントの事例を収集しアーカイブ化するとともに、わが国では、移民が災害弱者となるケースが多い要因を明らかにし、むしろ共助の担い手になり得るための社会的包摂と共生の可能性を探求する。その上で多民族防災まちづくりのためのワークショップの手法、および防災教育手法についても防災工学と移民研究の学際的なアプローチにより開発する。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

the Asian Mobility Humanities Network (AMHN) | Konkuk University・Advisory Board Member, 2019年2月～現在に至る

Asian Association of World Historians ・Secretary General, 2019年1月～現在に至る

2. Chung Aemee 助教

1981年生。2015年、京都大学大学院教育学研究科修士号取得（教育科学）。P&G ジャパン、フェアモントホテル&リゾート、パソナ、The Japan Times、Kansai Time Out 等にて勤務。2015年、京都大学高等教育研究開発推進センター研究員。2016年より大阪大学文学研究科 国際交流センター助教（2019年3月退職）。専門:高等教育/外国語教育/教育工学

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

CHUNG AEMEE 「Freedom to choose one's own language(s)」Independent Learning Association Conference 2018, Independent Learning Association, Konan Women's University, 2018/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. LAMBRECHT, Nicholas Mahood 助教

1982年生。ダートマス大学人類学部卒、シカゴ大学大学院人文学部東アジア言語文化研究科博士課程修了。2015年、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科客員研究員（フルブライト）。文学博士（シカゴ大学、2019年）。2019年より現職。専攻：近現代日本文学

3-1. 論文

Nicholas M. Lambrecht, "Globalizing Global Japanese Studies: Interests, Expectations, and Expertise", *Anthology of Transborder Cultural Studies*, 3, 大阪大学大学院文学研究科越境文化研究イニシアティブ, pp. 91-103, 2020/3

3-2. 著書

Nicholas M. Lambrecht, *New Arrivals: Returnee Identity and the Memory of Repatriation in Japanese Literature*, ProQuest, 202p., 2019/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

Nicholas M. Lambrecht, “Preface to Special Feature 2: ‘Japanese Studies’ Research Papers in English”, *Anthology of Transborder Cultural Studies*, 3, 大阪大学大学院文学研究科越境文化研究イニシアティブ, pp. 39-41, 2020/3

Nicholas M. Lambrecht (訳)(翻訳、石原燃著), “People’s Voices, Mother’s Song”, *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*, 16.12.5, The Asia-Pacific Journal: Japan Focus, pp. 1-10, 2018/6

3-4. 口頭発表

Nicholas M. Lambrecht, “Multiple Channels: Repatriations and Homelands in the Early Works of Ri Kaisei”, *Cultures of Crossing: Transpacific and Inter-Asian Diaspora*, University of Utah, University of Utah, 2020/3/28 (コロナウィルスの影響を受け学会開催中止)

LAMBRECHT, Nicholas Mahood 「李恢成と戦後引揚げ」, 帝国のはざまを生きる—帝国日本と東アジアにおける移民・旅行と文化表象, 国際日本文化研究センター, 上智大学, 2020/3/8 (コロナウィルスの影響を受け学会開催中止)

LAMBRECHT, Nicholas Mahood 「バリケードの中の五木寛—one放浪、引揚げ、学生運動」, 東アジア冷戦下の日本における社会運動と文化生産, 国際日本文化研究センター, 国際日本文化研究センター, 2020/2

Nicholas M. Lambrecht, “No Place for Returns: Ri Kaisei’s Past and Present Sakhalins”, *Global Japanese Studies Research Workshop*, 大阪大学大学院高度副プログラムグローバル・ジャパン・スタディーズ, 大阪大学, 2019/12

LAMBRECHT, Nicholas Mahood 「『禁じられた郷愁』を読んで」, 帝国のはざまを生きる—帝国日本と東アジアにおける移民・旅行と文化表象, 国際日本文化研究センター, 国際日本文化研究センター, 2019/9

Nicholas M. Lambrecht, “Displacement: Settling Postwar Exile Through New Literary Journeys”, *Asian Studies Conference Japan 2019: Asian Studies Conference Japan 2019*, Asian Studies Conference Japan, Saitama University, 2019/6

Nicholas M. Lambrecht, “Evidence of Absence: Being “Left for Dead” in Postwar Japanese Refugee Literature”, *カルチュラルタイフーン 2019: カルチュラルタイフーン 2019*, カルチュラル・スタディーズ学会, 慶應義塾大学, 2019/6

Nicholas M. Lambrecht, “Movement as an Organizing Force in Postwar Asian Literature”, *Counter-Readings: Modern Asian Literary Histories*, Association for Asian Studies・University of Chicago, Chicago, Illinois, 2019/4

Nicholas M. Lambrecht, “Colonial Prologues and Afterwords: Responsibility in Late Repatriate Memoirs”, *58th Annual Meeting of the Southeast Conference of the Association for Asian Studies*, University of Memphis, Memphis, Tennessee, 2019/1

Nicholas M. Lambrecht, “Life After Return in Postwar Japan: From Fujiwara Tei to Miyao Tomiko”, *Art and Politics of East Asia Workshop*, Council on Advanced Studies, University of Chicago, Chicago, Illinois, 2018/11

Nicholas M. Lambrecht, “Demystifying the Demobilized: Sakaguchi Ango’s Postwar Mysteries and the Figure of the Returnee”, *67th Annual Meeting of the Midwest Conference on Asian Affairs*, Metropolitan University, St. Paul, Minnesota, 2018/10

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2019年度～2021年度、研究活動スタート支援、代表者:LAMBRECHT, Nicholas Mahood

課題番号:19K23041

研究題目:Research on the Memory of Repatriation in Postwar Japanese Literature: With Special Emphasis on New Developments in English-Language Studies

研究経費:2019年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

Millions of repatriates (*hikiagesha*) returned to Japan after the Second World War, and many wrote about their experiences in repatriation literature (*hikiage bungaku*). As research on this literature progresses, it has become necessary to integrate the work

being done in Japanese and in English. This project engages in critical analysis of repatriation literature texts in Japanese, with a focus on insights provided by English-language material not yet widely disseminated in Japan. It seeks to examine repatriation literature from a variety of regions and time periods as part of a unified whole.

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2018年度～2019年度、5：その他補助金、助成金獲得者：LAMBRECHT, Nicholas Mahood

助成金名：Small Scholarly Conferences on Japanese Studies

研究題目：Counter-Readings: Modern Asian Literary Histories

助成団体名：Association for Asian Studies Northeast Asia Council, Japan-United States Friendship Commission

助成金額：2018年度 直接経費 0円 2019年度 直接経費 275,000円

研究の目的：

A two-day conference organized by Nicholas Lambrecht and David Krolikoski was convened at the University of Chicago. The conference brought together prominent Asian and American scholars who are rethinking the modern literary history of East Asia. The theme of the conference was "counter-reading," a term meant to encapsulate the new theoretical and methodological interventions scholars are employing in their approaches to East Asia. Participants addressed such questions as: how disciplinary, institutional, and cultural factors have shaped current understandings of East Asian literature; what dominant narratives about literature from the region conceal, and how these gaps might be addressed; how literary histories of Asia written in English have differed from those penned by researchers in East Asia; and what the study of East Asia can contribute to theorizations of world literature.

3-7-2. 2018年度～2019年度、5：その他補助金、助成金獲得者：LAMBRECHT, Nicholas Mahood

助成金名：Franke Conference Grant

研究題目：Counter-Readings: Modern Asian Literary Histories

助成団体名：Franke Institute for the Humanities

助成金額：2018年度 直接経費 0円 2019年度 直接経費 460,000円

研究の目的：

A two-day conference organized by Nicholas Lambrecht and David Krolikoski was convened at the University of Chicago. The conference brought together prominent Asian and American scholars who are rethinking the modern literary history of East Asia. The theme of the conference was "counter-reading," a term meant to encapsulate the new theoretical and methodological interventions scholars are employing in their approaches to East Asia. Participants addressed such questions as: how disciplinary, institutional, and cultural factors have shaped current understandings of East Asian literature; what dominant narratives about literature from the region conceal, and how these gaps might be addressed; how literary histories of Asia written in English have differed from those penned by researchers in East Asia; and what the study of East Asia can contribute to theorizations of world literature.

3-7-3. 2017年度～2018年度、6：研究助成、助成金獲得者：LAMBRECHT, Nicholas Mahood

助成金名：Toyota Dissertation Fellowship in Japanese Studies

研究題目：New Arrivals: Returnee Identity and the Memory of Repatriation in Japanese Literature

助成団体名：University of Chicago Center for East Asian Studies

助成金額：2018年度 直接経費 900,000円

研究の目的：

The Toyota Dissertation Fellowship in Japanese Studies provides funds for a year of dissertation research or writing on a topic relating to Japanese studies. The project investigated how Japanese-language "repatriation literature," or *hikiage bungaku*, has

preserved and renegotiated memories of the large-scale exodus to Japan that took place in the aftermath of the Second World War. By analyzing literary works produced by and about returnees, the research filled a lacuna in scholarship on Japanese literature between studies on works from the Japanese colonial empire and research on postwar writing. It further placed Japanese repatriation literature in the international context of postwar repatriations and imperial decolonization, and argued in favor of employing a broader definition of the genre of repatriation literature.

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

4. MOHAMMAD MOINUDDIN 助教

1979年生。2010年、デリー大学(インド) M.philの学位を取得。同論文の加筆修正版2012年に単著として出版。2013年、博士(文学、大阪大学)を取得。2015年、ジャワハルラー・ネルー大学(インド)、ゲスト・レクチャー。2015年12月から2018年3月、大阪大学大学院文学研究科特任助教。2019年より現職。専攻：近現代日本文学、原爆文学、ポストコロナ国際交流および国際理解

4-1. 論文

MOHAMMAD MOINUDDIN 「平安文化をインドにどう伝えるか—『源氏物語』〈桐壺〉のウルトゥー語訳を検討する」『海外平安文学研究ジャーナル』7, 2019/3

MOHAMMAD MOINUDDIN 「放射能汚染、反核運動、被曝者— 21世紀ヒンディー語小説『マラング・ゴダニルカーントフア』を巡って」『原爆文学研究』(原爆文学研究会), 18, pp. 96-107, 2019/12

4-2. 著書

MOHAMMAD MOINUDDIN, Anita Khanna, 鈴木貞美 他 『Study Japanese Language Through Literature Why? What? And How?』, 担当部分: 「言語習得過程における文学の役割—20世紀前半短編・小説・小品や児童文学を中心に—」 Northern Book Centre, New Delhi (India), pp. 226-240, 2019/6

MOHAMMAD MOINUDDIN, Janashruti Chandra, 加藤均 他 『Interlinking Linguistics and Literature: To Read Japanese Literary Text』, 担当部分: 「Genbun Itchi Movement and the Evolution of Japanese Literature: Tracking the Modernisation of Japanese Language through Literature」 Northern Book Centre, New Delhi (India), pp. 93-110, 2018/9

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

e-ラーニング教材作成

MOHAMMAD MOINUDDIN, 『島崎藤村』(JPN-P07-M11, 明治大正の文学: Survey of Meiji-Taisho Literature), e-PG Pathshala, UGC, Ministry of Human Resource Development (MHRD), India, 2018 /4

<http://epgp.inflibnet.ac.in/Home/ViewSubject?catid=830>

MOHAMMAD MOINUDDIN, 『夏目漱石』(JPN-P07-M13, 明治大正の文学: Survey of Meiji-Taisho Literature), e-PG Pathshala, UGC, Ministry of Human Resource Development (MHRD), India, 2018 /4

<http://epgp.inflibnet.ac.in/Home/ViewSubject?catid=830>

MOHAMMAD MOINUDDIN, 『こころ』(JPN-P07-M14, 明治大正の文学: Survey of Meiji-Taisho Literature), e-PG Pathshala, UGC, Ministry of Human Resource Development (MHRD), India, 2018 /4

<http://epgp.inflibnet.ac.in/Home/ViewSubject?catid=830>

MOHAMMAD MOINUDDIN, 『耽美派の文学—永井荷風と谷崎潤一郎を中心に—』(JPN-P07-M17, 明治大正の文学: Survey of Meiji-Taisho Literature), e-PG Pathshala, UGC, Ministry of Human Resource Development (MHRD), India, 2018 /4

<http://epgp.inflibnet.ac.in/Home/ViewSubject?catid=830>

MOHAMMAD MOINUDDIN, 『白樺派』(JPN-P07-M22, 明治大正の文学 : Survey of Meiji-Taisho Literature), e-PG Pathshala, UGC, Ministry of Human Resource Development (MHRD), India, 2018 /6
<http://epgp.inflibnet.ac.in/Home/ViewSubject?catid=830>

MOHAMMAD MOINUDDIN, 『志賀直哉の文学の世界』(JPN-P07-M23, 明治大正の文学 : Survey of Meiji-Taisho Literature), e-PG Pathshala, UGC, Ministry of Human Resource Development (MHRD), India, 2018 /6
<http://epgp.inflibnet.ac.in/Home/ViewSubject?catid=830>

Dr. UNITA SACHIDANAND & MOHAMMAD MOINUDDIN, 『Presenting Human Emotions : Hardships of love and life Poem (88-90)』(JPN-P03-M31, 百人一首 : Hundred Poets One Verse), e-PG Pathshala, UGC, Ministry of Human Resource Development (MHRD), India, 2018/6
<http://epgp.inflibnet.ac.in/Home/ViewSubject?catid=830>

Dr. UNITA SACHIDANAND & MOHAMMAD MOINUDDIN, 『Presenting Human Emotions : Hardships of love and Hardships of life (Poem 91-93)』(JPN-P03-M32, 百人一首 : Hundred Poets One Verse), e-PG Pathshala, UGC, Ministry of Human Resource Development (MHRD), India, 2018/6
<http://epgp.inflibnet.ac.in/Home/ViewSubject?catid=830>

4-4. 口頭発表

MOHAMMAD MOINUDDIN 「放射能汚染、反核運動、被曝者 21 世紀ヒンディー語小説『マラング・ゴダ ニルカーント ファ』を巡って」 第 58 回原爆文学会:第 58 回原爆文学会, 原爆文学研究会, 広島大学, 2019/3

Mohammad Moinuddin, “Taishō Democratic Movement and the Place of Women in Taishō Literature: Gender and Sexuality in the Writings of Shiga Naoya”, BAJS Conference 2018: Crisis? What Crisis? Continuity, and Change in Japan, British Association for Japanese Studies (BAJS), University of Sheffield(シェフィールド大学), イギリス, 2018/9

Mohammad Moinuddin, “Post War Asian Politics, New World Order and the Role of India: Reading India in the Works of Hotta Yoshie”, Panel Title: India in Contemporary Japanese Literature: Myths versus Reality”, AAS-in-Asia Conference, 2018 New Delhi : Asia in Motion: Geographies and Genealogies, Association for Asian Studeis (AAS), Ashoka University、インド, 2018/7

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

Mohammad Moinuddin 平成 23 年度 人権作品賞, 作文・詩の部 茨木市人権啓発推進協議会, 2011/12

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

編集後記

本巻『年報 2020』は、文学研究科および文学部の2年間（2018/2019年）の教育・研究活動を記録したものである。構成は基本的に従前どおりで、前半が研究科・学部の基礎データと教育研究プログラムの紹介、後半では専門分野・コースごとの活動報告となっている。

個別の専門分野を超えた教育・研究活動を記録した前半の第1部では、大学院・学部学生の受入状況などの基礎的なデータや各室の活動報告のほか、国際連携・分野横断的な教育・研究を促進するために実施されているプログラムの概要と活動状況について記している。継続プログラムとしては、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）、大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座「記憶の劇場Ⅲ」、大学院高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」、5つのクラスターなどから成る「国際的社会連携型人文学研究教育クラスター（「人文学クラスター」）」があり、そこにクラウドファンディングによる野中古墳出土品の3D計測プロジェクト、アート・プラクシス人材育成プログラム（「徴の上を鳥が飛ぶ」）、「人文学クラスター」を継承し、国際性の醸成と研究力の強化に特化した「国際共同研究力推進プログラム」が加わった。これらから、専門分野の壁を超えた様々な教育・研究の試みがさらに活発におこなわれている状況が確認できるだろう。

一方、専門分野・コース別の教育・研究活動を記録した後半の第2部では、これも従前どおり、専門分野・コースごとの概要報告のほか、教員に個別に入力いただいた教員基礎データに基づいて個人別の業績を集成している。この教員基礎データについては、大阪大学全体での業績登録基準に沿う形への対応をお願いするいきさつがあった。

なお、大阪大学の教員基礎データは2020年4月より、科学技術振興機構によるresearchmapからデータを取得する新しいシステムとなり、研究者総覧も新しくなった。これにより、業績の入力も従来からの教員基礎データ経由から、researchmap経由へと変化した。教員も業績入力の際にresearchmapでのカテゴリー分けに合わせる対応を行っている。これらの変化は、次の年報編集の際に何らかの形で反映されることとなるだろう。

本巻収録のデータ収集には、文学研究科所属の教職員の多大な協力をいただいた。データの統合・整理から刊行に至るまでの膨大な作業は、評価・広報室の諸氏による。末筆ながら、皆様にあらためて心より感謝したい。

2021年3月

堤 一昭、金水 敏、岡田裕成

大阪大学大学院文学研究科
年報 2020
教育・研究(2018-2019年度)

2021年3月発行

編集 大阪大学大学院文学研究科／評価・広報室
発行 大阪大学大学院文学研究科
〒560-8532 豊中市待兼山町1-5
TEL:FAX 06-6850-5107(評価・広報室)
